茨城県教育財団文化財調査報告第46集

一般県道新川・江戸崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書

尾島貝塚
宮の脇遺跡
後九郎兵衛遺跡

昭和63年3月

財団法人 茨城県教育財団

正　誤　表

ページ	行	誤	正
1	14	現地路査	現地踏査
59	15	長石英	長　石
91	2	坏形 ˇ 器	坏形土器
〃	5	土 ˇ 器	土 師 器
104	21	腕	境
114	13	壺形土器が	壺形土器や
135	22	胴部円面	胴部内面
314	15	第1号住掘柱	第1号掘立柱
318	27	変遷をが	変遷が
323	18	擬宝珠状は，縄文式土吊	擬宝珠状のつまみを有し，天井部は

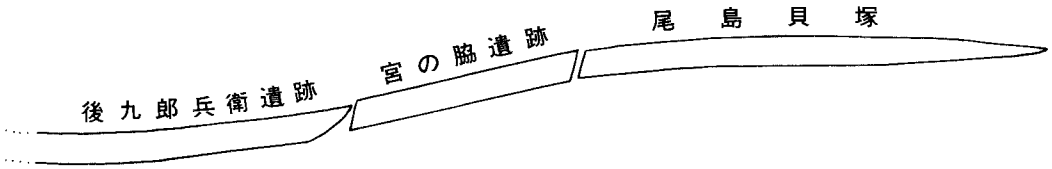
茨城県教育財団文化財調査報告第46集

一般県道新川・江戸崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書

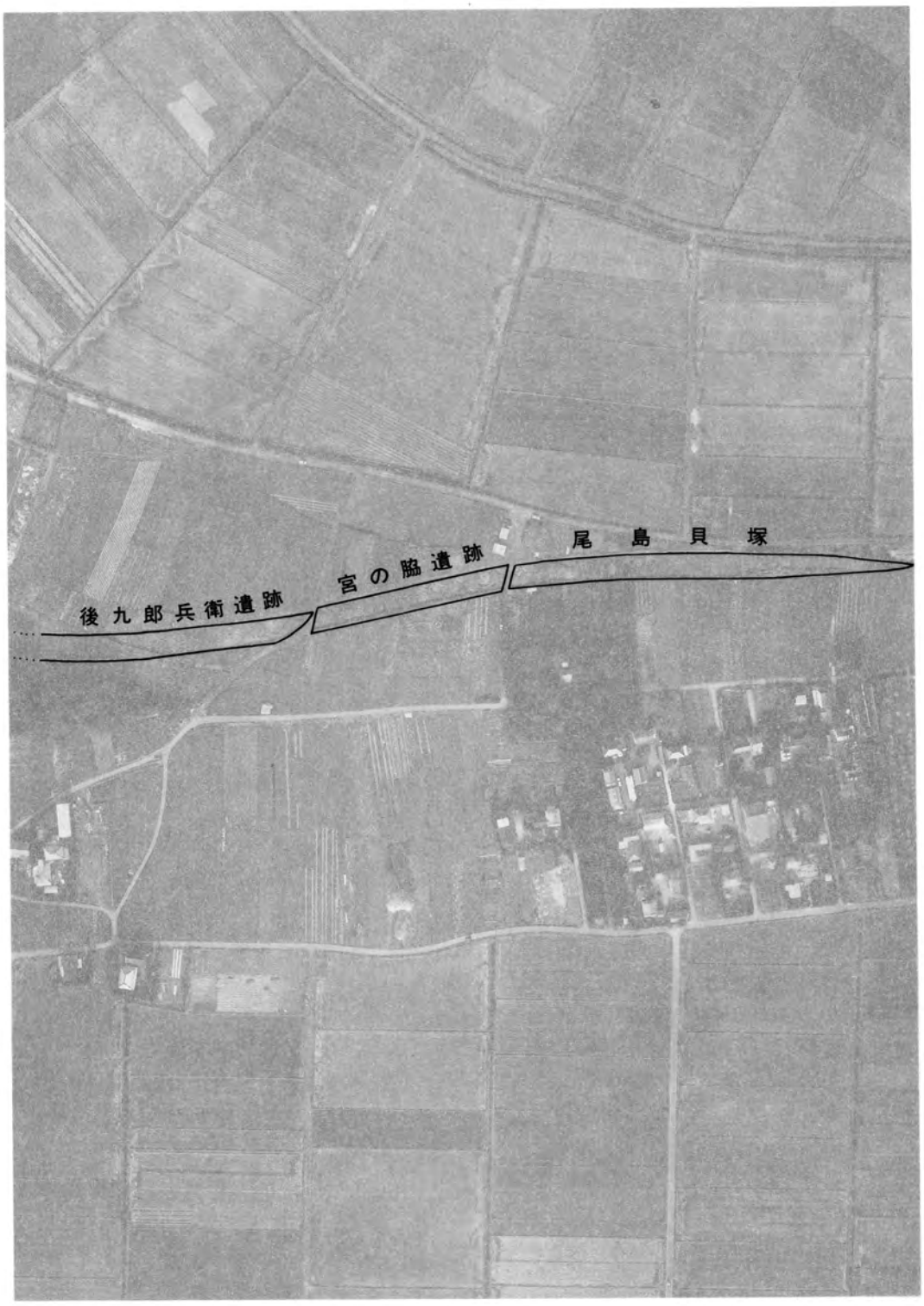
尾島貝塚
宮の脇遺跡
後九郎兵衛遺跡

昭和63年3月

財団法人 茨城県教育財団


後九郎兵衛遺跡
宮の脇遺跡
尾島貝塚

尾島貝塚外２遺跡全景



尾島貝塚外２遺跡全景

序

茨城県は，産業の発展に伴う流通機構の整備と県土の普遍的な開発を図るために，県道の改良工事等の整備を進めております。

一般県道新川・江戸崎線の改良工事も，その一環として計画されたもので，稲敷地方の発展に寄与するものであります。

財団法人茨城県教育財団は，新川・江戸崎線内，桜川村の埋蔵文化財について，茨城県と委託契約を結び，昭和61年４月から同年12月まで尾島貝塚ほか２遺跡の発掘調査を実施いたしました。

桜川村浮島地区は，多数の埋蔵文化財包蔵地が所在し，明治以降の度重なる踏査や発掘調査によって考古学の研究に大きな役割りを果たしています。この度の調査においても貴重な遺構・遺物が検出され，多大の成果を上げることができました。

本書が，研究の資料としてはもとより，郷土の歴史の理解を深め，教育・文化の向上の一助として広く活用されることを希望いたします。

なお，調査・整理を進めるにあたり，委託者である茨城県をはじめ，茨城県教育委員会・桜川村教育委員会等関係各機関及び関係各位から寄せられた御指導・御協力に対し，衷心より謝意を表します。

昭和63年３月31日

財団法人　茨城県教育財団
理事長　川　又　友三郎

例　言

1　本書は，茨城県の委託により，財団法人茨城県教育財団が，昭和61年度に発掘調査を実施した稲敷郡桜川村に所在する尾島貝塚・宮の脇遺跡・後九郎兵衛遺跡の発掘調査報告書である。

2　尾島貝塚外２遺跡の調査・整理に関する当教育財団の組織は，次のとおりである。

理事長		川又友三郎	昭和61年４月～
副理事長		礒田　勇	昭和61年４月～
常務理事		滑川貞雄	昭和61年４月～
事務局長		堀井昭生	～昭和62年３月
		坂場庸克	昭和62年４月～
調査課長		青木義夫	昭和59年４月～
企画管理班	班長	北畠　健	～昭和62年３月
	〃	水飼敏夫	昭和62年４月～
	主任調査員	山本静男	昭和61年４月～
	係長	田所多佳男	～昭和62年３月
	主任	山崎初雄	昭和60年４月～
	主事	富永　明	昭和62年４月～
	〃	大部　章	昭和61年４月～
調査第二班	班長	倉本冨美男	昭和61年度
	主任調査員	人見暁朗	昭和61年度調査・昭和62年度整理・執筆
	調査員	後藤義明	昭和61年度調査
整理班長		倉本冨美男	昭和62年度

3　本書は，発掘担当者の協力を得て，人見暁朗が執筆・編集を担当した。

4　本書の作成及び発掘調査に際して，遺跡内の土壌（砂土）の性質・堆積のしかたについては，農林水産省農業環境技術研究所土壌生成研究室長天野洋司氏，掘立柱状建築跡については，茨城県文化財保護審議会委員一色史彦氏，石器及び石製品の材質鑑定については，茨城県立土浦第三高等学校教頭蜂須紀夫氏に御指導をいただいた。

5　本書で使用した記号等については，第４章第１～２節の記載方法の項を参照されたい。

目　次

序
例　言
第１章　調査経緯……1
　第１節　調査に至る経過……1
　第２節　調査経過……1
第２章　位置と環境……3
　第１節　地理的環境……3
　第２節　歴史的環境……4
第３章　調査方法……9
　第１節　地区設定……9
　第２節　遺構確認……9
　第３節　遺構調査……10
第４章　遺構・遺物の記載方法……11
　第１節　遺構の記載方法……11
　第２節　遺物の記載方法……14
第５章　尾島貝塚……16
　第１節　遺跡の概要……16
　第２節　遺構と遺物……16
　　1　竪穴住居跡……16
　　2　掘立柱建築跡……106
　　3　土坑……108
　　4　祭祀跡……113
　　5　工房跡……168
　　6　遺構に伴わない出土遺物……172
第６章　宮の脇遺跡……188
　第１節　遺跡の概要……188
　第２節　遺構と遺物……188
　　1　竪穴住居跡……188

2　掘立柱状建築跡…… 249
3　土坑…… 257
4　遺構に伴わない出土遺物…… 263
第７章　後九郎兵衛遺跡…… 276
第１節　遺跡の概要…… 276
第２節　遺構と遺物…… 276
1　竪穴住居跡…… 276
2　掘立柱状建築跡…… 289
3　方形周溝状遺構…… 291
4　土坑…… 297
遺構に伴わない出土遺物…… 302
第８章　まとめ…… 311
第１節　遺構…… 311
1　竪穴住居跡…… 311
2　掘立柱建築跡…… 313
3　掘立柱状建築跡…… 314
4　祭祀跡…… 315
5　工房跡…… 321
第２節　遺物…… 322
1　土器…… 322
終章　むすび…… 324

挿　図　目　次

第１図　尾島貝塚外２遺跡周辺遺跡分布図……　6
第２図　尾島貝塚外２遺跡位置図……　8
第３図　調査区呼称方法概念図……　9

尾島貝塚

第４図　尾島貝塚全体図……　15
第５図　第１号住居跡実測図……　17
第６図　第１号住居跡カマド実測図……　18
第７図　第１号住居跡出土遺物実測図(1)……　19
第８図　第１号住居跡出土遺物実測図(2)……　20
第９図　第２・３号住居跡実測図……　22
第10図　第２・３号住居跡カマド実測図……　23
第11図　第２号住居跡出土遺物実測図……　24
第12図　第３号住居跡出土遺物実測図(1)……　27
第13図　第３号住居跡出土遺物実測図(2)……　28
第14図　第４号住居跡実測図……　31
第15図　第４号住居跡出土遺物実測図(1)……　32
第16図　第４号住居跡出土遺物実測図(2)……　33
第17図　第５号住居跡実測図……　36
第18図　第５号住居跡出土遺物実測図(1)……　37
第19図　第５号住居跡出土遺物実測図(2)……　38
第20図　第６号住居跡実測図……　40
第21図　第６号住居跡出土遺物実測図(1)……　41
第22図　第６号住居跡出土遺物実測図(2)……　42
第23図　第７号住居跡実測図……　45
第24図　第７号住居跡出土遺物実測図(1)……　46
第25図　第７号住居跡出土遺物実測図(2)……　47
第26図　第８号住居跡実測図……　51
第27図　第８号住居跡出土遺物実測図(1)……　52
第28図　第８号住居跡出土遺物実測図(2)……　53
第29図　第10号住居跡実測図……　56
第30図　第10号住居跡カマド実測図……　57
第31図　第10号住居跡出土遺物実測図……　58
第32図　第11号住居跡実測図……　60
第33図　第11号住居跡出土遺物実測図……　61
第34図　第12号住居跡実測図……　63
第35図　第12号住居跡出土遺物実測図……　64
第36図　第13号住居跡実測図……　65
第37図　第13号住居跡出土遺物実測図(1)……　67
第38図　第13号住居跡出土遺物実測図(2)……　68
第39図　第14号住居跡実測図……　70
第40図　第14号住居跡出土遺物実測図……　70
第41図　第15号住居跡実測図……　71
第42図　第16号住居跡実測図……　72
第43図　第17号住居跡出土遺物実測図……　73
第44図　第18号住居跡実測図……　74
第45図　第18号住居跡出土遺物実測図……　75
第46図　第19号住居跡・カマド実測図……　77
第47図　第19号住居跡出土遺物実測図……　78
第48図　第20号住居跡実測図……　80
第49図　第20号住居跡出土遺物実測図……　80
第50図　第21号住居跡実測図……　82
第51図　第21号住居跡出土遺物実測図……　83
第52図　第22号住居跡実測図……　84
第53図　第23号住居跡実測図……　85
第54図　第23号住居跡出土遺物実測図(1)……　86
第55図　第23号住居跡出土遺物実測図(2)……　87
第56図　第23号住居跡出土遺物実測図(3)……　88
第57図　第23号住居跡出土遺物実測図(4)……　89
第58図　第24・26号住実測図……　94
第59図　第24号住居跡出土遺物実測図……　95
第60図　第25号住居跡実測図……　98
第61図　第25号住居跡出土遺物実測図(1)……　99
第62図　第25号住居跡出土遺物実測図(2)……　100
第63図　第25号住居跡出土遺物実測図(3)……　101
第64図　第26号住居跡出土遺物実測図……　103
第65図　第27号住居跡実測図……　105
第66図　第27号住居跡出土遺物実測図……　106
第67図　掘立柱建築跡実測図……　107
第68図　第１～６号土坑実測図……　109
第69図　第７～12・14号土坑実測図……　110
第70図　第13・15号土坑実測図……　111
第71図　土坑出土遺物実測図……　112
第72図　祭祀跡遺物配置図(1)……　117
第73図　祭祀跡出土遺物実測図(1)……　118
第74図　祭祀跡出土遺物実測図(2)……　119
第75図　祭祀跡出土遺物実測図(3)……　120
第76図　祭祀跡出土遺物実測図(4)……　121
第77図　祭祀跡出土遺物実測図(5)……　122
第78図　祭祀跡出土遺物実測図(6)……　123
第79図　祭祀跡出土遺物実測図(7)……　124

第80図　祭祀跡出土遺物実測図(8)…… 125
第81図　祭祀跡出土遺物実測図(9)…… 126
第82図　祭祀跡出土遺物実測図(10)…… 127
第83図　祭祀跡出土遺物実測図(11)…… 128
第84図　祭祀跡出土遺物実測図(12)…… 129
第85図　祭祀跡出土遺物実測図(13)…… 130
第86図　祭祀跡出土遺物実測図(14)…… 131
第87図　祭祀跡遺物配置図(2)…… 140
第88図　祭祀跡遺物配置図(3)…… 141
第89図　祭祀跡出土遺物実測図(1)…… 142
第90図　祭祀跡出土遺物実測図(2)…… 143
第91図　祭祀跡出土遺物実測図(3)…… 144
第92図　祭祀跡出土遺物実測図(4)…… 145
第93図　祭祀跡出土遺物実測図(5)…… 146
第94図　石製剣形模造品実測図(1)…… 152
第95図　石製剣形模造品実測図(2)…… 153
第96図　石製剣形模造品実測図(3)…… 154
第97図　滑石コア・砥石実測図…… 155
第98図　砥石実測図…… 156
第99図　有孔円板実測図(1)…… 157
第100図　有孔円板実測図(2)…… 158
第101図　有孔円板実測図(3)…… 159
第102図　有孔円板実測図(4)…… 160
第103図　臼玉実測図…… 164
第104図　祭祀遺物実測図…… 166
第105図　鉄製品実測図…… 167
第106図　工房跡遺物配置図…… 170
第107図　工房跡出土遺物実測図…… 171
第108図　遺構外出土遺物実測図(1)…… 172
第109図　遺構外出土遺物実測図(2)…… 173
第110図　遺構外出土遺物実測図(3)…… 174
第111図　遺構外出土遺物実測図(4)…… 175
第112図　遺構外出土遺物実測図(5)…… 176
第113図　遺構外出土土製品実測図(1)…… 177
第114図　遺構外出土土製品実測図(2)…… 178
第115図　遺構外出土土製品実測図(3)…… 179
第116図　遺構外出土土製品実測図(4)…… 180
第117図　遺構外出土土製品実測図(5)…… 181
第118図　遺構外出土土製品実測図(6)…… 182
第119図　遺構外出土土製品実測図(7)…… 183

宮の脇遺跡

第120図　宮の脇遺跡全体図…… 187
第121図　第1号住居跡実測図…… 189
第122図　第1号住居跡出土遺物実測図…… 190
第123図　第2号住居跡実測図…… 191
第124図　第2号住居跡出土遺物実測図(1)…… 192
第125図　第2号住居跡出土遺物実測図(2)…… 193
第126図　第2号住居跡出土遺物実測図(3)…… 194
第127図　第3号住居跡・カマド実測図…… 197
第128図　第3号住居跡出土遺物実測図…… 198
第129図　第4号住居跡・カマド実測図…… 200
第130図　第4号住居跡出土遺物実測図…… 201
第131図　第5号住居跡実測図…… 202
第132図　第5号住居跡出土遺物実測図(1)…… 203
第133図　第5号住居跡出土遺物実測図(2)…… 204
第134図　第6号住居跡出土遺物実測図…… 207
第135図　第7号住居跡実測図…… 209
第136図　第7号住居跡出土遺物実測図…… 210
第137図　第9号住居跡実測図…… 211
第138図　第9号住居跡出土遺物実測図(1)…… 212
第139図　第9号住居跡出土遺物実測図(2)…… 213
第140図　第10号住居跡・カマド実測図…… 216
第141図　第10号住居跡出土遺物実測図…… 217
第142図　第11号住居跡実測図…… 218
第143図　第11号住居跡出土遺物実測図…… 219
第144図　第12号住居跡実測図…… 222
第145図　第12号住居跡出土遺物実測図…… 223
第146図　第13号住居跡実測図…… 225
第147図　第13号住居跡出土遺物実測図…… 226
第148図　第14号住居跡実測図…… 227
第149図　第14号住居跡出土遺物実測図…… 228
第150図　第17号住居跡実測図…… 229
第151図　第17号住居跡出土遺物実測図…… 231
第152図　第18号住居跡実測図…… 232
第153図　第18号住居跡出土遺物実測図…… 232
第154図　第19号住居跡実測図…… 234
第155図　第19号住居跡カマド実測図…… 235
第156図　第19号住居跡出土遺物実測図…… 235
第157図　第20号住居跡実測図…… 236
第158図　第20号住居跡出土遺物実測図…… 237
第159図　第23号住居跡実測図…… 240
第160図　第23号住居跡出土遺物実測図…… 241
第161図　第24号住居跡実測図…… 242
第162図　第24号住居跡出土遺物実測図(1)…… 243

第163図　第24号住居跡出土遺物実測図(2)…… 244
第164図　第25号住居跡実測図…… 246
第165図　第25号住居跡出土遺物実測図…… 246
第166図　第26号住居跡実測図…… 248
第167図　第26号住居跡出土遺物実測図…… 248
第168図　第１号掘立柱状建築跡実測図…… 249
第169図　第２号掘立柱状建築跡実測図…… 250
第170図　第３号掘立柱状建築跡実測図…… 251
第171図　第４号掘立柱状建築跡実測図…… 253
第172図　掘立柱状建築跡出土遺物実測図(1)…… 254
第173図　掘立柱状建築跡出土遺物実測図(2)…… 255
第174図　第１～３・５・６号土坑実測図…… 258
第175図　第７～16号土坑実測図…… 259
第176図　土坑出土遺物実測図(1)…… 260
第177図　土坑出土遺物実測図(2)…… 261
第178図　遺構外出土土器実測図(1)…… 264
第179図　遺構外出土土器実測図(2)…… 265
第180図　遺構外出土土製品実測図(1)…… 267
第181図　遺構外出土土製品実測図(2)…… 268
第182図　遺構外出土土製品実測図(3)…… 269
第183図　遺構外出土石器・石製品実測図(1)…… 272
第184図　遺構外出土石器実測図(2)…… 273
第185図　遺構外出土鉄製品実測図…… 274

後九郎兵衛遺跡

第186図　後九郎兵衛遺跡全体図…… 275
第187図　第１号住居跡実測図…… 277
第188図　第１号住居跡出土遺物実測図…… 277
第189図　第２号住居跡実測図…… 278
第190図　第３・５号住跡実測図…… 280
第191図　第３号住居跡出土遺物実測図…… 281
第192図　第４号住居跡実測図…… 282
第193図　第４号住居跡出土遺物実測図…… 283
第194図　第５号住居跡出土遺物実測図…… 285
第195図　第６号住居跡実測図…… 286
第196図　第６号住居跡出土遺物実測図…… 287
第197図　第７号住居跡実測図…… 288
第198図　第１号掘立柱状建築跡実測図…… 290
第199図　第１号掘立柱状建築跡出土遺物実測図… 291
第200図　第１号方形周溝状遺構実測図…… 292
第201図　第２号方形周溝状遺構実測図…… 293
第202図　第３号方形周溝状遺構実測図…… 294
第203図　方形周溝状遺構出土遺物実測図…… 295
第204図　第１～６号土坑実測図…… 298
第205図　第７～12号土坑実測図…… 299
第206図　第13～19号土坑実測図…… 300
第207図　第20～23号土坑実測図…… 301
第208図　土坑出土遺物実測図…… 301
第209図　遺構外出土土器実測図(1)…… 303
第210図　遺構外出土土器実測図(2)…… 304
第211図　遺構外出土土製品実測図…… 304
第212図　遺構外出土石器実測図(1)…… 305
第213図　遺構外出土石器実測図(2)…… 306
第214図　遺構外出土石器実測図(3)…… 307
第215図　遺構外出土石器・石製品実測図(4)…… 308
第216図　遺構外出土石製品実測図(5) …… 309
第217図　遺構外出土鉄製品実測図 …… 309
第218図　有孔円板・穿孔間比率…… 321

表　目　次

表１　桜川村遺跡一覧表…… 7
表２　土坑一覧表（尾島貝塚）…… 108
表３　土坑一覧表（宮の脇遺跡）…… 257
表４　土坑一覧表（後九郎兵衛遺跡）…… 297

写真図版目次

上空からみた尾島貝塚外２遺跡周辺と霞ヶ浦

尾島貝塚

ＰＬ１　調査前全景，第１・２号住居跡遺物出土状況，第１・２号住居跡

ＰＬ２　第３・４・７号住居跡遺物出土状況，第３・４・５・６・７号住居跡

ＰＬ３　第８・12号住居跡遺物出土状況，第８・10・11・12・13号住居跡，第10号住居跡カマド

ＰＬ４　第14・15・18・19・21・22号住居跡，第19号住居跡カマド，第20号住居跡遺物出土状況

ＰＬ５　第23・25号住居跡遺物出土状況，第23・24・25・26・27号住居跡，第１号掘立柱建築跡，第１号土坑

ＰＬ６　第２・４・５・７・８・９・10・11号土坑

ＰＬ７　第12・13・14・15号土坑，H14b_4区－５・H14c_0区－11・H15e_5区遺物出土状況

ＰＬ８　H15e_5区・H15e_5区－15・H15e_7区－12・H15e_7区－16・H15$e_{8\cdot9}$区遺物出土状況

ＰＬ９　H15e_9区－５・H15f_5区・H15f_6区H15g_9区－７・H16h_1区遺物出土状況

ＰＬ10　H16h_1区－11・H16i_3区・H16j_3区・工房跡遺物出土状況

ＰＬ11　調査後全景（東），(西)

ＰＬ12　住居跡出土土器

ＰＬ13　住居跡出土土器

ＰＬ14　住居跡出土土器

ＰＬ15　住居跡出土土器

ＰＬ16　住居跡出土土器

ＰＬ17　住居跡，祭祀跡出土土器

ＰＬ18　祭祀跡出土土器

ＰＬ19　祭祀跡出土土器

ＰＬ20　祭祀跡出土土器

ＰＬ21　祭祀跡出土土器

ＰＬ22　祭祀跡出土土器

ＰＬ23　祭祀跡出土土器

ＰＬ24　祭祀跡出土土器

ＰＬ25　祭祀跡出土土器

ＰＬ26　祭祀跡出土土器

ＰＬ27　祭祀跡，Ｈ14区，Ｈ15区出土土器

ＰＬ28　Ｈ14区，Ｈ15区出土土器

ＰＬ29　Ｈ14区，Ｈ15区出土土器

ＰＬ30　Ｈ14区，Ｈ15区，工房跡出土土器，土製鍬先形模造品等土製品

ＰＬ31　土製勾玉，土製品，土製鏡形模造品

ＰＬ32　石製剣形模造品

ＰＬ33　有孔円板

ＰＬ34　有孔円板

ＰＬ35　石製品，コア

ＰＬ36　砥石，石製品

ＰＬ37　砥石，コア，石器

ＰＬ38　鉄製品

宮の脇遺跡

ＰＬ39　調査前全景，第１・２住居跡，第２号住居跡遺物出土状況

ＰＬ40　第３・４・５・６・７・８号住居跡，第５・９号住居跡遺物出土状況
ＰＬ41　第９・10・12号住居跡遺物出土状況，第９・10・11・12・13号住居跡
ＰＬ42　第17・20号住居跡遺物出土状況，第17・19・20・23・24号住居跡，第19号住居跡カマド
ＰＬ43　第25・26号住居跡，第１・２・３・４号掘立柱状建築跡，第３号掘立柱状建築跡遺物出土状況
ＰＬ44　第２・３・５・７・９・10・11・12・13号土坑
ＰＬ45　第14・15・16号土坑，第16号土坑遺物出土状況，調査後全景
ＰＬ46　住居跡出土土器
ＰＬ47　住居跡出土土器
ＰＬ48　住居跡出土土器
ＰＬ49　住居跡出土土器
ＰＬ50　住居跡出土土器
ＰＬ51　住居跡出土土器
ＰＬ52　住居跡，掘立柱状建築跡出土土器
ＰＬ53　掘立柱状建築跡，土坑，遺構外出土土器
ＰＬ54　遺構外出土土器
ＰＬ55　球状土錘
ＰＬ56　球状土錘

後九郎兵衛遺跡

ＰＬ57　調査前全景，試掘
ＰＬ58　第１・２・３・４・５・６号住居跡，第３・４・５号住居跡遺物出土状況
ＰＬ59　第７号住居跡，第１号掘立柱状建築跡，第１・２・３号方形周溝状遺構，第１号方形周溝状遺構遺物出土状況
ＰＬ60　作業風景
ＰＬ61　第４・５・６・８・９・10・12・17号土坑
ＰＬ62　第18・19・22号土坑，作業風景，調査後全景
ＰＬ63　住居跡出土土器
ＰＬ64　掘立柱状建築跡，方形周溝状遺構，遺構外出土土器
ＰＬ65　遺構外出土土器，土錘，支脚
ＰＬ66　土製品，石製品，鉄製品，石器
ＰＬ67　石器

第1章　調 査 経 緯

第1節　調査に至る経過

一般県道新川・江戸崎線は，東村を起点にして桜川村を横断し，江戸崎町に至る稲敷地方の主要な道路である。この道路は，幅員の狭い箇所が多く，近年の交通量の増加に対応しきれなくなっている。現在，道路沿いには人家が立並んでおり，幅員を拡張することは極めて困難なため，茨城県では，起点を桜川村浮島地区に，終点を江戸崎町佐倉地区とする幅員12m，総延長12,435mの一般県道新川・江戸崎線改良工事を計画した。

茨城県竜ヶ崎土木事務所は，工事着工に先立ち，昭和59年7月4日，桜川村教育委員会に工事予定地内における埋蔵文化財の有無について照会した。これに対し，桜川村教育委員会は，工事予定地内に尾島貝塚・宮の脇遺跡・後九郎兵衛遺跡の周知の遺跡が所在するため，路線の計画変更について関係機関と協議を重ねたが，変更は困難との結論に至り，発掘調査を実施して記録保存すべき旨を回答した。

昭和60年5月16日，茨城県竜ヶ崎土木事務所・茨城県教育庁文化課・桜川村教育委員会・同村企画課の四者が開発予定地の現地路査を行い，調査範囲を確認するとともに，発掘調査に係る諸手続き・発掘調査機関等について協議がなされた。調査機関は茨城県教育財団が当たる方向で話し合われ，それを受けて，茨城県教育庁文化課・茨城県竜ヶ崎土木事務所・茨城県教育財団調査課は，昭和61年3月20日現地踏査を行い，調査期間・方法等について協議した。

茨城県教育庁文化課は，茨城県道路建設課に調査面積・調査範囲及び調査機関等について回答し，それにより，茨城県教育財団は，茨城県（道路建設課）と埋蔵文化財発掘調査に関する業務の委託契約を締結し，昭和61年4月1日から12月31日までの予定で発掘調査を実施することになった。

第2節　調査経過

尾島貝塚・宮の脇遺跡・後九郎兵衛遺跡の3遺跡は，昭和61年4月に調査を開始し，同年12月31日をもって調査を終了した。調査面積は12,717㎡である。

当初，発掘調査は，後九郎兵衛遺跡から宮の脇遺跡，尾島貝塚の順に進める予定であったが，調査の進捗に伴い，3遺跡が同一遺跡として捉えられる点が多分に認められたため，並行して調査を進めた。調査経過の概要は，下記のとおりである。

4　　月　遺跡を踏査し，調査区域の確認，調査計画の検討を行う。中旬に発掘調査作業員募集，

現場事務所等の設置を行い，30日に発掘調査の円滑な推進と安全を願い，尾島貝塚において鍬入れ式を挙行する。

5　月　1日にグリッドを設定し，2日から試掘を開始する。表土下60cmほどまで耕作（深耕ロータリー）によって撹乱されていることを確認する。尾島貝塚・宮の脇遺跡の撹乱層の中から和泉式期，鬼高式期の土器片が多量に出土する。試掘によって宮の脇遺跡から住居跡のカマドを，尾島貝塚から住居跡を確認する。

6　月　2日から重機（バックホー）を導入して遺跡の表土除去を行い，併せて遺構確認作業を始める。砂地のため遺構確認は困難を窮める。尾島貝塚では，以前の桑根伐根によって表土下80cmまでが撹乱されており，遺構は判然としない。遺物は，土玉・石製模造品（剣・双孔円板)･手捏土器等が尾島神社の北側を中心に出土する。宮の脇遺跡では，カマド跡・焼土跡・住居跡が確認され，遺物は土玉・石製模造品（剣・有孔円板）が出土する。後九郎兵衛遺跡では，この時点で遺構は確認されない。下旬に方眼杭打ちを行う。

7　月　宮の脇遺跡から遺構の調査を開始し，住居跡11軒，土坑7基を調査する。尾島貝塚では，表土除去後露呈した遺物の取り上げを行い，次いで祭祀遺構と推定されるH15f_8～f_0区について調査を始める。

8　月　前月に続き宮の脇遺跡で住居跡・土坑の調査を行う。調査の進行に伴い，遺構の重複が判明する。新たに掘立柱状建築跡が確認され，調査に入る。尾島貝塚では，祭祀遺物が一括出土しているH15f_8～f_0区周辺を拡張して調査を進める。

9　月　尾島貝塚・宮の脇遺跡では，引き続き遺構の調査を進める。尾島貝塚・後九郎兵衛遺跡の両遺跡で遺構が確認できないので，遺物取り上げ後，さらにトレンチを設定して掘り下げたところ遺構が確認されたので，再度重機（バックホー）によって掘り下げ，遺構確認を行う。

10　月　尾島貝塚で住居跡28軒，土坑22基，その他柱穴群を確認する。後九郎兵衛遺跡では，重機による掘削とその後の遺構確認によって住居跡7軒，方形周溝状遺構3基，土坑23基，その他ピット群を確認する。

上旬から尾島貝塚の遺構調査に入り，住居跡17軒，土坑10基の調査を終了する。

11　月　尾島貝塚の遺構調査を続行し，18日に調査を終了する。調査の主力は，後九郎兵衛遺跡に移り，住居跡7軒，方形周溝状遺構3基，土坑23基等の調査を終了する。

12　月　後九郎兵衛遺跡の調査を進め，上旬に調査がほぼ終了する。13日に尾島貝塚外2遺跡の調査後の全景撮影を行い，補足調査を経て，26日，県に遺跡を引き渡して，3遺跡についての全ての調査を終了する。

第2章　位置と環境

第1節　地理的環境

尾島貝塚・宮の脇遺跡・後九郎兵衛遺跡の3遺跡は，茨城県稲敷郡桜川村大字浮島5678番地の40ほかに所在する。

桜川村は，稲敷郡内2町6村の一村で，茨城県の南東部，霞ヶ浦の南岸に位置し，東及び南は東村に，西は江戸崎町に，北はわが国第二の湖沼である霞ヶ浦に接している。東を新利根川が，西を小野川が北流して霞ヶ浦に注ぎ，南には，東村を間に坂東太郎の名で親しまれる利根川が東流する水郷地帯である。昭和30年に古渡村と浮島村が合併して桜川村となり，翌年に阿波村を編入して現在に至っている。村の面積は33.95㎢，人口8,255人，世帯数1,965（昭和62・7・1現在）を数える。村の中央部を県道新川・江戸崎線が東西に走り，西側を国道125号線が縦貫して土浦市と結んでいる。

村の南西部は，稲敷台地の丘陵地帯で，耕地が点在し，東南部は湖岸に沿って肥沃な水田地帯を形成している。稲作を中心に野菜（大根・野沢菜など）・タバコ栽培を主とする純農村で，早場米の産地として，穀倉稲敷の一翼を担っている。昭和36年には，馬渡地区と浮島地区に挟まれた「西の州」の干拓事業に着手し，7年の歳月を費して140haの耕地を開いている。近年，丘陵地帯は，工業用地・レジャー用地として開発が進められている。

遺跡の所在する浮島地区は，村域の東部を占め，霞ヶ浦の湖畔近くに位置する。南北1.5㎞，東西7.2㎞の北西から南東にかけて長い紡錘形の島（現在は陸つづき）で，面積は約10㎢である。稲敷台地の一部が霞ヶ浦の入江と野田奈川によって浸食され，分離されて形成された島で，中央部は高さ25mほどの台地となり，周囲に砂質の沖積低地をめぐらしている。島内では，標高5m以下の低地を水田に，それより一段高い5～10mほどの中央台地をとりまく平坦部を畑として利用している。山林は主として台地と畑の間の急斜面上に存在している。湖に囲まれているため海洋性気候の傾向が強く，冬も温暖である。景勝地としても知られ，水郷筑波国定公園の一角を占め，夏季にはキャンプ場が開かれている。集落は，台地の南側に山を背にして密集し，集落数14，世帯数475戸（昭和62・7・1現在）を数え，稲作や蓮根・野菜などの栽培が行われている。

昭和61年4月23日，浮島と東村を結ぶ新利根川河口（国道51・125号線の分岐点を北西に3.8～4.5㎞の地点）に稲敷大橋が開通し，国道51号線から桜川村への距離を短縮させた。橋を渡って西へ1.1㎞ほどに尾島神社が所在する。

尾島貝塚・宮の脇遺跡・後九郎兵衛遺跡は，浮島の東端に鎮座する尾島神社を中心にして，標高26.7mを測る蛇峰山の北側から東に突出する標高7m前後の砂洲上に位置する。

第2節　歴史的環境

茨城県の南東部，霞ヶ浦南岸に位置する桜川村には，恵まれた地理的環境と食料資源の豊かさの故であろうか，古くから人々の生活していた跡（遺跡）が数多く残されている。特に貝塚は，県内に314か所（62・4・1現在）ほどの所在が確認されているが，本村内に22か所の貝塚が確認されており，霞ヶ浦を隔てて北西に位置する稲敷郡美浦村に所在する陸平（おかだいら）貝塚と並んで，明治の初期以降考古学研究の対象とされ，多くの研究者の踏査・調査によって，原始・古代文化の解明に大きな役割りを果たしてきた。ここでは，村内の主な遺跡について，時代をおって述べることにする。

縄文時代の遺跡としては，貝ヶ窪（かいくぼ）貝塚・広畑（ひろはた）貝塚・前浦（まえうら）遺跡などがあり，いずれも著名な遺跡として知られている。

貝ヶ窪貝塚は，桜川村大字浮島字狭間久保の台地緩斜面に所在し，2か所の地点貝塚からなる縄文時代前期後半の遺跡である。この貝塚出土の土器を標式として浮島式土器は命名された。貝層は，貝類（ハマグリ・シオフキ・アサリ）のほかに魚骨（マダイ・コショウダイ），獣骨（シカ・イノシシ・クジラ）も検出されている。また逆刺（あげ）のあるやすが発見され，縄文時代前期後半の霞ヶ浦沿岸における漁具の特徴を示している。

広畑貝塚は，桜川村大字飯出字ひろ畑・字宮前・字行屋・字根本の丘陵斜面から沖積地にかけて所在し，標高2～4m，東西約90m，南北約40mの規模をもつ貝塚である。ここから，縄文時代後期の安行（あんぎょう）Ⅰ式及び晩期の安行ⅢC式に伴う製塩土器が多量に出土し，この地で製塩業を営んでいた縄文時代の人々の生活をしのぶ重要な遺跡である。昭和57年2月27日，国指定史跡となった。

前浦遺跡は，桜川村大字浮島字前浦に所在し，水田との比高5mほどの低地の砂層に広がる縄文時代後期から平安時代までの長期にわたる遺跡である。昭和31年，山内清男氏がこの遺跡の発掘調査を行い，製塩土器・製塩遺構を発見するとともに縄文時代晩期に比定される土器形式・前浦式土器の存在を確認した。前浦式土器は，縄文時代晩期の関東東部を代表する土器形式である。

本遺跡と同一地内に所在する殿内（とのうち）貝塚は，初期弥生式土器を伴う土坑が，晩期縄文式土器を包含する層を掘り込んでいることが明らかにされ，縄文時代と弥生時代の接点を知る上で重要な遺跡である。村内の弥生時代の遺跡は，前述の外に前浦貝塚がある。

古墳時代になると，本県の古墳では最古のクラスに位置する原1号墳（原古墳群）の築造がみられる。この古墳は，桜川村大字浮島字原の丘陵上に所在する。古墳は，全長32mの前方後方墳で，粘土床上の木棺直葬である。木棺内郭部からは，管玉・ガラス製小玉・鉄剣・鉄槍・鉇（やりかんな）・短冊形鉄斧・鎌・針などが出土し，それらとともに五領式期の土師器が出土していることから，築造は4世紀後半と推定される。浮島の北端に位置する和田岬には，勝木古墳群が所在する。かつて

18基の古墳が存在したといわれる。本村には，現在，８か所の古墳群と９基の古墳が確認されている。

奈良時代に入ると，桜川村は，常陸国風土記に登場してくれる。それによると「古老の日いらく，倭武の天皇，海の辺を巡り幸でましし時，行きて乗浜に至り給いき。時に浜浦の上に多に海苔を乾せりき。是に由りて能理波麻の村と名づく。（以下は略く。）乗浜の里の東に浮島の村あり。長さ二千歩，広さ四百歩なり．四面絶海なり。山野交錯はり。戸一十五烟，里七八町餘あり。居める百姓，塩を火きて業と為す。而して九つの社在り，言も行も謹み諱めり。（以下は略く。）」とある。

上文から，浮島地区は，奈良時代に一十の家があり，製塩業に従事していたこと，地区内に九つの杜が祀られていて，そこに住む人々の言行が謹み深く，信仰心の厚さが読みとれる。なお，今回の調査遺跡（尾島貝塚）に隣接して尾島神社がある。大名持乃命を祭神として，天安年中（857～858年）の創建（社伝）と伝えられるが，神社周辺から祭祀遺物（土・石製模造品，手捏土器など）が多量に出土することから，常陸国風土記に記載されている九社の中の一社ではないかと考えられる。

平安時代末期には，浮島地区は保元の乱に敗れた藤原教長の配流の地となり，源頼朝の叔父・志田義広の陰棲の地として伝えられている。

12世紀後半，常陸平氏大掾維幹の子忠幹がこの地方に土着し，以後，鎌倉時代を通じその子孫が支配した。南北朝時代に南朝の柱石として活躍した北畠親房ゆかりの神宮寺城は，桜川村大字神宮寺に所在する。城跡は，東西約200ｍ，南北約400ｍの規模をもち，本丸跡・堀跡・土塁などが残っている。城跡の北寄りには，南朝方に味方した地元有力者の墓と伝えられる十三塚がある。神宮寺城跡は，昭和10年11月26日，県の史跡に指定された。

中世の浮島地区は，浮島城を築いた浮島氏（物部信太連の一族）の支配をうけていたが，浮島氏は天正年間（1573～1592年）佐竹氏に滅ぼされ，浮島城は廃城となった。

江戸時代の浮島地区は，幕府領（天領）～旗本領～天領と変遷を経て幕末に至る。元禄郷帳の石高は，1031石余。その後新田開発が進み，天保郷帳では1559石余に増加している。

稲敷郡桜川村の浮島地区は，原始・古代の昔より霞ヶ浦と密接なかかわりあいをもって長い歴史を培ってきた地域である。

参考文献

「茨城県遺跡地図」　茨城県教育委員会　1987年

「茨城県史料」　考古資料編　先土器・縄文時代　茨城県　1979年

「茨城県史料」　古墳時代　茨城県　1974年　　「茨城県史料」　古代　茨城県　1968年

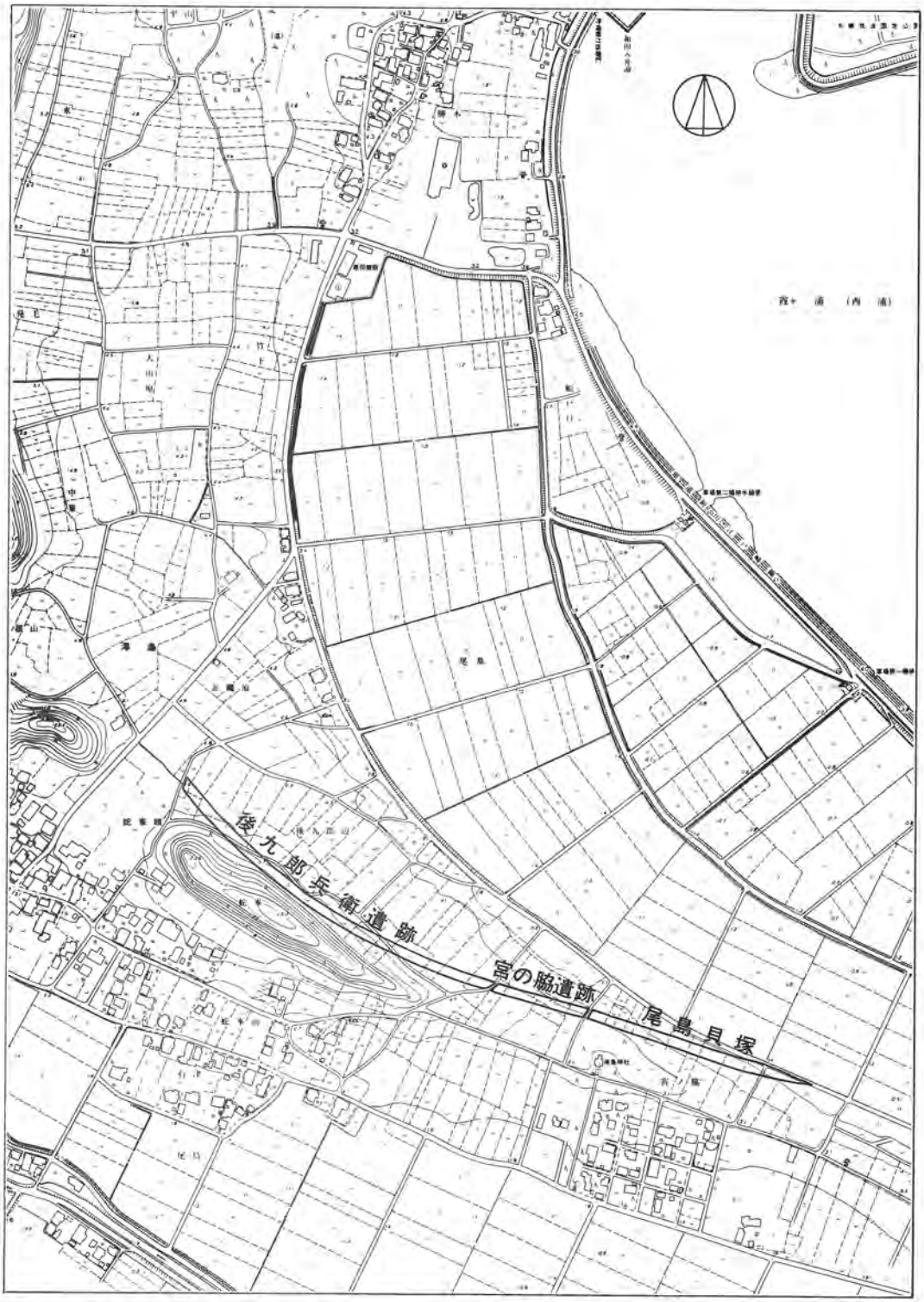
「茨城県史」　原始古代編　1985年

「常陸風土記入門」　人見暁郎　1980年

第１図　尾島貝塚外２遺跡周辺遺跡分布図

表1　桜川村遺跡一覧表

番号	名称	所在地	種別	現況	時代 無土器	縄文	弥生	古墳	奈・平	鎌・室	江戸
1	神宮寺城跡	神宮寺字道向830外	城館跡	山林						○	
2	塔の前寺院跡	神宮寺字細田1136のイ	寺院跡	山林					○		
3	穴かまど跡	神宮寺字町山573の1 574のロ	窯跡	山林				○			
4	西原古墳群	神宮寺字石塚1161 1160のイ	古墳群	山林				○			
5	酒井古墳	四箇字酒井1761	古墳	山林				○			
6	大室貝塚	四箇大室1257・1258 1214～1218	貝塚	畑		○	○				
7	所作貝塚	四箇所作	貝塚	ゴルフ場		○					
9	大門貝塚	四箇松木	貝塚	畑，荒地		○					
10	竜貝貝塚	阿波字竜貝779，798 796のイ	貝塚	山林，宅地		○					
11	石神下貝塚	阿波字竜貝	貝塚	畑，宅地		○					
12	人形塚古墳	羽生字人形塚872	古墳	畑				○			
13	広畑貝塚	飯出字ひろ畑	貝塚	荒地		○					
14	塚原古墳	岡飯出字須賀飯出	古墳	学校敷地				○			
15	飯出A貝塚	飯出	貝塚	水田							
16	飯出B貝塚	飯出	貝塚	水田							
17	三次貝塚	三次字原355	貝塚	宅地							
18	柏木貝塚	柏木	貝塚	畑							
19	後九郎兵衛遺跡	浮島字後九郎辺 5368・5369外	包蔵地	畑		○	○	○			
20	尾島祭祀遺跡	浮島字宮の脇 5678の36～39	包蔵地	荒地		○	○	○			
21	尾島貝塚	浮島字宮の脇 5678の39～40外	包蔵地	畑		○	○	○			
22	宮の脇遺跡	浮島字宮の脇	包蔵地	畑		○	○	○			
23	前浦貝塚	浮島字前浦3125	貝塚	宅地		○	○				
24	前浦遺跡	浮島字前浦	包蔵地	畑，宅地		○					
25	岡ノ内遺跡	浮島字岡ノ内2962	貝塚	畑		○					
26	貝ヶ窪貝塚	浮島字狭間久保2902・2903 2807	貝塚	山林		○					
27	年行地貝塚	浮島字年行地2260	貝塚	畑				○			
28	年行地遺跡	浮島字年行地1653	製鉄跡	畑						○	
29	上の台貝塚	浮島字上の台3275	貝塚	畑		○					
30	平山古墳群	浮島字平山4876・4877外	古墳群	山林				○			
31	勝木古墳群	浮島字勝木4987外	古墳群	宅地 畑，山林				○			
32	竹の下古墳群	浮島字竹山	古墳群	畑				○			
33	寄縄原古墳群	浮島字寄縄原	古墳群	畑				○			
34	原古墳群	浮島字追越	古墳群	山林				○			
35	下馬渡貝塚	下馬渡	貝塚	道路							
36	天神台貝塚	阿波字天神台	貝塚	ゴルフ場							
37	殿内貝塚	浮島字殿内	貝塚	畑，宅地		○					
38	塚原貝塚	古渡字塚原	貝塚	学校敷地							
39	浮島城跡	浮島字岡ノ内	城館跡	山林 畑，宅地						○	
40	村坪貝塚	四箇字村坪	貝塚	畑		○					
41	村坪遺跡	四箇字村坪	包蔵地	畑		○					
42	南貝塚	阿波字南	貝塚								
43	内道古墳群	柏木字内道389，417 419，401のイ	古墳群	畑，山林				○			
44	稲荷久保古墳	柏木字稲荷々保318，319 322	古墳	山林				○			
45	柏木古渡古墳群	柏木古渡字大堺61のイ外	古墳群	山林，畑				○			
46	前山古墳	神宮寺字前山869	古墳	宅地				○			
47	穴かまど跡	神宮寺馬場尻478	窯跡	山林				○			
48	甘田古墳	甘田字宅地添1329～2	古墳	山林				○			
49	四箇古墳群	四箇字根畑1923	古墳群	山林				○			
50	大日塚	須賀津	古墳	山林				○			
51	三次古墳	三次868	古墳	宅地				○			
52	小谷城跡	古渡字小谷167～1	城館跡	畑，水田						○	
53	迎山古墳	神宮寺字迎山	塚	工場敷地内							○



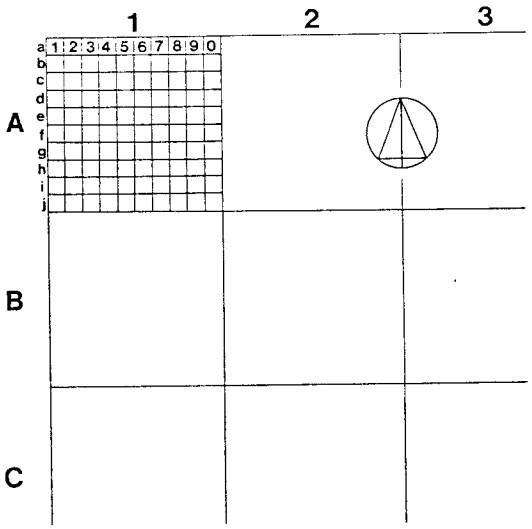
第２図　尾島貝塚外２遺跡位置図

第3章　調 査 方 法

第1節　地区設定

尾島貝塚・宮の脇遺跡・後九郎兵衛遺跡の発掘調査を実施するにあたり，遺跡及び遺構の位置を明確にするために調査区を設定した。

調査区の設定は，日本平面直角座標第Ⅳ系座標，X軸（南北）・Y軸座標（東西）を基準線として，40m四方の大調査区に分割し，さらに大調査区内を4m四方の小調査区に細分割した。調査区の名称は，アルファベットと算用数字を用い，大調査区においては北から南へA・B・C…，西から東へ1・2・3……とし，「A1区」，「B2区」のように呼称した。大調査区内の小調区は北から南へa・b・c……j，西から東へ1・2・3……0とし，小調査区の名称は，大調査区の名称を冠し，「A1a2」，「B2e3」のように呼称した。



第3図　調査区呼称方法概念図

各遺跡における基準点は次のとおりである。

(1)　尾島貝塚……X軸（南北）－4,200.00m　Y軸（東西）＋55,600.00m

(2)　宮の脇遺跡……X軸（南北）－4,160.00m　Y軸（東西）＋55,480.00m

(3)　後九郎兵衛遺跡……X軸（南北）－3,920.00m　Y軸（東西）＋55,000.00m

第2節　遺構確認

尾島貝塚外2遺跡について，各遺跡とも球状土錘・土師器片が多量に表面採取できる状況で，濃密な遺構の確認が予想されたので，3遺跡ともグリッドを設定して遺構確認調査を実施した。

各遺跡とも，多量の砂利を含む砂地で，固くしまっており，確認調査は困難をきわめた。どの遺跡も耕作（深耕ロータリー）による撹乱を受けていたが，表土下50～80cmほどにカマド跡などが確認された。そこで，調査期間や表土の厚さ，固さ等をふまえ，重機によって調査区全域の表土除去を実施した。その結果，尾島貝塚・宮の脇遺跡から住居跡・掘立柱状建築跡・土坑などが，

後九郎兵衛遺跡から住居跡・土坑・方形周溝状遺構などが確認された。

第3節　遺構調査

遺構の調査は，次のような方法で実施した。

竪穴住居跡は，土層観察用ベルトを東西方向及び南北方向の十文字に設けて掘り込む四分割法で実施し，地区名は，北東部より時計回りに１～４区とした。

土坑の調査は，長軸方向で分割する二分割法で実施し，地区名は，住居跡に準じた。

掘立柱建築跡については，柱痕跡及び柱穴掘方が一直線に連続するようなラインを設定し，そのラインに沿って二分割する方法を用いた。

方形周溝状遺構は，適宜土層観察用ベルトを設けた。

土層の観察は，色調・含有物・粘性等について行い，色調の判定は「新版標準土色帳」(小山正忠・竹原秀雄著　日本色研事業株式会社）を使用した。

遺物は，遺物番号・出土位置・レベル等を図面あるいは台帳に記録して取り上げ，遺構の観察は，埋土の堆積状況・床・壁・柱穴・貯蔵穴・カマド等について留意した。

遺構の実測については，平面図は水糸を１ｍ方眼に地張りして計測し，土層・遺構断面図は水糸を最適な高さに水平に設定し，計測し，各々20分の１の縮尺で図化した。

遺構番号は，調査順に付したが，調査中に欠番となったものもあり，必ずしも連続した番号にはなっていない。

第４章　遺構・遺物の記載方法

第１節　遺構の記載方法

本書では，遺構の記載に関して，下記の要領で統一した。

1　使用記号

竪穴住居跡－ＳＩ　土坑－ＳＫ　掘立柱建築跡－ＳＢ　方形周溝状遺構－ＳＹ　ピット－Ｐ

2　遺構に伴う施設等の表示方法

－カマド　－焼土　－貝層　－朱塗り　－黒色処理

3　土層の分類

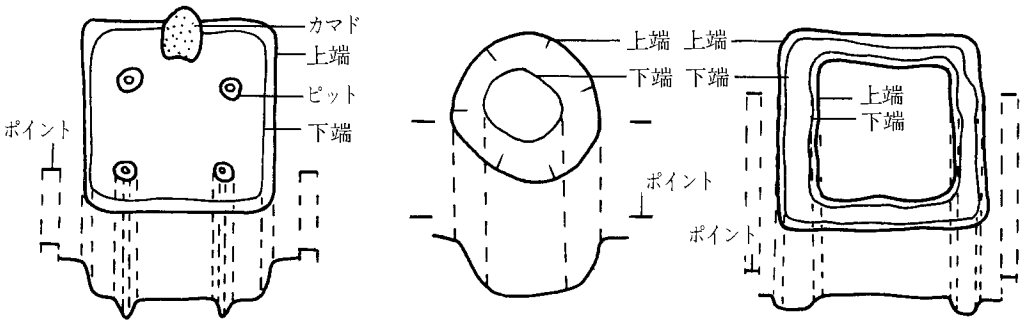
土層観察は,「新版標準土色帳」(小山正忠・竹原秀雄編著・日本色研事業株式会社）を使用し，下記のように分類・記号化した。また，含有物ａ・ｂ……ｕの量については，少量（10%未満）はアルファベットのまま，中量（10%以上～30%未満）はアルファベットに「'」を，多量（30%以上）は「"」をそれぞれの右上に付加して表示した。

番号	土色名	色相	明度／彩度	含有物
1	褐色	Hue 7.5YR	4/3 4/4 4/6	a ローム粒子
		Hue 10YR	4/4 4/6	b ロームブロック
2	暗褐色	Hue 7.5YR	3/3 3/4	c ハードロームブロック
		Hue 10YR	3/3 3/4	d 焼土粒子
3	黒褐色	Hue 5YR	3/1 2/1 2/2	e 焼土ブロック
		Hue 7.5YR	3/1 3/2 2/2	f 炭化粒子
		Hue 10YR	3/1 3/2 2/2 2/3	g 炭化材
4	極暗褐色	Hue 7.5YR	2/3	h 砂
5	明褐色	Hue 7.5YR	5/6 5/8	i 砂利
6	にぶい褐色	Hue 7.5YR	6/3 5/3 5/4	j 粘土粒子
7	灰褐色	Hue 7.5YR	6/2 5/2 4/2	k 粘土ブロック
8	赤褐色	Hue 5YR	4/6 4/8	l 酸化鉄粒子
9	明赤褐色	Hue 2.5YR	5/6 5/8	m 酸化鉄ブロック
		Hue 5YR	5/6 5/8	n 酸化鉄砂
10	にぶい赤褐色	Hue 2.5YR	5/3 5/4 4/3 4/4	o 酸化鉄砂粒ブロック
		Hue 5YR	5/3 5/4 4/3 4/4	p 酸化砂土ブロック

番号	土色名	色相	明度／彩度	含有物
11	暗赤褐色	Hue 2.5YR	3/2 3/3 3/4 3/6	q 礫
		Hue 5YR	3/2 3/3 3/4 3/6	r 砂礫
12	極暗赤褐色	Hue 2.5YR	2/2 2/3 2/4	s 石英
		Hue 5YR	2/3 2/4	t 長石
13	黄褐色	Hue 10YR	5/6 5/8	u 灰
14	にぶい黄褐色	Hue 10YR	5/3 5/4 4/3	
15	灰黄褐色	Hue 10YR	6/2 5/2 4/2	
16	明褐灰色	Hue 7.5YR	7/1 7/2	
17	にぶい黄橙色	Hue 10YR	3/2 7/3 7/4 6/3 6/4	
18	赤黒色	Hue 2.5YR	2/1 1.7/1	
19	黒色	Hue 7.5YR	2/1 1.7/1	
		Hue 10YR	2/1 1.7/1	

4　遺構実測図の作成方法と掲載方法

本書における遺構実測図の作成方法は，次のとおりである。



（住居跡）　（土坑）　（方形周溝）

○　各遺構は，原則として縮尺20分の１の原図を，カマドは10分の１の原図をそれぞれトレースして版組し，それをさらに３分の１に縮小して掲載した。

○　方形周溝状遺構は，縮尺20分の１の原図を２分の１に縮小し，トレースして版組し，それを３分の１に縮小して掲載した。

○　掘立柱建築跡の一部及びピット群は，縮尺20分の１の原図を５分の１に縮小し，トレース

して版組し，掲載した。

5　表の見方について

住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主軸方向	平面形	規模		壁面	床面	カマド	柱穴数	覆土	出土遺物	備考
				長軸×短軸(m)	深さ(cm)							

○　住居跡番号は，発掘調査の過程で付した番号をそのまま付した。

○　位置は，小調査区名で表示し，他の調査区にまたがる場合は，遺構の占める面積の割合の大きい小調査区名で表示した。

○　主（長）軸方向は，磁北をN－0°とし，東（E）･西（W）に何度傾いているかを記した。

○　平面形は，掘り込み上端面の形状を記した。

○　壁面は，床面からの立ち上がり角度が81°～90°を垂直，80°以下を外傾とした。

○　床面は，平坦・凹凸・緩い起伏・傾斜に分類した。

○　覆土は，自然堆積をN，人為的堆積をAと表示した。

○　出土遺物は，主な遺物名を記した。

○　備考は，住居跡の重複関係と出土した土器片の数を記した。

土坑一覧表

番号	位置	長径(軸)方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					

○　番号・位置・長径方向については，住居跡一覧表の項目に準じた。

○　平面形の円形・楕円形の分類については，基本的に長径と短径との差が長径の10％未満を円形，10％以上を楕円形とした。

○　深さは，遺構確認面から坑底の最深部までの計測値を表示した。

○　壁面は，70°以上の立ち上がりを垂直，それ以下を緩斜とした。

○　底面は，平坦・凹凸・皿状・傾斜・段状の５種に分類して記した。

○　覆土は，堆積状況の分るものについては，自然堆積をN，人為堆積をA，撹乱をKとした。

○　出土遺物は，主な出土遺物と土器片の点数を記した。

○　備考は，特記事項及び重複遺構名を記した。

第2節　遺物の記載方法

1　遺物実測図の作成方法と掲載方法

○　土器の実測図は，中心線左側に外面，右側に内面と断面を記した。

○　土器拓影図は，右側に断面を図示した。表裏二面を掲載した場合は，断面を中央に配し，外面を左側，内面を右側とした。

○　遺物は，原寸トレースしたものを3分の1に縮小して掲載した。しかし，種類や大きさにより，それ以外の縮尺も使用した。

2　表の見方について

出土土器観察表

図版番号	器　　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考

○　番号は，図版中の番号である。

○　法量は，A－口径，B－器高，C－底径，D高台径，E－高台高，F－つまみ径，G－つまみ高とし，単位はcmである。なお，A・C～Dの（　）は推定値であり，Bの（　）は残存高である。

○　胎土・色調・焼成の欄は，上から胎度・色調・焼成の順で記した。色調については，土層分類時に使用した土色帳を使用した。焼成については，良好・普通・不良に分類し，硬く焼き締まっているものは良好，焼きがあまく器面が剥落しやすいものは不良とし，その中間のものを普通とした。

○　備考は，残存率及び実測番号を記した。

土製品一覧表

図版番号	名　　称	出土地点	台帳番号	長さ×幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)	備　　考

石製品一覧表

図版番号	名　　称	出土地点	台帳番号	大きさ(cm) 長さ×幅×厚さ	孔径(cm)	重量(g)	石　質	備　　考

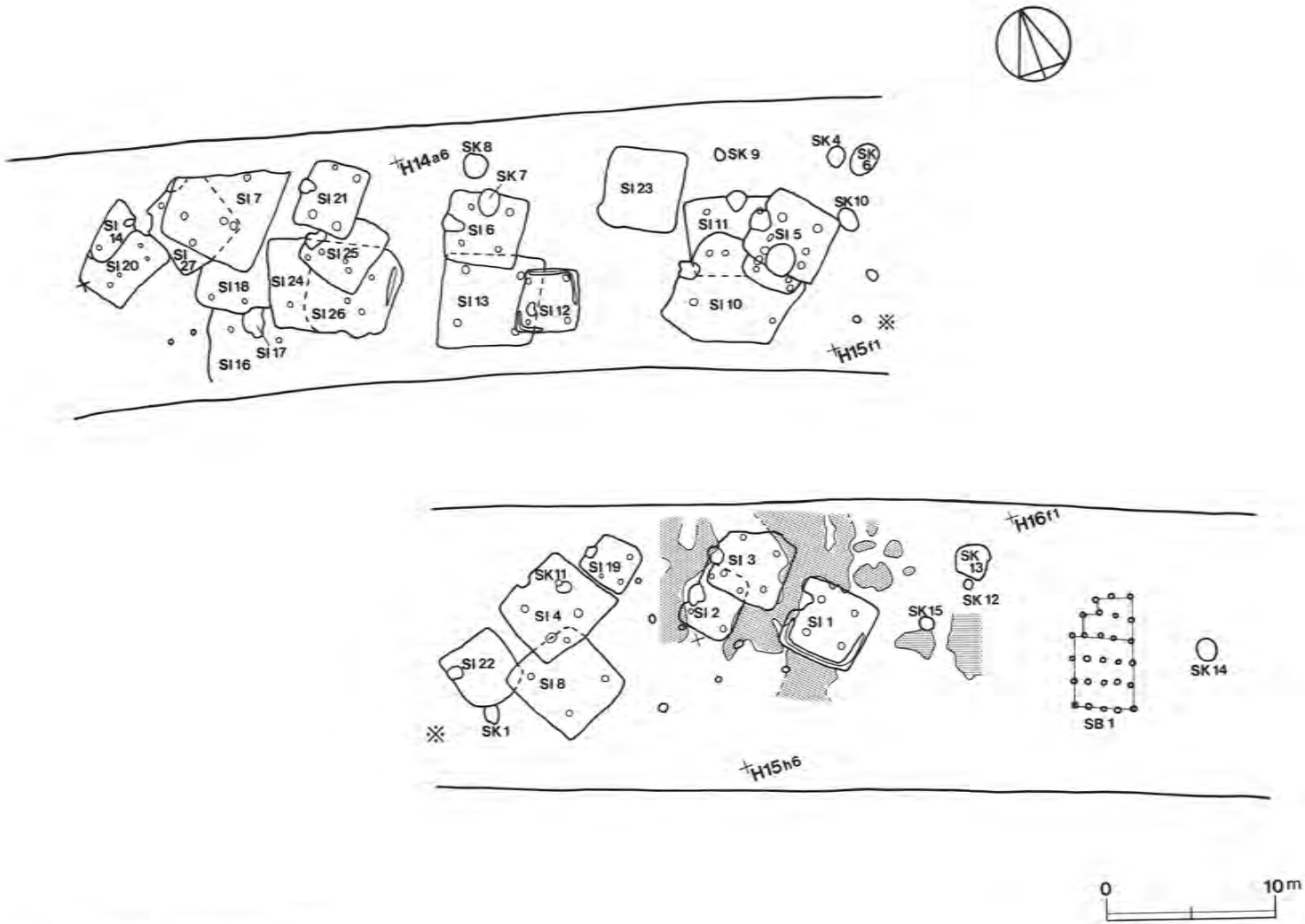
○　図版番号は，実測図中の番号である。

○　名称は，遺物の種類名を表示した。

○　台帳番号は，遺物の個別番号である。

○　長さ・幅・厚さは，それぞれ最大長・最大幅・最大厚の計測値である。

○　備考の欄は，遺物の特記すべき内容及び残存率を記した。


H14a6
SK8
SK7
SI 7
SI 21
SI 14
SI 20
SI 27
SI 18
SI 24
SI 25
SI 26
SI 16
SI 17
SI 6
SI 13
SI 12
SI 23
SK 9
SK 4
SK 6
SK10
SI 11
SI 5
SI 10
※
H15f1
H16f1
SK11
SI 19
SI 4
SI 22
SI 8
SK1
※
SI 3
SI 2
SI 1
SK 13
SK 12
SK15
SK 14
SB 1
H15h6
0
10m

第4図　尾島貝塚全体図

第5章　尾島貝塚

第1節　遺跡の概要

当遺跡は，茨城県稲敷郡桜川村大字浮島字尾島5678番地の40ほかに所在し，浮島の東端部，標高5mほどの砂洲上の台地に位置する。水田との比高は1.5mほどである。当遺跡の西側に農道を隔てて宮の脇遺跡が所在し，南側には尾島神社が祀られている。

今回の調査エリアは，尾島神社の北側，宮の脇遺跡と界する農道から東側へ長さ約240m，幅約14mで，調査面積は2,943m²である。遺構は，尾島神社の北側を中心に検出された。その内訳は次のとおりである。

竪穴住居跡　26軒　（古墳時代・奈良時代・平安時代）
土　坑　15基
掘立柱建築跡　1棟　（古墳時代）
祭祀跡　1地区（古墳時代）
屋外工房跡　1か所（古墳時代）

当遺跡からの出土遺物は，古墳時代中期から後期にかけての土師器を中心に，祭祀遺物といわれる土製鍬先形模造品，土製及び石製の剣形・鏡形模造品，手捏土器，璧などで，特に双孔円板は多量に出土している。

第2節　遺構と遺物

1　竪穴住居跡

第1号住居跡（第5図）

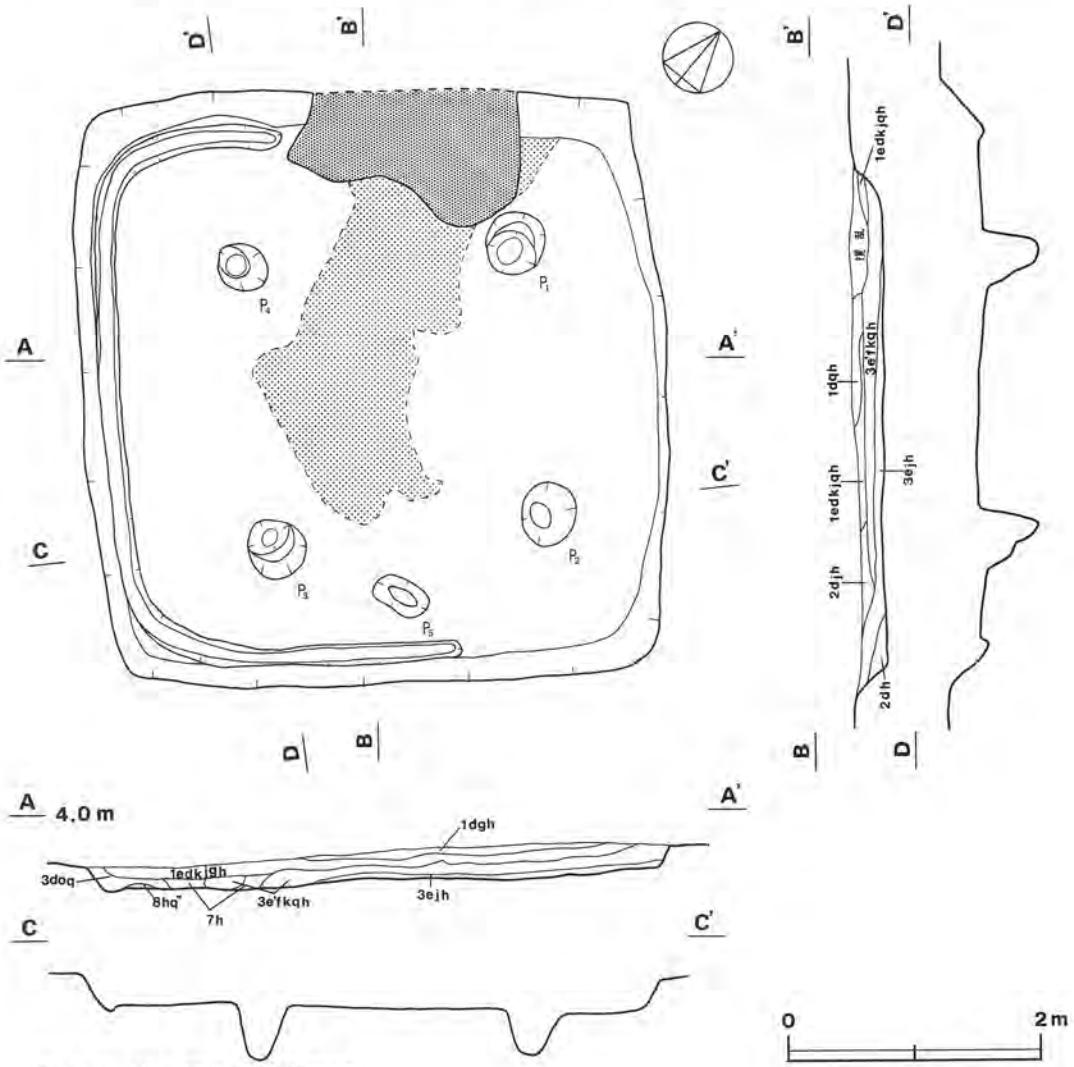
本跡は，遺跡のほぼ中央部H15f₇区を中心に確認されたもので，第3号住居跡の南東側約2mに位置し，祭祀遺物が投棄されたと思われる地点を掘り込んで存在している。プランの確認が比較的容易であった。

平面形は一辺4.7m前後の隅丸方形を呈し，主軸方向はN－45°－Wを指している。壁は南側だけが床面から20cm程地山であるが，他は黒褐色砂土で，硬度の強弱はない。壁高は25cmで，壁は緩やかに立ち上がっている。壁溝はカマド設定後設けており，カマドの西側部から南西壁下，そして南東壁下中央部まで住居跡の約半分にわたって周回している。上幅は15～20cm，深さは5cm前後である。床は黄褐色砂土で，中央部が酸化されて赤変している。カマド前方部に炭化物が多

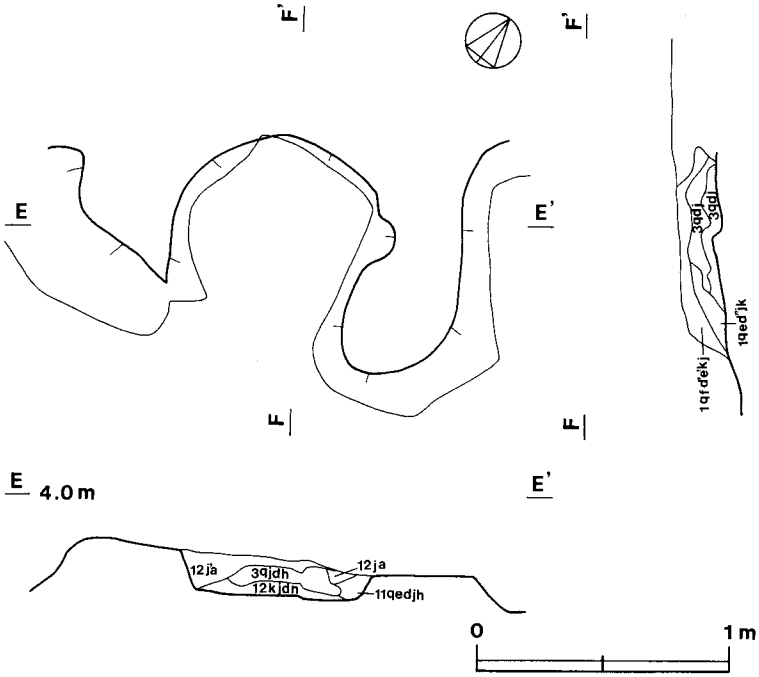
く検出された。床面はやや凸凹で，硬く締まっている。ピットは5か所検出され，主柱穴はP_1～P_4で，直径40～50cm，深さ37～45cm，断面はろ斗状を呈し，柱穴間は2.2mと等間隔で，規則的に配列されている。P_5はカマドの反対側に位置し，入口部に関する施設の一部と思われる。

カマドは北西壁のほぼ中央部から床面に向かって幅広く流出した状態で検出された。カマドの一部と思われる硬い土，焼土ブロック，遺物が撹乱状態で床面に流れ込んでいる。覆土上面からは認められなかったもので，本跡の廃絶後間もなく撹乱をうけて崩落したものと考えられる。燃焼部はわずかに皿状に掘り込み，粘質砂土で構築された袖部の先端が残存しているにすぎない。

覆土は自然堆積で，大半が上層に暗褐色土，下層に黒褐色土が堆積していて，いずれも砂粒を含んでいる。床面付近に炭化粒子や焼土粒子が散布していた。



第5図　第1号住居跡実測図

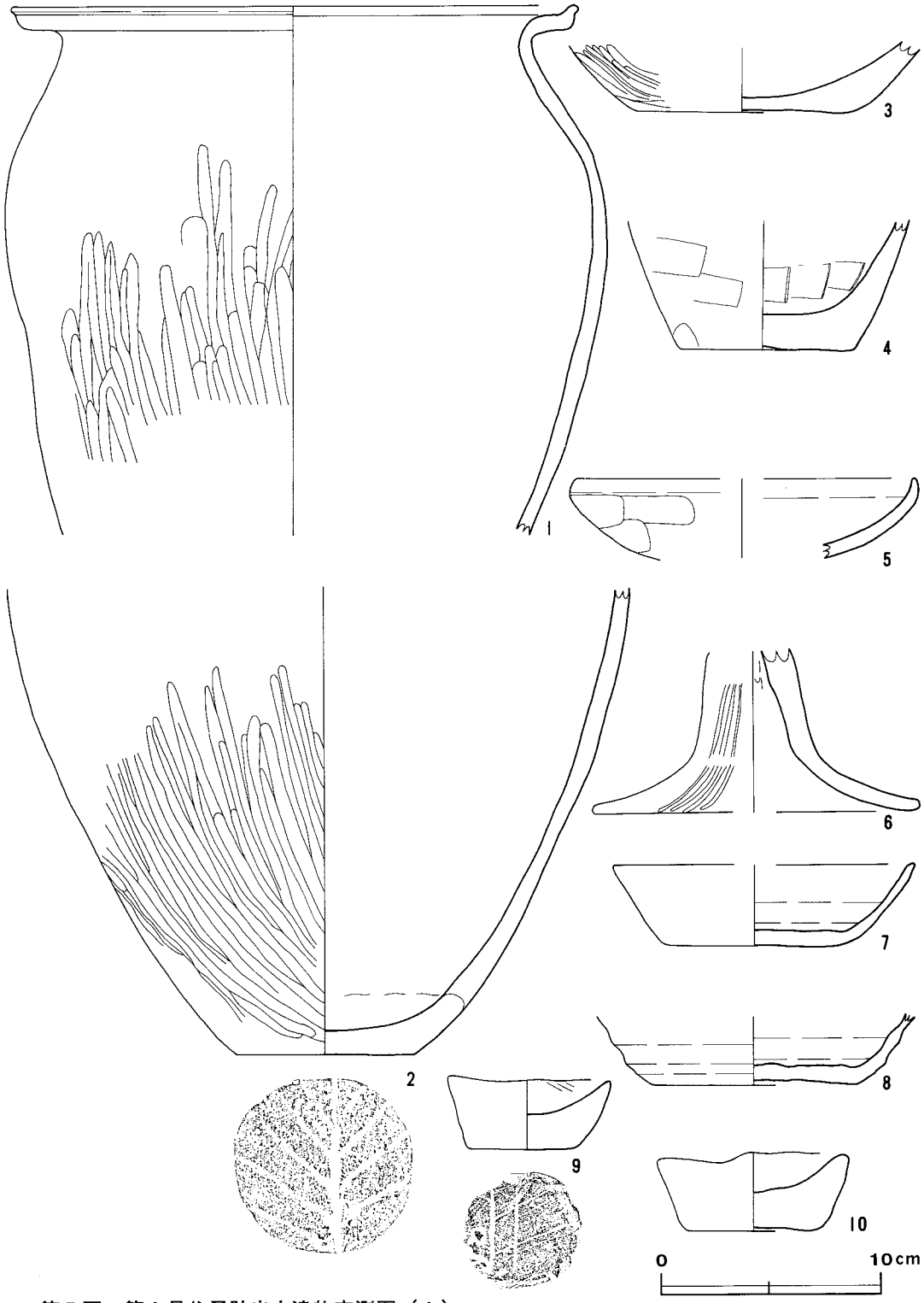


第6図　第1号住居跡カマド実測図

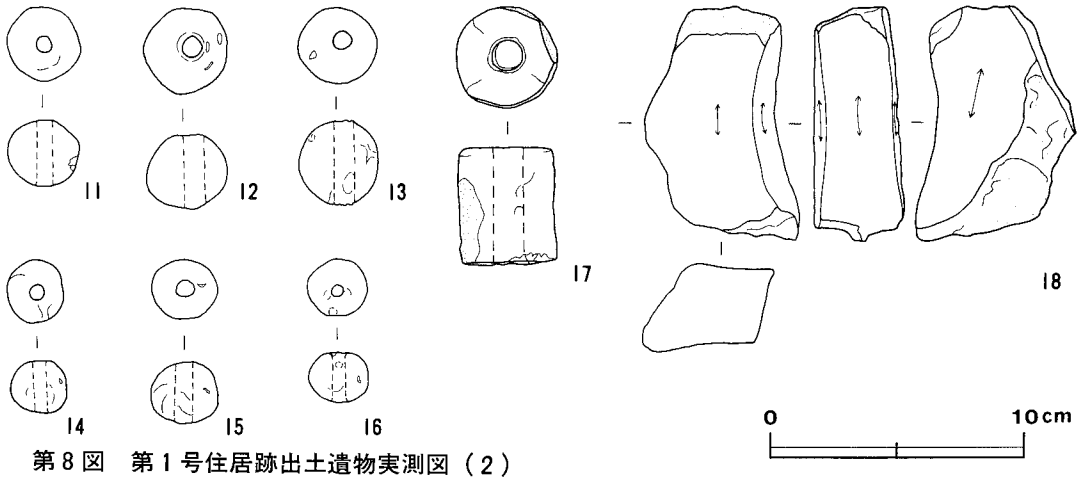
遺物は土師器片を主に，須恵器片，土製品，鉄製品などが散在して出土している。大半は土師器の甕形土器の破片で，器形を窺えるものとしては，土師器はP_4の周辺と南西壁際から半完形の甕形土器（第7図1・2），南コーナー部と南東際から完形の手捏土器（第7図9・10），高坏形土器の脚部（第7図6），西コーナー部から半完形の坏（第7図8）がいずれも覆土中から出土している。須恵器はカマドの南西袖部近くからほぼ完形の坏（第7図7）が，外に，土製品は球状土錘6点（第8図11～16）とP_4付近の覆土中から管状土錘（第8図17）が，石製品はP_3付近の覆土中から砥石（第8図18）が出土している。

第1号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第7図 1	甕形土器 土師器	A (26.2) B (24.7)	胴部は長胴を呈し，上位がやや張る。口縁部は大きく外反しながら開き，口縁端部は外上方につまみ出している。	口縁部内・外面－横ナデ。胴部外面－縦位のヘラナデ。	砂粒・雲母・長石 赤褐色 普通	55% P 1
2	甕形土器 土師器	B (21.7) C 8.1	底部は平底で，木葉痕が残る。胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	胴部外面中・下位－縦位のヘラナデ。	砂粒・砂礫・長石 にぶい橙色 不良	55% P 2 内面剥離
3	甕形土器 土師器	B (3.1) C 10.1	底部は平底で，胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	胴部外面下位－斜位のヘラナデ。	砂粒・長石・雲母 明赤褐色 普通	10% P10
4	甕形土器 土師器	B (6.0) C 7.9	底部は平底で厚く，胴部は直線的に外上方へ立ち上がる。	胴部外面－横位のヘラナデ，内面－横ナデ。	砂粒・礫 灰赤色 普通	20% P 9



第７図　第１号住居跡出土遺物実測図（１）



第８図　第１号住居跡出土遺物実測図（２）

第１号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第７図 5	坏形土器 土師器	A (15.7) B (3.7)	体部は内彎気味に大きく開いて立ち上がり，口縁部は短く内彎する。	口縁部内・外面－横ナデ。体部内・外面－横ナデ。	砂粒・スコリア 浅黄橙色 普通	20% P20
6	高坏形土器 土師器	B (7.5) D (15.0)	脚部は接合部からほぼ直線的に開き，脚裾は「ハ」の字状に大きく開く。	脚部外面－ヘラ磨き，内面－横ナデ。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	25% P19
7	坏 須恵器	A (13.8) B 3.8 C 7.5	底部は平底で，体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。	底部－回転ヘラ切り後，一方向へのヘラ削り。体部外面－下端ヘラ削り。	砂粒・雲母・長石 褐灰色 普通	70% P22
8	坏 須恵器	B (3.3) C 9.4	底部は平底で，体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。	底部－回転ヘラ切り，無調整，ロクロ回転方向は右。器面に水挽き痕が残る。	砂粒・細砂 黄灰色 普通	40% P23
9	手捏土器 土師器	A 7.6 B 3.5 C 5.0	底部は平底で，胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がり，そのまま口縁部に至る。	底部－木葉痕。胴部外面－凸凹であるがナデ，内面－ナデ。	砂粒 明褐灰色 普通	90% P17
10	手捏土器 土師器	A 18.7 B 3.7 C 6.1	底部は平底で，胴部は直線的に外上方へ立ち上がり，そのまま口縁部に至る。	底部－板目痕。胴部内・外面－ナデ。	砂粒 黒褐色 普通	100% P18

第１号住居跡出土土器土製品一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	大きさ(cm) たて×よこ	孔径(cm)	重量(g)	備　考
第８図 11	球状土錘	DP1	2.6×3.0	0.6	23.0	
12	〃	DP2	3.0×3.4	0.9	31.0	
13	〃	DP3	3.3×3.0	0.8	28.7	
14	〃	DP4	2.1×2.4	0.5	11.2	
15	〃	DP5	2.5×2.6	0.7	14.5	
16	〃	DP6	2.0×2.4	0.5	10.7	

図版番号	名　称	台帳番号	大きさ(cm) たて×よこ	孔径（cm）	重量（g）	備　考
第8図 17	管状土錘	DP407	4.8×4.0	1.2	(93.6)	一部欠損

第1号住居跡 出土石製品一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	大きさ(cm) 長さ×幅×厚さ	孔径(cm)	重量(g)	石　質	備　考
第8図 18	砥　石	Q1	(9.3)×(6.2)×(3.6)	—	(222.0)	凝灰岩	一部残存

第2号住居跡（第9図）

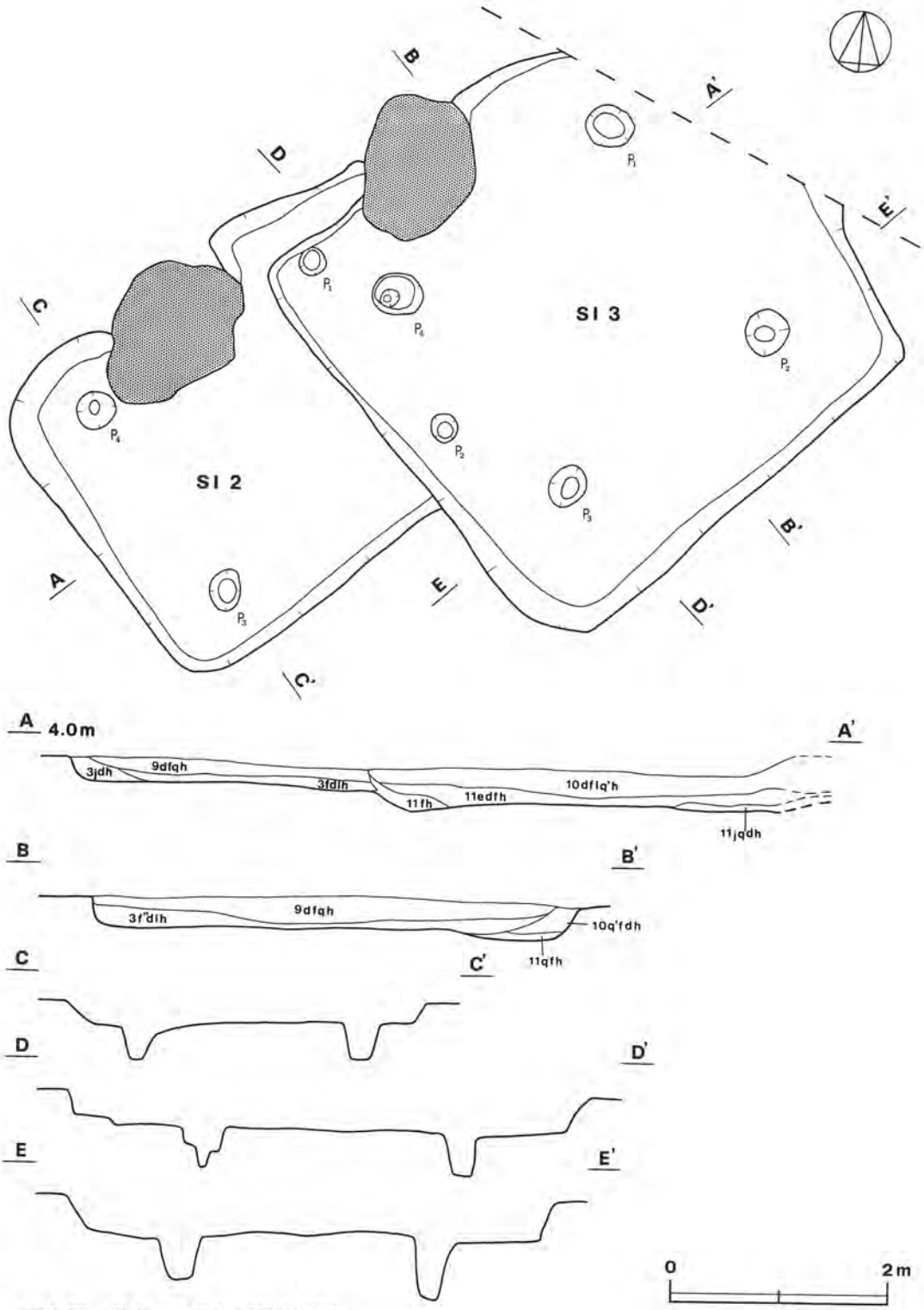
本跡は，遺跡のほぼ中央部H15e$_6$区を中心に確認され，北東側は第3号住居跡と重複している。新旧関係は土層から判断すると，第3号住居跡が本跡を切り込んでいることが認められる。

平面形は長軸（北東－南西）4.1m，短軸（北西－南東）3.3mの隅丸方形を呈し，主軸方向はN－40°－Wを指している。壁は北東壁が重複のため消失しているが，他は壁高20cmで，壁は緩やかに立ち上がっている。床は炭化粒子や砂粒が多量に付着し，硬く締まり，カマドの前方部から住居跡中央部にかけては特に硬い。北側に向かってやや傾斜している。ピットはP$_1$とP$_2$が第3号住居跡床面から，P$_3$とP$_4$が本跡床面から検出され，いずれも本跡に伴う主柱穴で，直径26～36cm，深さ30～37cm，断面は円筒形を呈している。P$_1$とP$_2$，P$_3$とP$_4$の間は2m，P$_1$とP$_4$，P$_2$とP$_3$の間は2.5mで，4か所を結ぶと平面形と同じ長方形になる。

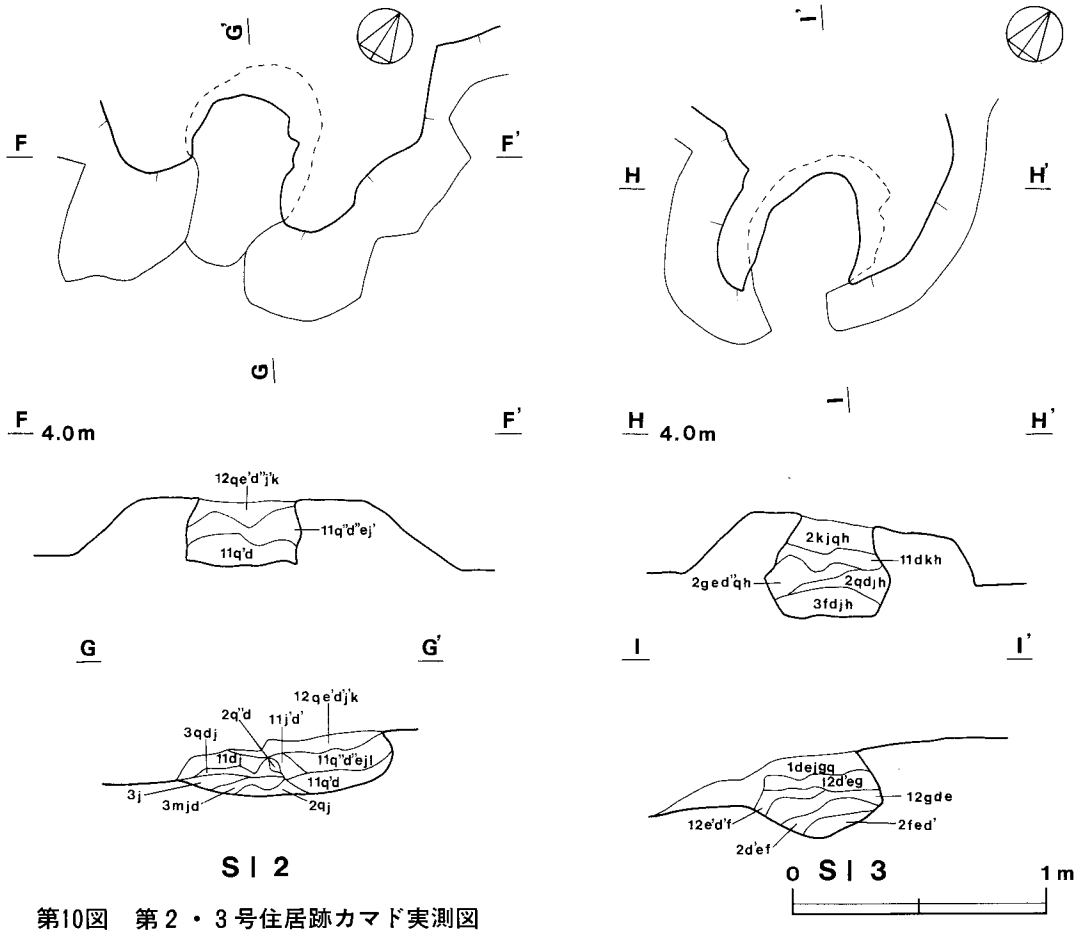
カマドは北西壁のほぼ中央部に検出されたが遺存状態は不良で，規模等不明である。床面と燃焼部は同レベルで，皿状の掘り込みは認められない。残存する袖部は小礫を含む粘質砂土で構築されている。カマド内には焼土粒子・焼土小ブロック・粘土粒子を含む極暗赤褐色土と，小礫・焼土粒子を含む暗赤褐色土が主に堆積している。

覆土は自然堆積で，上層に明赤褐色土，下層に黒褐色土が主に堆積していて，いずれも砂粒と少量の焼土粒子を含んでいる。

遺物は土師器片を主に，須恵器片，土製品，石製品がカマド周辺部と中央部から集中して出土している。土師器はカマドの周辺から甕形土器の口縁部（第11図1），壺形土器の口頸部（第11図2），半完形の手捏土器（第11図8），3号住居跡との重複部からほぼ完形の手捏土器（第11図7）須恵器は北コーナー部の床面から半完形の坏（第11図5・6），土製品は球状土錘6点（第11図9～14），石製品は西側から砥石（第11図19），カマド袖部近くから有孔円板（第11図16），カマド及び南側から剣形模造品（Q246・247）が検出されている。これらのほとんどは覆土中からの出土である。



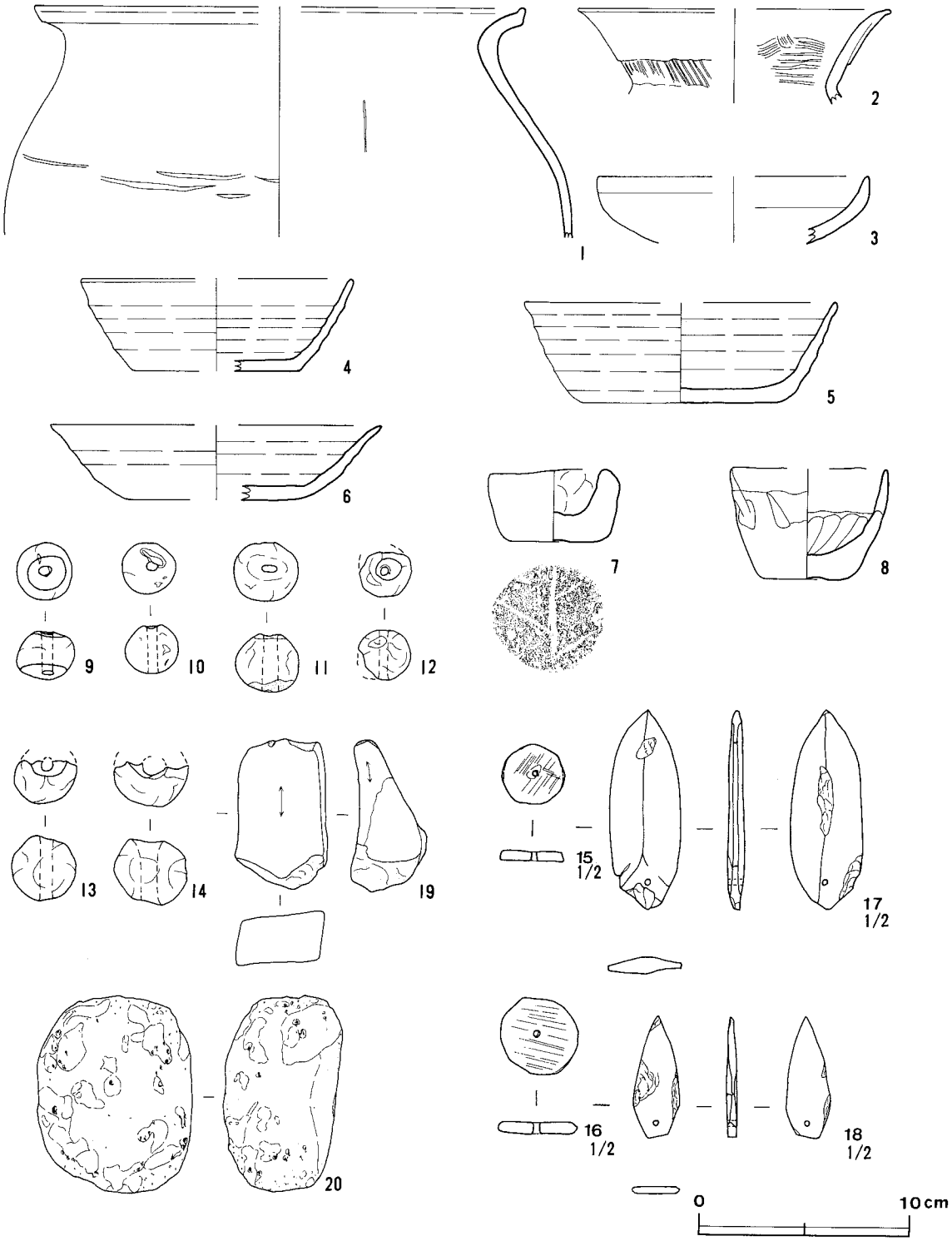
第9図　第2・3号住居跡実測図



第10図　第２・３号住居跡カマド実測図

第２号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第11図 1	甕形土器 土師器	A (23.2) B (11.0)	胴部は丸く張り，口縁部は大きく外反しながら開き，口縁端部は外上方につまみ出している。	口縁部内・外面－横ナデ。胴部内・外面－横ナデ。	砂粒・雲母・長石 石英・スコリア にぶい赤褐色 普通	10% P27
2	壺形土器 土師器	A (14.7) B (4.5)	口縁部は頸部から外反気味に大きく開く複合口縁である。	口縁部は斜位の刷毛目整形後に折り返し口縁とし，外面－横ナデ,内面－刷毛目整形。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	10% P33
3	坏形土器 土師器	A (13.0) B (3.2)	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は内彎する。	口縁部内・外面－横ナデ。体部外面－ナデ，体部内面－横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	10% P35
4	坏 須恵器	A (14.0) B 4.4 C (7.8)	底部は平底で，体部は外傾して立ち上がり，口縁端部を丸くおさめている。	底部－回転ヘラ切り，一方向へのヘラ削り調整。底部と体部の境界に明瞭な角度をもつ。	砂粒・長石 褐灰色 普通	10% P40



第11図　第２号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第11図 5	坏 須恵器	A (14.8) B 4.7 C 9.2	底部は平底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がり，口縁端部は丸くおさめている。	底部－回転ヘラ切り，ヘラ削り調整。体部－水挽き痕。	砂粒・礫・長石・雲母 褐灰色 普通	40% P38
6	坏 須恵器	A (15.7) B 3.6 C (8.0)	底部は平底で，体部は直線的に外上方に立ち上がり，口縁部はやや外反し，端部は丸い。	底部－回転ヘラ切り，ナデ調整。体部－水挽き痕。	砂粒・細砂・長石 灰色 普通	10% P39
7	手捏土器 土師器	A 5.8 B 3.5 C 4.2	底部は平底で，胴部は底部から直線的に外上方に立ち上がる。	底部－木葉痕が残る。胴部外面－ナデ，内面－指圧痕。	砂粒・礫・雲母 にぶい橙色 普通	70% P37
8	手捏土器 土師器	A (7.0) B 5.3 C 4.6	底部は平底で，胴部は底部から内彎気味に外上方へ立ち上がり，口縁端部は内彎する。	胴部内・外面－指頭によるナデ。	砂粒・スコリア 淡赤橙色 普通	65% P36

第2号住居跡出土土製品一覧表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ(cm) たて×よこ	孔径(cm)	重量(g)	備考
第11図 9	球状土錘	DP7	2.3×2.7	0.6	15.3	
10	〃	DP8	(2.3)×2.5	0.5	(12.1)	一部欠損
11	〃	DP9	(2.8)×3.0	0.7	(23.3)	〃
12	〃	DP10	2.4×(2.5)	0.4	(10.2)	半分欠損
13	〃	DP11	3.2×(3.0)	0.6	(16.5)	〃
14	〃	DP12	3.2×(3.5)	1.3	(18.8)	〃

第2号住居跡出土石製品一覧表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ(cm) 長さ×幅×厚さ	孔径(cm)	重量(g)	石質	備考
第11図 15	有孔円板	Q18	1.9×2.0×0.3	0.2	2.1	滑石	単孔
16	〃	Q60	2.3×2.5×0.4	0.2	2.5	〃	〃
17	剣形模造品	Q246	6.3×2.2×0.5	0.15	10.7	〃	
18	〃	Q247	3.8×1.4×0.3	0.12	2.4	〃	
19	砥石	Q 2	(7.2)×(4.4)×(3.7)	—	(121.0)	凝灰炭	一部残存
20	浮石	Q296	9.4×7.4×5.6	—	84.3	軽石	

第3号住居跡（第9図）

本跡は，H15e$_7$区を中心に確認され，南西側は第2号住居跡を掘り込み，北東側は調査区域外となっている。祭祀遺物の散乱する地点付近に位置し，祭祀跡より新しい遺構である。

平面形は一辺4.5mの隅丸方形を呈し，主軸方向はN－43°－Wを指している。壁高は30cmで，壁はほぼ垂直に立ち上がっている。床面は不明で，遺物等を含まない面を床面としたが，中央部と西側部に硬く締まっている面も検出した。第2号住居跡の床面を約10cm掘り込んでいる。なお，覆土中層に炭化粒子を多量に含む硬い面を確認したが床面ではなく，それ以下にも炭化粒子と遺

物が遺存していたことから，本跡の廃絶後埋没した時点で，何らかの使用が図られたものと考えられる。ピットは4か所検出され，いずれも主柱穴で，直径40cm前後，深さはP_1が18cmと浅く，他は40～58cmと深い。P_4は段状の掘り込みを有している。柱穴間は2.4mと等間隔で，規則的に配列されている。

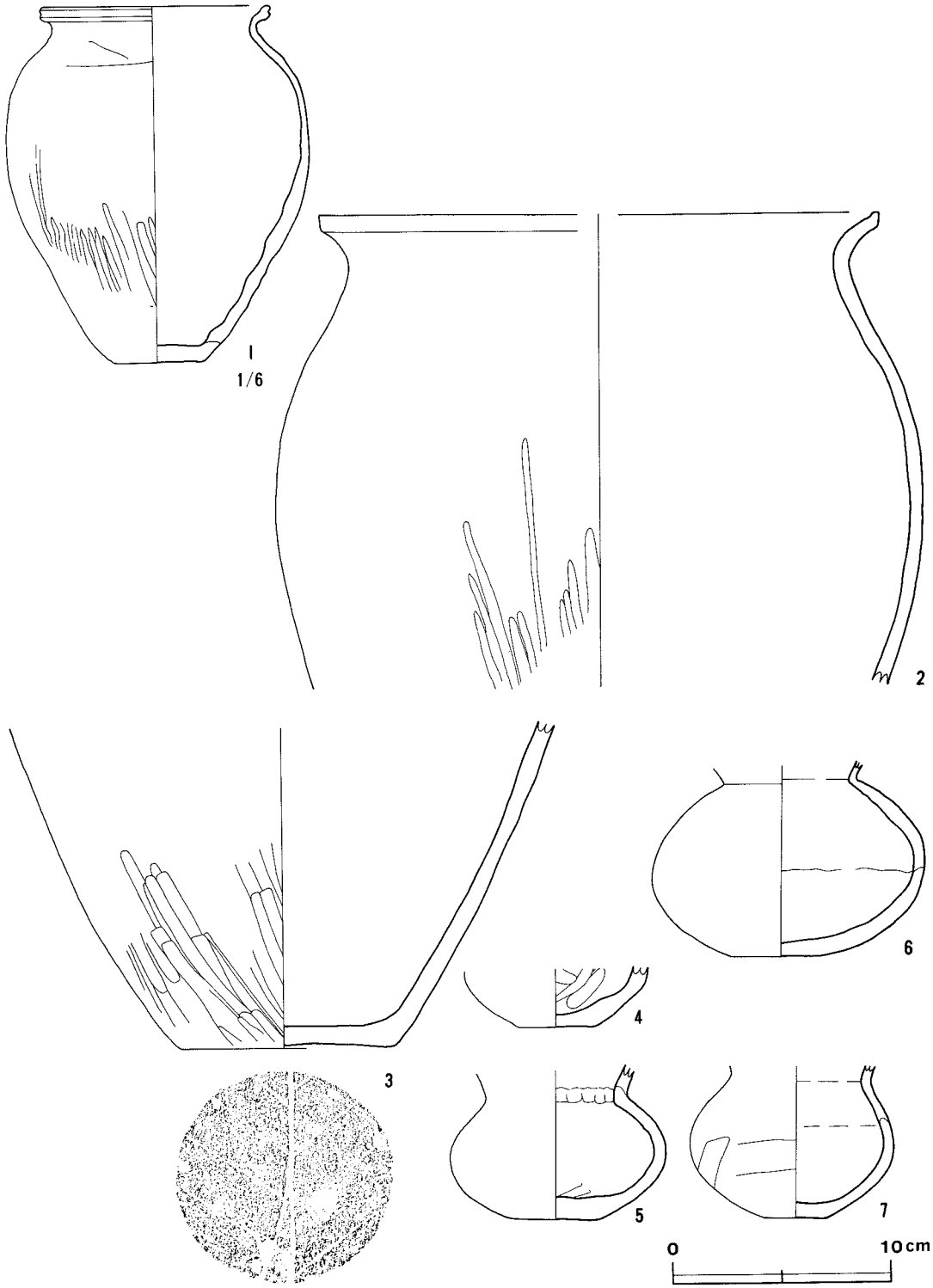
カマドは北西壁中央部からやや西コーナー部寄りに検出されたが，遺存状態は不良である。燃焼部は長径70cm，短径50cmの楕円形を呈し，床面を15cm程鉢状に掘り込んでいる。残存する袖部は小礫・砂粒を含む粘質砂土で構築されている。カマド内には焼土粒子・粘土粒子・砂粒を含む締まりのある暗褐色土，暗赤褐色土，黒褐色土が堆積している。

覆土は自然堆積で，上層に砂粒・小礫，少量の焼土粒子・炭化粒子を含むにぶい赤褐色土，下層と壁際に砂粒，極少量の炭化粒子・焼土小ブロックを含む暗赤褐色土が堆積している。

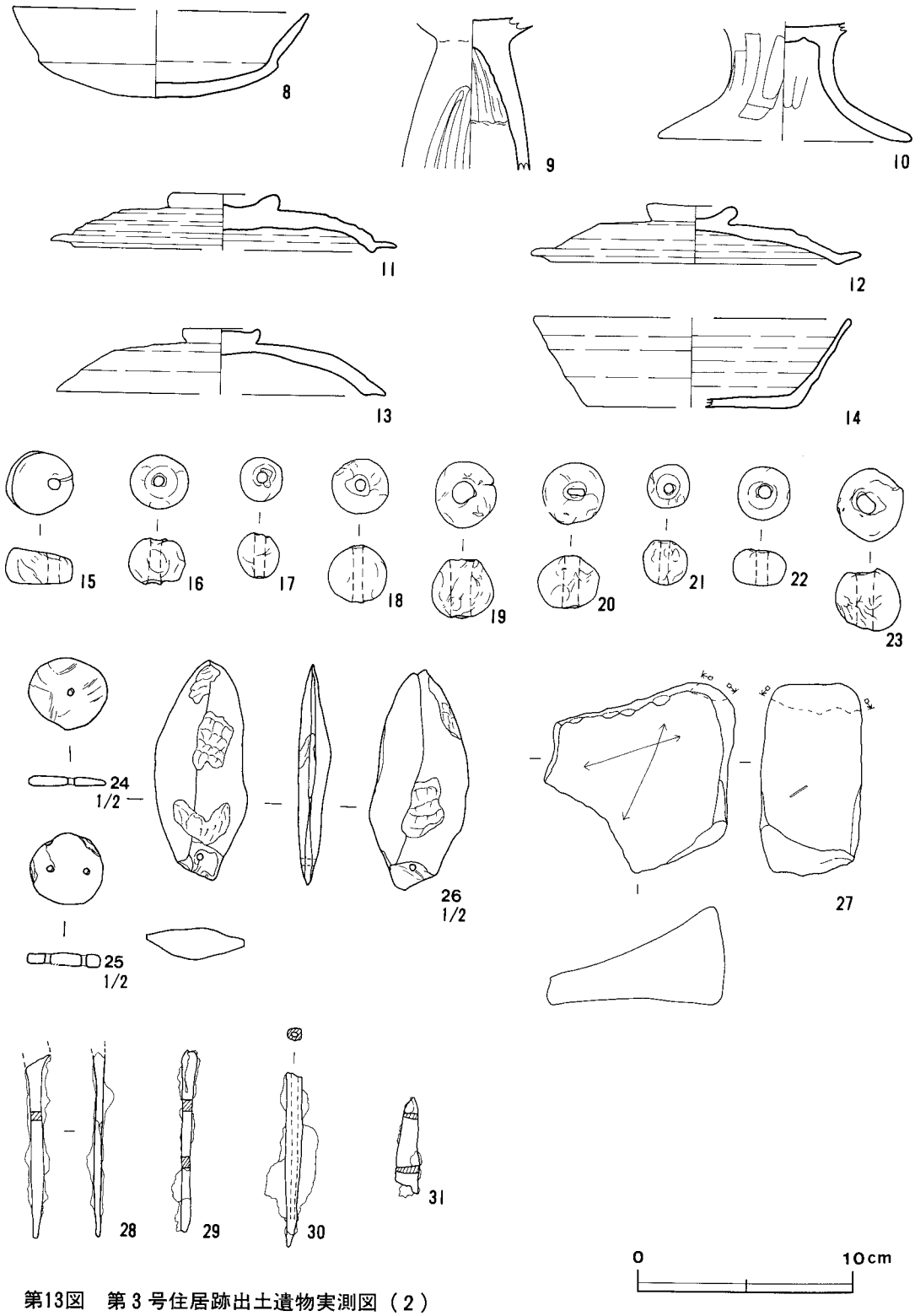
遺物は土師器片を主に，須恵器片，土製品，石製品，鉄製品が住居跡全域から出土している。土師器はカマド手前から甕形土器（第12図２）と小型壺形土器（第12図４），カマドの西側から半形の坩形土器（第12図６），中央部からやや北側の覆土中から坏形土器（第13図８），須恵器は西コーナー壁際の覆土中から坏（第13図14），ほぼ中央部の床面から半完形の蓋（第13図11），土製品は球状土錘８点（第13図16～23）と南西壁中央部寄りの覆土中から垂れ飾り（第13図15），石製品は双孔円板（第13図25）と剣形模造品（第13図26）がそれぞれ覆土中から出土している。

第３号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第12図 1	甕形土器 土師器	A 20.8 B 32.8 C 8.0	底部は平底で，胴部は内彎気味に外上方に立ち上がり，上位から内傾する。口縁部は大きく外反し，端部を上方へつまみ出し，外面に沈線が付されている。	口縁部内・外面－刷毛目。胴部－外面中・下位に縦位のヘラナデ。内面ヘラナデ。	砂粒・スコリア・長石・砂礫 にぶい褐色 不良	80% P41
2	甕形土器 土師器	A (25.7) B (21.9)	胴部は丸く張り，口縁部はくの字状に開く。口縁端部は上方につまみ出している。	口縁部内・外面。ヨコナデ。胴部－中位に斜位のヘラナデ。	砂粒・雲母・礫・石英 にぶい褐色 普通	30% P42
3	甕形土器 土師器	B (14.8) C 9.8	底部は平底で，胴部は直線的に外上方に開く。	底部－木葉痕。胴部－下位に斜位のヘラナデ。	砂粒・雲母・礫 にぶい赤褐色 普通	30% P46
4	小型壺形土器 土師器	B (2.7) C 3.5	底部は上げ底気味の平底で，胴部は内彎しながら外上方に立ち上がる。	胴部外面－横ナデ。内面－指ナデ。底部－ナデ。	砂粒 にぶい褐色 普通	20% P54
5	坩形土器 土師器	B (6.8) C 4.0	底部は平底で，胴部は中位に張りのある扁平な球形。口縁部は直線的に外傾するが上半分欠損している。	頸部外面－刷毛目，内面指頭によるナデ。胴部内・外面－ヘラナデ。底部－ナデ。	砂粒・スコリア・雲母 浅黄橙色 普通	70% P53



第12図　第３号住居跡出土遺物実測図（１）



第13図　第３号住居跡出土遺物実測図（２）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第12図 6	坩形土器 土師器	B (9.0) C 4.5	底部は平底で，胴部は中位が大きく張る扁平な球形。口縁部は欠損。	胴部外面－横ナデ，内面－ナデ。中位に輪積み痕。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	40% P51
7	坩形土器 土師器	B (7.0) C 2.5	底部は平底で，胴部は中位に張りのある扁平な球形をなす。口縁部は欠損している。	胴部外面－斜位のヘラ削り，内面－ナデ。中位に輪積み痕。	砂粒・スコリア・礫 にぶい橙色 普通	70% P52
第13図 8	坏形土器 土師器	A (13.8) B 4.0	底部は丸底で，体部は大きく内彎して開き，口縁部との境に稜をもつ。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面－横ナデ。体部内・外面－横ナデ。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	50% P55
9	高坏形土器 土師器	B (7.0)	台部欠損，脚部はややふくらみをもちながら開く。	脚部外面－縦位のヘラ磨き，内面－上位ヘラナデ。下位横ナデ。	砂粒・雲母・石英 にぶい橙色 普通	10% P57
10	器台形土器 土師器	B (5.2) D (11.9)	脚部は「ハ」の字状に大きく開いている。	脚部内面－ヘラ削り，外面－斜位のヘラナデ。	砂粒 橙色 普通	20% P56
11	蓋 須恵器	A (16.2) B 2.7 F 5.1 G 0.7	天井部中央に皿状のつまみがつく。天井部は平担な頂部からゆるやかに下降し，口縁部は水平に開く。	水挽き成形。右ロクロ。回転ヘラ削り。つまみは横ナデ。	砂粒・細砂・礫・雲母 灰色 良好	50% P61
12	蓋 須恵器	A 15.4 B 2.8 F 4.2 G 0.8	天井部中央に皿状のつまみがつく。天井部は平担な頂部から直線的に下降し，口縁部は水平に開く。	水挽き成形。右ロクロ。回転ヘラ削り。つまみは横ナデ。	砂粒・礫・細砂 灰色 良好	70% P60
13	蓋 須恵器	A (15.4) B 3.1 F 3.6 G 0.7	天井部中央に円盤状のつまみがつく。天井部は平担な頂部からゆるやかに下降し，口縁部は横につまみ出されている。	水挽き成形。右ロクロ。回転ヘラ削り。	砂粒・雲母・スコリア 灰色 普通	30% P62
14	坏 須恵器	A (14.9) B (4.3) C (9.8)	底部は平底で，体部は底部から直線的に外傾して立ち上がり，口縁部を丸くおさめている。	底部－回転ヘラ切り，一方向へのヘラ削り。	砂粒・細砂 灰色 良好	20% P58

第3号住居跡出土土製品一覧表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ(cm) たて×よこ	孔径 (cm)	重量 (g)	備考
第13図 15	土製装飾錘	DP494	1.8×3.1	0.6	15.3	
16	球状土錘	DP13	2.2×2.7	0.6	15.5	
17	〃	DP14	2.1×2.0	0.5	7.2	
18	〃	DP15	2.7×2.7	0.5	16.4	
19	〃	DP16	2.7×3.1	1.1	17.9	
20	〃	DP17	2.5×2.9	0.8	17.2	
21	〃	DP18	2.1×2.1	0.5	7.7	
22	〃	DP19	1.7×2.5	0.6	9.5	
23	〃	DP20	3.0×3.5	0.9	24.5	

第3号住居跡出土石製品一覧表

図版番品	名　称	台帳番号	大きさ(cm) 長さ×幅×厚さ	孔径(cm)	重量(g)	石　質	備　考
第13図 24	有孔円板	Q61	2.2×2.4×0.3	0.2	3.1	滑　石	単孔
25	〃	Q86	2.3×2.3×0.4	0.2	3.9	〃	双孔
26	剣形模造品	Q248	6.9×3.0×0.9	0.18	(18.4)	〃	一部欠損
27	石　皿	Q306	9.0×9.0×4.8	—	337.3	砂　岩	

第3号住居跡出土鉄製品一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	形態の特徴	備　考
第13図 28	鉄　鏃	M　1	(8.6)	0.5	0.4	茎。断面レンズ状。	
29	釘	M　2	(8.5)	0.45	0.3	断面方形。	
30	鉄　鏃	M　3	8.3	0.7	0.7	茎。銹著しい。	
31	刀　子	M　4	(4.6)	1.1	0.2	刀身。断面三角形。	

第4号住居跡（第14図）

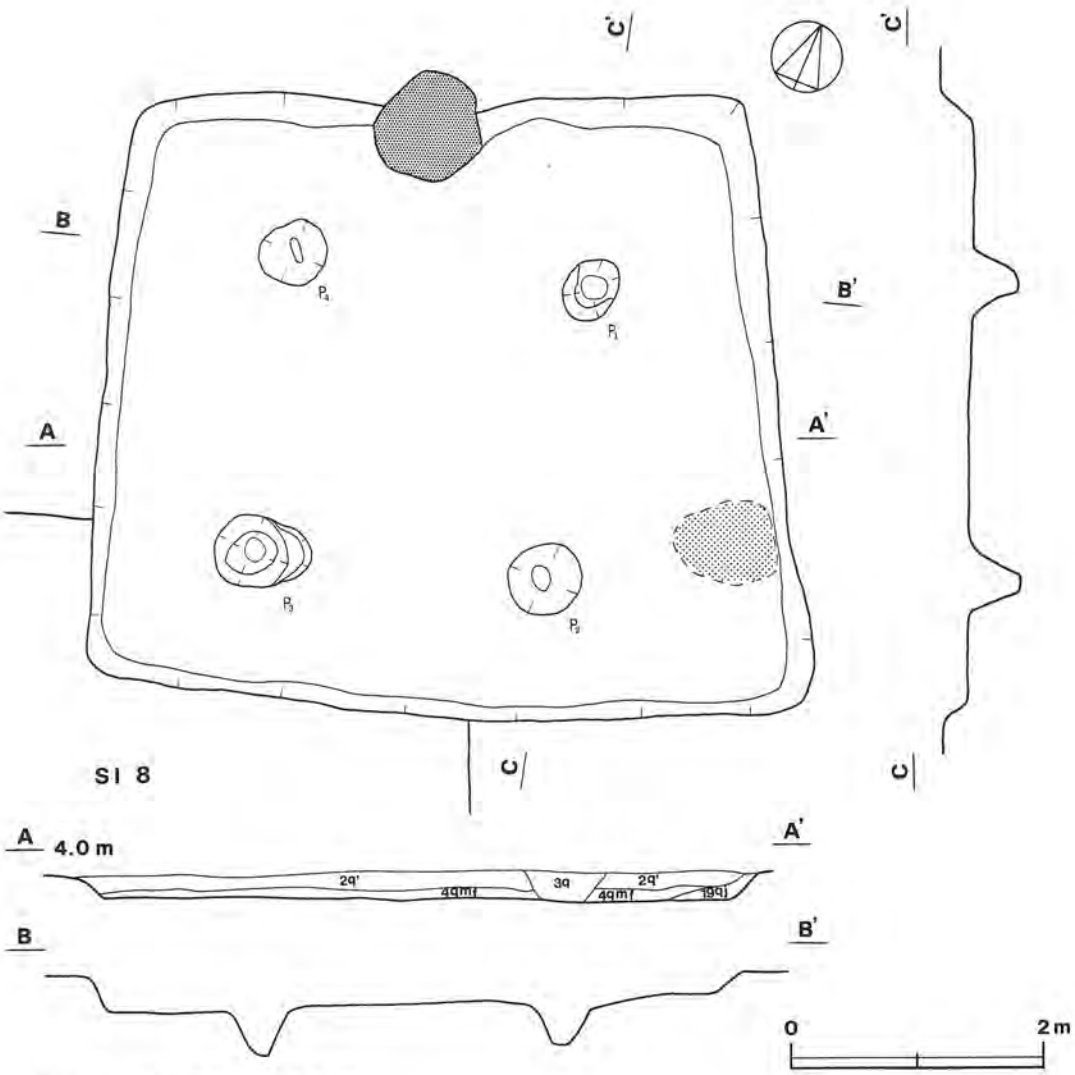
本跡は，H15d$_4$区を中心に確認され，第2号住居跡の西側10mに位置し，南コーナー部が第8号住居跡の北コーナー部と重複している。土層から判断すると，本跡が第8号住居跡を切り込んでいると思われる。

平面形は東壁4.9m，南壁5.8m，西壁4.5m，北壁4.8mの歪曲した隅丸方形状を呈する。主軸方向はN－22°－Wを指している。壁高は20～30cmで，壁は緩やかに立ち上がっている。床は黒褐色土混じりの黄褐色砂土で締まりがあり，ほぼ平坦である。東壁下中央部からやや南寄りに焼土の散布がみられる。ピットは4か所検出され，いずれも主柱穴で，直径50～60cm，深さ36～54cmで，P$_3$は掘り込み部を有する。柱穴間は2.4mと等間隔で，規則的に配列されている。

カマドは北壁中央部から床面に向かって流出したような状態で検出された。遺存状態は不良で，各部位や規模等不明である。

覆土は一部に撹乱がみられるが自然堆積で，上層に礫・酸化鉄小ブロック・砂粒を含む暗褐色土，下層に礫・炭化粒子・砂粒を含む極暗褐色土，壁際に黒褐色土が堆積している。

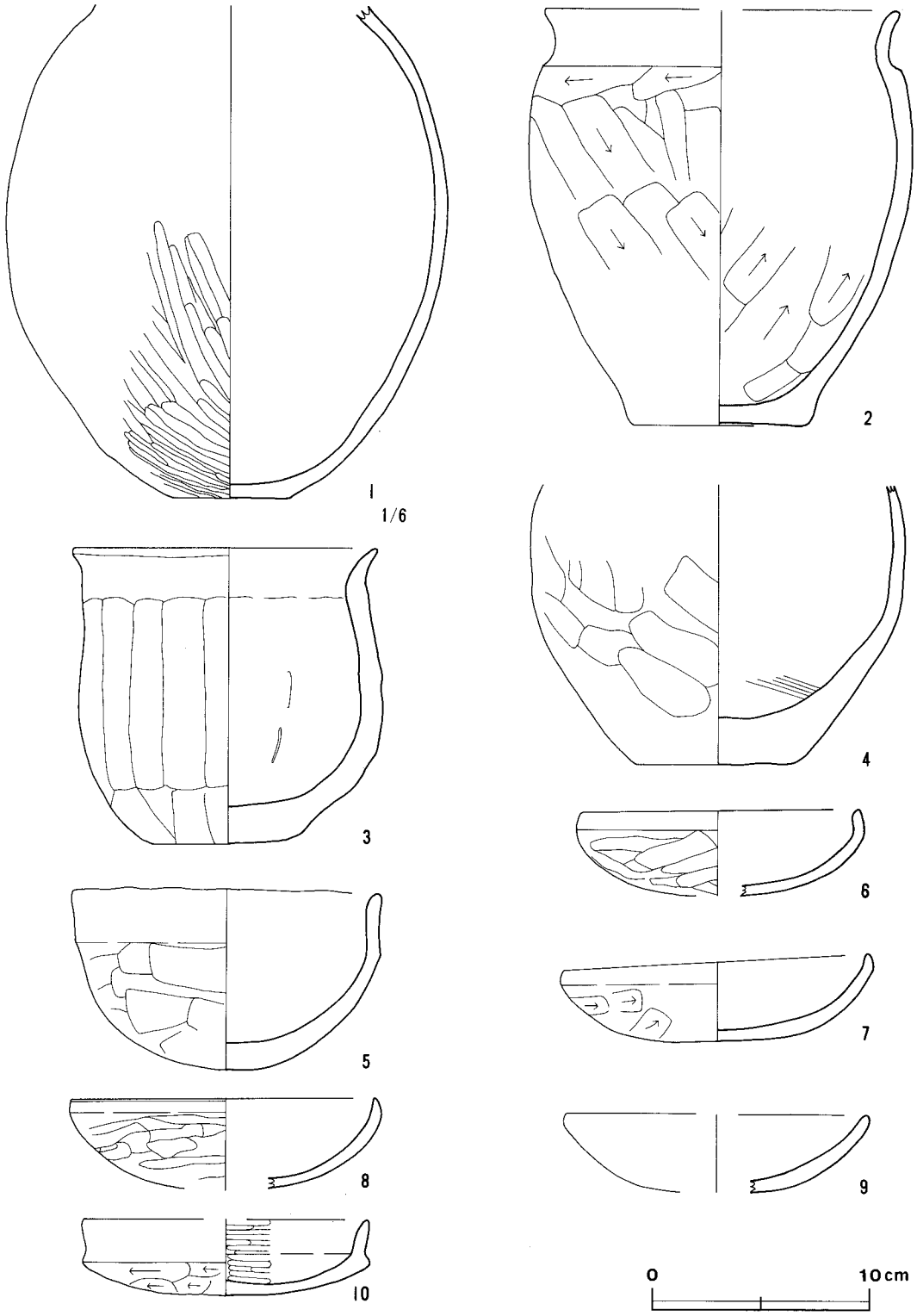
遺物は土師器片を主に，須恵器片，土製品，石製品がカマドの西前方部とP$_2$・P$_3$の周辺部から集中して出土している。土師器は，カマドの流出部から半完形の甕形土器（第15図1）と小型甕形土器（第15図3），P$_2$とP$_3$の周辺覆土中から出土した破片3点が接合した小型甕形土器（第15図2），カマドの東袖部の位置から完形の坏形土器（第15図7），P$_2$の北側1mの覆土中から底部に木葉痕を有する手捏土器（第16図13），土製品は球状土錘17点（第16図14～30），石製品はP$_3$の東側床面上10cmのところから砥石が2点（第16図33・34）と，南壁東コーナー寄りの床面上8cmのところから剣形模造品が2点（第16図31・32）検出されている。



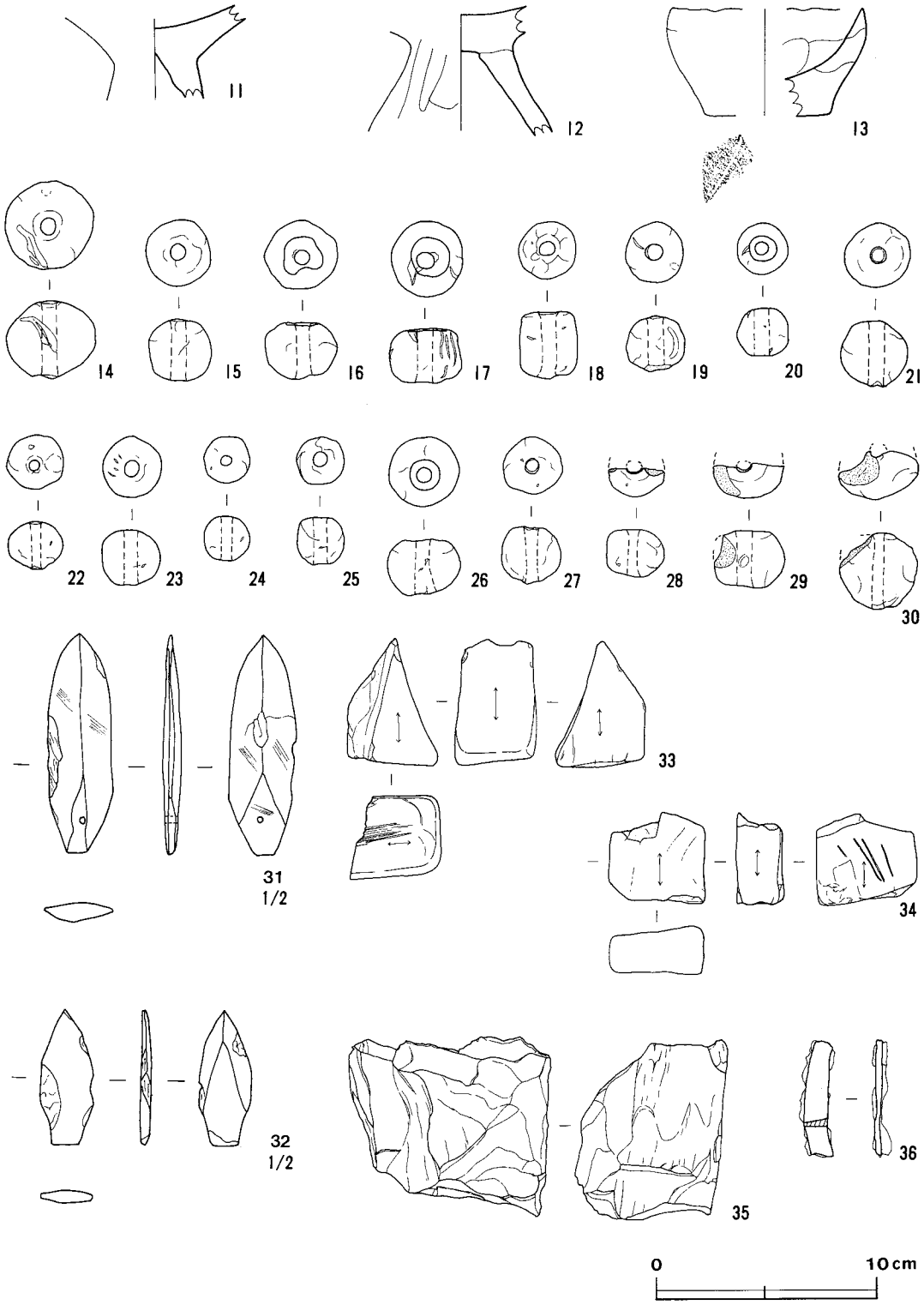
第14図　第４号住居跡実測図

第４号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第15図 1	甕形土器 土師器	B (32.1) C (7.6)	底部は平底で，胴部は中位に張りをもち，縦長の球形を呈している。口縁部は欠損。	胴部－外面中・下位に斜位のヘラナデ，内面ナデ。	砂粒・雲母・長石・スコリア 灰褐色 普通	45% P63
2	甕形土器 土師器	A (16.5) B 19.2 C (8.0)	底部は平底で，胴部は上位に張りをもち，口縁部は直立気味に外反し、胴部との境に稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ。胴部外面－ヘラ削り，内面上位－ナデ，内面下位－ヘラ削り。	砂粒・礫 暗赤褐色 普通	45% P65



第15図　第４号住居跡出土遺物実測図（１）



第16図　第４号住居跡出土遺物実測図（２）

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第15図 3	甕形土器 土師器	A 14.0 B 13.7 C 6.4	底部は平底で，胴部は内彎しながら外上方に立ち上がり，上位で垂直気味に内傾する。口縁部は垂直に立ち上がり，上位で外反し，端部を丸くおさめている。	口縁部内・外面－横ナデ。胴部外面－縦位のヘラ削り，内面－横ナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	60% P64
4	甕形土器 土師器	B (12.9) C 7.4	底部は平底で，胴部は中位に最大径をもつ。口縁部は欠損している。	胴部－中位から下位にかけて縦・斜位のヘラ削り，内面－横ナデ。	砂粒・スコリア にぶい赤褐色 普通	50% P66
5	椀形土器 土師器	A 14.2 B 8.3 C (－)	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は外反気味に直立する。	口縁部内・外面－横ナデ。体部－外面ヘラ削り，内面－横ナデ。	砂粒・スコリア・長石 橙色 普通	100% P69
6	坏形土器 土師器	A 13.2 B (4.0) C (－)	底部は丸底で，体部は内彎しながら外上方に大きく開き，口縁部は内傾する。	口縁部内・外面－横ナデ。体部－横位のヘラ削り。	砂粒・スコリア 暗赤灰色 普通	70% P83
7	坏形土器 土師器	A 14.1 B 3.7 C (－)	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開き，口縁部は内傾する。	口縁部内・外面－横ナデ。体部外面－ヘラ削り，内面－横ナデ。	砂粒・スコリア・長石 にぶい褐色 普通	100% P81
8	坏形土器 土師器	A 14.1 B (4.2) C (－)	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開き，口縁部は内傾する。	口縁部内・外面－横ナデ。体部外面－ヘラ削り，内面－横ナデ。	砂粒 灰黄褐色 普通	40% P82
9	坏形土器 土師器	A (14.2) B 3.6 C (－)	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁端部を丸くおさめている。	口縁部内・外面－横ナデ。体部外面－ヘラ削り，内面－ナデ。	砂粒・スコリア 黒褐色 普通	40% P84
10	坏形土器 土師器	A (13.3) B 3.5 C (－)	底部は丸底で，体部は内彎して大きく開き，口縁部との境に稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面－横ナデ。体部外面－ヘラ削り，内面－ナデ。	砂粒・スコリア にぶい赤褐色 普通	40% P85
第16図 11	高坏形土器 土師器	B (4.3)	坏部は直線的に外上方に開く。	坏部外面－ヘラナデ，内面－ナデ。	砂粒 にぶい赤橙色 普通	5% P80
12	高坏形土器 土師器	B (5.8)	坏部欠損。脚部は「ハ」の字状に開く。	脚部外面－縦位のヘラ削り，内面－ナデ。	砂粒 灰褐色 普通	10% P79
13	手捏土器 土師器	A (8.8) B 5.0 C (5.4)	底部は平底で，胴部は外反して外上方に立ち上がり，中位で内彎し口縁部に至る。口縁端部はうすく，丸くおさめている。	底部－木葉痕。胴部外面－輪積み痕。体部内面－ヘラ削り。	砂粒 にぶい褐色 普通	40% P78

第4号住居跡出土土製品一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	大きさ(cm) たて×よこ	孔径 (cm)	重量 (g)	備　考
第16図 14	球状土錘	DP21	3.6×4.1	0.7	54.6	
15	〃	DP22	2.9×3.1	0.7	25.0	
16	〃	DP23	2.6×3.4	0.7	28.5	

図版番号	名　　称	台帳番号	大きさ(cm) たて×よこ	孔径（cm）	重量（g）	備　考
第16図 17	球状土錘	DP24	2.6×3.5	0.8	32.3	
18	〃	DP25	3.1×2.7	0.7	21.8	
19	〃	DP26	2.6×2.8	0.7	18.1	
20	〃	DP27	2.3×2.4	0.7	12.0	
21	〃	DP28	3.0×3.0	0.7	24.8	
22	〃	DP29	2.2×2.6	0.5	11.4	
23	〃	DP30	(2.6)×2.8	0.7	(17.2)	一部欠損
24	〃	DP31	2.1×2.2	0.5	8.7	
25	〃	DP32	2.2×2.2	0.6	10.4	
26	〃	DP33	2.6×3.3	0.9	29.1	
27	〃	DP34	2.7×2.8	0.6	17.7	
28	〃	DP35	2.2×(2.6)	0.6	(7.3)	半分欠損
29	〃	DP36	(2.6)×(3.3)	0.7	(13.6)	〃
30	〃	DP37	(3.6)×(3.6)	0.6	(22.2)	一部残存

第4号住居跡出土石製品一覧表

図版番号	名　　称	台帳番号	大きさ(cm) 長さ×幅×厚さ	孔径(cm)	重量(g)	石　質	備　考
第16図 31	剣形模造品	Q249	6.7×2.1×0.6	0.2	(10.5)	滑　石	一部欠損
32	〃	Q250	4.1×1.7×0.4	—	(3.1)	〃	〃
33	砥　　石	Q 3	(5.9)×(3.8)×(4.2)	—	(91.5)	凝灰岩	一部残存
34	〃	Q 4	(4.2)×(4.5)×(2.3)	—	(56.9)	〃	〃
35	コ　　ア	Q289	8.4×9.2×7.0	—	597.1	滑　石	

第4号住居出土跡鉄製品一覧表

図版番号	名　　称	台帳番号	法量（cm） 長さ	幅	厚さ	形　態　の　特　徴	備　考
第16図 36	不　明	M　5	(5.3)	1.0	0.3	断面レンズ状。	

第5号住居跡（第17図）

本跡は，遺構群の中央部H15d₁区を中心に確認され，重複が激しく北西側は第11号住居跡，南西側は第10・15号住居跡，第5号土坑とそれぞれ重複している。切り合い関係は第11・15号住居跡を切り込み，第5号土坑に切り込まれている。第10号住居跡との新旧関係は不明である。

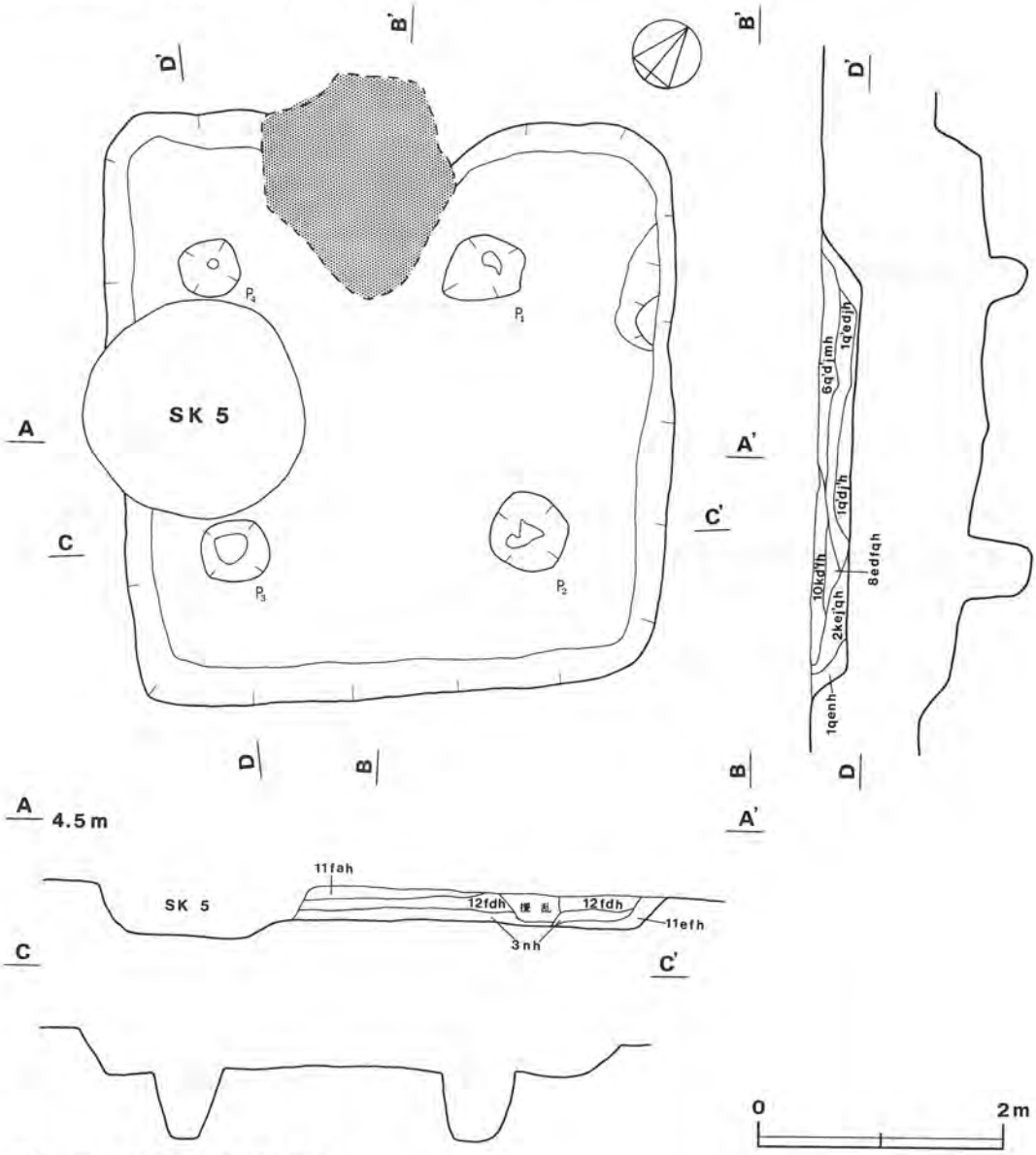
平面形は一辺4.7mほどの隅丸方形を呈し，主軸方向はN－40°－Wを指している。残存壁高は20～35cmで，壁は緩やかに立ち上がっている。北東壁の中央部からやや北寄りのところが段状をなしている。床は酸化した砂土ブロックが混じった黄褐色砂土で，ほぼ平坦である。中央部から東側部に炭化物が散布している。ピットは4か所検出され，いずれも主柱穴で，直径50～70cm，深さ40～57cmを測る。柱穴間は2.4mと等間隔で，規則的に配列されている。

カマドは北西壁のほぼ中央に若干残存するだけで，支脚がカマド中央部と思われるところに露

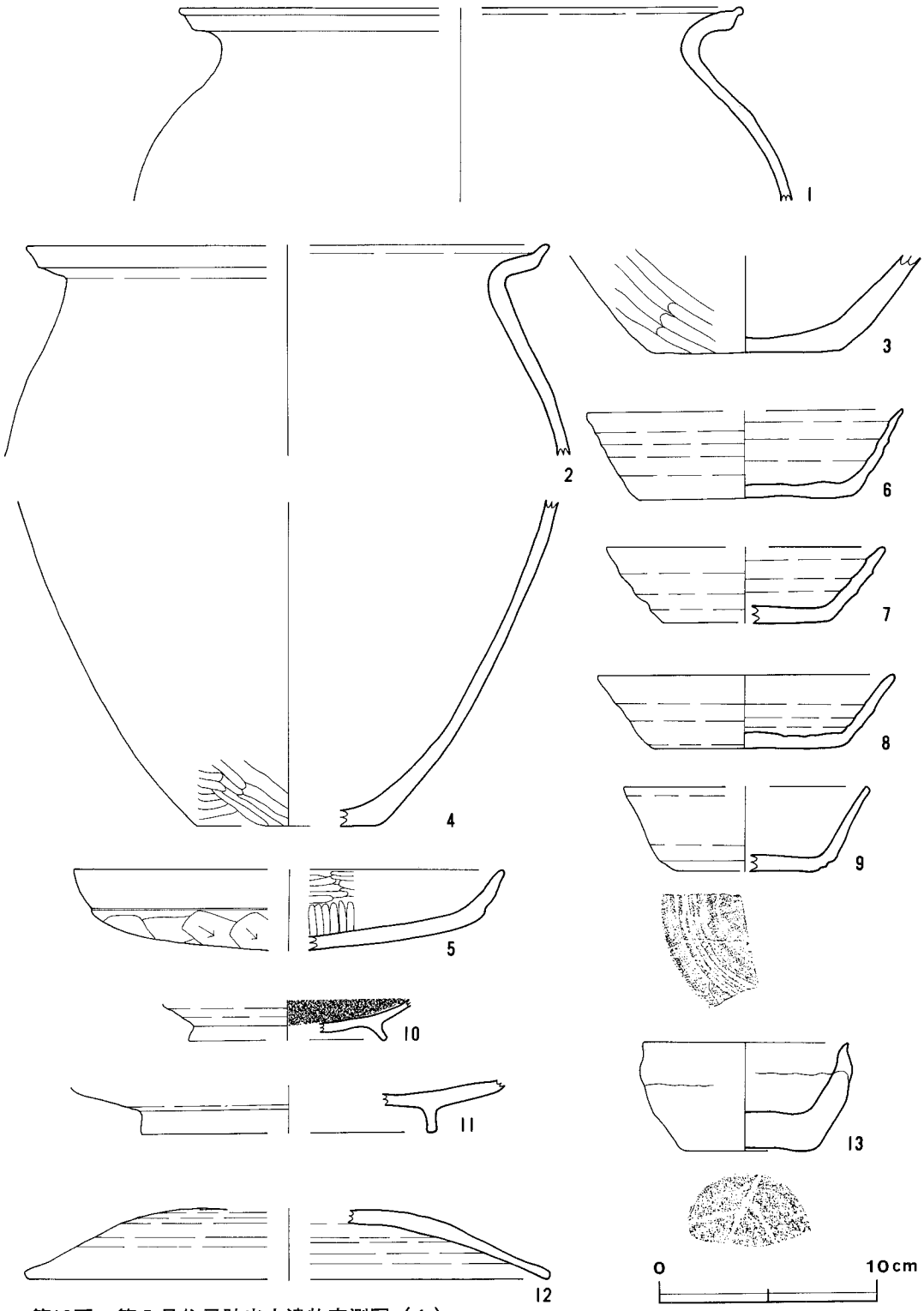
呈していた。

覆土は自然堆積で，砂粒・焼土粒子・焼土小ブロック・粘土小ブロックを含む締まりのある暗赤褐色土や暗褐色土が堆積している。

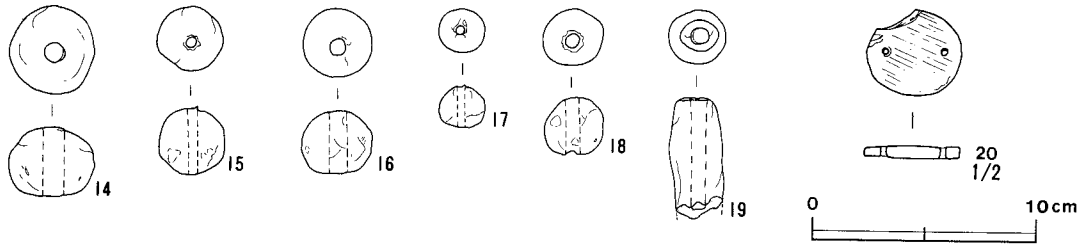
遺物は土師器片を主に，須恵器片，土製品，石製品が覆土中から出土している。器形の窺えるものは土師器では半完形の小型手捏土器(第18図13)，須恵器では坏4点(第18図6・7・8・9)，土製品では球状土錘5点(第19図14～18)と管状土錘（第19図19)，石製品ではカマド内から双孔円板（第19図20）が検出されている。



第17図　第5号住居跡実測図



第18図　第５号住居跡出土遺物実測図（１）



第19図　第５号住居跡出土遺物実測図（２）

第５号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第18図 1	甕形土器 土師器	A (25.8) B (9.0)	丸く張った胴部から口縁部は大きく外彎し，口縁部上位は垂直気味に立ち上がり，端部を外方につまみ出している。	口縁部内・外面ー横ナデ。	砂粒・長石・雲母・スコリア にぶい褐色 普通	10% P93
2	甕形土器 土師器	A (24.0) B (9.8)	胴部は丸く張り，口縁部は大きく外反して開き，上位は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面ー横ナデ。	砂粒・雲母・長石・スコリア・礫 にぶい褐色 不良	10% P95
3	甕形土器 土師器	B (4.5) C (8.6)	底部は平底で，胴部は直線的に外上方に立ち上がる。	胴部外面ー斜位のヘラ削り。	砂粒・礫 黒褐色 不良	20% P97
4	甕形土器 土師器	B (15.0) C (8.6)	底部は平底で，胴部は内彎気味に外上方に立ち上がる。	胴部外面ー下位に斜位のヘラ削り。	砂粒・長石・スコリア にぶい赤褐色 不良	10% P96
5	坏形土器 土師器	A (19.8) B (3.7) C (ー)	底部は丸底で，体部は大きく開いて立ち上がり，口縁部との境に稜をもつ。口縁部は外傾し，端部は丸い。	体部外面ーヘラ削り，内面ーヘラナデ。口縁部外面ーミガキ，内面ーヘラナデ。	砂粒・礫 明赤褐色 普通	25% P103
6	坏 須恵器	A (14.5) B 4.0 C (9.5)	底部は平底で，体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がり，口縁端部は丸い。	底部ー回転ヘラ切り後一方向へのヘラ削り。ロクロ回転方向は右。水挽き成形。	砂粒・細砂・礫・雲母 灰色 普通	30% P106
7	坏 須恵器	A (13.0) B 3.5 C (7.6)	底部は平底で，体部は底部との境に明瞭な角度をもって外上方に直線的に立ち上がり，口縁端部は丸い。	水挽き成形。底部ー切りはなしは不明。一定方向へのヘラ削り後ナデ調整。体部ー水挽き痕を消している。	砂粒・細砂・長石 暗灰色 良好	20% P110
8	坏 須恵器	A 13.7 B 3.4 C (8.4)	底部は平底で，体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部は丸い。	水挽き成形。底部ー回転ヘラ切り後一定方向へのヘラ削り。外周部ナデ。体部外面ー水挽き痕を消している。ロクロ回転は右。	砂粒・細砂・礫 黄灰色 普通	60% P104
9	坏 須恵器	A (11.4) B 3.9 C (6.0)	底部は平底で，体部は外反して立ち上がる。口縁部は丸い。	底部ー回転糸切り。ロクロ回転は右。外周部ーヘラ削り後ナデ。	砂粒・細砂 灰色 良好	10% P111

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第18図 10	盤 土師器	B（1.9） D（9.6） E　0.8	底部は平底で，高台は「ハ」の字状に下方へのびる。体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	底部ー回転糸切り。ロクロ回転は右。高台内・外面ーナデ。体部内面ーヘラミガキ後黒色処理。	砂粒 灰白色 普通	5％ P113
11	盤 須恵器	B（2.4） D（13.6） E　1.1	底部は平底で，高台はほぼ垂直に下方にのびる。体部は外上方に大きく立ち上がる。	底部ー回転ヘラ削り。ロクロ回転は右。高台内・外面ーナデ。体部外面ーナデ，内面ーミガキ。	砂粒 灰色 普通	5％ P108
12	蓋 須恵器	A（24.2） B（3.2）	天井部は平坦な頂部からゆるやかに下降し，口縁部は水平気味に開く。	水挽き成形。底部ー回転ヘラ削り。ロクロ回転は右。口縁部内・外面ー横ナデ。	砂粒 にぶい褐色 普通	5％ P107
13	手捏土器 土師器	A（9.9） B　5.0 C（5.9）	底部は平底で，胴部は内彎気味に外上方に立ち上がり，口縁部は内傾する。	底部ー木葉痕。胴部外面ーナデ。上位に輪積み痕。内面ー横ナデ。口縁部内・外面ー横ナデ。	砂粒 橙色 普通	50％ P102

第5号住居跡出土土製品一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	大きさ(cm) たて×よこ	孔径（cm）	重量（g）	備　考
第19図 14	球状土錘	DP38	3.2×4.0	0.9	48.0	
15	〃	DP39	3.1×2.9	0.4	24.6	
16	〃	DP40	2.8×3.1	0.8	24.7	
17	〃	DP41	2.0×2.0	0.3	7.2	
18	〃	DP42	(2.6)×2.7	0.6	(13.7)	一部欠損
19	管状土錘	DP472	(5.4)×2.5	0.7	(26.5)	手捏ね 一部欠損

第5号住居跡出土石製品一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	大きさ(cm) 長さ×幅×厚さ	孔径(cm)	重量(g)	石　質	備　考
第19図 20	有孔円板	Q　87	(2.5)×2.8×0.4	0.2	(4.2)	滑　石	双孔 一部欠損

第6号住居跡（第20図）

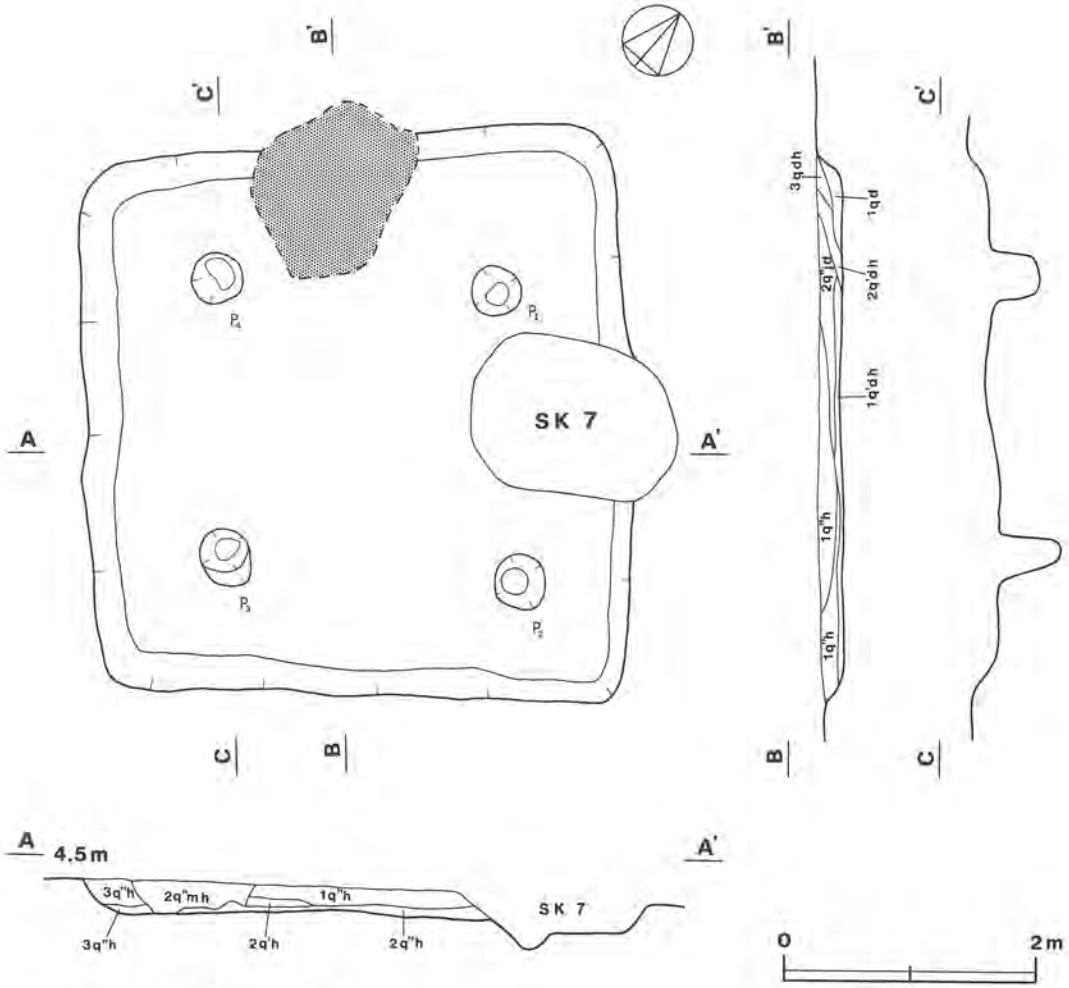
本跡は，遺跡の西側H14b$_6$区を中心に確認され，北東側は第7号土坑，南西側は第13号住居跡とそれぞれ重複している。切り合い関係は，本跡が第13号住居跡の北側床面を切り込んで構築され，第7号土坑に切り込まれている。

平面形は一辺4.4mの隅丸方形を呈し，主軸方向はN－60°－Wを指している。壁高は20cmで，壁は緩やかに立ち上がっている。床は小・中礫を多量に含む黄褐色砂土で，P$_1$～P$_4$に囲まれた内側がやや盛り上がっている。ピットは4か所検出され，いずれも主柱穴で，直径40cm，深さ33～42cmを測る。柱穴間はほぼ等間隔で2.3m程である。

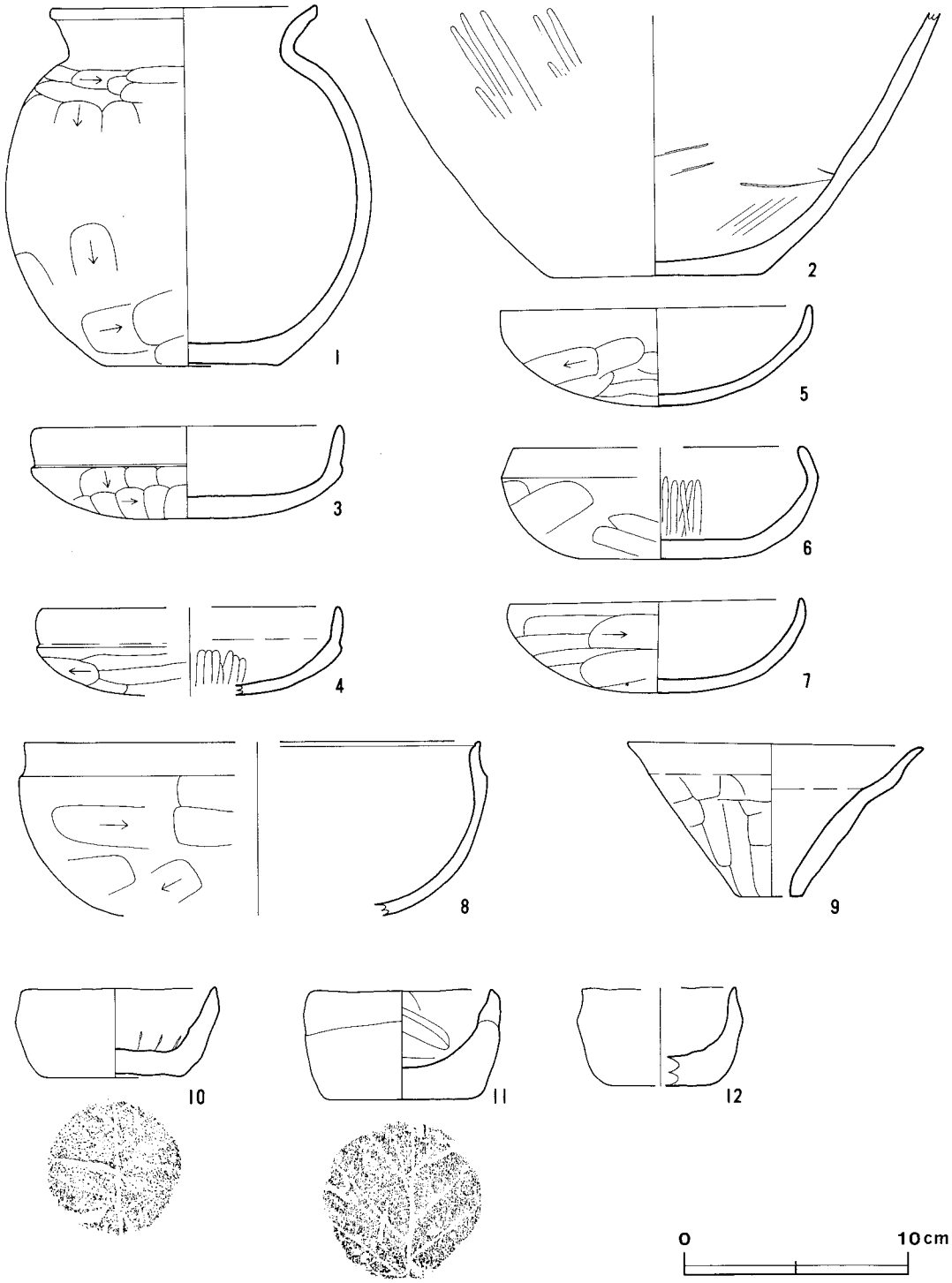
カマドは北西壁の中央に構築されていたものと思われるが，流出により原形を留めていない。

覆土は自然堆積で，小礫・砂粒を主に含む締まりのある暗褐色土と，壁際上層に黒褐色土，下層に褐色土が堆積している。

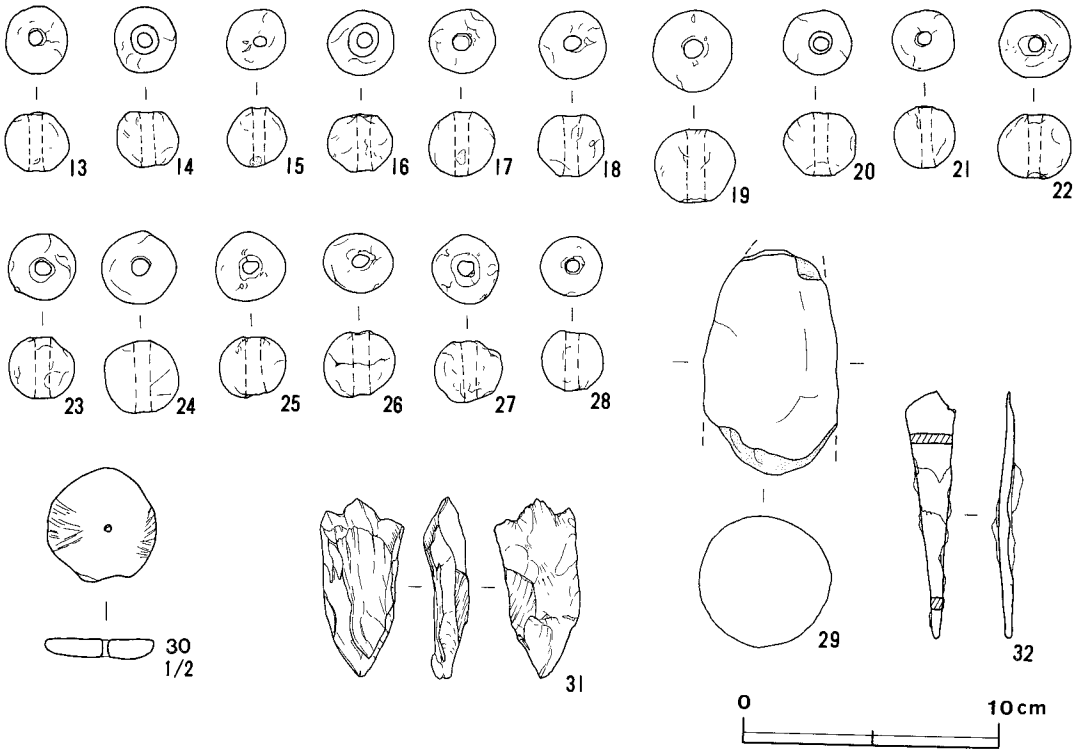
遺物は土師器片を主に，須恵器片１点，陶器片１点及び極少量の土製品・石製品が散在して出土している。土師器は完形の坏形土器（第21図５・７），１区覆土中から半完形の坏形土器（第21図３），２区覆土中からほぼ完形の手捏土器（第21図10・11），土製品は球状土錘16点（第22図13～28）と支脚（第22図19），石製品は有孔円板（第22図30），剣形模造品（第22図31）が検出されている。



第20図　第６号住居跡実測図



第21図　第６号住居跡出土遺物実測図（１）



第22図　第６号住居跡出土遺物実測図（２）

第６号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第21図 1	甕形土器 土師器	A　12.0 B（16.1） C　7.8	底部は平底で，胴部は中位に張りをもつ。口縁部は「く」の字状に外反して立ち上がり，端部は外側につまみ出されている。	口縁部内・外面－横ナデ。胴部外面－ヘラナデ。内面－ナデ。底部－ヘラ削り。	砂粒・スコリア 暗赤褐色 普通	50% P116
2	甕形土器 土師器	B（11.7） C　9.6	底部は平底で，胴部は外上方に立ち上がる。	胴部内・外面－ヘラミガキ。底部－ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母・スコリア にぶい黄橙色 不良	30% P115
3	坏形土器 土師器	A（13.6） B　4.2 C　5.6	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく外上方に開き，口縁部との境に稜をもつ。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり，端部は丸い。	体部外面－ヘラ削り。内面－ナデ。口縁部内・外面－横ナデ。	砂粒 黒褐色 普通	50% P124
4	坏形土器 土師器	A（13.4） B（3.9） C（－）	底部は丸底で，体部は内彎しながら外上方に大きく開き，口縁部との境に稜をもつ。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり，口縁端部は丸い。	体部外面－ヘラ削り。内面－ヘラナデ。口縁部内・外面－横ナデ。	砂粒・雲母 黒色 普通	30% P140

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第21図 5	坏形土器 土師器	A 14.0 B 4.4 C (−)	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく外上方へ立ち上がる。口縁部は垂直に立ち上がる。	体部外面－ヘラ削り，内面－ヘラナデ。口縁部内・外面－横ナデ。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	95% P121
6	坏形土器 土師器	A (13.0) B 5.0 C 6.3	底部は平底で，体部は内彎しながら外上方に立ち上がり，口縁部は内傾する。	体部外面－ヘラ削り，内面－ヘラミガキ。口縁部内・外面－横ナデ。	砂粒・スコリア・長石 にぶい赤褐色 普通	30% P123
7	坏形土器 土師器	A 13.1 B 4.3 C (−)	底部は丸底で，体部は内彎しながら外上方に立ち上がり，口縁部は内傾する。	体部外面－横位のヘラナデ。口縁部内・外面－横ナデ。	砂粒・細砂 にぶい褐色 普通	90% P122
8	坏形土器 土師器	A (20.5) B (7.8) C (−)	底部は丸底で，体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部との境に稜をもつ。口縁部は外彎しながらほぼ垂直に立ち上がり，端部は丸い。	体部外面－ヘラ削り後横ナデ，内面－ナデ。口縁部内・外面－横ナデ。	砂粒 黒褐色 普通	15% P125
9	甑形土器 土師器	A (13.4) B 6.8 C 3.0	底部は正円形に抜け，胴部は直線的に外上方に立ち上がり，片側はそのまま口縁部に至る。片側は中位で稜をなして外上方に開き，口縁部でさらに稜をもって外上方に立ち上がる。	口縁部内・外面－横ナデ。胴部外面－ヘラ削り，内面・ヘラナデ。	砂粒・礫 赤褐色 普通	60% P120
10	手捏土器 土師器	A 8.7 B 4.0 C 6.2	底部は平底で，胴部は内彎しながら外上方に開き，口縁部は内傾する。	底部－木葉痕。胴部外面－凹凸あるがナデ調整，内面－横ナデ。口縁部内・外面－横ナデ。	砂粒・礫 橙色 普通	100% P117
11	手捏土器 土師器	A (8.2) B 4.9 C 6.7	底部は平底で，胴部は内彎しながら垂直に立ち上がる。口縁部は内傾し，端部は丸い。	底部－木葉痕。胴部外面－凸凹であるがナデ。上位に輪積み痕。胴部内面－指頭によるナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	90% P118
12	手捏土器 土師器	A (6.8) B 4.4 C (5.0)	底部は平底で，胴部は外上方に立ち上がる。口縁部は内傾して立ち上がり，端部は丸い。	底部－ナデ。胴部内・外面－ナデ。口縁部外面－ナデ，内面－横ナデ。	砂粒・礫 にぶい橙色 普通	30% P119

第6号住居跡出土土製品一覧表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ(cm) たて×よこ	孔径(cm)	重量(g)	備考
第22図 13	球状土錘	DP43	2.4×2.6	0.6	13.1	
14	〃	DP44	2.3×2.6	0.5	14.2	
15	〃	DP45	2.3×2.4	0.5	9.9	
16	〃	DP46	2.3×2.6	0.5	13.0	
17	〃	DP47	2.6×2.6	0.5	13.5	
18	〃	DP48	2.5×2.7	0.6	14.5	
19	〃	DP49	2.9×3.2	0.6	27.0	
20	〃	DP50	2.5×2.8	0.6	15.5	
21	〃	DP51	2.5×2.4	0.5	12.0	
22	〃	DP52	2.6×2.8	0.5	17.2	
23	〃	DP53	2.4×2.7	0.6	14.3	

図版番号	名　称	台帳番号	大きさ(cm) たて×よこ	孔径（cm）	重量（g）	備　考
第22図 24	球状土錘	DP54	2.9×3.0	0.6	22.1	
25	〃	DP55	2.5×2.8	0.8	15.0	
26	〃	DP56	2.6×2.7	0.7	14.5	
27	〃	DP57	2.5×2.8	0.5	13.6	
28	〃	DP58	2.4×2.5	0.5	11.0	
29	支　脚	DP465	9.0×5.3	—	(172.9)	一部欠損

第6号住居跡出土石製品一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	大きさ(cm) 長さ×幅×厚さ	孔径(cm)	重量(g)	石　質	備　考
第22図 30	有孔円板	Q　62	3.0×2.4×0.5	0.2	6.1	滑　石	単孔
31	剣形模造品	Q　295	7.1×3.3×1.9	—	34.6	〃	加工途中

第6号住居跡出土鉄製品一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	法　量(cm) 長さ	幅	厚さ	形態の特徴	備　考
第22図 32	鉄　鏃	M　6	9.8	1.7	0.8	龍舌形平根。	

第7号住居跡（第23図）

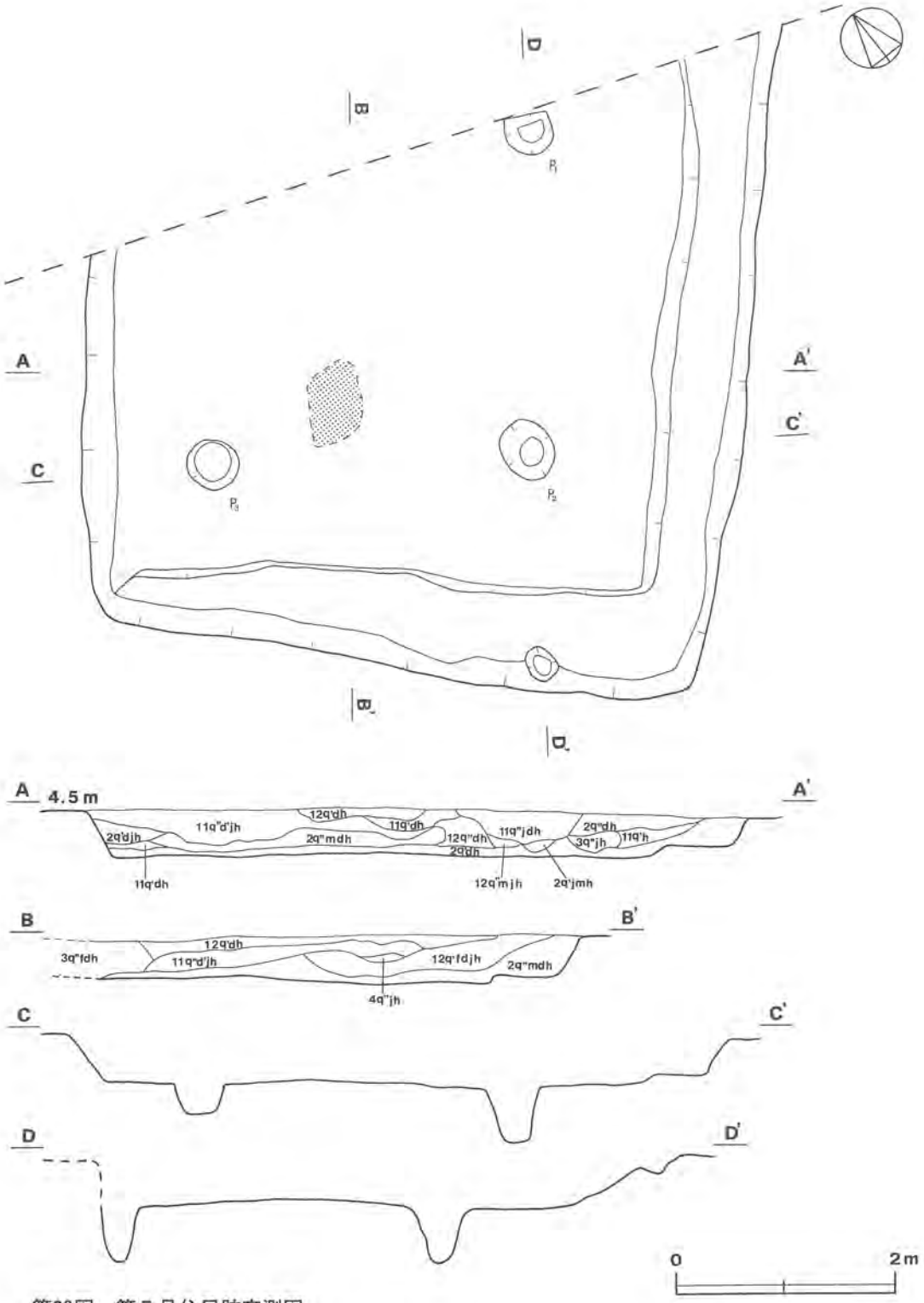
本跡は，遺構群の西部G14j$_3$区を中心に確認され，中央部から西側にかけて第27号住居跡と，南側は第18号住居跡とそれぞれ重複している。北東側は調査区域外のため未調査である。切り合い関係は，土層から判断すると，本跡が両住居跡を切り込んでいるので新しい。

調査した部分で推定すると，平面形は一辺6.2m前後の方形を呈するものと思われる。主軸方向は不明である。壁は礫を含む黒褐色砂土で，やや緩やかに立ち上がり，検出した壁高は30～40cmである。床は黄褐色砂土で，締まって硬い。ピットに囲まれた中央部は，床面がやや盛り上がっている。P_2とP_3の間には焼土が散布している。南西側と南東側が幅40～50cmのテラス状を呈していて，床面との段差は7cm程である。建て替えが行われたのかどうか調べてみたが不明である。ピットは4か所検出され，P_1～P_3は主柱穴であるが他の住居跡と同様，主柱穴は4か所であったと考えられる。おそらく，1か所は北東側の調査区域外のところに位置しているものと思われる。P_4は南西壁の南コーナー部寄りに存在するが，性格は不明である。

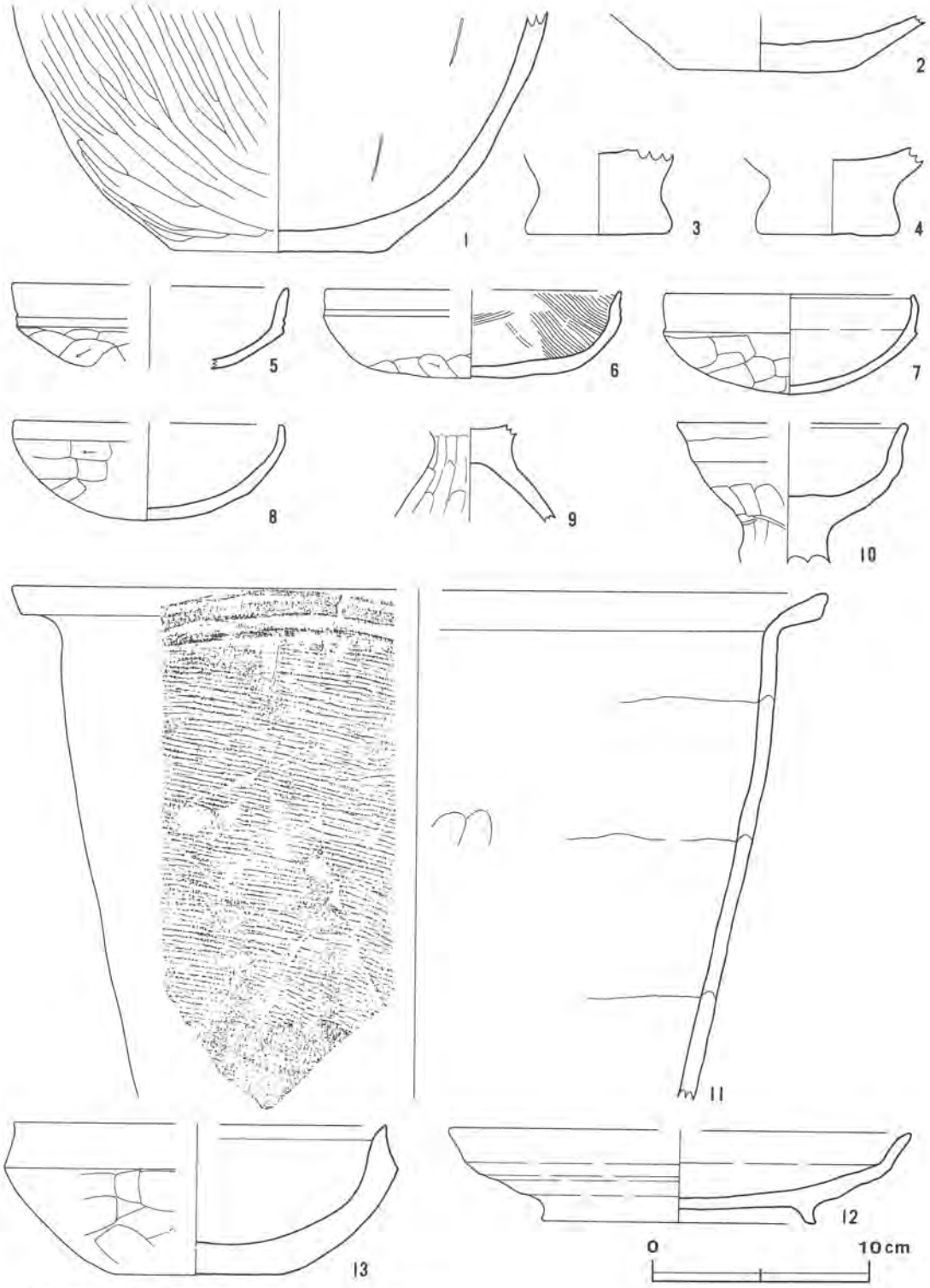
カマドは調査した範囲内では確認できなかった。

覆土は上層に多量の小礫と，砂粒・焼土粒子を主に含む硬く締まった暗赤褐色土，下層に小・中礫と，少量の焼土粒子を含む暗褐色土が堆積している。

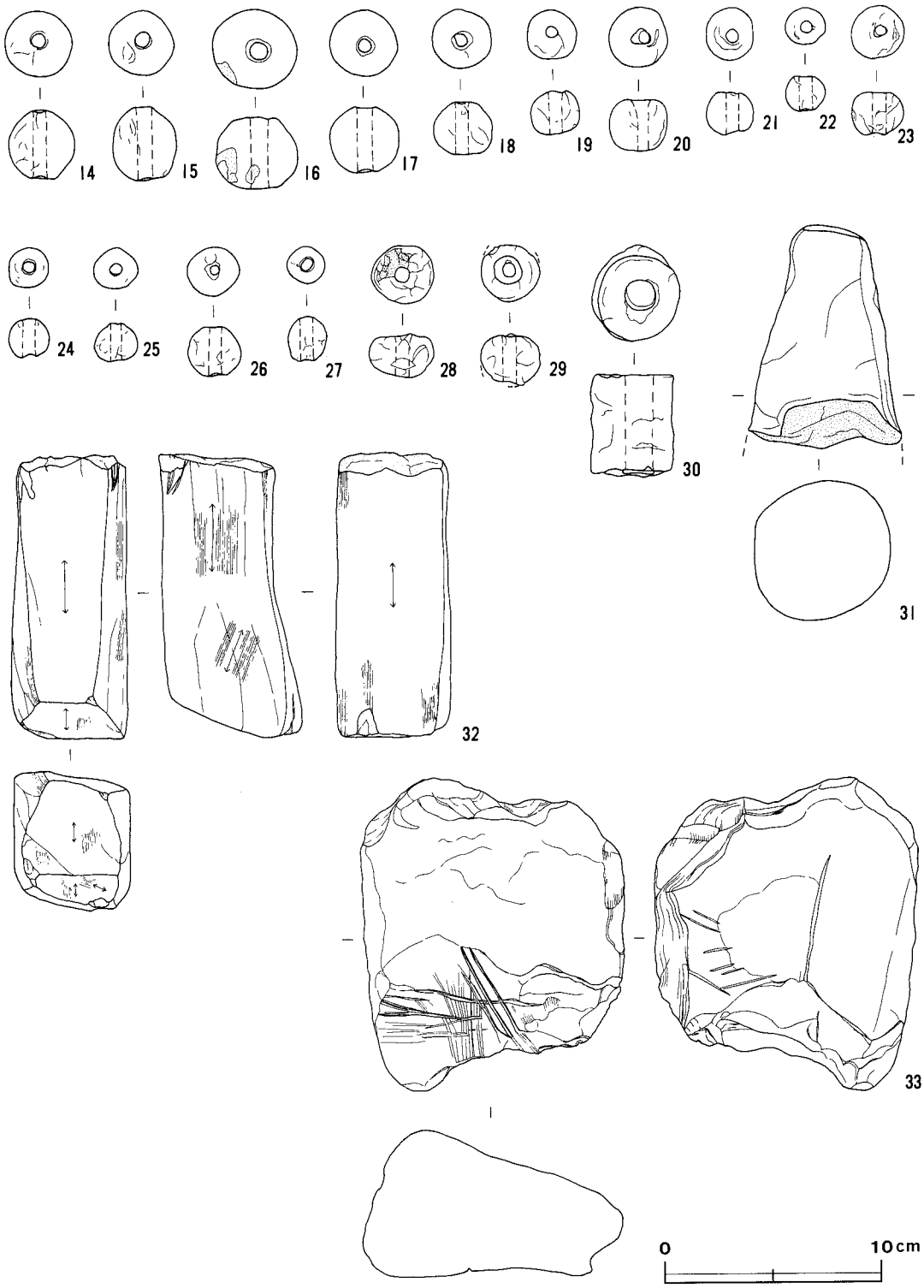
遺物は多量の土師器片のほかに，極少量の須恵器片・土製品・石製品が主に中央部から西側にかけて出土している。完形に復したものはなく，ほとんどがわずかに器形を窺える程度である。その中で，土師器の高坏形土器（第24図10），坏形土器（第24図7）が半完形で出土している。土



第23図　第７号住居跡実測図



第24図　第７号住居跡出土遺物実測図（１）



第25図　第７号住居跡出土遺物実測図（２）

製品は球状土錘16点（第25図14～29），南西壁西コーナー寄りの床面近くから管状土錘（第25図30），東コーナー部寄りの床面近くから支脚（第25図31）が，石製品は西コーナー部近くの覆土中から砥石（第25図32）がそれぞれ検出されている。

第7号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第24図 1	甕形土器 土師器	B (11.3) C 9.6	底部は平底で，胴部は内彎しながら外上方に立ち上がる。	胴部外面－ヘラミガキ，内面－横ナデ。	砂粒・スコリア・礫 にぶい黄橙色 普通	20% P126
2	甕形土器 土師器	B (2.7) C 8.1	底部は平底で，胴部は直線的に外上方に立ち上がる。	胴部外面－ヘラミガキ，内面－ヘラナデ。	砂粒・長石・スコリア 赤橙色 普通	10% P129
3	小型台付甕形土器 土師器	D 6.8 E (3.9)	台部のみ遺存。台部は内彎気味に下方にのびる。	台部外面－横ナデ。	砂粒・雲母 淡橙色 普通	10% P132 手捏ね
4	小型台付甕形土器 土師器	D 6.7 E (4.1)	台部は内彎しながら下方にのびる。	台部外面－横ナデ。	砂粒・小礫・石英 明褐灰色 普通	10% P134
5	坏形土器 土師器	A (12.8) B (3.8) C (－)	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。体部と口縁部の境に稜をもち，口縁部は外傾して立ち上がる。	体部外面－ヘラ削り，内面－横ナデ。口縁部内・外面－横ナデ。	砂粒・雲母 黒褐色 普通	30% P142
6	坏形土器 土師器	A (13.6) B 4.1 C (－)	底部は丸底で，体部は内彎しながら外上方に立ち上がる。体部と口縁部との境に稜をもつ。	体部外面－ヘラ切り，内面－ヘラナデ。口縁部内・外面－横ナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	30% P144
7	坏形土器 土師器	A (11.5) B 4.7 C (－)	底部は丸底で，体部は内彎しながら外上方に立ち上がり，口縁部との境に稜をもつ。口縁部は内傾気味に上方に立ち上がる。	体部外面－ヘラ切り，内面－横ナデ。口縁部内・外面－横ナデ。	砂粒・スコリア にぶい橙色 良好	50% P139
8	坏形土器 土師器	A (12.4) B 4.5 (－)	底部は丸底で，体部は内彎しながら外上方に立ち上がる。口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。	体部外面－ヘラ切り，内面－横ナデ。口縁部内・外面－横ナデ。	砂粒・スコリア 褐灰色 普通	20% P141
9	器台形土器 土師器	B (4.6)	脚部は「ハ」の字状に下方にのびる。	脚部外面－ヘラ削り，内面－ナデ。	砂粒 赤橙色 普通	5% P136
10	高坏形土器 土師器	A (10.8) B (6.5)	脚部欠損。体部は内彎しながら外上方に立ち上がり，口縁部下位は内傾し，上位は外傾して立ち上がる。	体部外面－ヘラ削り，内面－ナデ。口縁部内・外面－横ナデ。	砂粒・スコリア・礫 にぶい橙色 普通	50% P133
11	甕 須恵器	A (37.6) B (23.8)	胴部はほとんど張りがなく，口縁部は短く外反し，端部を折り返し，さらに外上方へつまみ出している。	口縁部内・外面－横ナデ。胴部外面－平行叩き目，内面－ナデ，指頭痕が残る。	砂粒・礫・長石・雲母 褐灰色 普通	10% P145

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第24図 12	高台付盤 須恵器 須恵器	A (21.4) B 4.3 D (12.7) E 0.8	体部は直線的に外上方に立ち上がり，口縁部との境に稜をもつ。口縁部は外反気味に立ち上がり，端部は丸い。高台は「ハ」の字状に下方へのびる。	底部－回転（右ロクロ）ヘラ切り，回転ヘラ削り後高台貼り付け。水挽き成形。	砂粒・細砂・スコリア・雲母 黄灰色 普通	40% P146
13	坏形土器 土師器	A (17.2) B 7.0 C 7.9	底部は平底で，体部は内彎しながら外上方に立ち上がり，口縁部は内傾し，端部は丸い。	底部－ヘラ削り。体部外面－ヘラ削り，内面－ナデ。口縁部内・外面－横ナデ。	砂粒・礫・石英 にぶい黄橙色 普通	20% P131

第7号住居跡出土土製品一覧表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ(cm) たて×よこ	孔径(cm)	重量(g)	備考
第25図 14	球状土錘	DP59	3.3×3.1	0.6	28.5	
15	〃	DP60	3.4×3.0	0.7	27.7	
16	〃	DP61	3.4×3.9	0.8	44.1	
17	〃	DP62	3.0×3.2	0.7	29.0	
18	〃	DP63	2.5×2.7	0.6	19.2	
19	〃	DP64	2.1×2.3	0.6	9.1	
20	〃	DP65	2.4×2.8	0.9	18.8	
21	〃	DP66	1.9×2.5	0.6	10.5	
22	〃	DP67	(1.6)×1.9	0.6	(4.4)	一部欠損
23	〃	DP68	2.0×2.4	0.6	12.0	
24	〃	DP69	1.8×1.8	0.6	5.3	
25	〃	DP70	1.8×2.1	0.5	5.8	
26	〃	DP71	2.3×2.5	0.6	12.0	
27	〃	DP72	2.1×1.8	0.6	5.0	
28	〃	DP73	1.9×3.0	0.6	(12.4)	一部欠損
29	〃	DP74	2.4×2.7	0.6	(13.1)	〃
30	管状土錘	DP408	4.8×4.5	1.4	89.9	
31	支脚	DP466	(10.4)×(7.1)	－	(308.3)	一部欠損

第7号住居跡出土石製品一覧表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ(cm) 長さ×幅×厚さ	孔径(cm)	重量(g)	石質	備考
第25図 32	砥石	Q 5	(13.2)×5.4×6.6	－	(824.8)	凝灰岩	半分欠損
33	〃	Q288	14.5×12.3×6.8	－	1532.6	滑石	

第8号住居跡（第26図）

本跡は，遺跡中央部からやや西側に寄ったH15e$_3$区を中心に確認され，北側は第4号住居跡，北西側は第22号住居跡とそれぞれ重複している。第4号住居跡との切り合い関係は前述のとおりであるが，第22号住居跡との切り合い関係は不明である。

平面形は一辺5.4mの隅丸方形を呈し，主軸方向はN－25°－Wを指している。壁高は15～30cmで，壁は緩やかに立ち上がっている。床面はやや凸凹で，北西コーナー付近の床面に炭化材が密着した状態で出土している。ピットは4か所検出され，いずれも主柱穴で規則的に配列され，直径30～44cm，深さ31～55cmを測る。柱穴内の覆土は黒褐色砂土で，壁は赤色酸化砂土が被覆していて硬い。

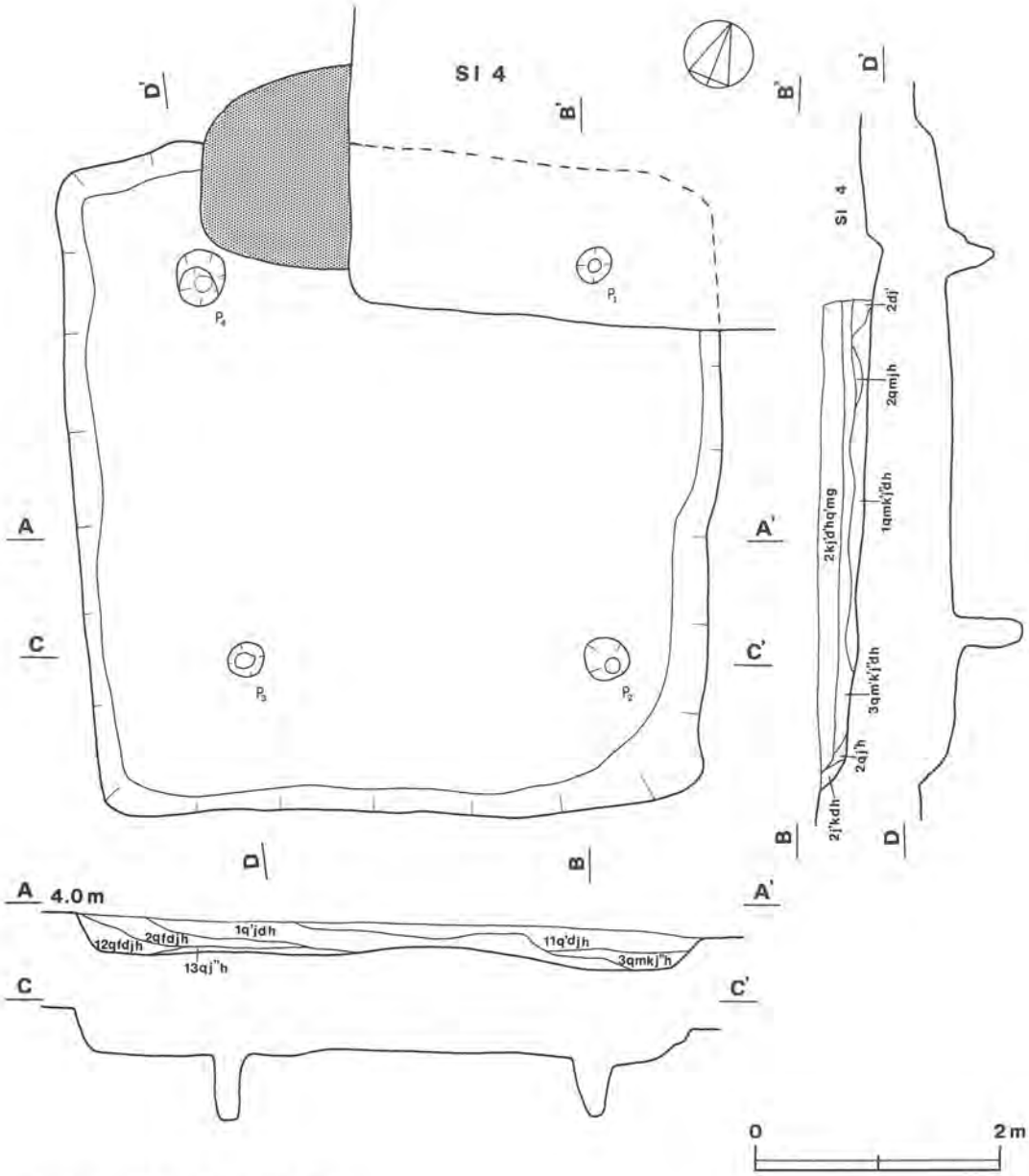
カマドは約半分を第4号住居跡に切られ，しかも他の部分も流出していて原形を留めない。北西壁のほぼ中央に構築されたものと考えられる。

覆土は自然堆積で，中央部上層に暗赤褐色砂土，下層に褐色砂土，壁際に暗褐色砂土が主に堆積している。いずれも小礫・粘土粒子を含み，締まりを帯びている。

遺物は多量の土師器片と極少量の土製品・石製品が主にカマドの西側と中央部から西側にかけて集中して出土していて，大半は覆土中からの検出である。また，他の住居跡と異なり須恵器の出土はない。土師器は口縁部から胴部にかけての甕形土器（第27図3）・甑形土器（第28図10）・坩形土器（第27図6）・ミニチュア土器（第28図11），土製品は球状土錘7点（第28図15～21）・管状土錘（第28図22），石製品は覆土中から臼玉3点（第28図23～25），南側床面近くから有孔円板（第28図26）が検出されている。覆土中から出土した遺物は投棄によるものか撹乱によるものか不明であり，しかも破片が多い。また，3区から出土した双孔円板3点（第28図27～29），剣形模造品，手捏土器（第28図12～14）はまとまって出土しているが，本跡とは別の遺構が存在したものか，それとも撹乱による流れ込みによるかは判然としない。

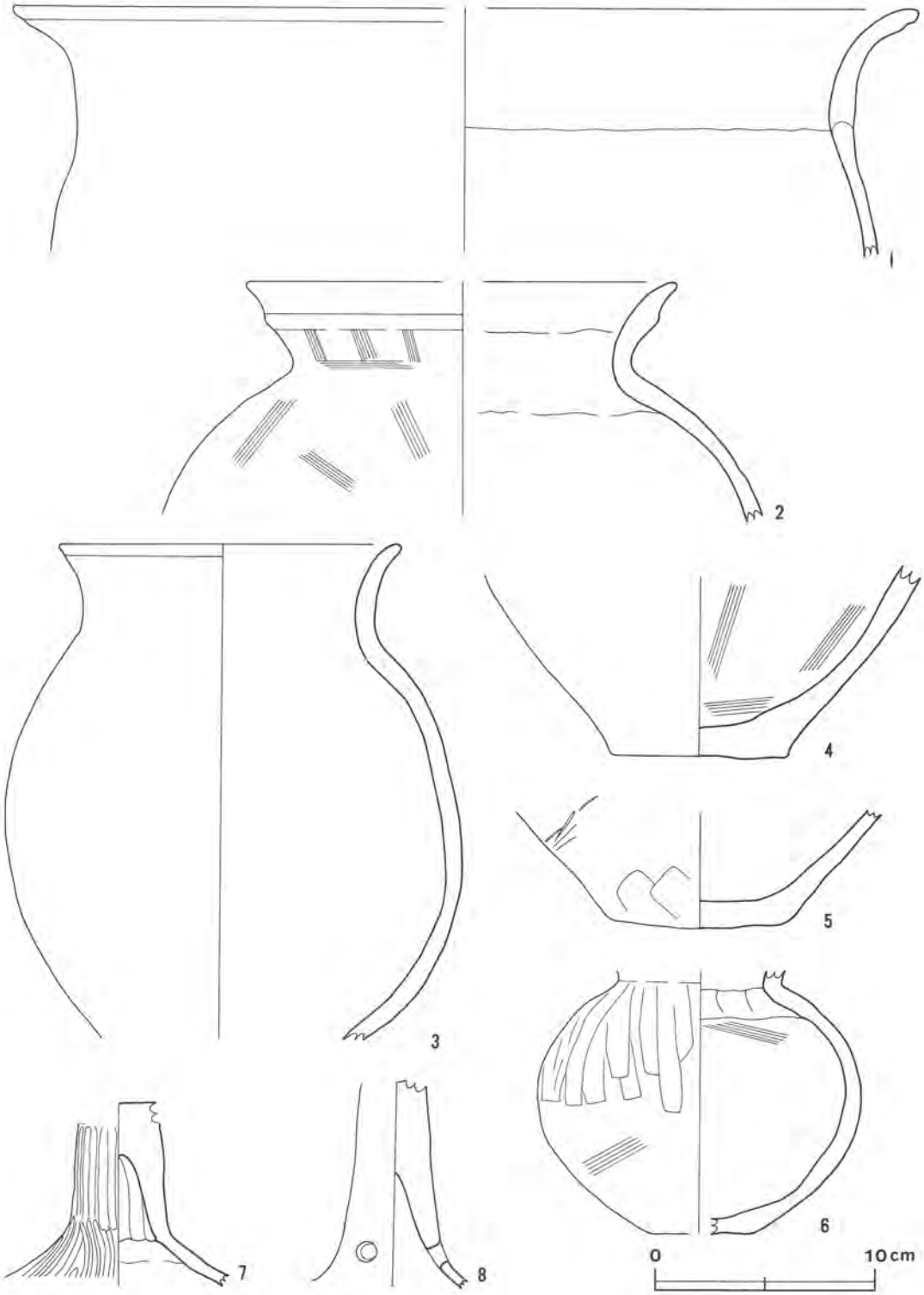
第8号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第27図 1	甕形土器 土師器	A (41.4) B (11.5)	丸く張った胴部から口縁部は大きく外反し，端部を外側につまみ出している。	口縁部内・外面－横ナデ。	砂粒・スコリア・礫 にぶい橙色 普通	10% P151
2	甕形土器 土師器	A (19.6) B (11.0)	丸く張った胴部から口縁部は「く」の字状に外反し，中位に稜をもつ。	口縁部内・外面－横ナデ。胴部外面－刷毛目。	砂粒・長石・スコリア・礫 にぶい橙色 普通	10% P152
3	甕形土器 土師器	A (15.6) B (22.8)	底部欠損。胴部は中位にやや張りをもち，口縁部は外反する。	口縁部外面－ヘラナデ，内面－ナデ。胴部外面－ヘラナデ，内面－ナデ。	砂粒・礫・スコリア・長石 明赤褐色 普通	70% P147
4	甕形土器 土師器	B (8.9) C 8.0	底部は平底で，胴部は内彎気味に外上方に立ち上がる。	胴部内・外面－刷毛目。底部－ヘラナデ。	砂粒・礫・雲母 明赤褐色 普通	10% P156

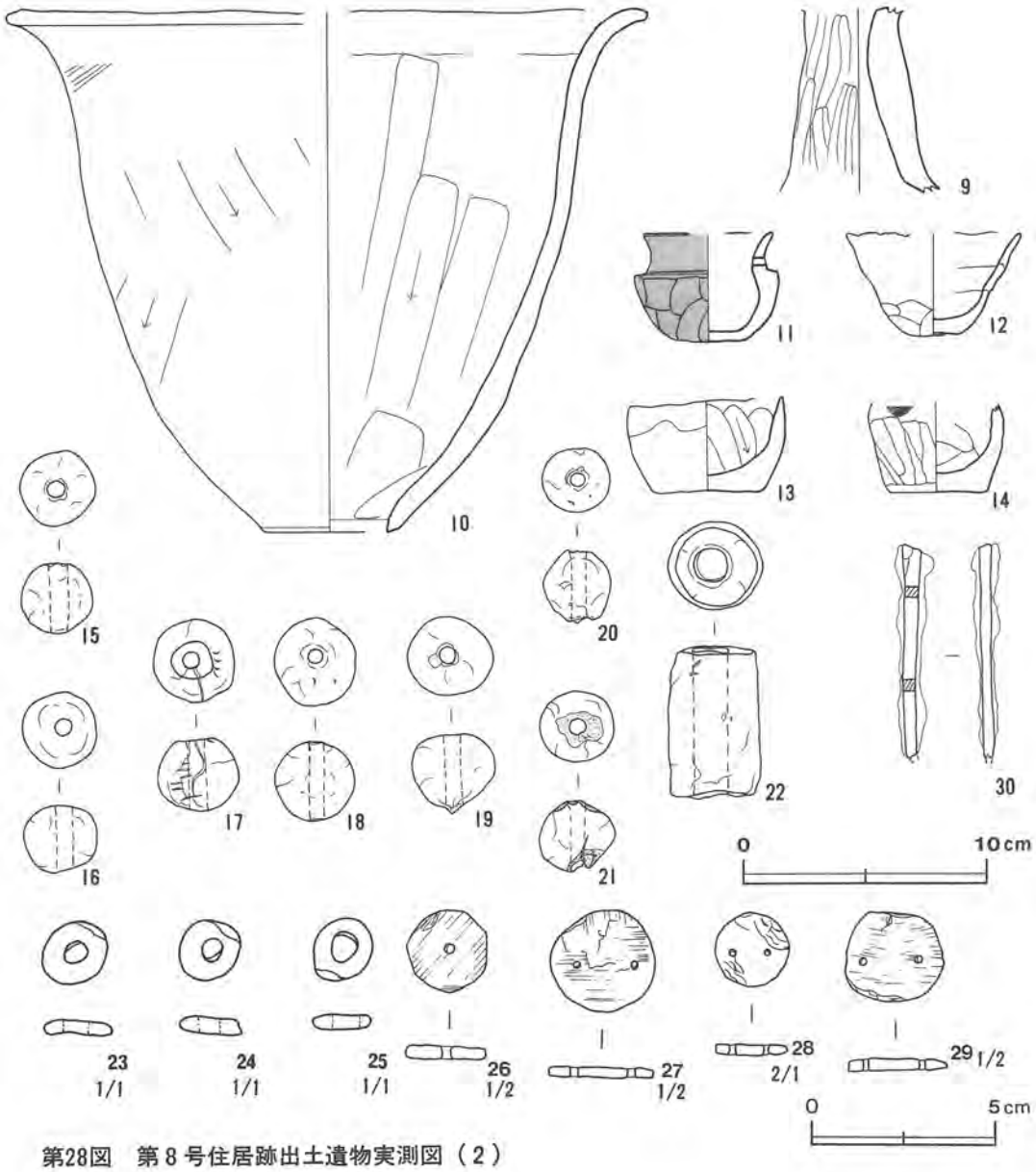


第26図　第8号住居跡実測図

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第27図 5	甕形土器 土師器	B (5.3) C　8.0	底部は平底で，胴部は直線的に外上方に立ち上がる。	胴部外面ーヘラ削り，内面ーナデ。	砂粒・スコリア・礫 赤色 普通	10% P148



第27図　第８号住居跡出土遺物実測図（１）



第28図　第８号住居跡出土遺物実測図（２）

図版番号	品　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第27図 6	坩形土器 土師器	B (12.2) C (4.6)	口縁部欠損。底部は平底で，胴部は中位が大きく張り，扁平な球形をなしている。	胴部外面ーヘラ削り，内面ー横ナデ。	砂粒・スコリア・長石 明褐色 普通	50% P158
7	高坏形土器 土師器	B (8.4)	脚部は接合部から垂直気味に開き，裾部が「ハ」の字状に開く。	脚部内・外面ーヘラ削り。	砂粒・雲母・長石 にぶい橙色 普通	20% P162

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第27図 8	高坏形土器 土師器	B（9.5）	脚部は円柱状を呈し，裾部は屈曲して「ハ」の字状に開く。裾部に3孔を穿っている。	脚部内・外面ーヘラ削り。	砂粒・長石・スコリア にぶい橙色 普通	20% P169
第28図 9	器台形土器 土師器	B（7.5）	脚部は直線的に開き，器受部の中心から脚部にかけて孔が穿たれている。	脚部内・外面ーヘラ削り。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	30% P170
10	甑形土器 土師器	A（26.4） B　21.5 C（5.6）	胴部は内彎しながら外上方に立ち上がり，口縁部は外反し，端部を外側につまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部外面ーヘラナデ。	砂粒・スコリア にぶい褐色 普通	40% P157
11	ミニチュア 土師器	A（5.3） B　4.4 C　2.7	底部は平底で，胴部は内彎しながら立ち上がり，口縁部との境に段をもつ。口縁部は外反し端部は丸い。	胴部外面ーヘラ削り，内面ーナデ。口縁部内・外面ーナデ。底部ーヘラ削り。表面朱塗り	砂粒・スコリア・長石 赤褐色 普通	70% P175
12	手捏土器 土師器	A（7.2） B　4.2 C　2.1	底部は平底で，胴部は直線的に外上方に開く。口縁部は薄く，器肉は全面的に薄手である。	胴部外面ー凹凸であるがヘラ削りと指頭によるナデ，内面ーナデ。輪積み痕が残る。	砂粒 にぶい橙色 普通	40% P177
13	手捏土器 土師器	A　6.4 B　4.0 C　4.4	底部は平底で，胴部は内彎しながら上方に立ち上がり，口縁部はやや内傾する。	胴部外面ーナデ，内面ー指頭によるナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	95% P173
14	手捏土器 土師器	B（3.7） C　4.0	底部は平底で，胴部は内彎しながら外上方に立ち上がり，口縁部は内傾する。	胴部内・外面ー指頭によるナデ。	砂粒 灰褐色 普通	90% P174

第8号住居跡出土土製品一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	大きさ(cm) たて×よこ	孔径（cm）	重量（g）	備　考
第28図 15	球状土錘	DP75	2.9×3.1	0.7	25.7	
16	〃	DP76	2.8×3.1	0.7	26.6	
17	〃	DP77	3.0×3.4	0.7	36.7	
18	〃	DP78	3.3×3.6	0.7	35.0	
19	〃	DP79	3.1×3.6	0.7	32.6	
20	〃	DP80	3.1×3.6	0.7	19.5	
21	〃	DP81	(3.0)×3.1	0.7	(24.8)	一部欠損
22	管状土錘	DP409	6.3×3.9	1.7	96.8	

第8号住居跡出土石製品一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	大きさ(cm) 長さ×幅×厚さ	孔径(cm)	重量(g)	石　質	備　考
第28図 23	臼　玉	Q　57	0.9×1.0×0.2	0.4	0.3	滑　石	
24	〃	Q　58	0.9×0.8×0.2	0.3	(0.3)	〃	一部欠損
25	〃	Q　59	0.8×0.85×0.2	0.35	0.2	〃	

図版番号	名　称	台帳番号	大きさ(cm) 長さ×幅×厚さ	孔径(cm)	重量(g)	石　質	備　考
第28図 26	有孔円板	Q　63	2.3×2.2×0.4	0.3	3.0	滑　石	単孔
27	〃	Q　88	2.8×2.9×0.3	0.2	4.0	〃	双孔
28	〃	Q　89	2.0×2.0×0.3	0.2	2.1	〃	〃
29	〃	Q　90	2.5×2.7×0.4	0.2	3.9	〃	〃

第８号住居跡出土鉄製品一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	特　態　の　特　徴	備　考
第28図 30	釘	M　7	(9.8)	0.6	0.5	断面長方形。	

第10号住居跡（第29図）

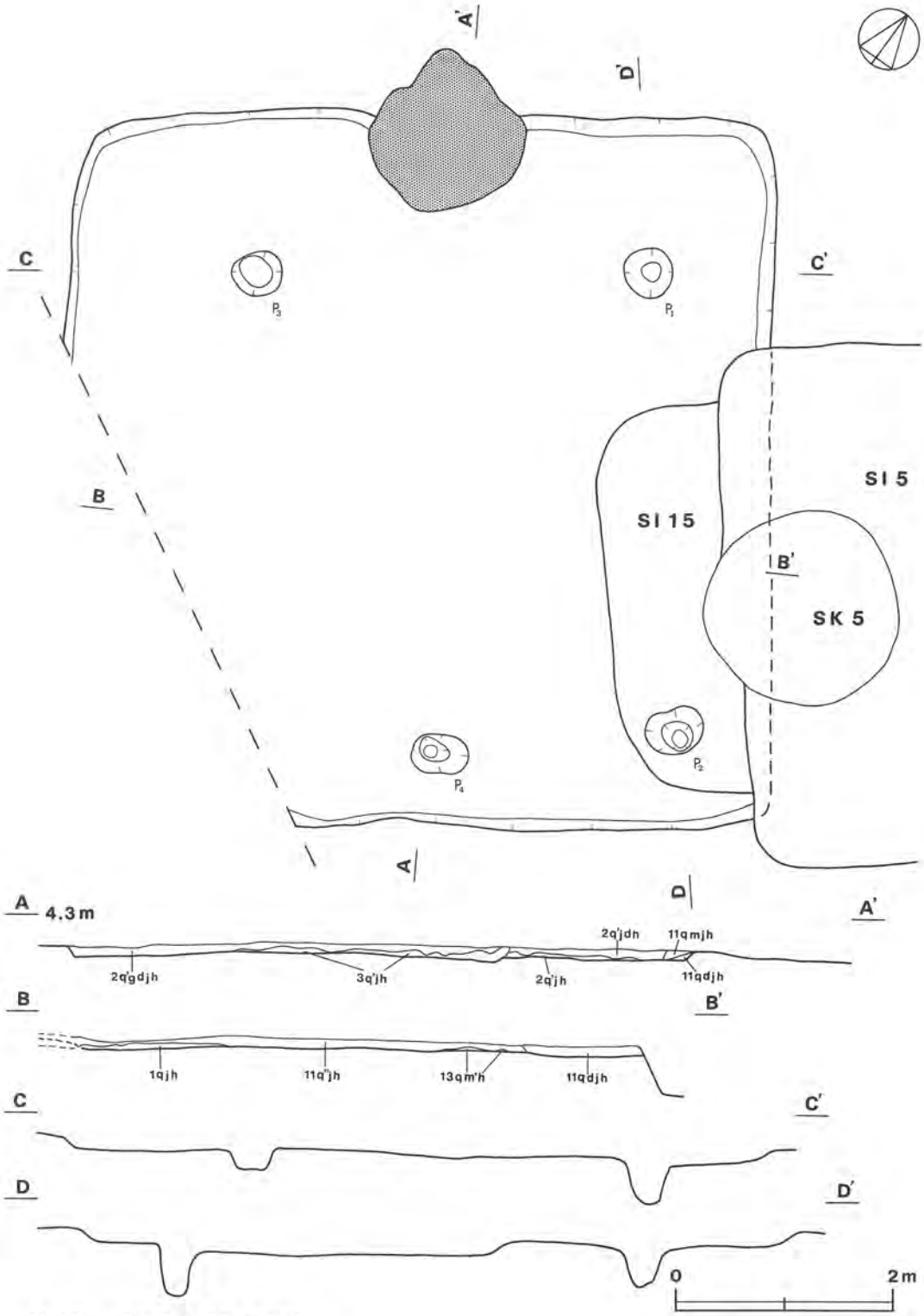
本跡は，遺構群の中央部H14d_9区を中心に確認され，最も重複の激しいところで，北側は第11号住居跡，北東側は第５・15号住居跡及び第５号土坑とそれぞれ重複している。本跡は第５・15号住居跡，第５号土坑に切られているが，第11号住居跡との新旧関係は不明である。

平面形は推定で，一辺6.5m程の隅丸方形を呈するものと思われる。当遺跡の住居跡群の中では大形の部類に属し，主軸方向はN－35°－Wを指している。壁は北西壁とそれに連なる北東壁，南西壁の一部，並びに南東壁の半分が残存していて，いずれも礫混じりの黄褐色砂土で壁高は15cmを測り緩やかに立ち上がっている。床は黄褐色砂土で，ほぼ平坦である。ピットは４か所検出され，主柱穴はP_1～P_3で直径40～50cm，深さは18～50cmを測り，P_3は深さ18cmと極端に浅い。P_1とP_2は壁寄りに，P_3はやや内側にそれぞれ位置している。南側は調査区域外のため未調査であるが，おそらく主柱穴が存在していたものと思われる。P_4は南東壁下に位置し，カマドと相対しているところなので，出入口施設に関するピットと推定される。

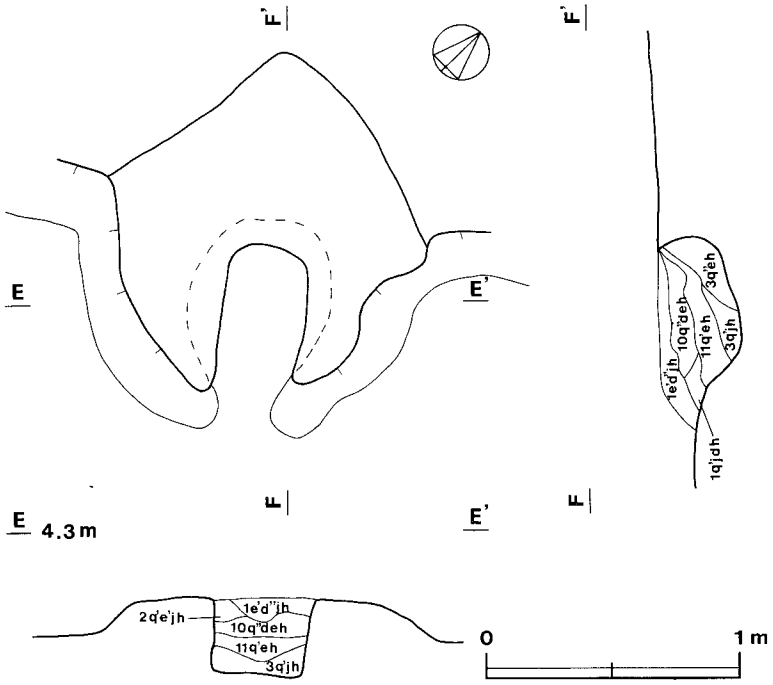
カマドは北西壁中央に位置し，当遺跡から確認されたカマドの中では最も遺存状態が良い。燃焼部は長径90cm，短径45cmの楕円形を呈し，床面を20cm程掘り込んでいる。袖部は粘質砂土で構築され，内側はブロック状に硬く焼け，カマド内には焼土小ブロック・砂粒・焼土粒子・粘土粒子を含む暗褐色土，にぶい赤褐色土，暗赤褐色土及び黒褐色土が堆積している。

覆土は自然堆積で，砂粒・礫・少量の粘土粒子と焼土粒子を含む締まりのある暗褐色土や黒褐色土が堆積している。

遺物は覆土中からの出土が大半で，特にカマド前から中央部にかけて土器の小破片が多い。土師器片のほかには，須恵器の坏の底部１点，土製品１点，石製品３点である。土器では完形あるいは半完形に復するものはないが，土製品では北コーナー壁下床面から球状土錘(第31図７)，石製品では南西壁近くの西コーナー寄り覆土中から単孔円板(第31図８)，ほぼ中央部の覆土からとカマド東前方部の床面からそれぞれ双孔円板（第31図９・10）が完形で検出されている。



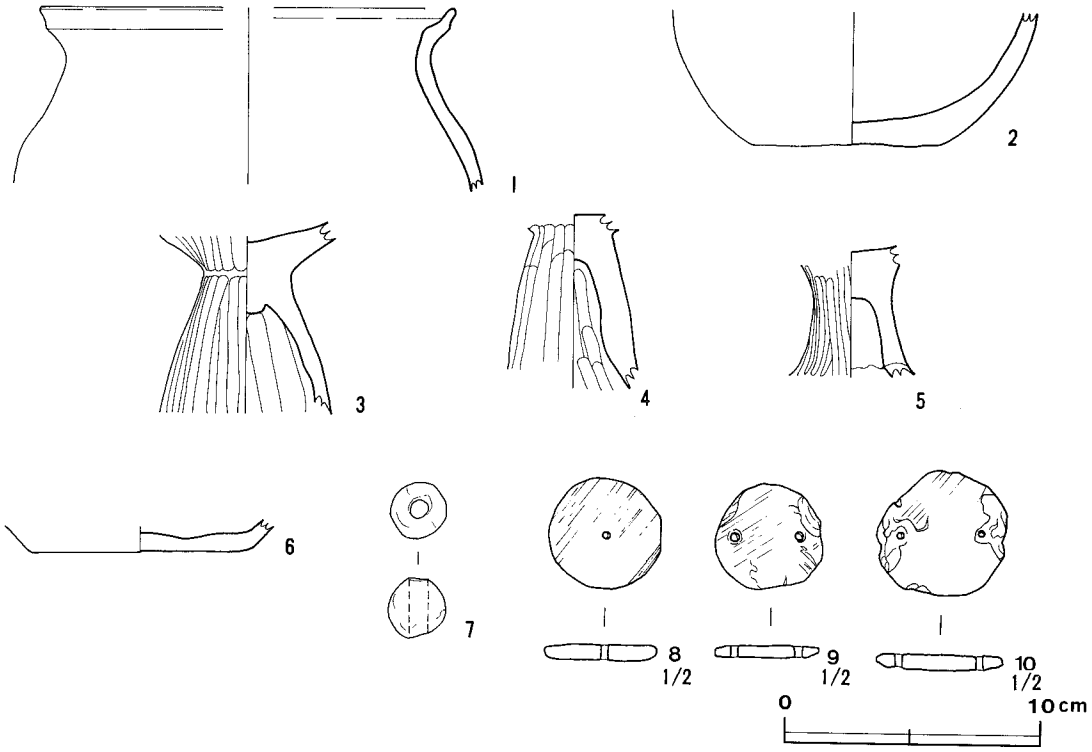
第29図　第10号住居跡実測図



第30図　第10号住居跡カマド実測図

第10号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第31図 1	甕形土器 土師器	A (16.4) B (7.3)	丸く張った胴部から口縁部は「く」の字状に外反して立ち上がり，端部は外上方につまみ出されている。	胴部内・外面ーヘラナデ。口縁部外面ー横ナデ，内面ーナデ。	砂粒・雲母・スコリア 暗赤褐色 普通	10% P179
2	甕形土器 土師器	B (5.3) C 7.3	底部は平底で，胴部は内彎しながら外上方に立ち上がる。	胴部内・外面ーヘラナデ。	砂粒・スコリア 橙色 普通	10% P180
3	高坏形土器 土師器	B (7.6)	脚部は接合部からふくらみをもって開く。	脚部外面ーヘラナデ，内面ーナデ。	砂粒 橙色 普通	10% P181
4	高坏形土器 土師器	B (6.9)	脚部は内彎気味に開く。	脚部内・外面ーヘラナデ。	砂粒・礫・スコリア にぶい橙色 普通	30% P182
5	高坏形土器 土師器	B (5.1)	脚部は外彎しながら開く。	脚部外面ー棒状工具による削り，内面ーナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	10% P183
6	坏 須恵器	B (1.2) C (8.8)	底部のみ遺存。平底。	底部ー回転ヘラ切り後不定方向からのナデ。	砂粒 褐灰色 普通	10% P184



第31図　第10号住居跡出土遺物実測図

第10号住居跡出土製品一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	大きさ(cm) たて×よこ	孔径（cm）	重量（g）	備　考
第31図 7	球状土錘	DP82	2.4×2.3	0.7	9.5	

第10号住居跡出土石製品一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	大きさ(cm) 長さ×幅×厚さ	孔径(cm)	重量(g)	石　質	備　考
第31図 8	有孔円板	Q64	3.0×2.9×0.4	0.2	6.2	滑　石	単孔
9	〃	Q91	2.8×2.9×0.3	0.2	4.6	〃	双孔
10	〃	Q92	3.3×3.4×0.4	0.2	8.1	〃	〃

第11号住居跡（第32図）

本跡は，遺構群の中央部H14c₀区を中心に確認され，重複が激しいところで，東側から南東側にかけては第５・15号住居跡，南側は第10号住居跡とそれぞれ重複している。切り合い関係は，本跡が第５・15号住居跡に切り込まれ，第10号住居跡とは不明である。

複雑な重複関係から不明な点が多いが，一部残存する北・西・南壁から推定すると，平面形は一辺4.8m程の方形を呈するものと思われる。重複がない西壁は壁高40cmで，ほぼ垂直に立ち上がっている。重複していない部分の床は黄褐色砂土で，ほぼ平坦である。北壁のほぼ中央部と，床面中央部からやや西寄りに土坑状の落ち込みが認められたが，本跡に関するものでなく新しいものである。主柱穴は4か所検出され，直径35～45cm，深さ20～42cmである。

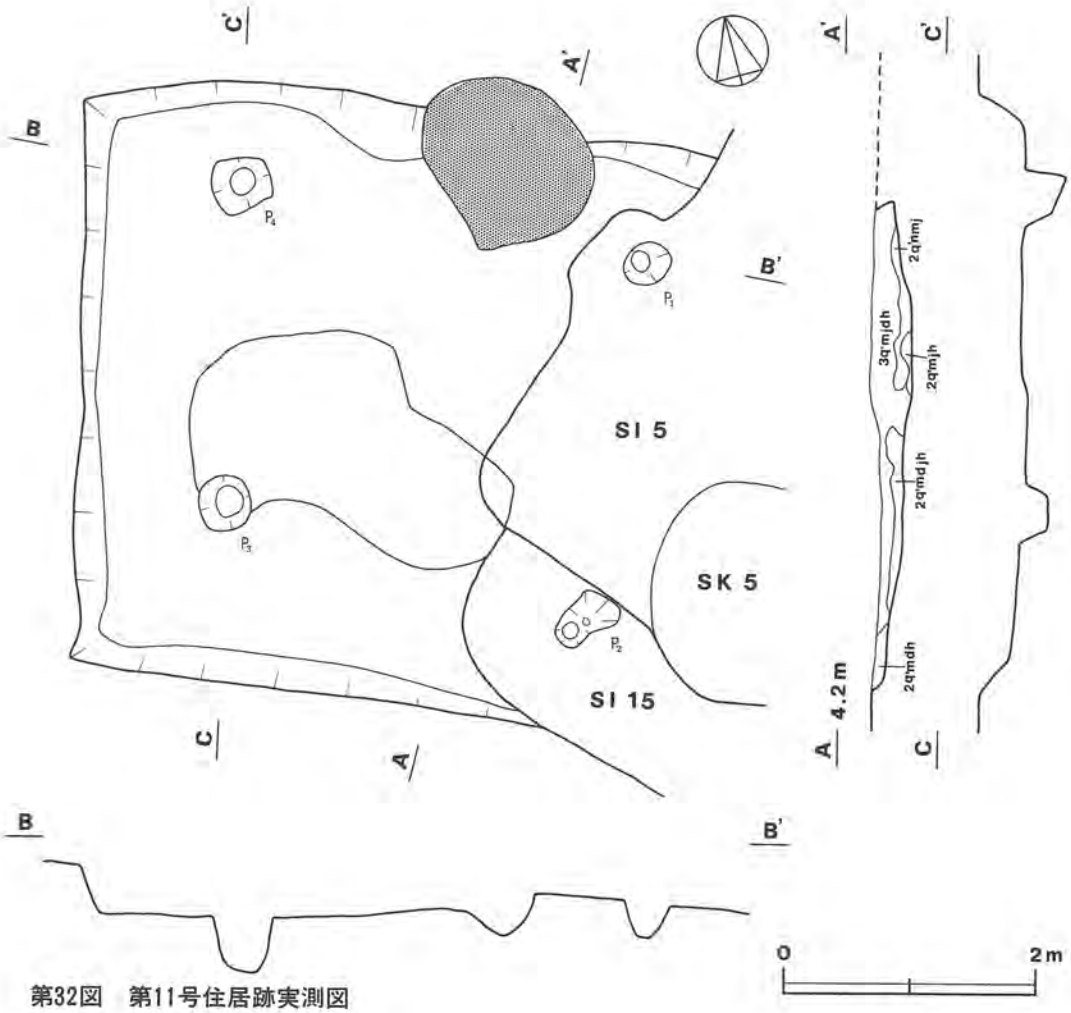
カマド等は検出されなかったが，重複のため消失したものと思われる。

覆土の堆積状況は不明である。

遺物は土師器片を主として，他に須恵器片や土製品が中央部から北西側にかけて多く出土しているが，量的には少ない。土師器は西壁下床面近くから半完形の壺形土器（第33図4），南西コーナー近くの床面から手捏土器（第33図8），やや北西側と西側壁の覆土中から坏形土器（第33図6・7），土製品は球状土錘5点（第33図9～13）と西壁際の覆土中から支脚（第33図14）が検出されている。

第11号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第33図 1	甕形土器 土師器	A (23.8) B (10.7)	口縁部は胴部から「く」の字状に外反している。	胴部外面－ヘラ削り，内面－ナデ。口縁部内・外面－横ナデ。	砂粒・長石英・石英 浅黄橙色 普通	10% P185
2	甕形土器 土師器	B (7.1) C (8.0)	底部は平底で，胴部は内彎しながら外上方に立ち上がる。	胴部外面－ヘラ削り，内面－ヘラナデ。底部－ヘラ削り。	砂粒・長石・礫・雲母 明褐灰色 普通	10% P186
3	甕形土器 土師器	B (2.5) C 9.5	底部は平底で，胴部は直線的に外上方に大きく開いて立ち上がる。	胴部外面－斜位のヘラ削り，内面－ナデ。底部－ヘラ削り。	砂粒・雲母・長石・礫 明赤褐色 普通	10% P187
4	ミニチュア土器 土師器	A (8.8) B (6.3)	胴部中位が大きく張る扁平な球形で，口縁部は垂直気味に立ち上がり，端部は内傾する。	口縁部外面－棒状工具によるケズリ，内面－ナデ。胴部内・外面－棒状工具によるケズリ。	砂粒 にぶい橙色 普通	20% P188
5	坩形土器 土師器	A (15.2) B (6.8)	口縁部一部遺存。口縁部は直線的に外上方に立ち上がり，端部は丸い。	口縁部外面－ヘラ削りの後上位は横ナデ，内面－ナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	10% P191
6	坏形土器 土師器	A 12.0 B 2.9 C (－)	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は垂直気味に立ち上がる。	体部外面－ヘラ削りの後ナデ，内面－ヘラナデ。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	60% P190
7	坏形土器 土師器	A 11.8 B 4.2 C (－)	底部は丸底で，体部は内彎しながら外上方に立ち上がる。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり，端部は丸い。	体部外面－ヘラ削り，内面－刷毛目。口縁部内・外面－横ナデ。	砂粒・スコリア・石英 にぶい橙色 普通	60% P189

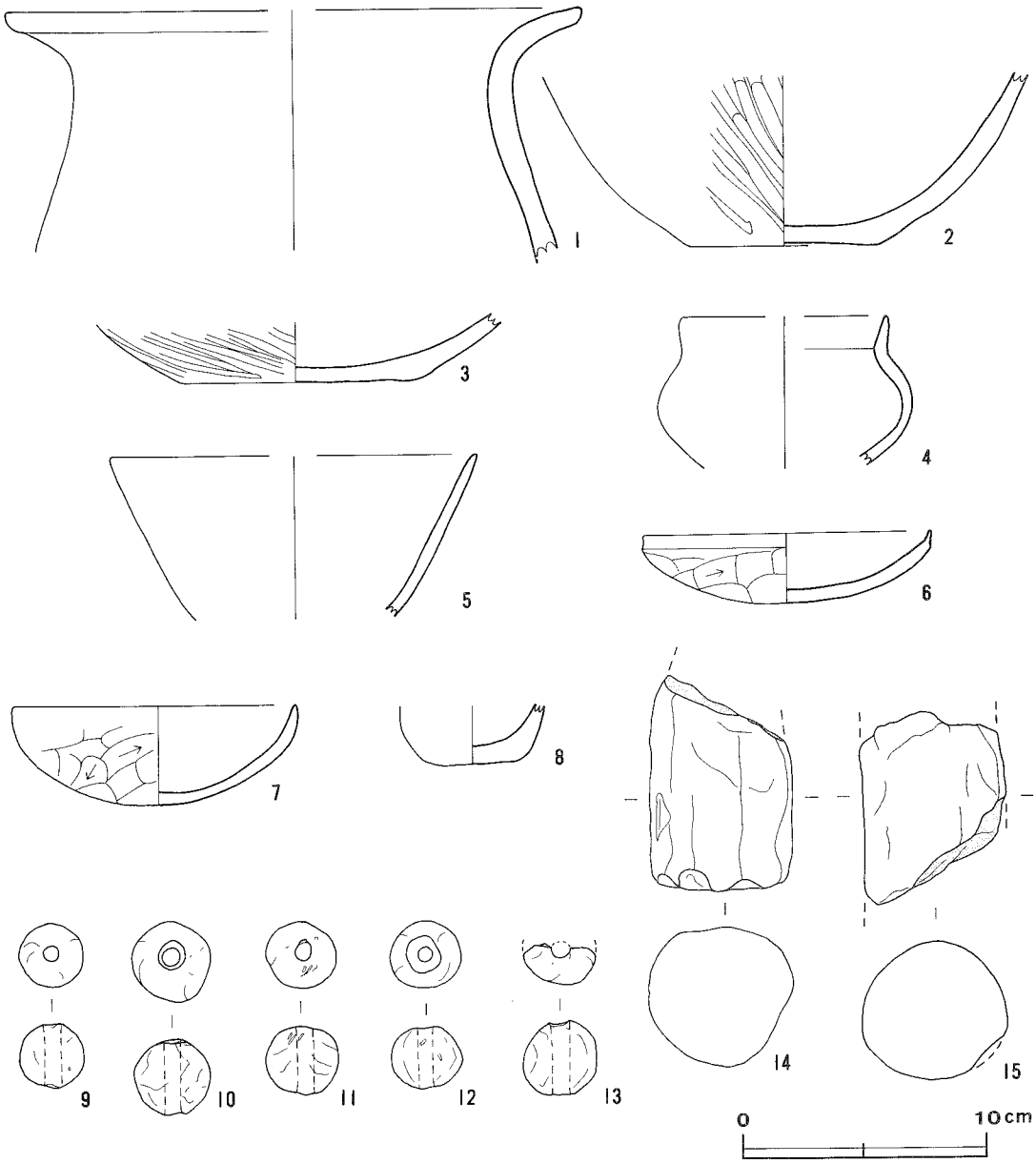


第32図　第11号住居跡実測図

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第33図 8	手捏土器 土師器	B (2.6) C 3.4	底部は平底で，胴部は内彎しながら立ち上がる。	胴部内・外面ーナデ。底部ーナデ。	砂粒・礫・雲母・長石 灰褐色 普通	50% P192

第11号住居跡出土製品一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	大きさ(cm) たて×よこ	孔径(cm)	重量(g)	備　考
第33図 9	球状土錘	DP83	2.7×2.7	0.7	16.8	
10	〃	DP84	3.2×3.4	0.7	(28.7)	一部欠損
11	〃	DP85	2.8×3.0	0.7	20.7	



第33図　第11号住居跡出土遺物実測図

図版番号	名　　称	台帳番号	大きさ(cm) たて×よこ	孔径（cm）	重量（g）	備　考
第33図 12	球状土錘	DP86	3.1×3.0	0.6	(20.4)	一部欠損
13	〃	DP87	3.2×(3.0)	0.7	(12.8)	半分欠損
14	支　　脚	DP467	(9.0)×6.0	—	(292.9)	一部欠損
15	〃	DP468	(8.0)×6.0	—	(235.8)	〃

第12号住居跡（第34図）

本跡は，遺跡の西側部H14c7区を中心に確認され，第10号住居跡の西側７ｍのところに位置し，中央部から西側にかけて第13号住居跡と重複している。切り合う第13号住居跡との新旧関係は，カマドの精査によって明確となった。当初，本跡の北西壁にカマドが存在するものとして調査を実施したが，残存していた焼土は本跡の北西壁から離れて，しかも床面より浮いた状態で確認された。壁にはカマドを構築したと思われる痕跡が認められず，本跡に伴うカマドは存在しなかった。第13号住居跡のカマドが本跡の覆土中に遺存していることから，本跡の方が古い。

平面形は一辺4.8m前後のやや歪曲した隅丸方形を呈し，主軸方向はＮ－68°－Ｗを指している。壁高は25cmで，壁はほぼ垂直に立ち上がっている。壁溝は，西コーナー部と北東壁下から南東壁中央部下にかけての２か所に認められる。上幅は約15cm，深さは６cmである。北東側壁溝は，表面が酸化砂土に被覆され，溝の形状を明瞭に残している。床は礫を多く含む灰褐色砂土で，南側に向かって傾斜している。床面に炭化粒子の散布がみられるが，本跡が火災による廃絶を窺わせるものではない。ピットは４か所検出され，いずれも主柱穴でコーナー壁際に位置している。直径34～42cm，深さ10～22cmで，直径のわりに浅い。

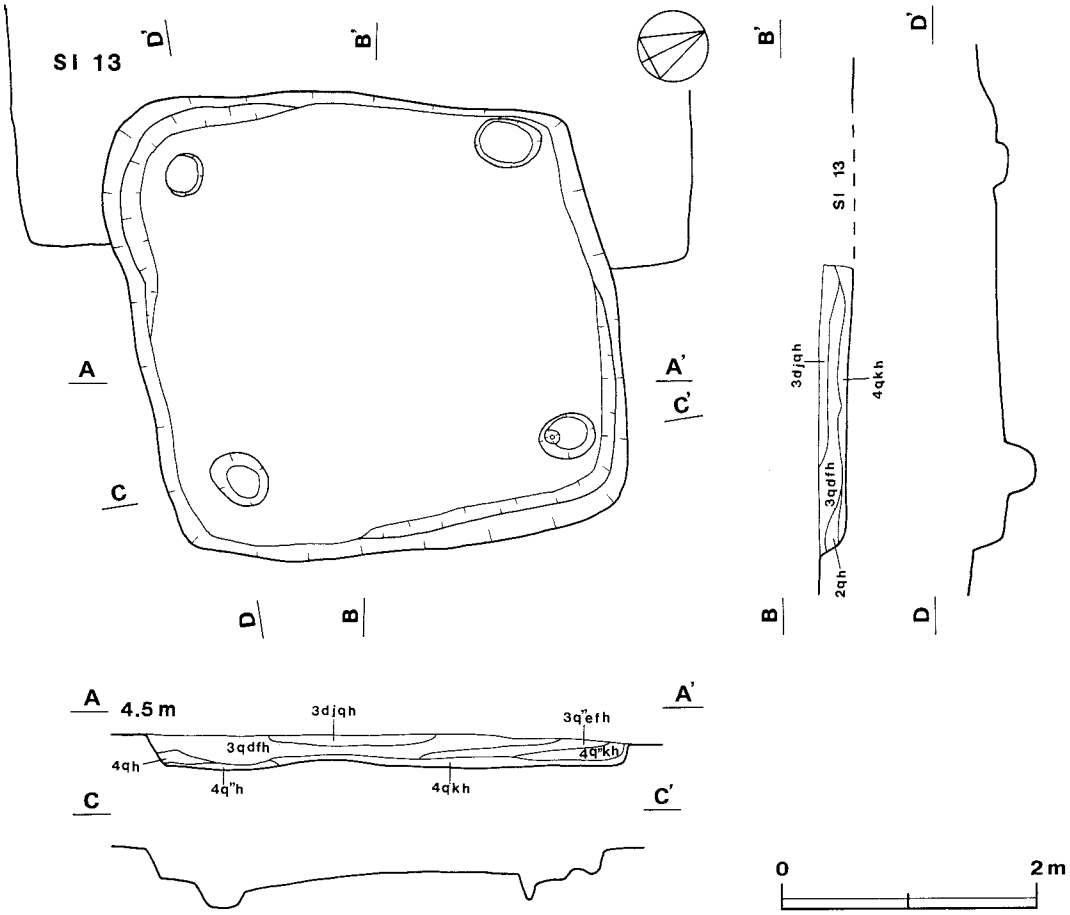
カマドは北西壁に存在したものと思われるが，前述のように消失している。

覆土は上層に黒褐色土，下層に極暗褐色土が堆積し，いずれも砂粒・小礫を主に含んでいる。

遺物は主にP_2の周辺と中央から土師器片と土製品が少量出土しているだけである。P_1付近の覆土中から土師器の半完形の小型坩形土器（第35図３），ほぼ中央部の床面から球状土錘（第35図９）が検出されている。

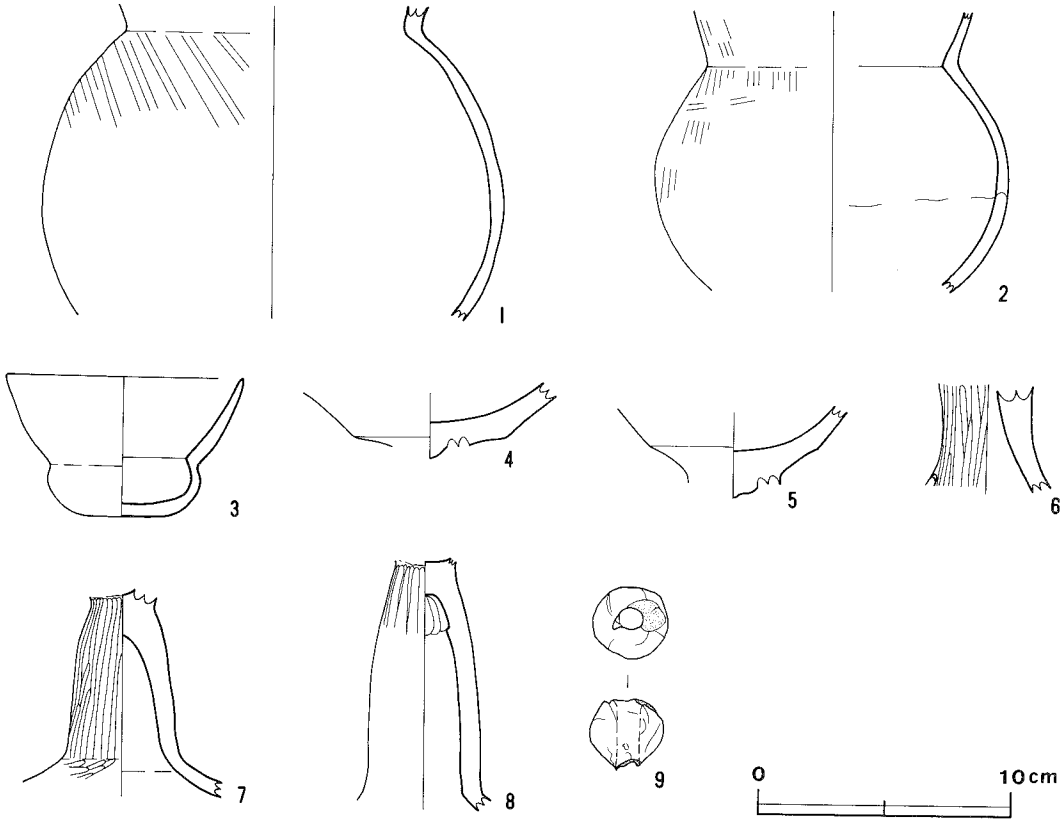
第12号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第35図 1	壺形土器 土師器	B（12.5）	胴部は中位が張る球形。	胴部外面－下位はヘラ削り，上位はナデ，内面－ナデ。	砂粒・スコリア・礫 褐色 普通	20% P193
2	小型壺形土器 土師器	B（11.2）	中位が張る胴部から口縁部は外反して立ち上がり，端部は丸い。	口縁部外面－ナデ。胴部内・外面－ナデ。	砂粒・雲母・長石・石英 にぶい褐色 普通	30% P194
3	小型坩形土器 土師器	A（9.4） B　5.6 C　3.1	胴部は扁平な球形で，口縁部は直線的に外上方へ立ち上がる。	口縁部内・外面－横ナデ後ヘラ磨き。胴部外面－ヘラ削り後ナデ，内面－ナデ。	砂粒 褐色 普通	60% P195
4	高坏形土器 土師器	B（3.2）	体部は下位に稜をもち，直線的に外上方に立ち上がる。脚部は遺存しない。	体部外面－ヘラ磨き，内面－ヘラナデ。	砂粒 橙色 普通	10% P199



第34図　第12号住居跡実測図

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第35図 5	高坏形土器 土師器	B（3.2）	体部は接合部より直線的に外上方に立ち上がる。下位に稜をもつ。脚部は欠損。	脚部外面－縦位のヘラ磨き。	砂粒 にぶい橙色 普通	10% P198
6	高坏形土器 土師器	B（4.3）	脚部は外彎しながら開き，裾部に孔を穿っている。	脚部外面－縦位のヘラ磨き。	砂粒 浅黄橙色 普通	10% P200
7	高坏形土器 土師器	B（8.2）	脚部は接合部より内彎気味に開き，裾部は「ハ」の字状に大きく開く。	脚部外面－縦位のヘラ磨き。	砂粒・雲母 赤褐色 普通	20% P197
8	高坏形土器 土師器	B（10.0）	脚部は接合部から内彎しながら円柱状に開く。	脚部外面－ヘラ磨き，内面－ナデ。	砂粒・スコリア・長石 橙色 普通	20% P196



第35図　第12号住居跡出土遺物実測図

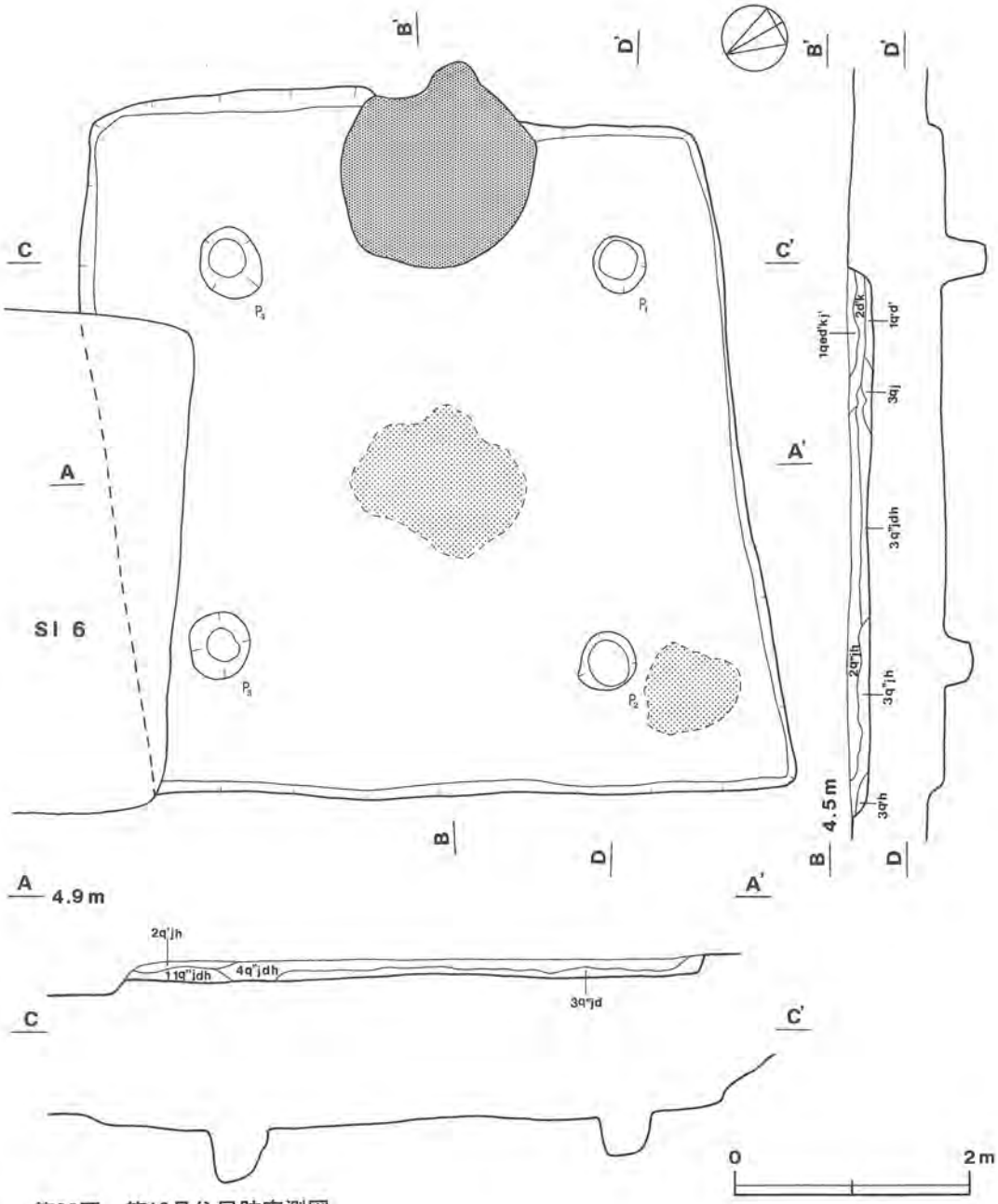
第12号住居跡出土土製品一覧表

図版番号	名　　称	台帳番号	大きさ(cm) たて×よこ	孔径（cm）	重量（g）	備　考
第35図 9	球状土錘	ＤＰ88	2.8×(3.0)	0.9	(20.0)	一部欠損

第13号住居跡（第36図）

本跡は，遺跡の西側部H14c6区を中心に確認され，東側は第12号住居跡，北側は第６号住居跡とそれぞれ重複している。新旧関係は，本跡が両住居跡から切り込まれており古い。なお，南西コーナー付近から本跡より新しい他住居跡のカマド跡と考えられる焼土が確認されたが，焼土の周辺は極小礫を含む黒褐色砂土のためプランをとらえられず，ピットの検出もできなかったため住居跡と認定できなかった。

平面形は長軸（東－西）６ｍ，短軸（北－南)5.4ｍの軸長に若干差がある方形を呈するものと思われ，当遺跡の住居跡群の中では大形に属するものである。主軸方向はＮ－65°－Ｗを指してい



第36図　第13号住居跡実測図

る。壁高は15cm前後で，壁はやや緩やかに立ち上がっている。床は礫を多く含む黒褐色砂土で，床面はほぼ平坦で，中央付近がやや硬く締まっている。第6号住居跡の床面より3cm程高い。中央部には直径1.3mの範囲で不定形状に，焼土・炭化粒子が遺存している。焼土はあたかも炉床部のように，砂土床面を20cm程の厚さで被覆していた。主柱穴は4か所で，直径50～60cm，深さ25

～45cmを測り，太さの割りに浅い。柱穴間は3.4mで，等間隔に配列されている。

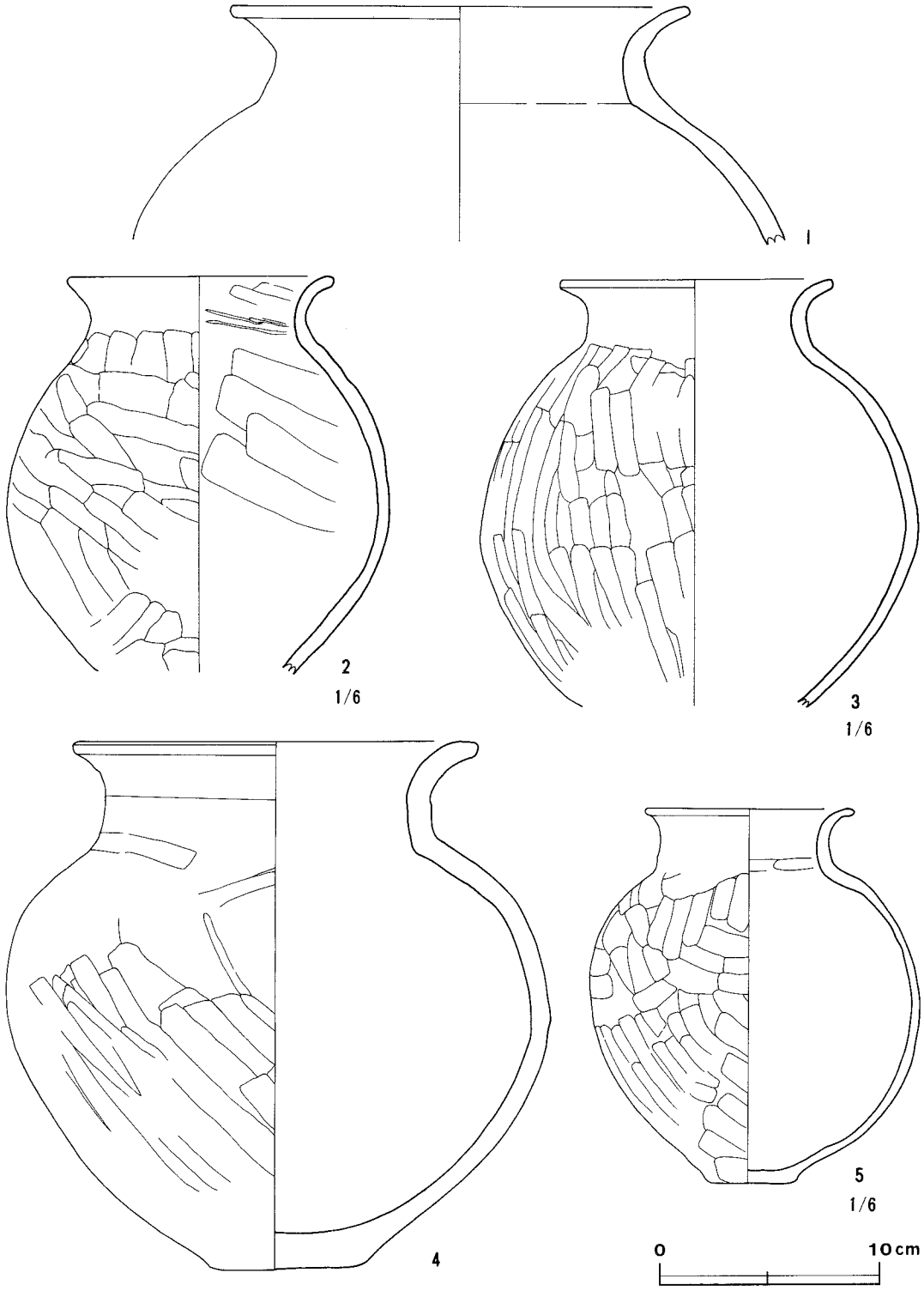
カマドは東側に構築されていて，当遺跡においては特異な位置に設けられている。遺存状態は不良で，カマドに関する焼土の散布が広くみられただけである。

覆土は自然堆積で，上層には硬く締まっている極暗褐色土と暗褐色土，下層には上層ほど締まりのない黒褐色土が堆積していて，いずれも小礫・砂粒と極少量の焼土粒子・粘土粒子を含んでいる。

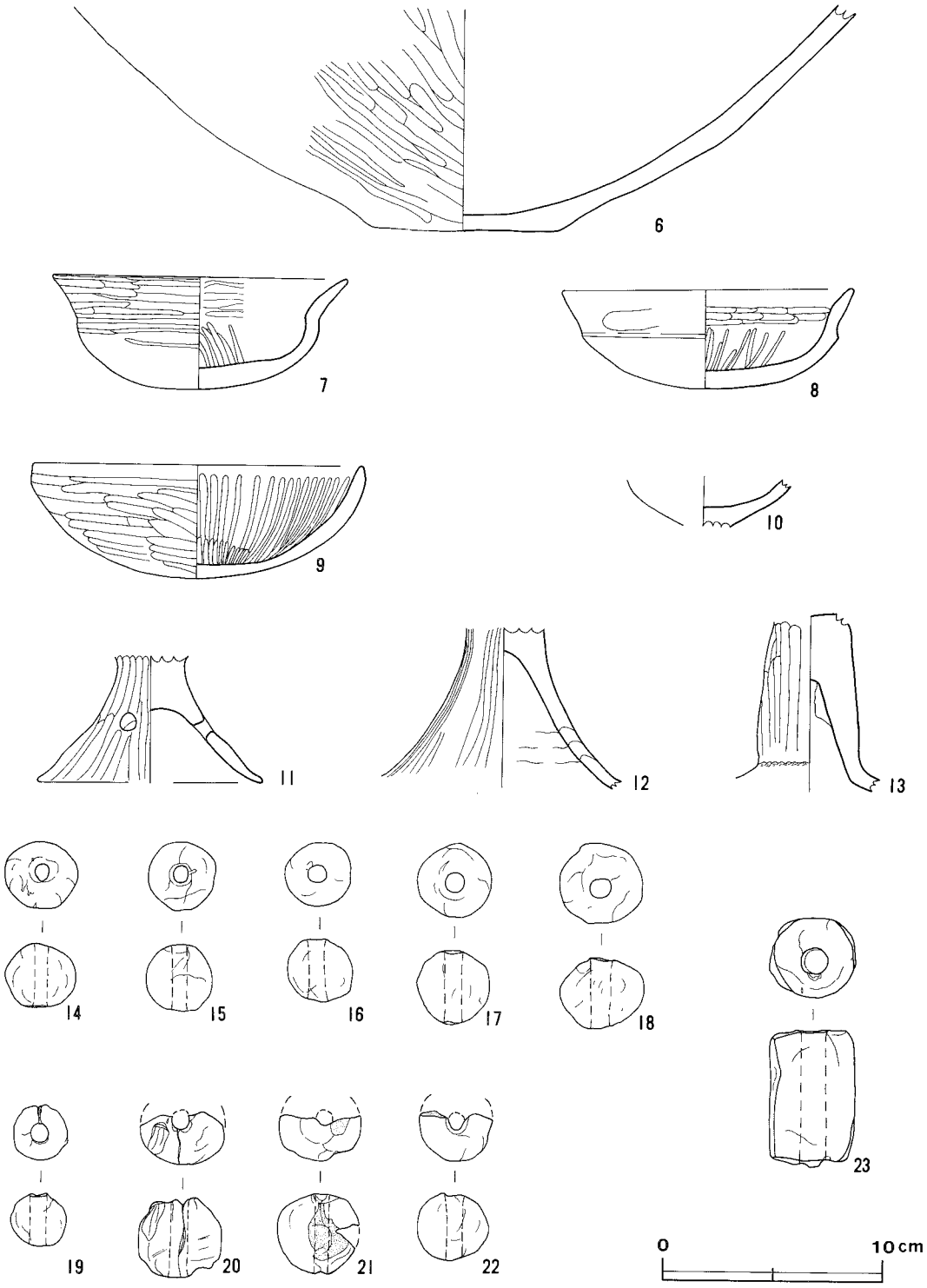
遺物は，多量の土師器片と極少量の土製品が各層から出土している。須恵器片の出土はみられない。土師器はカマドの西前方部から半完形の甕形土器（第37図５），カマドの前方部と住居跡中央部及び東側から別々に出土した破片が接合した口縁部から胴部にかけての甕形土器（第37図３・４），中央部からやや西側の床面近くから高坏形土器の脚部（第38図12），中央部からやや東側の床面近くからとカマドの西側床面から坏形土器（第38図８・９），土製品では球状土錘９点（第38図14～22）と西側の床面近くから管状土錘（第38図23）が検出されている。

第13号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第37図 1	甕形土器 土師器	A 21.1 B (10.9)	丸い胴部から口縁部は外彎して開く。	口縁部内・外面－横ナデ。	砂粒・礫・長石・石英 にぶい橙色 不良	10% P205
2	甕形土器 土師器	A 17.2 B (25.8)	胴部は中位に張りをもち，口縁部は外彎して開く。	口縁部外面－横ナデ，内面－ヘラ削りの後ナデ。胴部内・外面－ヘラ削り。	砂粒・雲母 褐灰色 普通	50% P204
3	甕形土器 土師器	A 17.5 B (27.8)	胴部は中位に張りをもつ球形で，口頸部は「コ」の字形を呈する。	口縁部内・外面－横ナデ。胴部外面－ヘラ削り，内面－ナデ。	砂粒 褐灰色 普通	70% P202
4	甕形土器 土師器	A 18.6 B 24.5 C 7.2	胴部は中位に張りをもつ球形で，口縁部は外彎して開く。	口縁部内・外面－横ナデ。胴部内・外面－ヘラ削り。	砂粒・雲母 暗赤褐色 普通	70% P203
5	甕形土器 土師器	A 18.4 B 34.6 C 7.8	底部は平底で，胴部は中位に張りをもつ。口頸部は「コ」の字形を呈する。	口縁部内・外面－横ナデ。胴部内・外面－ヘラ削り。	砂粒・砂礫・石英 浅黄橙色 普通	40% P201
第38図 6	甕形土器 土師器	B (10.3) C 8.8	底部は平底で，胴部は内彎気味に大きく外上方へ立ち上がる。	胴部外面－斜位のヘラ削り，内面－剥離が著しい。	砂粒・長石 赤色 不良	10% P206
7	坏形土器 土師器	A 13.4 B 5.2 C (－)	底部は丸底で，体部は内彎しながら開き，口縁部との境に稜をもつ。口縁部は外反して開く。	口縁部内・外面－ヘラ磨き。体部内・外面－ヘラ磨き。	砂粒・雲母 赤褐色 普通	60% P214
8	坏形土器 土師器	A 13.4 B 4.8 C (－)	底部は丸底で，体部は内彎して大きく開き，口縁部は体部との境に稜をもち，外反して開く。	口縁部外面－横ナデ，内面－ヘラ磨き。体部外面－ヘラ削り，内面－ヘラ磨き。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	60% P212



第37図　第13号住居跡出土遺物実測図（１）



第38図　第13号住居跡出土遺物実測図（２）

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第37図 9	坏形土器 土師器	A 15.0 B 5.2 C (－)	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。	口縁部外面－横ナデ。体部外面－ヘラ磨き，内面－縦位のヘラ磨き。	砂粒 明赤褐色 普通	60% P213
10	高坏形土器 土師器	B (2.2)	脚部欠損。体部は直線的に開いて立ち上がる。	口縁部外面－ヘラ磨き，内面－ナデ。体部外面－ヘラ磨き，内面－ナデ。	砂粒 赤橙色 普通	10% P210
11	高坏形土器 土師器	B (5.8) D (10.2)	坏部欠損。脚部は中位に孔を穿ちラッパ状に開く。	脚部外面－縦位のヘラ磨き，内面－ナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	20% P211
12	高坏形土器 土師器	B (7.4)	坏部欠損。脚部は外彎しながらラッパ状に開く。	脚部外面－縦位のヘラ磨き，内面－ナデ。	砂粒・長石・雲母・スコリア 明赤褐色 普通	20% P208
13	高坏形土器 土師器	B (8.2)	坏部欠損。脚部は円柱状を呈し，裾部が「ハ」の字状に開く。	脚部外面－縦位のヘラ磨き，内面－ナデ。	砂粒・雲母・礫 にぶい赤褐色 普通	40% P209

第13号住居跡出土土製品一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	大きさ(cm) たて×よこ	孔径(cm)	重量(g)	備　考
第38図 14	球状土錘	DP89	2.9×3.3	0.6	28.6	
15	〃	DP90	3.1×3.1	0.7	26.7	
16	〃	DP91	2.8×3.0	0.9	23.6	
17	〃	DP92	3.4×3.4	0.9	32.1	
18	〃	DP93	3.2×3.8	1.0	43.1	
19	〃	DP94	2.4×2.5	0.8	13.0	
20	〃	DP95	(3.6)×(3.8)	(0.8)	(21.2)	半分欠損
21	〃	DP96	(3.8)×(3.8)	0.6	(21.2)	〃
22	〃	DP97	3.0×(3.3)	0.7	(17.6)	〃
23	管状土錘	DP410	6.3×3.9	1.2	110.2	

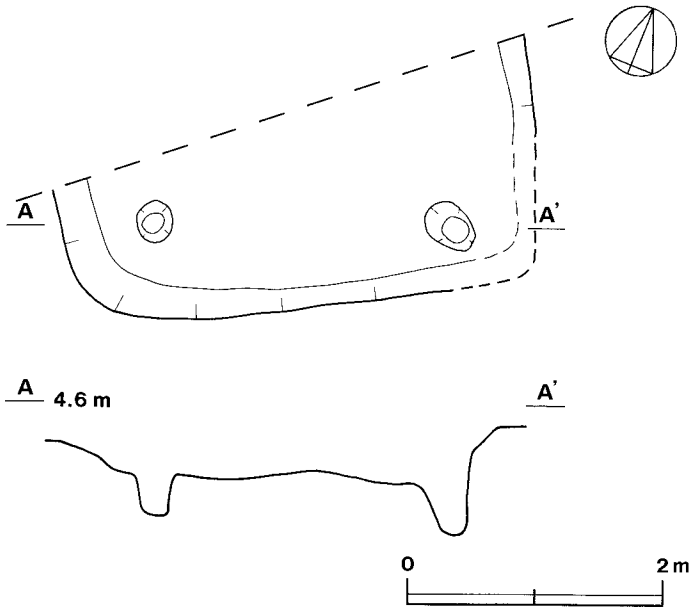
第14号住居跡（第39図）

本跡は，遺跡の最西端G14 j_1区を中心に確認されたが，南東部分を検出しただけで，遺構の大半が調査区域外のため形状等は把握できない。南側は第20号住居跡と重複している。新旧関係は不明である。

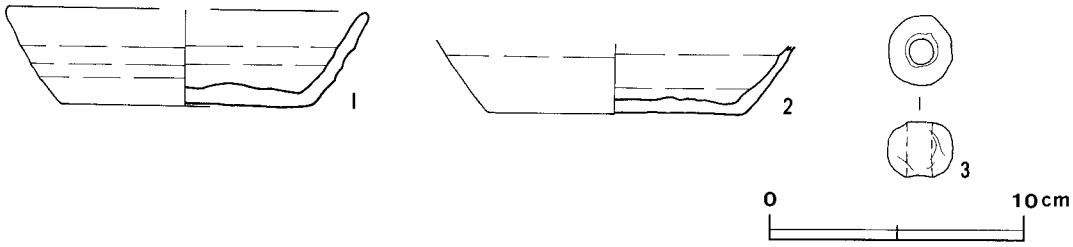
重複していない東壁は壁高30cmで，緩やかな角度で立ち上がっている。床は礫を多量に含む黄褐色砂土で，中央部と思われる部分がやや盛り上がっている。ピットは東と南コーナー部に1か所ずつ検出され，いずれも主柱穴と考えられる。

遺物は土師器片と極少量の須恵器片・土製品が出土している。土器は小破片のものが多く，器

形を窺えるものは須恵器の坏２点（第40図１・２） だけである。外に球状土錘（第40図３）が検出されている。



第39図　第14号住居跡実測図



第40図　第14号住居跡出土遺物実測図

第14号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第40図 1	坏 須恵器	A (14.2) B 3.8 C 9.8	底部は平底で，体部は直線的に外上方に立ち上がる。口縁端部は丸い。	水挽き成形。底部は回転ヘラ切り後不定方向へのヘラ削り。ロクロ回転方向は右。	砂粒・細砂・雲母 灰色 普通	50% P215
2	坏 須恵器	B (2.9) C (10.1)	底部は平底で，体部は直線的に外上方に立ち上がる。	水挽き成形。底部は回転ヘラ切り後一定方向へのヘラ削り。体部外面の水挽き痕を消している。	砂粒・雲母 灰色 普通	30% P216

第14号住居跡出土製品一覧表

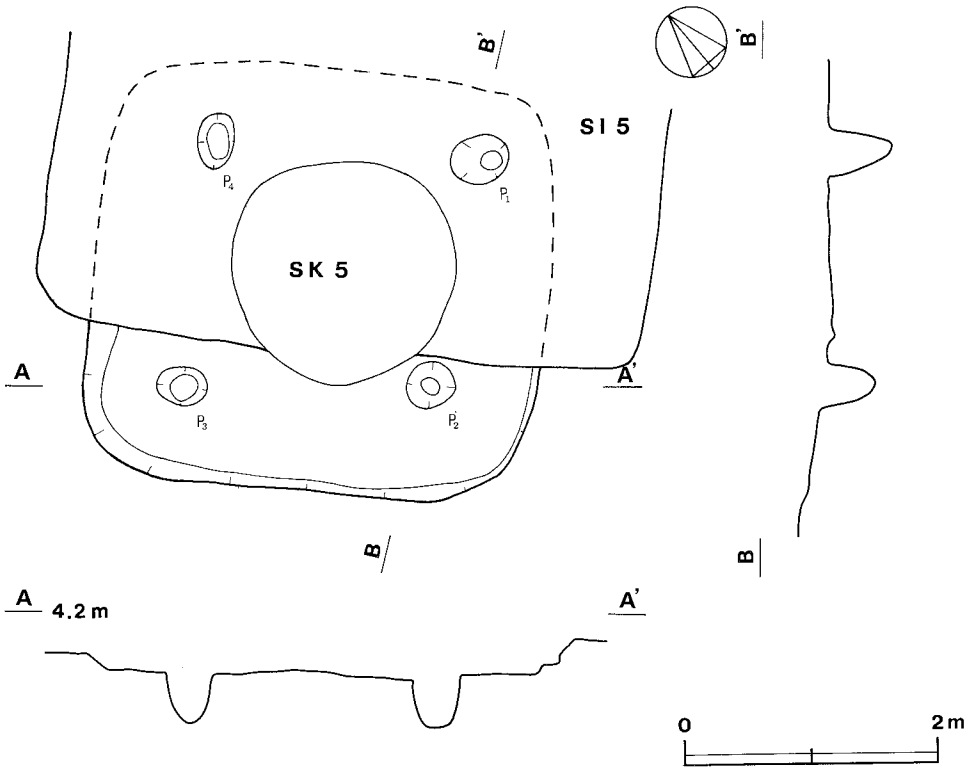
図版番号	名　　称	台帳番号	大きさ(cm) たて×よこ	孔径（cm）	重量（g）	備　考
第40図 3	球状土錘	ＤＰ98	2.1×2.8	1.0	12.8	

第15号住居跡（第41図）

本跡は，遺構群の中央部H14d₀区に確認され，中央部から北東側にかけて第５号住居跡と第５号土坑，北西側は第11号住居跡，南西側は第10号住居跡とそれぞれ重複している。新旧関係は，本跡が第10・11号住居跡より新しく，第５号住居跡と第５号土坑よりは古い。

重複が激しいため壁の消失が多く，形状や規模等不明である。わずかに残存する第10号住居跡への掘り込み部をみると，西・南コーナー部とも隅丸を呈している。南西壁の長さは約3.4mで，壁高は10cm前後，壁はやや緩やかに立ち上がっている。残存する床は小礫を多量に含む黄褐色砂土で，ほぼ平坦である。主柱穴は床面上に２か所と第５号住居跡との重複部に２か所の計４本が検出され，規則的に配列されている。直径30～45cm，深さ18～53cmで，P_4が極端に浅い。

カマドは第５号住居跡の構築時に消失したものと思われる。



第41図　第15号住居跡実測図

覆土は不明である。

遺物は重複部から出土しているが，本跡の遺構に伴なうと判断できるものはない。

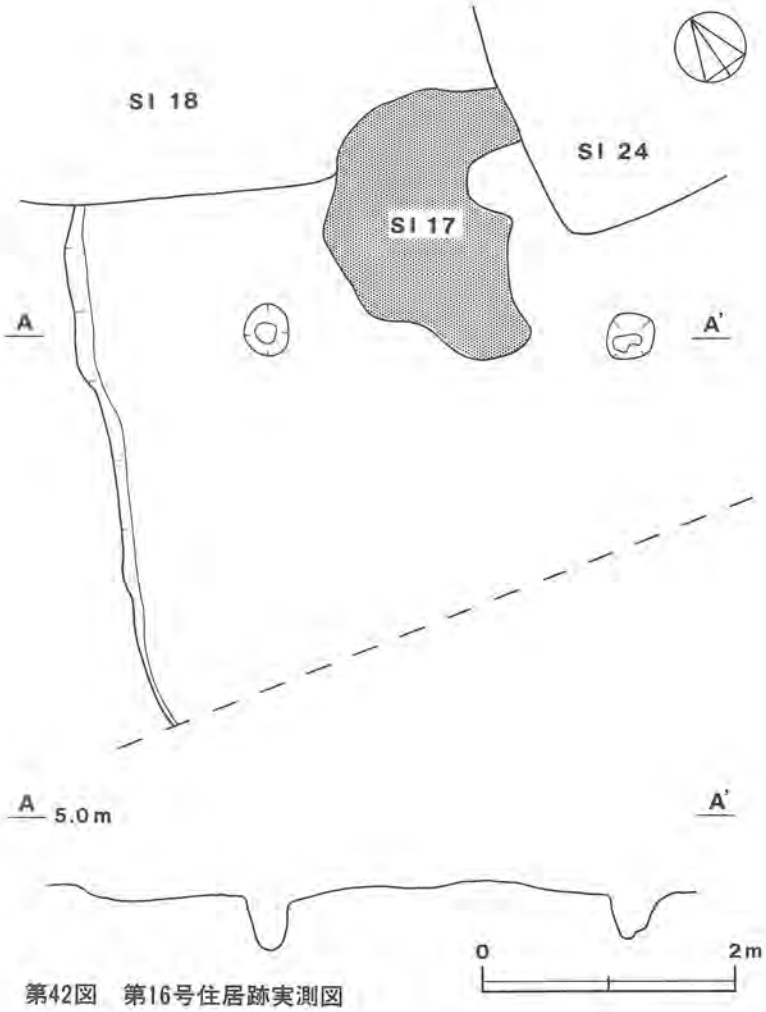
第16号住居跡（第42図）

本跡は，遺跡の西側H14b₃区を中心に確認され，東側が第24号住居跡，北側が第18号住居跡とそれぞれ重複している。新旧関係は，本跡が最も古い。精査を進めていくうちに，北側の床面から10cm程浮いたところにカマドの存在が認められ，さらに新しい第17号住居跡が重複していることが判明した。

東側と北側が重複，南側が調査区域外のため，残存する壁は北西壁の一部だけで，形状・規模等不明である。残存壁高は10cm弱で，壁は緩やかに立ち上がっている。第17号住居跡との重複が不明の状態のまま調査を行っていたので，壁はやや曲折し，床面は凸凹している。ピットは2か所検出されたが，内側に位置しており，主柱穴かどうか不明である。

カマドは第18号住居跡の切り込みによって消失したものと思われる。

第16号住居跡としての覆土は殆ど残存しないため，遺物は全て第17号住居跡として取り上げた。

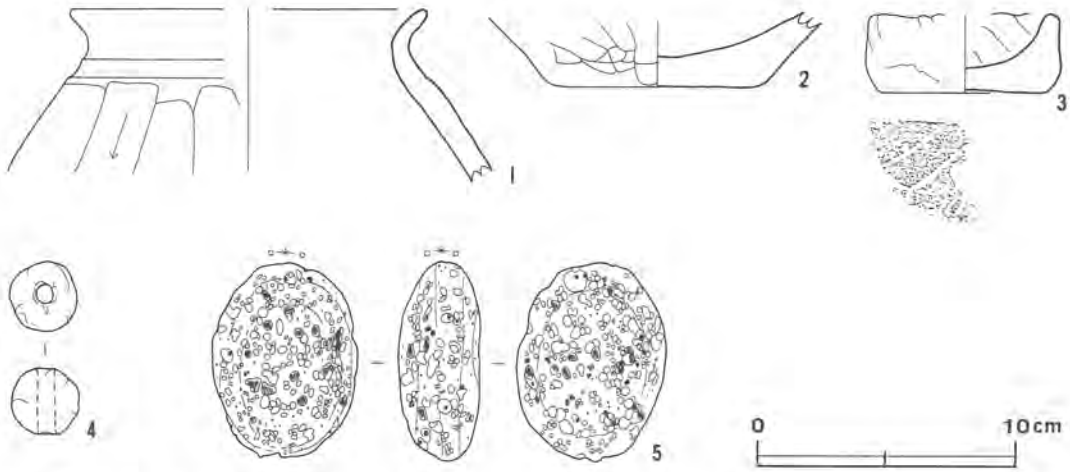


第42図　第16号住居跡実測図

第17号住居跡（第42図）

本跡は，第16号住居跡を調査中に新たに発見されたもので，第16号住居跡として調査を進めてしまった結果，カマドだけが残存しているという状態である。しかもカマドの遺存状態は悪く，カマドを構築していたと思われる粘質砂土の塊や焼土が，第16号住居跡の北側床面から浮いて検出された。

遺物は，第16号住居跡に属すると推定されるものも一応本跡の遺物として取り上げた。土師器片が主で，覆土中から出土している。器種・器形を窺えるものとしては，口縁部から胴部にかけての甕形土器（第43図１），甕形土器の底部（第43図２），手捏土器（第43図３）の外に，球状土錘（第43図４）が検出されている。



第43図　第17号住居跡出土遺物実測図

第17号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第43図 1	甕形土器 土師器	A (14.0) B (6.9)	丸く張った胴部から口縁部は「く」の字状に外反して立ち上がる。	口縁部内・外面－横ナデ。胴部外面－縦位のヘラ削り，内面－横ナデ。	砂粒・長石・スコリア 灰黄褐色 普通	10% P217
2	甕形土器 土師器	B (2.6) C (8.2)	底部は平底で，胴部は直線的に外上方に立ち上がる。	胴部外面－ヘラ削り。	砂粒・礫・長石・石英・雲母 灰褐色 普通	10% P218
3	手捏土器 土師器	A (7.3) B 3.1 C (6.4)	底部は平底で，胴部は内傾気味に立ち上がり，そのまま口縁部に至る。	口縁部内・外面－指ナデ。胴部内・外面－指頭によるナデ。底部－乾燥時の板目痕。	砂粒 褐灰色 普通	40% P219

第17号住居跡出土土製品一覧表

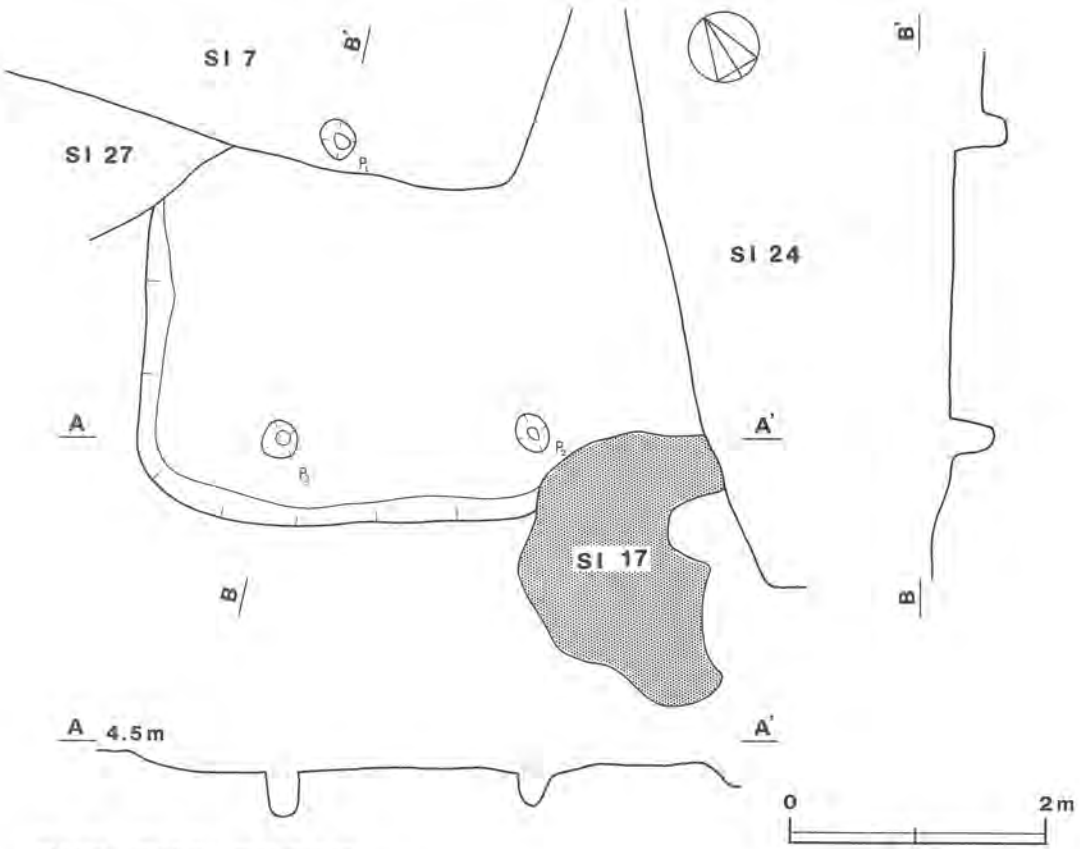
図版番号	名　称	台帳番号	大きさ(cm) たて×よこ	孔径（cm）	重量（g）	備　考
第43図 4	球状土錘	DP99	2.6×2.7	0.7	14.3	

第17号住居跡出土石製品一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	大きさ(cm) 長さ×幅×厚さ	孔径(cm)	重量(g)	石　質	備　考
第43図 5	浮　石	Q297	7.7×5.8×3.3	—	66.4	軽　石	

第18号住居跡（第44図）

本跡は，遺構群の西側部H14c₃区を中心に確認され，東側は第24号住居跡，南側は第16号住居跡，北西側は第27号住居跡，北側は第７号住居跡とそれぞれ重複していて，多くの重複により残存する本跡の部分はわずかである。新旧関係は，第７号住居跡に切り込まれているが，他とは不明



第44図　第18号住居跡実測図

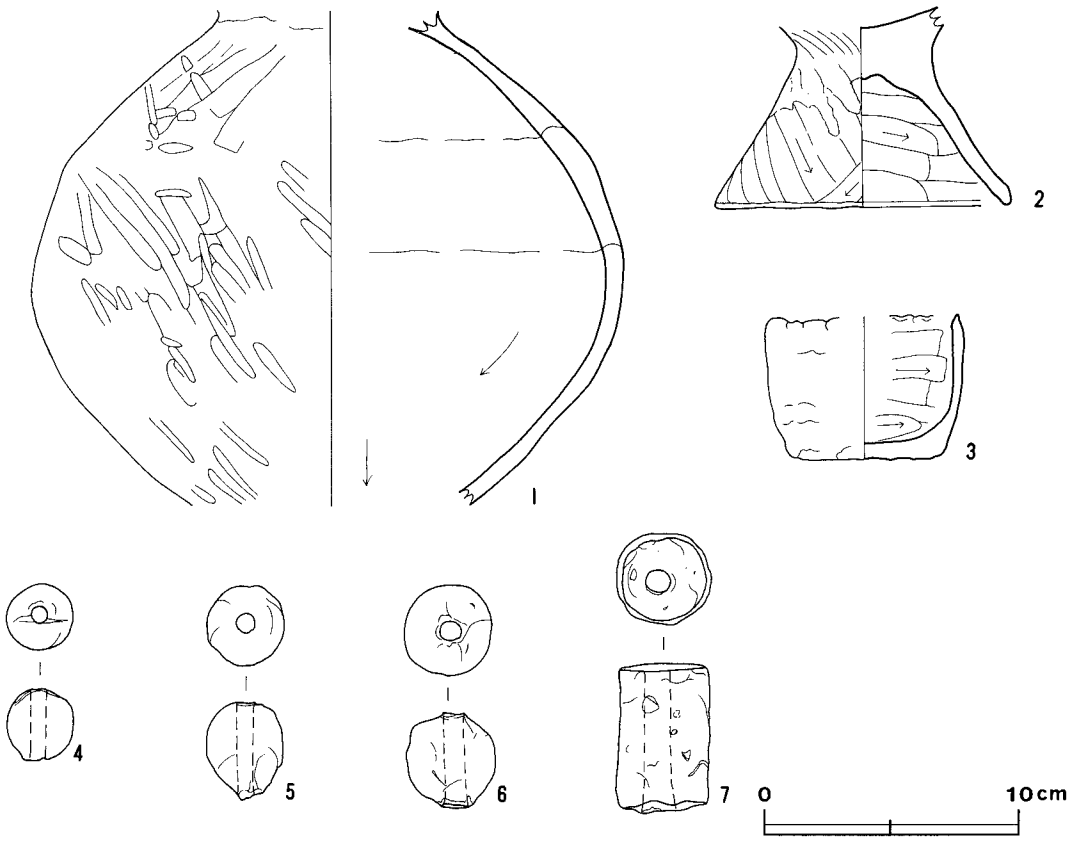
である。

形状・規模等不明である。残存部をみてみると，西コーナー部は隅丸を呈し，その部分の壁高は15cm程で壁は緩やかに立ち上がっている。床面はほぼ平坦で，礫を含む黄褐色砂土である。ピットは３か所検出され，直径30cm，深さ30～42cmで，規模や位置からいずれも主柱穴と考えられる。

カマドは重複のため消失してしまったと思われる。

覆土は自然堆積で，締まりがある。

遺物は土師器片が多く，他に須恵器片１点，土製品などで，主に第24号住居跡との重複部覆土中から出土しているので，本跡に伴うかどうかは明らかでない。土師器は南東壁際の覆土中から壺形土器の胴部（第45図１）と半完形の手捏土器（第45図３），球状土錘３点（第45図４～６）と管状土錘（第45図７）が検出されている。



第45図　第18号住居跡出土遺物実測図

第18号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第45図 1	壺形土器 土師器	B (19.5)	底部・口縁部欠損。胴部は中位に張りをもつ。	胴部外面ーヘラ磨き，内面ーナデ。	砂粒 浅黄橙色 普通	40% P222
2	高坏形土器 土師器	B (7.8) D 11.6	坏部欠損。脚部は接合部より「ハ」の字状に開く。	脚部内・外面ー刷毛目。	砂粒・スコリア 橙色 普通	50% P220
3	手捏土器 土師器	A (7.5) B 5.8 C (5.1)	底部は平底で，胴部は内彎気味に上方に立ち上がる。器肉は全体的に薄手である。	胴部外面ーナデ，内面ー横ナデ。	砂粒・礫 褐灰色 不良	40% P221

第18号住居跡出土土製品一覧表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ(cm) たて×よこ	孔径 (cm)	重量 (g)	備考
第45図 4	球状土錘	DP100	2.9×2.6	0.6	16.7	
5	〃	DP101	3.9×3.2	0.7	33.5	
6	〃	DP102	3.8×3.6	0.8	42.5	
7	管状土錘	DP411	6.0×3.7	1.4	88.2	

第19号住居跡（第46図）

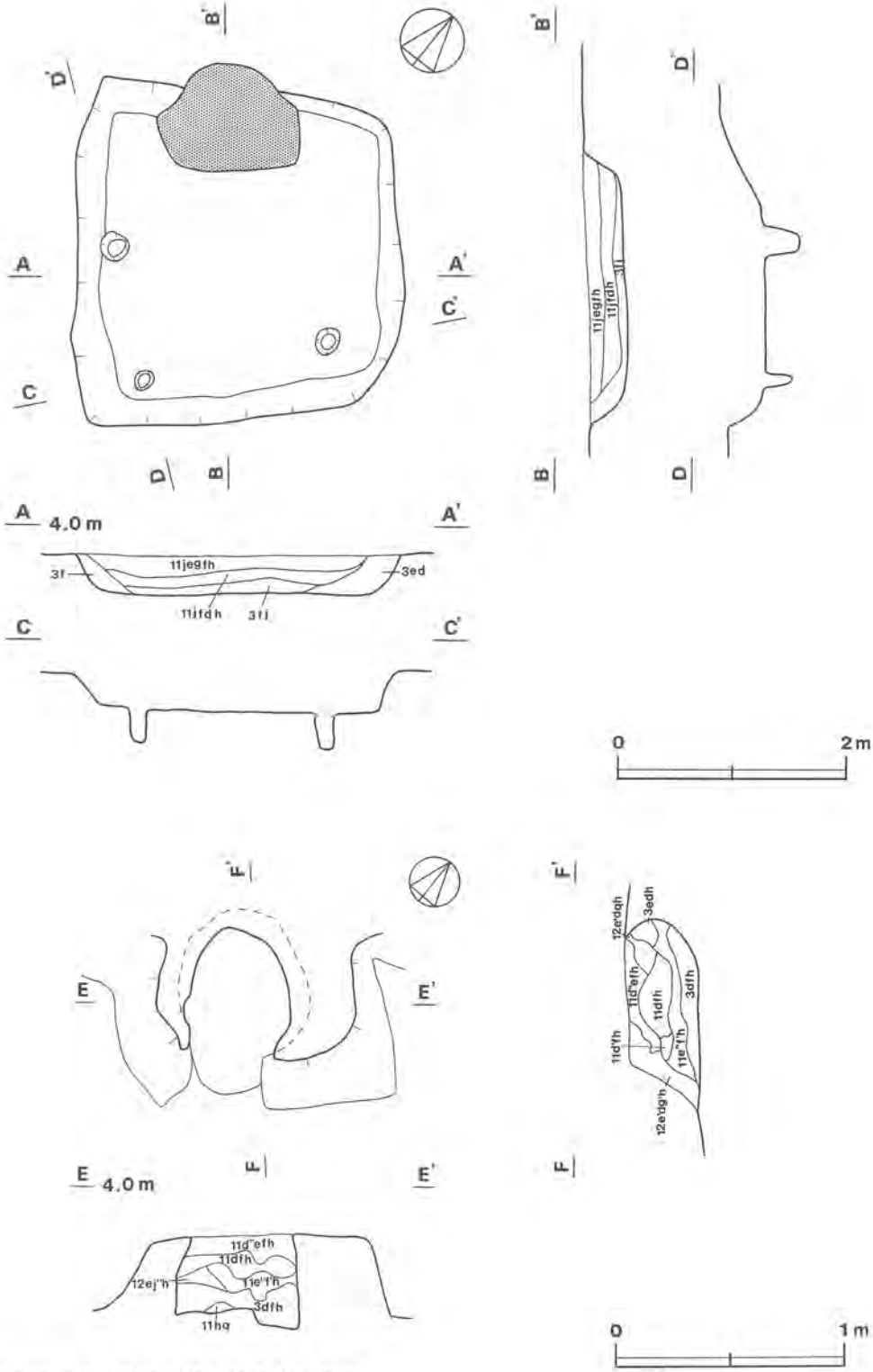
本跡は，遺跡のほぼ中央部H15d_5区を中心に確認され，第４号住居跡に隣接して位置している。

平面形は軸長2.9m程の南西壁が北東壁よりやや長い形の歪んだ隅丸方形状を呈し，当遺跡では最小規模の住居跡である。主軸方向はN－37°－Wを指している。壁高は30～40cmで，北西壁と北東壁はほぼ垂直に，他は湾曲して立ち上がっている。床は黄褐色砂土で硬く，ほぼ平坦である。ピットは東コーナー部内側，南コーナー壁下，南西壁下中央部にそれぞれ１か所ずつ検出され，いずれもほぼ同一規模で柱穴と思われる。

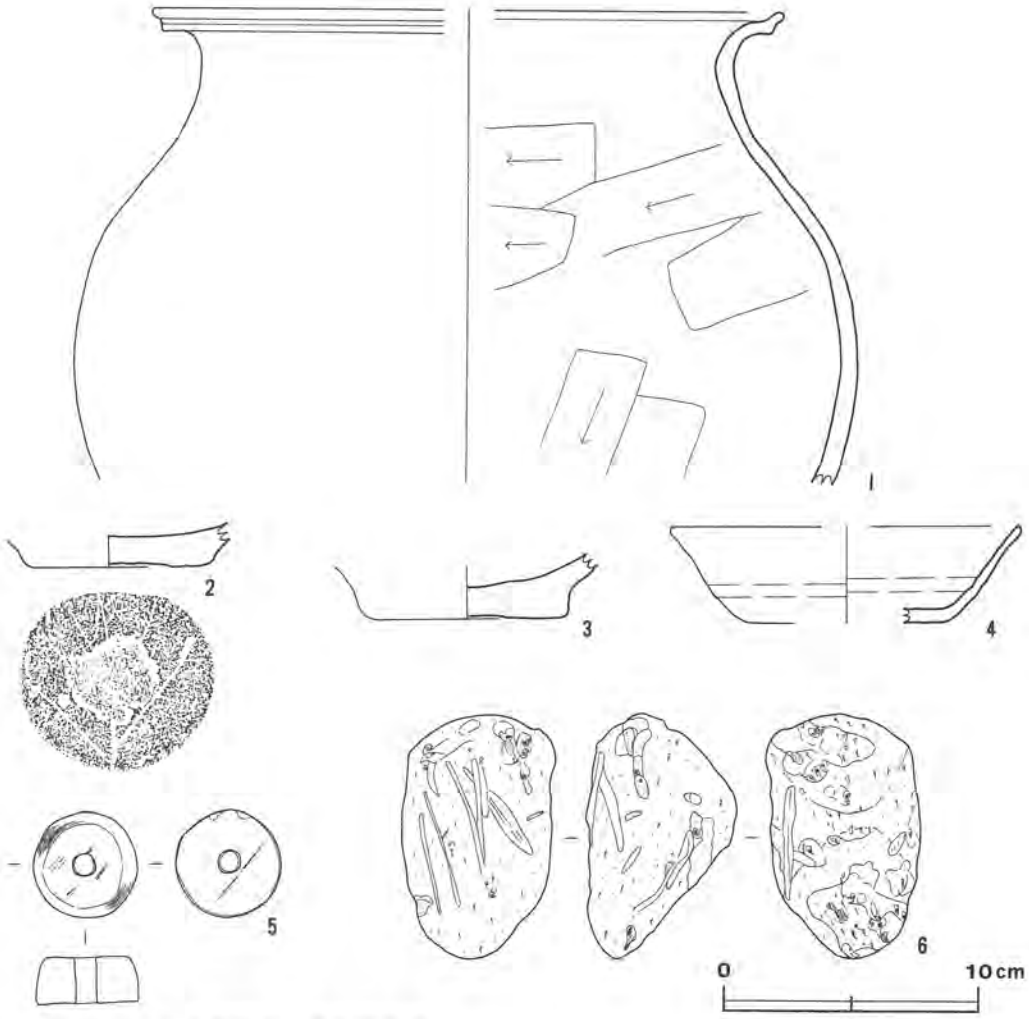
カマドは流出が著しく，粘質砂土で構築された袖部の一部が北西壁中央部に残存するだけである。燃焼部は長径80cm，短径60cmの楕円形状を呈し，わずかに床面を掘りくぼめて設けられている。燃焼部には焼土粒子・炭化粒子を主に含む暗赤褐色土や黒褐土が堆積している。

覆土は自然堆積で，上層には砂粒と極少量の焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子を含む暗赤褐色土，下層と壁際には極少量の炭化粒子を含む締まりのない黒褐色土が堆積している。

遺物は土師器片を主に，須恵器片５点と石製品が少量出土している。土師器はカマドの袖部付近から口縁部から胴部にかけての甕形土器（第47図１），中央部からやや南東側の床面近くから甕形土器の底部（第47図３）が，須恵器はカマド内から坏（第47図４）が，石製品は南東壁際の覆土中から紡錘車（第47図５）が検出されている。



第46図　第19号住居跡・カマド実測図



第47図　第19号住居跡出土遺物実測図

第19号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第47図 1	甕形土器 土師器	A (24.8) B (18.8)	口縁部は丸く張った胴部から外彎して開き，端部は外上方につまみ出されている。	口縁部内面ー横ナデ，外面ーナデ。胴部外面ナデ，内面ーヘラ削り後ナデ。	砂粒・雲母・長石・スコリア にぶい橙色 不良	10% P223
2	甕形土器 土師器	B (1.7) C 6.7	底部のみ遺存。底部は平底。	底部ー木葉痕。	砂粒・礫 灰白色 普通	10% P225
3	甕形土器 土師器	B (2.5) C 8.1	底部は平底で，胴部は外上方に立ち上がると思われる。	底部内面ーヘラ削り，外面ーナデ。	砂粒・礫 にぶい橙色 普通	10% P224

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第47図 4	坏 須恵器	A (13.7) B 3.9 C (7.8)	底部は平底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。	水挽き成形。底部一一定方向へのヘラ削り。体部に水挽き痕を消している。	砂粒・雲母 黄灰色 普通	10% P226

第19号住居跡出土石製品一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	大きさ(cm) 上径×下径×厚さ	孔径(cm)	重量(g)	石　質	備　考
第47図 5	紡錘車	Q 13	3.3×4.2×1.8	0.8	46.2	滑石	
6	砥石	Q304	9.7×6.2×5.9	—	158.4	軽石	

第20号住居跡（第48図）

本跡は，遺跡の最西端G14 j_1区を中心に確認され，北側は第14号住居跡と重複している。西側には農道を挟んで宮の脇遺跡が存在する。遺構確認面に明瞭な黒褐色土の落ち込みが認められ，少なくても２軒の住居跡（ＳＩ－14・20）が重複しているのを確認した。各プランを想定して本跡の調査を先行したが，第14号住居跡との新旧関係は不明である。

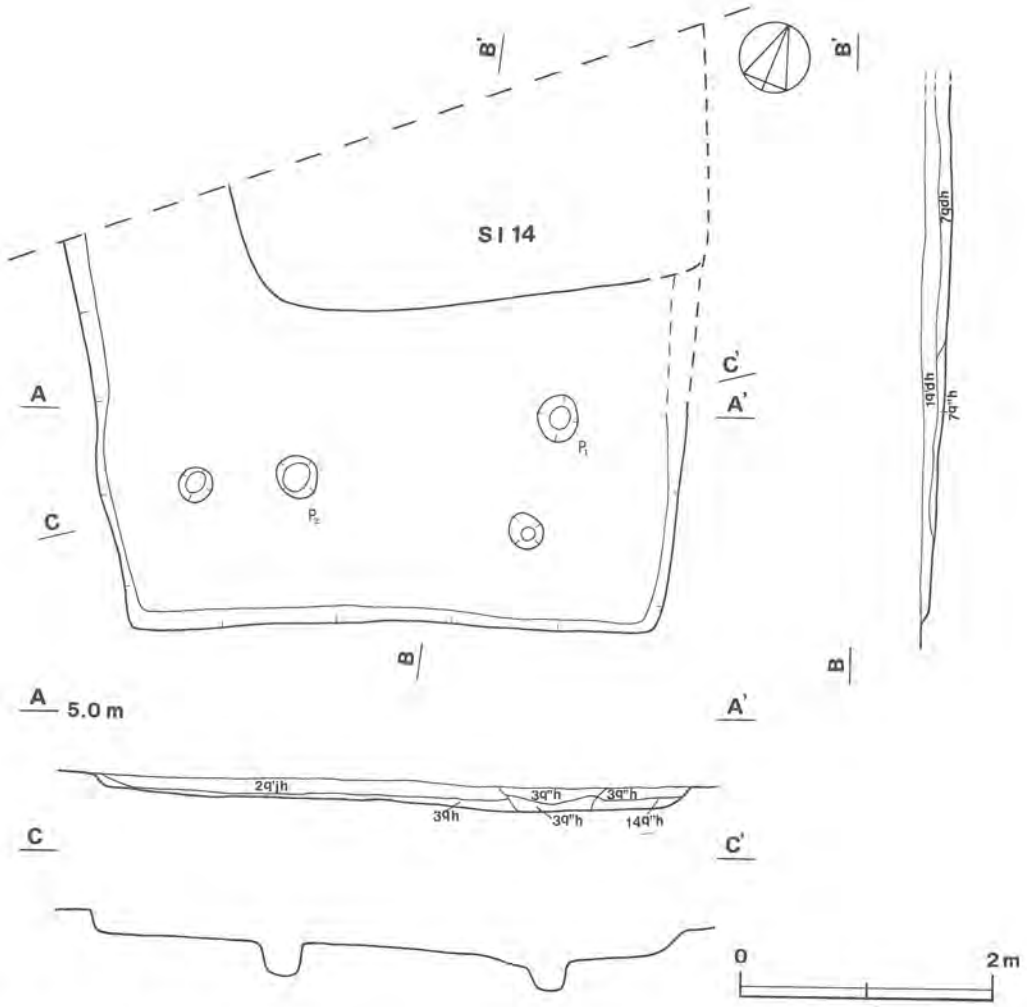
本跡の位置する地区は，小礫を多量に含むところで，壁の遺存状態が非常に悪く，さらに覆土の排除，壁・床面の検出作業などに困難をきたした。また，中央部から北側は第14号住居跡との重複や調査区域外のため明確にできなかった。

形状や規模等不明であるが，南東壁は4.3mで，両端コーナー部は隅丸を呈している。残存壁高は10～25cmで，壁はやや緩やかに立ち上がっている。床は黄褐色砂土で，礫が多い。床面は南東側に向かってわずかに傾斜している。ピットは重複部以外に４か所検出され，P_1とP_2が位置や規模から主柱穴と考えられる。どちらも直径36cm，深さ25cm前後と同一規模である。他のピットについては不明である。

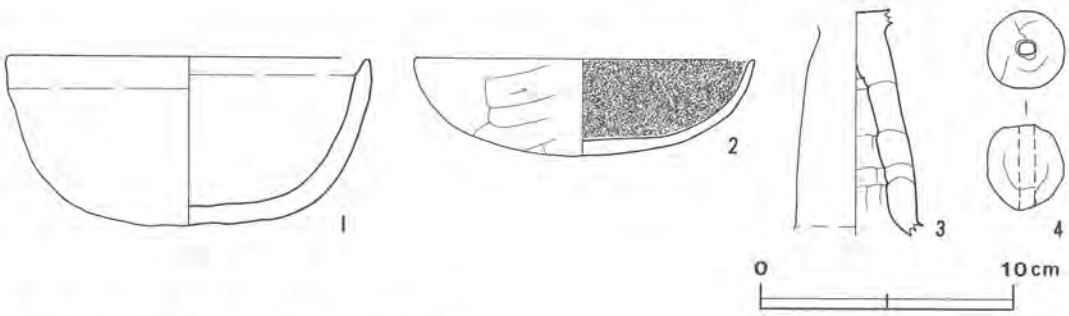
カマドは北西壁に存在したと思われるが，区域外のため未検出である。

覆土は主に礫・砂粒を含む黒褐色土が堆積している。

遺物は土師器片を主に，須恵器片，土製品が各ピット周辺から出土しているが，量的には少ない。土師器はP_2のところから半完形の椀形土器（第49図１），第14号住居跡との重複部床面から高坏形土器の脚部（第49図３）が，須恵器はP_1の南西側床面上から坏（第49図２）が，第14号住居跡との重複部床面から球状土錘（第49図４）が検出されている。



第48図　第20号住居跡実測図



第49図　第20号住居跡出土遺物実測図

第20号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第49図 1	椀形土器 土師器	A 14.3 B 6.7 C (－)	底部は丸底で，胴部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部内・外面－横ナデ。体部外面－横ナデ，内面－ナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	50% P227
2	坏形土器 土師器	A 13.5 B 3.9 C (－)	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，そのまま口縁部に至る。	口縁部内・外面－横ナデ。体部外面－横位のヘラナデ，内面－ヘラナデ後黒色処理。	砂粒・スコリア にぶい褐色 普通	70% P228
3	高坏形土器 土師器	B (9.0)	坏部欠損。脚部は円柱状に開く。	脚部外面－ヘラ磨き，内面－ヘラおさえ。	砂粒・雲母 橙色 普通	30% P229

第20号住居跡出土土製品一覧表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ(cm) たて×よこ	孔径(cm)	重量(g)	備考
第49図 4	球状土錘	DP103	3.3×3.0	0.6	31.5	

第21号住居跡（第50図）

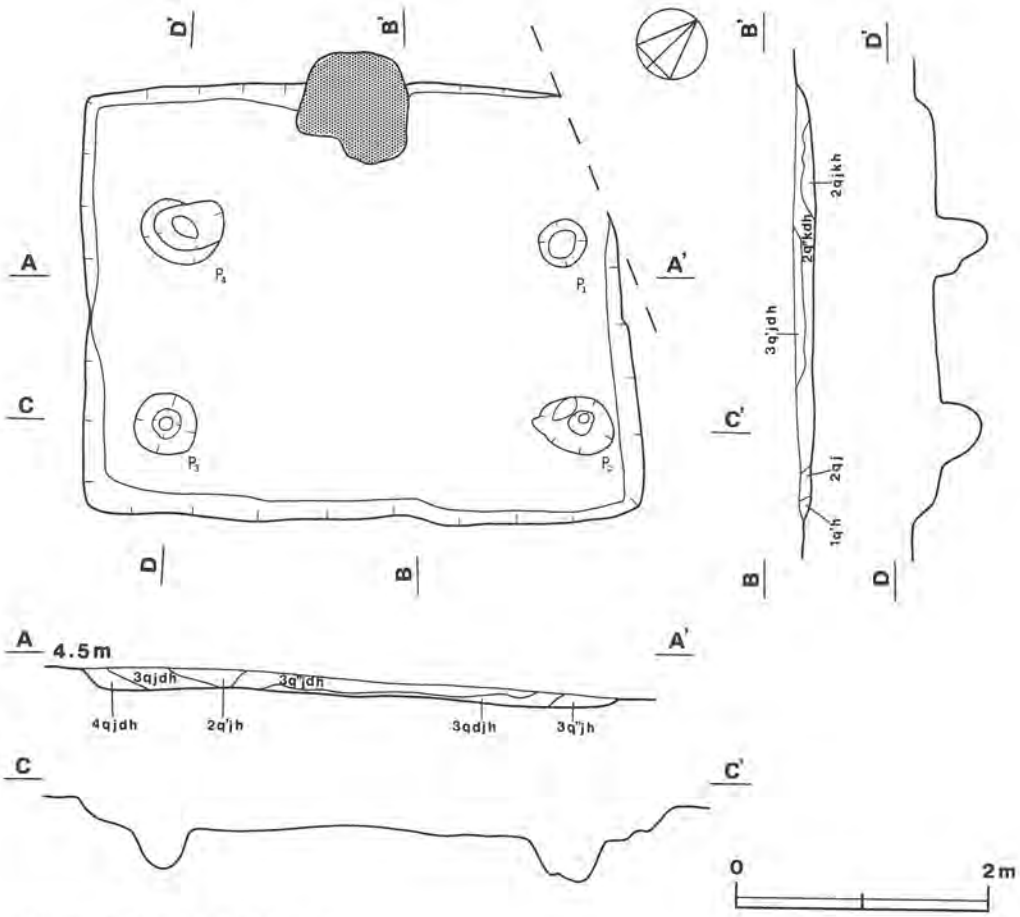
本跡は，遺跡の西側部H14a 4区を中心に確認され，南側コーナー部が第25号住居跡と重複している。新旧関係は不明である。

平面形は長軸（北東－南西）4.2m，短軸（北西－南東）3.5mの長方形を呈し，主軸方向はN－45°－Wを指している。壁高は20cmと浅く，壁は緩やかに立ち上がっている。床は黄褐色砂土で，カマド前から南東壁近くまでと，中央部から南西側にかけて硬く踏み固められていて，特に中央部が硬い。床面には少量の炭化粒子と極少量の焼土粒子が付着している。なお，東側に向かってやや傾斜している。主柱穴は4か所検出され，いずれも壁近くに位置し，4か所を結ぶと長方形となる。直径は40～60cm，深さは23～50cmで，最小規模のP_1を除いて，段状の掘り込みが認められる。

カマドは北西壁中央部に位置していたものと思われる。全体が流出していて，焼土の範囲はとらえられるがカマドの形状は残存しない。砂土に混入した粘土も，雨水等の影響でブロック状に分離し流出している。

覆土は小礫・砂粒・焼土粒子を含む黒褐色土を主として，壁・床面付近には暗褐色土や褐色土が自然堆積している。

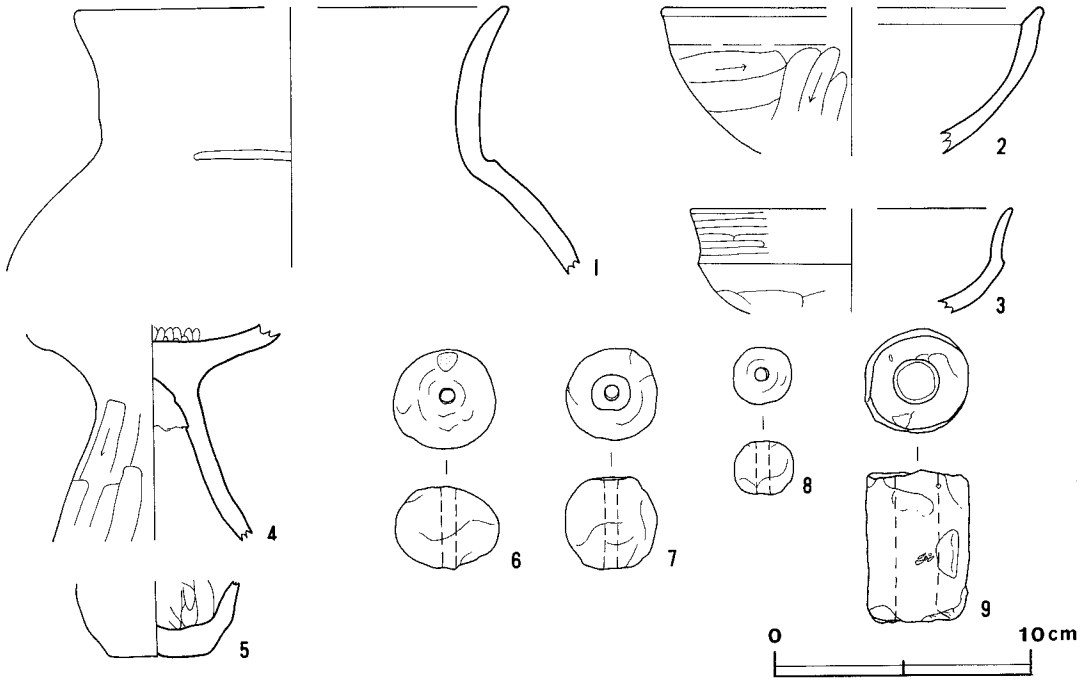
遺物は土師器片が大半で，量的には少ない。南西壁中央部から壺形土器（第51図1）が，南側から高坏形土器の脚部（第51図4）が，南東壁際から坏形土器が2点（第51図2・3），手捏土器（第51図5）がいずれも覆土中から出土している。その外に球状土錘3点（第51図6・7・8），管状土錘（第51図9）がいずれも完形で出土している。



第50図　第21号住居跡実測図

第21号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第51図 1	壺形土器 土師器	A 17.0 B (10.7)	口縁部は球形の胴部から外反して開く。口頸部と胴部との境に段をもつ。	口縁部内・外面－横ナデ。胴部外面－ヘラナデ，内面－ナデ。	砂粒・雲母 にぶい赤褐色 普通	10% P230
2	椀形土器 土師器	A (15.0) B (5.8)	底部欠損。胴部は内彎して開き，半球状を呈する。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面－横ナデ。胴部外面－ヘラ削り，内面－ナデ。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	20% P232
3	坏形土器 土師器	A (12.6) B (4.1)	体部は内彎しながら外上方に開き，口縁部との境に段をもつ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面－横ナデ。体部外面－ヘラ削り，内面－ナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	30% P233
4	高坏形土器 土師器	B (8.7)	坏部は接合部より大きく開き，脚部は内彎気味に開く。	体部外面－ヘラナデ，内面－ヘラナデ。脚部外面－ヘラナデ，内面－ナデ。	砂粒・雲母・スコリア にぶい赤褐色 普通	30% P231



第51図　第21号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第51図 5	手捏土器 土師器	B（2.9） C　4.0	底部は平底で，胴部は内彎しながら外上方に開く。	胴部内・外面－指頭によるナデ。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	10% P234

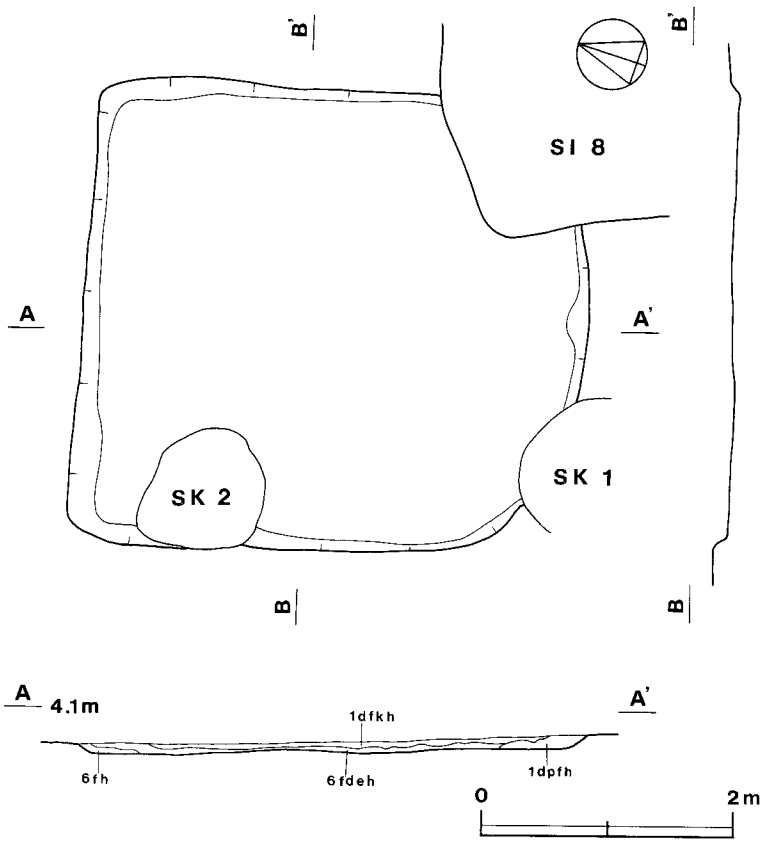
第21号住居跡出土土製品一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	大きさ(cm) たて×よこ	孔径（cm）	重量（g）	備　考
第51図 6	球状土錘	DP104	3.3×4.0	0.6	47.2	
7	〃	DP105	3.7×3.6	0.5	48.5	
8	〃	DP106	2.1×2.3	0.5	10.1	
9	管状土錘	DP412	6.0×4.1	1.7	111.5	

第22号住居跡（第52図）

本跡は，遺構群のほぼ中央部H15e2区を中心に確認され，南東側は第８号住居跡と重複している。新旧関係は不明である。地山が北に向かって緩傾斜する地区に位置しているため，表土除去の際に遺物が露呈してしまい，遺物を取り上げてからプランの確認をした。

地山下に掘り込んでいる壁は10cm弱程で，北壁と北西コーナー部を除いて明瞭な壁を確認できなかった。西壁は，遺物が多量に出土している状態，北西コーナー部との関係，そして北壁との角度の関係等から推定して設定した。平面形は一辺3.8m前後の隅丸方形を呈するものと思われる。床は黄褐色砂土で，床面はやや硬くほぼ平坦である。



カマドやピットは検出されなかった。当遺跡の住居跡はほとんどがこれらの施設を伴っていることから，本跡は同類の住居跡ではなく，住居跡状遺構とした方が適切と考えている。

覆土は上層に褐色砂土，下層ににぶい赤褐色砂土が堆積していて，比較的粘性と締まりがある。

本跡の出土遺物として取り上げたものはない。

第52図　第22号住居跡実測図

第23号住居跡（第53図）

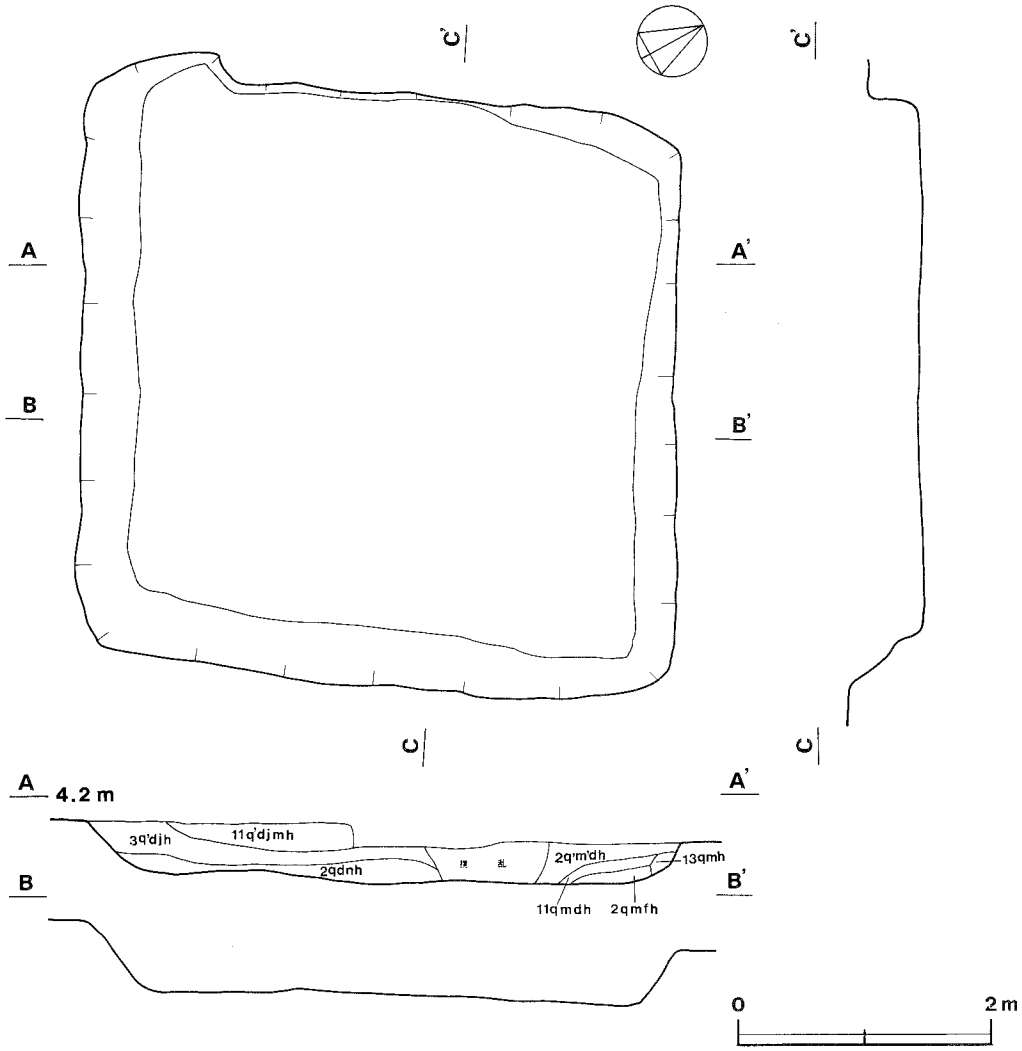
本跡は，遺構群のほぼ中央部H14b9区を中心に確認され，第11号住居跡の北西側に隣接している。

平面形は一辺4.7mの隅丸方形を呈し，壁高40～50cm，壁はほぼ垂直に立ち上がっている。床は黒褐色砂土で，床面はやや軟弱で，ほぼ平坦である。

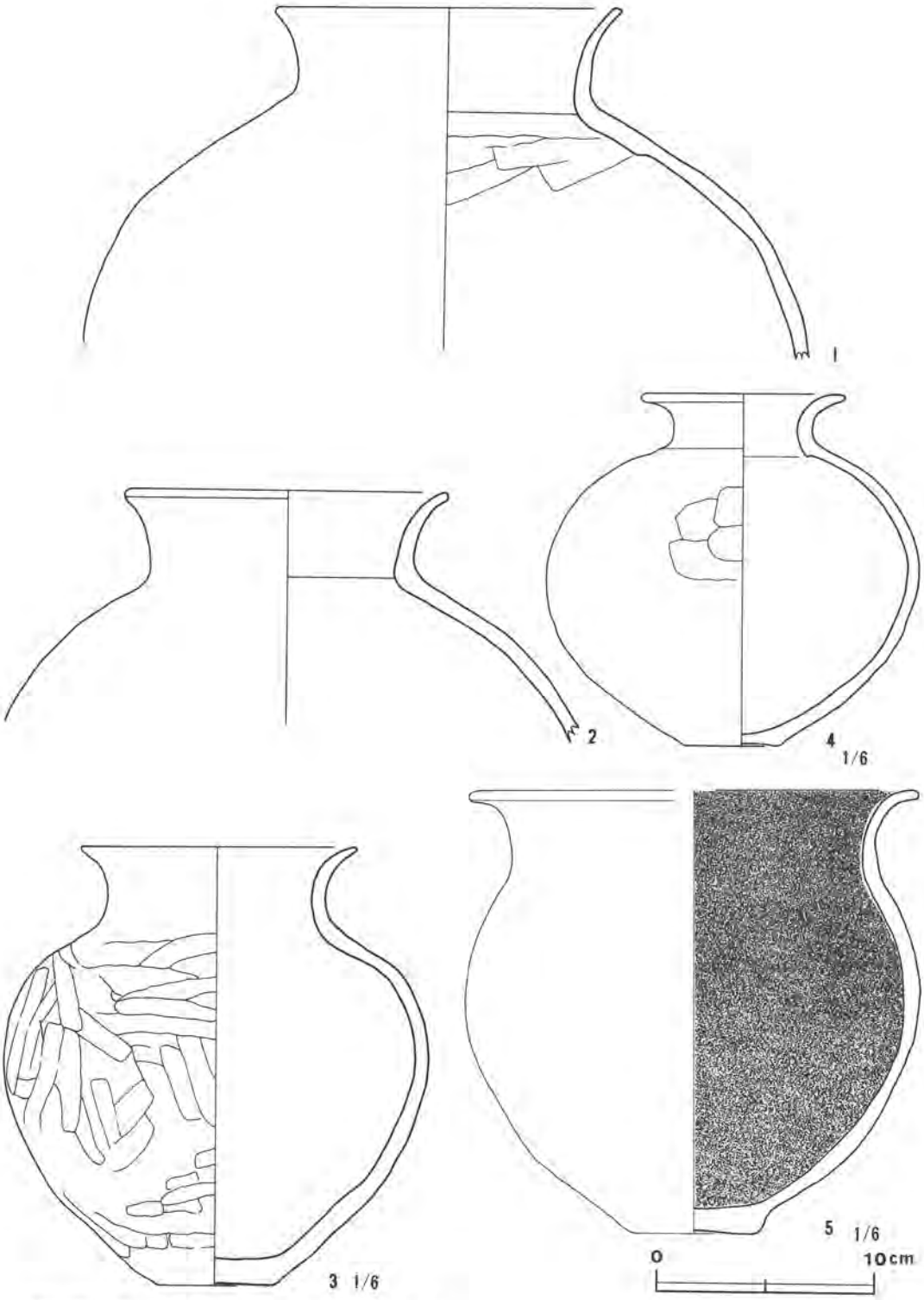
覆土は一部撹乱がみられるが，小礫・砂粒・粘土粒子・焼土粒子を含む暗褐色土や黒褐色土が自然堆積している。

本跡も第22号住居跡同様カマドやピットは検出されず，住居跡状遺構と考える。

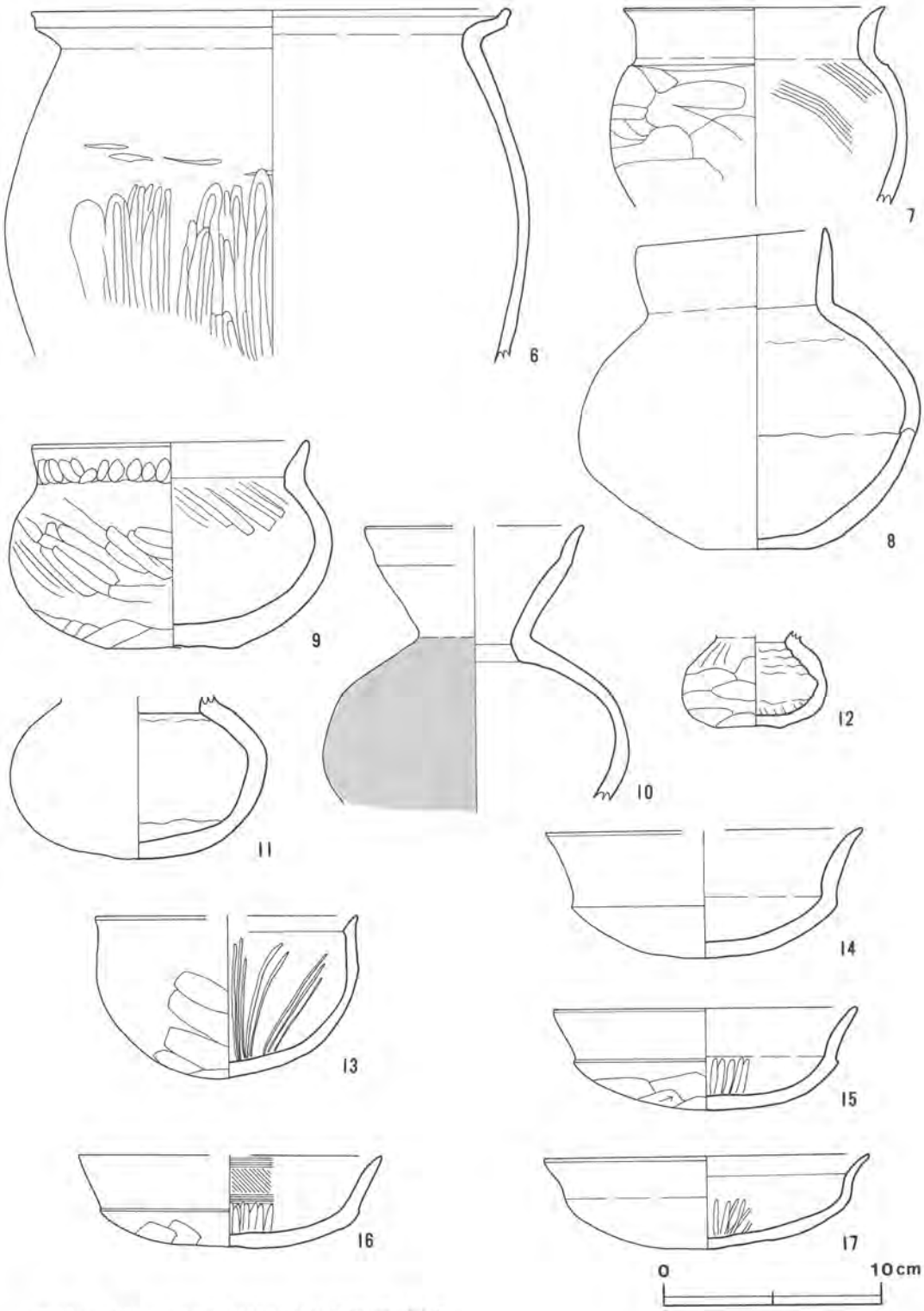
遺物は住居跡全域から多量の土師器片が出土している。土師器では完形に近い壺形土器（第54図３・４），小形壺形土器（第55図７～９），小型坩形土器（第55図12），坏形土器（第55図14～17・第56図18・19），半完形の甕形土器（第54図５・第55図６），坩形土器（第55図10・11），高坏形土器（第56図20～23），手捏土器（第56図26），口縁部から胴部にかけて遺存する壺形土器（第54図１・２），椀形土器（第55図13），口縁部が欠損している手捏土器（第56図27）等が，須恵器は完形に近い高坏（第56図25）が１点と，極少量の縄文式土器片・陶器片が出土している。その他は，球状土錘（第57図29～45），管状土錘（第57図46・47），ミニチュア土製品（第57図28），石製の有孔円板（第57図48～55），剣形模造品（第57図56），紡錘車（第57図57）等である。



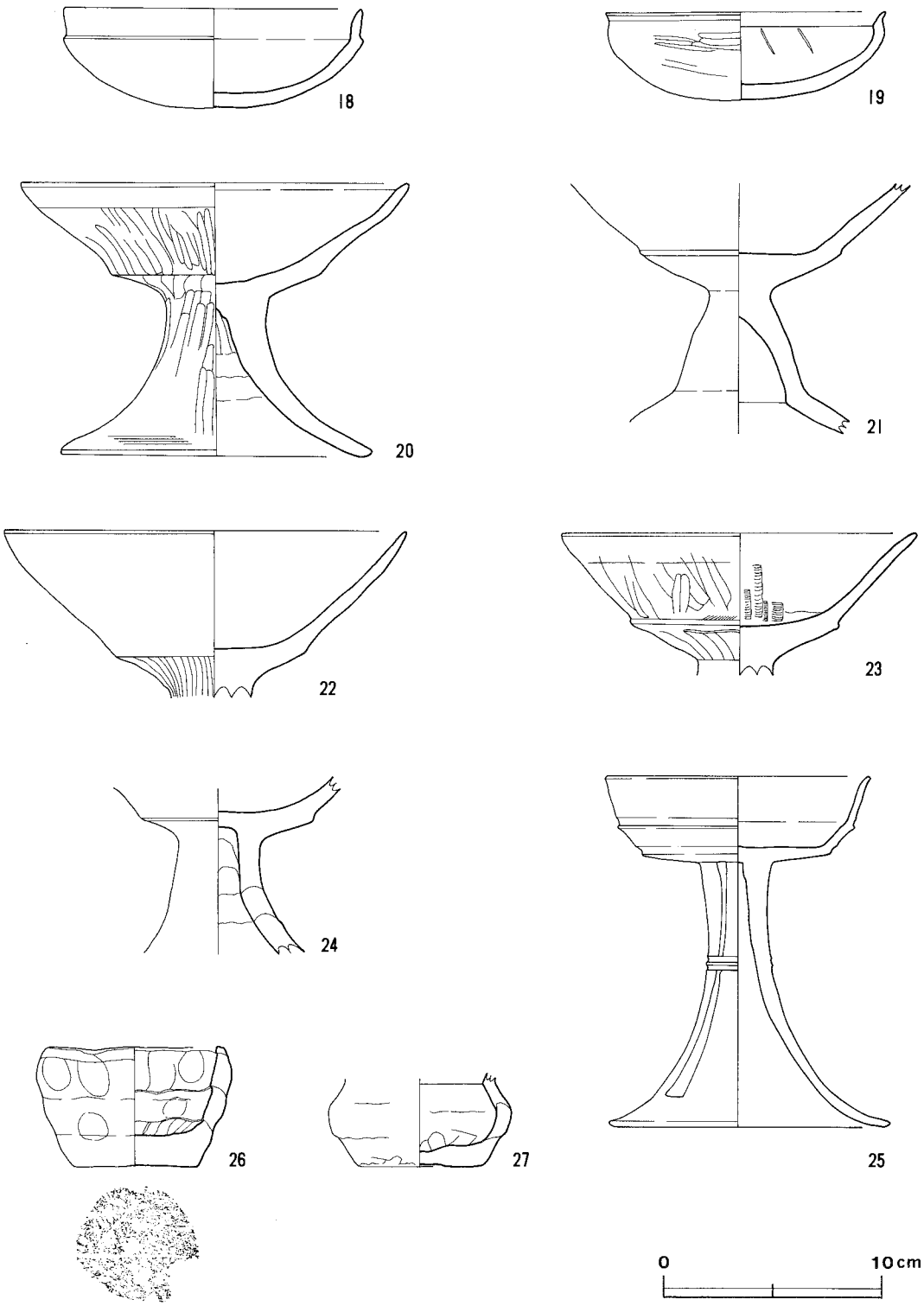
第53図　第23号住居跡実測図



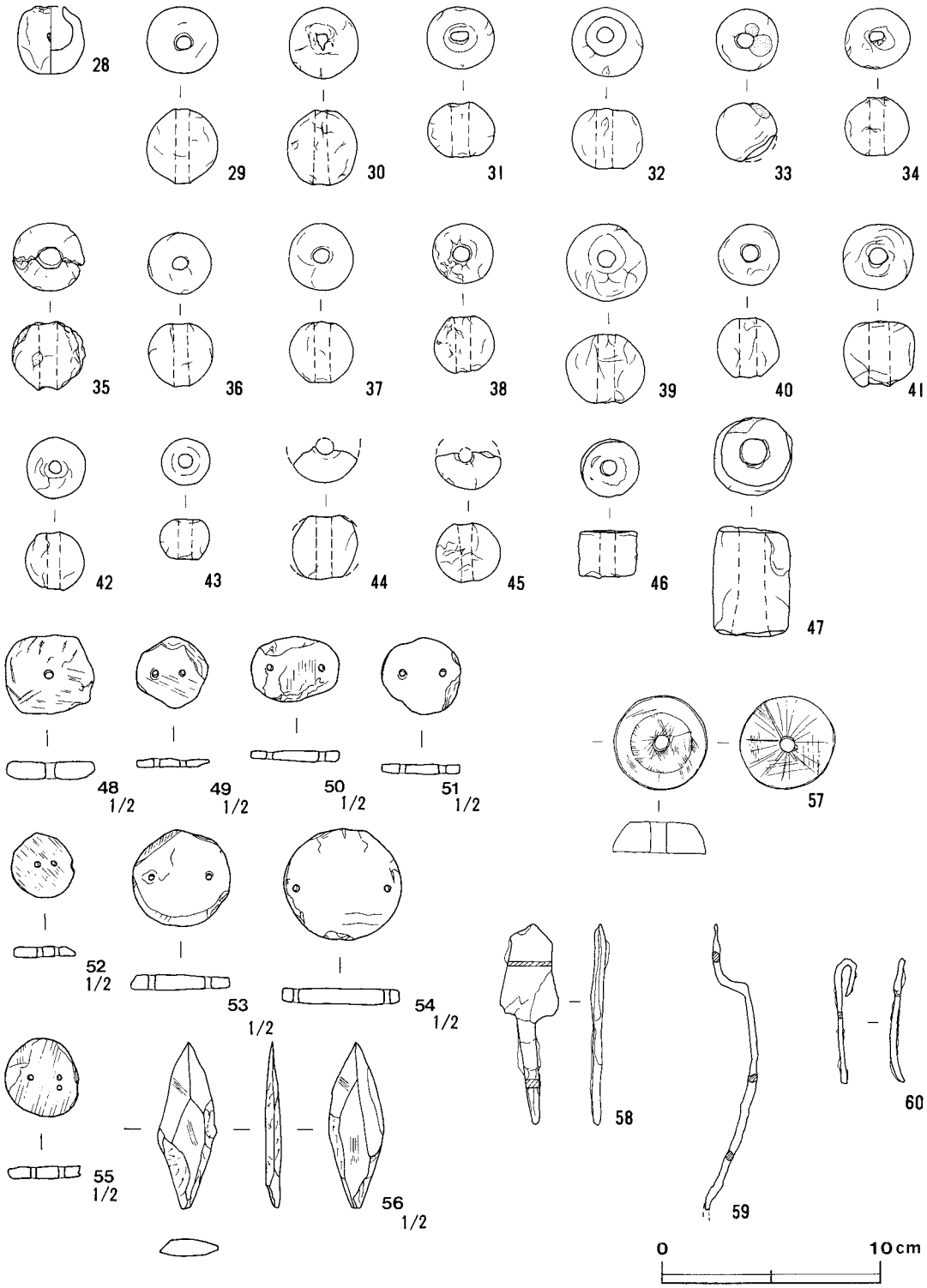
第54図　第23号住居跡出土遺物実測図（1）



第55図　第23号住居跡出土遺物実測図（２）



第56図　第23号住居跡出土遺物実測図（３）



第57図　第23号住居跡出土遺物実測図（４）

第23号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第54図 1	壺形土器 土師器	A 16.0 B (15.9)	球状胴部から口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内面ー横ナデ，外面ーヘラナデ。胴部外面ーヘラナデ，内面ー上位ヘラ削り。	砂粒 赤色 普通	30% P237
2	壺形土器 土師器	A 14.9 B (11.4)	球状胴部から口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部外面ーヘラナデ，内面ー横ナデ。胴部内・外面ーヘラナデ。	砂粒 赤褐色 普通	20% P238
3	壺形土器 土師器	A 18.0 B 28.5 C 7.3	底部は平底で，胴部は上位に張りをもつ。口縁部は外彎して開く。	口縁部内・外面ー横ナデ。胴部外面ーヘラ削り，内面ーナデ。	砂粒・スコリア・雲母 浅黄橙色 良好	80% P236
4	壺形土器 土師器	A 18.8 B 32.4 C 9.0	底部は平底で，胴部は中位に張りをもつ。口縁部は「コ」の字状を呈している。	口縁部内・外面ー横ナデ。胴部外面ーヘラ削り後ナデ，内面ーナデ。	砂粒・スコリア・雲母・長石 浅黄橙色 普通	70% P235
5	甕形土器 土師器	A (29.6) B 28.8 C 8.3	底部は平底で，胴部は中位に張りをもつ。口縁部は「コ」の字状を呈す。	口縁部内・外面ー横ナデ。胴部外面ーヘラナデ，内面ーナデ。黒色処理。	砂粒・長石・礫 灰黄色 普通	30% P240
第55図 6	甕形土器 土師器	A 22.1 B (16.3)	胴部はやや上位に張りをもつ。口縁部は大きく外反しながら開き，端部を上方につまみ出している。	口縁部内・外面ー横ナデ。胴部外面ーヘラ削り，内面ーナデ。	砂粒・雲母・長石・スコリア にぶい橙色 普通	40% P239
7	小型壺形土器 土師器	A 12.0 B (9.2)	胴部は丸く張り，口縁部は「コ」の字状を呈す。	口縁部内・外面ー横ナデ。胴部外面ー横位のヘラ削り，内面ーナデ。	砂粒・礫 明赤褐色 普通	50% P245
8	小型壺形土器 土師器	A 8.7 B 14.9 C 5.0	底部は平底で，胴部は中位に張りをもち，やや下位に孔を穿つ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面ー横ナデ。胴部外面ーヘラナデ。孔は胴部内面から穿っている。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	95% P241
9	小型壺形土器 土師器	A (12.6) B 9.6 C 5.9	底部は平底で，胴部は中位に張りをもつ。口縁部は外反して開く。	口縁部外面ー上位横ナデ，下位ヘラ削り，内面ー横ナデ。胴部外面ー斜位のヘラ削り。	砂粒・礫 にぶい橙色 普通	50% P244
10	坩形土器 土師器	A (10.2) B (12.7)	胴部は扁平な球形を呈し，口縁部は直線的に外上方に開き，上位に稜をもつ。	口縁部内・外面ー横ナデ。胴部外面ーナデ。口縁部内・外面・胴部外面ー朱塗り。	砂粒・雲母 赤色 普通	30% P261
11	坩形土器 土師器	B (7.5) C (ー)	底部は丸底で，胴部は中位に張りをもつ扁平な球形である。口縁部は欠損。	胴部外面ーナデ。	砂粒・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	50% P242
12	小型坩形土器 土師器	B (4.4) C 3.2	底部は扁平で，胴部はやや下位に張りをもつ。口縁部欠損。	胴部外面ーヘラナデ。胴部中・下位外面ーヘラ削り。	砂粒・雲母 橙色 普通	70% P243
13	椀形土器 土師器	A (12.0) B 7.5 C (ー)	底部は丸底で，胴部は内彎しながら外上方に立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部内・外面ー横ナデ。胴部外面ーヘラ削り。	砂粒・長石・スコリア にぶい褐色 普通	30% P246

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第55図 14	坏形器 土器	A (14.6) B 5.9 C (−)	底部は丸底で，体部は内彎しながら開き，口縁部との境に稜をもつ。口縁部は大きく外反する。	口縁部内・外面－横ナデ。体部外面－ヘラナデ。	砂粒・スコリア・雲母 橙色 普通	30% P253
15	坏形土器 土師器	A (13.8) B 4.7 C (−)	底部は丸底で，体部は内彎しながら開き，口縁部との境に稜をもつ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面－横ナデ。体部外面－ヘラ削り，内面－ヘラ磨き。	砂粒 明赤褐色 普通	60% P250
16	坏形土器 土師器	A (14.0) B 4.3 C (−)	底部は丸底で，体部は内彎しながら開き，口縁部との境に稜をもつ。口縁部は直線的に開く。	口縁部内・外面－横ナデ。体部外面－ヘラナデ，内面－ヘラ磨き。	砂粒 赤褐色 普通	40% P252
17	坏形土器 土師器	A 15.0 B 4.3 C (−)	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開き，口縁部は外彎しながら開く。	口縁部内・外面－横ナデ。体部外面－ナデ，内面－ヘラ磨き。	砂粒・雲母・スコリア 橙色 普通	80% P249
第56図 18	坏形土器 土師器	A (13.6) B 4.6 C (−)	底部は丸底で，体部は内彎しながら開き，口縁部との境に稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面－横ナデ。体部外面－ヘラナデ，内面－横ナデ。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	60% P251
19	坏形土器 土師器	A (12.7) B 4.1 C 3.6	底部は丸底で，体部は内彎して開き，口縁部は短く，端部を外上方につまみ出している。	口縁部内・外面－横ナデ。体部外面－横位のヘラナデ，内面－ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	70% P248
20	高坏形土器 土師器	A (12.9) B 12.7 D 14.4 E 7.3	体部は内彎気味に大きく開き，下位に稜をもつ。脚部はラッパ状に開く。	体部内・外面－ヘラ磨き。口縁部内・外面－横ナデ。脚部外面－ヘラ磨き。裾部内・外面－横ナデ。	砂粒・長石・礫 明赤褐色 普通	50% P256
21	高坏形土器 土師器	B (11.5)	体部は直線的に外上方に開き，下位に稜をもつ。脚部はやや膨みをもって開き，裾部は屈曲して大きく広がる。	体部内・外面－ヘラ磨き。脚部外面－ナデ，内面－指ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	50% P257
22	高坏形土器 土師器	A 18.5 B (7.7)	体部は直線的に外上方に立ち上がり，口縁部はやや内傾する。体部下位に稜をもつ。	口縁部内・外面－横ナデ。体部外面－ヘラナデ，内面－ナデ。	砂粒・スコリア・雲母・礫 橙色 普通	60% P259
23	高坏形土器 土師器	A 16.3 B (6.6)	体部は直線的に開いて立ち上がり，そのまま口縁部に至る。下位に稜をもつ。	口縁部内・外面－横ナデ。体部外面－ヘラナデ，内面－横ナデ。	砂粒・雲母・スコリア 浅黄橙色 普通	40% P260
24	高坏形土器 土師器	B (8.1)	体部は直線的に開いて立ち上がる。下位に稜をもつ。脚部はラッパ状に開く。	体部内・外面－ヘラ磨き。脚部外面－ヘラ磨き。	砂粒・雲母 赤色 普通	30% P258
25	高坏 須恵器	A 12.0 B 16.1 D 12.4 E 12.1	体部は外傾して開き，底部・口縁部との境に稜をもつ。脚部は中位に3つの稜をもち，ラッパ状に開く。長方形透しは3個。	水挽き成形。受部－回転ヘラ切り。ロクロ回転は右。	砂粒・細砂・長石 粘土 灰色 普通	90% P265
26	手捏土器 土師器	A 8.2 B 5.5 C 5.1	底部は平底で，胴部は内彎気味に外上方に立ち上がる。	底部－木葉痕。胴部内・外面－指ナデ。輪積痕が残る。	砂粒・雲母 橙色 普通	60% P262

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第56図 27	手捏土器 土師器	B（4.3） C　5.8	底部は平底で，胴部は外反して立ち上がり，中位に張りをもつ。中位より内傾して立ち上がる。	胴部内・外面－指ナデ，外面－輪積痕が残る。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	30% P263

第23号住居跡出土土製品一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	大きさ(cm) たて×よこ	孔径（cm）	重量（g）	
第57図 28	ミニチュア土製品	DP493	3.2×3.0	1.2	23.8	
29	球状土錘	DP107	33.5×3.3	0.7	31.6	
30	〃	DP108	3.5×3.3	0.8	33.7	
31	〃	DP109	2.5×3.0	0.8	21.3	
32	〃	DP110	2.9×3.3	0.8	25.2	
33	〃	DP111	2.8×2.9	0.8	(18.8)	一部欠損
34	〃	DP112	2.8×3.0	0.7	(20.8)	〃
35	〃	DP113	3.2×3.3	1.0	28.8	
36	〃	DP114	2.9×2.9	0.7	20.3	
37	〃	DP115	2.8×3.1	0.7	22.1	
38	〃	DP116	2.6×2.8	0.7	17.6	
39	〃	DP117	3.2×3.7	0.8	37.8	
40	〃	DP118	2.8×2.9	0.8	17.3	
41	〃	DP119	3.1×3.3	1.0	29.8	
42	〃	DP120	2.7×2.9	0.6	19.4	
43	〃	DP121	1.9×2.2	0.6	8.2	
44	〃	DP122	(3.0)×(3.0)	0.7	(11.6)	一部残存
45	〃	DP123	(2.8)×(3.0)	0.7	(10.6)	半分欠損
46	管状土錘	DP413	2.2×2.7	0.7	20.5	
47	〃	DP414	5.1×3.6	1.8	69.5	

第23号住居跡出土石製品一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	大きさ(cm) 長さ×幅×厚さ	孔径(cm)	重量(g)	石　質	備　考
第57図 48	有孔円板	Q65	2.4×2.7×0.6	0.3	6.2	滑　石	単孔，方形
49	〃	Q93	2.2×2.2×0.3	0.2	2.0	〃	双孔
50	〃	Q94	2.0×2.7×0.4	0.2	3.0	〃	双孔,楕円形
51	〃	Q95	2.4×2.4×0.3	0.2	2.9	〃	双孔
52	〃	Q96	2.0×(1.9)×0.3	0.2	2.4	〃	〃
53	〃	Q97	2.9×3.0×0.5	0.2	7.8	〃	〃
54	〃	Q98	3.4×3.7×0.4	0.2	10.3	〃	〃
55	〃	Q242	(2.4)×(2.3)×0.4	0.2	(3.7)	〃	3孔 一部欠損 穿孔途中
56	剣形模造品	Q251	5.1×(1.8)×0.5	(－)	(5.9)	〃	一部欠損

図版番号	名　称	台帳番号	大きさ(cm) 上径×下径×厚さ	孔径(cm)	重量(g)	石　質	備　考
第57図 57	紡錘車	Q　14	2.9×4.4×1.4	0.8	40.2	滑　石	放射線刻

第28号住居跡出土鉄製品一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	法量（cm） 長さ	幅	厚さ	形態の特徴	備　考
第57図 58	鉄　鏃	M　8	(9.3)	2.0	0.3	龍舌形平根。	
59	不　明	M　9	(13.3)	0.4	0.2	クランク状。	
60	不　明	M　10	5.8	0.25	0.2	片側端部折り曲げ。	

第24号住居跡（第58図）

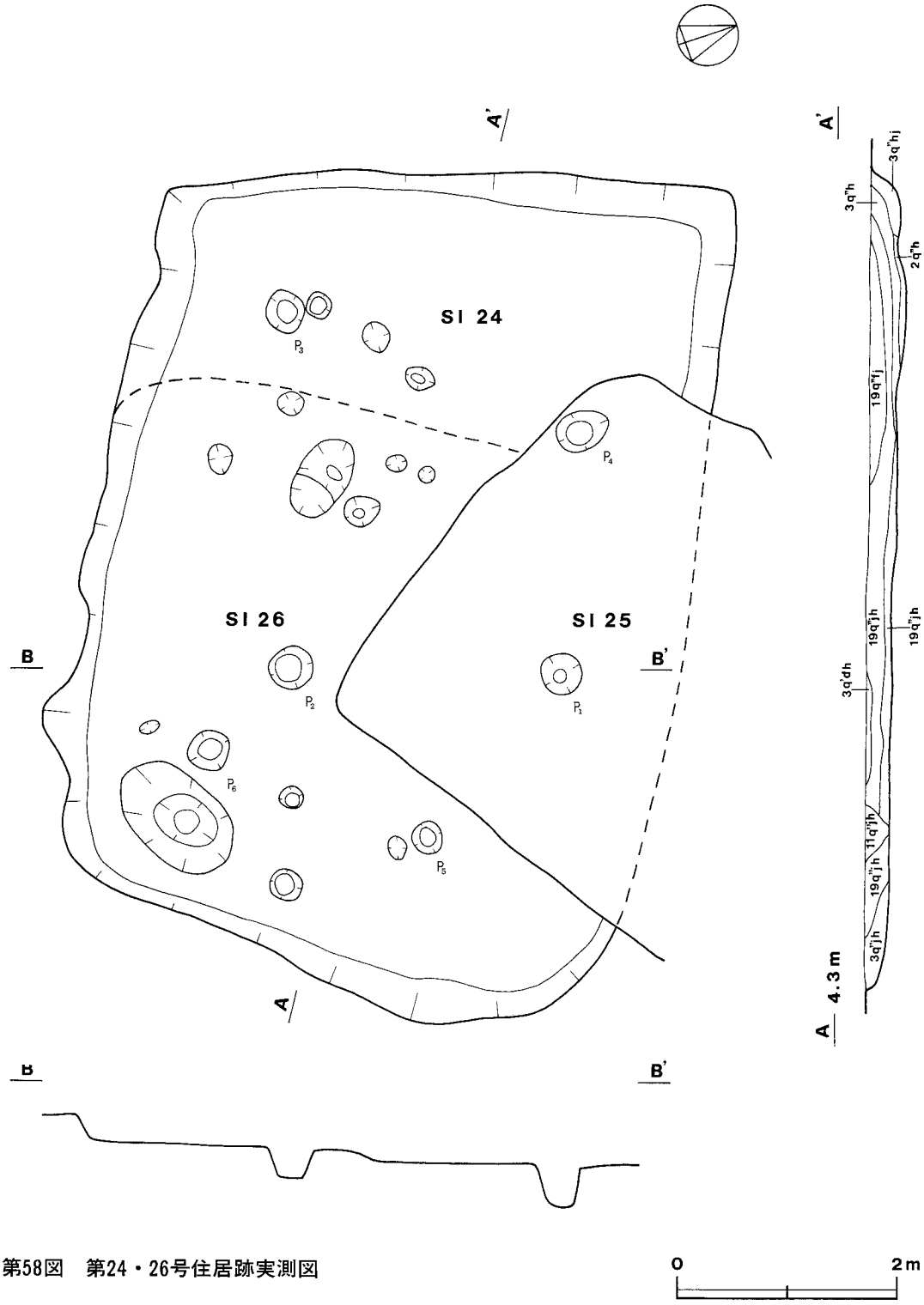
本跡は，遺跡の西側部H14b_4区を中心に確認され，北東側は第25号住居跡，南東側は第26号住居跡，南西側は第16号住居跡，西側は第18号住居跡とそれぞれ重複している。土層から判断すると，本跡は第25・26号住居跡より古く，第16号住居跡より新しい。第18号住居跡との新旧関係は不明である。

残存する北コーナー部，北西壁，南西壁の一部から推定すると，平面形は軸長5.7m前後のやや歪曲した方形状を呈するものと思われる。残存壁高は25～40cmで，やや緩やかに立ち上がっている。重複していない部分の床は礫を含む灰褐色砂土で，床面はほぼ平坦で，締まりがない。P_1～P_4が主柱穴で，直径40cm前後，深さ30～40cmで，不規則に配列されている。その他の小ピットについては本跡と第26号住居跡のいずれに所属するものか，また，性格等も不明である。

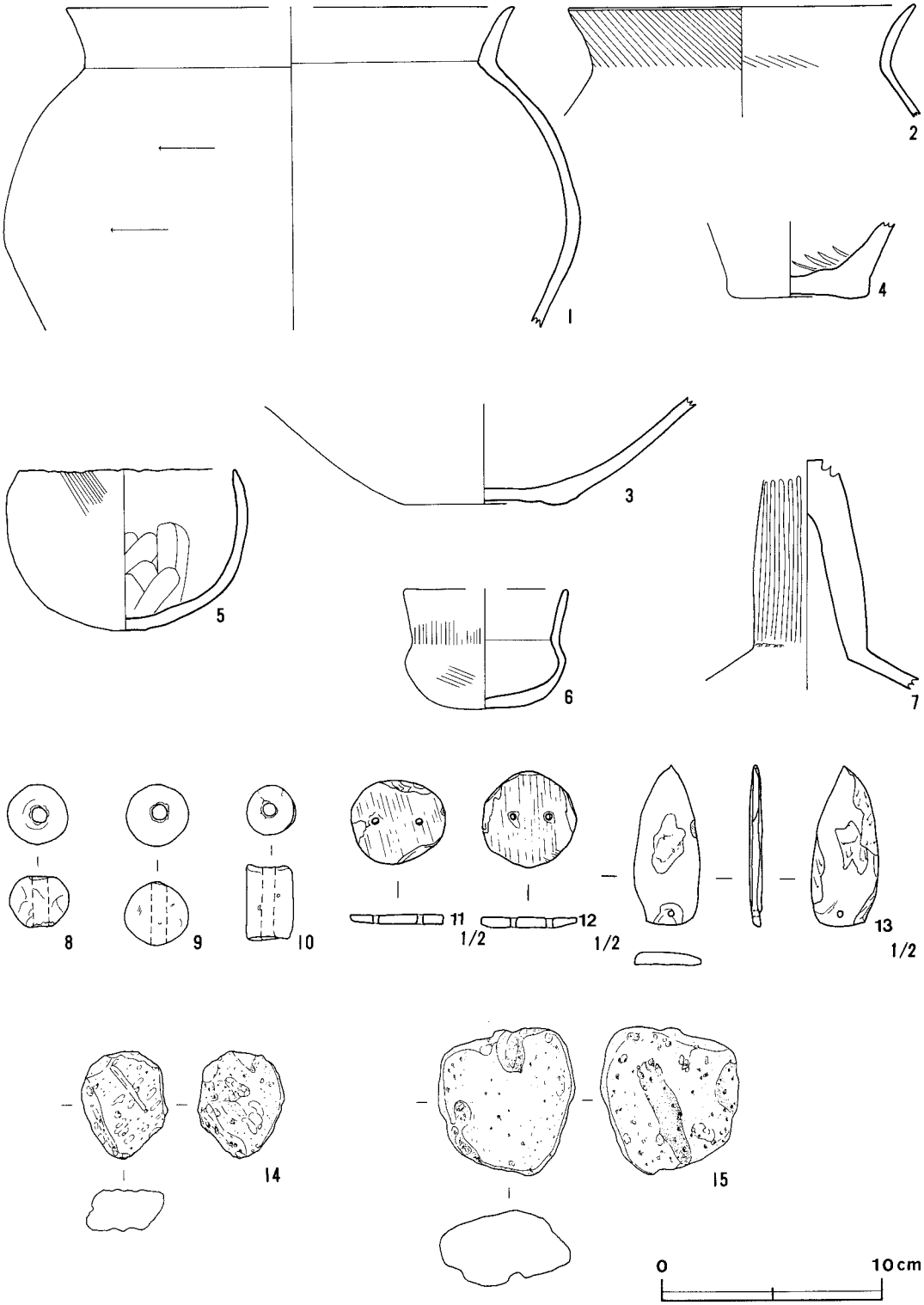
カマドはおそらく北東壁に構築されていたものが，第25号住居跡の設営によって消失したと考えられる。

覆土は自然堆積で，上層は礫と少量の粘土粒子を含む黒色土，下層は砂粒を含む黒褐色土である。

遺物は土師器片，土製品，石製品などが主に中央部付近から出土している。床面から完形の椀形土器（第59図５），北西壁近くから高坏形土器の脚部（第59図７），中央部覆土中から球状土錘２点（第59図８・９）と石製双孔円板２点（第59図11・12），剣形模造品（第59図13），ほぼ中央部床面から管状土錘（第59図10）が検出されている。



第58図　第24・26号住居跡実測図



第59図　第24号住居跡出土遺物実測図

第24号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第59図 1	甕形土器 土師器	A (20.5) B (15.0)	胴部は丸く張り，口縁部は「く」の字状に外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面－横ナデ。胴部外面－横ナデ，内面－ナデ。	砂粒 黒褐色 普通	10% P266
2	甕形土器 土師器	A (16.0) B (5.2)	球状を呈する胴部から口縁部は「く」の字状に外反して立ち上がる。	口縁部外面－斜位の刷毛目，内面－刷毛目。	砂粒 にぶい橙色 普通	10% P267
3	甕形土器 土師器	B (4.6) C 7.4	底部はやや上げ底で，胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	胴部外面－ヘラナデ，内面－ナデ。	砂粒・石英 赤褐色 普通	10% P268
4	甕形土器 土師器	B (3.4) C 6.2	底部のみ遺存。底部は平底で，胴部は外上方に立ち上がると推定される。	胴部外面－ヘラナデ，内面－ナデ。	砂粒・石英・黒雲母 浅黄橙色 普通	10% P270
5	椀形土器 土師器	A 10.0 B 7.5 C (－)	底部は丸底で，胴部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は内傾する。	口縁部内面－横ナデ。胴部外面－ヘラナデ，内面－ヘラ削り。	礫・砂粒・黒雲母・石英 明赤褐色 不良	100% P271
6	小型坩形土器 土師器	A (.7 6) B 5.6 C (－)	底部は丸底で，胴部はやや上位に張りをもち，口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部外面－ヘラナデ，内面－横ナデ。胴部外面－ナデ，内面－横ナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	30% P273
7	高坏形土器 土師器	B (10.6)	脚部は柱状に開き，裾部で屈曲して大きく開く。	脚部外面－ヘラ磨き，内面－ナデ。	砂粒・長石・礫 明赤褐色 普通	20% P272

第24号住居跡出土土製品一覧表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ(cm) たて×よこ	孔径 (cm)	重量 (g)	備考
第59図 8	球状土錘	DP125	2.4×2.8	0.7	18.2	
9	〃	DP126	2.9×2.9	0.7	21.7	
10	管状土錘	DP415	3.5×2.3	0.5	22.2	

第24号住居跡出土石製品一覧表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ(cm) 長さ×幅×厚さ	孔径(cm)	重量(g)	石質	備考
第59図 11	有孔円板	Q 99	2.6×2.9×0.3	0.2	4.3	滑石	双孔
12	〃	Q 100	3.0×2.9×0.3	0.2	4.7	〃	〃
13	剣形模造品	Q 252	5.0×2.0×0.4	0.2	6.4	〃	
14	浮子	Q 298	5.0×3.8×1.9	—	7.7	軽石	
15	〃	Q 299	(6.9)×6.3×3.3	—	57.6	〃	

第25号住居跡（第60図）

本跡は，遺構群の西側部H14a$_4$区を中心に確認され，北コーナー部は第21号住居跡，中央部から南側部にかけては第24・26号住居跡とそれぞれ重複している。新旧関係は，本跡が第24・26号住居跡を切り込んでいて新しい。第21号住居跡とは不明である。

残存する東コーナー部や他の住居跡との床面レベル差などから判断すると，平面形は一辺4.2m程の隅丸方形を呈し，主軸方向はN－37°－Wを指している。重複していない部分の壁高は30cmで，北西壁に粘土ブロックが付着していたが，カマドの一部分と思われる。床面はほぼ平坦で，砂粒が多い。P$_1$～P$_4$に囲まれた内側はやや低くなっている。他の住居跡との床面差は，本跡が第21号住居跡より20cm，第24・26号住居跡より8cmそれぞれ低い。P$_1$～P$_4$は主柱穴で，規則的に配列されているが，他の住居跡に比べるとやや内側に位置している。直径34～44cm，深さ40～64cmで，柱穴の断面は円筒状を呈している。

カマドは北西壁のやや西コーナー部寄りに検出されたが，遺存状態は不良で，原形を留めていない。壁外への掘り込みは10cm程で，カマドを構築していた粘質砂土が流出している。

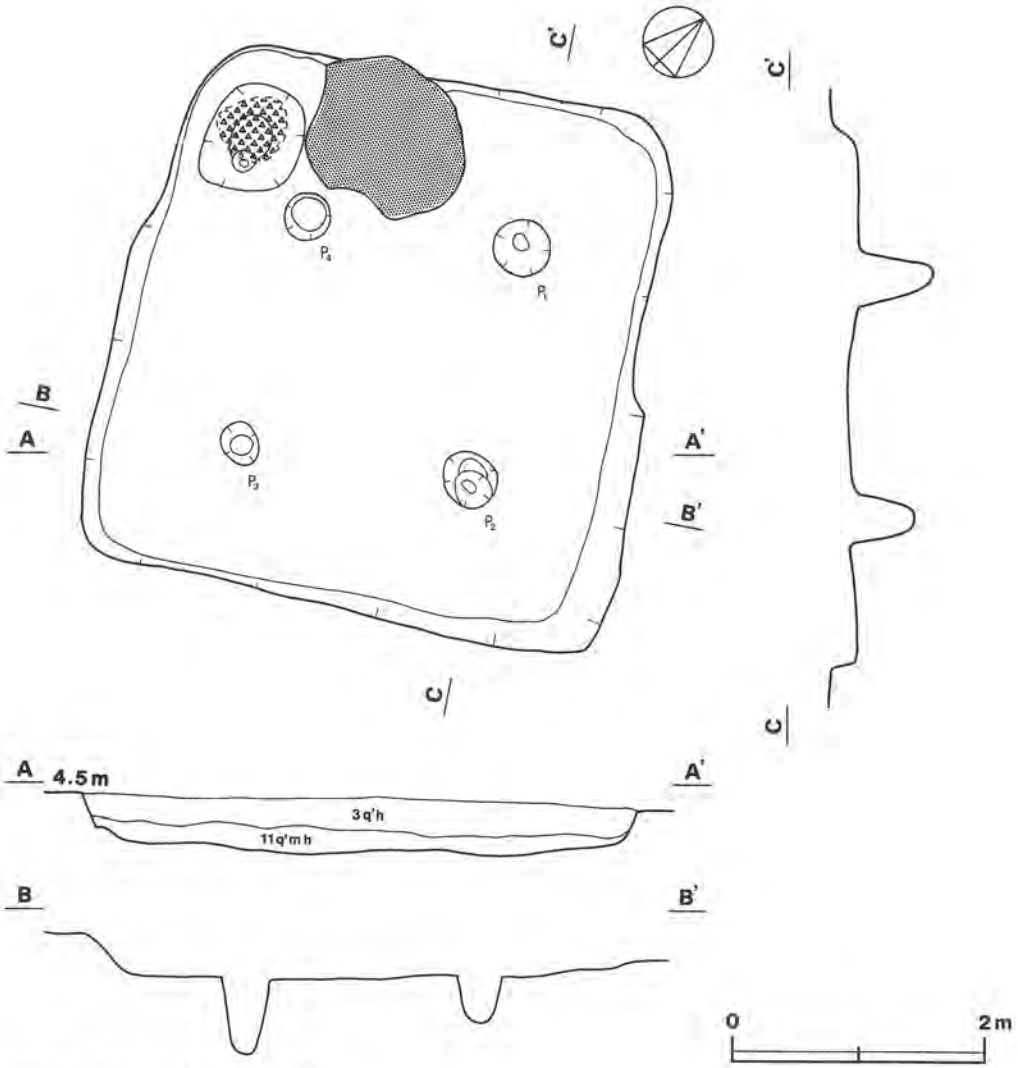
覆土は礫・砂粒を含む黒褐色土と暗赤褐色土が自然堆積している。

遺物の出土量は多く，大半は床面から10～30cm浮いた覆土中より出土している。遺物は多量の土師器片のほかに須恵器片，土製品，石製品である。器形を窺えるものとしては，土師器の甕形土器（第61図3・5），甑形土器（第62図7），坏形土器（第62図10・11）などが検出されている。土製品は，球状土錘・管状土錘・支脚が，石製品は双孔円板が出土している。

西コーナー部に地点貝塚が1か所検出された。長軸86cm，短軸74cmの隅丸長方形状の掘り込みを有し，その上層部に貝の投棄がなされている。貝種としては，出土量の90%はヤマトシジミで，その他にはわずかにアカニシやシオフキが認められる。掘り込み部の深さは40cmで，上層部に暗褐色土，下層に褐色土が自然堆積している。覆土はいずれも柔らかい土質である。本跡との関係は無く後行する遺構である。

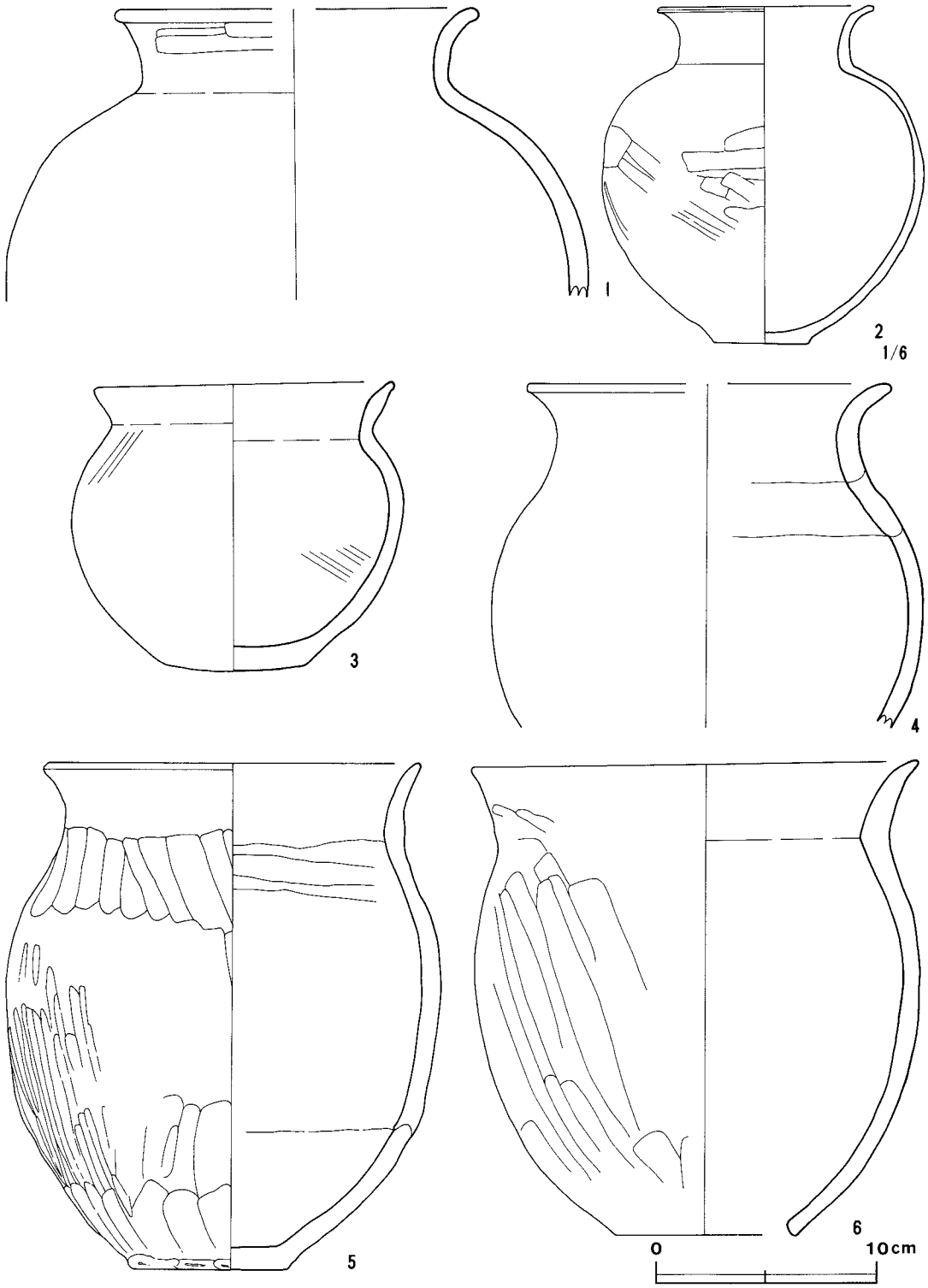
第25号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第61図 1	壺形土器 土師器	A（16.2） B（13.5）	丸く張った胴部から口縁部は外反しながら立ち上がり，端部を外側につまみ出している。	口縁部内・外面－横ナデ。 胴部内・外面－ナデ。	砂粒・礫・長石 にぶい赤褐色 不良	10% P275
2	壺形土器 土師器	A（19.4） B 31.2 C 8.6	底部は平底で，胴部は上位に張りをもつ。口縁部は「コ」の字状を呈している。	口縁部内・外面－横ナデ。 胴部外面－ヘラ削り。	砂粒・スコリア 灰白色 普通	70% P274
3	小型壺形土器 土師器	A 13.6 B 13.4 C 6.3	底部は平底で，胴部は上位に張りをもつ。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面－横ナデ。 胴部外面－ヘラナデ，内面－上位横ナデ，下位ヘラナデ。	砂粒・スコリア 橙色 普通	70% P279

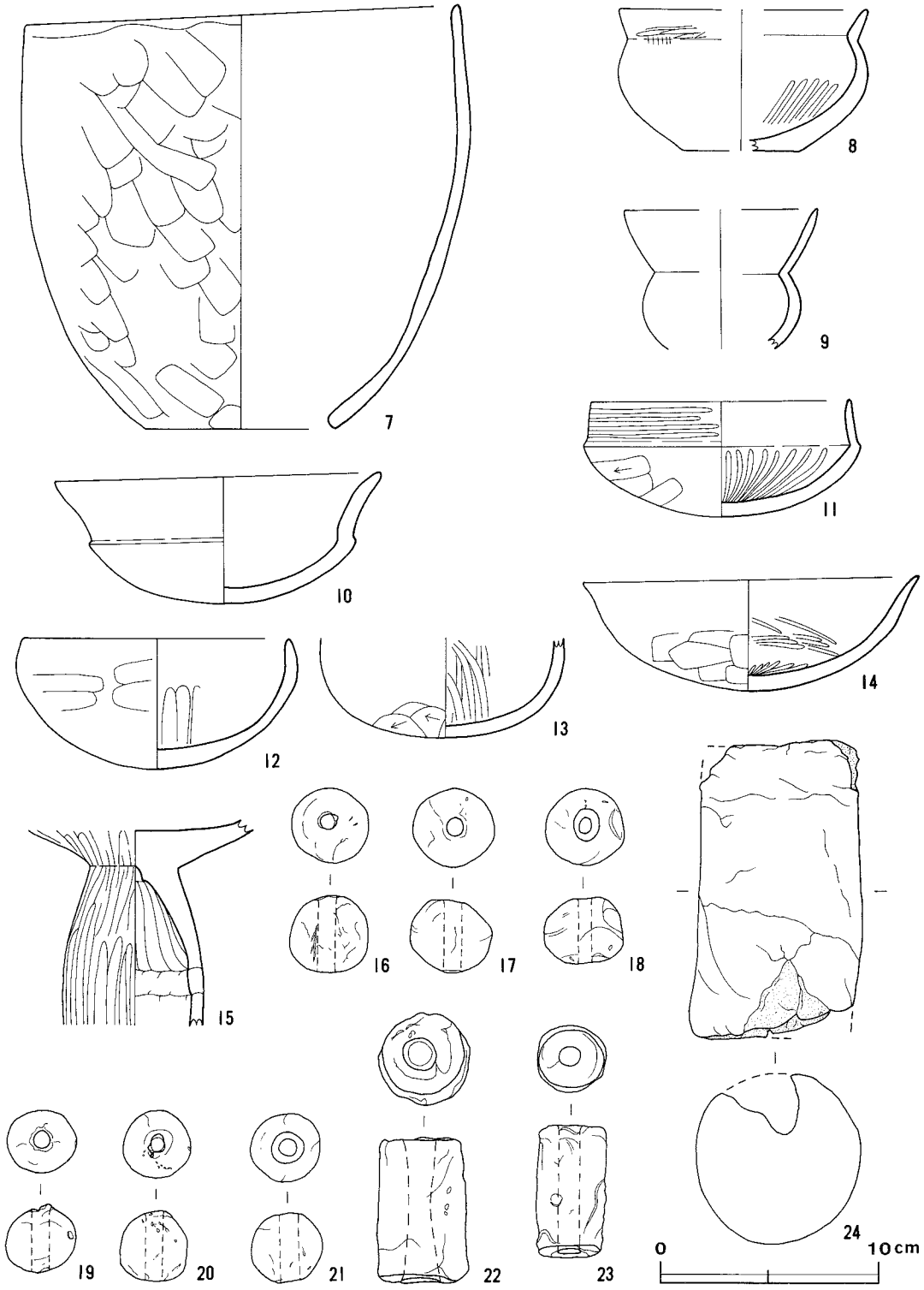


第60図　第25号住居跡実測図

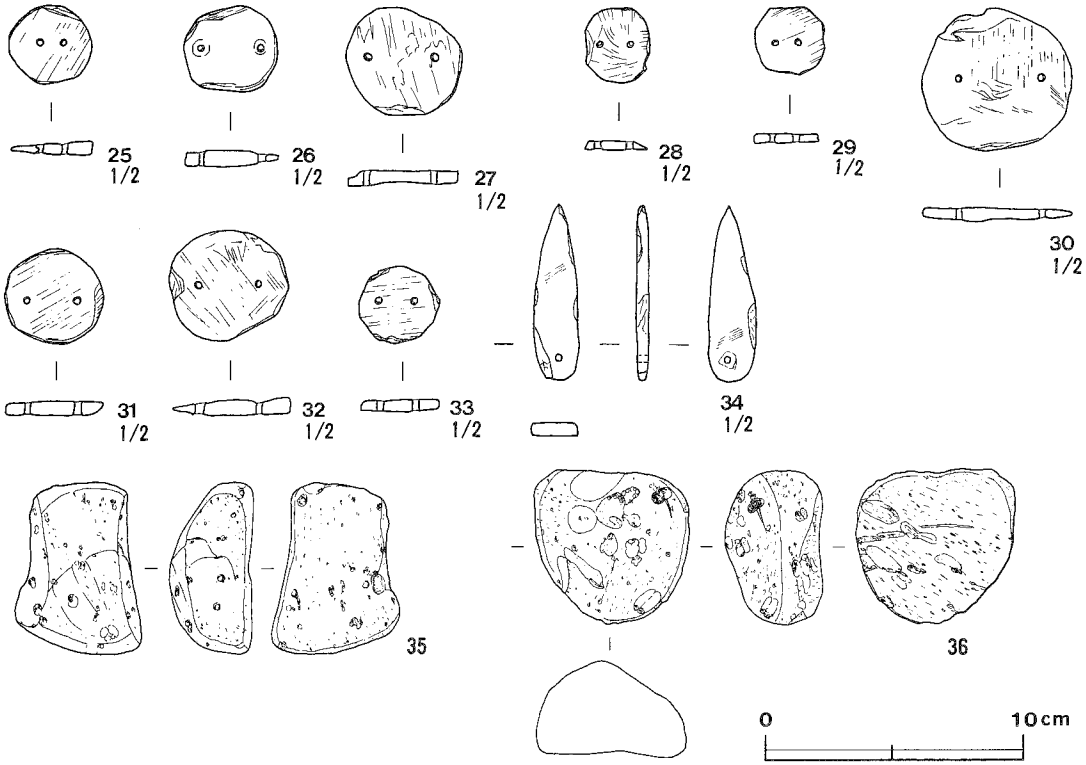
図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第61図 4	甕形土器 土師器	A (16.7) B (16.0)	胴部は上位に張りをもち，口縁部は外彎しながら立ち上がる。	口縁部内・外面－横ナデ。胴部外面－ヘラナデ，内面－ナデ。輪積み痕残る。	砂粒・長石・黒雲母 明褐灰色 普通	10% P276
5	甕形土器 土師器	A 17.4 B 23.4 C 7.3	底部は平底で，胴部は上位にやや張りをもつ長胴で，口縁部は外反しながら立ち上がる。	口縁部内・外面－横ナデ。胴部外面－縦位のヘラ削り，内面－ヘラナデ。	砂粒・雲母 褐灰色 普通	95% P277
6	甑形土器 土師器	A 21.6 B 22.1 C (8.3)	底部は正円状に抜け，胴部は中位よりやや上に張りをもち，口縁部は「く」の字状を呈する。	口縁部内・外面－横ナデ。胴部外面－斜位のヘラ削り，内面－ナデ。	砂粒・スコリア・雲母 にぶい橙色 普通	70% P281



第61図　第25号住居跡出土遺物実測図（1）



第62図　第25号住居跡出土遺物実測図（２）



第63図　第25号住居跡出土遺物実測図（3）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第62図 7	甑形土器 土師器	A 20.0 B 19.8 C (8.8)	底部は正円状に抜ける。胴部は内彎しながら外上方に立ち上がり，そのまま口縁部に至る。	口縁部内・外面－横ナデ。胴部外面－斜位のヘラ削り，内面－ナデ。	砂粒・長石・砂礫 にぶい橙色 普通	80% P280
8	小型壺形土器 土師器	A (11.4) B 6.6 C (5.4)	底部は平底で，胴部は上位に張りをもつ。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面－横ナデ。胴部外面－ヘラナデ，内面－ヘラ磨き。頸部外面－刷毛目。	砂粒・雲母 黒褐色 普通	30% P286
9	坩形土器 土師器	A (9.0) B (6.5)	底部欠損。胴部はやや上位に張りをもつ。口縁部は内彎気味に外上方に開いて立ち上がる。	口縁部内・外面－横ナデ。胴部外面－横ナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	30% P290
10	坏形土器 土師器	A 15.1 B 6.1 C (－)	底部は丸底で，体部は大きく内彎して開き，口縁部との境に段をもつ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面－横ナデ。体部外面－ヘラナデ，内面－ナデ。	砂粒・スコリア 赤褐色 普通	80% P285
11	坏形土器 土師器	A 12.0 B 5.5 C (－)	底部は丸底で，体部は内彎しながら開き，口縁部との境に段をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部外面－ヘラ磨き，内面－横ナデ後ヘラ磨き。体部外面－ヘラ削り，内面－ヘラ磨き。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	100% P283
12	坏形土器 土師器	A (12.4) B 6.1 C (－)	底部は丸底で，体部は内彎して大きく開く。口縁部は短く，内傾して立ち上がる。	口縁部外面－ナデ，内面－横ナデ。体部外面－ヘラ削り，内面－ヘラ磨き。	砂粒 赤褐色 普通	50% P288
13	坏形土器 土師器	B (4.7) C (－)	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。	体部外面－上位ヘラナデ。下位ヘラ削り，内面－ヘラ磨き。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	40% P289

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第62図 14	坏形土器 土師器	A 15.5 B 5.2 C（－）	底部は丸底で，体部は内彎しながら外上方に開いて立ち上がり，口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面－横ナデ。体部外面－ヘラ削り，内面－ヘラ磨き。	砂粒・スコリア・長石・礫 明赤褐色 普通	60% P 287
15	高坏形土器 土師器	B（9.5）	脚部は内彎して柱状に開く。体部は直線的に外上方に開くと考えられる。	体部外面－ヘラ削り。脚部外面－ヘラ削り，内面－横ナデ。輪積痕が残る。	砂粒・雲母 淡橙色 普通	50% P 282

第25号住居跡出土土製品一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	大きさ(cm) たて×よこ	孔径（cm）	重量（g）	備　考
第62図 16	球状土錘	D P 127	3.6×3.6	0.8	44.1	
17	〃	D P 128	3.4×3.7	0.8	40.5	
18	〃	D P 129	3.2×3.7	0.6	39.7	
19	〃	D P 130	3.1×3.2	0.8	26.0	
20	〃	D P 131	3.2×3.3	0.9	32.0	
21	〃	D P 132	3.3×3.2	0.8	30.6	
22	管状土錘	D P 416	6.8×4.3	1.7	129.2	
23	〃	D P 417	6.1×3.2	1.0	76.6	
24	支　脚	D P 469	(14.0)×(8.0)	—	(759.3)	一部欠損

第25号住居跡出土石製品一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	大きさ(cm) 長さ×幅×厚さ	孔径(cm)	重量(g)	石　質	備　考
第63図 25	有孔円板	Q 101	2.1×2.1×0.4	0.2	2.4	滑　石	双孔
26	〃	Q 102	2.3×2.5×0.4	0.2	3.7	〃	〃
27	〃	Q 103	2.9×3.1×0.4	0.2	4.5	〃	〃
28	〃	Q 104	1.9×1.7×0.2	0.2	1.4	〃	〃
29	〃	Q 105	1.8×1.8×0.3	0.2	1.6	〃	〃
30	〃	Q 106	3.7×3.9×0.4	0.2	(8.0)	〃	双孔，一部欠損
31	〃	Q 107	2.5×2.6×0.4	0.2	4.2	〃	双孔
32	〃	Q 108	2.9×3.2×0.4	0.2	6.9	〃	
33	〃	Q 109	2.0×2.1×0.4	0.2	1.9	〃	〃
34	剣形模造品	Q 253	4.6×1.2×0.4	0.17	4.1	〃	
35	磨　石	Q 300	6.8×4.9×3.3	—	28.9	軽　石	
36	〃	Q 301	6.1×6.1×3.8	—	32.9	〃	

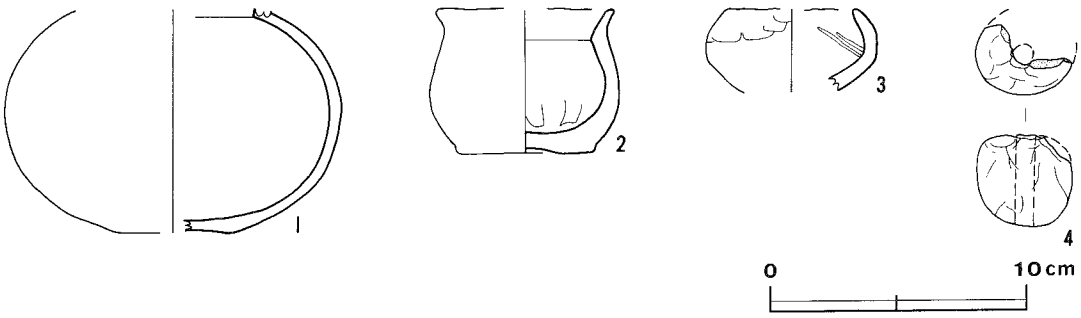
第26号住居跡（第58図）

本跡は，遺構群西側部の重複が激しいH14b4区に確認され，北側は第25号住居跡に切られ，西側は第24号住居跡を切り込んでいる。

最初は第24号住居跡を1軒の大形住居跡と捉えて調査したが，ピットや形状から判断してもう1軒の住居跡が重複していることが判明し，それを本跡とした。ほとんど第24号住居跡として調査してしまったため，不明な点が多い。南東壁は緩やかに立ち上がり，壁高は20cmである。床面は第25号住居跡より10cm，第24号住居跡より5cmそれぞれ高い。P_5とP_6が主柱穴で，P_5は直径30cm，深さ42cm，P_6は直径36cm，深さ27cmである。南コーナー部に長径120cm，短径94cm，深さ23cmを測る楕円形状の掘り込み部を有する。開口部に比べて，底面は極端に小さい。性格は不明である。

カマドや覆土は不明である。

遺物は土師器片が少量出土しているが，床面からの出土はほとんどない。



第64図　第26号住居跡出土遺物実測図

第26号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第64図 1	坩形土器 土師器	B（7.2） C（4.3）	底部は平底でやや上げ底気味。胴部は中位に張りをもつ扁平な球形を呈している。	胴部外面－ヘラナデ，内面－ナデ。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	20% P293
2	手捏土器 土師器	A（7.0） B　5.7 C（5.4）	底部は平底で，胴部は中位のやや下に張りをもつ。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内面－横ナデ。胴部内・外面－指ナデ。	砂粒 にぶい黄褐色 普通	30% P291
3	手捏土器 土師器	A（4.9） B（3.3）	底部欠損。胴部は内彎しながら外上方に開き，中位に張りをもつ扁平な球状を呈する。	胴部外・外面－指ナデ。	砂粒・スコリア 浅黄橙色 普通	30% P292

第26号住居跡出土土製品一覧表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ(cm) たて×よこ	孔径（cm）	重量（g）	備考
第64図 4	球状土錘	DP 133	3.7×3.6	0.7	(20.4)	半分欠損

第27号住居跡（第65図）

本跡は，遺跡西側部G14j₂区を中心に確認され，重複が激しく北西側は第14号住居跡，西側は第20号住居跡，南側は第18号住居跡，中心部から東側にかけては第７号住居跡とそれぞれ切り合っていて，不明な点が多い。

残存する北・南・西壁の各一部と南西コーナー部から推定すると，平面形は一辺4.8ｍ程の隅丸方形を呈し，主軸方向はＮ－20°－Ｗを指すものと思われる。残存壁高は30cmで，壁は緩やかに立ち上がっている。床は礫を多量に含む灰褐色砂土で，床面は北西側に向かってやや傾斜しているが平坦である。ピットは３か所検出され，いずれも主柱穴で，直径38～42cm，深さ34～44cmである。本来は４本の主柱穴を有するものと思われ，北東側の調査区域外に１か所存在していると考えられる。

カマドは北壁中央部に設けられていたが，カマドを構築していた粘質砂土の塊と焼土が認められるだけで，規模や形状等は不明である。

覆土は上層に多量の礫を含む黒褐色土，下層に石英・小礫を含む灰褐色土，壁際には石英・長石・細砂粒を含む黒褐色土が堆積している。

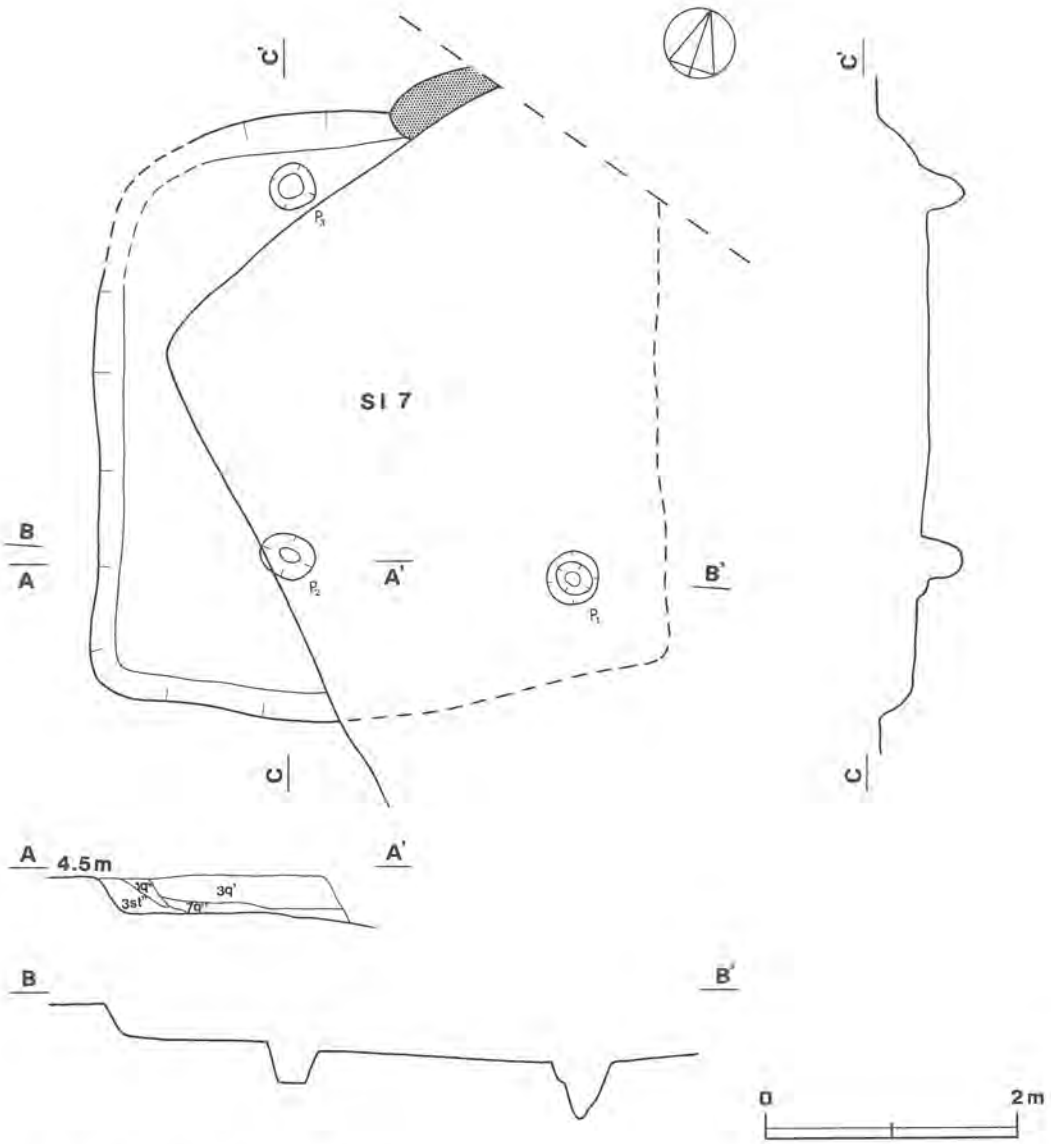
遺物は少量の土師器片のほかに，須恵器片２点と土製品・石製品が出土している。石製品は西壁下から紡錘車（第66図８），砥石（第66図９）が，土製品は南西コーナー部付近の床面から球状土錘５点（第66図２～６）が検出されている。

第27号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第66図 1	坏形土器 土師器	A（12.9） B　3.9 C（－）	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開き，口縁部との腕に段をもつ。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面ー横ナデ。体部外面ーヘラ削り，内面ーナデ。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	40% P294

第27号住居跡出土土製品一覧表

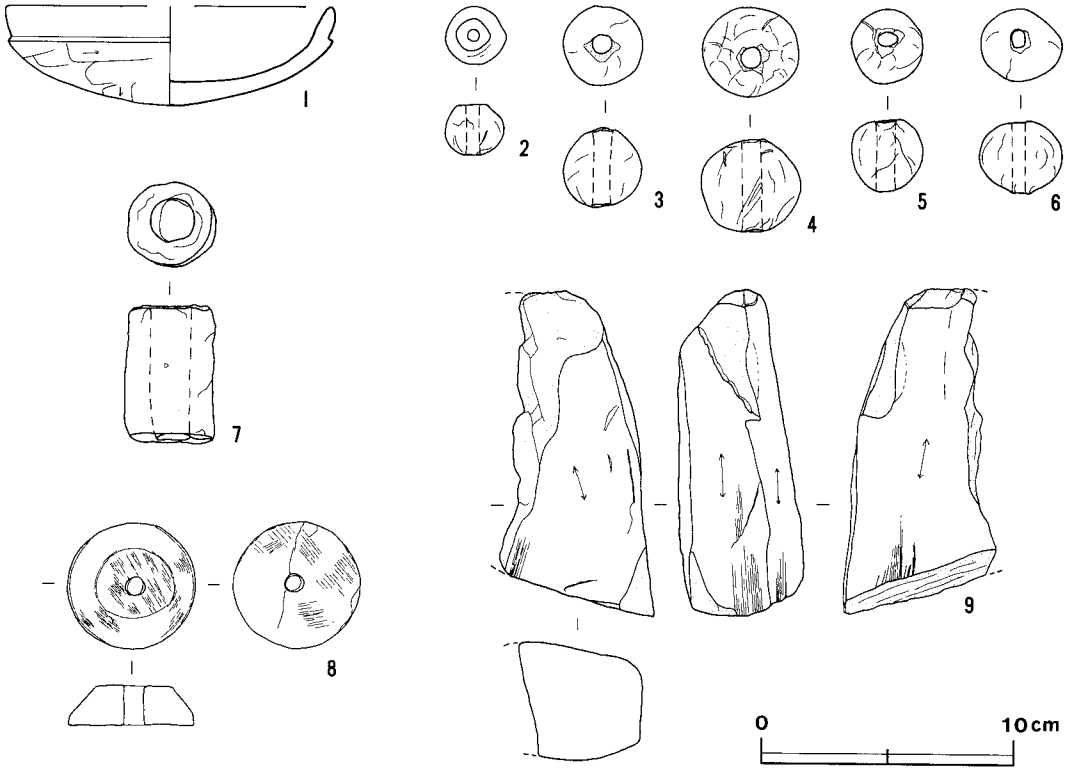
図版番号	名称	台帳番号	大きさ(cm) たて×よこ	孔径（cm）	重量（g）	備考
第66図 2	球状土錘	ＤＰ 134	2.1×2.5	0.6	9.9	
3	〃	ＤＰ 135	3.3×3.2	0.8	29.2	
4	〃	ＤＰ 136	3.7×3.8	0.8	51.1	
5	〃	ＤＰ 137	2.9×3.0	0.7	21.3	
6	〃	ＤＰ 138	2.9×3.3	0.7	22.1	
7	管状土錘	ＤＰ 418	5.5×3.5	1.7	67.1	



第65図　第27号住居跡実測図

第27号住居跡出土石製品一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	大きさ(cm) 上径×下径×厚さ	孔径(cm)	重量(g)	石　質	備　考
第66図 8	紡錘車	Q　15	3.0×5.1×1.6	0.8	60.9	滑　石	
9	砥　石	Q　6	(12.9)×(6.1)×(5.0)	—	(421.2)	凝灰石	一部残存



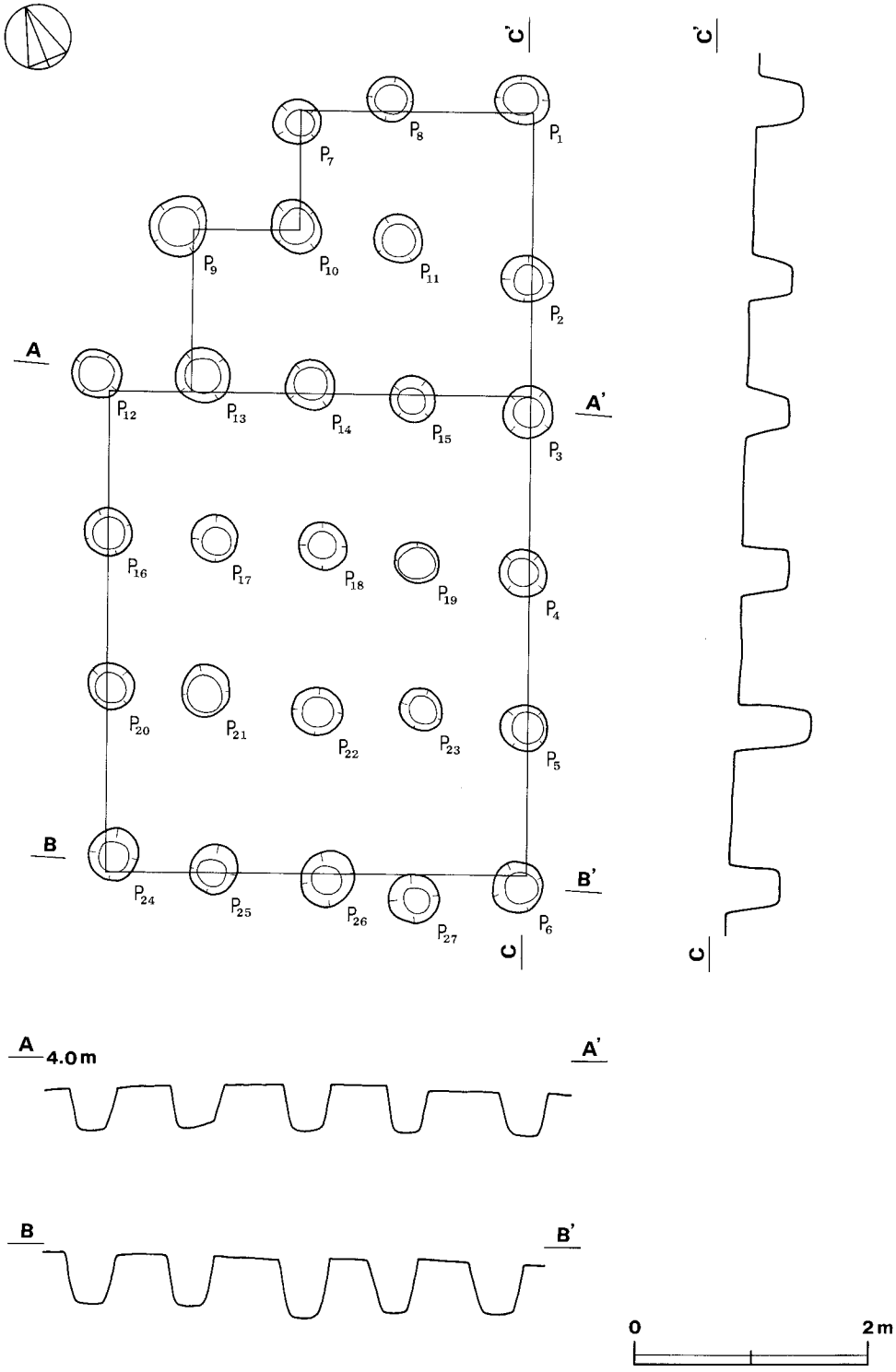
第66図　第27号住居跡出土遺物実測図

2　掘立柱建築跡（第67図）

本跡は，調査区北東端の砂州上にあたるH16h₁区を中心に確認した遺構である。祭祀跡の追跡調査に係る拡張で，遺物配置実測等を実施しながら標高3.8mのレベルまで削平調査した結果，H16h₁区を中心に6区にかけて27本の柱痕で構成されている掘立柱建築跡を検出した。

掘立柱間を結ぶ推定平面形は，長軸6.6m，短軸3.6mを測り，主軸方向はN－70°－Wを指し，他の住居跡の主軸方向と類似している。南東から概観すると，正面に6本（P_1～P_6）の整然と横列する柱痕が存在し，南東端から4本（P_3～P_6）までの横列する柱痕に対応して，その他各各4本ずつ（P_{12}～P_{15}，P_{16}～P_{19}，P_{20}～P_{23}，P_{24}～P_{27}）の縦列する柱痕を有している。

20本（P_3～P_6，P_{12}～P_{27}）の柱痕を結ぶ形状は正方形に近いが，4.16×3.6mと若干正面に面した横径が広い。P_1，P_2，P_7，P_{11}は，略正方形の柱痕の北東端に位置するP_3，P_{12}～P_{15}列に付属するかの如く，方向性，間数等に共通性を有して存在している。



第67図　掘立柱建築跡実測図

掘立柱建築跡柱痕規模

規模＼柱痕	P_1	P_2	P_3	P_4	P_5	P_6	P_7	P_8	P_9	P_{10}	P_{11}	P_{12}	P_{13}	P_{14}
径 (cm)	46	44	46	42	42	46	40	38	52	48	42	42	48	44
深さ (cm)	36	34	37	40	62	44	34	43	36	39	35	38	37	21

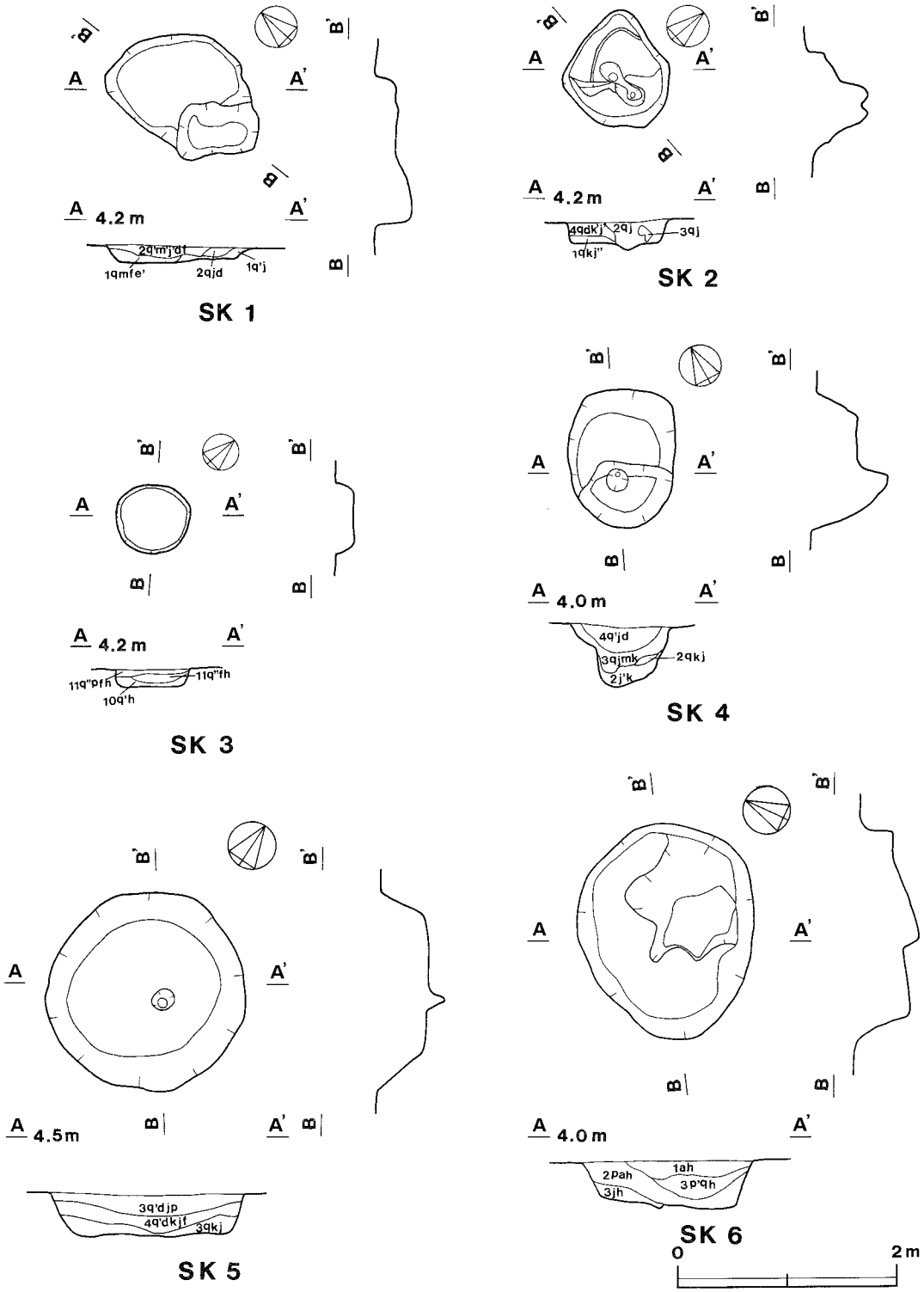
規模＼柱痕	P_{15}	P_{16}	P_{17}	P_{18}	P_{19}	P_{20}	P_{21}	P_{22}	P_{23}	P_{24}	P_{25}	P_{26}	P_{27}	平均
径 (cm)	40	40	40	42	40	40	44	44	38	46	42	48	44	43
深さ (cm)	38	35	48	39	38	41	39	45	44	46	43	51	50	40

3　土坑

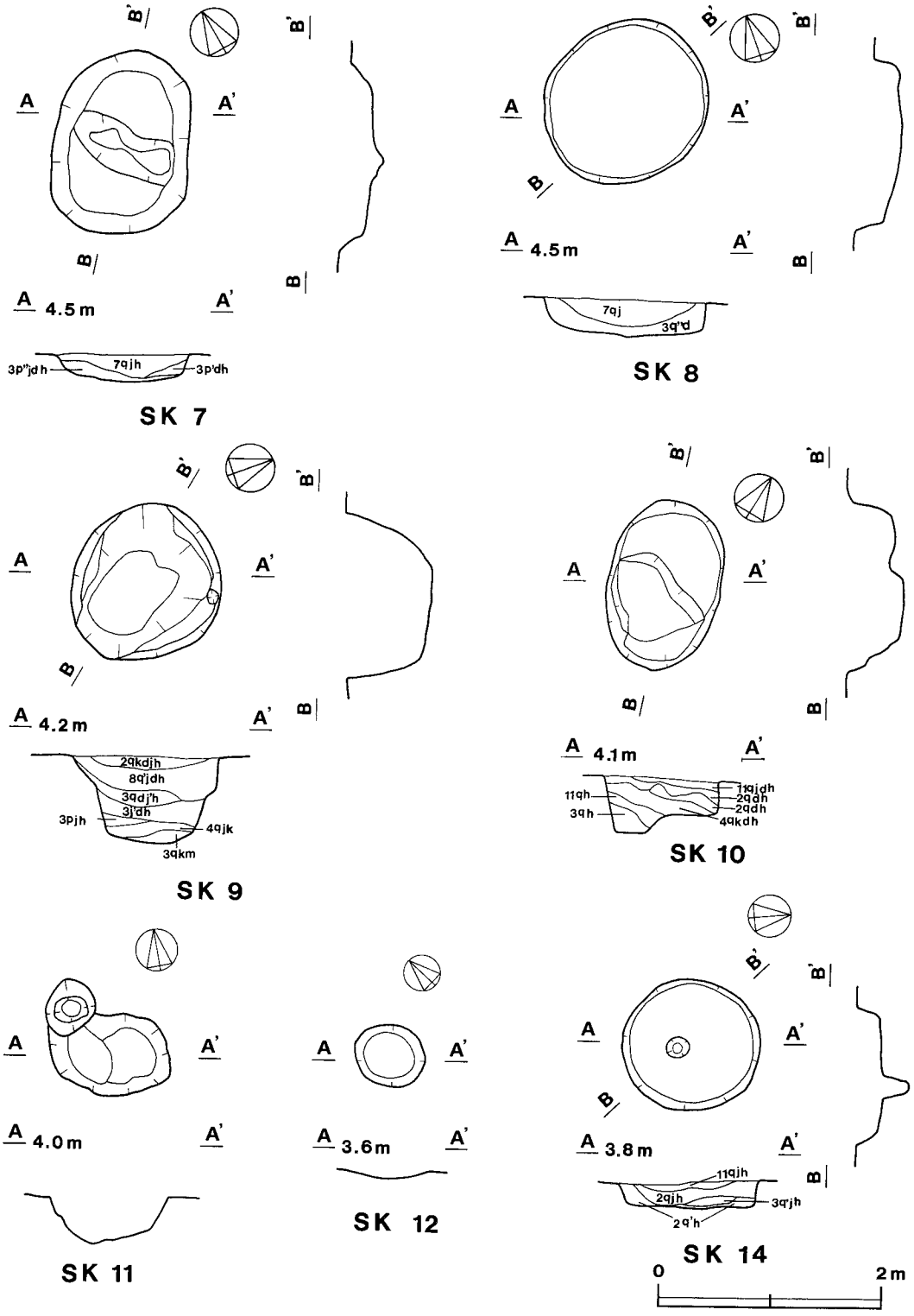
当遺跡から検出された土坑は15基で，遺跡のほぼ中央部から西側にかけて位置している。形状は円形と楕円形を基調とするものがほとんどで，長径の最大は第13号土坑の2.1m，最小は第12号土坑の0.6m，確認面から坑底までの深さが最も深いものは第9号土坑で80cm，最も浅いものは第12号住居跡の10cmである。断面が円筒形状を呈する土坑は3基と多くない。

表2　土坑一覧表

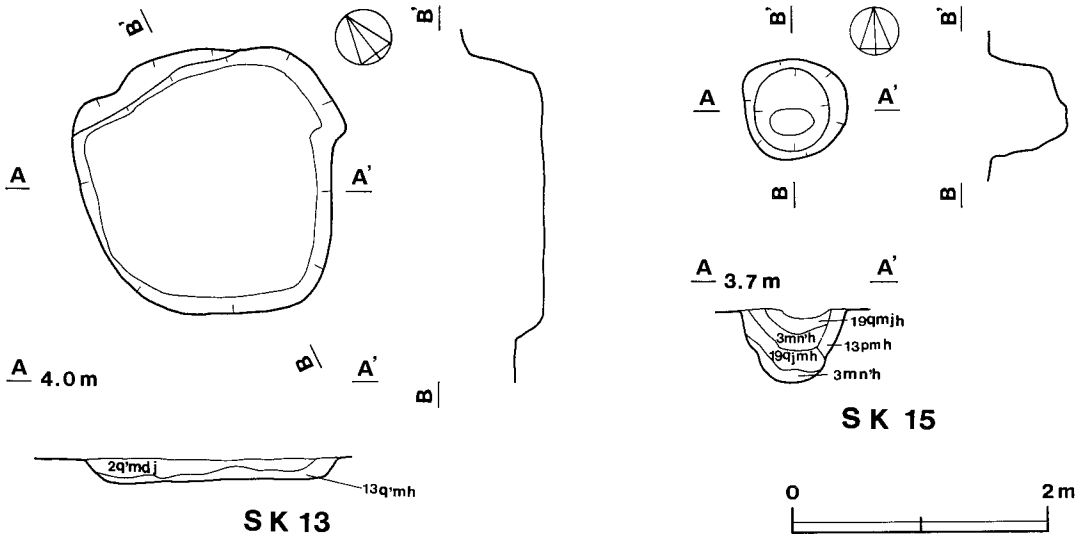
土坑番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
1	H15e_2・$_2$	N－18°－W	不整楕円形	1.5×1.1	20	垂直	凹凸	N	土師器片45点・砥石(Q7)	SI22と重複
2	H15e_2	—	不定形	1.1×1.0	30	段状	〃	〃	なし	SI22と重複
3	H15e_1	—	円形	0.65	20	垂直	平坦	〃	高坏形土器(P295)	
4	H15c_1・c_2	N－28°－E	楕円形	1.3×1.0	40	緩斜	段状	〃	土師器片12点・須恵器片1点	
5	H14d_1	—	円形	1.8	45	〃	平凸	〃	甑形土器(P296)・坏(P297)	SI5・10・15と重複
6	H15c_2	N－53°－E	楕円形	2.0×1.6	60	垂直	段状	〃	高坏形土器(P298)	
7	H14a_6・a_7 b_6・b_7	N－48°－E	〃	1.7×1.2	27	緩斜	凹坦	〃	土師器片9点	SI6と重複
8	H14a_6・a_7	—	円形	1.5	40	垂直	皿状	〃	高坏形土器(P299) 石製双孔円板(Q110)	
9	H14b_0	—	〃	1.4	80	段状	平坦	〃	土師器片19点	
10	H15d_1・d_2	N－22°－W	楕円形	1.5×1.0	50	垂直	段状	〃	土師器片20点	
11	H15d_4	N－58°－W	不整楕円形	1.2×0.7	40	緩斜	凹凸	—	土師器片9点	SI4と重複
12	H15f_0	—	円形	0.6	10	〃	皿状	—	なし	
13	H15f_0	—	不定形	2.1×2.0	60	垂直	平坦	N	土師器片3点	
14	H16h_2・h_3	—	円形	1.2	25	〃	〃	〃	土師器片35点	
15	H15f_9・g_9	—	〃	0.8	60	段状	傾斜	〃	土師器片1点	



第68図　第１～６号土坑実測図



第69図　第7～12・14号土坑実測図

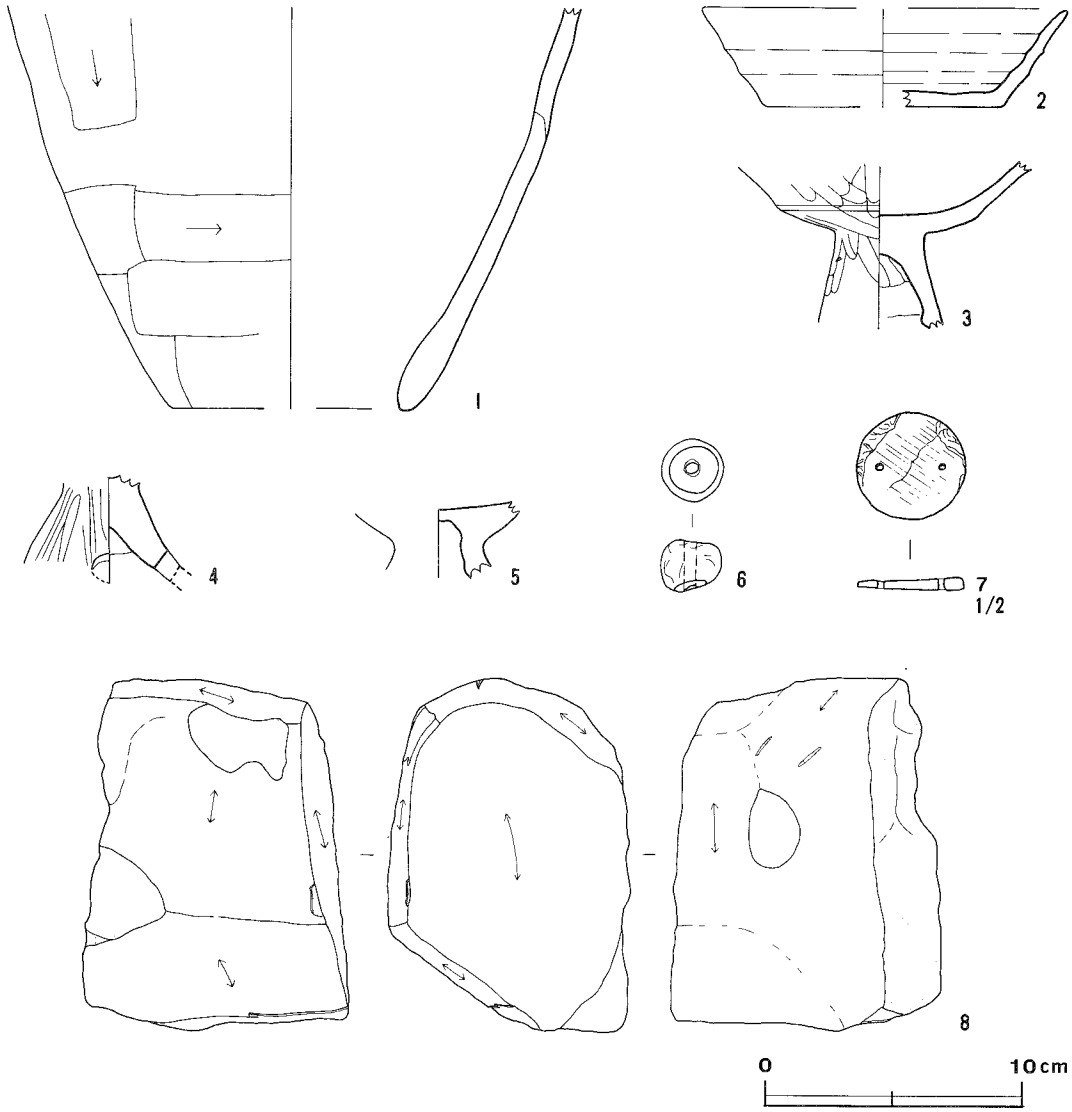


第70図　第13・15号土坑実測図

遺物は第２・12号土坑を除く他の土坑から土師器片が主に出土している。大半が覆土中からの出土で，器形を窺えるものは４点だけである。その外に，石製品２点，須恵器片１点が出土している。

土坑出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第71図 1	甑形土器 土師器	B (15.0) C (9.5)	底部は正円状に抜けている。胴部は内彎気味に外上方に開いて立ち上がる。	胴部外面－上位は縦位，下位は横位のヘラ削り，内面－ナデ。	砂粒・雲母・礫 にぶい褐色 普通	SK－5　10% P296
2	坏 須恵器	A (14.2) B　3.9 C (9.2)	底部は平底を呈し，体部は直線的に外上方に開いて立ち上がり，そのまま口縁部に至る。	水挽き成形。底部－回転ヘラ切り後不定方向へのヘラ削り。外周部－ヘラ切り。	砂粒・細砂・雲母 灰色 良好	SK－5　30% P297
3	高坏形土器 土師器	B (6.6)	体部は下位に稜をもち，そこから直線的に外上方に立ち上がる。脚部は円柱状に開くとみられる。	体部外面－ヘラ削り，内面－ヘラ削り後ヘラ磨き。脚部外面－ヘラ磨き。	砂粒・長石 にぶい赤褐色 普通	SK－8　10% P299
4	高坏形土器 土師器	B (4.1)	脚部はラッパ状に開く。	脚部外面－ヘラ磨き，内面－横ナデ。	砂粒 橙色 普通	SK－3　10% P295
5	高坏形土器 土師器	B (3.0)	坏部と脚部の接合部のみ遺存。脚部はラッパ状に開くとみられる。	体部外面－ヘラナデ。	砂粒・スコリア 橙色 普通	SK－6　10% P298



第71図　土坑出土遺物実測図

土坑出土土製品一覧表

図版番号	名　　称	出土地点	台帳番号	長さ×幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)	備　考
第71図 6	球状土錘	ＳＫ１	ＤＰ139	2.1×2.5	0.5	11.8	

土坑出土石製品一覧表

図版番号	名　　称	出土地点	台帳番号	大きさ（cm）長さ×幅×厚さ	孔径(cm)	重量(g)	石質	備　考
第71図 7	有孔円板	ＳＫ８	Q110	2.8×2.8×0.4	0.2	3.9	滑石	双孔
8	砥　　石	ＳＫ１	Q　7	14.1×(0.6)×9.5	—	(2134.1)	砂岩	半分欠損

4　祭祀跡

H15，H16区から検出された祭祀跡は，手捏土器や祭祀用土製品等を伴出しているが，明瞭なプランは検出されず，遺物や焼土粒子，炭化粒子の散布する範囲をもって祭祀跡として捉えた。祭祀跡は，祭祀が実施された様相を示唆する遺物の遺存する地区と，投棄による土器溜まり的様相を呈している遺物の遺存する地区とに分かれる。

祭祀跡の位置は，焼土粒子，炭化粒子の点在が11か所の範囲に分割可能なH15e_8～e_9区と，H15f_8～f_9区，H15g_8～g_9区と，H16h_3区，H16i_2～i_3区，H16j_2～j_4区や，掘立柱建築跡を検出したH16h_1区の地区に存在している。祭祀跡を構成する遺物は，遺存の仕方や器種等に共通性を有している単位が認められたのが全てとはいえず，出土領域の設定も明確に捉えることが可能であったのは少なかった。以上の点を踏まえ，以下，本文での遺構，遺物，出土状態を叙述するに当たっては，４ｍ四方のグリッドを更に１ｍ四方に区切り，最上列左から右へ１～４ユニット，２段列左から右へ５～８ユニット，……，最下列左から右へ13～16ユニットと呼称し，遺物の出土状態と供伴関係を明らかに報告することに務めた。

H15e_8区の第８ユニット及びH15e_9区の第５ユニットにかけて，口縁部が破却された瓿(第73図11)１点が，頸部を東方に向けて横位で出土している。瓿の底部に接触して北側に手捏土器(第73図11)が，正位に据置かれた状態で１点，西側に密接して土製鏡形模造品（第73図３）が鈕釦部を天に向けて伏せた状態で１点と，土製勾玉（第73図４）が１点，土製鍬先形模造品が二分割された形で１点（第73図５）が出土したほか，半分割されたもの（第73図６）も１点出土している。この祭祀跡の様相を呈したセット的出土土器の北側にも，口縁部を破却された瓿（第73図７）が１点南側の瓿とは方向を逆にして横位で確認された。密接して共伴したものに，底部辺に鈕釦部を天に向けて伏せた状態の土製鏡形模造品（第73図８・９）が２点と，口縁部に接触して手捏土器，（第73図10）が正位に据置かれた状態で１点出土している。これらは，いずれも焼土粒子，炭化粒子の点在する径１ｍ程の範囲内に位置している。

H15e_8区の第15，第16ユニットでは，瓿を中心に，焼土粒子，炭化粒子が径1.2～1.8ｍ程の範囲に点在していて，破却された口縁部を北西方位に向けた横位の瓿（第74図14）を挟むかの如く，手捏土器（第74図15・16）が検出された。この北方50cm以内及び北東１ｍ程には，土製鏡形模造品(第74図17・18・19・20）の４点が集中して出土しているほか，土製鍬先形模造品（第74図21）も出土している。これらの遺物は，長径2.6×短径1.2及び1.8ｍ程の双円形状に点在する焼土粒子，炭化粒子の範囲内に点在している。出土した遺物は，他の土師器片や手捏土器片等と混在して出土したもので，レベル値や土層等に共通性は無く，先の瓿（第73図１）と伴出した土製鍬先形模造品（第73図５・６）等の如く，瓿とセット的な出土であるか否かは不明である。祭祀跡の様相を

示唆する遺物の出土状態としては，本聰（第74図14）の西方１ｍの焼土粒子，炭化粒子が点存する範囲縁辺部に，土製勾玉（第75図32）が１点，土製鏡形模造品（第75図33・34）が２点，手捏土器（第75図35・36）が２点，径20cmの範囲で出土しているほか，これらの南側１ｍ程に手捏土器（第76図38），甕形土器（第76図37）が２点出土している。

H15e_8，H15f_8区は，焼土粒子，炭化粒子の点在が第１号住居跡に方形状に切断されていて，焼土粒子，炭化粒子を伴う祭祀跡との新旧関係では第１号住居跡設営より古いことを明確に示している。

第１号住居跡周辺の祭祀遺物の出土で特記すべきことは，手捏土器が複数個体で集積して出土している地点が４か所のユニット群で存在していることである。

H15e_7区の第15ユニットに位置する第１号住居跡の北コーナー部西側からは，手捏土器（第76図40・41）と坩形土器（第76図42）が出土し，その北東方には近接して坏形土器（第76図43・44）が２点，正位で充積したものと，単一で坏形土器（第76図45），甕形土器（第76図46），坏形土器（第76図47）や壺形土器が聰の頸部（第76図48）等が出土している。

H15e_8区の第12，H15e_9区の第９ユニットからは，手捏土器６点（第77図50・51・52・53・54）と小型手捏土器（第77図55）のほか，坏形土器（第77図56）が出土している。若干離れた西側にも手捏土器（第77図57）が正位で据置かれた状態で出土していて，手捏土器（第77図54・57）と本ユニット出土のその他の手捏土器との間に，土製垂れ飾り（第78図58），土製鏡形模造品（第78図59）が出土している。

H15e_8区の第１，第５ユニットからも，手捏土器（第78図60・61・62・63・64・65・66）７点，小型手捏土器（第78図67）が正位に据置かれた状態で出土しているほか，土製鏡形模造品の鈕釦部を天に向けたもの（第78図68）や鏡面を天に向けたもの（第78図69，第79図70・71・72）と，口縁部を欠損した壺形土器（第79図73）が共伴している。本地点は，幅１ｍ，長さ３ｍ程の鉤の手状に分布する焼土粒子，炭化粒子の点在範囲内に含まれ，この鉤の手状の焼土粒子，炭化粒子の点在する範囲内であるH15g_8区の第４，第８ユニットからは，手捏土器（第79図74・75・76・77）が４点，刀子（第79図79），H15g_9区の第９ユニットで坏形土器（第79図78）のほか，北西縁辺部には手捏土器（第79図80）が出土している。

焼土粒子，炭化粒子の点在している範囲外のH15f_9区の第９ユニットを中心に，手捏土器（第80図86・87・89・90・91・92）と小型手捏土器（第80図88）が出土している地点に近接して，勾玉（第80図93）が１点，土製鏡形模造品（第80図94・95・96，第81図97）が４点のほか，小型手捏土器（第81図98），小型甕形土器（第81図99）や土師器片が出土している。

その外，第１号住居跡付近で祭祀跡の痕跡を有しているユニットとしては，聰（第81図103）の上部に高坏形土器（第81図104）が重複し，手捏土器（第81図105）が出土したH15f_8区の第15ユ

ニットが存在する。隣接する同区の第14ユニット及びH15g_8区の第1，第2ユニットからは，提瓶（第81図106），土製臼形模造品（第81図107・108），高坏形土器（第82図109・110），有孔円板（第82図111）や小型手捏土器（第82図112）が出土している。同様に，小型手捏土器を包含するユニットとしては，H15g_8区の第3，第6ユニット付近が特記に値する。本ユニットからは，小型手捏土器（第82図119・120・121）3点のほか，手捏土器（第82図122・123・124，第83図125・126）の5点，坏形土器（第83図127）や土製鏡形模造品（第83図128）が出土している。本ユニットからの出土遺物は，全て焼土粒子，炭化粒子が被覆している地区の端部に位置している。

その他，瓿を出土した地点として，焼土粒子，炭化粒子が大きく分布点在している範囲内のH15g_9区の第7ユニットに，頸部上を損却した瓿胴部（第83図129）が出土している。

H16h_1区の第5，第6ユニットからは，掘立柱建築跡の柱痕上と柱痕間に，手捏土器（第89図1・2)や甕形土器片（第89図3・4）と，坏形土器（第89図5・6・7・8・9）が，椀形土器，（第89図10）と共に出土している。更に，H16h_1区の第6ユニットに位置している柱痕（P_{17}）内覆土から甕形土器片（第89図11）が出土していて，その東に隣接して位置している柱痕（P_{18}）内覆土からは坏形土器片（第89図12・13）が，本柱痕周辺からは手捏土器（第90図14）と坏形土器（第90図15），高台付坏片（第90図16）が出土している。H16h_1区の第11ユニットには，甕形土器片，坏形土器片，手捏土器片等の破砕片が集積しているが，近辺からの出土遺物も合わせ形態が捉えられるまでに復元できたものは，甕形土器（第90図17），坏形土器（第90図18），小型手捏土器（第90図19），手捏土器（第90図20）等である。その他，掘立柱建築跡確認面上からは，坏形土器（第90図21），手捏土器（第90図22・23）のほか，土製臼形模造品（第90図24），双孔円板（第90図25・26・27）や単孔円板（第90図28）が出土している。鉄製品として，H16h_1区の第6ユニットの北東辺から鉄鏃（第90図29)と，第11ユニッからも鉄鏃（PL10）が出土している。

鉄鏃は，H16i_2区の第8ユニットで1点（第90図30），H16h_3区の第13ユニットの第14号土坑の覆土で1点（第90図32）と，H16i_3区の第14ユニットで1点（第90図31）が出土している。この周辺には，土器溜まり的様相を示した祭祀遺物が，概して，南北に縦列の配置を示してブロック状に分かれて検出された。

中央に位置しているH16i_3区の第5ユニットを中心に，手捏土器（第91図33・34・35・36・37・38・39・40・41）9点のうち，2点（第91図33・35）が底部を天に向けて伏し置かれた状態で遺存し，外は坏形土器（第91図42）等や，破砕片と混在して出土している。H16i_2区の第4ユニットに存在している小型手捏土器（第91図43）は，坏形土器（第91図44）と共伴している。H16i_2区の第4ユニットとH16i_3区の第5ユニットの間には，双孔円板（第91図45）が出土している。

北側に位置しているブロックの中心は，H16h_3区の第14ユニットである。本ユニットからは，正位に据置かれた様相を呈している手捏土器（第92図46）のほか，欠損部の多い手捏土器（第92

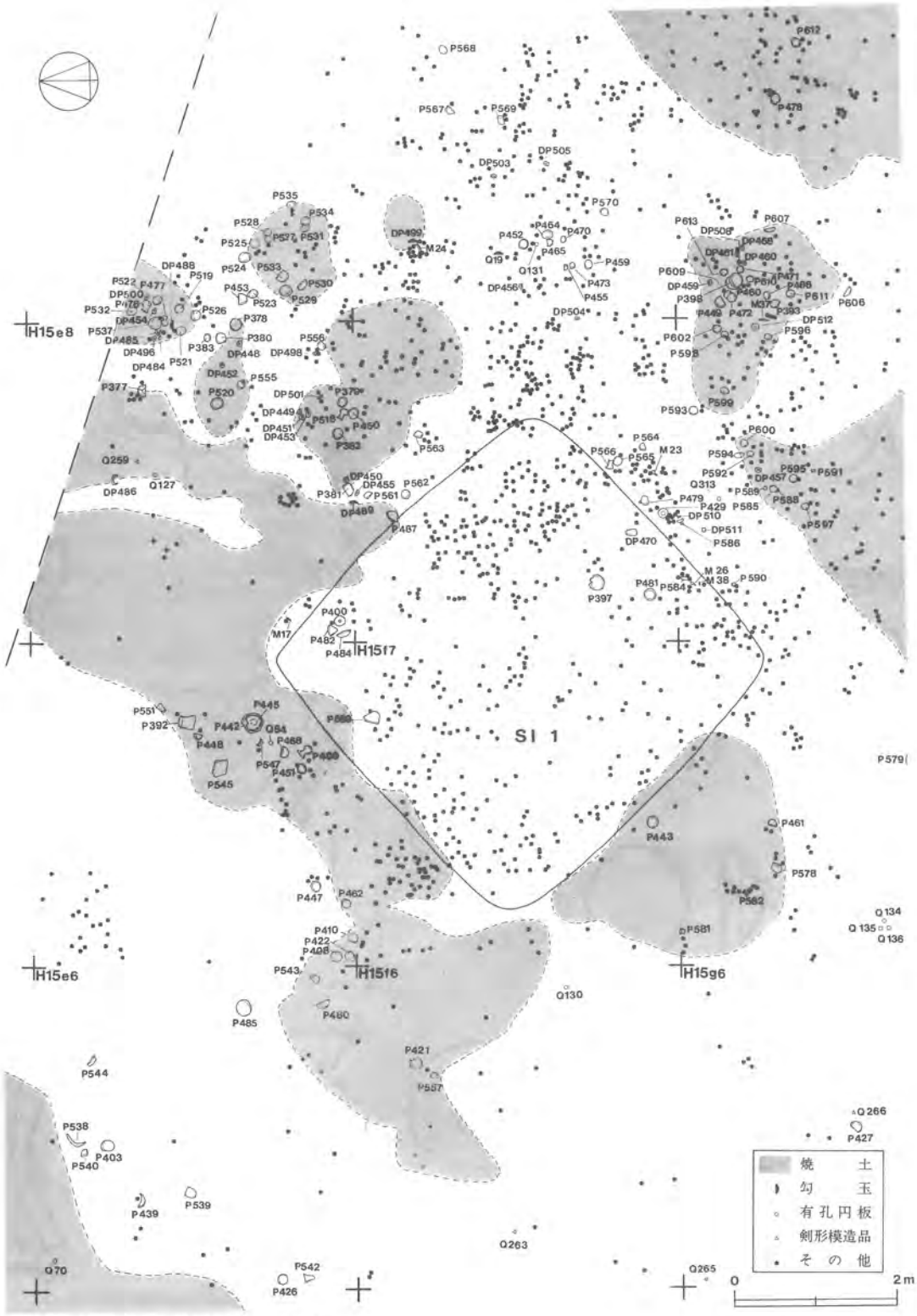
図47・48）が北側の第10ユニットにかけて出土している。本ユニットの南側は，H16i3区の第2ユニットとにかけて手捏土器（第92図49），椀形土器（第92図50），甕形土器（第89図4，第92図52）等が出土している。付近からは，小型壺形土器（第92図53）や手捏土器（第92図54）が出土し，この手捏土器（第92図54）は先の正位に据置かれた様相を呈しているH16h3区の第12ユニットからのもの（第92図46）と出土状態が類似している。

残る南側に位置しているブロックは，径2m程の範囲に点在し，小型手捏土器（第92図55），手捏土器（第93図56），甕形土器片（第93図57・58）や双孔円板（第93図59）が，多量の甕形土器片，高坏形土器片，坏形土器片，器台形土器片等と混存して出土している。

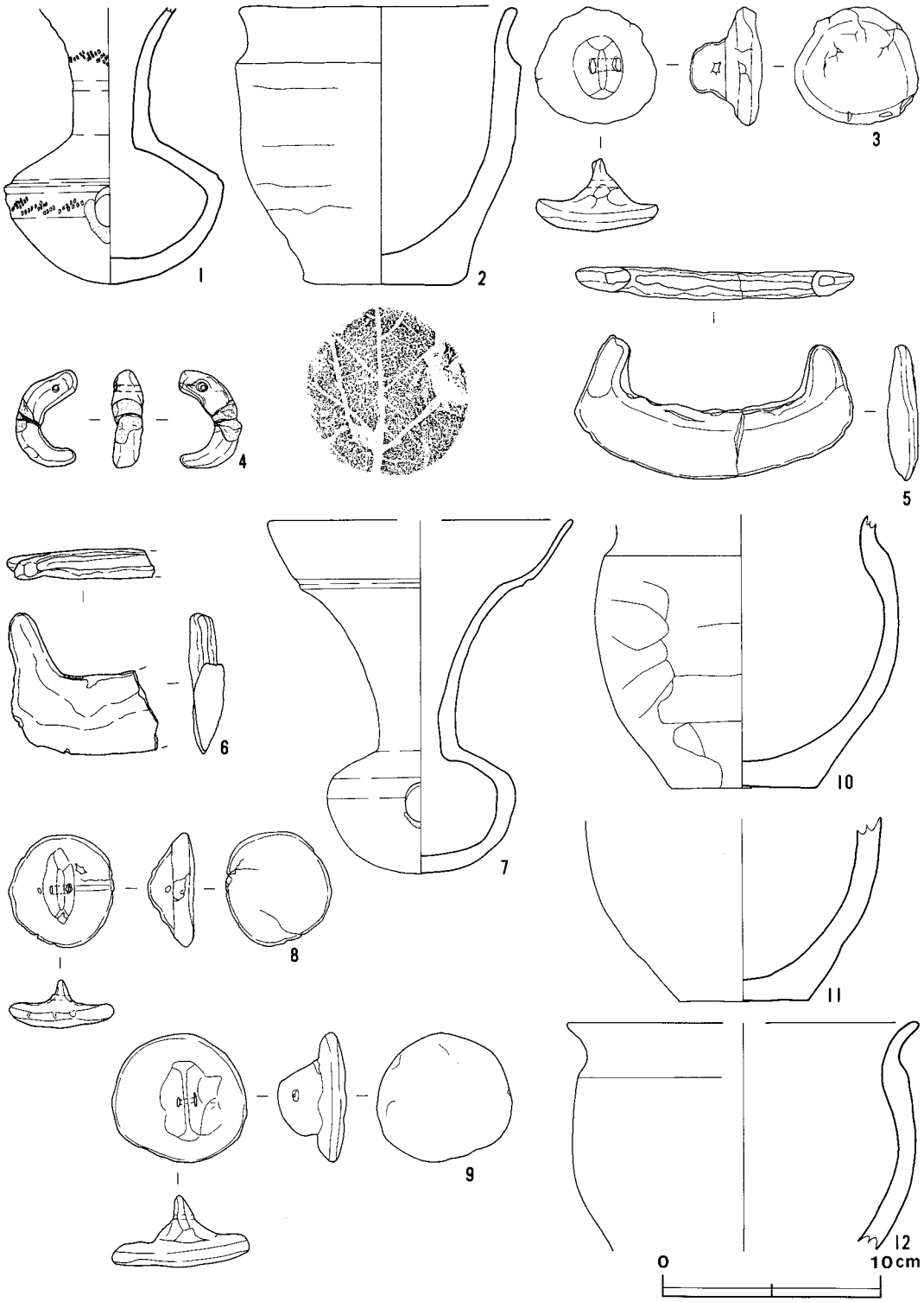
H16i2区の第16ユニットにおいては，勾玉（第93図61）と手捏土器（第93図60）が出土し，その他，H16i3区の第7ユニットでは，厚手の臼玉（第93図62）が1点出土している。

祭祀跡出土遺物観察表

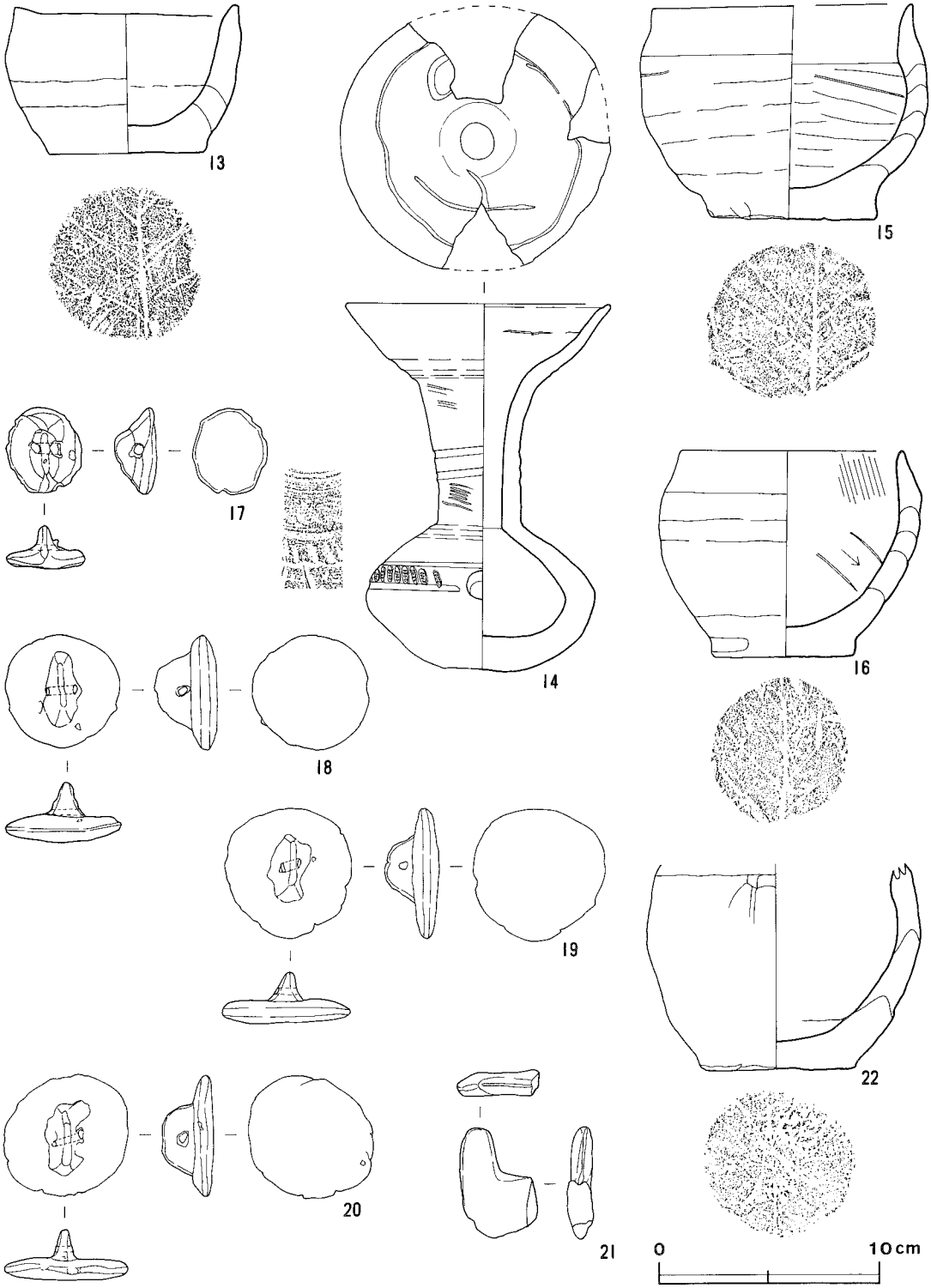
図版番号	器種	法量(cm・g)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第73図 1	瑳 須恵器	B（12.2） C（－）	底部より体部中位まで緩やかに内彎，体部上位で稜を挟んで2本の凹線が廻り，細い頸部まで直線的で口縁部でラッパ状に開く。	口縁部内外面，体部，底部外面共に横ヘラナデ。体部中位，頸部上位に櫛による斜の刺突文。	砂粒・細砂 暗オリーブ灰色 良好	H15e8-8 80% P477
2	手捏土器 （鉢形土器） 土師器	A（12.5） B 12.7 C 6.7	平底木葉痕。底部引き締まり頸部まで緩やかに内彎して外傾，口縁部極端に外反して直立する。	口縁部丁寧な横ナデ調整。頸部下外面粘土紐巻き上げ痕を多く残し手捏ね成形，内面不定方向のナデ調整。	砂粒・スコリア・雲母 にぶい橙色 普通	H15e8-8 85% P537
3	土製 鏡形模造品	径 5.3 高さ 3.3 重量46.7	粘土円板に鈕釦部が捻り上げられ焼成。鏡面は皿状に彎曲する。	厚手の粘土を手捏ね，鈕釦部を捻り上げている。鈕釦部孔は，双方から穿孔。	砂粒・スコリア 橙色 普通	H15e8-7 100% DP496
4	土製勾玉	全長 4.5 厚さ 1.5 重量(10.7)	頭部断面長方形に近く，上位から下位端部断面は円形。不細工に彎曲し，下位先端部は尖る。	粘土紐を手捏ね。勾玉の孔は片側からのみ穿孔。	砂粒 灰褐色 普通	H15e8-8 98% DP488
5	土製鍬先形 模造品	縦 6.4 横 12.9 厚さ 1.4	「凹」の字状鍬先。刃部の両端部は若干せり上がり，刃部薄く柄装着部が最大厚となる。	裏面平坦で粗雑。表面横ナデ。柄装着部中央部に縦慢な太く浅い沈線。	砂粒・雲母 橙色 普通	H15e8-8 100% DP484
6	土製鍬先形 模造品	縦 6.5 横（6.7） 厚さ 1.4	「凹」の字状鍬先の耳部。身丈厚く，本跡出土中では最大形を誇る。	不定方向の手捏ね成形と粗雑なナデ。柄装着部にヘラ先による浅い沈線。	砂粒・長石 灰白色 普通	H15e8-8 40% DP485
7	瑳 須恵器	A（14.1） B 16.3 C（－）	底部より体部中位まで内彎して丸く，体部中位で，若干外彎的に内傾する。頸部細くラッパ状に開いて立ち上がり，口縁部で稜と凹線を有して内彎ぎみに外傾する。	口縁部，頸部内外面ヘラナデ。体部内面横ヘラナデ。体部外面横ヘラ削り，ヘラナデ。	砂粒・長石 灰色 普通	H15e9-5 80% P476
8	土製 鏡形模造品	径 5.2 高さ 1.0 重量30.9	小径。やや厚手の粘土円形板に鈕釦部が捻り上げられ焼成。	成形，調整共に粗雑。鈕釦部の孔は片方からのみ穿孔。	砂粒・雲母 橙色 普通	H15e9-5 100% DP454



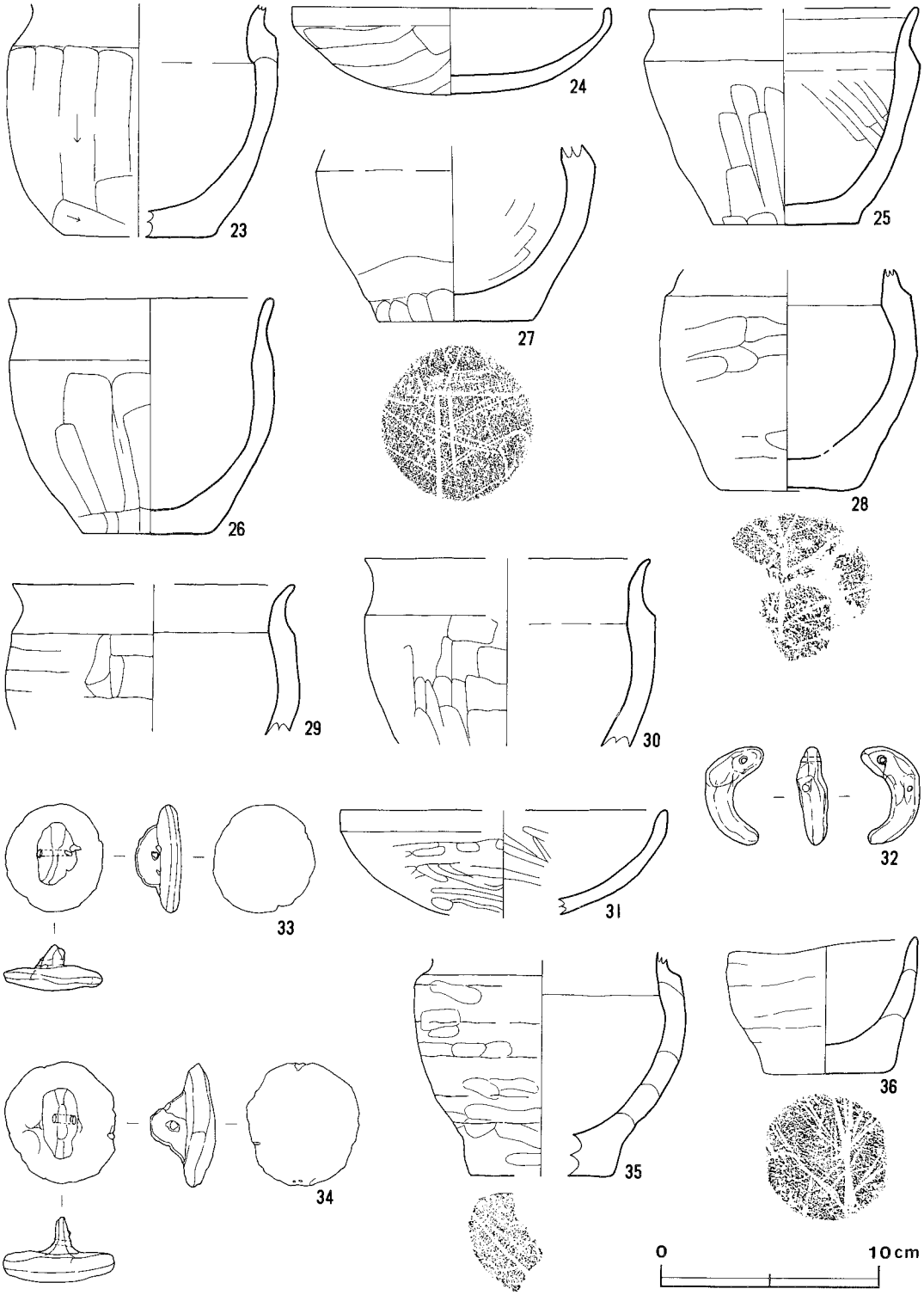
第72図　祭祀跡遺物配置図（1）



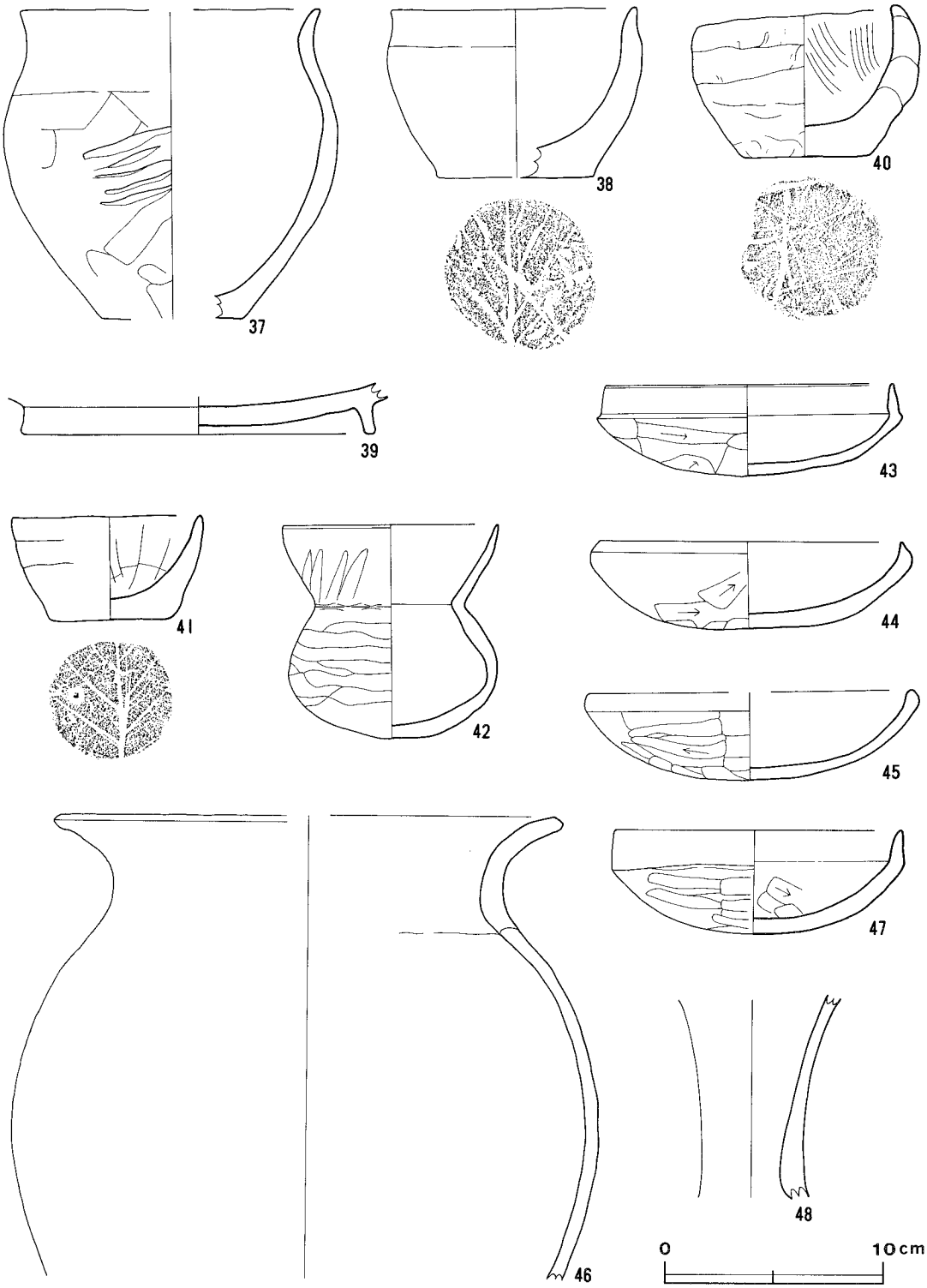
第73図　祭祀跡出土遺物実測図（1）



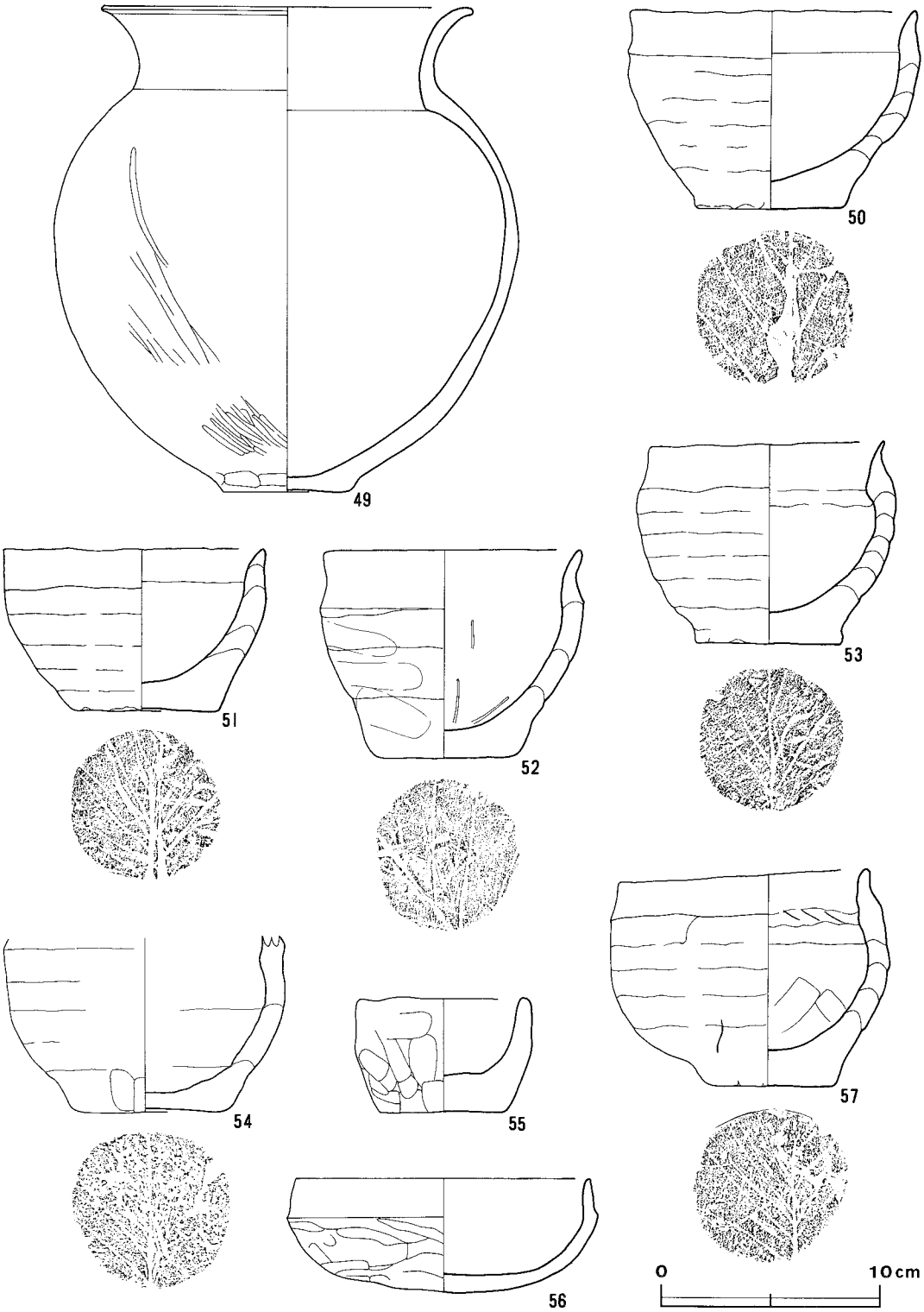
第74図　祭祀跡出土遺物実測図（２）



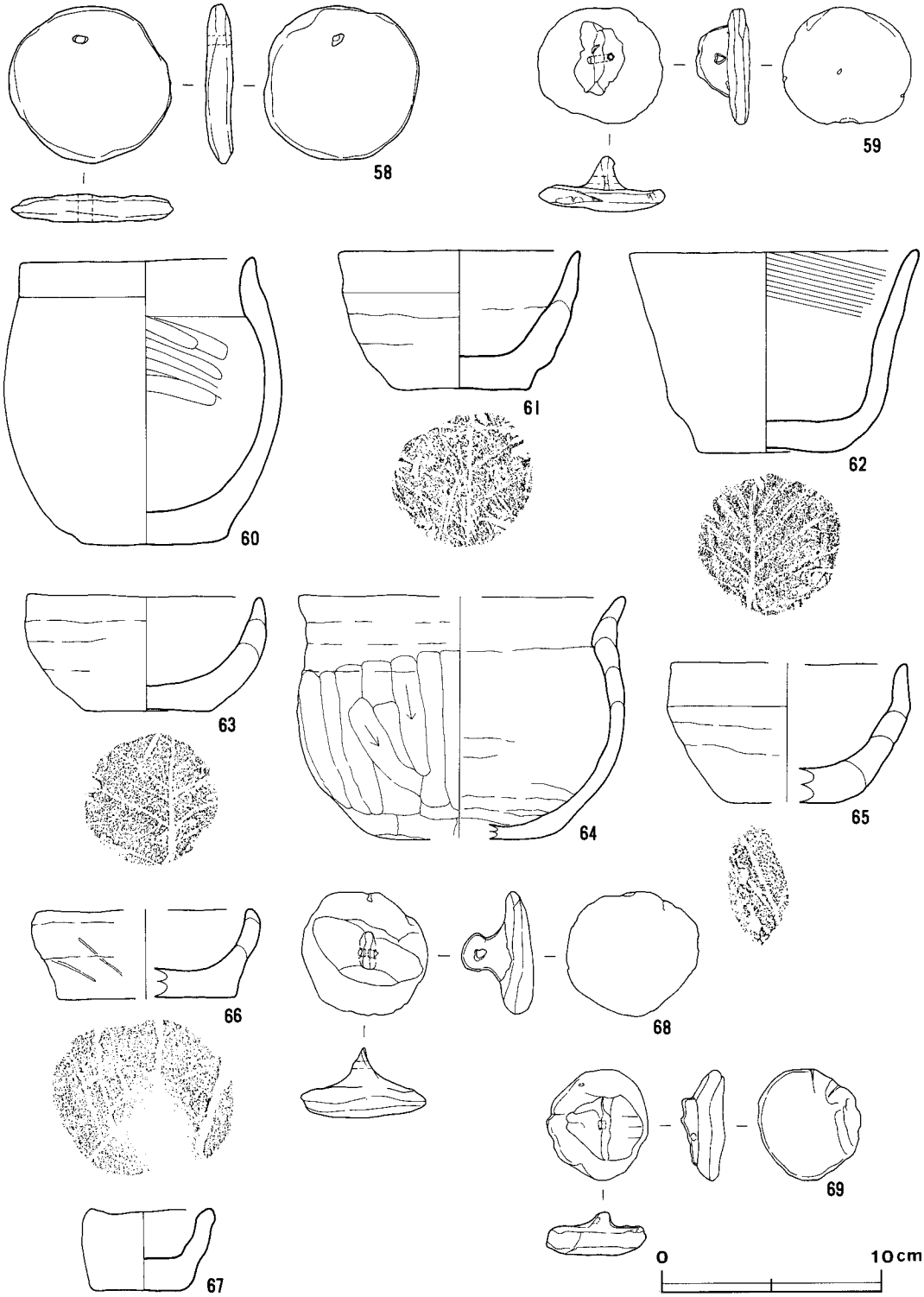
第75図　祭祀跡出土遺物実測図（3）



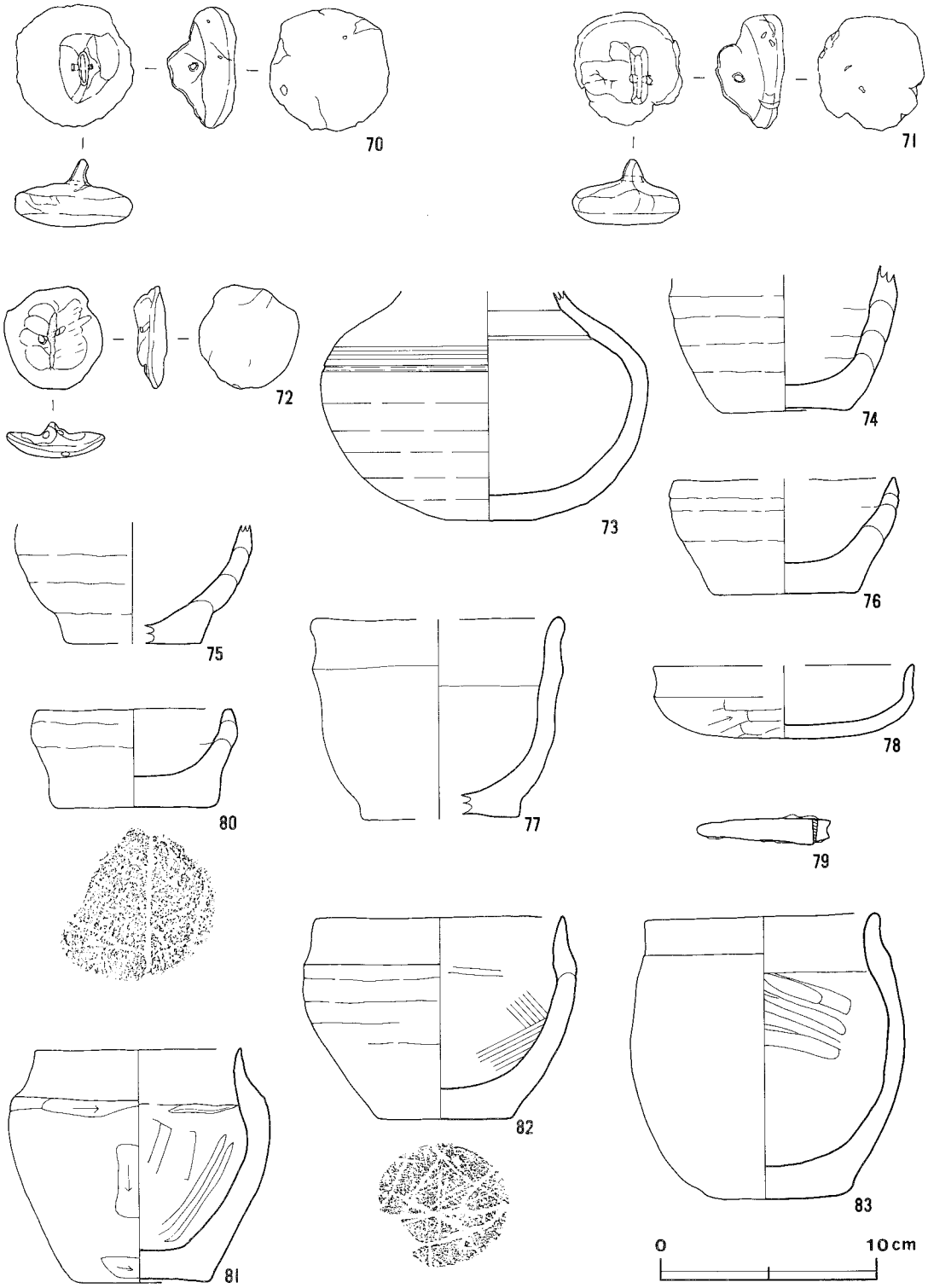
第76図　祭祀跡出土遺物実測図（４）



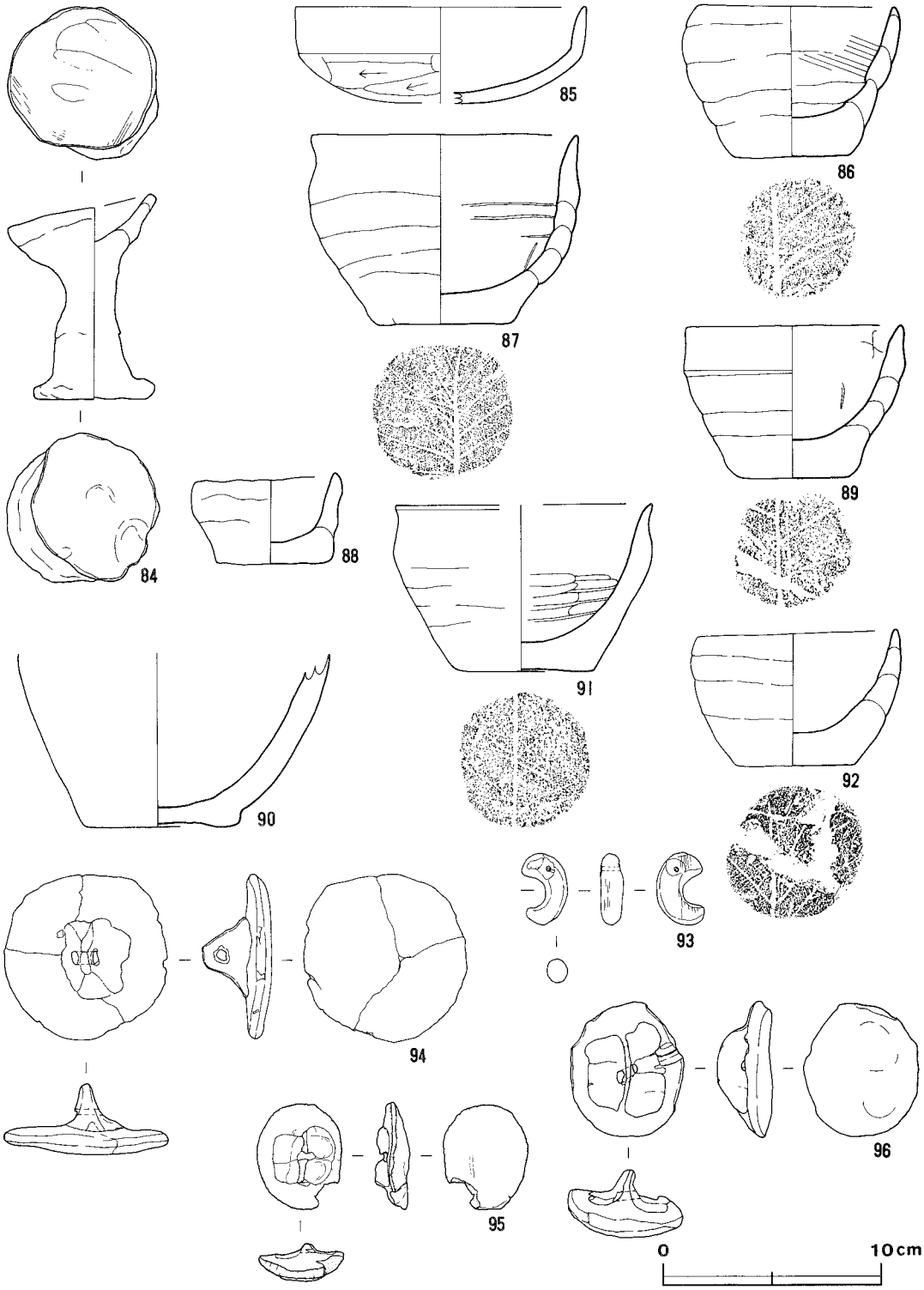
第77図　祭祀跡出土遺物実測図（５）



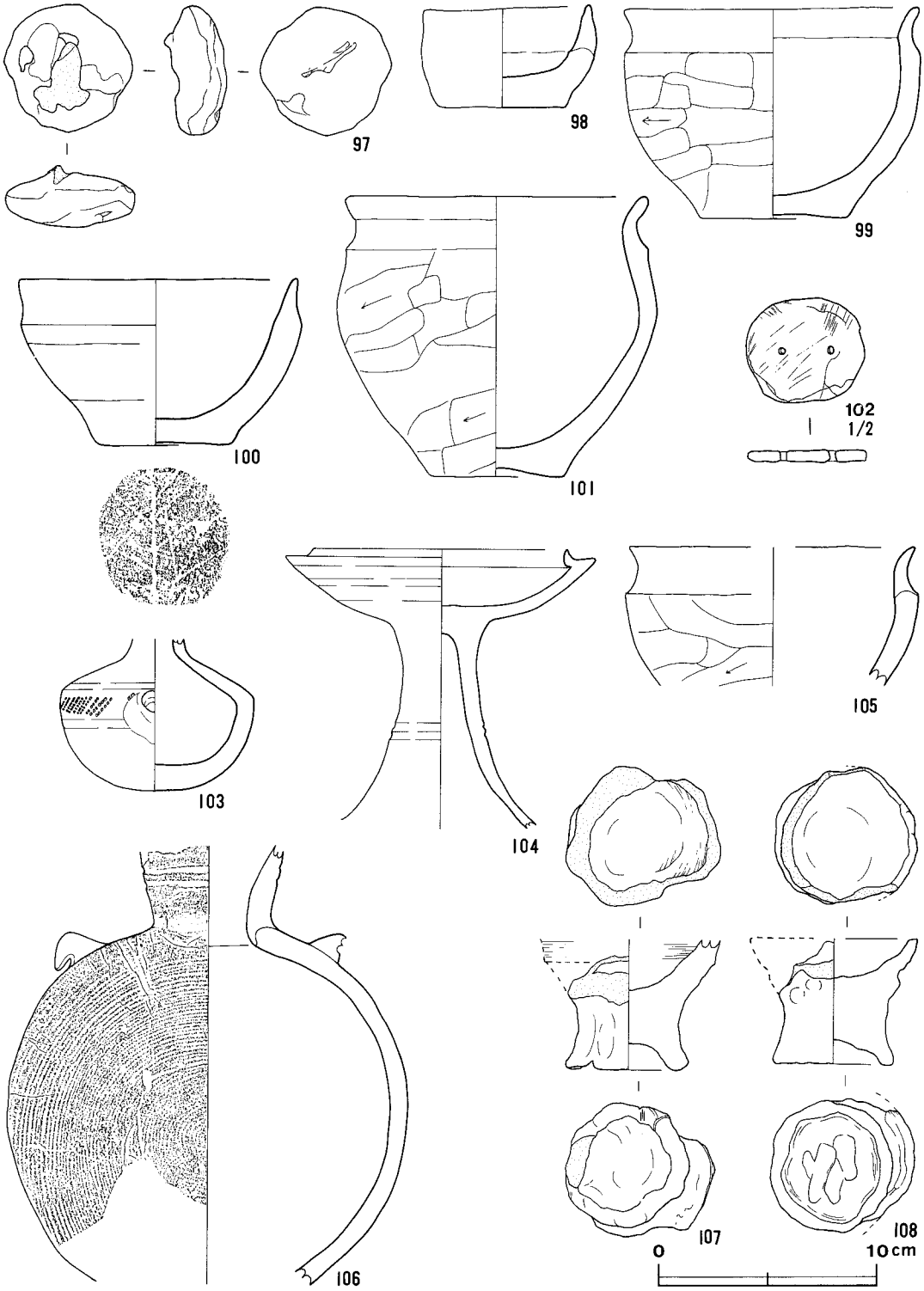
第78図　祭祀跡出土遺物実測図（６）



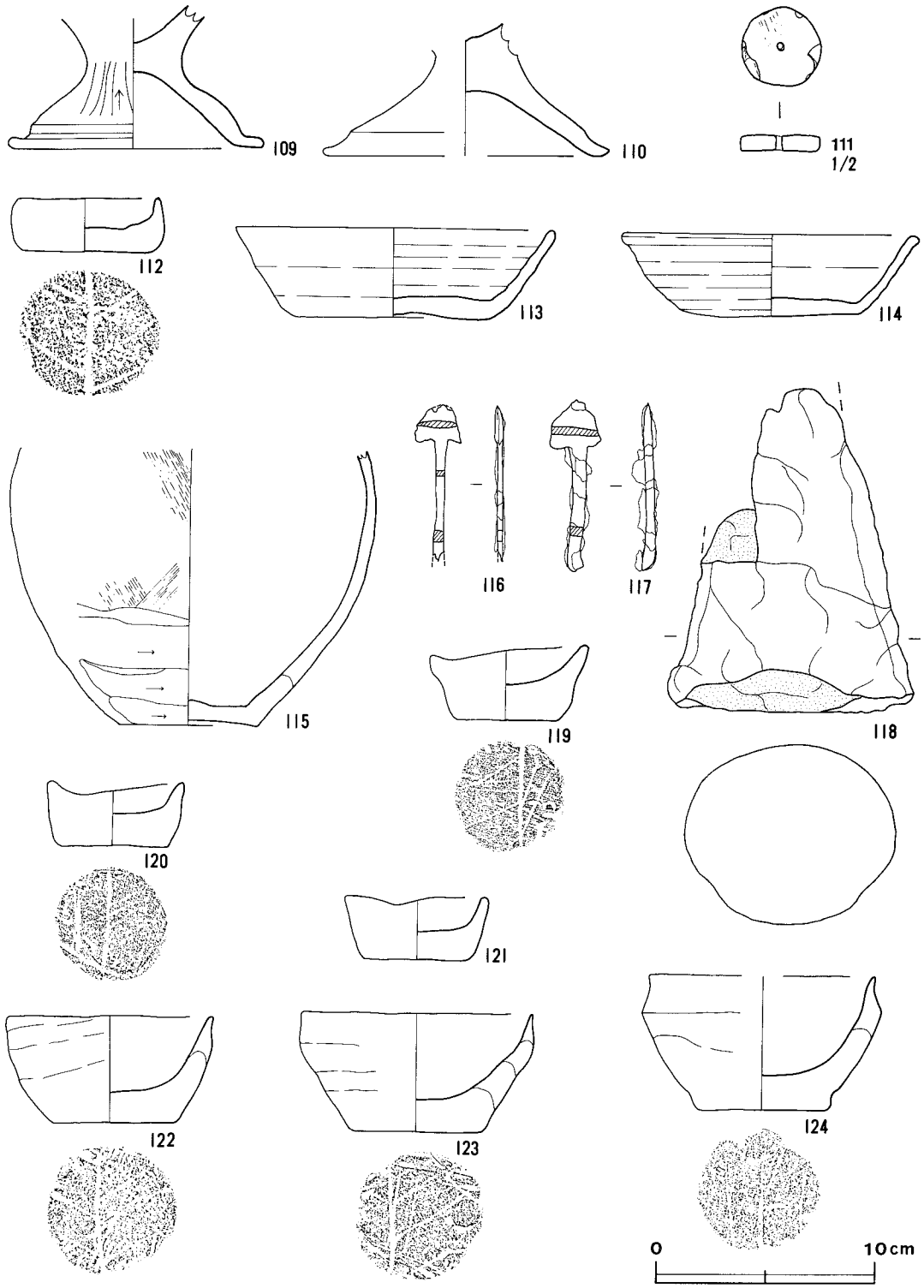
第79図　祭祀跡出土遺物実測図（７）



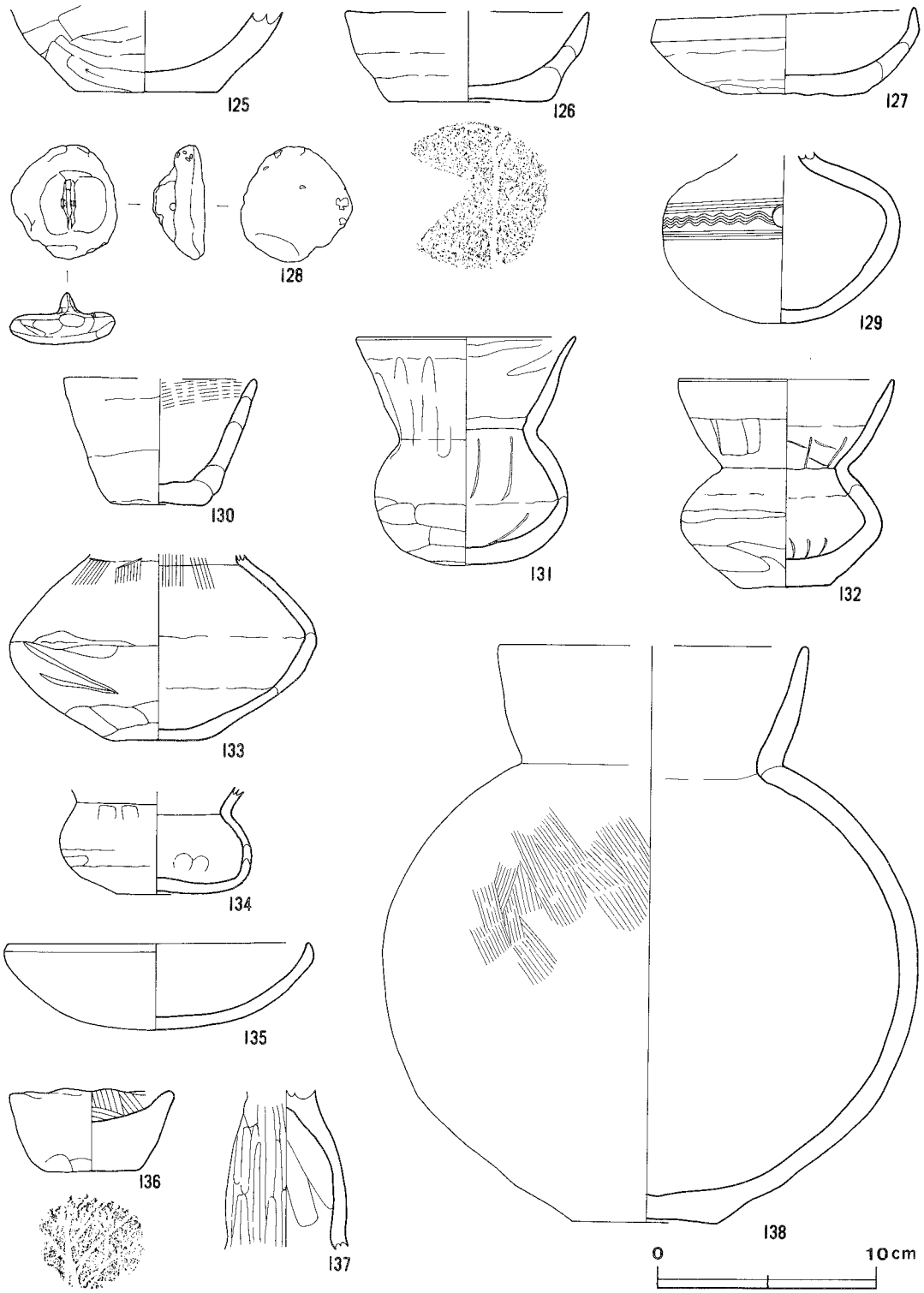
第80図　祭祀跡出土遺物実測図（８）



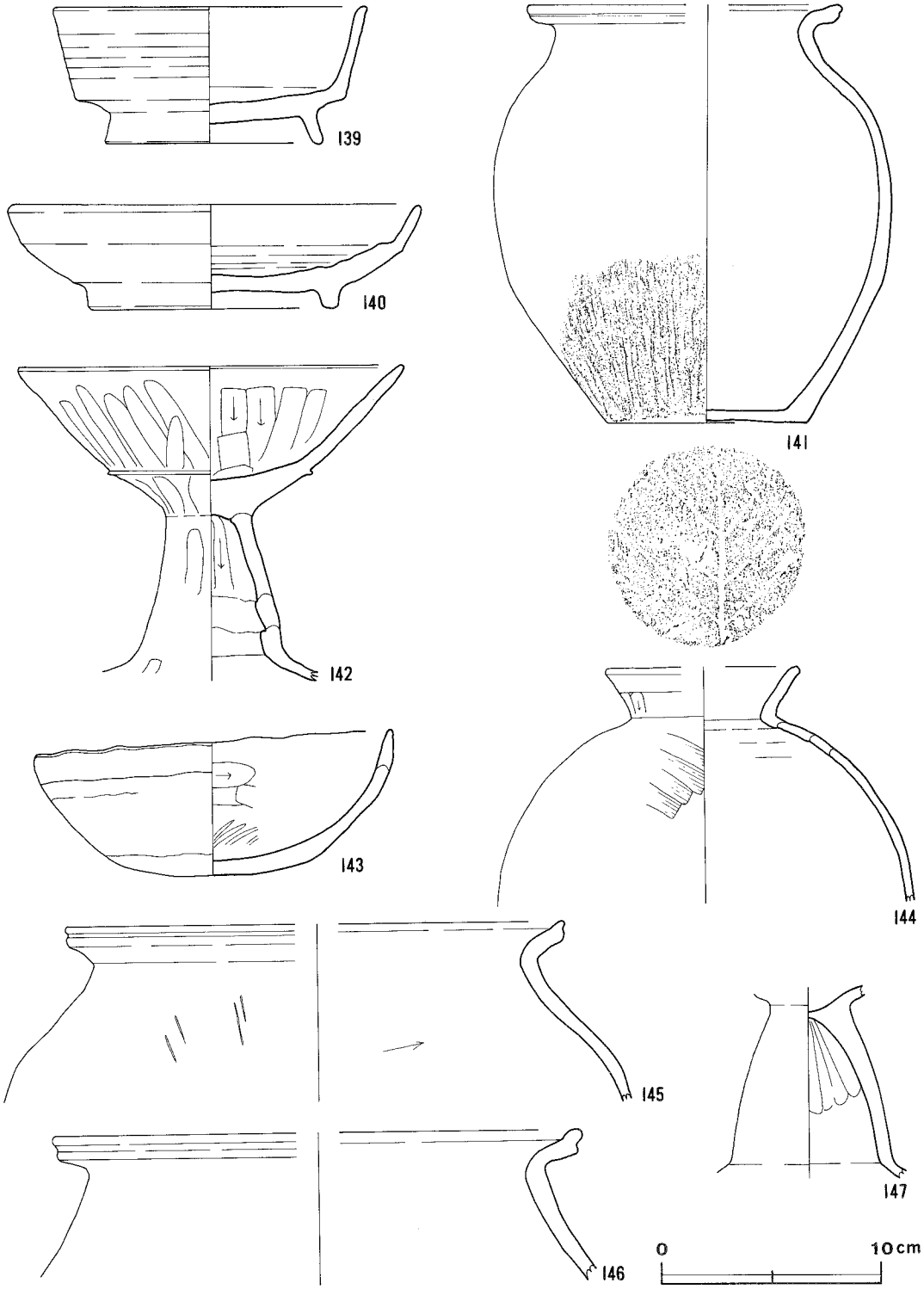
第81図　祭祀跡出土遺物実測図（9）



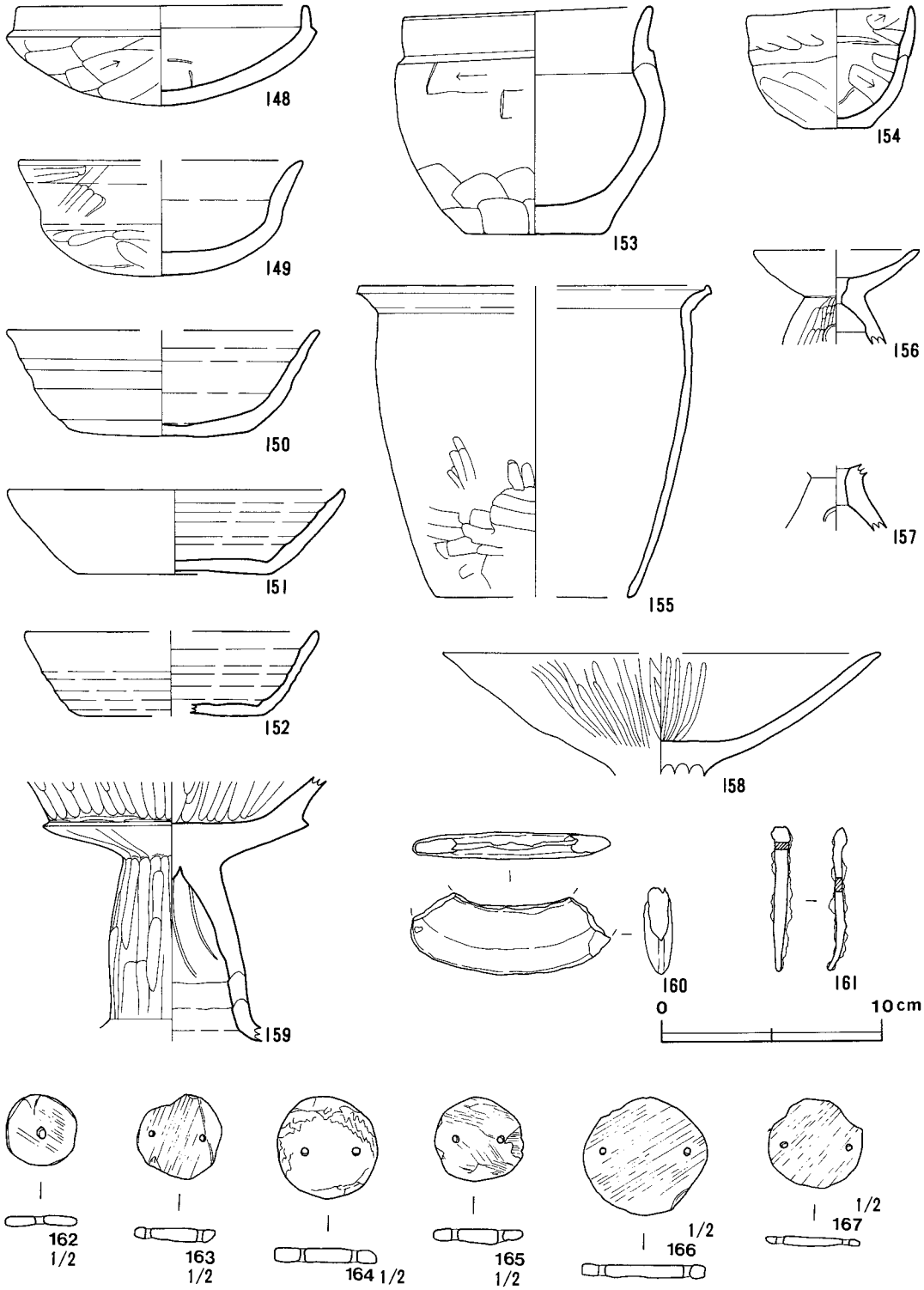
第82図　祭祀跡出土遺物実測図（10）



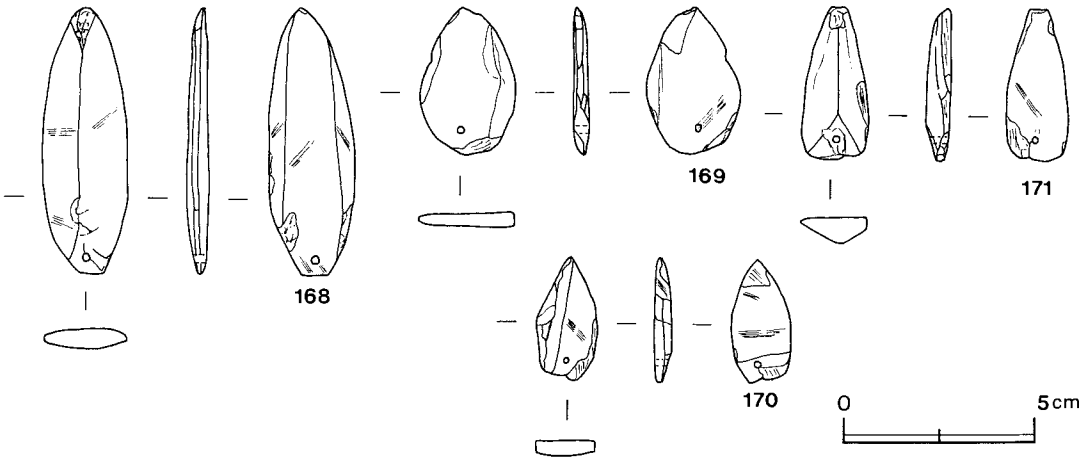
第83図　祭祀跡出土遺物実測図（11）



第84図　祭祀跡出土遺物実測図（12）



第85図　祭祀跡出土遺物実測図（13）



第86図　祭祀跡出土遺物実測図（14）

図版番号	器　種	法量(cm・g)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第73図 9	土製 鏡形模造品	径　6.3 高さ 3.1 重量57.1	大径。径と厚みのバランス整う。粘土楕円形板に大きな鈕釦部が無作為に成形される。	成形，調整共に粗雑で手捏ね的成形。	砂粒・長石 橙色 普通	H15eg-5 100% DP500
10	手捏土器 (鉢形土器) 土師器	B（12.5） C　6.8	平底。胴下半部直線的に外傾，中央部で内彎して頸部まで立ち上がり，口縁部極端に外反して直立する。	口縁部内外面共丁寧な横ナデ調整。胴部と底部器肉厚く，外面横ヘラ削り後ナデ調整。内面粗雑なナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	H15eg-9 55% P532
11	手捏土器 (鉢形土器) 土師器	B（8.4） C　6.0	平底。胴部は内彎気味に立ち上がっている。	胴部内面横ヘラナデ後不定方向からナデ調整。胴部と底部器肉厚く，外面横ヘラ削り後ナデ調整。底部ヘラ削り。	砂粒・スコリア・雲母 明褐灰色 普通	H15eg-8 30% P521
12	手捏土器 (鉢形土器) 土師器	A（16.2） B（10.4）	底部欠損。胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，口縁部は外反しながら開く。外面の口縁部と胴部の境に稜を有する。	口縁部内外面横ナデ調整。胴部外面横ヘラ削り後ナデ調整。内面横ヘラナデ後不定方向からナデ調整。	砂粒・スコリア・長石 赤灰色 普通	H15eg-5 20% P522
第74図 13	手捏土器 (椀形土器) 土師器	A　13.3 B　6.8 C　7.3	平底木葉痕。胴部はゆるやかに内彎しながら外傾して立ち上がり，口縁部との境に稜を有している。	口縁部内外面，胴部内面共横ナデ調整。胴部外面細い段差の粘土紐巻き上げ痕有り，ナデ。	砂粒・スコリア 灰褐色 普通	H15eg-9 99% P526
14	甕 須恵器	A（12.2） B　17.1 C（－）	体部下位は緩やかに内彎して外傾，中位に最大径を有して上位で内傾して立ち上がり，細い頸部に続く。頸部は緩やかに外傾し，口縁部はわずかに内彎気味で大きく外傾して開く。	頸部上位及び下位に2条の浅い凹線間を横カキ目調整。下段凹線下に一部波状カキ目。体部上位に横カキ目，その下位に櫛描き波状文。体部最大径部上位に2条の凹線，凹線間に櫛による刺突文。口縁部内面1～2条の凹線を廻らす。下位にフリーハンドの凹線を廻らし，孔側に×，反対側に○印をヘラ先で刻む。成形，調整，施文共に粗雑。	砂粒・細砂 灰色 普通	H15ea-15 90% P518

図版番号	器種	法量(cm・g)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第74図 15	手捏土器 (鉢形土器) 土師器	A 11.8 B 10.0 C 7.4	平底木葉痕。底部引き締まり，頸部まで緩やかに内彎して立ち上がる。口縁部で緩やかに外彎して直立する。	口縁部内外面ナデ調整。胴部内面横ヘラナデ。胴部外面は粘土紐巻き上げ痕，不定方向の手捏ね成形。一部ヘラナデ。	砂粒・スコリア 橙色 普通	H15e8-15 80% P379
16	手捏土器 (鉢形土器) 土師器	A 10.0 B 9.6 C 6.6	平底木葉痕。底部引き締まり，頸部まで緩やかに内彎し，外傾して立ち上がる。口縁部は隠やかに外彎し，内傾気味に立ち上がる。	口縁部内外面，胴部内面共ヘラナデ後丁寧なナデ調整。胴部外面は粘土紐巻き上げ痕多く残存，横ナデ後一部横ヘラナデ調整。粗成。	砂粒・スコリア・ 長石 橙色 普通	H15f8-3 100% P450
17	土製 鏡形模造品	径 3.9 高さ 1.9 重量11.9	小径小型。背面は鈕釦部のみ目立つ。鏡面不整面。	手捏ね的成形。ナデ調整。	砂粒 灰黄褐色 普通	H15e8-15 100% DP453
18	土製 鏡形模造品	径 5.2 高さ 2.9 重量39.0	鈕釦部大きくせり上がり，鏡面背面共丸味を帯びる。	手捏ね的成形が良い。孔は片方からのみ穿孔。	砂粒・雲母 橙色 普通	H15e8-15 100% DP449
19	土製 鏡形模造品	径 6.0 高さ 2.5 重量41.3	鏡面の円形成形に無理が認められ粗雑。鈕釦部成形も無作為で粗雑。	手捏ね的成形は粗雑，整形に丁寧さ認められず。孔は穿孔後，数度貫通され拡張。	砂粒 にぶい橙色 普通	H15e8-15 100% DP451
20	土製 鏡形模造品	径 6.1 高さ 2.4 重量34.2	大径大型。鏡面は若干楕円形，鈕釦部は方形状の捻り上げ成形で美しい。	鏡面側縁部は背面にせり上がる様に成形。手捏ね的成形後ナデ。孔は片方からのみ穿孔。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	H15e8-15 100% DP498
21	土製鍬先形 模造品	縦 5.2 横 (3.6) 厚さ 1.3	「凹」の字状鍬先の端部片。身丈狭く，刃部から柄装着部は直角に近い。柄装着部は細く深い刻み目。	手捏ね的成形。器肉の最大厚は身丈の中位にある。力強い不定方向のナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	H15e8-16 30% DP501
22	手捏土器 (鉢形土器) 土師器	B (9.5) C 6.7	平底木葉痕。底部は引き締まり，頸部まで緩やかに内彎して立ち上がる。	胴部外面横ヘラ削り後ナデ調整。内面横ヘラナデ後不定方向のナデ調整。	砂粒・スコリア 淡赤橙色 不良	H15e8-15 40% P382
第75図 23	小型 甕形土器 土師器	B (10.8) C 7.0	底部は平底。胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内外面横ナデ調整。胴部外面と底部はヘラ削り，内面ヘラナデ調整。	砂粒・スコリア 褐色 普通	H15e8-16 60% P556
24	坏形土器 土師器	A 14.6 B 4.1 C (−)	底部は丸底。体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。口縁部は短く直立する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内外面横ナデ調整。体部外面ヘラ削り，内面ヘラ磨き。	砂粒 黒褐色 良好	H15e9-9 95% P525
25	小型 甕形土器 土師器	A (12.2) B 10.0 C 6.6	底部は平底。胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，口縁部は外反気味に直立する。内面の口縁部と胴部の境に稜を有す。	口縁部内外面横ナデ調整。胴部外面と底部はヘラ削り，内面ヘラナデ調整。	砂粒・スコリア・ 長石 にぶい橙色 普通	H15e9-10 60% P527
26	鉢形土器 土師器	A 12.3 B 10.9 C 5.8	平底木葉痕。胴部は内彎気味に立ち上がっている。	胴部内面ヘラナデ後不定方向からナデ調整。	砂粒・スコリア・ 雲母 にぶい橙色 普通	H15e9-10 60% P528
27	鉢形土器 土師器	B (8.0) C 7.1	底部は平底。胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がり，口縁部は外反気味に直立する。	口縁部内外面横ナデ調整。胴部外面と底部はヘラ削り，内面ヘラナデ。胴部と底部器肉厚く，胴部外面横ヘラ削り後ナデ調整。	砂粒・スコリア・ 礫・雲母 にぶい橙色 普通	H15e9-13 60% P529

図版番号	器　種	法量(cm・g)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第75図 28	手捏土器 (小型 甕形土器) 土師器	B (10.2) C 6.8	平底木葉痕。胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，口縁部は外反気味に直立する。	口縁部内外面横ナデ調整。胴部外面粘土紐巻き上げ痕残存。縦ナデ後上半部横ナデ。内面不定方向のナデ調整。	砂粒・雲母・長石・スコリア 褐灰色 普通	H15e9-13 40% P530
29	小型 甕形土器 土師器	A (12.0) B (6.8)	胴部は丸く張り，口縁部は直立してから外反する。	口縁部内外面横ナデ調整。胴部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ。	砂粒・スコリア・雲母 にぶい褐色 普通	H15e9-14 30% P531
30	小型 甕形土器 土師器	A (13.1) B (8.7)	胴部は丸く張り，口縁部は外反気味に直立する。	口縁部内外面横ナデ調整。胴部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ。	砂粒・雲母 黒褐色 普通	H15e9-14 40% P534
31	坏形土器 土師器	A (15.0) B (4.8) C (−)	底部は丸底。体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。口縁部は短く直立する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内外面横ナデ調整。体部外面ヘラ削り，内面ヘラ磨き。	砂粒・雲母 褐灰色 普通	H15e9-10 20% P535
32	土製勾玉	全長 4.6 厚さ 1.5 重量 9.5	頭部断面楕円形，上位で角度を有し，以下端部まで緩やかに彎曲。断面方形状。下位端部尖る。	粘土紐の手捏ね的成形。頭部は指圧による押さえ。孔は双方から穿孔。	砂粒 橙色 普通	H15f8-2 100% DP489
33	土製 鏡形模造品	径 5.0 高さ 2.2 重量25.8	鏡面は縦に長い楕円形。鈕釦部小作りの扇形。孔は背面に近い。	手捏ね的成形。鏡面，背面共ナデ。一部丁寧なナデ調整。	砂粒・雲母 浅黄橙色 普通	H15e8-15100% DP450
34	土製 鏡形模造品	径 5.6 高さ 2.0 重量41.9	鏡面側縁が不整形。背面は鈕釦部の捻り上げで一部欠損気味。孔径は大きい。	手捏ね的成形。	砂粒・雲母 橙色 普通	H15f8-2 100% DP455
35	手捏土器 (鉢形土器) 土師器	B (10.4) C (6.7)	平底木葉痕。底部，胴下半部下位共に締まり，中央部で内彎，若干外傾して立ち上がる。口縁部大きく外反して内傾する。	口縁部内外面共横ナデ調整。頸部内面に稜を有し，胴部は主に横ナデ。内部外面粘土紐巻き上げ痕多い。	砂粒・スコリア・雲母 にぶい橙色 普通	H15e8-14 40% P381
36	手捏土器 (鉢形土器) 土師器	A (8.8) B 6.3 C 5.6	平底木葉痕。胴下半部引き締まらず，胴上部でわずかに内彎しながら外傾して立ち上がる。	胴部内面横ナデ調整。外面粘土紐巻き上げ痕有り。外面は粗雑な横ナデ。	砂粒・スコリア にぶい赤褐色 普通	H15f8-2 95% P561
第76図 37	甕形土器 土師器	A (13.8) B 14.3 C (6.6)	平底。胴中央部から上半部にかけて最大径を有して緩やかに内彎して立ち上がり，口縁部で外反，口縁部は外傾気味となる。	口縁部内外面共横ヘラナデ調整。胴部内面横ヘラナデ。胴部外面ナデ後，斜ヘラナデ調整。一部横と斜に4～5条のヘラ先刻み目を有する。底部ヘラ削り。	砂粒・雲母 黒褐色 普通	H15f8-2 40% P562
38	手捏土器 (鉢形土器) 土師器	A (11.2) B 7.8 C 7.2	平底木葉痕。内彎気味に緩慢と立ち上がり，口縁部で隠やかに外反して直立する。	口縁部内外面，胴部内面共横ヘラナデ。胴部外面粗雑なナデ。	砂粒・スコリア 明赤褐色 普通	H15f8-3 50% P563
39	皿 陶器	B (2.3) D 1.3 E (16.4)	底部は平底。外側へわずかにふんばる高台が付く。	底部は，回転ヘラ削り調整。	砂粒・細砂 にぶい赤褐色 良好	H15f8-2 40% P487
40	手捏土器 (鉢形土器) 土師器	A 9.2 B 6.5 C 5.8	平底木葉痕。底部よりわずかに内彎しながら外傾，口縁部で若干内傾気味になる。	外面粘土紐巻き上げ痕多く残存。外面は，胴下半部と口縁部のみわずかにナデ。内面は，粗雑に不定方向からのヘラナデ。	砂粒・長石・礫 にぶい橙色 普通	H15e7-15100% P451

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第76図 41	手捏土器 (鉢形土器) 土師器	A 8.7 B 4.8 C 5.5	平底木葉痕。胴下半部は引き締まりが無く，内彎気味に外傾して立ち上がる。	内面は横ナデ後，不定方向からナデ調整。外面は粗雑なナデ。粘土紐巻き上げ痕残存。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	H15e7-15 60% P468
42	坩形土器 土師器	A (9.8) B 9.9 C (－)	丸底。胴中央部に最大径を有し，頸部で引き締まる。口縁部は大きく発達して開くが，わずかに内彎する。	胴部内面横ナデ。口縁部内外面横ナデ，縦ヘラ磨き。胴部外面横ナデヘラ削り後横ヘラ磨き。	砂粒・スコリア・雲母 橙色 普通	H15e7-15 85% P409
43	坏形土器 土師器	A 13.4 B 4.2 C (－)	底部丸底。体部は小さく内彎し，大きく外傾して立ち上がる。口縁部と体部間に鋭い稜を有する。口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内外面，体部内面共ナデ。稜下位，体部外面，底部共ヘラ削り後ヘラナデ調整。	砂粒・雲母 橙色 普通	H15e7-11 100% P442
44	坏形土器 土師器	A 13.9 B 4.2 C 3.2	安定不足の平底。体部はわずかに内彎し，大きく外傾して立ち上がる。口縁部は極端に内彎するが，口唇部は直立する。	内面ヘラナデ後ナデ調整。口縁部外面ヘラナデ。体部ヘラ削り後一部ナデ調整。底部ヘラ削り。	砂粒 にぶい橙色 普通	H15e7-11 90% P445
45	坏形土器 土師器	A (15.0) B 4.0 C (－)	丸底。体部はわずかに内彎し，大きく外傾して立ち上がり，口縁部は極端に内傾する。	体部外面ヘラ削り。口縁部内外面，体部内面共ナデ。	砂粒・長石 橙色 普通	H15e7-11 30% P547
46	甕形土器 土師器	A (23.4) B (21.4)	胴中央部に膨らみ有し，頸部緩やかに外反する。口縁部は外傾する。	口縁部横ナデ。胴部内外面共に不定方向のナデ。	砂粒・雲母・長石 にぶい橙色 普通	H15e7-11 20% P545
47	坏形土器 土師器	A 13.2 B 4.9 C (－)	丸底。体部は緩やかに内彎し，大きく外傾して立ち上がる。頸部で稜を有し，口縁部で直線的に内傾するが口唇部は直立する。	口縁部内面，体部内面共ナデ。口縁部外面横ヘラナデ調整。体部外面，底部外面共ヘラ磨き。	砂粒・雲母 灰褐色 普通	H15e7-11 60% P448
48	(瑳・壺) 頸部 須恵器	B (9.3)	瑳か壺の頸部と思われる。体部との接合部が一部認められ，体部接合部を被覆させている。	内面接合部ヘラ削り。中位粘土紐巻き上げ痕残存するが横ナデ。外面不定方向のナデ。	砂粒・長石・雲母 灰白色 良好	H15e7-8 10% P551
第77図 49	甕形土器 土師器	A (24.0) B 31.5 C 8.4	平底。胴部は最大径をもつ中位に向かって張り，胴長である。頸部はほぼ直立し，口縁部はやや外反し，口唇部は平坦である。	口縁部内外面横ナデ。胴部内外面共にヘラナデ。	砂粒・雲母・長石・スコリア・砂礫 にぶい橙色 普通	H15e7-8 65% P392
50	手捏土器 (鉢形土器) 土師器	A 13.0 B 9.1 C 6.9	平底木葉痕。胴部は極わずかに内彎し，外傾して立ち上がる。口縁部は外彎して直立する。	内面ナデ。口縁部外面横ナデ。胴部粘土紐巻き上げ痕残存，手捏ね的成形。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	H15e8-11 80% P378
51	手捏土器 (鉢形土器) 土師器	A 11.9 B 7.6 C 6.6	平底木葉痕。胴部は緩やかに内彎し，外傾して立ち上がる。口縁部は外彎して直立する。	口縁部内外面，胴部内面横ナデ。胴部外面粘土紐巻き上げ痕残存，手捏ね的成形。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	H15e8-12 70% P380
52	手捏土器 (鉢形土器) 土師器	A (11.6) B 9.7 C 8.0	平底木葉痕。胴下半部引き締まり，中央部から上半部にかけ内彎，外傾して立ち上がる。口縁部は極端に外彎して直立する。	口縁部内外面横ナデ。胴部外面大きな段差を有する粘土紐巻き上げ痕残存，手捏ね的成形。	砂粒・スコリア・雲母 にぶい褐色 普通	H15e9-9 90% P453
53	手捏土器 (椀形土器) 土師器	A 10.8 B 9.4 C 6.6	平底木葉痕。胴部緩やかに内彎して立ち上がり，口縁部で外反して口唇部が直立する。	口縁部内外面横ナデ調整。胴部内面ナデ調整。外面粘土紐巻き上げ痕残存，手捏ね的成形。	砂粒・雲母 橙色 普通	H15e9-5 98% P519

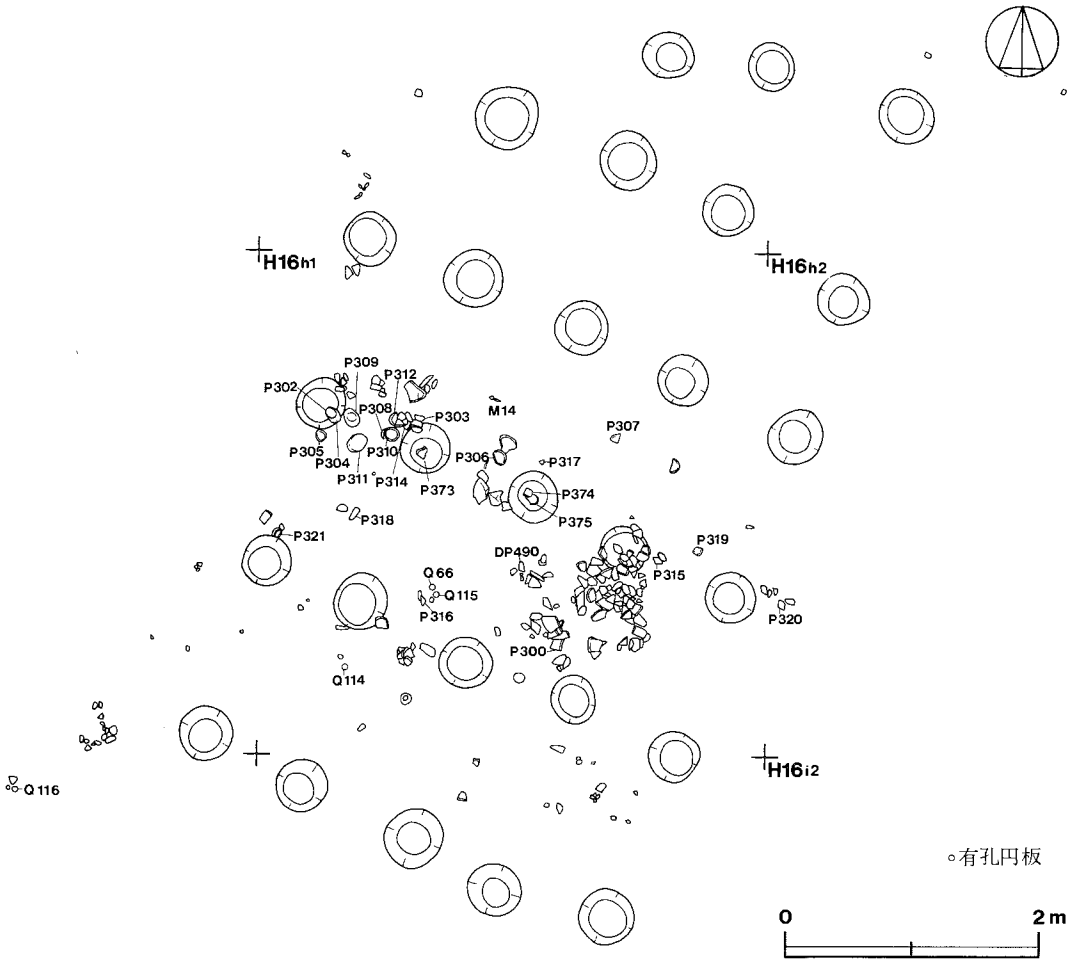
図版番号	器　種	法量(cm・g)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第77図 54	手捏土器 (椀形土器) 土師器	B (8.0) C 6.3	平底木葉痕。胴中央部が膨らむ立ち上がりを示し，口縁部は外彎する。	口縁部内外面，胴部内面共横ナデ。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	H15es-12 40% P555
55	小型 手捏土器 土師器	A 7.6 B 5.2 C 6.0	平底。胴部はわずかに彎曲して立ち上がり，胴上半部と口縁部は直立する。	口唇部指頭押圧。内外面指頭による手捏ね的成形。	砂粒・雲母 赤黒色 普通	H15eg-9 50% P523
56	坏形土器 土師器	A 13.5 B 5.3 C (−)	丸底。体部は内彎気味に大きく発達して延び，頸部で鋭い稜を有する。口縁部は一端外反し，口唇部で直線的にわずかに内傾する。	口縁部内外面，体部内面共横ナデ調整。体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き調整。	砂粒・スコリア 橙色 普通	H15es-9 80% P524
57	手捏土器 (椀形土器) 土師器	A 11.7 B 10.0 C 5.9	平底木葉痕。胴中央部から上半部にかけ大きく膨らみ，口縁部は内傾気味に外反する。口唇部内面は直立する。	口縁部内外面横ナデ調整。胴部内面ヘラ削り，頸部内面に鈍い稜有り。胴部外面に粘土紐巻き上げ痕有るが一部ナデ。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	H15es-12 98% P520
第78図 58	土製 垂れ飾り	径 7.5 厚さ 1.3 重量61.6	円形板を呈し，側縁部は滑らかで表裏の判別無し。1か所穿孔。	扁平円板。手捏ね成形。ナデ。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	H15es-12 100% DP448
59	土製 鏡形模造品	径 5.3 高さ 2.5 重量35.6	平面鏡面の反りが鈕釦部の捻り方向に上がる。片方からのみ穿孔。	円板成形後鈕釦部を装着。ナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	H15es-12 100% DP452
60	手捏土器 (小型広口壺形土器) 土師器	A 10.5 B 13.2 C 4.5	平底。胴部ゆがみ多く，隠やかに内彎して立ち上がり，膨らみを胴中央部，胴上半部に有する。口縁部は頸部に区画稜を有して外反して直立する。	口縁部内外面横ナデ調整。胴部円面不定方向のヘラナデ。胴部外面ヘラ削り，横ヘラ磨き。一部粗雑ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・スコリア・黒雲母 灰白色 普通	H15gg-1 90% P449
61	手捏土器 (椀形土器) 土師器	A (11.0) B 6.4 C 6.0	平底木葉痕。緩やかに内彎を示して立ち上がり，口縁部下位の稜で外反して直立する口縁部と区切られる。	口縁部内外面，胴部内面共にナデ調整。胴部外面粘土紐巻き上げ痕残存，ナデ。	砂粒・スコリア・長石 にぶい橙色 普通	H15gg-1 60% P471
62	手捏土器 (鉢形土器) 土師器	A (13.2) B 9.3 C 6.5	平底木葉痕。胴部下位で膨らみ上位で一端径を絞った後，口縁部まで直線的にわずかに外傾して大きく延びる。	口縁部内外面粗雑な横ナデ調整。胴部内面一部横ナデ。胴部外面粘土紐巻き上げ痕残存，ナデ。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	H15gg-1 60% P472
63	手捏土器 (椀形土器) 土師器	A 10.7 B 5.3 C 5.8	平底木葉痕。底部から口縁部まで緩やかに内彎し，外傾して立ち上がる。口縁部は直立する。	口縁内面，胴部内面共横ナデ調整。口縁部外面粘土紐巻き上げ痕残存。	砂粒・雲母 にぶい橙色 良好	H15gg-1 60% P609
64	手捏土器 (甕形土器) 土師器	A (15.0) B 11.2 C (8.4)	胴部は底部から大きく外傾して立ち上がり，胴中央部に最大径を示す。口縁部は内傾気味となるが外彎するので口唇部は外傾する。	口縁部内外面ナデ調整。口縁部外面粘土紐巻き上げ痕残存。胴内面ナデ，下半部強いヘラ削り。胴部外面ヘラ削り。	砂粒・スコリア・石英 橙色 普通	H15hg-5 30% P610
65	手捏土器 (鉢形土器) 土師器	A (10.8) B 6.4 C (6.3)	平底木葉痕。底部より口縁部下端まで緩やかに内彎気味に立ち上がり，口縁部は極端に内傾。	口縁部内外面，胴部内面横ナデ調整。胴部外面粘土紐巻き上げ痕残存，横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	H15gg-5 30% P611

図版番号	器種	法量(cm・g)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第78図 66	手捏土器 (坏形土器) 土師器	A (9.8) B 4.1 C (8.0)	底部木葉痕。底部から直立し，隠やかに内彎，外傾して立ち上がり，口縁部に膨らみを有する。	口唇部指頭押圧成形。体部内面不定方向のナデ。体部外面粘土紐巻き上げ痕残存，ヘラ先カキ目有り。	砂粒・雲母 黒褐色 普通	H15g9-1 40% P613
67	小型 手捏土器 土師器	A 5.5 B 3.8 C 4.0	平底。底部より直線的にわずかに外傾して立ち上がる。	内外面共不細工な手捏ね成形。口縁部は内面より鈍角にせり上がる。底部に棒状工具の刺突文。	砂粒 にぶい橙色 普通	H15g9-1 95% P466
68	土製 鏡形模造品	径 5.7 高さ 3.3 重量52.5	厚手の扁平円板に鈕釦部を装着し，上位に大きく1か所穿孔。	手捏ね，ナデ。鈕釦部は粗雑に捻り上げている。	砂粒・雲母 褐灰色 普通	H15g9-1 100% DP459
69	土製 鏡形模造品	径 5.1 高さ(2.1) 重量(32.5)	厚手円形の背面にわずかな高さの長い鈕釦部を装着。穿孔は粗雑で途中まで。	鈕釦部装着は形だけ。手捏ね，ナデ。	砂粒 橙色 普通	H15g9-1 98% DP461
第79図 70	土製 鏡形模造品	径 5.7 高さ 3.2 重量62.0	厚手大型円形。鏡面，背面共膨らみ，鈕釦部は薄く細長いが装着部はしっかりしている。	厚手で量感有り。孔も鈕釦部中央に穿孔。	砂粒 にぶい橙色 普通	H15g9-1 100% DP458
71	土製 鏡形模造品	径 5.3 高さ 3.2 重量53.6	厚手円形。側縁に亀裂走る。鈕釦部は中央よりずれる。	円板成形が粗雑。鈕釦部装着に背面の捻り上げ目立つ。	砂粒 にぶい橙色 普通	H15g9-1 100% DP460
72	土製 鏡形模造品	径 4.8 高さ 1.5 重量21.0	薄手不整円形。鈕釦部は背面の捻り上げによる。背面近くに穿孔している。背面の方向に反る。	鈕釦部が背面からの捻り上げのためへこむ。	砂粒 にぶい橙色 普通	H15g9-1 90% DP508
73	壺形土器 土師器	B (10.7) C 4.2	丸底。胴下半部はわずかな稜を有し，緩やかに内彎し，外傾して立ち上がる。胴上半部は最大径を有し，1条の凹線が廻り，頸部まで内傾する。	胴中央部及び下半部外面，底部共ヘラ削り。胴上半部外面ナデ。胴部内面ナデ。胴上半部から頸部までに数条のカキ目。頸部との接合部に調整痕残存。	砂粒 黒褐色 普通	H15g9-1 70% P393
74	手捏土器 (鉢形土器) 土師器	B (6.8) C 5.9	胴部は緩やかに内彎してわずかに外傾して立ち上がる。口縁部欠損。	胴部内面ナデ調整。胴部外面粘土紐巻き上げ痕残存，ナデ。底部ヘラ削り，ヘラ先によるカキ目。	砂粒・スコリア にぶい橙色 良好	H15g8-8 40% P596
75	手捏土器 (椀形土器) 土師器	B (5.6) C (6.2)	平底。胴下半部は外傾して立ち上がり，胴中央部近くで内彎する。	底部ヘラ削り。胴部内面ヘラナデ調整。外面粘土紐巻き上げ痕残存。	砂粒・スコリア 明褐色 普通	H15g8-4 40% P598
76	手捏土器 (鉢形土器) 土師器	A (10.2) B 5.4 C (6.6)	平底。胴部はわずかに内彎し，外傾して立ち上がる。口縁部は内傾し，下位に最大径を示す。	口縁部，胴部内面共横ナデ調整。外面粘土紐巻き上げ痕残存。口唇部尖る。	砂粒 橙色 良好	H15g8-4 30% P599
77	手捏土器 (甕形土器) 土師器	A (11.8) B 9.4 C (7.3)	胴中央部で膨らみ，口縁部下位では直立気味である。	口縁部内外面横ナデ調整。胴部内面ナデ調整。胴部外面不定方向のナデ。	砂粒・雲母 浅黄橙色 普通	H15g8-4 30% P602
78	坏形土器 土師器	A (12.2) B 3.4 C (5.2)	丸底。体部は内彎して立ち上がる。口縁部下位の稜を区切りに口縁部は外彎して直立する。	口縁部横ナデ。体部内面横ナデ調整。体部外面，底部共にヘラ削り。	砂粒・スコリア 明赤褐色 普通	H15g9-6 20% P607
79	刀子 鉄	長さ(6.2) 幅 1.4 厚さ 0.2	茎部の残存部。茎部に木質付着。			H15g8-8 40% M37

図版番号	器種	法量(cm・g)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第79図 80	手捏土器 (坏形土器) 土師器	A (9.0) B 4.6 C 7.2	平底木葉痕。体部は底部から直立して立ち上がり，外傾して口縁部に至る。口縁部は内彎する。	口唇部粗雑成形。体部内面ナデ調整，外面粘土紐巻き上げ痕残存し，粗雑なナデ。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	H15gs-3 50% P593
第80図 86	手捏土器 (鉢形土器) 土師器	A 9.0 B 7.1 C 5.3	平底木葉痕。胴部は上半部に最大径を有して立ち上がり，わずかに内彎気味の口縁部に続く。	内外面粘土紐巻き上げ痕残存。内面手荒いナデ。外面粗雑なナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	H15fg-9 98% P459
87	手捏土器 (小型 甕形土器) 土師器	A 12.1 B 8.8 C 6.2	平底木葉痕。胴部は内彎しながら外傾して立ち上がり，口縁部下位の稜線部に最大径を示す。口縁部は極端に外反する。	口縁部内外面，胴部内面共に横ナデ調整。胴部外面粘土紐巻き上げ痕残存，横ナデ。	砂粒・スコリア・雲母 にぶい橙色 普通	H15fg-9 95% P452
88	小型 手捏土器 土師器	A 6.5 B 4.3 C 5.0	平底。径9mm程の粘土瘤焼成痕が底部に2か所付着。口唇部は厚い。	外面粗雑な手捏ね，捻り上げ成形。口唇部，胴部内面共にナデ。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	H15fg-9 100% P455
89	手捏土器 (鉢形土器) 土師器	A 9.9 B 7.1 C 4.9	平底木葉痕。直線的に外傾した胴下半部は，口縁部下位に最大の膨らみを有して立ち上がる。口縁部は内傾して内彎する。	口縁部内外面，胴部内面共に横ナデ調整。胴部外面粘土紐巻き上げ痕。	砂粒・スコリア・礫 にぶい橙色 普通	H15fg-9 90% P465
90	手捏土器 (鉢形土器) 土師器	B (8.0) C 6.7	底部は上げ底気味で，胴部は内彎気味に立ち上がる。	胴部外面ヘラナデ。胴部内面ナデ。底部周辺に粘土紐巻き上げ痕残存。	砂粒・スコリア・黒雲母 にぶい橙色 普通	H15fg-9 20% P470
91	手捏土器 (鉢形土器) 土師器	A (11.8) B 7.8 C 6.1	胴部は外彎気味に立ち上がり，口縁部は外反し，口唇部は丸く修めている。平底木葉痕。	胴部内・外面ナデ調整。胴部外面に粘土紐巻き上げ痕残存。	砂粒・スコリア・黒雲母・長石 にぶい橙色 普通	H15fg-9 45% P473
92	手捏土器 (鉢形土器) 土師器	A 9.2 B 6.3 C 5.4	平底木葉痕。胴部は内彎気味に立ち上がり，口唇部は内傾する。	胴部内・外面ナデ調整。胴部外面に粘土紐巻き上げ痕残存。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	H15fg-14 98% P570
93	勾玉 滑石	全長 3.4 厚さ 1.1 重量 9.2	「C」字形に彎曲する。頭部に径1.5～2mmの孔を両面から穿つ。孔の使用痕跡は認められない。	くびれ部に研磨の粗雑さが若干認められる以外，非常に美麗。		H15fg-5 100% Q19
94	土製 鏡形模造品	径 7.6 高さ 2.3 重量70.1	粘土円板に鈕釦部が捻り上げられている。鏡面は皿状に彎曲する。	厚手の粘土を手捏ね，鈕釦部を捻り上げている。鈕釦部孔は，双方から穿孔。	砂粒・雲母 にぶい黄橙色 普通	H15fg-9 100% DP456
95	土製 鏡形模造品	径 4.9 高さ 1.6 重量(17.8)	楕円形を呈し，鈕釦部は背面を2本の指頭で両側よりつまみ上げている。鏡面は皿状に彎曲する。	厚手の粘土を手捏ね。鈕釦部孔は，双方から穿孔。	砂粒・雲母・石英 にぶい橙色 良好	H15fg-9 90% DP503
96	土製 鏡形模造品	径 6.2 高さ 2.6 重量42.1	楕円形を呈し，鈕釦部は背面を2本の指頭で両側よりつまみ上げている。鏡面は皿状に彎曲する。	厚手の粘土を手捏ね。鈕釦部孔は片側から穿孔。	砂粒・雲母 橙色 普通	H15fg-9 100% DP504
第81図 97	土製 鏡形模造品	径 5.9 高さ(2.8) 重量(66.7)	粘土円板に鈕釦部が捻り上げられたが，鈕釦部は欠損。鏡面は皿状に彎曲する。	厚手の粘土を手捏ね。鈕釦部孔が残存し，孔は片側から穿孔。	砂粒・石英 にぶい橙色 普通	H15fg-10 80% DP505

図版番号	器種	法量(cm・g)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第81図 98	手捏土器 (鉢形土器) 土師器	A (7.7) B 4.8 C 5.8	平底。全体に指頭による引き締め強い。口縁部は内彎気味に立ち上がる。	胴部内，外面ナデ調整。	砂粒 橙色 普通	H15f9-7 90% P567
99	小型 甕形土器 土師器	A (13.6) B 9.7 C 6.7	底部は上げ底。胴部は内彎気味に立ち上がる。頸部に一条の稜を有し，口縁部は頸部から外反気味に立ち上がる。	口縁部内，外面ナデ。胴部内面ヘラナデ，外面ヘラ切り後ヘラナデによる調整。	砂粒・スコリア・雲母 橙色 普通	H15f9-11 60% P569
103	瓶 須恵器	B (7.0) C (−)	口縁部欠損。体部はやや肩の張る扁球形を呈す。注口部は突出しており，体部中位に2条の沈線が入れられ，刺突文が施されている。	体部外面ナデ調整。	砂粒・雲母 灰色 良好	H15f8-15 40% P565
104	高坏 須恵器	A (14.2) B (12.9)	脚部は外反して立ち上がる。坏部は内彎気味に立ち上がり口縁部は外反する。扁球形の坏部の口縁部内に外反する立ち上がり部がつく。	脚部，坏部体部内，外面は水挽き成形。	砂粒・細砂 灰色 良好	H15f8-15 50% P566
105	手捏土器 (甕形土器) 土師器	A (13.2) B (6.4)	底部欠損。胴部は内彎気味に立ち上がる。頸部から口縁部にかけて外反気味に立ち上がり，口唇端部を丸めている。	胴部に粘土紐巻き上げ痕残存。胴部外面ヘラ切り後ヘラナデ調整。頸部から口縁部ナデ。	砂粒 にぶい黄褐色 普通	H15f8-15 40% P564
106	提瓶 須恵器	B (20.2)	体部は扁平な球形を呈し，単純に外反する。体部に2個の把手が対に付く。	ロクロナデ，体部外面回転ヘラ削り。	砂粒・小礫・長石・雲母 灰色 普通	H15f8-14 50% P479
107	土製 臼形模造品	B (6.0) D 5.6	台部は外反気味に立ち上がり，臼口部は内彎気味に立ち上がる。	台部，臼口部外面は指頭による調整。内面，臼口縁部ナデ。	砂粒・スコリア・雲母 にぶい褐色 普通	H15g8-2 50% DP510
108	土製 臼形模造品	A (7.6) B 5.8 D 5.6	台部は外反気味に立ち上がり，臼口部は内彎気味に立ち上がり，丸味を有する。内，外面にスス付着。	台部，臼口部外面は指頭による調整。内面ナデ。	砂粒 黒褐色 普通	H15g8-2 60% DP511
第82図 109	高坏形土器 土師器	B (6.6) D 11.8	坏部欠損。裾部端部に平坦部をもうけ，脚部は内彎気味に立ち上がる。	裾部ナデ。脚部は縦方向へのヘラナデ調整。	砂粒・石英・雲母 橙色 普通	H15f8-14 50% P429
110	高坏形土器 土師器	B (4.7)	坏部欠損。裾部端部に平坦部をもうけ，脚部は外反気味に立ち上がる。	裾部ナデ。脚部は斜，縦方向へのヘラナデ調整。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	H15g8-2 20% P586
111	有孔円板 滑石	径 2.5 厚さ 0.5 重量 5.9	表裏，側面共に磨きが施され，自然面を残していない。孔の径は，2mm程である。孔の擦痕は確認できない。			H15g8-12 100% Q313
112	小型 手捏土器 土師器	A 6.6 B 2.5 C 6.0	平底木葉痕。胴部は若干内彎気味に立ち上がる。	胴部内外面ナデ調整。	砂粒・雲母 にぶい黄橙色 良好	H15g8-1 80% P590

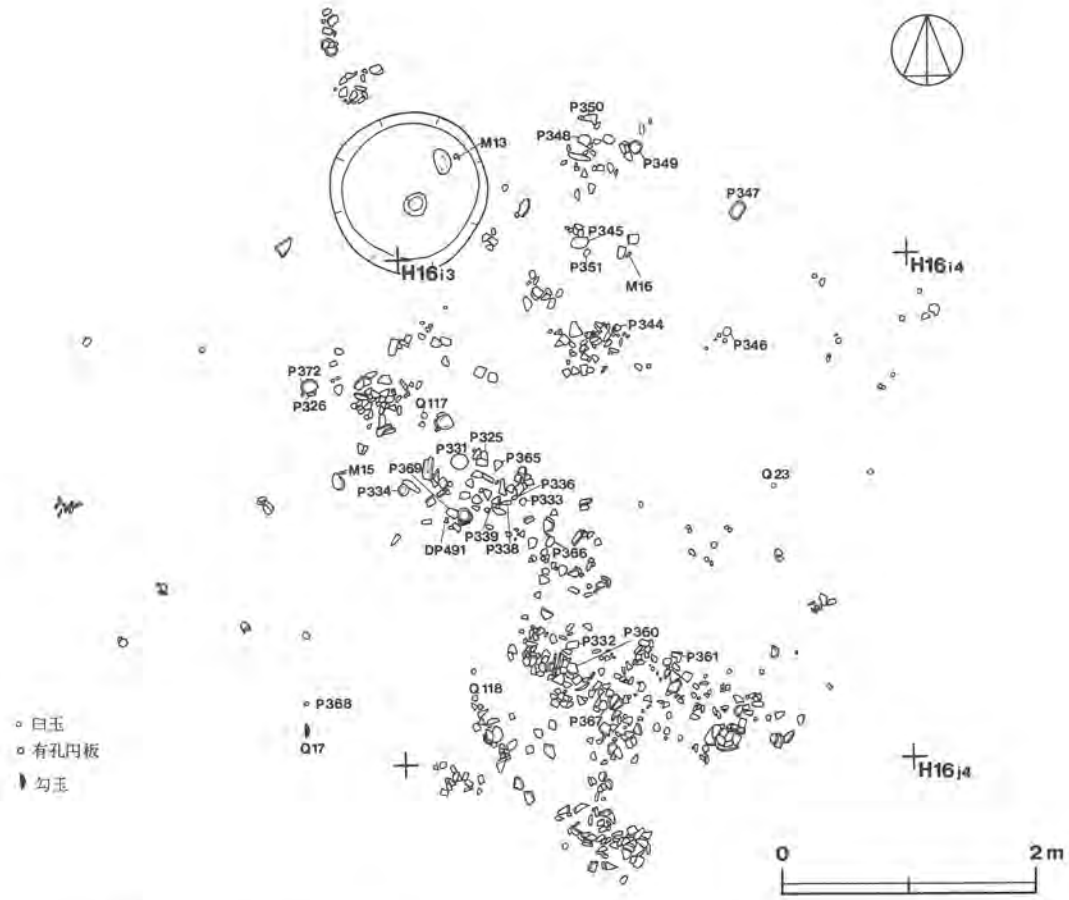
図版番号	器種	法量(cm・g)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第82図 119	小型 手捏土器 土師器	A 7.3 B 3.5 C 4.8	平底木葉痕。胴部は若干外反気味に立ち上がり，口唇端部は丸味をもつ。	胴部内外面ナデ調整。	砂粒・雲母 橙色 普通	H15g8-6 98% P588
120	小型 手捏土器 土師器	A 6.3 B 3.0 C 5.0	平底木葉痕。胴部は若干外反気味に立ち上がる。	胴部内外面ナデ調整。	砂粒・雲母 橙色 普通	H15g8-6 95% P589
121	小型 手捏土器 土師器	A (6.6) B 2.9 C 4.8	平底。胴部は内彎気味に立ち上がり，口唇部は丸味を有する。	胴部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ調整。	砂粒・スコリア・雲母 黒褐色 普通	H15g8-7 50% P591
122	手捏土器 (鉢形土器) 土師器	A (9.6) B 4.9 C 5.8	平底木葉痕。胴部は若干内彎気味に立ち上がり，口縁部は外反する。	胴部外面ナデ，内面ヘラナデ調整。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	H15g8-3 90% P592
123	小型 手捏土器 土師器	A (10.8) B 5.5 C 6.0	平底木葉痕。胴部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は垂直気味に立つ。	胴部外面ナデ，内面ヘラ削り，ナデ調整。	砂粒 にぶい橙色 良好	H15g8-3 50% P594
124	小型 手捏土器 土師器	A (10.4) B 6.2 C 6.2	平底木葉痕。胴部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は外反して立ち上がる。	胴部外面，口縁部ナデ。胴部内面ヘラ削り後ナデ調整。	砂粒 橙色 良好	H15g8-8 20% P595
第83図 125	手捏土器 土師器	B (3.8) C 6.6	平底。胴部はわずかに内彎しながら立ち上がる。口縁部欠損。	胴部内面ナデ，外面ヘラ削り。底部ヘラ削り，ヘラ先によるカキ目有り。	砂粒・スコリア 橙色 普通	H15g8-6 30% P597
126	手捏土器 (坏形土器) 土師器	A (11.3) B 4.2 C 7.3	平底木葉痕。体部は底部よりわずかに内彎しながら立ち上がる。	外面粘土紐巻き上げ痕多く残存。口縁部，体部共横ナデ調整。口唇部尖る。	砂粒 にぶい橙色 良好	H15g8-3 50% P600
127	坏形土器 土師器	A 11.7 B 4.1 C 6.3	体部はわずかに内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部が短かく直立する。	口縁部内，外面，体部内面共横ナデ調整。体部外面細い段差の粘土紐巻き上げ痕残存，ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・スコリア 橙色 普通	H15g8-6 50% P585
128	土製 鏡形模造品	径 5.3 高さ 2.4 重量37.7	粘土の扁平円板に鈕釦部が捻り上げられている。鏡面は皿状に彎曲する。	厚手の粘土を手捏ね，鈕釦部を捻り上げている。鈕釦部孔は，双方から穿孔。		H15g8-3 100% DP457
129	瓶 須恵器	B (12.2) C (−)	体部は小型球形であるが，体部上位は若干外彎的に内傾する。	体部下位外面叩き。体部上位自然釉を施す。体部内面ヘラ押し。体部上位に3条と4条の櫛目の間に波状櫛目を廻らしている。小さい穿孔を有す。	砂粒 灰色 良好	H15g9-7 50% P478
第85図 156	器台形土器 土師器	A 7.6 B (4.4)	裾部の端部欠損。裾部上位に3か所の孔が認められる。器受部中央に孔を有する。	裾部外面はハケナデ。器受部内外面ナデ調整。	砂粒・長石 にぶい赤褐色 普通	H15g7-1 40% P581



第87図　祭祀跡遺物配置図（2）

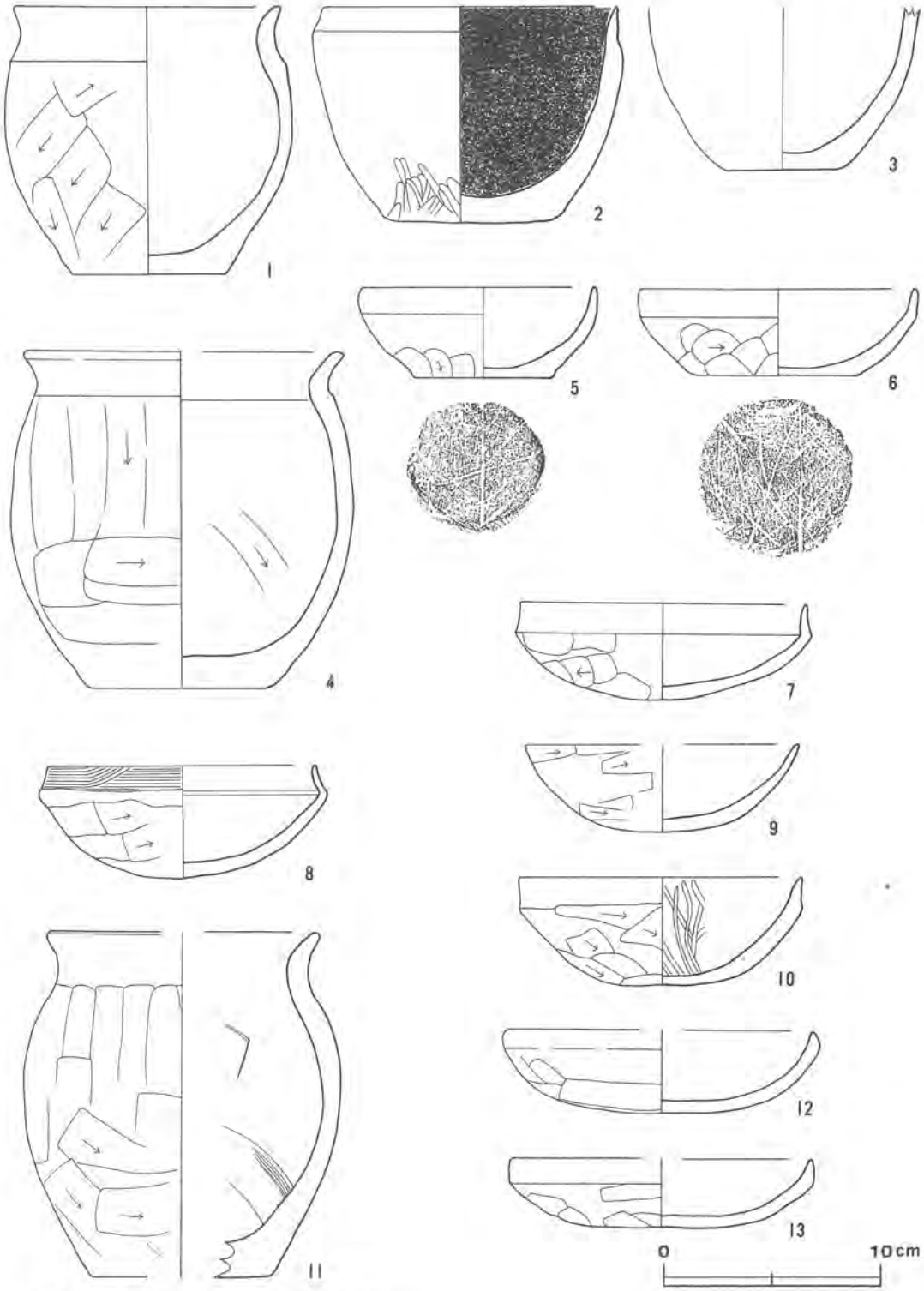
祭祀跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第89図 1	手捏土器 (甕形土器) 土師器	A (12.3) B 12.4 C 7.0	平底。胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。口縁部は外反気味に直立する。	口縁部内外面横ナデ調整。胴部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ。	砂粒・スコリア・雲母 赤褐色 普通	H16h1　50% P303
2	手捏土器 (鉢形土器) 土師器	A 13.5 B 10.0 C 7.4	平底。胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。口縁部は外反気味に直立する。	口縁部内外面横ナデ調整。胴部上位外面ヘラ削り後ナデ調整。胴下半部外面と底部はヘラナデ後ヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・長石 灰白色 不良	H16h1　80% P305

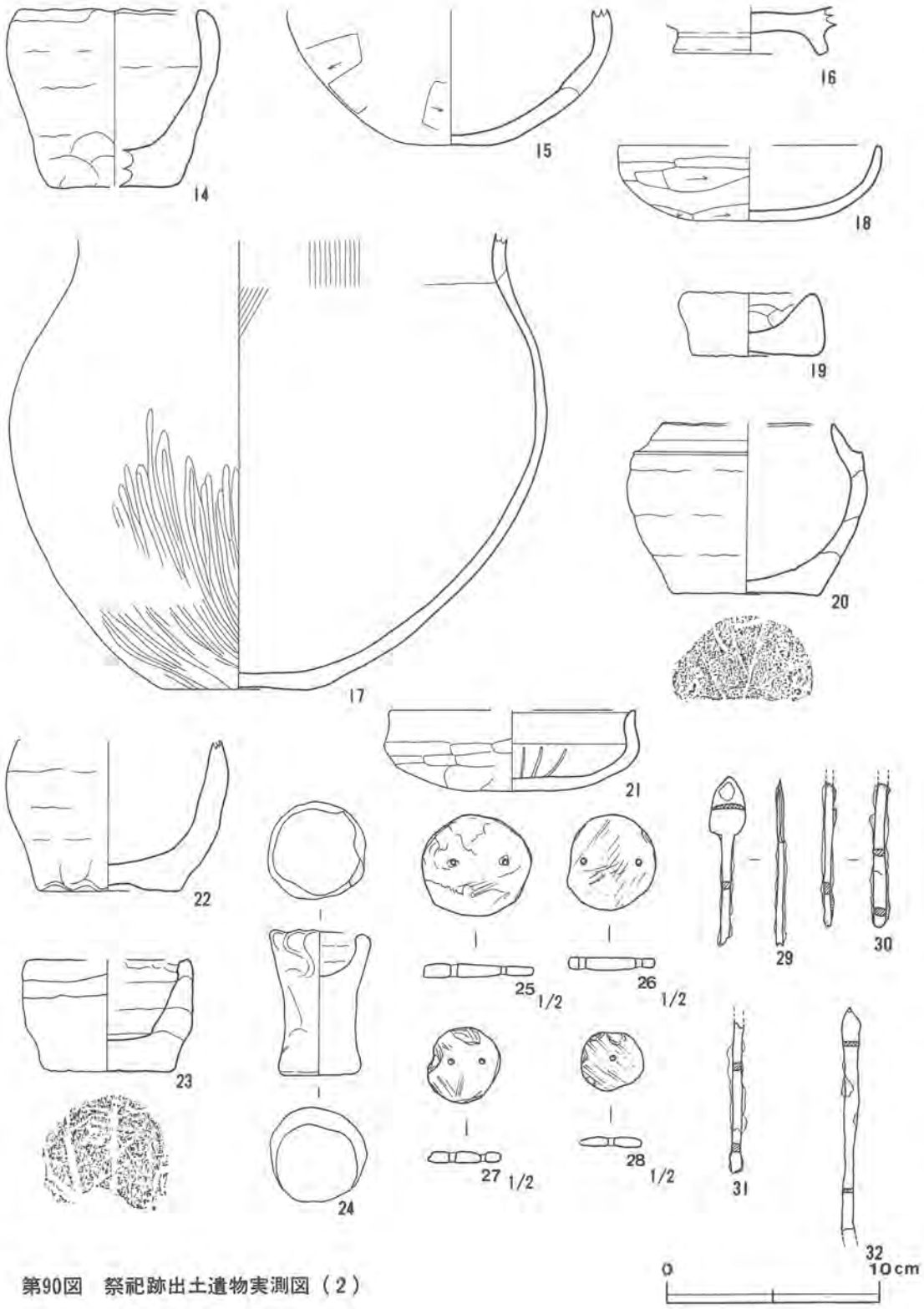


第88図　祭祀跡遺物配置図（3）

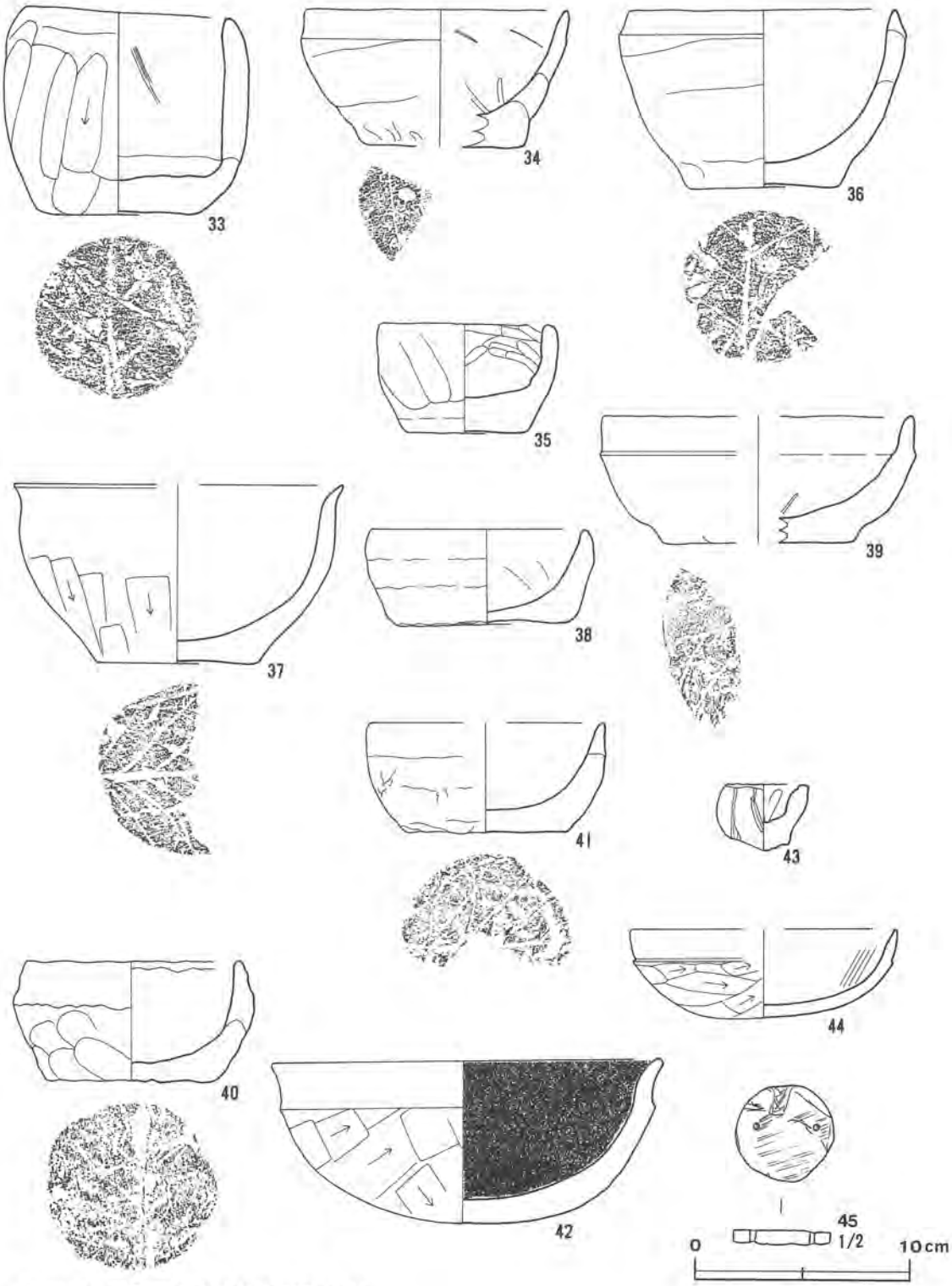
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第89図 3	甕形土器 土師器	B（5.5） C 5.4	平底。胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	胴部と底部外面ヘラ削り後ナデ調整。内面ヘラナデ。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	H16h1 20% P304
4	甕形土器 土師器	A（14.5） B 15.7 C 7.9	平底。胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，中位から内傾する。口縁部は短く外反して開く。外面の頸部と胴部の境に稜を有する。	口縁部内外面横ナデ調整。胴上半，下半部外面縦ヘラ削り，下位横ヘラ削り。内面ヘラナデ。	砂粒・スコリア 赤褐色 普通	H16h1 60% P302
5	坏形土器 土師器	A 10.8 B 4.2 C 6.3	平底木葉痕。体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，口縁部は短く直立する。	口縁部内外面横ナデ調整。体部外面ヘラ削り後ナデ調整。内面ヘラナデ。	砂粒・スコリア・雲母 灰白色 普通	H16h1 100% P308



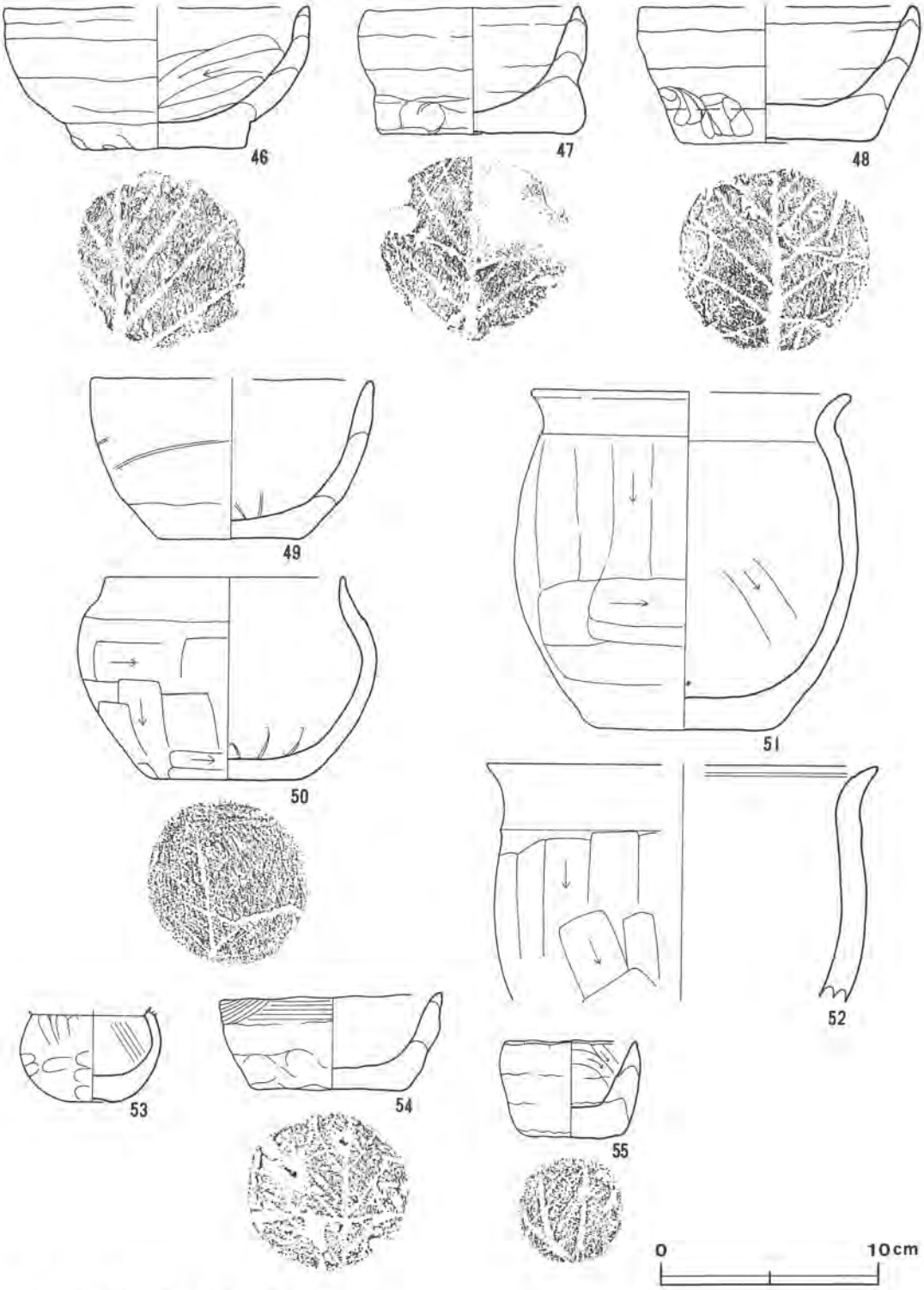
第89図　祭祀跡出土遺物実測図（1）



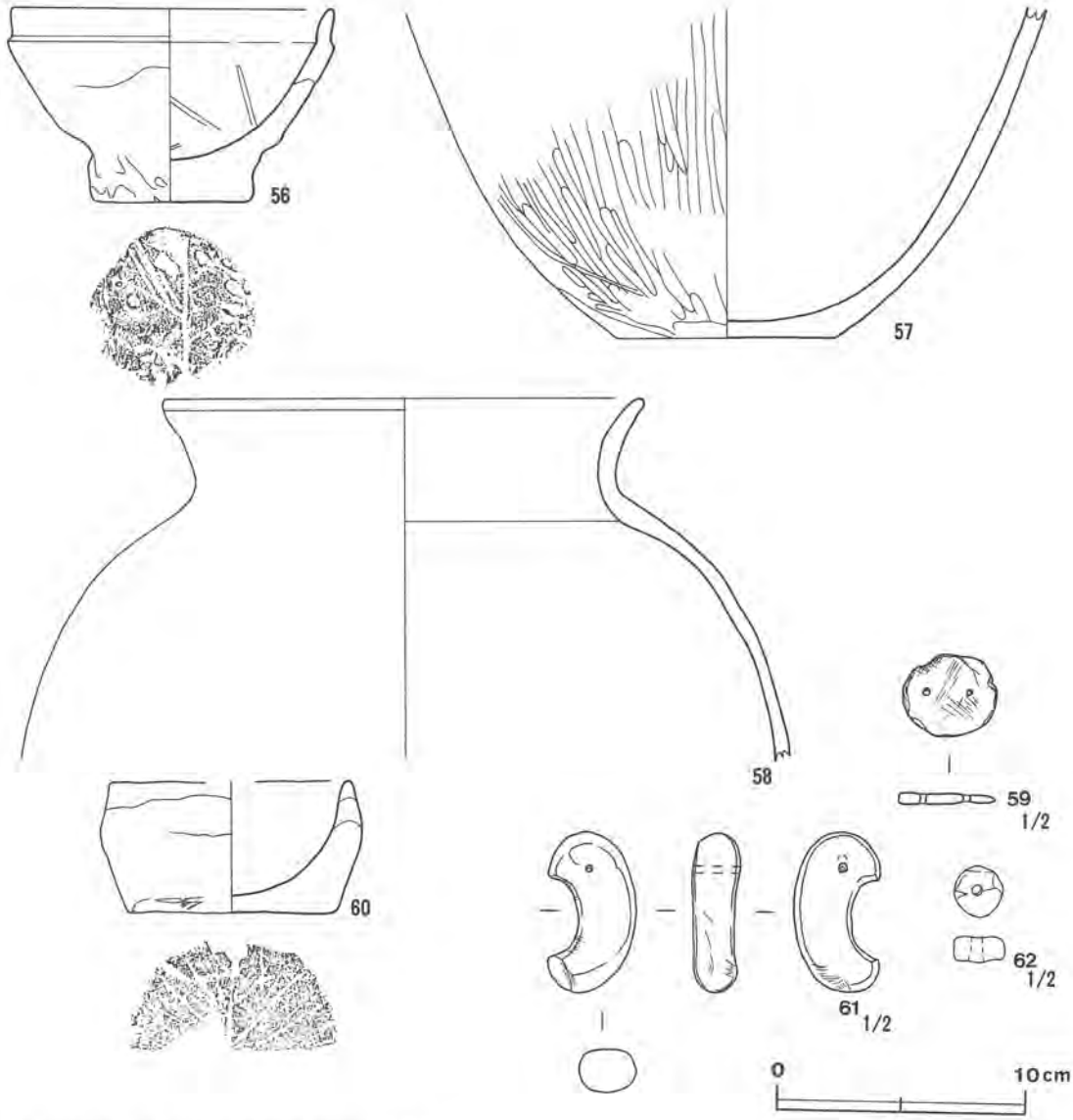
第90図　祭祀跡出土遺物実測図（2）



第91図　祭祀跡出土遺物実測図（３）



第92図　祭祀跡出土遺物実測図（4）



第93図　祭祀跡出土遺物実測図（5）

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第89図 6	坏形土器 土師器	A 12.8 B 4.0 C 7.6	平底木葉痕。体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，口縁部は短く直立する。	口縁部内外面横ナデ調整。体部外面ヘラ削り後ナデ調整。	砂粒・スコリア・雲母 橙色 良好	H16hi 100% P309
7	坏形土器 土師器	A 13.2 B 4.4 C（－）	丸底。体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部はほぼ直立する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内外面横ナデ調整。体部外面ヘラ削り，内面ヘラ磨き。	砂粒・スコリア・礫 にぶい黄橙色 普通	H16hi 95% P310

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第89図 8	坏形土器 土師器	A 12.3 B 5.3 C (－)	丸底。体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は内傾する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内外面横ナデ調整。体部外面ヘラ削り，内面ナデ。	砂粒・雲母 黒褐色 普通	H16h1 80% P311
9	坏形土器 土師器	A (12.6) B 4.1 C (－)	丸底。体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，そのまま口縁部に至る。	口縁部と体部外面ヘラ削り，内面ヘラ磨き。	砂粒・スコリア・雲母 にぶい橙色 良好	H16h1 20% P314
10	坏形土器 土師器	A 12.0 B 5.0 C (－)	丸底。体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は直立する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内外面横ナデ調整。体部外面ヘラ削り，内面ヘラ磨き。	砂粒・スコリア にぶい褐色 普通	H16h1 90% P312
11	甕形土器 土師器	A (12.6) B 15.9 C (8.2)	平底。胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，胴中央部から内傾する。口縁部は短く外反して開く。外面の頸部と胴部の境に稜を有する。	口縁部内外面横ナデ調整。胴上半，中央部外面縦ヘラ削り，胴下半部横ヘラ削り。内面ヘラナデ。	砂粒・スコリア 橙色 普通	H16h1-5 20% P373
12	坏形土器 土師器	A (14.0) B 3.8 C (－)	丸底。体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は短く直立する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内外面横ナデ調整。体部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ。	砂粒・スコリア・長石 浅黄橙色 普通	H16h1-7 30% P374
13	坏形土器 土師器	A (13.8) B 3.2 C (7.0)	丸底。体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は短く直立する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内外面横ナデ調整。体部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ。	砂粒・スコリア 暗赤褐色 普通	H16h1-7 30% P375
第90図 14	手捏土器 (鉢形土器) 土師器	A (8.6) B 8.4 C (5.9)	平底。底部から胴部にかけてほぼ直線的に立ち上がり，口縁部で内傾する。内面の口縁部と胴部の境に凹線を有する。	口縁部，胴部外面ナデ。口縁部内面横ナデ。胴部内面ナデ。底部にヘラによる刻み目をもつ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	H16h1 50% P317
15	坏形土器 土師器	B (6.5) C (－)	丸底。体部は内彎し，外傾して口縁部に至る。口縁部を欠損している。	外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	H16h1 40% P306
16	高台付 坏形土器 土師器	B (2.2) D 7.0 E 1.1	高台は，外傾し「ハ」の字状に開く。	高台接合部外面は回転ヘラナデ，内面は横ナデにより丸味を有す。内面ヘラ磨き，内黒処理。	砂粒・ にぶい橙色 普通	H16h1 10% P307
17	甕形土器 土師器	B (30.3) C 9.9	平底。底部から頸部にかけて球形状を呈する。頸部やや外反するが頸部欠損。	頸部横ナデ。胴部下半から底部にかけては密にヘラ磨きを施す。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	H16h1 40% P300
18	坏形土器 土師器	A (12.4) B 3.6 C (5.4)	丸底。体部は内彎し，外傾して立ち上がり口縁部に至る。口縁部は直立して立ち上がり，胴部との境に緩やかな稜を有する。	底部手持ちヘラ削り，外は横ナデ。	砂粒・スコリア にぶい橙色 良好	H16h1 40% P315
19	小型 手捏土器 土師器	A 6.2 B 3.0 C 5.9	平底。胴部から口縁部にかけては直立して立ち上がる。断面は皿状を呈する。	手捻りによる成形，内面に指圧痕を残す。	砂粒・スコリア・長石・黒雲母 灰黄褐色 普通	H16h1 80% P320

図版番号	器種	法量(cm・g)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第90図 20	手捏土器 (椀形土器) 土師器	A (8.2) B 8.1 C (7.0)	平底木葉痕。胴部の立ち上がりは締まり，内彎して外傾する。口縁部と胴部間に鋭い稜を有する。口縁部は強く内傾する。	口縁部は丁寧な横ナデ調整。胴部から底部にかけては，粘土紐巻き上げ痕を残す粗雑な成形。内面横ナデ。	砂粒・雲母 灰黄褐色 普通	H16h1 40% P319
21	坏形土器 土師器	A (11.6) B 3.9 C 5.3	平底。体部は丸味を持って立ち上がる。口縁部はわずかに内傾し，口唇部において外反する。口縁部と体部の境には緩い稜を有する。	口縁部横ナデ。底部手持ちヘラ削り。内面にヘラ磨きによる放射状の暗文が認められる。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	H16h1 20% P316
22	手捏土器 (鉢形土器) 土師器	B (7.2) C 6.9	平底。胴下半部は引き締まり，中央部から口縁部にかけて内彎して立ち上がる。	器内外面剝落し整形法不明。一部に粘土紐巻き上げ痕残存。	砂粒・黒雲母・礫 淡赤橙色 普通	H16h1 75% P318
23	手捏土器 (鉢形土器) 土師器	A (7.5) B 5.4 C 5.6	平底木葉痕。胴部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は直立し，口唇部を平坦にしている。	胴部内面に粘土紐巻き上げ痕胴部内，外面ナデ調整。	砂粒 にぶい橙色 普通	H16h1 30% P321
24	土製 臼形模造品	A 4.8 B 7.0 D (3.6)	平底。台部は外反気味に立ち上がり，臼口部は若干内彎する。	臼口部内外面は指頭による押圧ナデ調整。	砂粒・石英 橙色 普通	H16h1 60% DP490
25	双孔円板 滑石	径 3.4 厚さ 0.5 重量 7.9	表裏，側面共に磨きが施されている。楕円形を呈し，側面は多角面を有して研磨されている。			H16h1 100% Q114
26	双孔円板 滑石	径 3.0 厚さ 0.4 重量 5.3	表裏，側面共に磨きが施されているが，側面にはカット面が残存している。孔の径は2mm程である。表裏面に擦痕が認められる。			H16h1 95% Q115
27	双孔円板 滑石	径 2.4 厚さ 0.4 重量 3.0	表裏，側面共に磨きが施されているが，側面にはカット面が残存している。孔の径は2mm程である。表裏面に擦痕が認められる。			H16h1 95% Q116
28	単孔円板 滑石	径 2.0 厚さ 0.3 重量 1.9	表裏，側面共に磨きが施されているが，側面にはカット面が残存している。孔の径は，2mm程である。孔の片側に擦痕が認められる。			H16h1 95% Q66
29	鉄鏃 鉄	長さ(8.0) 幅 1.6 厚さ 0.4	無茎鏃の一種で，矢柄部分を残している。			H16h1 90% M14
30	鉄鏃 (茎) 鉄	長さ 6.8 幅 0.5 厚さ 0.3	断面長方形を呈する茎部分である。			H16i3 30% M15
31	鉄鏃 (茎) 鉄	長さ 7.2) 幅 0.5 厚さ 0.3	断面方形を呈する茎部分である。			H16h3 30% M16
32	鉄鏃 鉄	長さ10.6) 幅 0.8 厚さ 0.2	基部の断面形は長方形。先端部は若干尖っている。茎の断面は方形を呈す。			H16h3 70% M13

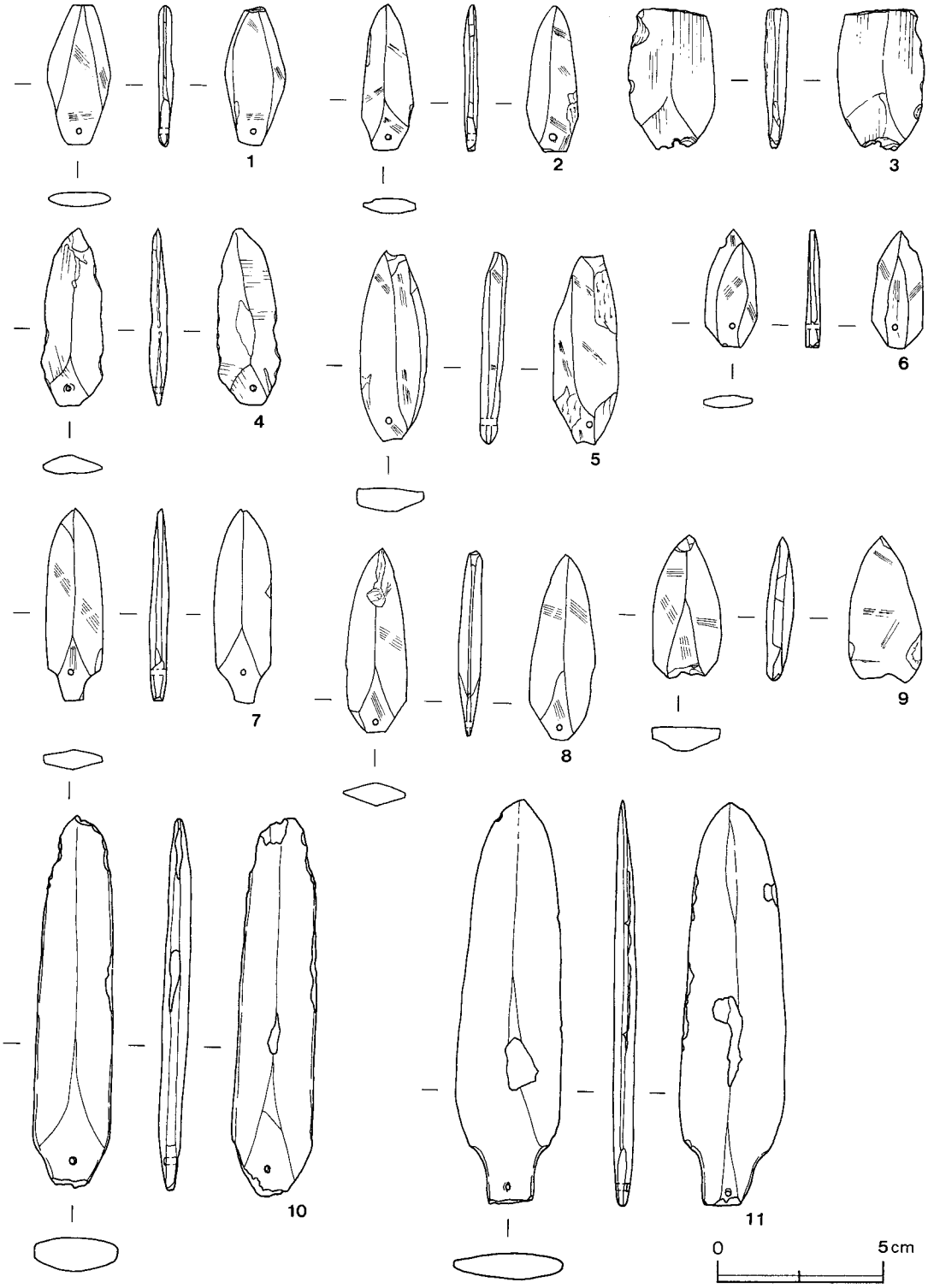
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第91図 33	手捏土器 (壺形土器) 土師器	A 9.4 B 9.8 C 6.8	平底木葉痕。胴部は内彎気味に立ち上がり口縁部へと続く。器肉は厚い。	胴部外面ヘラ削り後ヘラナデ。口縁部，胴部内面ナデ調整。	砂粒・スコリア・礫・雲母 橙色 普通	H16i3 85% P331
34	手捏土器 (鉢形土器) 土師器	A 12.2 B 6.5 C 7.5	平底木葉痕。胴部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は外反する。底部は若干上げ底。	胴部外面ヘラナデ。口縁部ナデ調整。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	H16i3 85% P333
35	手捏土器 (鉢形土器) 土師器	A 7.9 B 5.2 C 5.5	平底木葉痕。胴部は内彎気味に立ち上がる。口唇端部は丸味をもつ。底部は若干上げ底。	胴部外面ヘラナデ。内面ナデ調整。	砂粒・礫・長石 にぶい赤褐色 普通	H16i3 70% P334
36	手捏土器 (鉢形土器) 土師器	A (12.4) B 8.3 C 7.0	平底木葉痕。底部は引き締まり，胴部は内彎して外上方へ立ち上がる。口縁部は鋭い稜をもって胴部と区画され，直立して立ち上がる。口唇部は外反する。	口縁部内外面横ナデ調整。底部から胴部は粘土紐巻き上げ痕を残す。胴部外面は指頭痕を残し，内面は下位にヘラナデ痕を残し上位は横ナデ調整。	砂粒 橙色 普通	H16i3 55% P336
37	手捏土器 (鉢形土器) 土師器	A (15.4) B 8.4 C (7.4)	平底木葉痕。胴下半部は外傾し，胴中央部で内彎して立ち上がり，口縁部は外反する。	口縁部丁寧な横ナデ。胴部から底部にかけて外面はヘラナデが下から上に向ってなされる。内面は横ナデ。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	H16i3 40% P338
38	手捏土器 (鉢形土器) 土師器	A 10.1 B 4.6 C 7.9	平底。胴部は緩やかに外傾し，口縁部がわずかに内傾する。	口縁部は粗雑なナデ。胴部から底部にかけては，指痕や粘土紐巻き上げ痕を残す粗雑な成形。内面下位はヘラナデ，上位は横ナデ。	砂粒・スコリア・雲母 浅黄橙色 普通	H16i3 80% P365
39	手捏土器 (鉢形土器) 土師器	A (14.4) B 5.9 C (8.8)	平底木葉痕。胴下半部は引き締まり，胴中央部で外傾気味に内彎する。口縁部は稜を有して胴部と区画され，垂直に立ち上がる。頸部内面に浅い凹線がある。	口縁部横ナデ。胴部から底部にかけては粗雑な成形であるが粘土紐巻き上げ痕は消されている。内面下位はヘラナデ，上位は横ナデ。	砂粒・雲母 黒褐色 普通	H16i3 20% P339
40	手捏土器 (鉢形土器) 土師器	A (10.0) B 4.1 C 7.6	平底木葉痕。胴部は底部立ち上がりから外傾して開き，頸部で直立する。口縁部はわずかに外反する。	口縁部は横のナデ。胴部から底部にかけては，指圧痕，粘土紐巻き上げ痕を残す粗雑な成形。内面不定方向のナデ。	砂粒・スコリア・雲母 浅黄橙色 普通	H16i3 80% P366
41	手捏土器 (鉢形土器) 土師器	A (11.0) B 5.2 C (7.6)	底部木葉痕。胴下半部から口縁部にかけて，内彎しながら外傾して立ち上がる。	口縁部から底部にかけて粘土紐巻き上げ痕を残す粗いナデ。内面横ナデ。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	H16i3 40% P369
42	坏形土器 土師器	A 18.3 B 7.8 C (—)	丸底。体部は丸味を帯びて口縁部下位に至る。口縁部は稜をもって体部と区画され，わずかに外傾しながら立ち上がる。口唇部は外方を向く。	底部から体部にかけてヘラ削り。口縁部は横ナデで，口唇部をつまみ上げる。内面下位は不定方向のナデ，上位は横ナデ。内面黒色処理。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	H16i3 70% P325
43	小型 手捏土器 土師器	A 3.8 B 3.1	底面凹凸激しく，底部から口縁部にかけて丸味を有する。	器全体を手捻りにより粗雑に成形。口縁部から底部にかけて縦の沈線を不定間隔に9条施す。内面は，ヘラ痕を残す。	砂粒・スコリア・黒雲母 浅黄橙色 普通	H16i2 90% P372

図版番号	器種	法量(cm・g)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第91図 44	坏形土器 土師器	A (12.4) B 4.1 C (－)	丸底。体部は緩やかに内彎して口縁に至る。口縁部は稜をもって体部と区画され，外傾して立ち上がる。	口縁部横ナデ。体部から底部にかけては手持ちヘラ削り。内面下位は不定方向のナデ，上位は横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい黄橙色 普通	H16i2 50% P326
45	双孔円板 滑石	径 3.1 厚さ 0.4 重量 6.1	表裏，側面共に磨きが施されているが，側面にはカット面が残存している。			H16i3 100% Q117
第92図 46	手捏土器 (鉢形土器) 土師器	A (14.0) B 6.5 C 7.5	平底木葉痕。胴下半部は引き締まり，胴上半部で内彎気味に外傾して口縁部で直立する。	口縁部横ナデ。胴部から底部にかけて指圧痕，粘土紐巻き上げ痕を残す粗雑な成形。内面下位は不定方向，上位は横方向のナデ。	砂粒・黒雲母・長石 明褐灰色 普通	H16h3 70% P349
47	手捏土器 (鉢形土器) 土師器	A 9.8 B 6.0 C (8.9)	平底木葉痕。胴下半部は引き締まり，胴上半部まで外傾して立ち上がる。口縁部は直立する。	口縁部横ナデ，胴部から底部にかけて指頭痕，粘土紐巻き上げ痕を残す粗雑な成形。内面下位はヘラナデ。上位は横ナデ。	砂粒・スコリア・黒雲母・礫 にぶい橙色 普通	H16h3 75% P348
48	手捏土器 (鉢形土器) 土師器	A (12.5) B 6.3 C 8.7	平底木葉痕。胴下半部は引き締まり，胴中央部から内彎しながら外傾する。口縁部内面は緩やかな稜を有して外反する。	口縁部から胴部にかけて粘土紐巻き上げ痕を残す。粗雑なナデ。底部は捻り出しによって作り出し，指圧痕を残す。	砂粒・スコリア・礫 灰褐色 普通	H16h3 50% P350
49	手捏土器 (鉢形土器) 土師器	A (12.8) B 7.4 C 6.4	平底。胴部は内彎して外傾気味に立ち上がり，口縁部は外反する。	口縁部横ナデ。胴部から底部にかけては指圧痕，粘土紐巻き上げ痕を残す粗雑な成形。内面下位はヘラナデ，上位横ナデ。	砂粒・スコリア 橙色 普通	H16h3 30% P351
50	壺形土器 土師器	A 11.0 B 9.5 C 7.1	平底木葉痕。胴下半部は外傾して立ち上がり，胴中央部で強く内彎する。頸部は強く内傾し，口縁部が直立する。	口縁部横ナデ，胴上半部は横のヘラ削り，下半部は縦のヘラ削り。底部は横のヘラ削りで，木葉痕を消去。	砂粒・雲母 にぶい黄橙色 普通	H16h3 90% P345
52	甕形土器 土師器	A (18.0) B (11.0)	底部欠損。胴部は内彎しながら立ち上がる。口縁部は稜を有して胴部と区画され，内傾して立ち上がるが上位で強く外反する。	口縁部横ナデ。胴部は縦のヘラ削り，内面下位はヘラナデ，上位は横のナデ。口縁内部に一条の沈線が廻る。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	H16i3 20% P344
53	小型 壺形土器 土師器	B (4.5) C 1.8	わずかに上げ底。胴部から頸部にかけて強く内彎して立ち上がる。頸部以上を欠損している。	胴部から底部にかけてヘラナデ。内面は不定方向のナデ。	砂粒・スコリア にぶい黄橙色 普通	H16i3 60% P346
54	手捏土器 (鉢形土器) 土師器	A 10.2 B 4.3 C 7.0	平底木葉痕。胴部は外傾し，口縁部は直立して立ち上がる。	口縁部横ナデ，胴部から底部にかけて指圧痕。粘土紐巻き上げ痕を残す粗雑な成形。内面は横ナデ。	砂粒・スコリア・長石・礫 にぶい橙色 普通	H16h3 98% P347
55	小型 手捏土器 土師器	A 6.0 B 4.5 C 4.8	平底木葉痕。胴部はわずかに内彎して立ち上がる。	胴部内外面共粗雑なナデ。	砂粒・黒雲母・礫 浅黄橙色 普通	H16i3 80% P367
第93図 56	手捏土器 (鉢形土器) 土師器	A 12.9 B 7.9 C 6.5	平底木葉痕。胴下半部は引き締まり，胴上半部まで直線的に立ち上がる。口縁部は鋭い稜を有して胴部と区画され，直立気味に立ち上がる。	口縁部丁寧な横ナデ調整。胴部に指圧痕，粘土紐巻き上げ痕を残す粗雑な成形。底部は捻り出して成形し，指頭痕を残す。内面下位はヘラナデ，上位は横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	H16i3 90% P332

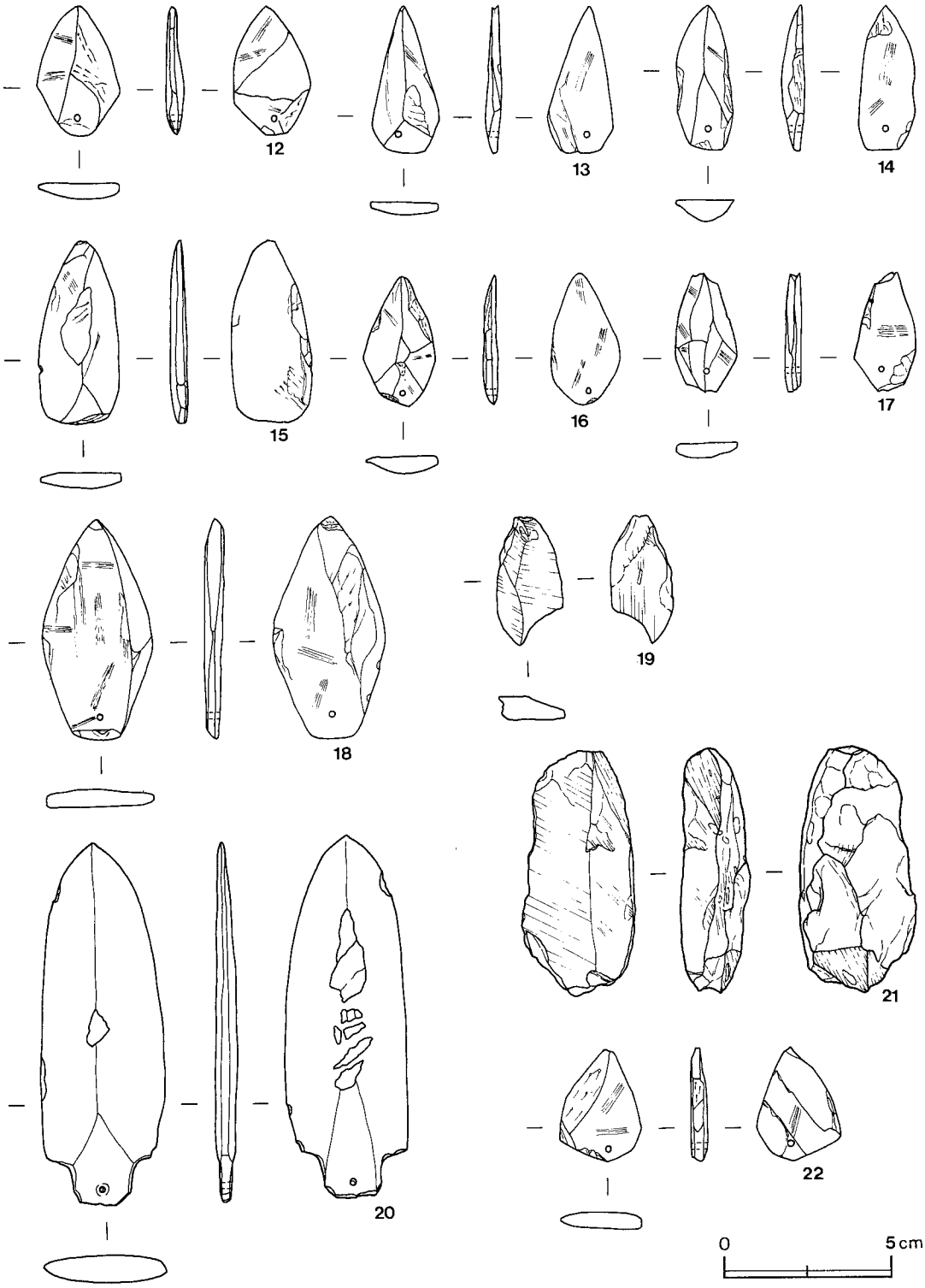
図版番号	器　種	法量(cm・g)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第93図 57	甕形土器 土師器	B (13.3) C　8.8	平底。底部から胴下半部にかけて外傾し，徐々に直立して立ち上がる。胴上半部以上欠損。	胴部ヘラ磨き。底面ヘラナデ内面ナデ。	砂粒・長石・雲母 赤色 普通	H16i3　30% P360
58	甕形土器 土師器	A (19.4) B (14.6)	胴下半部を欠損するが胴部は球形の膨らみを有する。頸部は直立気味に立ち上がり，口縁部において外傾する。口唇部は丸味を有する。	器表面及び口縁部内面は横ナデ。胴部内面は横ヘラナデ。	砂粒・雲母・長石・スコリア にぶい橙色 普通	H16i3　20% P361
59	双孔円板 滑石	径　2.5 厚さ 0.3 重量 2.8	表裏，側面共に磨きが施されている。側面にカット面を残す。			H16i3 100% Q118
60	手捏土器 (鉢形土器) 土師器	A (9.5) B　5.3 C (8.2)	平底木葉痕。底部やや引き締まり，胴部は外傾，口縁部は直立する。	口縁部から底部にかけて，粘土紐巻き上げ痕を残す粗いナデ。内面下位はヘラナデ，上位は横ナデ。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	H16i2　50% P368
61	勾玉 滑石	全長 4.3 厚さ 1.3 重量18.2	頭部から末端部にかけて緩やかに彎曲する。頭部はやや大きく膨らみ，直径2㎜の透孔を有する。胴部断面は楕円形状を呈す。	胴部内面は横位に，外は不定方向に磨きをかける。		H16i2 100% Q17
62	臼玉 滑石	径　1.4 厚さ(0.7) 重量(1.7)	円筒形状を呈し，縦に直径4㎜ほどの孔を穿つ。	周囲は縦の削り痕が残り，上面に磨きを施す。		H16i3　95% Q23

石製品一覧表

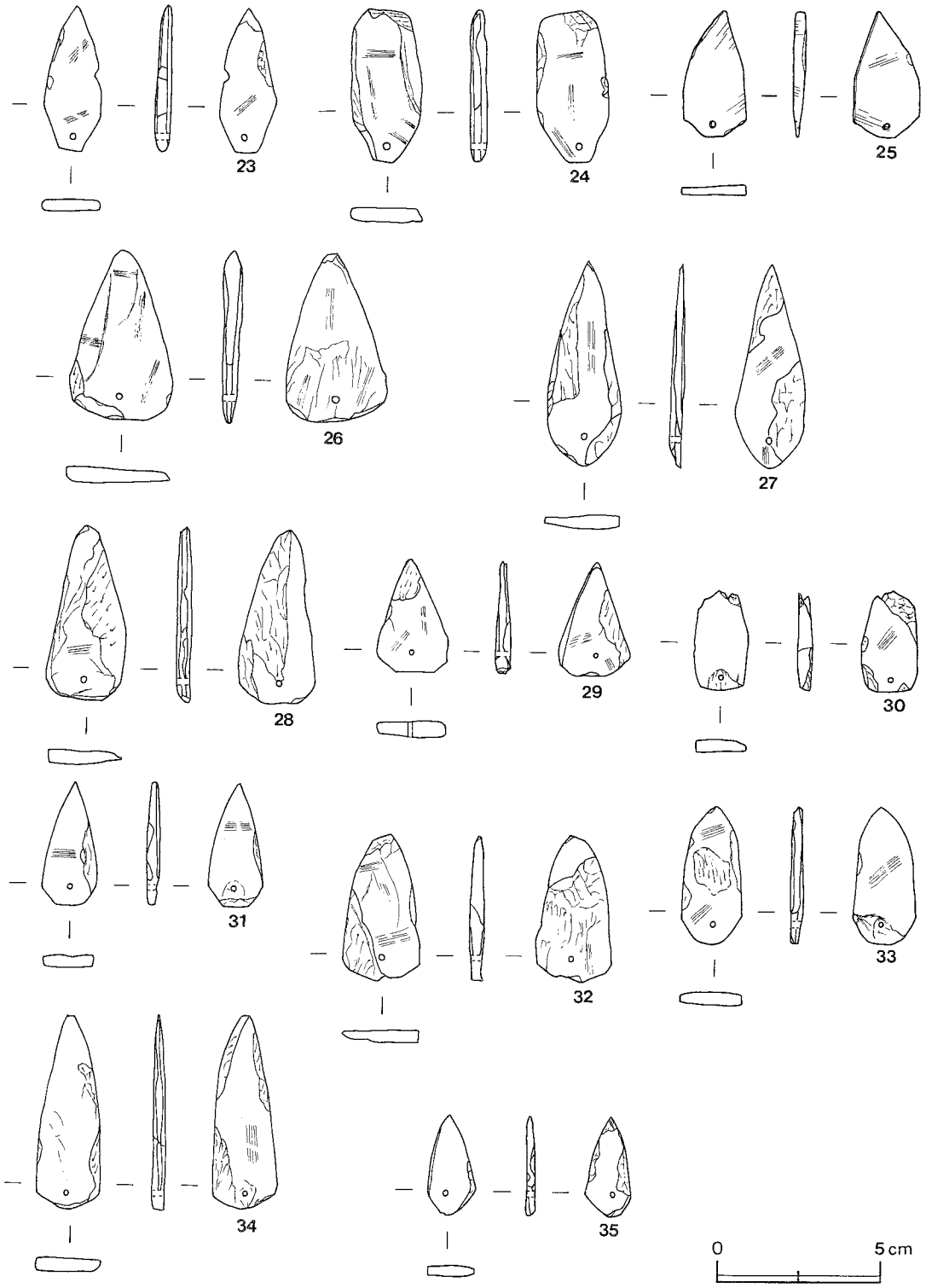
図版番号	名　称	出土地点	台帳番号	大きさ (cm) 長さ×幅×厚さ	孔径(cm)	重量(g)	石質	備　考
第94図 1	剣形模造品	H15e5	Q256	4.3×2.0×0.4	0.2	5.3	滑石	
2	〃	H15f5	Q262	4.5×1.6×0.4	0.2	4.1	〃	
3	〃	H15g8	Q310	(4.4)×2.7×0.8	—	(12.0)	〃	一部欠損
4	〃	H15h7	Q316	5.5×2.0×0.6	0.2	(7.2)	〃	〃
5	〃	〃	Q271	(5.9)×2.0×0.7	0.2	(10.3)	〃	〃
6	〃	〃	Q276	3.7×1.6×0.4	0.2	(3.6)	〃	〃
7	〃	H15g8	Q286	5.9×2.7×0.6	0.2	8.6	〃	
8	〃	表採	Q287	5.7×1.9×0.7	0.1	9.7	〃	
9	〃	H15e2	Q257	(4.5)×2.1×0.7	—	(7.6)	〃	一部欠損
10	〃	H15h7	Q270	11.5×2.4×1.0	0.2	34.2	〃	
11	〃	〃	Q277	12.5×3.2×0.7	0.2	38.4	〃	
第95図 12	〃	H15e5	Q258	3.9×2.5×0.6	0.2	5.2	〃	
13	〃	H15f2	Q260	4.5×2.0×0.5	0.2	4.7	〃	
14	〃	H15f5	Q261	4.4×1.8×0.6	0.2	(5.9)	〃	一部欠損
15	〃	H15g5	Q264	5.6×2.5×0.5	—	9.7	〃	
16	〃	H15h6	Q267	4.0×2.2×0.6	0.2	(4.4)	〃	一部欠損
17	〃	H15h7	Q278	(3.7)×1.9×0.5	0.15	(4.5)	〃	〃
18	〃	〃	Q272	6.8×3.3×0.7	0.2	19.0	〃	



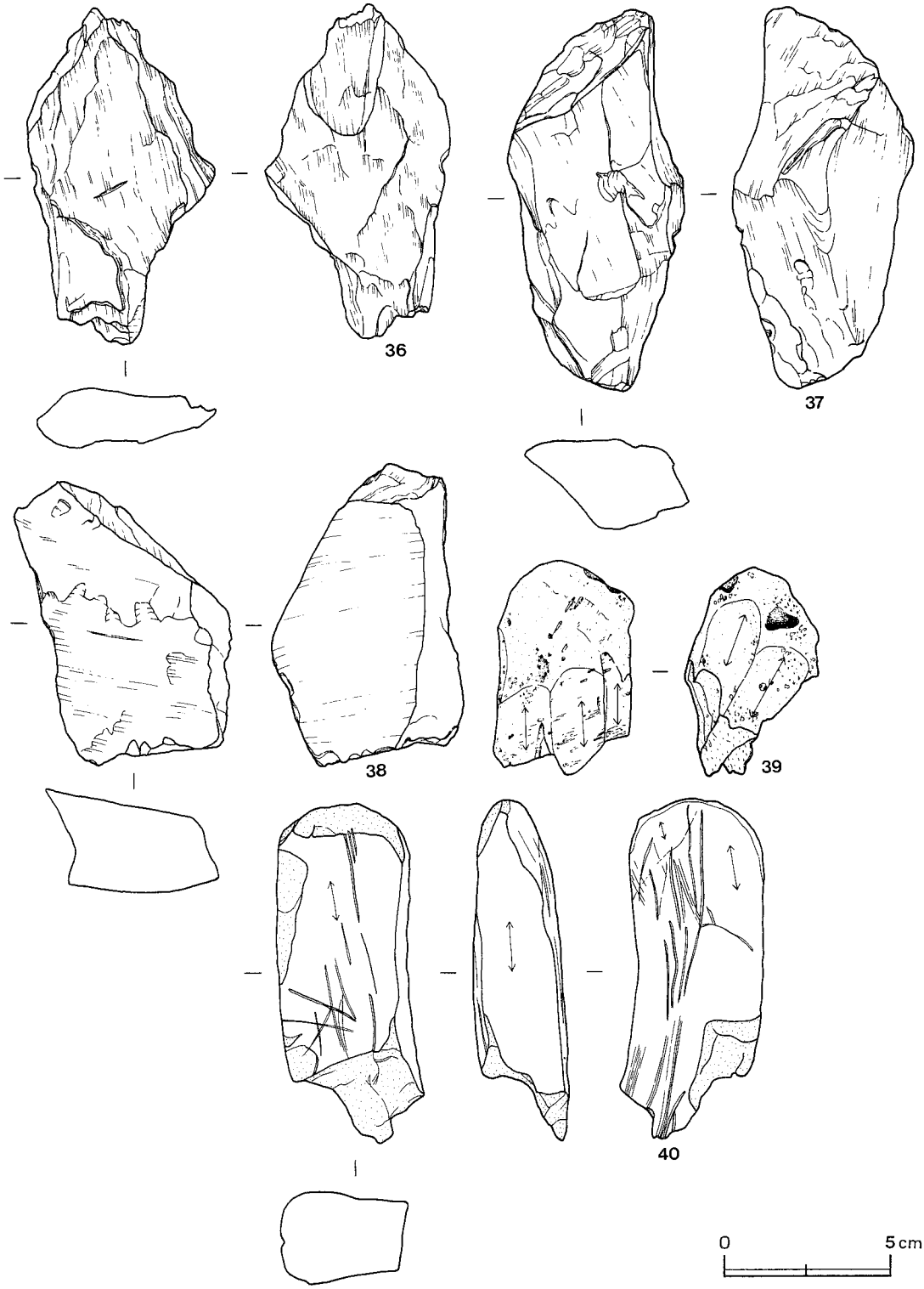
第94図　石製剣形模造品実測図（1）



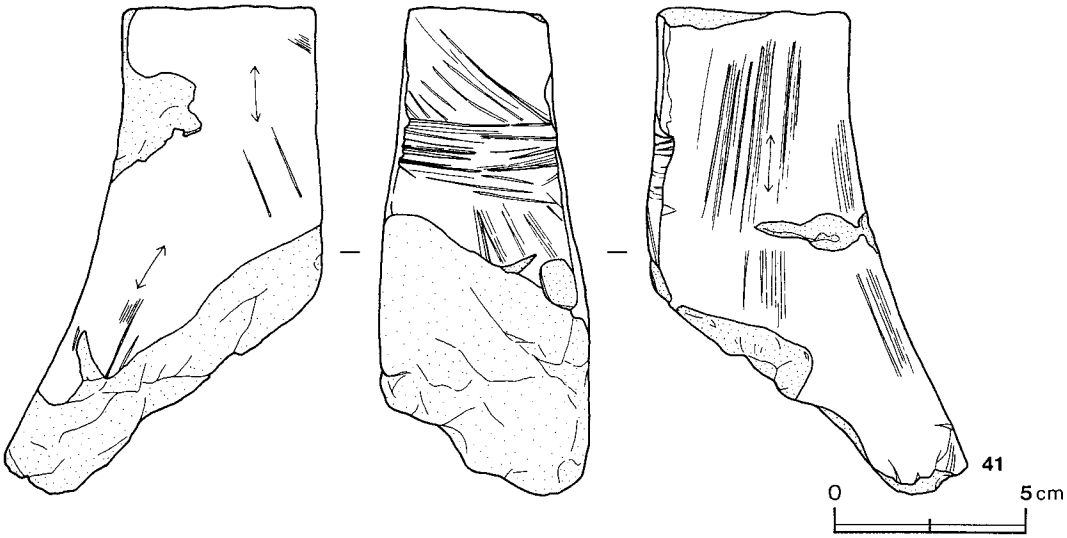
第95図　石製剣形模造品実測図（２）



第96図　石製剣形模造品実測図（3）

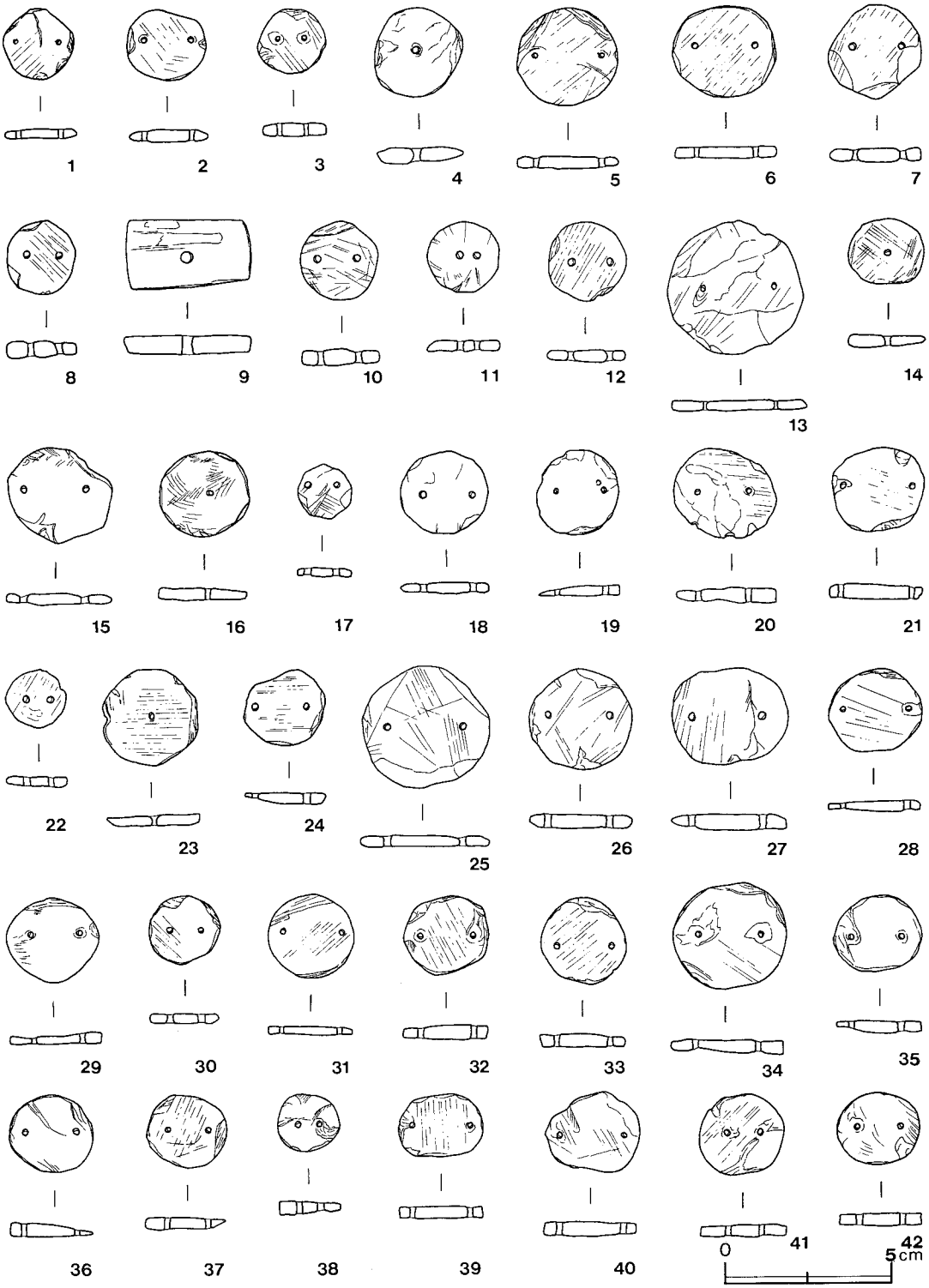


第97図　滑石コア・砥石実測図

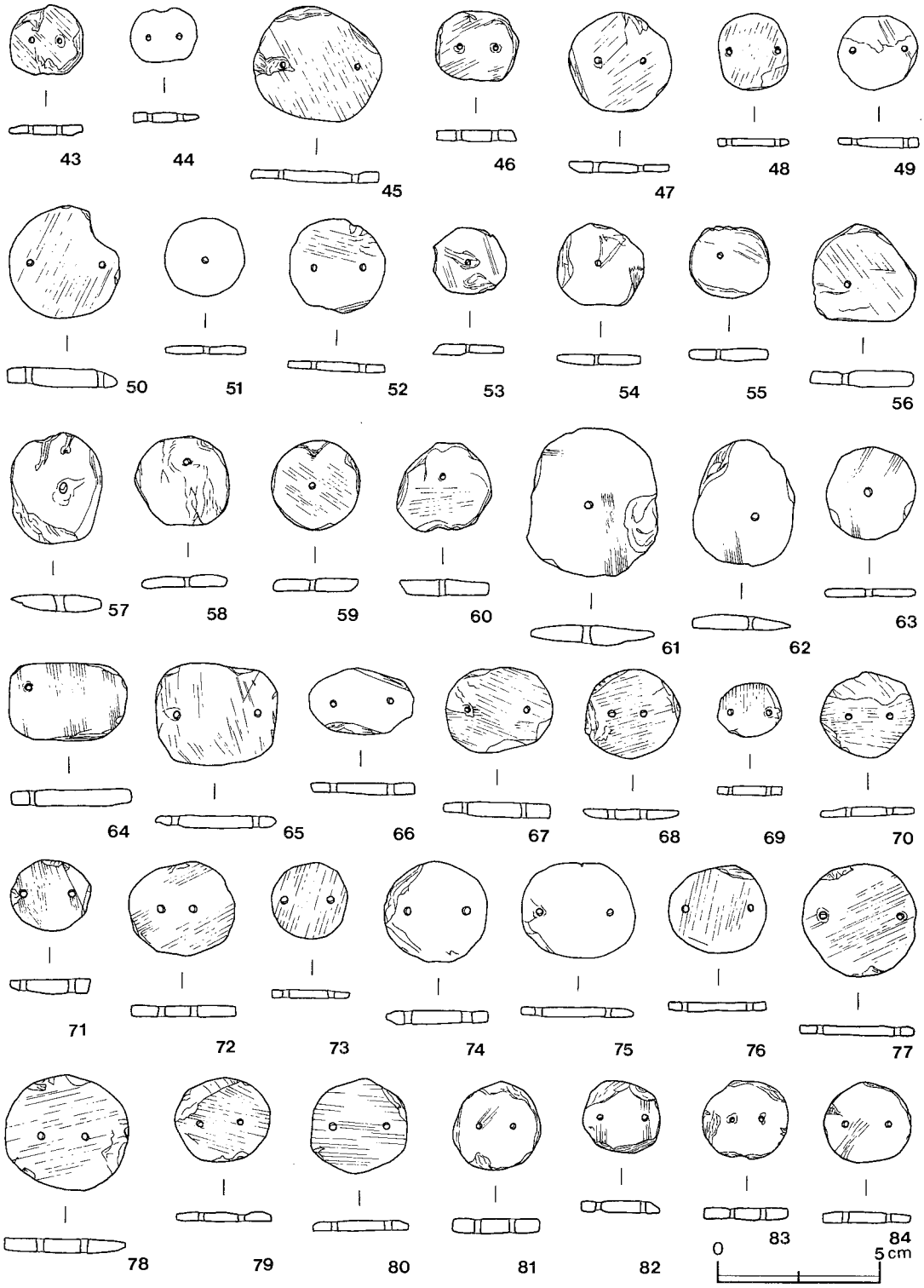


第98図　砥石実測図

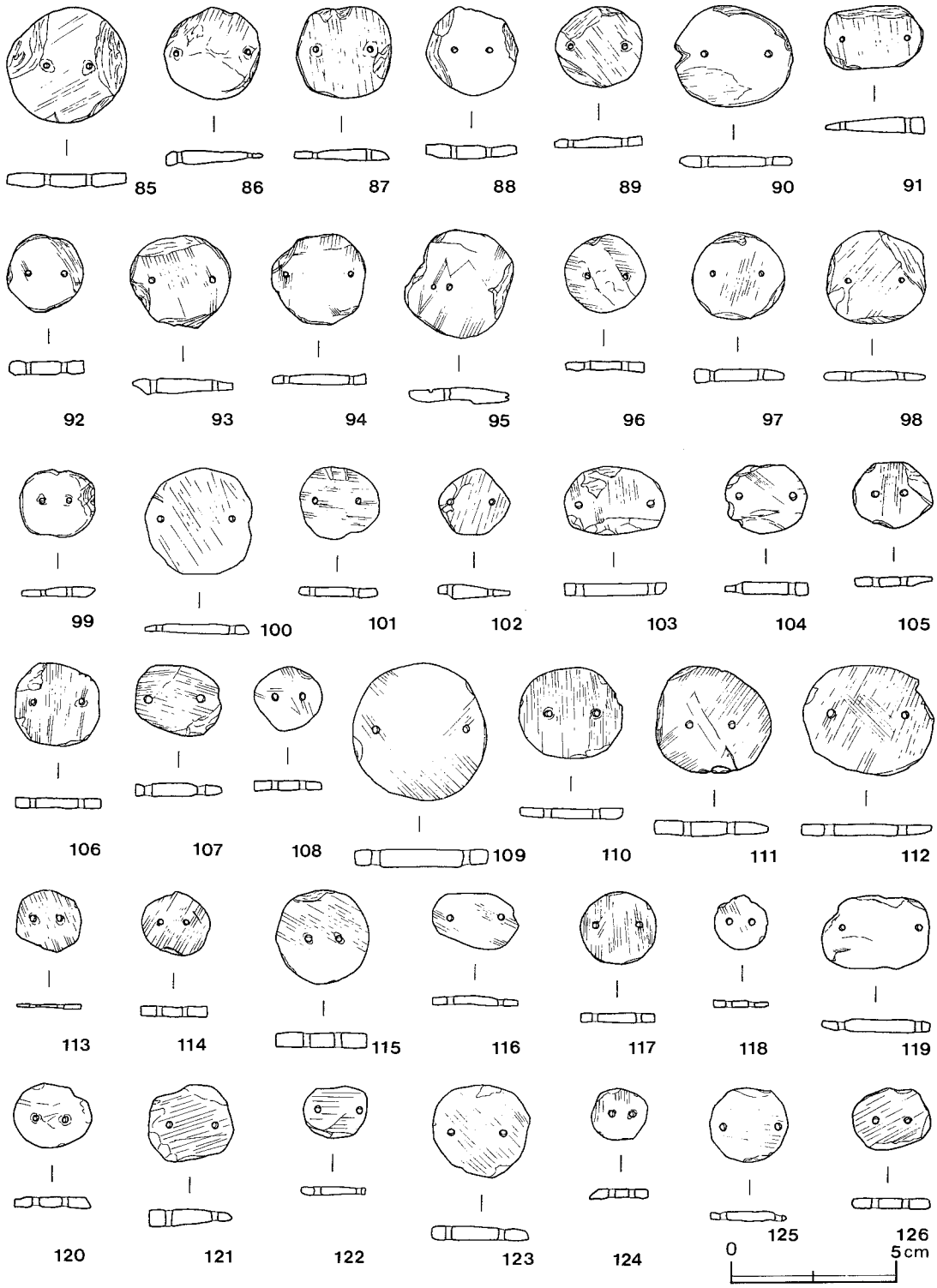
図版番号	名　　称	出土地点	台帳番号	大きさ（cm）長さ×幅×厚さ	孔径(cm)	重量(g)	石質	備　考
第95図 19	剣形模造品	H16h2	Q294	3.9×1.9×0.7	—	6.0	滑石	
20	〃	H15h7	Q284	11.2×3.8×0.7	0.2	42.2	〃	
21	コ　　ア	H16i2	Q290	7.5×3.5×2.1	—	64.8	〃	
22	剣形模造品	H15h4	Q254	3.4×2.5×0.7	0.2	(5.2)	〃	一部欠損
第96図 23	〃	H15d6	Q255	4.5×1.8×0.5	0.2	(3.9)	〃	〃
24	〃	H15h7	Q268	(4.8)×(2.2)×0.5	0.2	(7.4)	〃	〃
25	〃	〃	Q317	3.9×2.0×0.3	0.15	4.6	〃	
26	〃	〃	Q269	5.3×3.2×0.6	0.2	(12.3)	〃	一部欠損
27	〃	〃	Q273	6.3×2.4×0.4	0.2	8.2	〃	
28	〃	〃	Q274	5.4×2.4×0.5	0.15	8.2	〃	
29	〃	〃	Q275	3.5×2.2×0.5	0.15	4.8	〃	
30	〃	〃	Q279	(3.1)×1.7×0.4	0.15	(4.2)	〃	一部欠損
31	〃	〃	Q280	3.8×1.7×0.5	0.1	4.3	〃	
32	〃	〃	Q281	4.5×2.4×0.5	0.15	7.4	〃	
33	〃	〃	Q282	4.2×1.9×0.4	0.15	5.3	〃	
34	〃	〃	Q283	6.0×1.9×0.4	0.15	8.5	〃	
35	〃	〃	Q285	3.1×1.4×0.4	0.15	2.1	〃	
第97図 36	コ　　ア	H16i2	Q291	(10.5)×(5.6)×1.8	—	(119.8)	〃	
37	〃	H15e3	Q292	11.8×5.5×2.8	—	163.9	〃	
38	〃	〃	Q293	8.8×6.8×2.9	—	209.3	〃	
39	砥　　石	H16a9	Q302	6.5×4.4×4.1	—	18.3	軽石	
40	〃	H14b4	Q 9	(10.6)×(4.6)×(3.0)	—	(142.8)	凝灰岩	一部残存
第98図 41	〃	H16i2	Q11	(12.9)×(5.5)×(8.4)	—	(520.2)	〃	〃



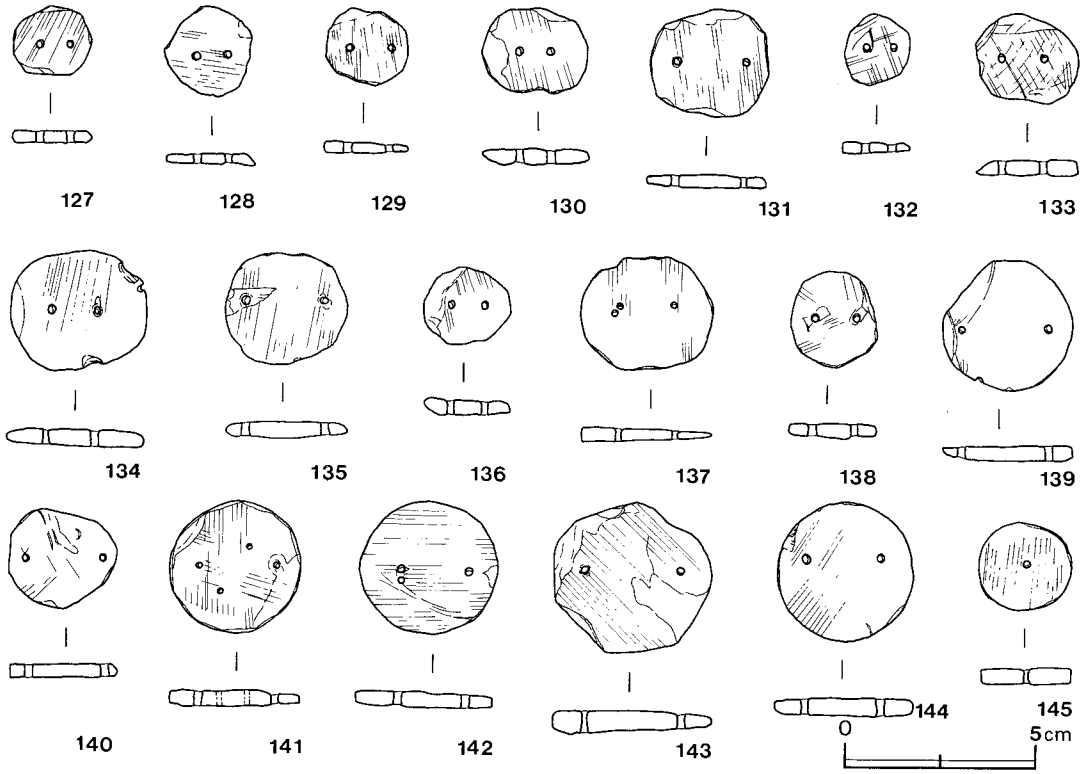
第99図　有孔円板実測図（1）



第100図　有孔円板実測図（2）



第101図　有孔円板実測図（3）



第102図　有孔円板実測図（４）

有孔円板一覧表

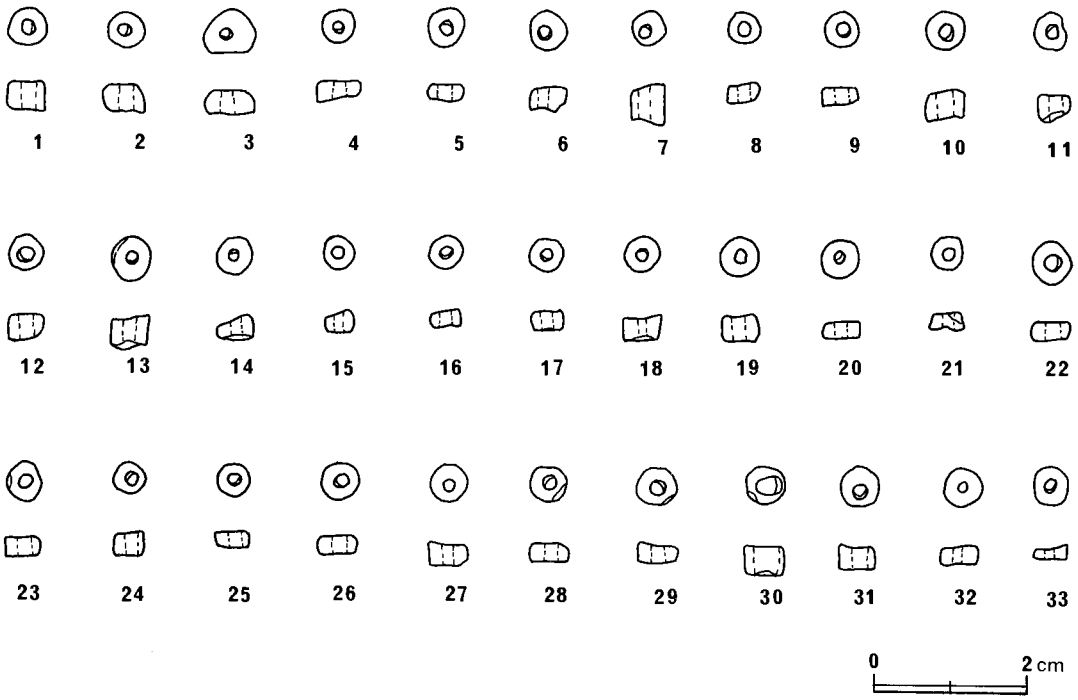
図版番号	名　　称	出土地点	台帳番号	大きさ（cm）長さ×幅×厚さ	孔径(cm)	重量(g)	石質	備　考
第99図 1	有孔円板	H16h1	Q111	2.1×2.2×0.3	0.2	2.3	滑石	双孔
2	〃	〃	Q112	2.2×2.4×0.4	0.2	3.5	〃	〃
3	〃	〃	Q113	2.0×2.0×0.4	0.2	2.5	〃	〃
4	〃	H14a5	Q 68	(2.7)×(2.7)×0.5	0.3	(6.4)	〃	単孔 一部欠損
5	〃	H14b4	Q119	3.0×3.1×0.4	0.2	6.3	〃	双孔
6	〃	〃	Q120	2.8×3.2×0.4	0.2	6.1	〃	〃
7	〃	〃	Q121	2.9×2.8×0.4	0.2	5.7	〃	〃
8	〃	〃	Q122	2.3×2.1×0.5	0.2	3.4	〃	〃
9	〃	H14b9	Q 22	2.2×3.8×0.5	0.3	11.4	〃	単孔 長方形
10	〃	H14c8	Q123	2.4×2.3×0.5	0.2	4.5	〃	双孔
11	〃	H15d4	Q124	2.2×2.2×0.3	0.2	3.1	〃	〃
12	〃	H15e2	Q125	2.5×2.4×0.3	0.2	4.1	〃	〃
13	〃	H15e4	Q126	4.1×4.2×0.3	0.1	8.1	〃	〃
14	〃	H15e5	Q 69	2.0×2.3×0.5	0.2	2.6	〃	単孔
15	〃	H15f4	Q128	2.9×3.2×0.3	0.2	(4.6)	〃	双孔 一部欠損

図版番号	名　　称	出土地点	台帳番号	大きさ（cm） 長さ×幅×厚さ	孔径(cm)	重量(g)	石質	備　考
第99図 16	有孔円板	H15f5	Q 71	2.6×2.7×0.4	0.2	4.5	滑石	単孔
17	〃	〃	Q129	1.8×1.7×0.2	0.2	1.7	〃	双孔
18	〃	H15g5	Q132	2.7×2.8×0.3	0.2	4.1	〃	〃
19	〃	〃	Q243	2.6×2.5×0.4	0.2	(3.8)	〃	3孔 一部欠損
20	〃	H15g7	Q309	2.8×3.2×0.5	0.2	5.3	〃	双孔 一部欠損
21	〃	H15g8	Q311	2.6×2.8×0.5	0.15	5.4	〃	〃
22	〃	〃	Q312	1.8×1.9×0.4	0.2	1.7	〃	〃
23	〃	H15h6	Q 72	3.0×(2.9)×0.4	0.2	(4.6)	〃	単孔 一部欠損
24	〃	〃	Q137	2.3×2.5×0.3	0.2	3.2	〃	双孔
25	〃	〃	Q138	3.8×3.9×0.3	0.2	9.4	〃	〃
26	〃	〃	Q139	3.1×3.2×0.4	0.2	7.7	〃	〃
27	〃	〃	Q140	3.0×3.6×0.5	0.2	10.0	〃	双孔 楕円形
28	〃	〃	Q141	2.5×2.8×0.4	0.2	4.1	〃	双孔
29	〃	〃	Q142	2.6×2.8×0.4	0.2	3.3	〃	〃
30	〃	〃	Q143	2.1×2.1×0.3	0.2	2.3	〃	〃
31	〃	〃	Q144	2.6×2.7×0.3	0.2	4.1	〃	〃
32	〃	〃	Q145	2.4×2.6×0.5	0.2	5.4	〃	〃
33	〃	〃	Q146	2.6×2.7×0.4	0.2	4.6	〃	〃
34	〃	〃	Q147	3.3×3.5×0.5	0.2	8.8	〃	〃
35	〃	〃	Q148	2.3×2.5×0.4	0.2	4.0	〃	〃
36	〃	〃	Q149	2.4×2.6×0.4	0.2	3.3	〃	〃
37	〃	〃	Q150	2.3×2.5×0.3	0.2	3.8	〃	〃
38	〃	〃	Q151	1.8×2.0×0.4	0.2	2.3	〃	〃
39	〃	〃	Q152	1.9×2.5×0.4	0.2	3.5	〃	双孔 楕円形
40	〃	〃	Q153	2.5×2.9×0.5	0.2	5.6	〃	双孔
41	〃	〃	Q154	2.5×2.6×0.5	0.2	5.0	〃	〃
42	〃	〃	Q155	2.2×2.4×0.4	0.2	3.2	〃	〃
第100図 43	〃	〃	Q156	2.2×2.3×0.3	0.2	3.1	〃	〃
44	〃	〃	Q157	1.7×2.0×0.3	0.2	(2.2)	〃	双孔,楕円形 一部欠損
45	〃	〃	Q158	3.5×3.9×0.4	0.2	9.2	〃	双孔
46	〃	〃	Q159	2.1×2.5×0.4	0.2	3.3	〃	〃
47	〃	〃	Q160	3.1×3.2×0.4	0.2	5.4	〃	〃
48	〃	〃	Q161	2.4×2.2×0.2	0.2	2.4	〃	〃
49	〃	〃	Q162	2.3×2.5×0.3	0.2	3.1	〃	〃
50	〃	〃	Q163	3.5×3.5×0.6	0.2	(11.0)	〃	双孔 一部欠損
51	〃	〃	Q164	2.4×2.5×0.3	0.2	3.5	〃	単孔
52	〃	〃	Q165	2.9×3.0×0.3	0.2	4.7	〃	双孔
53	〃	〃	Q 78	2.0×2.2×0.4	0.1	(2.1)	〃	単孔 一部欠損
54	〃	〃	Q 79	2.6×2.7×0.4	0.1	3.8	〃	単孔
55	〃	H15h7	Q 73	2.2×2.5×0.4	0.2	3.6	〃	〃

図版番号	名　　称	出土地点	台帳番号	大きさ（cm） 長さ×幅×厚さ	孔径(cm)	重量(g)	石質	備 考
第100図 56	有孔円板	H15h7	Q 74	3.0×3.2×0.5	0.2	8.1	滑石	単孔
57	〃	〃	Q 75	3.4×2.8×0.6	0.2	7.8	〃	〃
58	〃	〃	Q 76	2.8×2.9×0.4	0.2	5.2	〃	〃
59	〃	〃	Q 77	2.8×2.7×0.4	0.2	4.7	〃	〃
60	〃	〃	Q 80	2.7×2.9×0.5	0.2	6.9	〃	〃
61	〃	〃	Q 81	4.6×4.0×0.6	0.2	(16.2)	〃	単孔 一部欠損
62	〃	〃	Q 82	3.9×3.1×0.5	0.2	(8.8)	〃	〃
63	〃	〃	Q 83	2.9×2.8×0.2	0.2	3.8	〃	単孔
64	〃	〃	Q 85	2.4×3.7×0.5	0.2	9.6	〃	単孔 方形
65	〃	〃	Q133	3.3×3.7×0.4	0.2	9.3	〃	双孔 楕円形
66	〃	〃	Q166	2.0×3.3×0.4	0.2	4.1	〃	〃
67	〃	〃	Q167	2.2×3.3×0.5	0.2	7.3	〃	〃
68	〃	〃	Q168	2.8×3.0×0.3	0.2	4.3	〃	双孔
69	〃	〃	Q169	1.6×2.0×0.3	0.2	1.9	〃	〃
70	〃	〃	Q170	2.7×2.9×0.3	0.2	(3.9)	〃	双孔 一部欠損
71	〃	〃	Q171	2.2×2.5×0.4	0.2	4.3	〃	双孔
72	〃	〃	Q172	2.9×3.3×0.4	0.2	6.7	〃	〃
73	〃	〃	Q173	2.4×2.4×0.3	0.2	2.9	〃	〃
74	〃	〃	Q174	3.1×3.2×0.4	0.2	7.3	〃	〃
75	〃	〃	Q175	3.0×3.5×0.3	0.2	6.5	〃	双孔 楕円形
76	〃	〃	Q176	2.7×3.0×0.3	0.2	4.8	〃	双孔
77	〃	〃	Q177	3.5×3.5×0.3	0.2	7.3	〃	〃
78	〃	〃	Q178	3.6×3.8×0.4	0.2	10.8	〃	〃
79	〃	〃	Q179	2.5×3.0×0.3	0.2	3.8	〃	〃
80	〃	〃	Q180	2.9×3.0×0.3	0.2	5.6	〃	〃
81	〃	〃	Q181	2.7×2.7×0.5	0.2	6.0	〃	〃
82	〃	〃	Q182	2.2×2.4×0.4	0.2	3.9	〃	〃
83	〃	〃	Q183	2.4×2.6×0.4	0.2	4.2	〃	〃
84	〃	〃	Q184	2.5×2.7×0.4	0.2	3.8	〃	〃
第101図 85	〃	〃	Q185	3.6×3.7×0.4	0.2	10.6	〃	〃
86	〃	〃	Q186	2.8×3.0×0.4	0.2	5.2	〃	〃
87	〃	〃	Q187	2.7×2.7×0.4	0.2	5.3	〃	〃
88	〃	〃	Q188	2.8×3.0×0.4	0.2	5.6	〃	〃
89	〃	〃	Q189	2.5×2.7×0.3	0.2	(3.8)	〃	双孔 一部欠損
90	〃	〃	Q190	3.1×3.6×0.3	0.2	(7.2)	〃	〃
91	〃	〃	Q191	1.9×2.9×0.5	0.2	4.8	〃	〃
92	〃	〃	Q192	2.4×2.4×0.4	0.2	3.9	〃	双孔
93	〃	〃	Q193	2.9×3.0×0.5	0.2	7.8	〃	〃
94	〃	〃	Q194	2.8×2.9×0.3	0.2	4.7	〃	〃
95	〃	〃	Q195	3.3×3.2×0.5	0.2	9.1	〃	双孔 穿孔途中

図版番号	名　　称	出土地点	台帳番号	大きさ（cm） 長さ×幅×厚さ	孔径(cm)	重量(g)	石質	備　考
第101図 96	有孔円板	H15h7	Q196	2.4×2.5×0.3	0.2	2.8	滑石	双孔
97	〃	〃	Q197	2.7×2.8×0.4	0.2	5.2	〃	〃
98	〃	〃	Q198	2.8×3.0×0.3	0.2	5.7	〃	〃
99	〃	〃	Q199	2.1×2.3×0.3	0.2	3.1	〃	〃
100	〃	〃	Q200	3.3×3.2×0.3	0.2	7.0	〃	〃
101	〃	〃	Q201	2.2×2.5×0.3	0.2	3.1	〃	〃
102	〃	〃	Q202	2.0×2.2×0.5	0.2	2.4	〃	〃
103	〃	〃	Q203	2.1×3.2×0.4	0.2	4.7	〃	双孔 楕円形
104	〃	〃	Q204	2.1×2.5×0.4	0.2	3.5	〃	双孔
105	〃	〃	Q205	2.0×2.4×0.3	0.2	2.4	〃	〃
106	〃	〃	Q206	2.0×2.6×0.3	0.2	4.2	〃	〃
107	〃	〃	Q207	2.1×2.6×0.4	0.2	3.6	〃	双孔 楕円形
108	〃	〃	Q208	2.0×2.1×0.3	0.2	2.0	〃	双孔
109	〃	〃	Q217	4.2×4.1×0.5	0.2	16.8	〃	〃
110	〃	〃	Q210	2.8×3.2×0.3	0.2	5.2	〃	〃
111	〃	〃	Q211	3.3×3.6×0.4	0.2	9.5	〃	〃
112	〃	〃	Q212	3.4×3.9×0.3	0.3	(8.3)	〃	双孔 一部欠損
113	〃	〃	Q213	1.9×2.0×0.2	0.2	1.2	〃	双孔
114	〃	〃	Q214	1.9×2.1×0.4	0.2	2.6	〃	〃
115	〃	〃	Q215	2.9×2.9×0.4	0.2	6.8	〃	〃
116	〃	〃	Q216	1.7×2.6×0.3	0.2	1.9	〃	双孔 楕円形
117	〃	〃	Q209	2.2×2.3×0.3	0.2	2.9	〃	双孔
118	〃	〃	Q218	1.7×1.7×0.2	0.2	0.9	〃	〃
119	〃	〃	Q219	2.3×3.2×0.4	0.2	5.5	〃	双孔 楕円形
120	〃	〃	Q220	2.0×2.4×0.4	0.2	3.0	〃	双孔
121	〃	〃	Q221	2.4×2.6×0.6	0.2	4.8	〃	〃
122	〃	〃	Q222	1.6×2.0×0.2	0.2	1.5	〃	〃
123	〃	〃	Q223	2.9×2.9×0.4	0.2	6.5	〃	〃
124	〃	〃	Q224	2.3×2.4×0.3	0.2	3.2	〃	〃
125	〃	〃	Q225	1.6×1.8×0.3	0.2	1.3	〃	〃
126	〃	〃	Q226	2.0×2.3×0.3	0.2	2.5	〃	双孔 楕円形
第102図 127	〃	〃	Q227	2.0×2.1×0.3	0.2	2.7	〃	双孔
128	〃	〃	Q228	2.5×2.3×0.3	0.2	2.6	〃	〃
129	〃	〃	Q229	2.0×2.2×0.3	0.2	2.2	〃	〃
130	〃	〃	Q230	2.3×2.8×0.4	0.2	(4.5)	〃	双孔 楕円形 一部欠損
131	〃	〃	Q231	2.9×3.1×0.3	0.2	5.2	〃	双孔
132	〃	〃	Q232	1.9×1.8×0.3	0.2	1.6	〃	〃
133	〃	〃	Q233	2.4×2.7×0.4	0.2	5.4	〃	双孔 楕円形
134	〃	〃	Q314	3.2×3.6×0.5	0.2	(7.2)	〃	双孔 一部欠損
135	〃	H15h8	Q234	3.0×3.2×0.5	0.2	6.1	〃	双孔

図版番号	名　　称	出土地点	台帳番号	大きさ（cm）長さ×幅×厚さ	孔径(cm)	重量(g)	石質	備　考
第102図 136	有孔円板	H15i7	Q235	2.0×2.3×0.4	0.2	2.6	滑石	双孔
137	〃	H16h7	Q244	3.0×3.5×0.4	0.2	7.1	〃	三孔 穿孔途中
138	〃	H14c3	Q236	2.5×2.3×0.4	0.2	3.3	〃	三孔
139	〃	H15g8	Q237	3.4×3.4×0.4	0.2	(6.9)	〃	三孔 一部欠損
140	〃	〃	Q238	2.6×2.8×0.3	0.2	5.1	〃	三孔
141	〃	〃	Q245	3.5×3.4×0.4	0.2	9.8	〃	四孔
142	〃	H15e3	Q239	3.6×3.7×0.4	0.2	13.2	〃	三孔 穿孔途中
143	〃	〃	Q240	4.0×4.1×0.6	0.2	15.8	〃	双孔
144	〃	〃	Q241	3.7×3.7×0.4	0.2	10.4	〃	〃
145	〃	表　採	Q 67	2.3×2.4×0.5	0.2	4.8	〃	単孔



第103図　臼玉実測図

臼玉一覧表

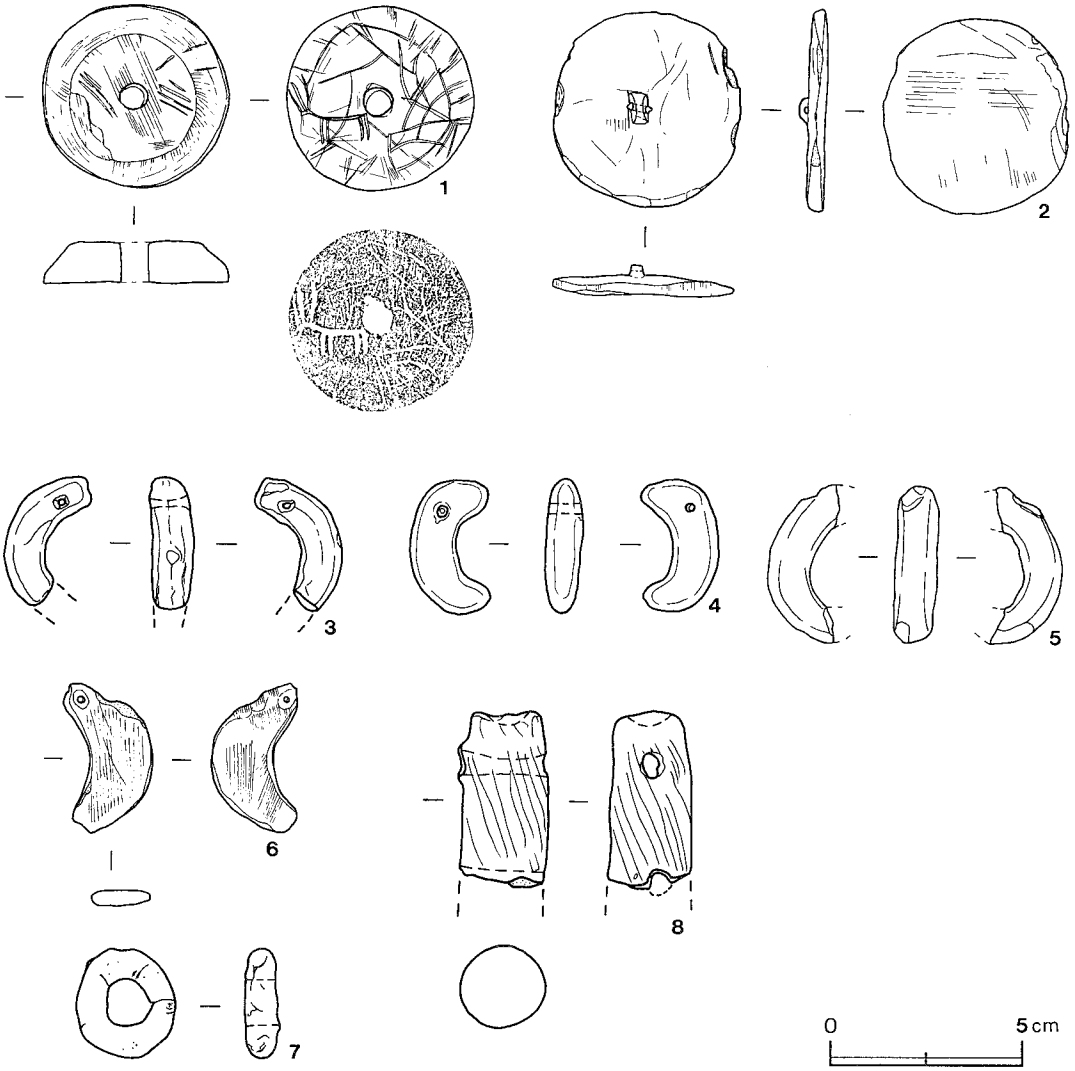
図版番号	名　　称	出土地点	台帳番号	大きさ（cm）長さ×幅×厚さ	孔径(cm)	重量(g)	石質	備　考
第103図 1	臼　　玉	H15h6	Q24	0.5×0.5×0.4	0.2	0.2	滑石	
2	〃	H15h7	Q25	0.5×0.45×0.5	0.2	0.1	〃	

図版番号	名　　称	出土地点	台帳番号	大きさ（cm）長さ×幅×厚さ	孔径(cm)	重量(g)	石質	備　考
第103図 3	臼　　玉	H15h7	Q26	(0.6)×0.7×(0.3)	0.2	(0.2)	滑石	一部欠損
4	〃	〃	Q27	0.4×0.5×(0.3)	0.2	(0.1)	〃	〃
5	〃	〃	Q28	0.5×0.4×0.2	0.2	0.1	〃	
6	〃	〃	Q29	0.5×0.5×0.3	0.15	0.1	〃	
7	〃	〃	Q30	0.4×0.45×0.5	0.2	0.1	〃	
8	〃	〃	Q31	0.4×0.4×0.25	0.2	0.1	〃	
9	〃	〃	Q32	0.45×0.45×0.25	0.2	—	〃	
10	〃	〃	Q33	0.5×0.5×0.45	0.2	0.2	〃	
11	〃	〃	Q34	0.5×(0.45)×(0.4)	0.2	—	〃	一部欠損
12	〃	〃	Q35	0.45×0.45×0.3	0.2	0.1	〃	
13	〃	〃	Q36	0.5×0.5×0.4	0.15	0.2	〃	
14	〃	〃	Q37	0.5×0.5×(0.3)	0.15	(0.1)	〃	一部欠損
15	〃	〃	Q38	0.45×0.45×0.3	0.15	0.1	〃	
16	〃	〃	Q39	0.45×0.45×0.25	0.15	0.1	〃	
17	〃	〃	Q40	0.45×0.45×0.3	0.15	0.1	〃	
18	〃	〃	Q41	0.5×0.45×0.35	0.15	0.2	〃	
19	〃	〃	Q42	0.5×0.5×0.4	0.15	0.2	〃	
20	〃	〃	Q43	0.5×0.5×0.25	0.15	0.2	〃	
21	〃	〃	Q44	0.45×0.45×(0.25)	0.15	(0.1)	〃	一部欠損
22	〃	〃	Q45	0.5×0.5×0.28	0.2	0.1	〃	
23	〃	〃	Q46	0.5×0.45×0.22	0.2	0.1	〃	
24	〃	〃	Q47	0.41×0.4×0.31	0.18	0.1	〃	
25	〃	〃	Q48	0.4×0.41×0.19	0.15	—	〃	
26	〃	〃	Q49	0.48×0.48×0.2	0.2	0.1	〃	
27	〃	〃	Q50	0.5×0.5×0.31	0.17	0.1	〃	
28	〃	〃	Q51	0.48×0.48×0.22	0.2	0.1	〃	
29	〃	〃	Q52	0.51×0.51×0.29	0.2	0.1	〃	
30	〃	〃	Q53	0.49×0.49×0.4	0.3	0.1	〃	
31	〃	〃	Q54	0.51×0.51×0.3	0.2	0.1	〃	
32	〃	〃	Q55	0.5×0.5×0.25	0.15	0.1	〃	
33	〃	〃	Q56	(0.5)×(0.45)×(0.2)	0.15	—	〃	一部欠損

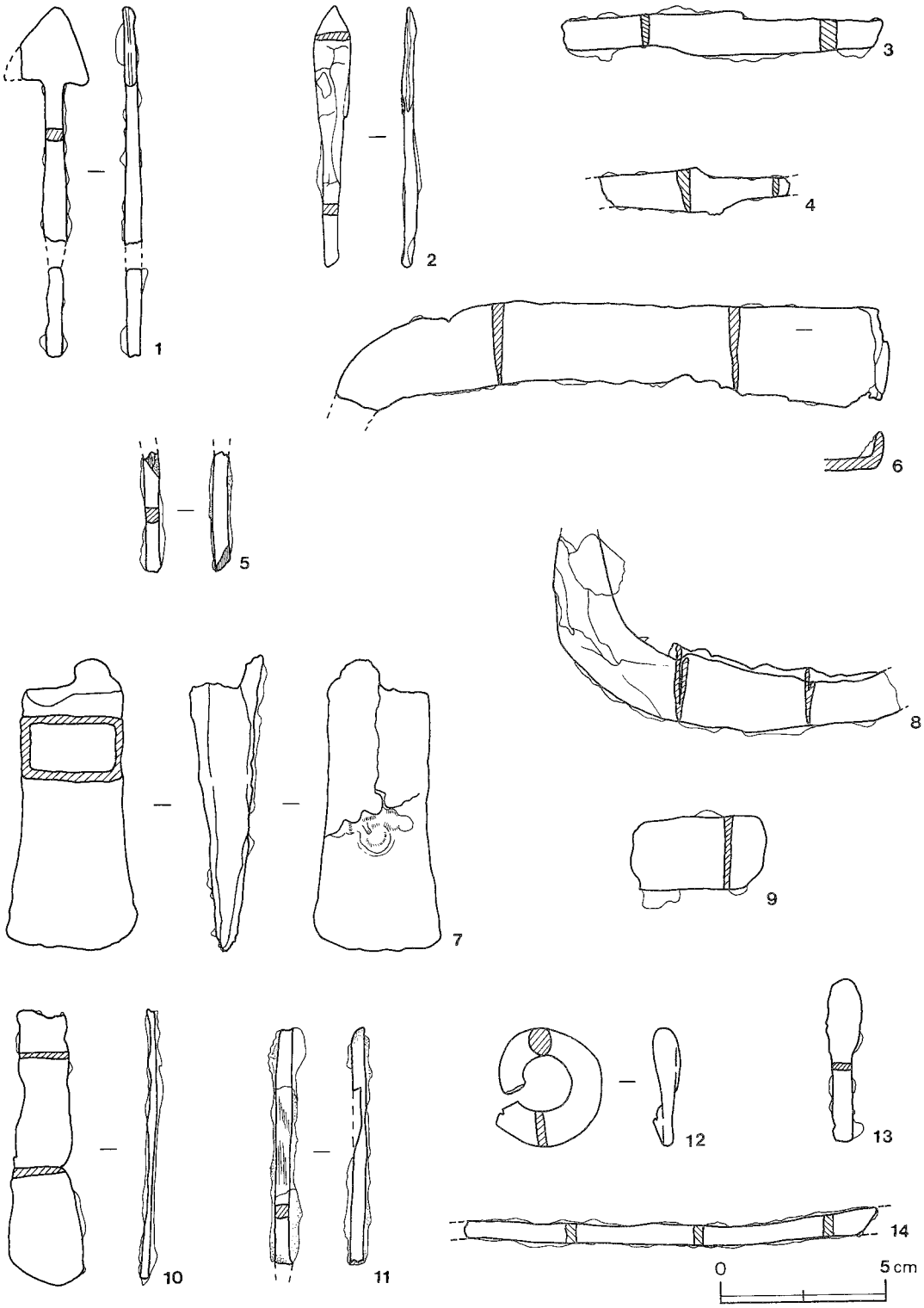
祭祀遺物一覧表

図版番号	名　　称	出土地点	台帳番号	大きさ（cm）長さ×幅×厚さ	孔径(cm)	重量(g)	備　考
第104図 1	紡　錘　車	H15h7	Q16	上径 下径 厚さ 2.7×5.0×1.2	0.8	42.0	滑石 鹿・鳥線刻
2	鏡形模造品	H14b9	Q21	5.2×4.9×0.5	0.3	(21.8)	滑石 一部欠損
3	勾　　玉	H16i3	DP487	(3.5)×2.3×1.2	0.4	(5.4)	〃
4	〃	H15f9	DP499	3.6×2.1×1.0	0.3	6.5	滑石

図版番号	名　　称	出土地点	台帳番号	大きさ（cm）長さ×幅×厚さ	孔径(cm)	重量(g)	備　考
第104図 5	勾　　玉	H15f6	DP507	4.2×1.9×1.2	—	(6.9)	滑石 一部欠損
6	〃	H15h7	Q20	3.9×2.8×0.5	0.15	(3.9)	〃
7	土製環状模造品	H16i2	DP495	2.8×2.7×0.8	1.2	5.0	
8	土製装飾品	H14a3	DP483	(4.7)×2.4×2.2	0.7	(28.8)	一部欠損



第104図　祭祀遺物実測図



第105図　鉄製品実測図

鉄製品一覧表

図版番号	名　称	出土地点	台帳番号	法量（cm）			形態の特徴	備　考
				長さ	幅	厚さ		
第105図1	鉄　鏃	H15h7	M27	(9.9)	(1.9)	0.4	龍舌形平根。	
2	〃	H15d6	M22	(8.0)	1.1	0.35	柳葉形細根。	
3	刀　子	H15e6	M34	(9.8)	1.8	0.5	刀身，茎共に断面厚手。	
4	〃	H16i7	M28	(5.8)	1.3	0.4	刀身,茎の一部。断面厚手。	
5	釘	H16j7	M31	(3.7)	0.4	0.4	断面長方形。	
6	鎌	H14a4	M20	(16.9)	2.6	0.3	柄装着部は直角の突き出し。	
7	鉄　斧	H14a2	M19	(8.0)	4.0	1.0	柄押入部は全周を包覆する。	
8	鍬　先	H15f9	M24	(10.4)	2.0	0.3	「凹」字状の刃部と耳部。	
9	不　明	H15e6	M35	(4.1)	2.5	0.3		
10	〃	H15g6	M25	(8.5)	1.6	0.3	平延の鉄製品。	（刀子）
11	〃	G15e8	M18	(7.3)	0.5	0.3	断面長方形。	（釘）
12	〃	H15g8	M33	径 3.6			環形。断面は円形と潰し形。	
13	〃	H15f8	M36	(5.0)	1.2	0.2	柳葉形細根。	（鉄鏃）
14	〃	〃	M21	(12.6)	0.7	0.3	刀身細小。	（刀子）

5　工房跡

本跡は，現存する村社である尾島神宮の北東裏側境外に位置し，H15h6～H15h8，H15i8区にかけて検出された石製模造品の工房跡で，現地表面は標高５ｍ程の北方に緩傾斜する地区の基部にあたる。本跡は，東西１×８ｍ程の狭い範囲での調査であるため，掘込み遺構を捉えることはできていないが，剥片，石製模造品等の散布の状態等から，遺構の主体はエリア外の南側に延びる屋外の工房跡であると推考できる。

石製模造品は，14点の石製剣形模造品，119点を数える有孔円板，26点の臼玉が精緻に加工されているほか，572点の加工途中及び粗製の石製剣形模造品，95点の加工途中及び粗製の有孔円板や753点の滑石コア，数百点に及ぶ滑石剥片等が出土している。

土層断面は，微量の土師器片を包含している最下層から上層腐蝕土層までが，３層の層畳を成している。中でも，第３層は，極小～小礫を多量に含み，遺物を包含しているしまりのある層であり，第４層の極小～中礫を中量含み，遺物を含有している層と相まって，有孔円板，有孔円板及び石製剣形模造品の破片，滑石剥片の遺存度が高い。

双孔円板（第101図95・116）は，第２層から出土しているが，土壌の性格から耕作による撹乱を受けたものと推察される。第２層の最下面に遺存している双孔円板（第101図124）や臼玉（第103図４）は，H15h7区の第15ユニットから出土している坩形土器（第107図１）と同層からのものである。

H15h7区の第9ユニットの第3層上面から，手捏土器（第107図2）が出土している。第3層中面からは，双孔円板（第101図102･103）と単孔円板（第100図58），臼玉（第103図11・12）等が出土しているが，H15h7区の第15ユニットから出土している椀形土器（第107図4）と同一層からのものである。単孔円板（第100図64）は，隅丸長方形のもので，第3層下面から出土している双孔円板（第100図52，第101図92・93，第102図127）等と同一層からの出土である。第3層の最下面に遺存していた双孔円板（第101図97・109）は，臼玉（第103図13）と同一層からの出土である。

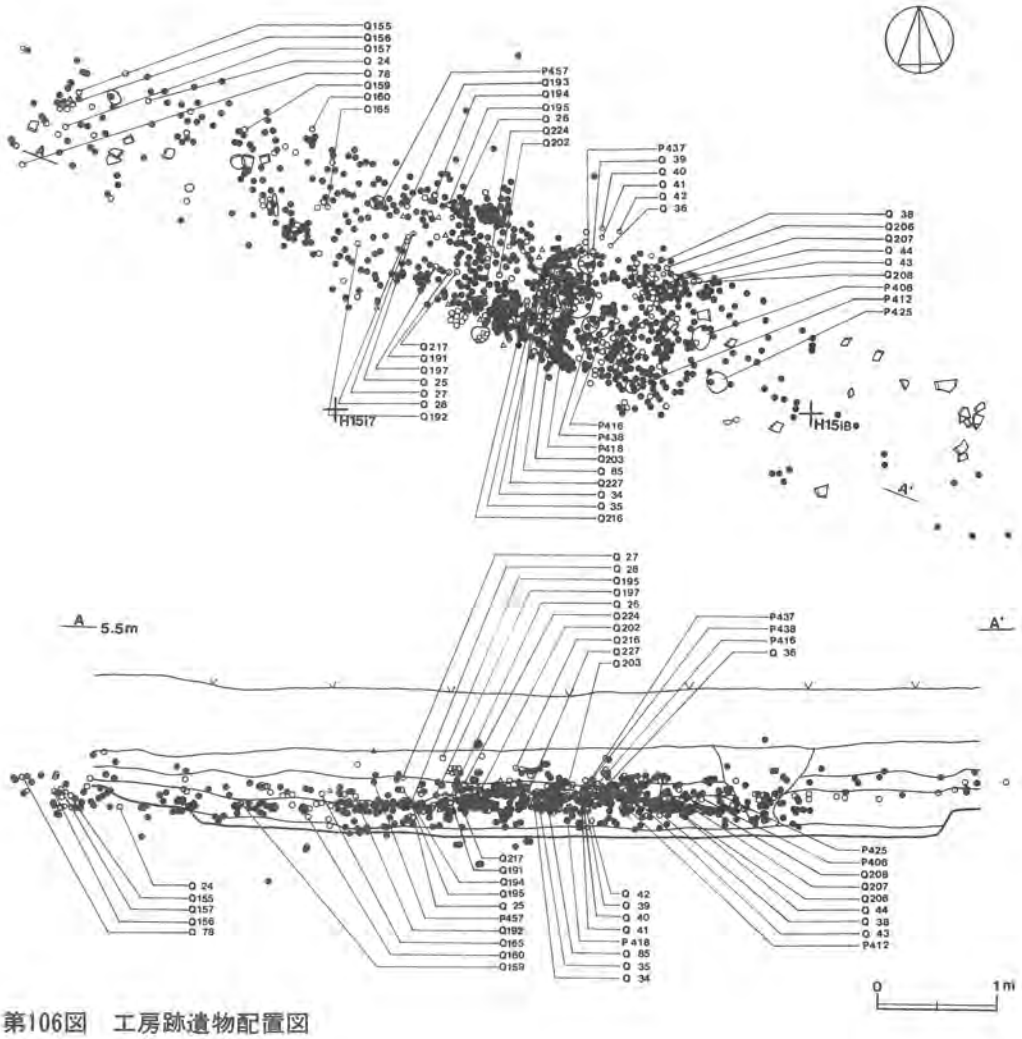
H15h7区の第9ユニットの第3層と第4層の斬移層辺から出土している臼玉（第103図3・5）は，第4層中面から出土した臼玉（第103図2）も含めてのユニットからの出土である。H15h7区の第11ユニットの同一層から出土している臼玉（第103図15）は，第4層上面から出土した臼玉（第103図16・17・18・20），中面から出土している臼玉（第103図21）や下面から出土している臼玉（第103図1・19）等を含めて，本層上面を主体にしたユニットからの出土である。

第4層からは，H15h7区の第16ユニットの上記斬移層辺から高坏形土器（第107図6），双孔円板（第100図46，第101図109）が出土している。若干下がった第4層上面からは，隅丸長方形の双孔円板（第101図91）や円形の双孔円板（第100図43・44，第101図94・107・108）と共に，同ユニットからは坩形土器（第107図7）や坏形土器（第107図8）も出土している。H15h7区の第15ユニットの第4層中面からは，坩形土器（第107図5）双孔円板（第101図106）が出土している。坩形土器（第107図3）は，H15h7区の第10ユニットの本層下面から出土している。

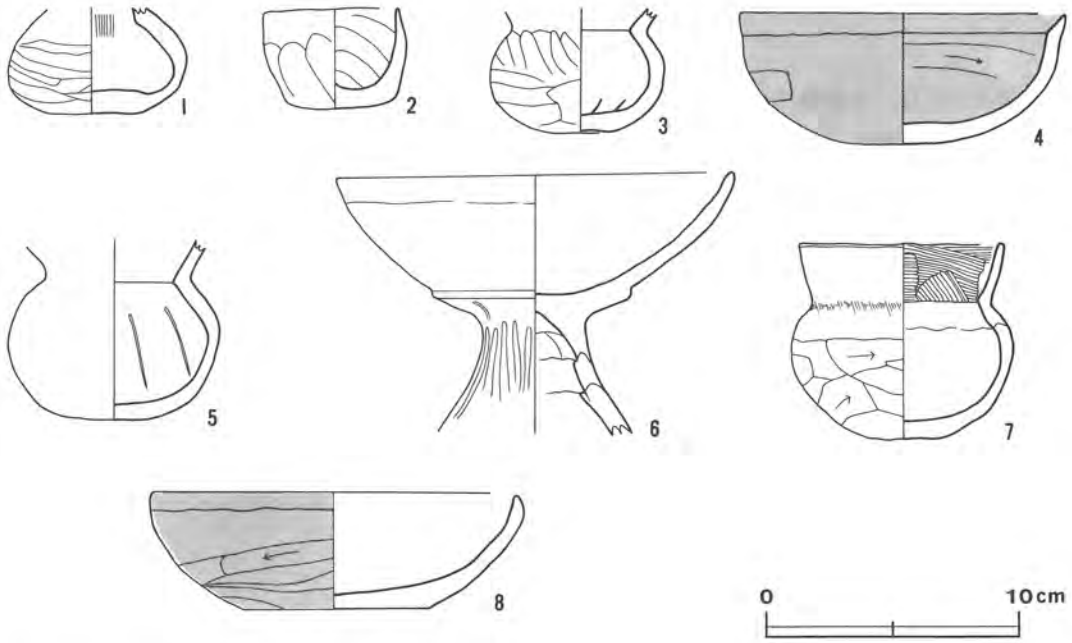
工房跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第107図 1	坩形土器 土師器	B（4.2） C 3.8	平底。底部強く外傾する。胴部は，強く内彎し，胴下位に最大径をもつややつぶれた球形を呈する。頸部以上欠損。	胴部から底部にかけてヘラナデ。内面はナデ。	砂粒・スコリア・長石 にぶい橙色 普通	H15h7-15 80% P416
2	小型 手捏土器 土師器	A 5.3 B 4.0 C 4.4	平底。底部はやや引き締まり，胴部から口縁部にかけては内彎しながら立ち上がる。	口縁から底部にかけては，指頭痕を残す粗雑な手捻り成形。内面も指痕を残すナデ。	砂粒・スコリア・礫 黒褐色・普通	H15h7-9 90% P457
3	坩形土器 土師器	B（5.0） C 2.4	丸底でわずかにくぼむ。胴部は扁平な球状を呈し，口縁部は直線的に開いている。	胴部内面横ナデ。口縁部内外面横ナデ後，縦ヘラ磨き。胴部外面横ナデヘラ削り後横ヘラ磨き。	砂粒 橙色 普通	H15h7-10 80% P418
4	椀形土器 土師器	A 12.9 B 5.3 C（－）	底部は丸味をもって立ち上がり胴部上位は直立する。口縁部は強く外反し，内面に稜を有する。	口縁部内外面ともに横ナデ，胴部から底部にかけてヘラ削り後ヘラ磨きを施す。器内外面朱塗り。	砂粒・雲母 赤色 普通	H15h7-15 100% P438
5	坩形土器 土師器	B（7.2） C 3.2	小径の平底より丸味を帯びて胴部上位で最大径を示す。頸部は引き締まり口縁部は欠損しているが大きく開くと思われる。	口縁部，胴上位外面共に横ナデ。胴下位は粗雑なナデ。	砂粒・雲母 にぶい赤褐色 普通	H15h7-15 80% P412

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
6	高坏形土器 土師器	A 16.0 B (10.5)	脚部下位欠損。脚部は接合部より外反して裾部に向かう。坏部は内彎気味に大きく広がり，下位に明確な稜を有する。	口縁部横ナデ。坏部は縦のナデ。脚部はヘラ磨き。坏内面ヘラ磨きの後，上位に横ナデ調整を施す。脚内面に粘土紐巻き上げ痕を残す。	砂粒・長石・石英・礫 橙色 普通	H15h7-16 60% P425
7	坩形土器 土師器	A 8.2 B 7.8 C 2.6	平底。底部から胴部にかけては内彎して立ち上がり，球形を呈する。頸部から口縁部にかけては「く」の字状に立ち上がり，口縁部はわずかに内彎する。	口縁部横ナデ，頸部にハケ目を残す。胴部から底部にかけてはヘラ削り。口縁部内面はハケ目調整。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	H15h7-15 100% P406
8	坏形土器 土師器	A 14.6 B 4.7 C 7.5	平底。体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は短く直立する。	口縁部内，外面横ナデ。体部外面ヘラ削り，内面横ナデ。朱塗り。	砂粒・礫・長石 赤色 普通	H15h7-11 100% P437



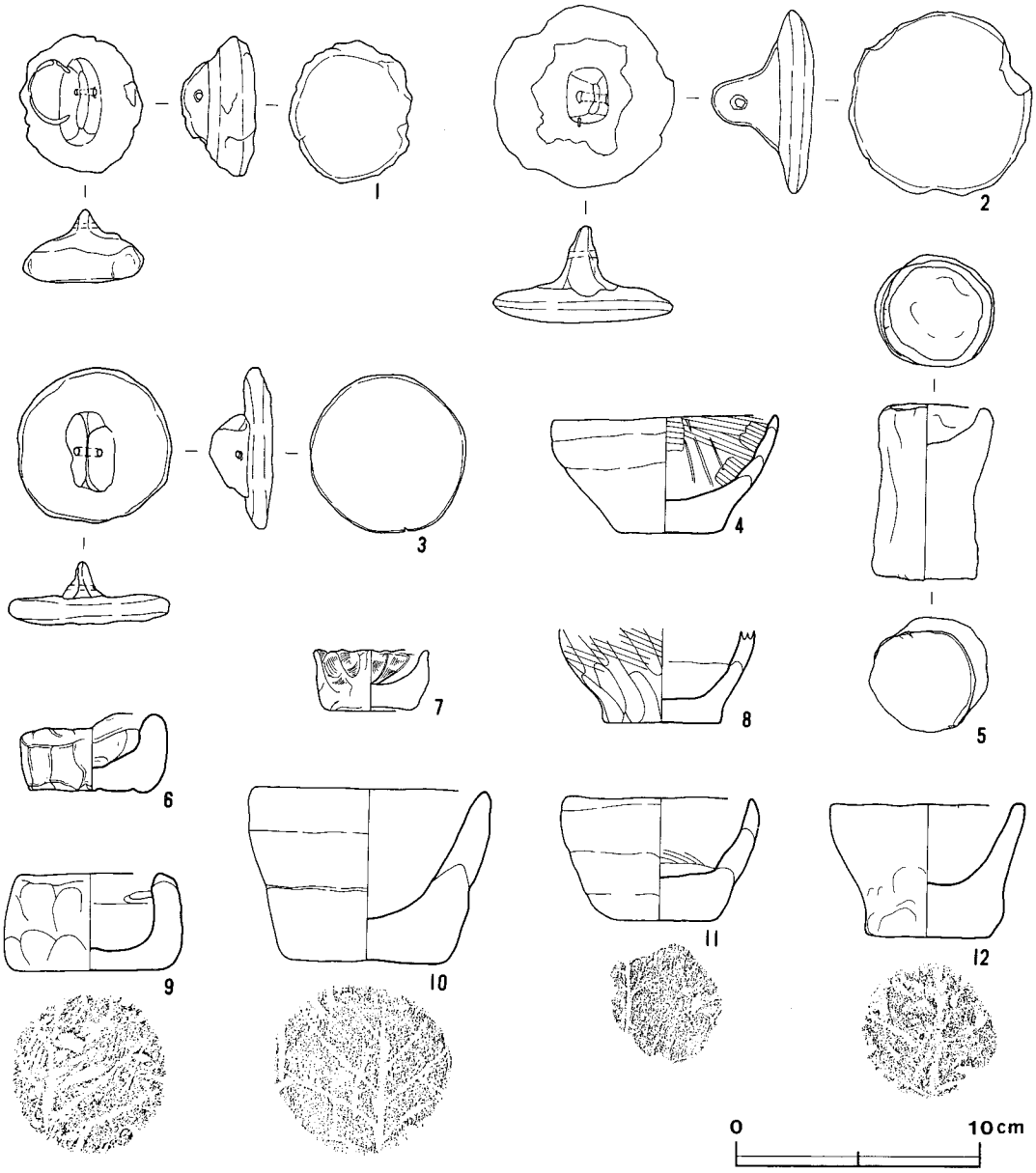
第106図　工房跡遺物配置図



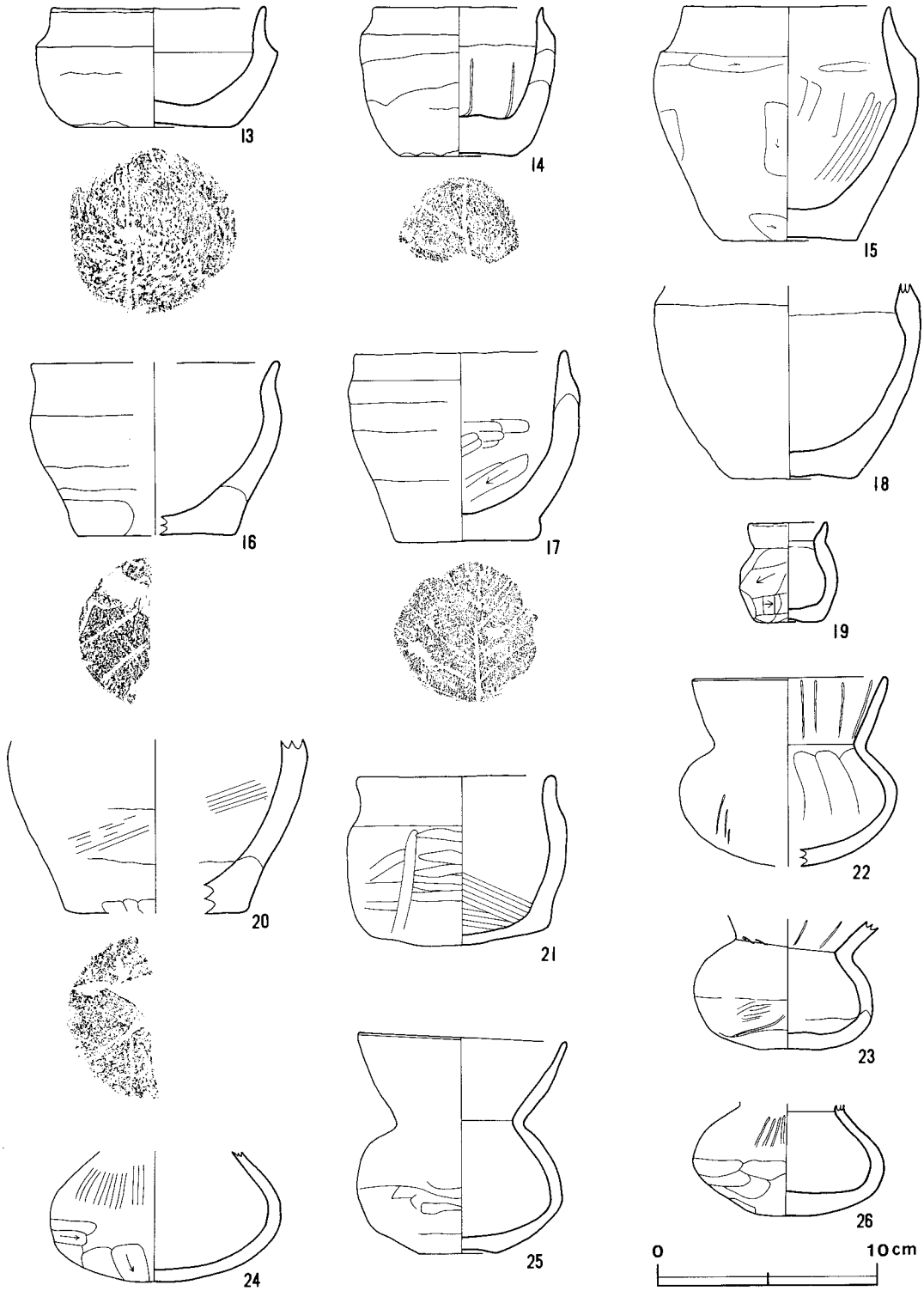
第107図　工房跡出土遺物実測図

6　遺構に伴わない出土遺物

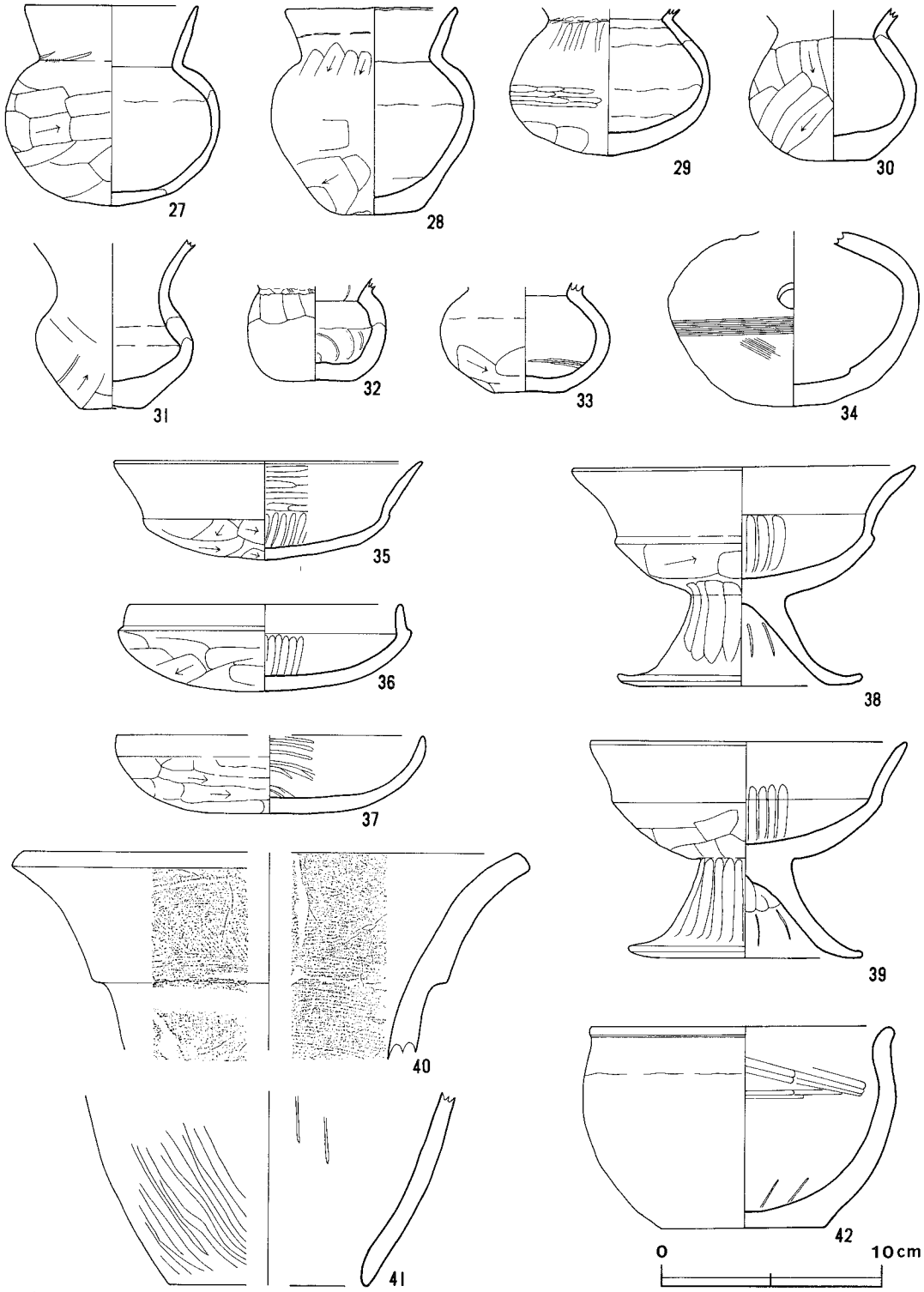
当遺跡からは，土師器片・須恵器片・土製品・土製模造品等が出土している。本項では，土器については実測図を，石製品７点，土製品306点については実測図と一部の解説表を添付した。



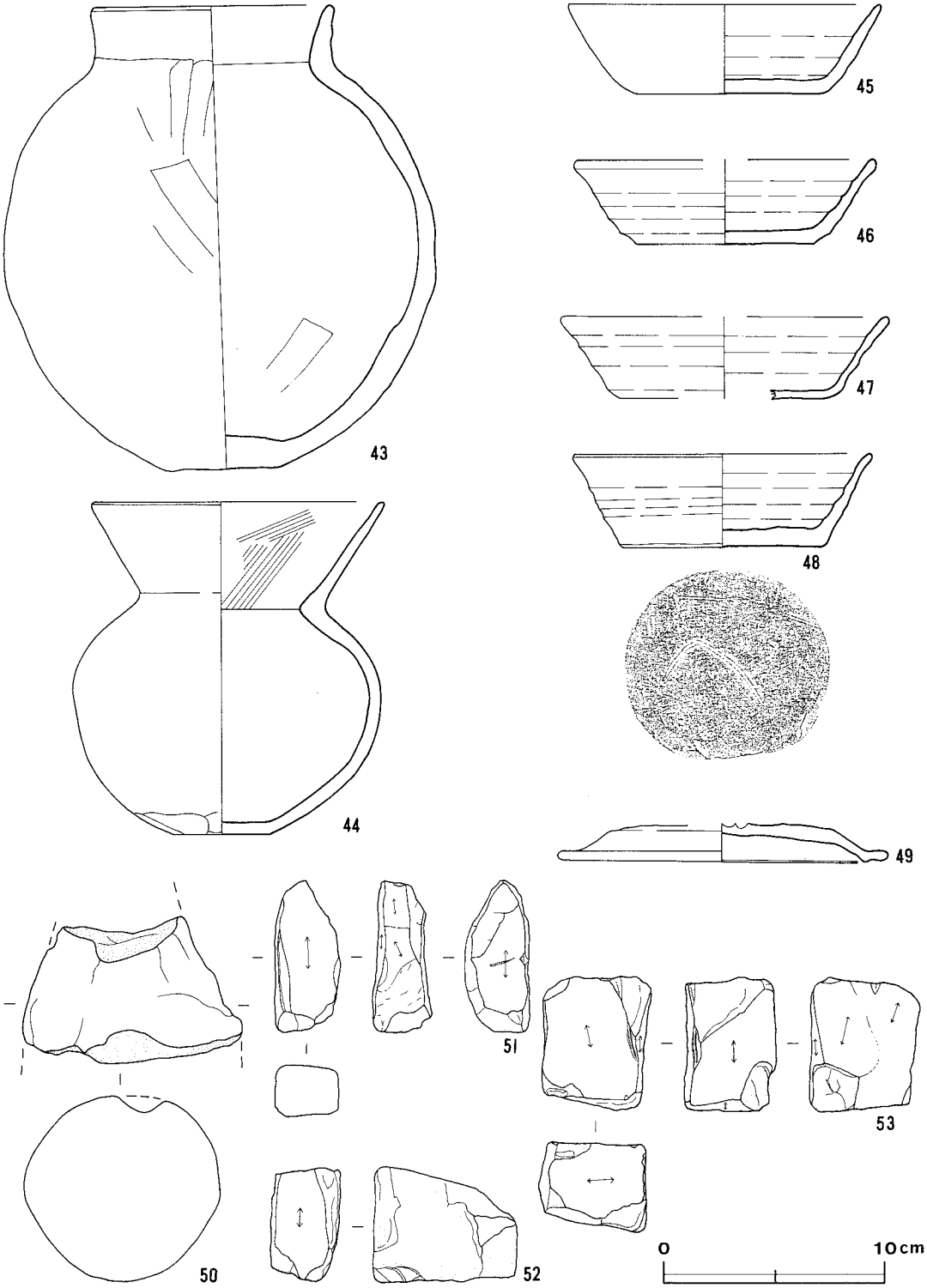
第108図　遺構外出土遺物実測図（１）



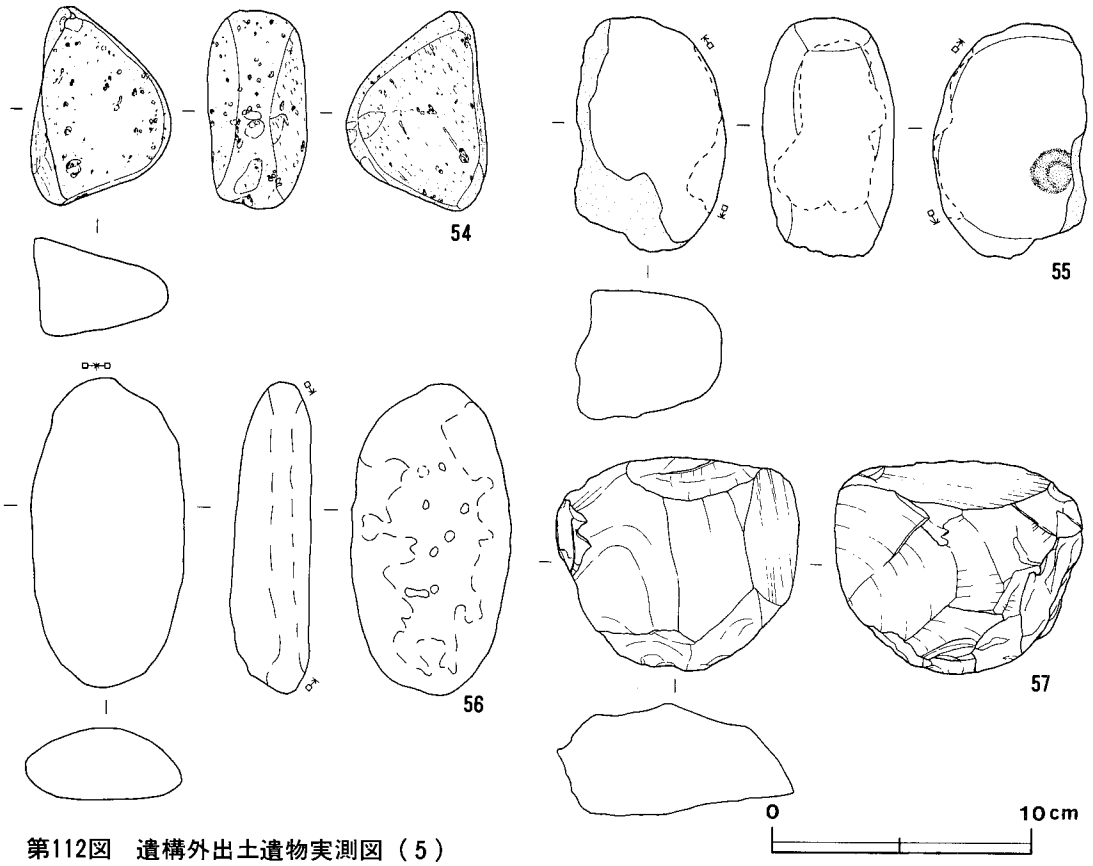
第109図　遺構外出土遺物実測図（２）



第110図　遺構外出土遺物実測図（３）



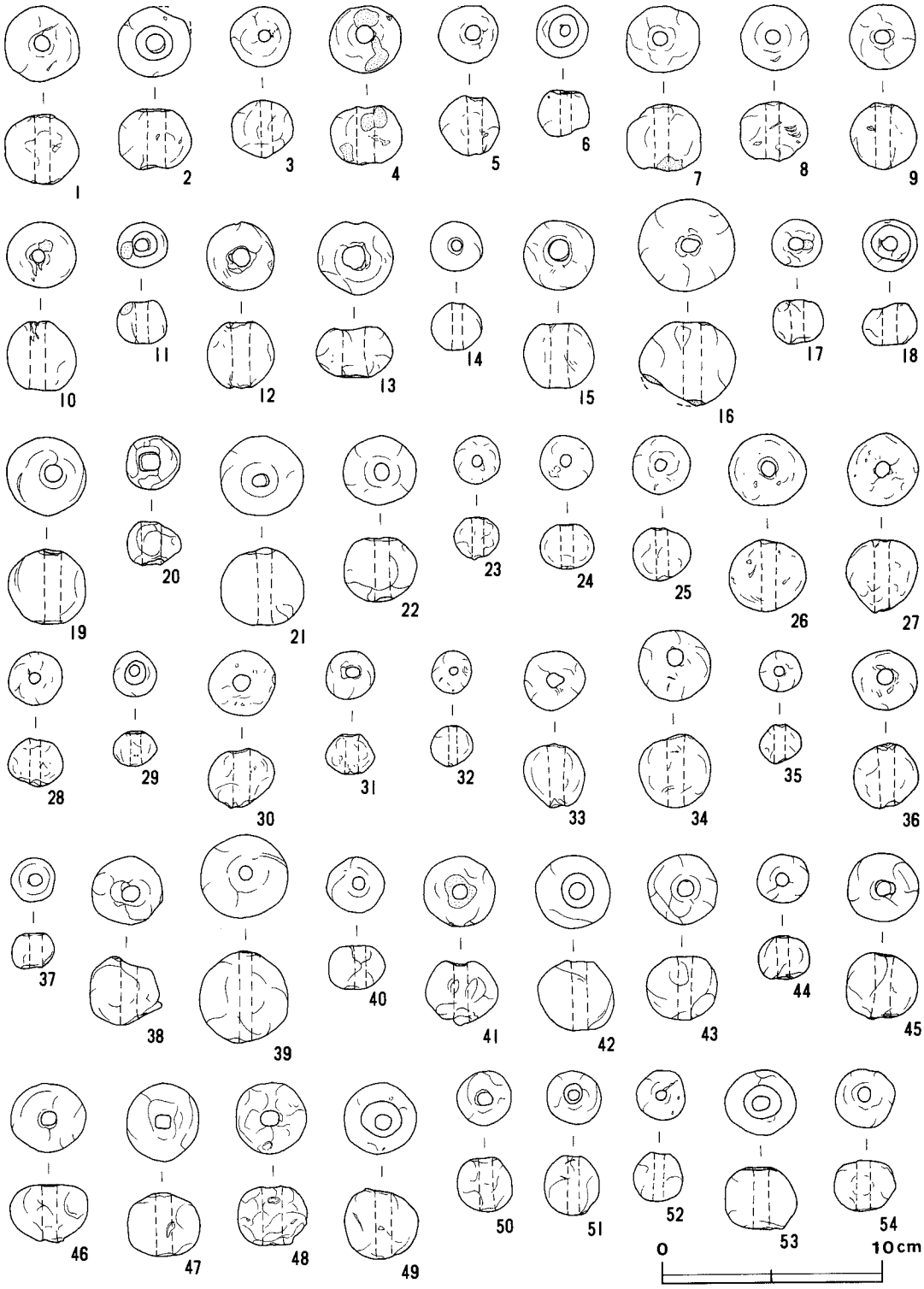
第111図　遺構外出土遺物実測図（４）



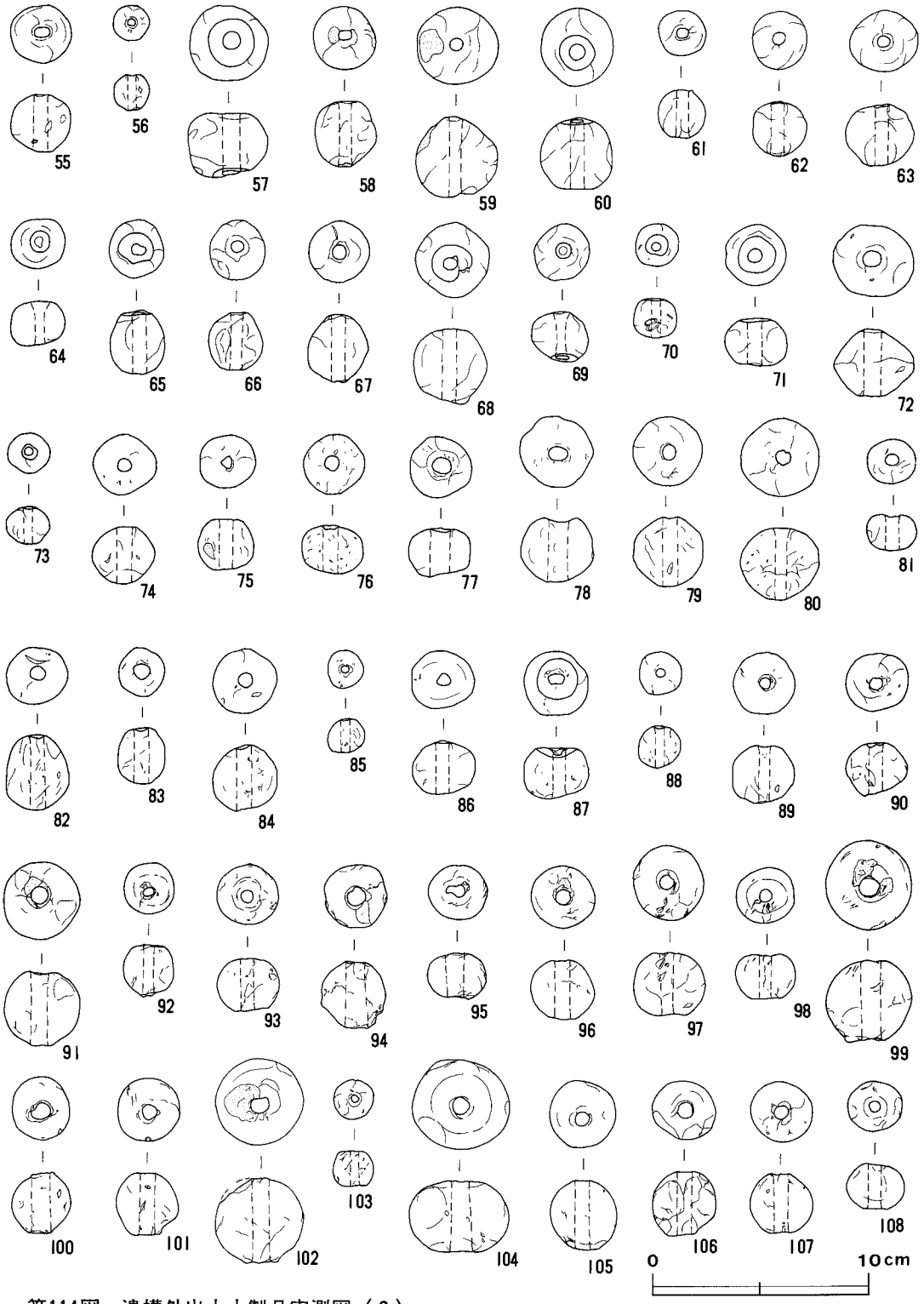
第112図　遺構外出土遺物実測図（５）

遺構外出土土製品一覧表

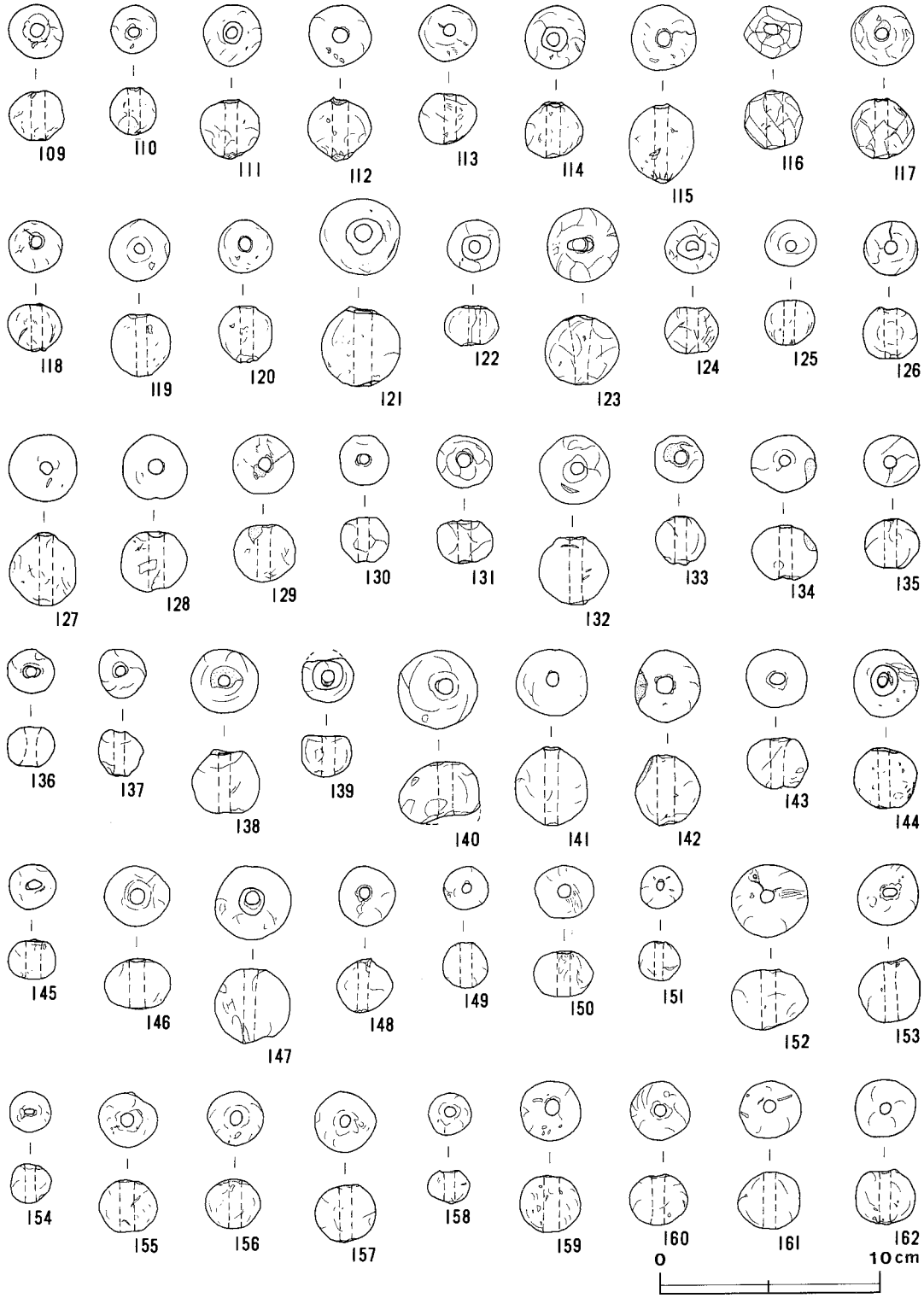
図版番号	名　　称	出土地点	台帳番号	長さ×幅(cm)	孔径(cm)	重量(ｇ)	備　考
第113図 1	球状土錘	H14a1	ＤＰ188	3.3×3.5	0.7	36.5	
2	〃	H14a2	ＤＰ189	2.8×3.4	0.8	(26.0)	一部欠損
3	〃	〃	ＤＰ190	2.2×2.8	0.5	18.5	
4	〃	〃	ＤＰ191	2.7×3.3	0.8	(24.3)	一部欠損
5	〃	〃	ＤＰ192	2.8×2.8	0.7	(17.5)	〃
6	〃	H14a3	ＤＰ193	2.2×2.4	0.4	12.7	
7	〃	H14a4	ＤＰ194	3.1×3.4	0.7	(31.4)	一部欠損
8	〃	〃	ＤＰ195	2.8×3.1	0.6	25.1	
9	〃	H14a6	ＤＰ196	3.1×3.1	0.7	26.7	
10	〃	H14b2	ＤＰ197	3.3×3.3	0.7	28.9	
11	〃	H14b4	ＤＰ198	2.0×2.3	0.6	7.4	
12	〃	H14b5	ＤＰ199	3.0×3.2	1.0	27.0	
13	〃	〃	ＤＰ200	2.3×3.5	1.3	(23.2)	一部欠損
14	〃	H14b6	ＤＰ201	2.2×2.4	0.5	9.9	



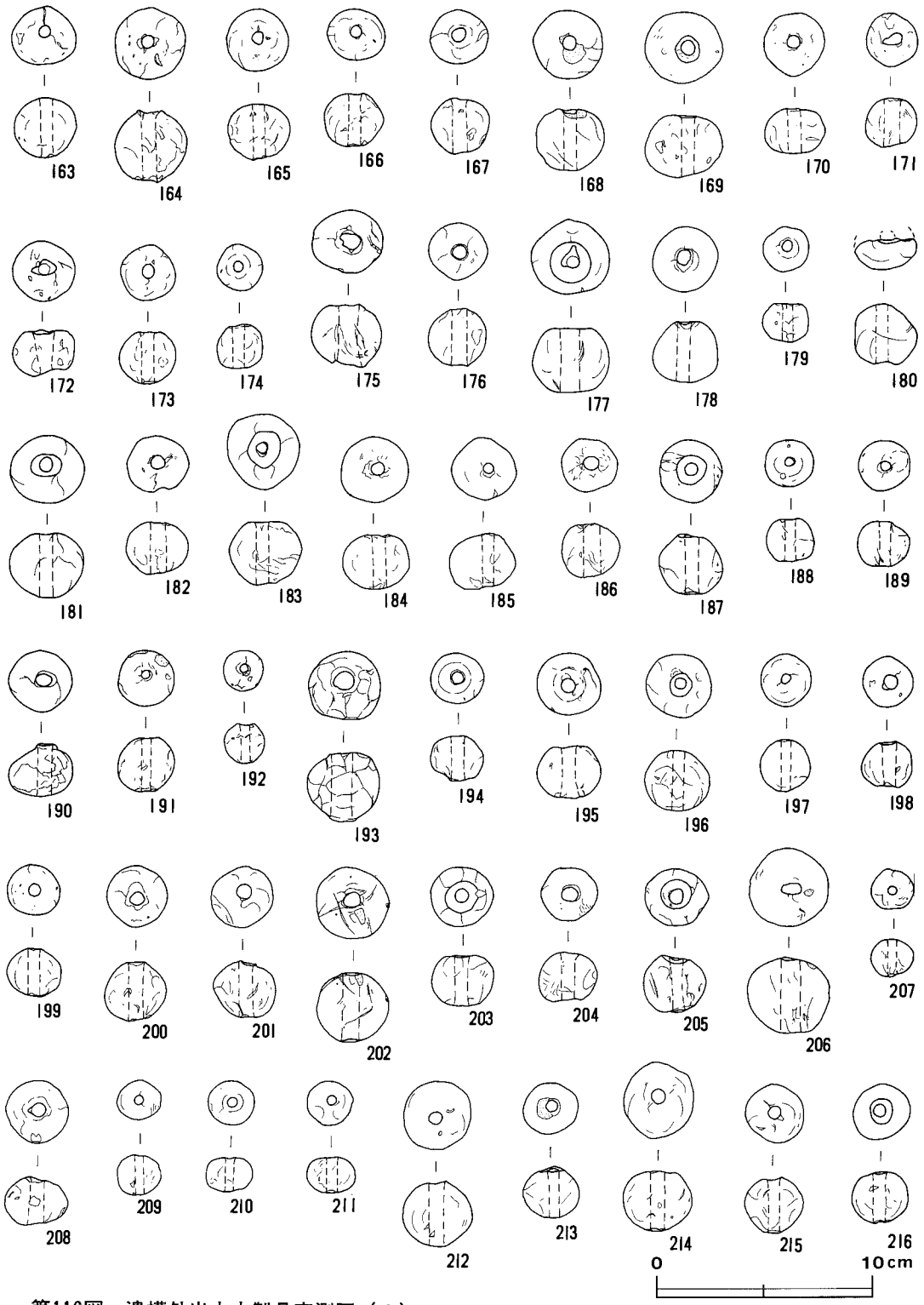
第113図　遺構外出土土製品実測図（１）



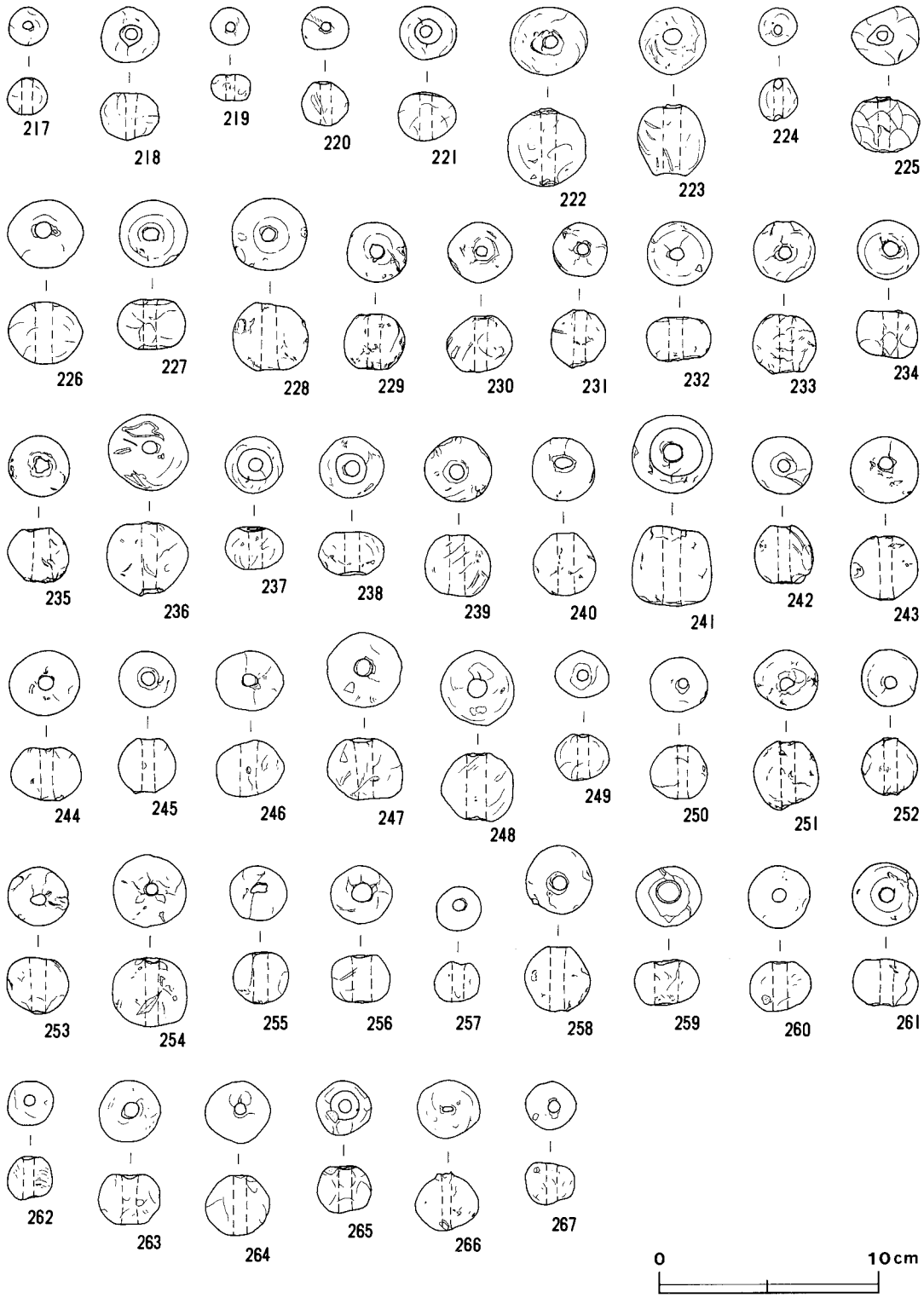
第114図　遺構外出土土製品実測図（２）



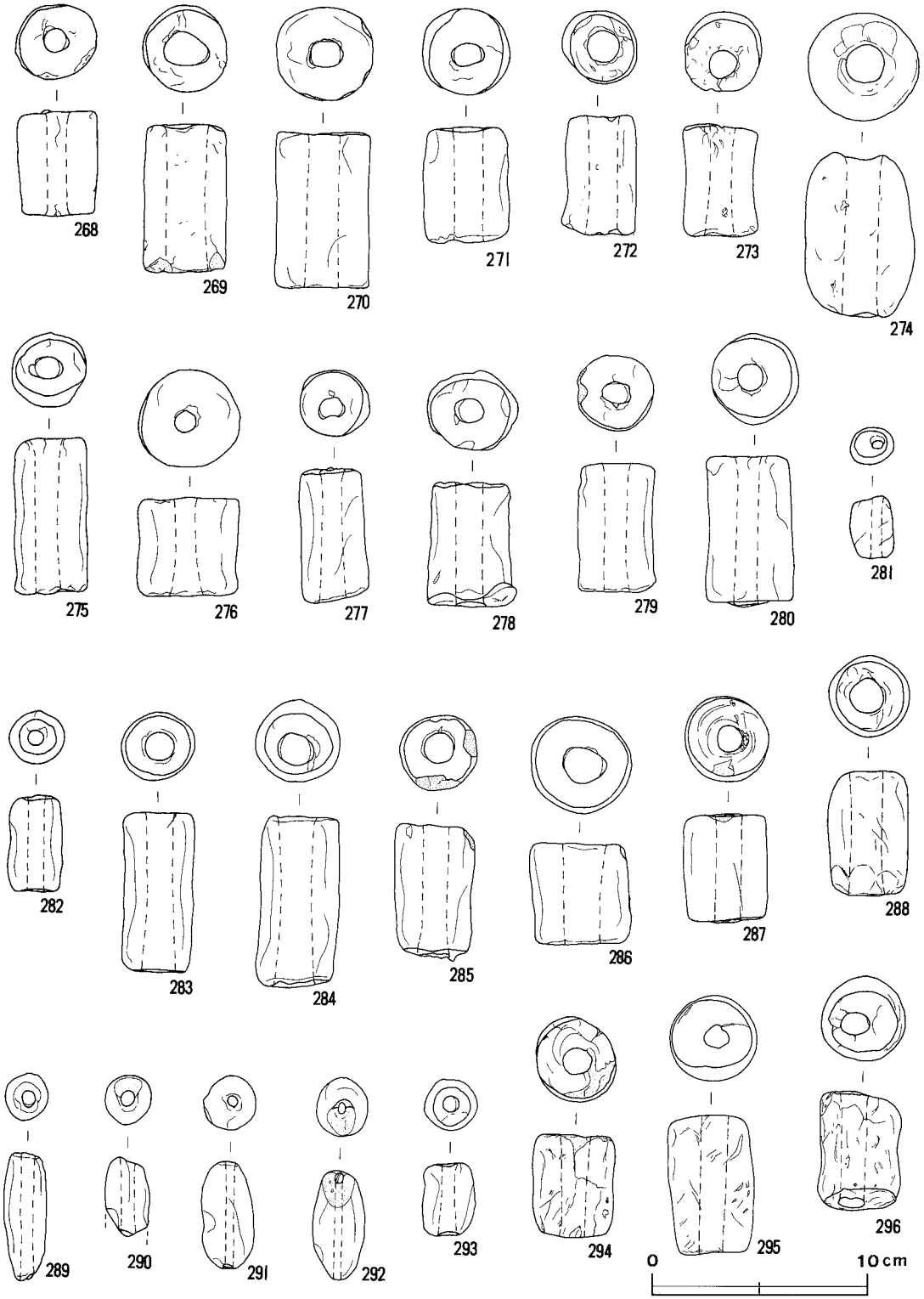
第115図　遺構外出土土製品実測図（３）



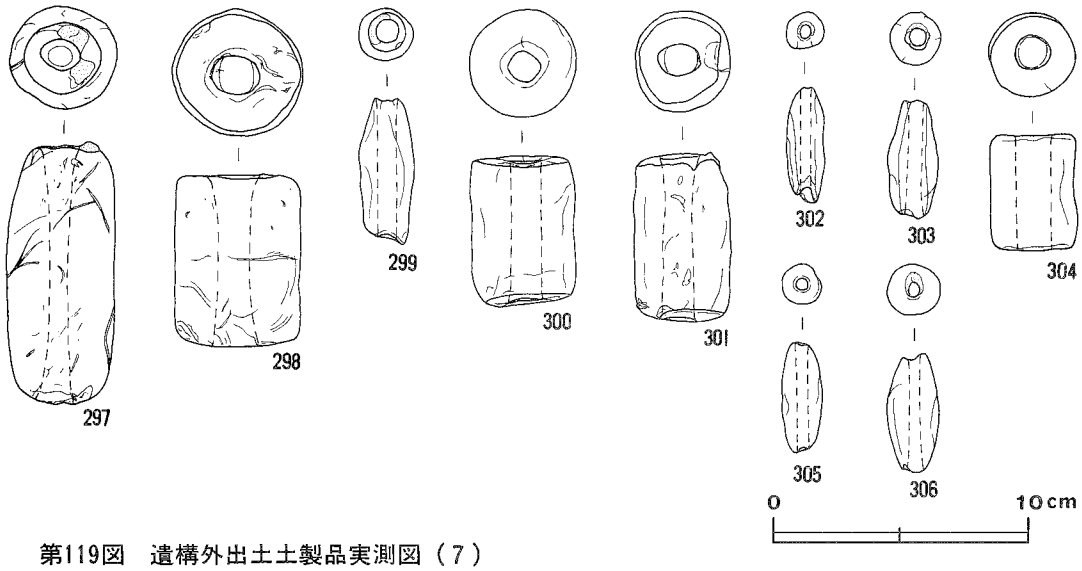
第116図　遺構外出土土製品実測図（４）



第117図　遺構外出土土製品実測図（５）



第118図　遺構外出土土製品実測図（６）



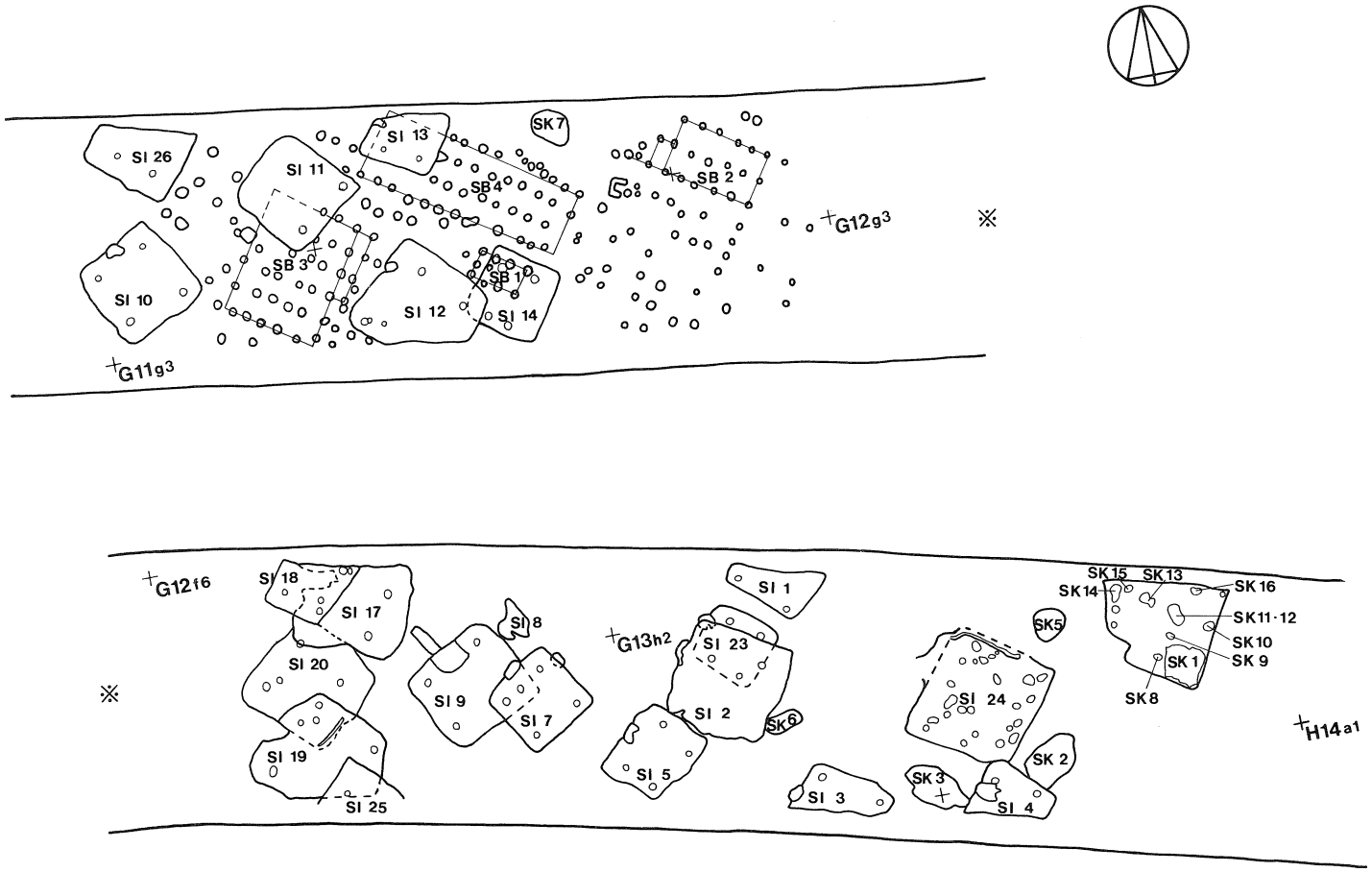
第119図　遺構外出土土製品実測図（7）

図版番号	名　　称	出土地点	台帳番号	長さ×幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)	備　考
第113図 15	球状土錘	H14b7	DP203	3.0×3.4	1.0	28.2	
16	〃	H14b9	DP202	(3.9)×4.5	0.8	(62.4)	一部欠損
17	〃	H14b0	DP204	2.0×2.3	0.7	8.4	
18	〃	〃	DP205	1.9×2.5	0.7	10.7	
19	〃	H14c9	DP206	3.5×3.7	0.8	44.8	
20	〃	H14d9	DP207	2.1×2.5	0.9	9.4	
21	〃	H14j1	DP208	3.6×3.8	0.7	51.5	
22	〃	〃	DP209	3.1×3.3	0.7	30.9	
23	〃	H15d4	DP213	2.0×2.3	0.5	8.9	
24	〃	H15d5	DP210	2.2×2.5	0.6	11.4	
25	〃	〃	DP211	2.5×2.8	0.6	16.8	
26	〃	〃	DP212	3.4×3.5	0.6	35.8	
27	〃	〃	DP214	3.4×3.4	0.9	31.5	
28	〃	〃	DP215	(2.3)×(2.5)	0.5	(11.3)	一部欠損
29	〃	〃	DP216	1.7×2.1	0.5	5.7	
30	〃	〃	DP217	2.8×3.1	0.7	21.0	
第113図 31	〃	〃	DP218	1.9×2.3	0.7	9.2	
32	〃	〃	DP219	1.9×2.0	0.4	6.4	
33	〃	〃	DP220	3.0×2.9	0.8	22.0	
34	〃	〃	DP221	3.4×3.4	0.7	35.1	
35	〃	H15d6	DP222	1.8×1.9	0.7	5.8	
36	〃	〃	DP223	3.0×3.0	0.6	22.1	
37	〃	H15e2	DP224	1.6×2.0	0.6	6.1	

図版番号	名　　称	出土地点	台帳番号	長さ×幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)	備　考
第113図 38	球状土錘	H15e2	DP225	3.2×3.3	0.8	29.9	
39	〃	〃	DP226	4.4×4.0	0.6	62.8	
40	〃	H15e5	DP227	2.0×2.7	0.6	13.4	
41	〃	〃	DP228	3.1×3.3	0.7	27.7	
42	〃	〃	DP229	3.3×3.5	0.7	35.7	
43	〃	〃	DP230	2.9×3.3	0.7	26.8	
44	〃	〃	DP231	2.0×2.3	0.5	9.1	
45	〃	〃	DP232	3.1×3.2	0.9	32.9	
46	〃	〃	DP233	2.7×3.5	0.7	27.9	
47	〃	〃	DP234	3.0×3.6	0.7	31.3	
48	〃	〃	DP235	2.8×3.3	1.0	27.2	
49	〃	〃	DP236	3.3×3.4	0.7	36.0	
50	〃	H15e6	DP237	2.5×2.5	0.7	15.2	
51	〃	〃	DP238	2.8×2.5	0.5	17.6	
52	〃	〃	DP239	2.3×2.3	0.5	11.1	
53	〃	〃	DP240	2.9×3.3	0.7	29.8	
54	〃	〃	DP241	2.4×2.8	0.6	16.5	
第114図 55	〃	H15e7	DP242	2.7×2.8	0.6	18.7	
56	〃	〃	DP243	1.7×1.7	0.4	4.0	
57	〃	〃	DP244	3.0×3.7	0.8	42.4	
58	〃	〃	DP245	3.0×2.9	0.6	25.9	
59	〃	〃	DP246	3.8×3.7	0.6	(47.0)	一部欠損
60	〃	〃	DP247	3.3×3.6	0.7	38.8	
61	〃	〃	DP248	2.3×2.2	0.5	11.1	
62	〃	〃	DP249	2.5×2.7	0.6	15.8	
63	〃	〃	DP250	2.9×3.0	0.5	23.1	
64	〃	〃	DP251	2.0×2.5	0.4	12.5	
65	〃	〃	DP252	3.0×2.7	0.6	19.3	
66	〃	〃	DP253	2.6×2.8	0.5	(19.4)	一部欠損
67	〃	H15e8	DP254	3.2×2.9	0.6	(21.6)	〃
68	〃	〃	DP255	3.5×3.5	0.6	37.8	
69	〃	〃	DP256	2.4×2.7	0.4	13.4	
70	〃	〃	DP257	1.8×2.0	0.4	7.3	
71	〃	〃	DP258	2.3×2.8	0.6	18.8	
72	〃	〃	DP259	3.2×3.6	0.8	30.9	
73	〃	〃	DP260	1.8×2.0	0.4	5.8	
74	〃	H15f3	DP261	2.7×3.0	0.7	20.3	
75	〃	H15f4	DP262	2.4×2.7	0.7	15.2	
76	〃	〃	DP263	2.1×2.9	0.7	14.0	
77	〃	〃	DP264	2.2×2.8	0.9	18.4	
78	〃	〃	DP265	2.5×3.4	0.9	34.5	

図版番号	名　　称	出土地点	台帳番号	長さ×幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)	備　考
第114図 79	球状土錘	H15f5	DP266	3.3×3.3	0.7	32.1	
80	〃	〃	DP267	3.3×3.7	0.5	44.5	
81	〃	〃	DP268	1.7×2.2	0.6	7.4	
82	〃	〃	DP269	3.5×2.9	0.7	25.8	
83	〃	H15f6	DP270	2.7×2.3	0.7	11.8	
84	〃	〃	DP271	3.1×3.0	0.7	26.4	
85	〃	H15f8	DP272	1.5×1.8	0.4	4.5	
86	〃	〃	DP273	2.5×2.9	0.6	17.5	
87	〃	〃	DP274	2.4×3.0	0.5	21.8	
88	〃	H15f9	DP275	2.0×2.1	0.4	8.2	
89	〃	〃	DP276	2.7×2.9	0.5	23.4	
90	〃	〃	DP277	2.5×2.8	0.6	(16.8)	一部欠損
91	〃	H15g5	DP278	3.4×3.7	0.8	(38.6)	〃
92	〃	H15g6	DP279	2.4×2.4	0.5	12.1	
93	〃	〃	DP280	2.5×2.9	0.6	19.0	
94	〃	〃	DP281	3.2×3.0	1.1	23.7	
95	〃	〃	DP282	2.1×3.1	0.8	13.8	
96	〃	〃	DP283	2.8×2.9	0.7	22.7	
97	〃	〃	DP284	3.0×3.5	0.6	35.1	
98	〃	〃	DP285	(2.1)×2.8	0.5	(15.4)	
99	〃	〃	DP287	(3.8)×4.2	0.9	(56.0)	一部欠損
100	〃	H15g7	DP286	2.8×3.0	0.9	18.8	
101	〃	〃	DP288	3.0×3.0	0.7	22.9	
102	〃	〃	DP289	4.0×4.1	0.8	(54.6)	一部欠損
103	〃	H15g8	DP290	1.6×1.9	0.4	5.3	
104	〃	〃	DP291	3.3×4.5	1.1	63.1	
105	〃	〃	DP292	3.3×3.2	0.7	29.0	
106	〃	〃	DP294	3.0×3.0	0.7	24.0	
107	〃	〃	DP295	2.8×2.9	0.7	21.4	
108	〃	H15g9	DP293	2.1×2.6	0.5	12.3	
第115図 109	〃	H15g0	DP296	2.3×2.5	0.7	12.8	
110	〃	H15h6	DP297	2.3×2.2	0.5	9.8	
111	〃	〃	DP298	2.8×2.8	0.7	21.8	
112	〃	〃	DP299	2.9×2.9	0.7	20.3	
113	〃	〃	DP300	2.4×2.7	0.6	14.5	
114	〃	〃	DP301	2.6×2.9	0.6	18.9	
115	〃	〃	DP302	3.6×3.1	0.6	34.1	
116	〃	H15h7	DP303	2.8×2.6	0.8	16.0	
117	〃	〃	DP304	2.8×2.9	0.7	22.6	
118	〃	〃	DP305	2.3×2.6	0.5	12.3	
119	〃	〃	DP306	2.8×2.9	0.5	24.0	

図版番号	名　　称	出土地点	台帳番号	長さ×幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)	備　考
第115図 120	球状土錘	H15h7	DP307	2.7×2.5	0.6	15.8	
121	〃	〃	DP308	3.7×3.5	0.9	43.7	
122	〃	〃	DP309	1.9×2.5	0.5	9.6	
123	〃	〃	DP310	3.3×3.5	1.1	36.5	
124	〃	H15h8	DP311	2.3×2.5	0.5	12.4	
125	〃	H15h0	DP312	2.1×2.3	0.5	9.7	
126	〃	〃	DP187	2.4×2.5	0.6	13.1	
127	〃	H16g1	DP313	3.4×3.1	0.6	33.3	
128	〃	H16g3	DP314	2.8×3.1	0.7	21.4	
129	〃	〃	DP315	2.7×2.8	0.6	(20.4)	一部欠損
130	〃	H16h1	DP140	2.1×2.3	0.5	10.1	
131	〃	〃	DP141	2.0×2.6	0.6	12.0	
132	〃	〃	DP142	3.1×3.3	0.6	31.0	
133	〃	〃	DP143	2.3×2.3	0.5	(9.2)	一部欠損
134	〃	〃	DP144	(2.6)×3.0	0.5	(17.8)	〃
135	〃	〃	DP145	2.3×2.5	0.5	12.6	
136	〃	〃	DP146	1.9×2.1	0.7	7.0	
137	〃	〃	DP147	2.1×2.3	0.6	7.2	
138	〃	〃	DP148	3.0×3.1	0.5	28.1	
139	〃	〃	DP149	1.9×2.4	0.6	(9.1)	一部欠損
140	〃	〃	DP150	(2.8)×3.7	0.7	(34.5)	〃
141	〃	H16h2	DP316	3.6×3.4	0.6	37.3	
142	〃	H16h4	DP171	3.3×3.4	0.8	(33.4)	一部欠損
143	〃	H16h6	DP317	2.4×2.7	0.6	16.5	
144	〃	H16i1	DP152	2.8×3.1	0.5	25.6	
145	〃	H16i2	DP320	1.8×2.2	0.7	7.0	
146	〃	〃	DP321	2.3×3.1	0.7	18.8	
147	〃	〃	DP322	3.5×3.6	0.5	38.7	
148	〃	〃	DP151	2.5×2.8	0.5	17.0	
149	〃	〃	DP185	2.1×2.1	0.5	8.4	
150	〃	H16i3	DP318	2.2×2.8	0.6	13.9	
151	〃	〃	DP153	1.9×2.0	0.4	6.4	
152	〃	〃	DP155	2.9×3.5	0.7	29.1	
153	〃	〃	DP156	3.0×2.9	0.6	20.2	
154	〃	〃	DP157	1.8×2.0	0.4	6.9	
155	〃	〃	DP158	2.4×2.7	0.7	14.8	
156	〃	〃	DP172	2.4×2.5	0.6	14.1	
157	〃	H16i4	DP159	2.7×2.8	0.6	19.0	
158	〃	〃	DP160	1.6×2.0	0.5	5.5	
159	〃	〃	DP161	2.7×2.8	0.7	18.6	
160	〃	〃	DP162	2.4×2.8	0.6	16.6	



第120図　宮の脇遺跡全体図

第6章　宮の脇遺跡

第1節　遺跡の概要

当遺跡は，茨城県稲敷郡桜川村大字浮島字宮の脇5467番地ほかに所在し，浮島の東端部，標高約5～6mほどの砂洲上の台地に位置する。水田との比高は1.5mほどである。当遺跡を挟んで東側に尾島貝塚が，西側に後九郎兵衛遺跡がそれぞれ農道を隔てて所在する。

今回の調査エリアは，尾島神社の西側を通る農道から西側へ長さ約112m，幅約14mを計り，調査面積は2,009m²である。遺構は，遺跡の全域から検出され，住居跡は26号まで通し番号を付し調査したが，内4軒が調査の過程で住居跡ではなくなり欠番となった。

竪穴住居跡　22軒　（古墳時代・奈良時代・平安時代）

掘立柱状建築跡4棟　（古墳時代）

土　　坑　16基

当遺跡からの出土遺物は，古墳時代中期から後期にかけての土師器を中心に，須恵器の坏，土製品として球状土錘や管状土錘，石製の紡錘車・剣形模造品・有孔円板などで，球状土錘は多量に出土している。

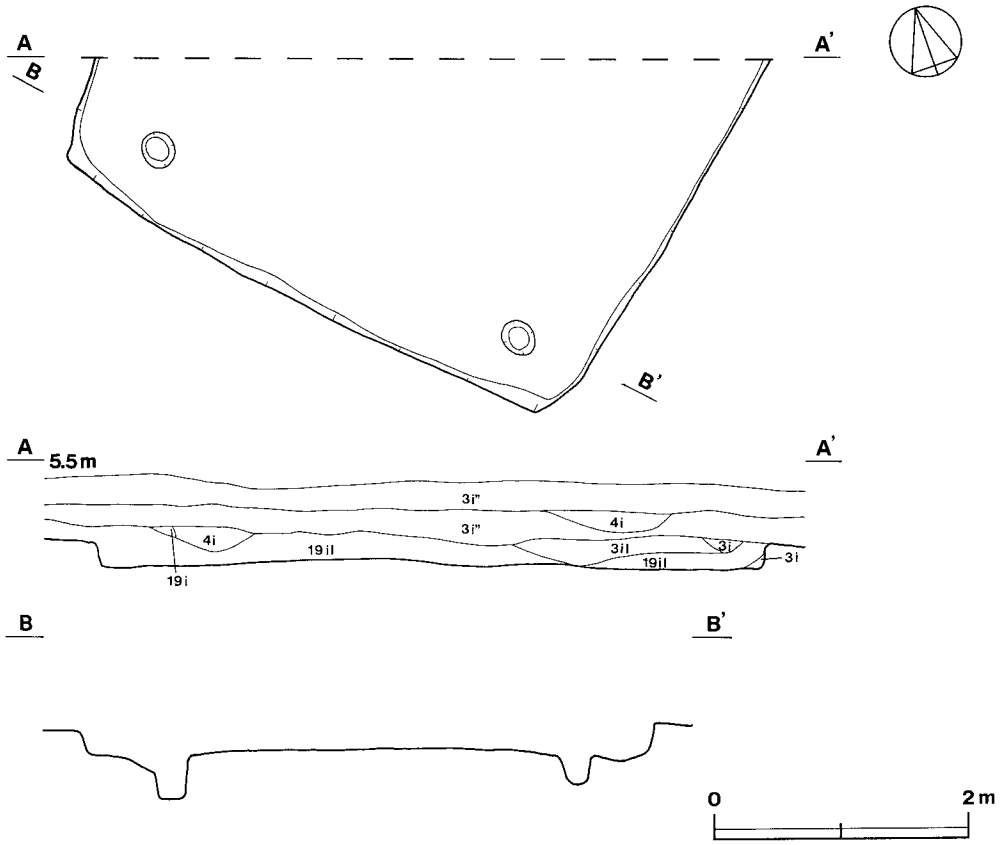
第2節　遺構と遺物

1　竪穴住居跡

第1号住居跡（第121図）

本跡は，G13g4区を中心に確認され，東遺構群のほぼ中央部に位置している。調査を実施したのは住居跡の南西側全体の$\frac{1}{3}$程度で，他の部分は調査区域外に延びており，不明な部分が多い。

南と西のコーナー部は明確にとらえることができ，両コーナー部とも隅丸を呈し，両コーナーを結ぶ南西壁の長さは4.3mである。その他に，南東壁と北西壁の南・西コーナー部寄りの部分が検出された。これらの壁高は20～25cmで，壁はほぼ垂直に立ち上がっている。調査した床面はほぼ平坦で，南コーナー部付近がやや皿状を呈する。特に硬く締まっているところはないが，東寄りのところと南西壁下が中礫混じりのやや硬い面を有している。炭化材が3か所に遺存していたが，灰は認められなかった。ピットはコーナー寄りに2か所検出され，直径30cm前後，深さ30～35cmで，いずれも主柱穴と考えられる。ピットは中礫の自然層を掘り込み，壁・床面は酸化鉄で茶褐色に変色している。ピット内の覆土は住居跡の覆土と同質のものであったが，礫の含有量が



第121図　第１号住居跡実測図

多く，水分が多いためかやや締まりがある。

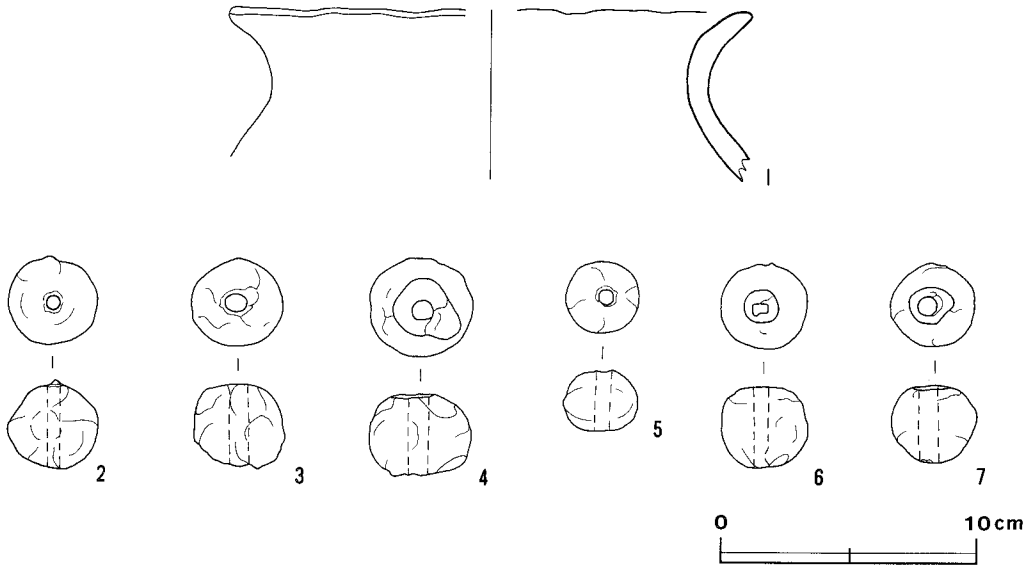
カマドは北西壁か北東壁のいずれかに位置しているものと思われるが，未調査区のため確認できなかった。

覆土は浅く，砂利を含む黒色砂土が自然堆積している。

遺物の出土量は少なく，主に土師器の甕・坏・高坏形土器片が出土している。南東壁下床面から甕形土器の口縁部（第122図１），床面から球状土錘（第122図２～７）が検出された。

第１号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第122図 1	甕形土器 土師器	A (20.6) B (6.8)	丸い胴部から口縁部は外彎して立ち上がる。	口縁部内・外面ー横ナデ。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	10% P 1



第122図　第１号住居跡出土遺物実測図

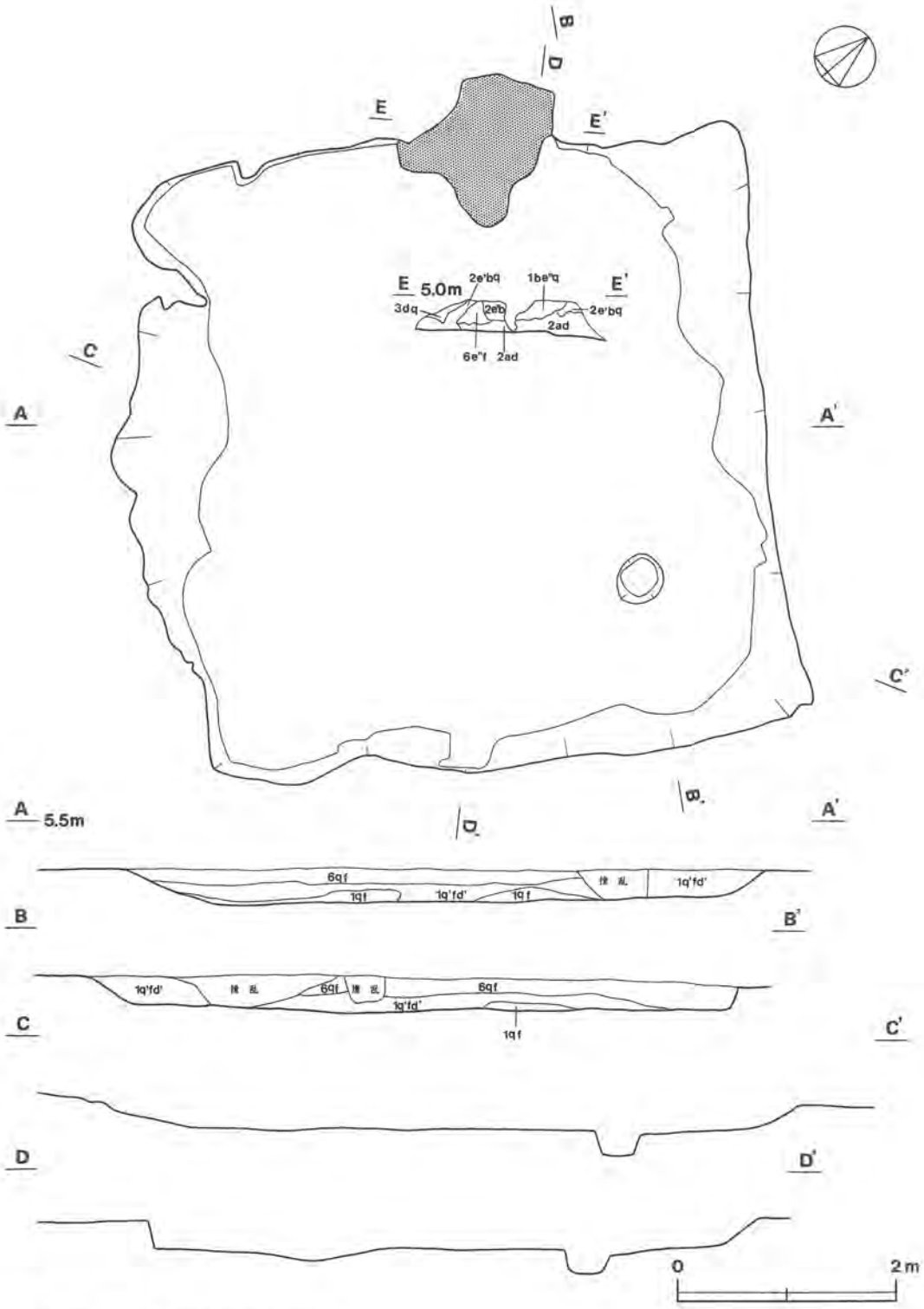
第１号住居跡出土土製品一覧表

図版番号	名　　称	台帳番号	大きさ（cm） たて×よこ	孔径(cm)	重量(ｇ)	備　考
第122図 2	球状土錘	ＤＰ１	3.5×3.6	0.5	36.5	
3	〃	ＤＰ２	3.3×3.5	0.8	38.8	
4	〃	ＤＰ３	3.4×4.0	0.8	52.1	
5	〃	ＤＰ４	2.4×2.9	0.5	20.9	
6	〃	ＤＰ５	3.2×3.4	0.6	39.5	
7	〃	ＤＰ６	3.1×3.4	0.7	35.3	

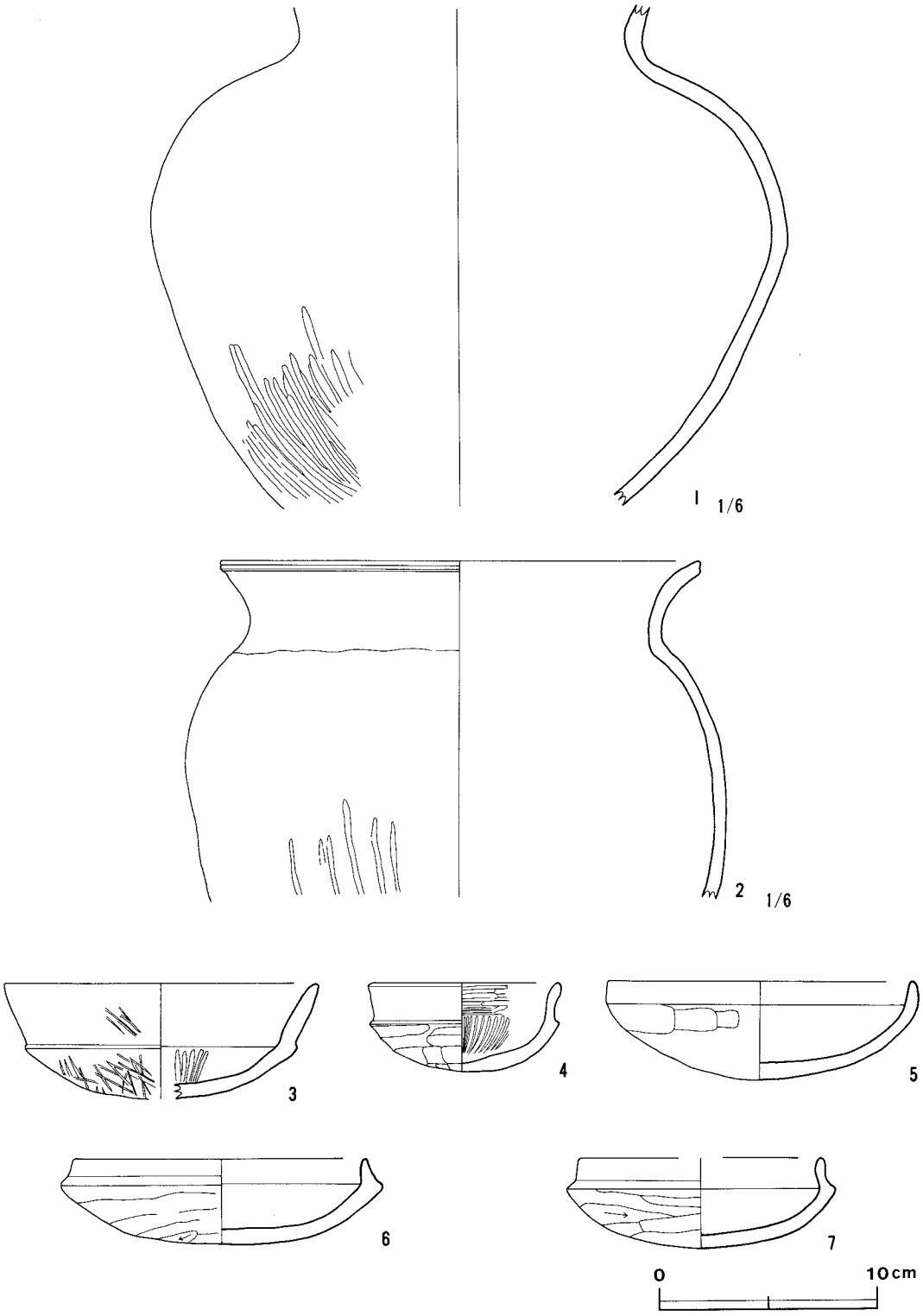
第２号住居跡（第123図）

本跡は，Ｇ13h_3区を中心に確認され，東遺構群の中央部，第１号住居跡の南西５ｍのところに位置し，北東側は第23号住居跡と重複している。新旧関係は，本跡の方が新しい。

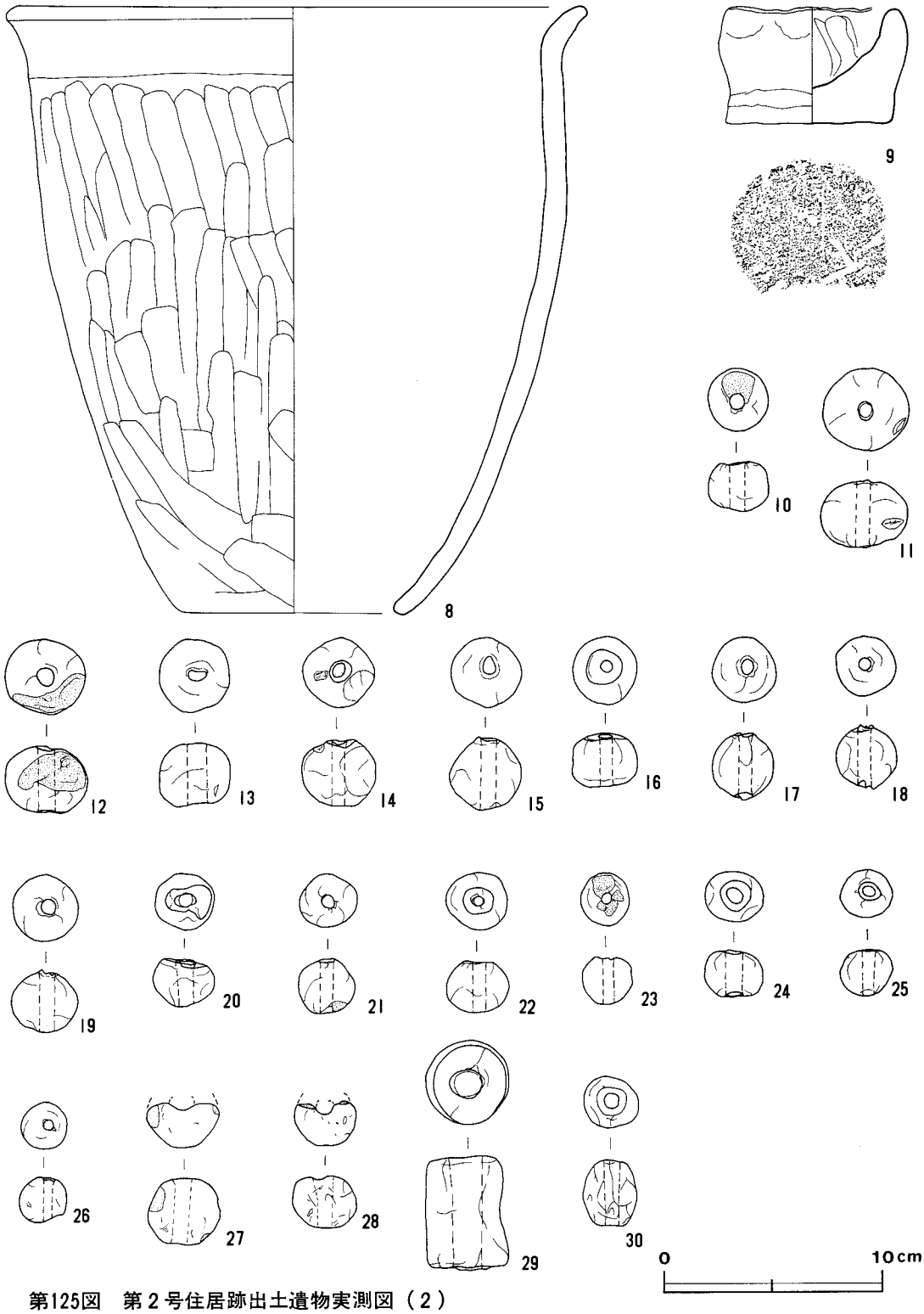
壁はカマドから南西側，南コーナー部付近，南東壁の一部しか検出できなかったため，これらの壁と遺物の点在状況やカマドの位置からプランを推定して調査を進めた。平面形は一辺5.8ｍの方形を呈し，主軸方向はＮ－55°－Ｗを指すものと思われる。砂礫層を掘り込んで構築しているため，壁と思われる部分の崩壊が著しい。床は黒灰色の灰が砂粒に混入しており，中央部から北東壁の方にかけてと，中央部から南東壁下中央にかけてやや硬い床面を呈している。また，カマドの前方部に貼り床ではないかと思われる部分がみられる。ピットは東コーナー寄りに１か所検出され，直径46cm，深さ24cmで，直径のわりに浅いが主柱穴と考えられる。



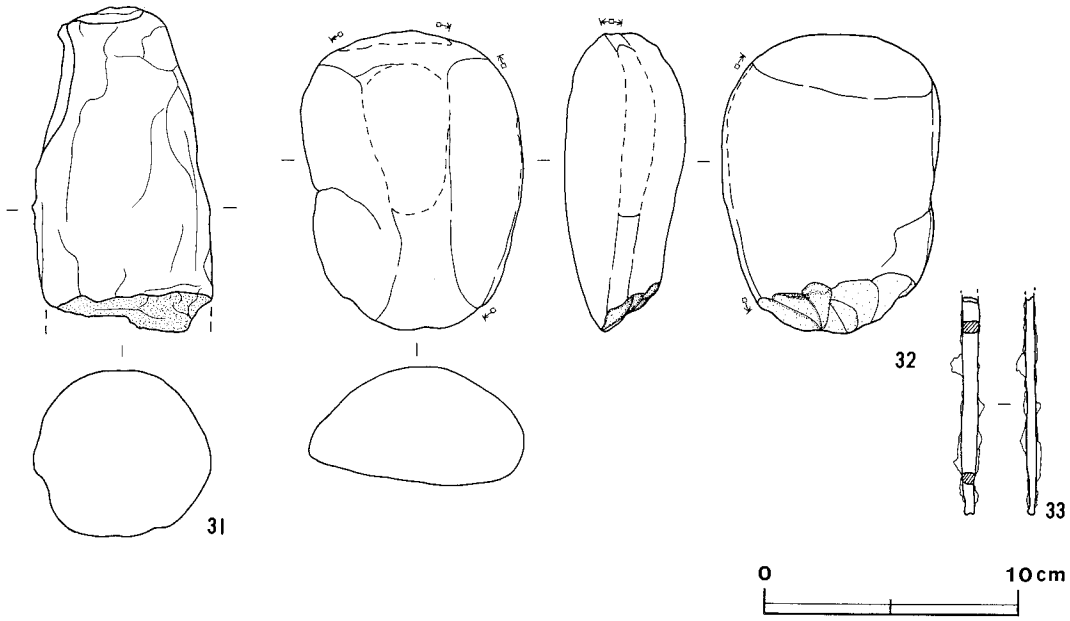
第123図　第２号住居跡実測図



第124図　第２号住居跡出土遺物実測図（１）



第125図　第２号住居跡出土遺物実測図（２）



第126図　第２号住居跡出土遺物実測図（３）

カマドは北西壁のほぼ中央部に付設され，1.4m幅で壁を，外側へ60cm程掘り込んでいる。礫を含む粘質砂土で構築されているため，遺存状態は悪く原形を留めない。燃焼部は約10cm床面を掘りくぼめ，火床は焼けている。

覆土は上層に少量の小礫・炭化粒子を含むにぶい褐色土，下層に礫・炭化粒子を含む褐色土が堆積し，撹乱を受けている部分もみられる。

遺物は多量の土師器片を中心に須恵器，土製品，石器などが全域から出土している。大半は覆土中からの出土で，土師器の器種としては甕・甑・坏・高坏・坩・器台形土器がみられる。器形を窺えるものとしては，中央部よりやや東側から大型の壺形土器の胴部（第124図１），ほぼ中央部から半完形の甑形土器（第125図８），カマド北東袖口部と南東壁近くから完形の坏形土器（第124図４～６）がいずれも覆土中から出土している。さらに，土製品としては球状土錘が19点(第125図10～28)，管状土錘２点（第125図29・30)，石製品としては敲石１点（第126図32）が出土している。

第２号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第124図1	壺形土器 土師器	B（32.4）	底部欠損。胴部は上位に張りをもち，口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面－横ナデ。胴部外面－下位に縦位のヘラナデ。	砂粒・雲母・長石 明褐灰色 不良	45% P２

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
2	甕形土器 土師器	A 31.6 B (21.9)	胴部は上位に張りをもち，口縁部は外彎して立ち上がる。端部外側に沈線をもつ。	口縁部内・外面ー横ナデ。胴部外面ーヘラナデ，内面ーナデ。	砂粒・雲母・長石 にぶい橙色 普通	30% P 3
3	坏形土器 土師器	A (14.4) B (4.3) C (ー)	底部は丸底で，体部は内彎して開き，口縁部との境に段をもつ。口縁部は外傾して開く。	口縁部内・外面ー横ナデ。体部内面ーヘラ磨き。	砂粒・スコリア 橙色 普通	50% P10
4	坏形土器 土師器	A 8.9 B 4.1 C (ー)	底部は丸底で，体部は内彎して開き，口縁部との境に段をもつ。口縁部はやや外傾する。	口縁部外面ー横ナデ，内面ー横ナデ後ヘラ磨き。体部外面ーヘラ削り，内面ーヘラ磨き。	砂粒・雲母 暗褐灰色 普通	100% P 9
5	坏形土器 土師器	A 14.0 B 4.5 C (ー)	底部は丸底で，体部は内彎して外上方に開く。口縁部は短く，内傾する。	口縁部内・外面ー横ナデ。体部外面ー横位のヘラ削り，内面ーナデ。	砂粒・スコリア 明褐灰色 普通	90% P 8
6	坏形土器 土師器	A 13.4 B 3.9 C 3.5	底部は丸底で，体部は内彎して外上方に開き，口縁部との境に段をもつ。口縁部は内傾して開く。	口縁部内・外面ー横ナデ。体部外面ーヘラ削り，内面ー横ナデ。	砂粒 灰褐色 普通	98% P 7
7	坏形土器 土師器	A 11.2 B 4.1 C (ー)	底部は丸底で，体部は内彎して外上方に開き，口縁部との境に段をもつ。口縁部は内傾して開く。	口縁部内・外面ー横ナデ。体部外面ーヘラ削り，内面ーナデ。	砂粒・スコリア にぶい赤褐色 普通	40% P11
第125図 8	甑形土器 土師器	A 25.8 B 28.4 C 10.4	底部は正円状に抜け，胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。口縁部は外反して開く。	口縁部内・外面ー横ナデ。胴部外面ー上位は縦位の，下位は斜位のヘラ削り，内面ーナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	55% P 5
9	手捏土器 土師器	A 7.6 B 5.4 C 7.3	底部は平底で，胴部は内彎気味に上方に立ち上がる。器肉は厚い。	底部ー木葉痕。胴部外面ー凸凹あるがナデ，内面ー指ナデ。	砂粒・黒雲母 淡橙色 普通	70% P12

第2号住居跡出土石製品一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	大きさ (cm) たて×よこ	孔径(cm)	重量(g)	備　考
第125図 10	球状土錘	DP 7	2.2×2.9	0.7	17.7	
11	〃	DP 8	3.1×4.0	0.6	44.8	
12	〃	DP 9	3.1×3.8	0.8	(36.8)	一部欠損
13	〃	DP10	3.0×3.4	0.9	35.4	
14	〃	DP11	3.1×3.4	0.6	30.4	
15	〃	DP12	3.3×3.4	0.7	30.7	
16	〃	DP13	2.5×3.1	0.6	23.0	
17	〃	DP14	3.1×3.1	0.6	23.4	
18	〃	DP15	2.9×2.8	0.6	19.3	
19	〃	DP16	2.8×3.1	0.7	21.3	
20	〃	DP17	(2.1)×2.8	0.7	(17.4)	一部欠損
21	〃	DP18	2.6×2.7	0.6	16.5	
22	〃	DP19	2.4×2.8	0.6	17.0	
23	〃	DP20	(2.2)×2.5	0.5	(12.1)	一部欠損

図版番号	名　　称	台帳番号	大きさ（cm） たて×よこ	孔径(cm)	重量(g)	備　考
24	球状土錘	DP 21	2.1×2.7	0.8	14.3	
25	〃	DP 22	2.2×2.4	0.5	10.6	
26	〃	DP 23	2.1×2.2	0.4	8.4	
27	〃	DP 24	(3.1)×3.4	0.7	(16.9)	半分欠損
28	〃	DP 25	(2.4)×2.9	0.7	(12.0)	半分欠損
29	管状土錘	DP201	5.4×4.0	1.5	88.2	
30	〃	DP221	3.0×2.6	0.8	18.2	
第126図 31	支　　脚	DP225	(13.0)×(7.2)	—	(464.0)	一部欠損

第2号住居跡出土土製品一覧表

図版番号	名　　称	台帳番号	大きさ（cm） 長さ×幅×厚さ	孔径(cm)	重量(g)	石　質	備　考
第126図 32	敲　　石	Q11	(11.9)×8.8×4.7	—	(660.3)	流紋岩	一部欠損

第2号住居跡出土鉄製品一覧表

図版番号	名　　称	台帳番号	法量（cm）			形　態　の　特　徴	備　考
			長さ	幅	厚さ		
第126図 33	釘	M 2	(8.6)	0.6	0.3	断面長方形	

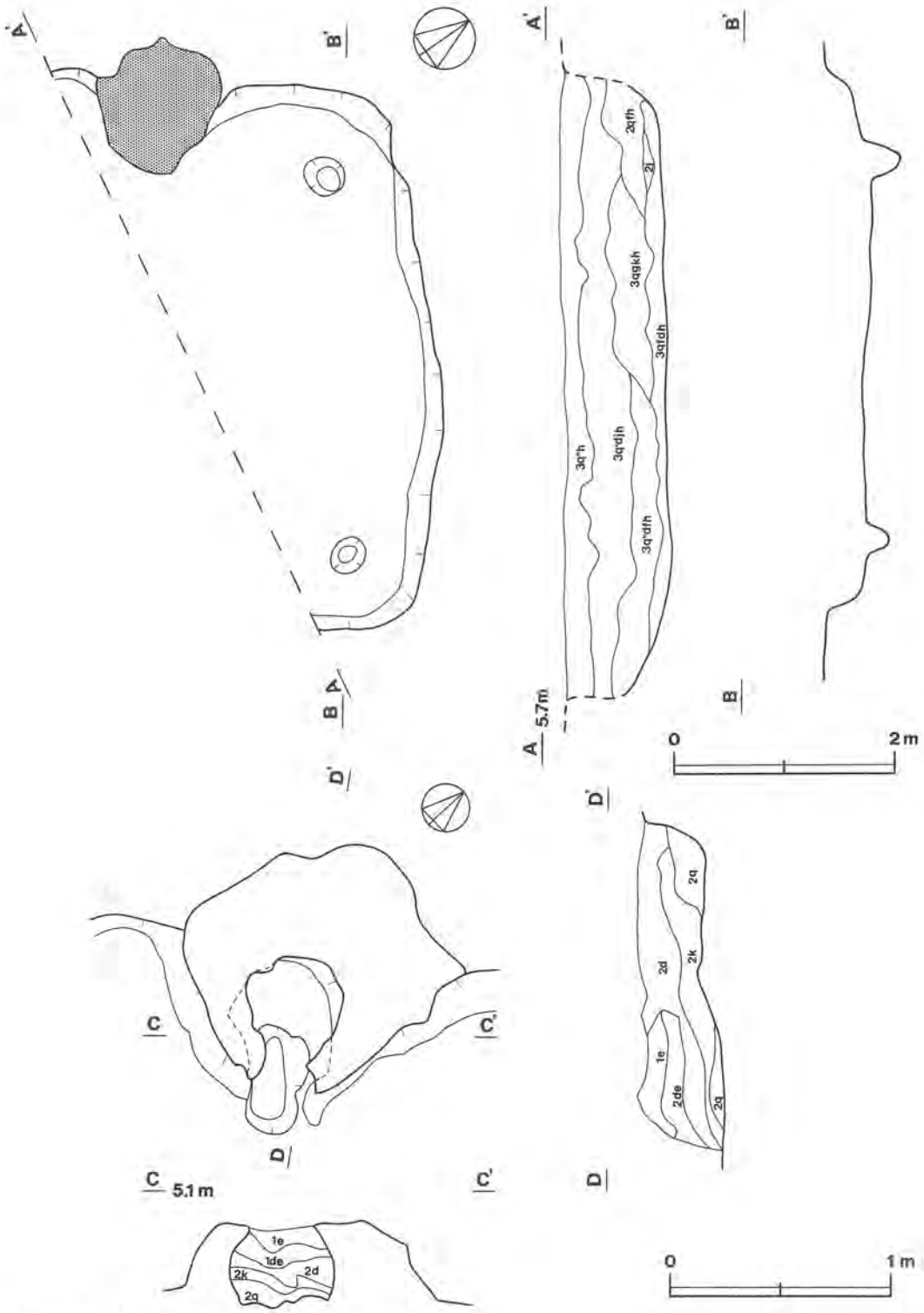
第3号住居跡（第127図）

本跡は，遺跡の東側G13j4区にカマドと思われる楕円形状の焼土プランを確認し，住居跡として調査を開始したが，落ち込みも不鮮明で，壁や床の検出も不明確で，しかも中央部から南側にかけては調査区域外に延びるものと推定され，不明な部分が多い。

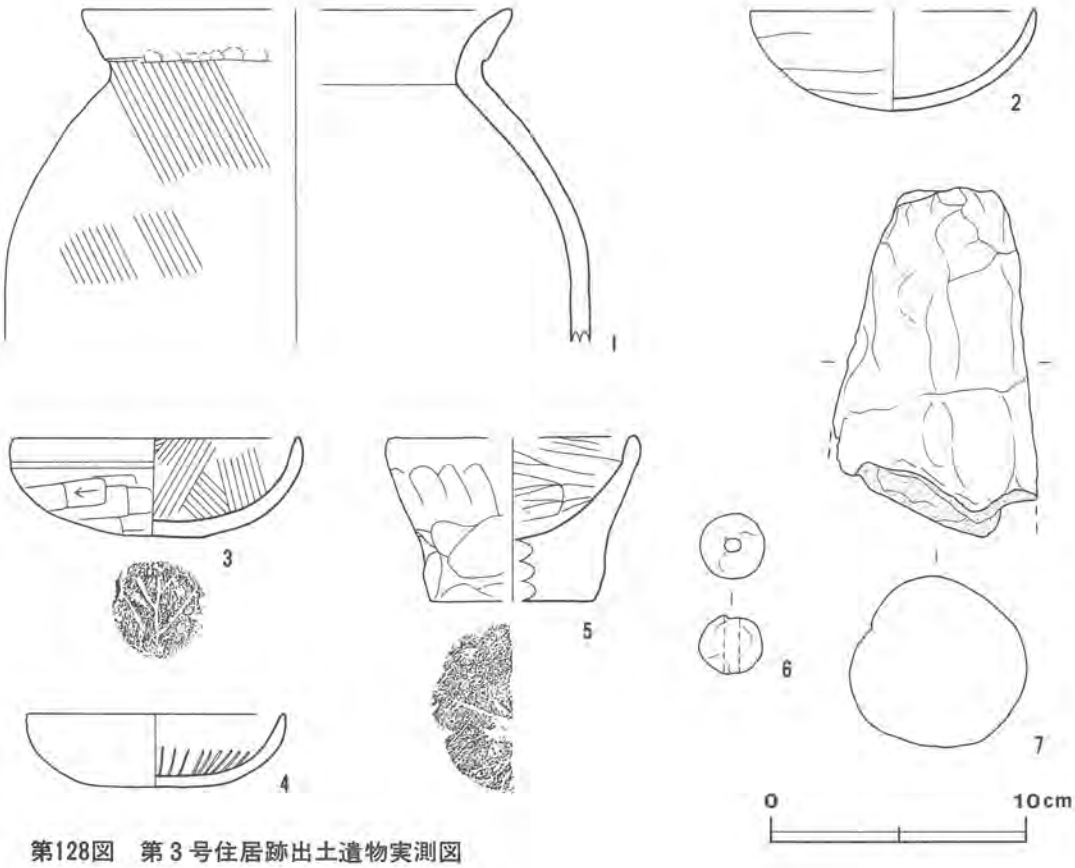
上記のような事由と壁も不明確なため住居跡のプランは不明である。床面は砂土であるが，明確に壁は検出できなかった。カマドは流出していて，形状を留めない。ピットは北コーナーと東コーナー寄りに2か所検出され，直径35と38cm，深さ25と32cmで，主柱穴と考えられる。

掘り込んだ部分は，小～中礫・焼土粒子・炭化粒子・砂粒を含む締まりのある黒褐色土のところである。

遺物はほとんど土師器片で，大半はカマドの前方からの出土である。カマド北東側から完形の坏形土器（第128図3），カマドの前方から半完形の坏2点（第128図2・4），ほぼ中央部から半完形の手捏土器（第128図5）がいずれも覆土中から出土している。その外に，カマドの東側から球状土錘（第128図6）が出土している。



第127図　第３号住居跡・カマド実測図



第128図　第３号住居跡出土遺物実測図

第３号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第128図 1	壺形土器 土師器	A (16.6) B (12.2)	胴部は丸く，口縁部は「く」の字状を呈し，二重口縁である。	口縁部内・外面－横ナデ。胴部－上位ナデ，中位ヘラ削り。	砂粒・スコリア 黒褐色 普通	10% P13
2	坏形土器 土師器	A 11.2 B 4.0 C (－)	底部は丸底で，体部は内彎して開く。口縁部は直立する。	口縁部外面－横ナデ，内面－ナデ。体部外面－ヘラ削り後ナデ，内面－ナデ。	砂粒・スコリア・雲母 浅黄橙色 普通	50% P16
3	坏形土器 土師器	A 11.3 B 4.1 C 3.4	底部はわずかに平底状を呈し，体部は内彎して外上方に開く。口縁部は短く，やや内彎して立ち上がる。	底部－木葉痕。口縁部内・外面－横ナデ。体部外面－ヘラ削り，内面－刷毛目。	砂粒・スコリア・雲母 にぶい赤褐色 普通	98% P15
4	坏形土器 土師器	A (10.1) B 2.9 C 3.0	底部は丸底で，体部は内彎して外上方に開き，そのまま口縁部に至る。	口縁部内・外面－横ナデ。体部外面－ナデ，内面－ヘラ磨き。	砂粒・細砂 橙色 普通	55% P17
5	手捏土器 土師器	A (9.7) B 6.6 C (6.4)	底部は平底で，胴部は外反して立ち上がり，口縁部は内傾する。底部の器肉は厚い。	底部－木葉痕。口縁部内・外面－横ナデ。胴部外面－指ナデ，内面－上位横ナデ，下位指ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	40% P18

第3号住居跡出土土製品一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	大きさ（cm） たて×よこ	孔径(cm)	重量(g)	備　考
第128図 6	球状土錘	DP 26	2.4×2.6	0.6	14.9	
7	支　脚	DP226	(13.9)×(8.1)	—	(615.8)	一部欠損

第4号住居跡（第129図）

本跡は，H13i_6区に確認されたカマドのプランから形状を設定したもので，壁はカマドの両側と北コーナー部を検出することができた。中央部から南側にかけては調査区域外に延びている。その境界面での土層を観察すると，掘り込みは遺構確認面より30cm上から行われているが，上面の壁形態は崩れており，旧表土との係りを追求することは困難である。

北コーナー部は隅丸を呈し，北東壁の長さは4mである。残存している壁高は30～40cmで，壁は垂直に立ち上がっている。床面は平坦で，礫を多量に含む黒褐色砂土である。ピットはカマドの北東側と北東壁下東コーナー寄りの2か所に検出され，いずれも主柱穴と考えられる。直径は42・54cm，深さは37・34cmである。

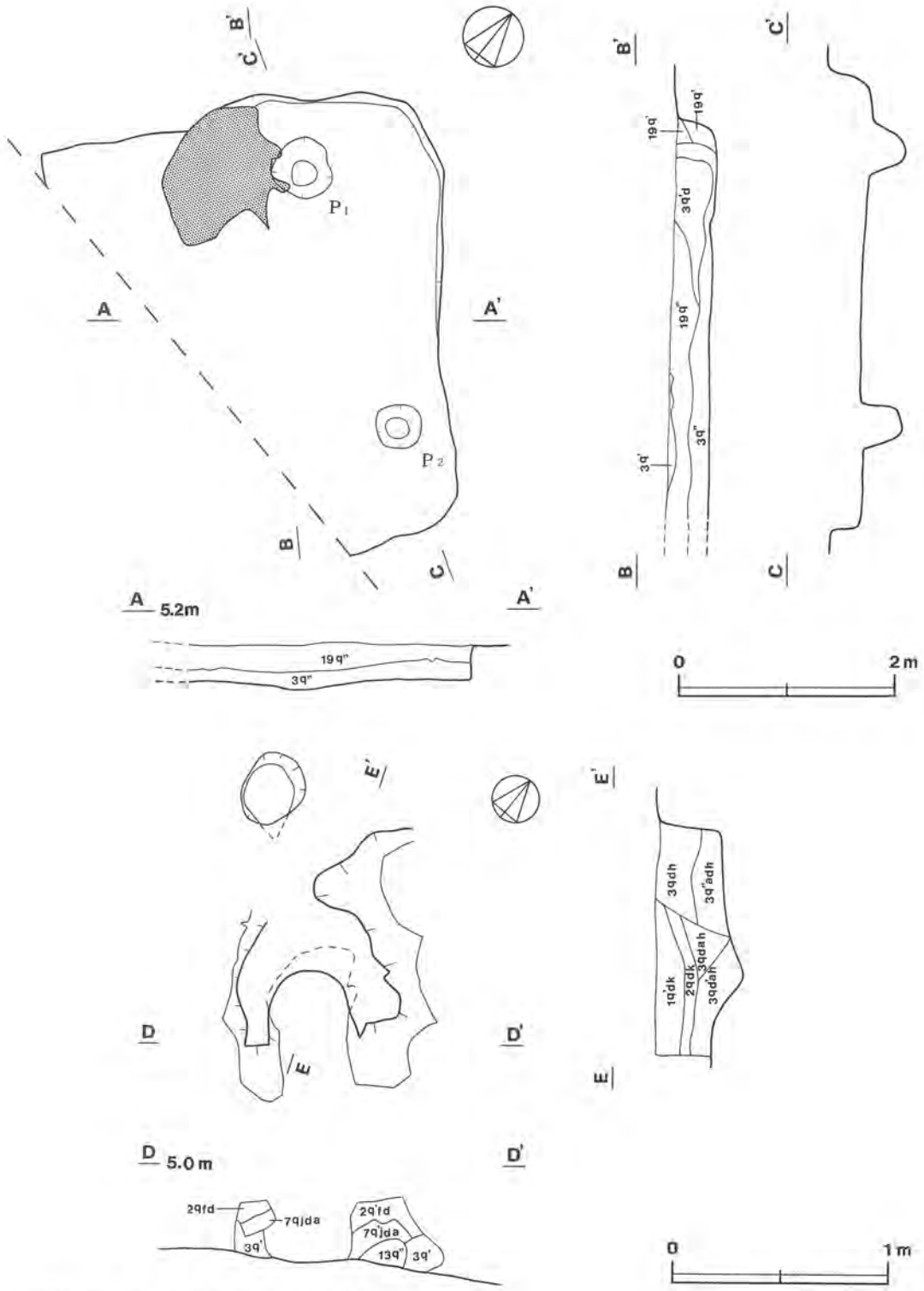
カマドは北西壁に付設され，礫を含む粘質砂土で構築している。焚口部から煙出しピットまでの長さは1.5m，焚口幅は33cm，袖部の厚みは20cmである。燃焼部底面，側壁は火熱によって赤変している。

覆土は自然堆積で，主に上層には多量の礫を含む黒色砂土，下層にはやはり多量の礫を含む黒褐色砂土が堆積している。

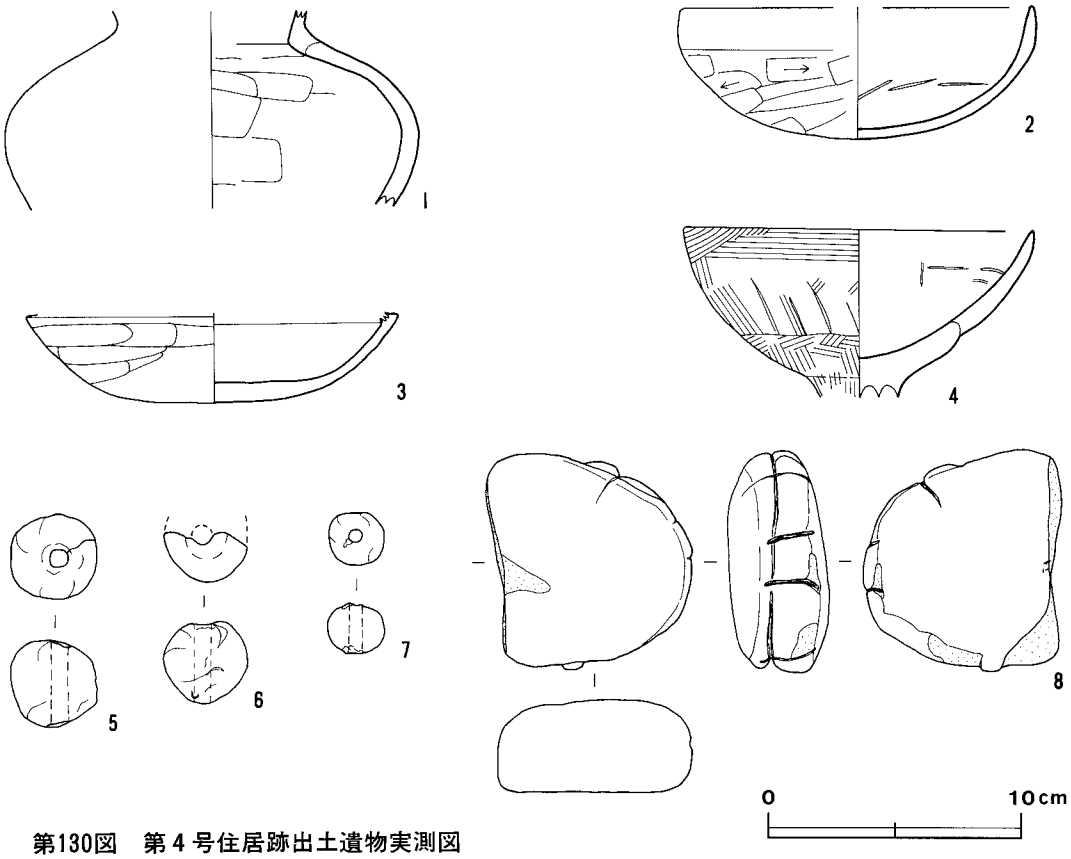
遺物の出土量は多く，大半は土師器片である。器種としては，甕・坏・高坏・坩形土器がみられる。器形を窺えるものとしては，ほぼ中央部床面から半完形の高坏形土器（第130図4），P_1の西側床面から半完形の坏形土器（第130図2）が出土している。他に，球状土錘が3点（第130図5～7）出土している。

第4号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第130図 1	坩形土器 土師器	B（7.8）	胴部は中位に張りをもつ扁平な球形を呈している。底部・口縁部は欠損。	胴部外面－横ナデ，内面－ナデ。	砂粒・スコリア・長石 にぶい橙色 普通	30% P19
2	坏形土器 土師器	A（13.8） B　5.3 C（－）	底部は丸底で，体部は内彎して開き，口縁部との境に稜をもつ。口縁部は内傾して開く。	口縁部内・外面－横ナデ。体部外面－ヘラ削り，内面－雑なヘラ磨き。	砂粒・雲母 暗赤褐色 普通	45% P22



第129図　第４号住居跡・カマド実測図



第130図　第４号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
3	坏形土器 土師器	A (14.8) B 3.6 C (－)	底部は扁平に近い丸底を呈し，体部は内彎して外上方に開き，口縁部との境に段をもつ。	体部外面－ヘラ削り，内面－横ナデ。	砂粒 褐灰色 普通	30% P21
4	高坏形土器 土師器	A 14.0 B (6.8)	体部は半円状を呈し，下位に稜をもつ。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面－横ナデ。体部内・外面－ナデ。	砂粒・スコリア・礫 橙色 普通	50% P20

第４号住居跡出土土製品一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	大きさ (cm) たて×よこ	孔径(cm)	重量(g)	備　考
第130図 5	球状土錘	DP27	3.5×3.5	0.6	40.2	
6	〃	DP28	(3.3)×(3.3)	0.6	(16.1)	半分欠損
7	〃	DP29	2.0×2.2	0.5	8.7	

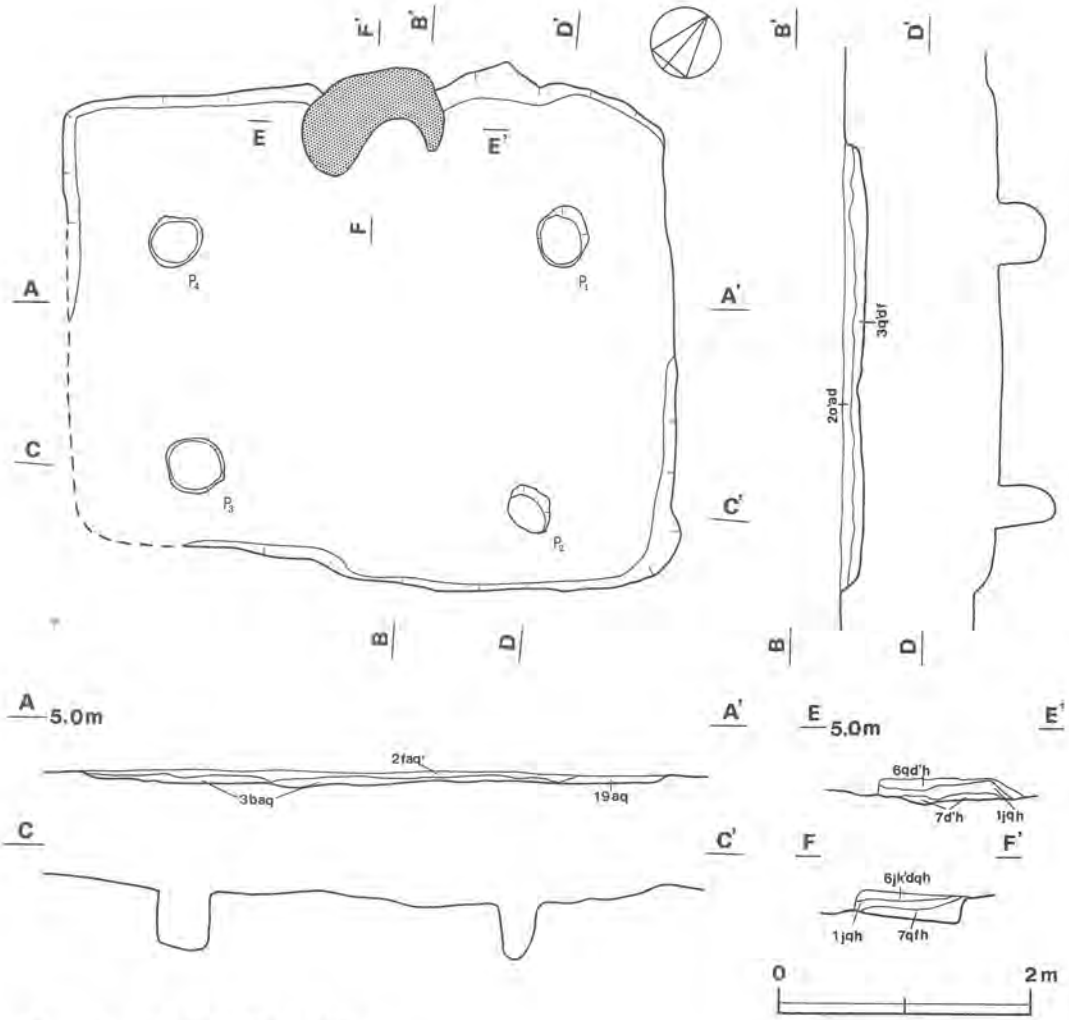
第４号住居跡出土石製品一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	大きさ (cm) 長さ×幅×厚さ	孔径(cm)	重量(g)	石　質	備　考
第130図 8	石　錘	Q18	(8.6)×(8.2)×4.1	—	(340.6)	砂　岩	一部残存

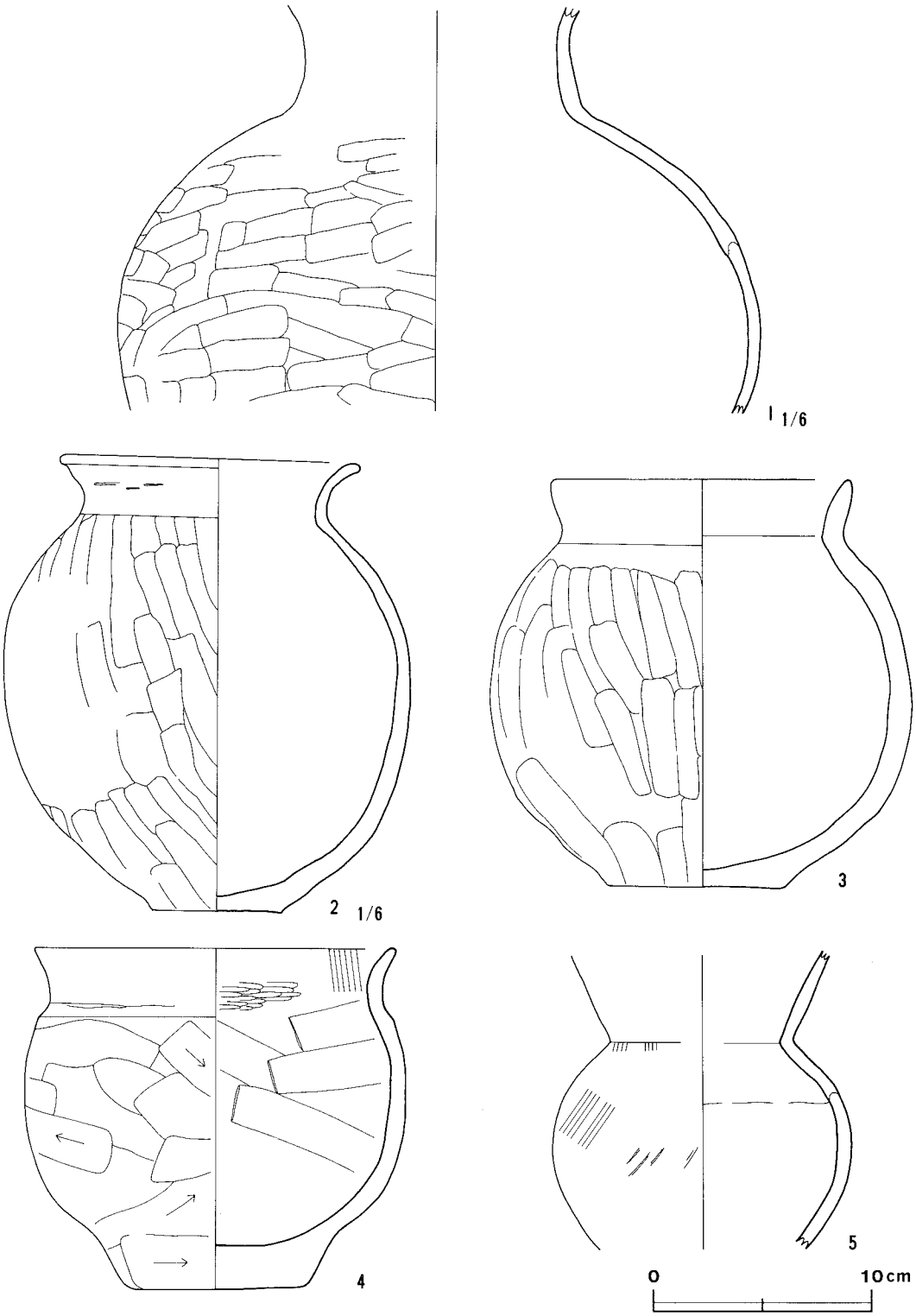
第5号住居跡（第131図）

本跡は，遺跡の東側G13i₂区に確認され，東遺構群の中央部，第2号住居跡の南西側に隣接して位置している。

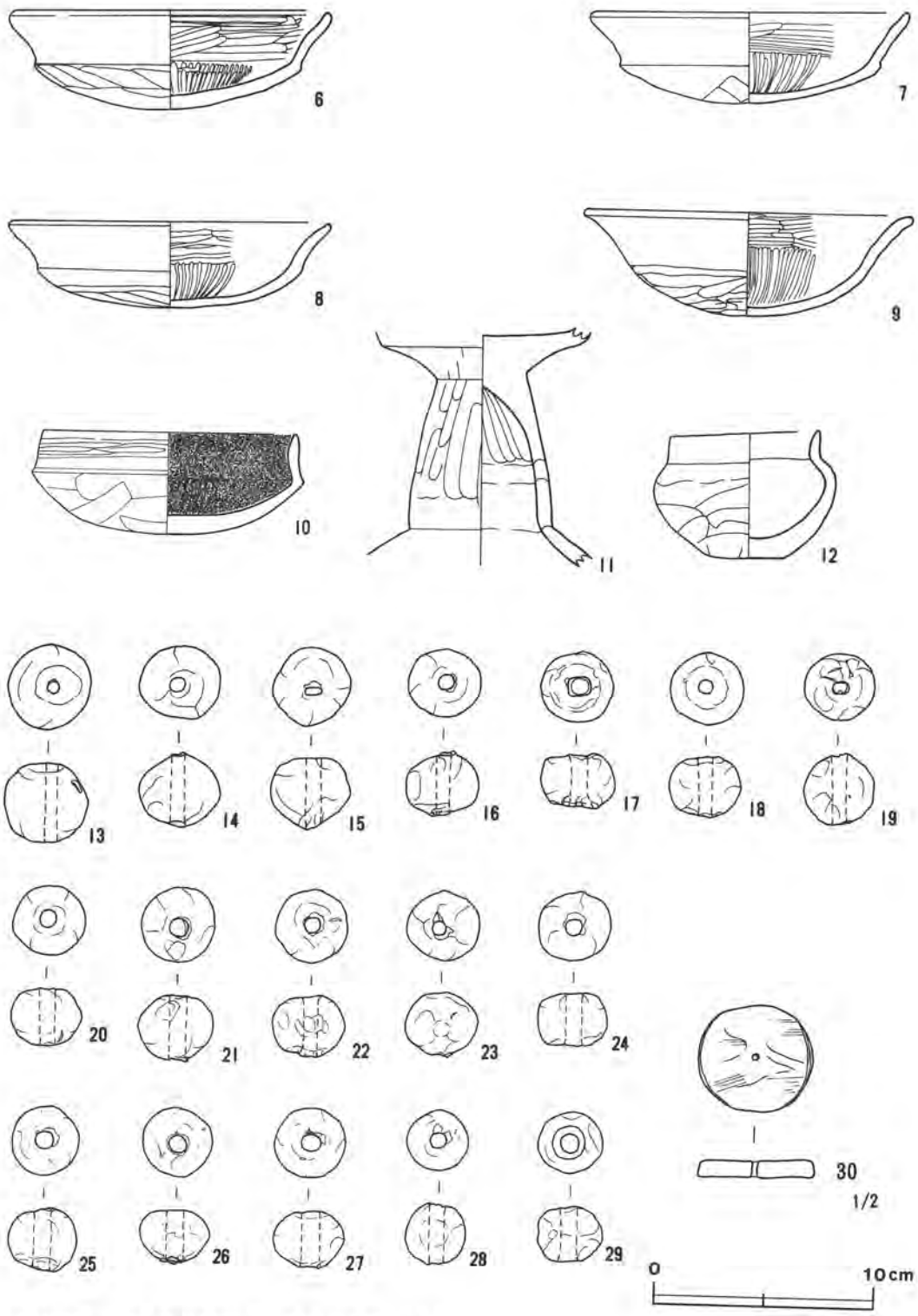
砂土のためプランの把握が困難であったが，北西壁と西コーナー部，東コーナー部を検出できた。これらの状況から，平面形は長軸（北東－南西）4.8m，短軸＝主軸（北西－南東）4mの隅丸長方形を呈し，主軸方向はN－42°－Wを指すものと思われる。検出できた壁高は10～15cmで，壁はやや緩やかに立ち上がっている。床は炭化粒子をわずかに含む黒褐色砂土で，P_3付近がやや高くなっている。ピットは4か所検出され，いずれも主柱穴で，直径30～45cm，深さ37～40cmである。ピットの壁に酸化鉄が付着している。



第131図　第5号住居跡実測図



第132図　第５号住居跡出土遺物実測図（１）



第133図　第５号住居跡出土遺物実測図（２）

カマドは北西壁中央部に付設されている。遺存状態は悪く，カマドを構築していた粘質砂土が崩壊した状態で検出され，その下には多量の焼土粒子や砂粒が堆積していた。燃焼部の掘り込みは認められず，床面と同一レベルで長径50cm，短径30cmの楕円形状に焼けている。

覆土は上層に礫と極少量のローム粒子を含む暗褐色砂土，下層に少量の礫・焼土粒子・ローム粒子を含む黒褐色砂土が自然堆積しており，いずれも締まりがある。

遺物は本跡全域から満遍なく出土し，大半は土師器片である。器種としては，甕・甑・坏・高坏・坩・器台形土器がみられる。器形を窺えるものとしては，P_1の南側から半完形の壺形土器（第132図１），P_1とP_2の間からほぼ完形の甕形土器（第132図３）・ミニチュア土器（第133図12），カマドの前から半完形の甕形土器（第132図４）・完形の坏形土器（第133図６・８・９）・半完形の坏形土器（第133図７・10），ほぼ中央部から甕形土器（第132図２）が出土している。いずれも覆土中からの出土である。

第５号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第132図 1	壺形土器 土師器	B (26.2)	丸く張った胴部から口縁部は外彎して立ち上がる。端部は欠損。	口縁部内・外面－横ナデ。胴部外面－斜位及び横位のヘラ削り，内面－ナデ。	砂粒・長石・礫 にぶい橙色 普通	50% P23
2	甕形土器 土師器	A 19.6 B 29.4 C 8.6	底部は平底で，胴部はやや上位に張りをもち，口縁部は「コ」の字状に開く。	口縁部内・外面－横ナデ。胴部外面－斜位のヘラ削り，内面－ナデ。	砂粒・長石・石英 灰赤色 不良	70% P24
3	甕形土器 土師器	A 13.9 B 18.7 C 8.2	底部は平底で，胴部は中位に張りをもつ球形を呈し，口縁部は外傾して開く。	口縁部内・外面－横ナデ。胴部外面－縦位のヘラ削り，内面－ナデ。	砂粒・長石 灰褐色 普通	80% P25
4	甕形土器 土師器	A (16.6) B 15.8 C 8.2	底部は平底で，胴部は内彎して外上方に立ち上がり，口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部外面－横ナデ，内面－上位横ナデ，下位ヘラナデ。胴部外面－ヘラ削り，内面－ナデ。	砂粒・スコリア・礫 暗赤褐色 普通	50% P26
5	坩形土器 土師器	B (13.8)	胴部は中位に張りをもつ扁平の球形を呈し，口縁部は直線的に外上方に立ち上がる。	口縁部外面－ナデ，内面－横ナデ。胴部外面－ナデ，内面－横ナデ。	砂粒・雲母 灰褐色 普通	30% P28
第133図 6	坏形土器 土師器	A 14.7 B 4.5 C (－)	底部は丸底で，体部は内彎して開き，口縁部との境に段をもつ。口縁部は外反して開く。	口縁部外面－横ナデ，内面－ヘラナデ。体部外面－ヘラ削り，内面－ヘラ磨き。	砂粒 赤橙色 普通	95% P31
7	坏形土器 土師器	A 14.6 B 4.2 C (－)	底部は丸底で，体部は内彎して開き，口縁部との境に段をもつ。体部は外反して開く。	口縁部外面－横ナデ，内面－ヘラナデ。体部外面－ヘラ削り，内面－ヘラ磨き。	砂粒 赤色 普通	80% P33
8	坏形土器 土師器	A 14.7 B 4.0 C (－)	底部は丸底で，体部は内彎して開き，口縁部との境に段をもつ。口縁部は外反して開く。	口縁部外面－横ナデ，内面－ヘラナデ。体部外面－ヘラ削り，内面－ヘラ磨き。	砂粒 赤橙色 普通	90% P32

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
9	坏形土器 土師器	A 15.1 B 4.7 C (－)	底部は丸底で，体部は内彎して開き，口縁部は外彎気味に開いて立ち上がる。	口縁部外面－横ナデ，内面－ヘラ磨き。体部外面－ヘラ削り。内面－ヘラ磨き。	砂粒 にぶい橙色 良好	100% P30
10	坏形土器 土師器	A (11.6) B 4.7 C (－)	底部は丸底で，体部は内彎して開き，口縁部との境に段をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部外面－ヘラ磨き，内面－横ナデ。体部外面－ヘラ削り，内面－ヘラ磨き後黒色処理。	砂粒・礫 明赤褐色 普通	50% P34
11	高坏形土器 土師器	B (10.8)	脚部は内彎気味に開き，裾部は屈曲して「ハ」の字に開く。坏部は下位に稜をもつ。	脚部外面－ヘラ磨き，内面－ナデ。裾部内面－横ナデ。	砂粒 赤色 普通	30% P29
12	ミニチュア土器 土師器	A 6.8 B 5.9 C 3.8	底部は平底で，胴部は内彎して開き，肩部に張りをもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面－横ナデ。胴部外面－ヘラ削り，内面－ナデ。	砂粒・雲母 灰黄褐色 普通	98% P27

第5号住居跡出土土製品一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	大きさ (cm) たて×よこ	孔径(cm)	重量(g)	備　考
第133図 13	球状土錘	DP30	3.7×3.9	0.5	54.2	
14	〃	DP31	3.4×3.7	0.6	34.3	
15	〃	DP32	3.3×3.6	0.7	36.4	
16	〃	DP33	3.0×3.3	0.6	29.6	
17	〃	DP34	2.5×3.3	1.0	28.0	
18	〃	DP35	2.8×3.3	0.6	33.4	
19	〃	DP36	3.3×3.2	0.7	30.2	
20	〃	DP37	2.7×3.3	0.7	28.2	
21	〃	DP38	3.0×3.4	0.8	35.1	
22	〃	DP39	2.8×3.4	0.6	30.1	
23	〃	DP40	3.0×3.3	0.6	29.2	
24	〃	DP41	2.5×3.2	0.7	30.1	
25	〃	DP42	2.9×3.2	0.8	26.6	
26	〃	DP43	2.5×3.2	0.7	23.6	
27	〃	DP44	2.6×3.3	0.8	26.0	
28	〃	DP45	2.8×2.8	0.7	20.9	
29	〃	DP46	2.6×2.9	0.8	18.1	

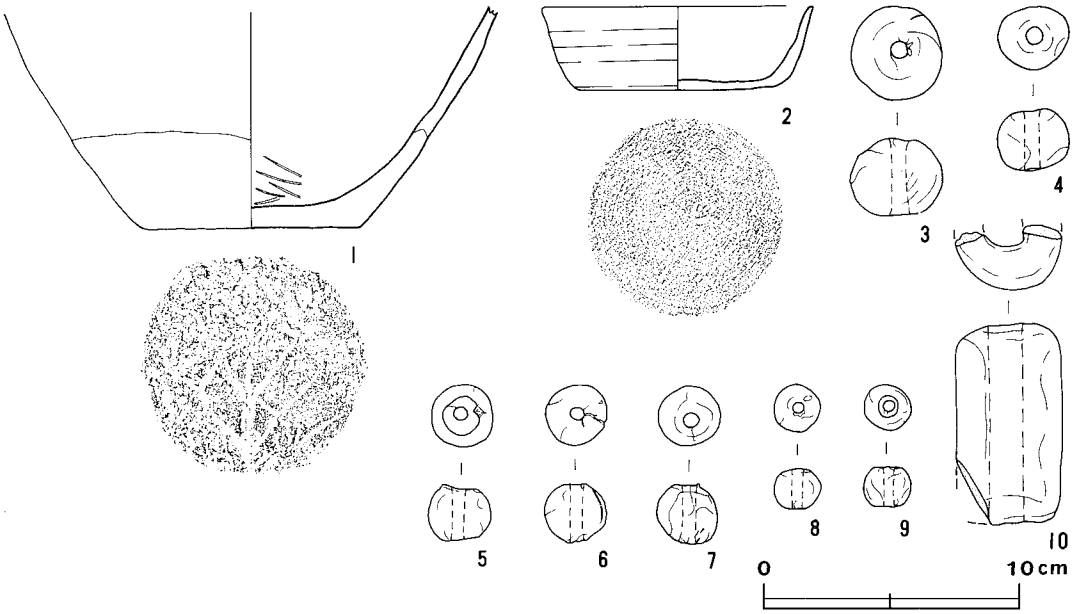
第5号住居跡出土石製品一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	大きさ (cm) 長さ×幅×厚さ	孔径(cm)	重量(g)	石　質	備　考
第133図 30	有孔円板	Q26	3.5×3.2×0.5	0.2	11.2	滑　石	単孔

第6号住居跡

本跡は，第7号住居跡に切り込まれ，カマド跡と思われる粘土と焼土ブロックがG13h1区に検出されただけである。

遺物はカマド周辺及びその南西側に散布していたものを，本跡の番号を付して取り上げた。土師器の甕形土器の底部（第134図1），須恵器の坏（第134図2），球状土錘（第134図3～9）などが出土している。



第134図　第6号住居跡出土遺物実測図

第6号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第134図 1	甕形土器 土師器	B（8.8） C 8.6	底部は平底で，胴部は直線的に外上方に開いて立ち上がる。	底部ー木葉痕。胴部外面ーナデ，内面ーヘラナデ。外面は磨滅している。	砂粒・礫・スコリア・雲母 にぶい赤褐色 不良	10% P36
2	坏 須恵器	A 10.6 B 3.3 C 8.0	底部は平底で，体部は内彎気味に外上方に開き，そのまま口縁部に至る。	底部ー回転ヘラ削り。ロクロ回転は右。切り離しは回転糸切り。	砂粒 灰白色 良好	95% P37

第6号住居跡出土土製品一覧表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ（cm） たて×よこ	孔径(cm)	重量(g)	備考
第134図 3	球状土錘	DP47	3.1×3.7	0.8	43.2	
4	〃	DP48	2.5×2.7	0.6	14.9	

図版番号	名　称	台帳番号	大きさ（cm） たて×よこ	孔径(cm)	重量(g)	備　考
5	球状土錘	DP 49	2.3×2.5	0.5	13.0	
6	〃	DP 50	2.4×2.4	0.5	11.8	
7	〃	DP 51	2.4×2.4	0.6	12.1	
8	〃	DP 52	1.6×1.9	0.4	4.7	
9	〃	DP 53	1.6×1.9	0.4	4.9	
10	管状土錘	DP202	(8.0)×(4.1)	1.3	(81.6)	一部残存

第7号住居跡（第135図）

本跡は，遺跡中央部から東寄りのG12h_0区を中心に確認され，第6号住居跡を切り込み，西側が第9号住居跡と重複している。第9号住居跡との新旧関係は，重複部に本跡のカマドが遺存していることにより，本跡の方が新しい。

平面形は一辺4.3mの隅丸方形を呈し，主軸方向はN－33°－Wを指している。壁高は10～15cmと浅く，壁は緩やかに立ち上がっている。床面はほぼ平坦で，粘土及び粘土小ブロックを含む硬質面がみられる。主柱穴は4か所検出され，柱穴間は2.7mの等間隔に規則的に配列され，直径34～40cm，深さ28～54cmで，北コーナー近くに位置するP_1が最小規模である。掘り込みの断面は円筒状を呈している。

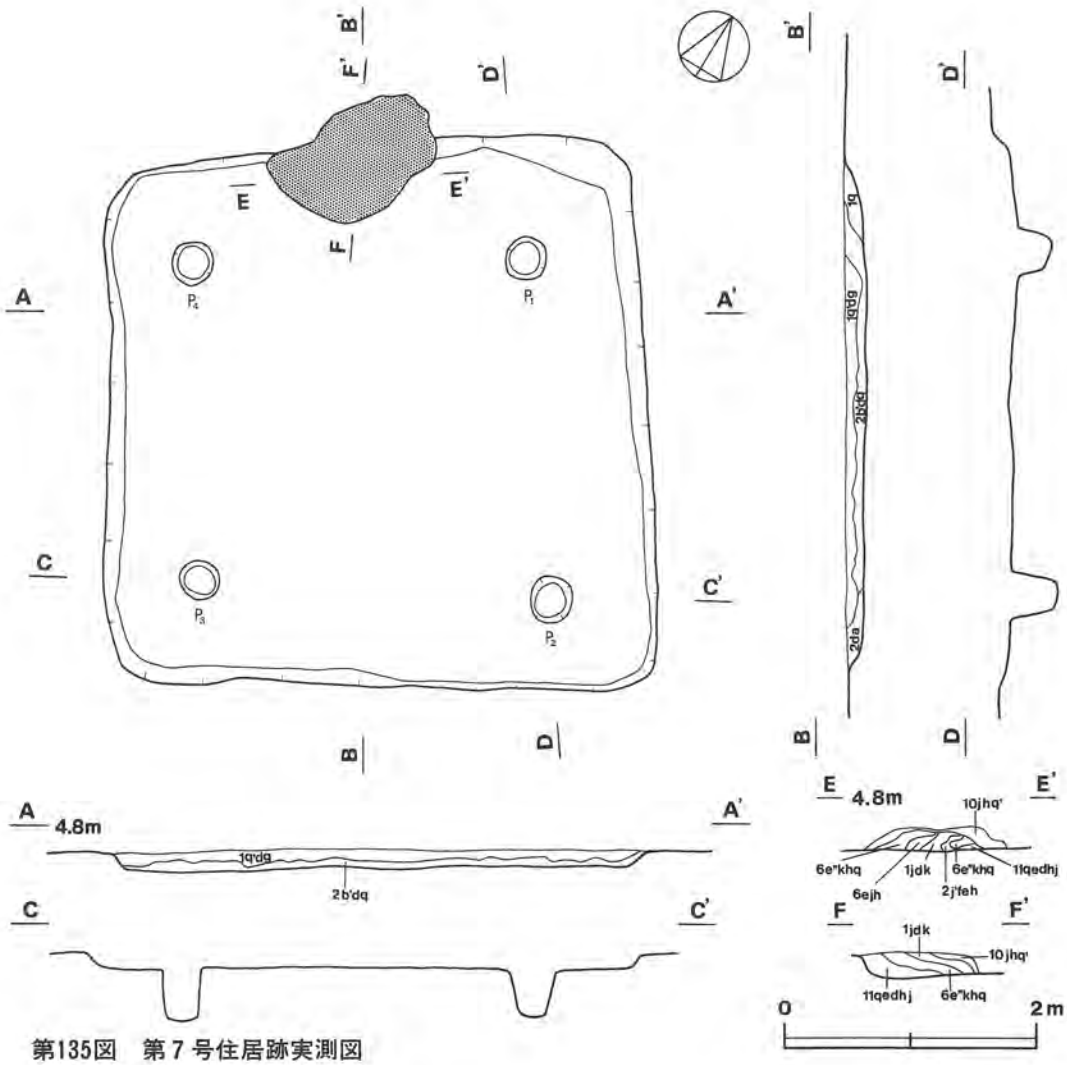
カマドは北西壁中央部に付設されているが，押しつぶれたように崩壊している。粘土や焼土が散乱しており，形状や規模等不明である。

覆土は自然堆積で，上層に少量の礫・焼土粒子・炭化物を含む褐色砂土，下層にロームブロックと少量の礫・焼土粒子を含む暗褐色砂土が主に堆積している。いずれも締まりがある。

遺物は土師器片や土製品がP_2・P_4付近以外のところから出土しているが，量は少ない。しかも覆土中からの出土が多い。ほぼ完形の土師器の坏形土器（第136図1），須恵器の坏（第136図2）と完形の蓋（第136図3），球状土錘（第136図4～6），砥石（第136図7）などが出土している。

第7号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第136図 1	坏形土器 土師器	A 14.0 B 4.3 C 3.4	底部は丸底で，体部は内彎して開き，口縁部との境に稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面－横ナデ。体部外面－ヘラ削り，内面－ナデ。	砂粒・スコリア 黒褐色 普通	90% P38
2	坏 須恵器	A 13.5 B 3.9 C 8.0	底部は平底で，体部は直線的に外上方に立ち上がり，口縁部に至る。	水挽き成形。底部は不定方向への手持ちヘラ削り。外周部ヘラ切り。切り離しは不明。	砂粒・雲母・長石 灰色 普通	80% P39
3	蓋 須恵器	A 11.6 B 2.6 F 2.0 G 0.8	つまみは擬宝珠状を呈し，天井部は平坦な天頂部からゆるやかに下降し，口縁部は屈曲して開く。端部は下につまみ出されている。	水挽き成形。天井部－回転ヘラ削り。	砂粒・細砂 灰色 普通	98% P40



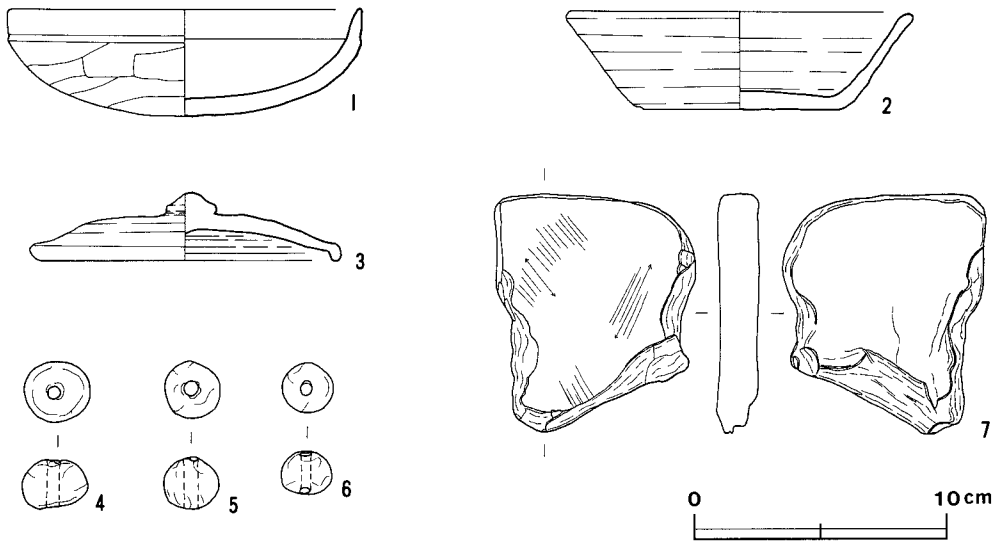
第135図　第７号住居跡実測図

第７号住居跡出土土製品一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	大きさ（cm） たて×よこ	孔径(cm)	重量(g)	備　考
第136図 4	球状土錘	DP54	1.9×2.7	0.5	11.9	
5	〃	DP55	2.1×2.3	0.6	10.1	
6	〃	DP56	1.7×2.0	0.5	6.2	

第７号住居跡出土石製品一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	大きさ（cm） 長さ×幅×厚さ	孔径(cm)	重量(g)	石　質	備　考
第136図 7	砥　石	Q2	(9.5)×(8.1)×(1.6)	—	(210.5)	流紋岩	一部残存



第136図　第７号住居跡出土遺物実測図

第８号住居跡

本跡は，G12g0区にカマド跡と思われる砂質粘土・焼土小ブロックが検出されただけで，形状・規模・各施設等全て確認できなかった。遺構確認面を捉えることができず，表土除去の際，掘り過ぎてしまったためである。

遺物はカマド跡付近に散布しているものを，本跡の番号を付して取り上げた。土師器片だけで，器形を窺えるものはない。

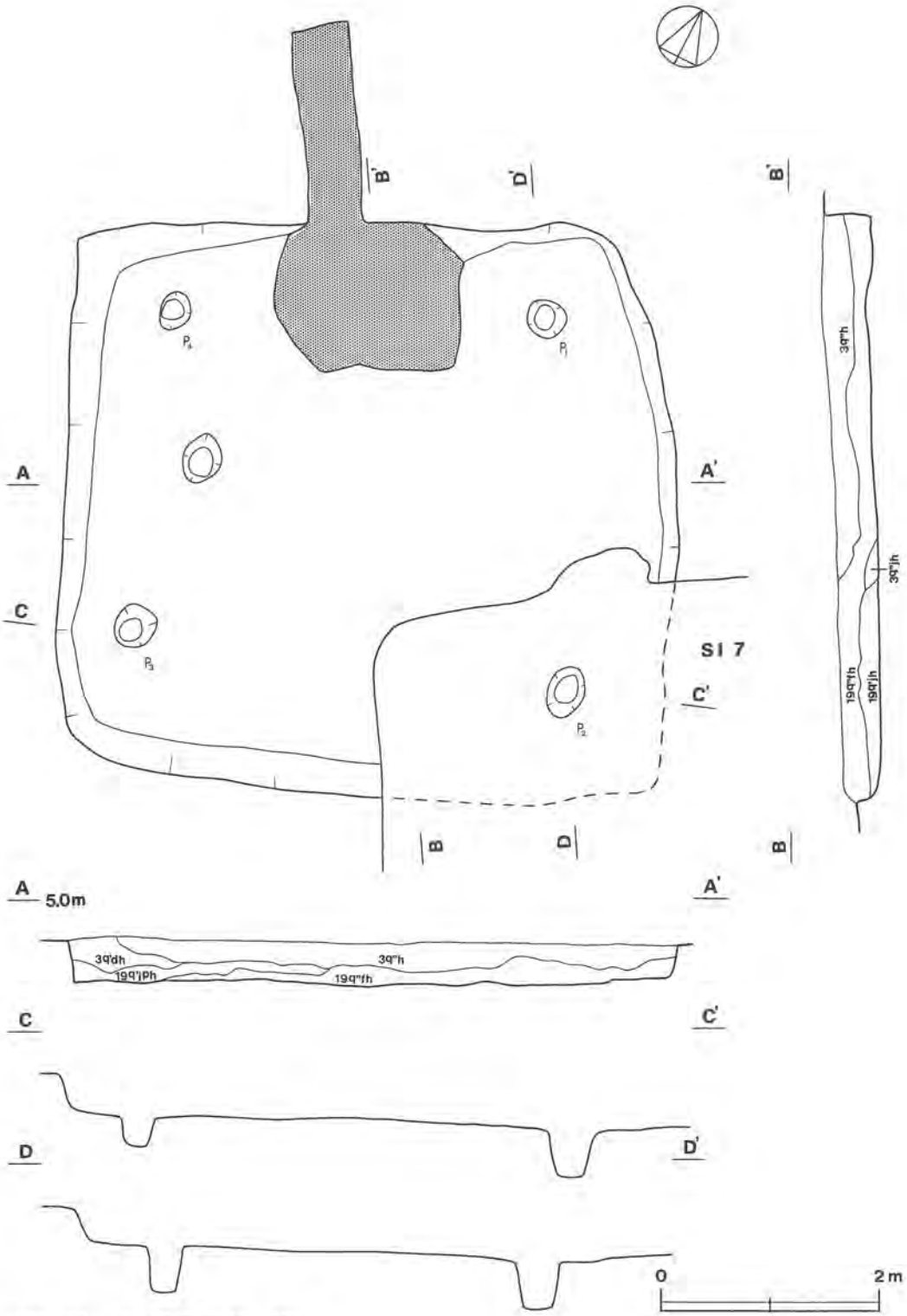
第９号住居跡（第137図）

本跡は，遺跡の中央部から東寄りのG12h9区を中心に確認され，東コーナー部は第７号住居跡に切り込まれている。

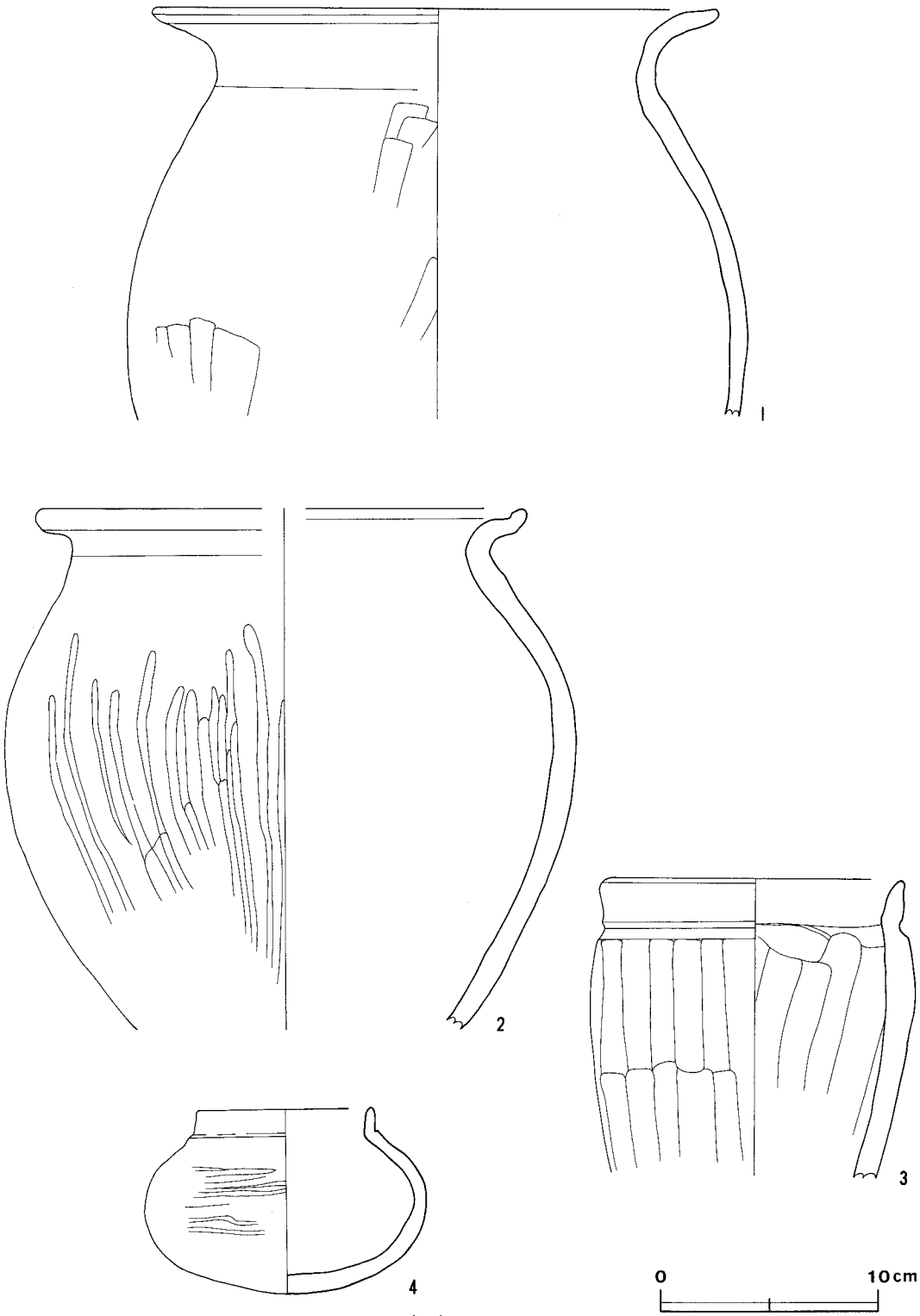
平面形は長軸（北東－南西）5.6m，短軸（北西－南東）5.3mの北東壁がやや膨らんだ隅丸方形を呈し，主軸方向はN－28°－Wを指している。壁高は20～30cmで，壁はほぼ垂直に立ち上がっている。床面は平坦である。ピットは５か所検出され，位置的にみるとP_1～P_4が主柱穴と思われる。直径34～40cm，深さ28～44cmで，掘り込みの断面は円筒状を呈している。

カマドは北西壁中央部に付設され，当遺跡のカマド跡の中では比較的遺存状態が良い。カマドの焚口部及び燃焼部は住居内に位置しており，煙道部が壁の北西側に延びている。煙道部が長く煙道方向で3.2m，両袖方向で1.7m，燃焼部は長径１m，短径0.5mの楕円形を呈している。カマド内より土師器の坏・甕形土器片が出土している。

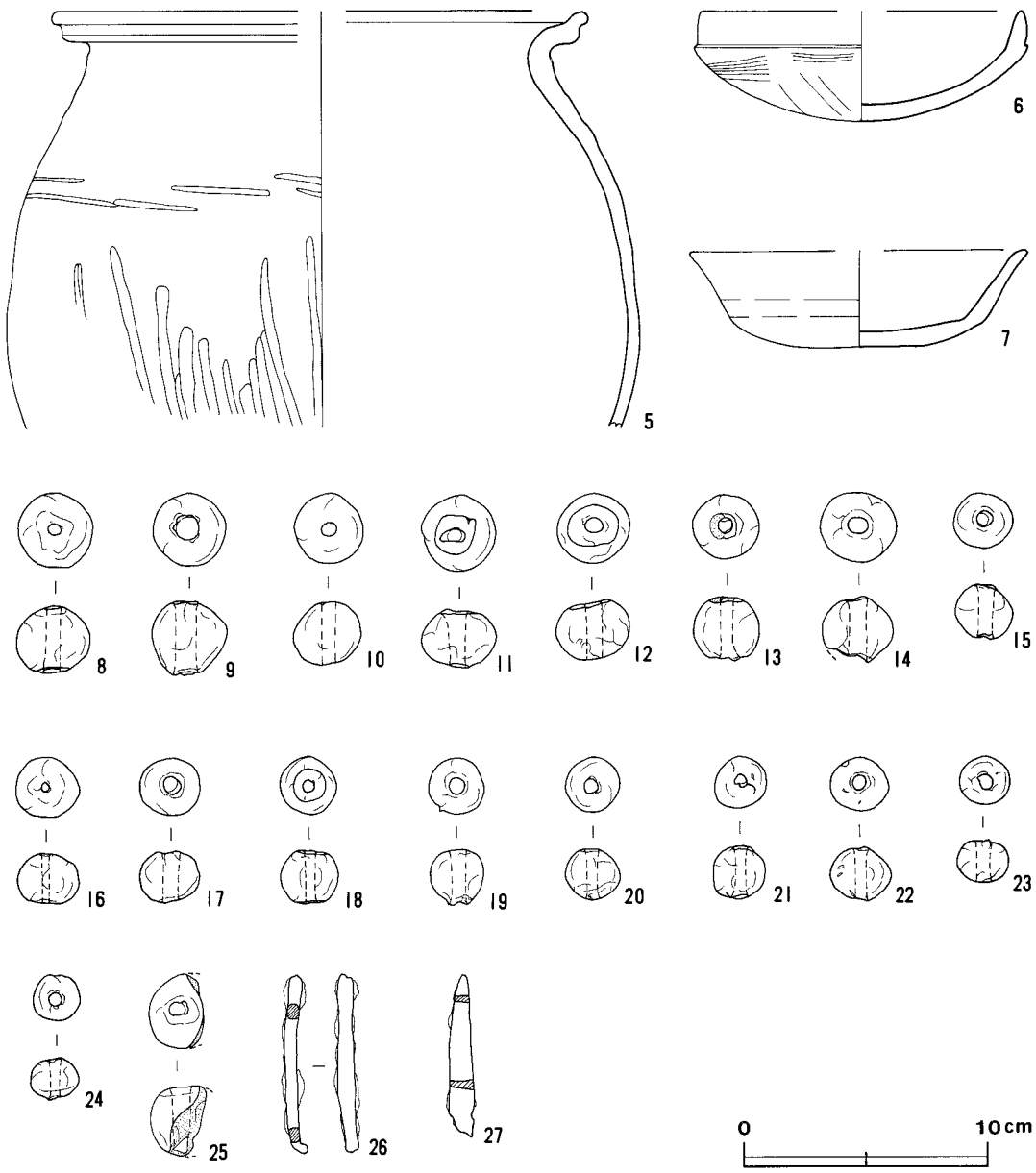
覆土は主に上層には黒褐色砂土，下層には黒色砂土が自然堆積しており，いずれも多量の礫と



第137図　第９号住居跡実測図



第138図　第９号住居跡出土遺物実測図（１）



第139図　第９号住居跡出土遺物実測図（２）

砂粒を含み，締まりがある。

遺物は土師器片を中心に，須恵器片，土製品などがカマド付近から検出された。器形を窺えるものとしては，土師器の口縁部から胴部にかけての甕形土器（第138図１・２・５），カマド西側から小型の甕形土器（第138図３），カマド西袖部付近から半完形の坏形土器（第139図６），須恵器の半完形の坏（第139図７），球状土錘（第139図８～25）が出土している。

第９号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第138図 1	甕形土器 土師器	A 26.0 B (18.9)	丸く張った胴部から，口縁部は大きく外彎して立ち上がる。	口縁部内・外面ー横ナデ。胴部外面ーヘラ削り。	砂粒・雲母・スコリア・礫 にぶい褐色 普通	30% P41
2	甕形土器 土師器	A (22.6) B (23.4)	胴部は上位に張りをもつ。口縁部は短く外反し，端部を上方につまみ出している。	口縁部内・外面ー横ナデ。胴部外面ーヘラナデ，内面ーナデ。	砂粒・雲母・長石 褐灰色 不良	40% P42
3	甕形土器 土師器	A 14.2 B (13.6)	胴部は肩部にやや張りをもつ長胴を呈し，口縁部との境に沈線をもつ。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面ー横ナデ。胴部内・外面ーヘラナデ。	砂粒・雲母 赤橙色 普通	50% P46
4	小型壺形土器 土師器	A (8.2) B 8.5 C 1.7	底部は丸底で，胴部は中位に張りをもつ扁平な球形を呈し，口縁部との境に段をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面ー横ナデ。胴部外面ーヘラナデ。	砂粒・雲母・長石・礫 明褐灰色 普通	80% P48
第139図 5	甕形土器 土師器	A (22.0) B (17.2)	胴部は中位にやや張りをもつ。口縁部は短く外反し，端部を上方につまみ出し，端部直下に沈線を巡らしている。	口縁部内・外面ー横ナデ。胴部外面ーヘラナデ，内面ーナデ。	砂粒・雲母・長石・石英 褐灰色 普通	30% P43
6	坏形土器 土師器	A (13.2) B 4.5 C (ー)	底部は丸底で，体部は内彎しながら外上方に開き，口縁部との境に段をもつ。口縁部は短く，直立する。	口縁部内・外面ー横ナデ。体部外面ーヘラナデ，内面ー横ナデ。	砂粒・スコリア・石英 にぶい橙色 普通	45% P49
7	坏 須恵器	A (13.9) B 4.0 C 6.0	底部は平底で，体部は直線的に外上方に立ち上がり，口縁部は外反する。	底部ー手持ちによる一定方向へのヘラ削り。外周部ヘラ切り。切り離しは不明。水挽き成形。	砂粒 褐灰色 普通	40% P51

第９号住居跡出土土製品一覧表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ (cm) たて×よこ	孔径(cm)	重量(g)	備考
第139図 8	球状土錘	DP57	2.9×3.1	0.8	25.5	
9	〃	DP58	3.0×3.0	1.0	23.7	
10	〃	DP59	2.5×2.9	0.6	18.8	
11	〃	DP60	2.4×3.1	0.6	19.7	
12	〃	DP61	2.5×2.9	0.8	20.0	
13	〃	DP62	2.6×2.7	0.5	17.3	
14	〃	DP63	(2.7)×3.0	0.8	(18.2)	一部欠損
15	〃	DP64	2.3×2.4	0.7	11.3	
16	〃	DP65	2.1×2.5	0.3	13.5	
17	〃	DP66	2.1×2.4	0.7	11.0	
18	〃	DP67	2.2×2.4	0.5	12.5	
19	〃	DP68	2.3×2.3	0.7	10.3	
20	〃	DP69	2.1×2.2	0.5	9.7	
21	〃	DP70	2.2×2.2	0.5	9.8	
22	〃	DP71	2.2×2.4	0.5	10.3	

図版番号	名　　称	台帳番号	大きさ（cm）たて×よこ	孔径(cm)	重量(g)	備　考
23	球状土錘	DP72	1.8×2.1	0.6	6.4	
24	〃	DP73	1.8×2.0	0.5	5.6	
25	〃	DP74	(2.9)×3.1	0.8	(15.9)	半分欠損

第9号住居跡出土鉄製品一覧表

図版番号	名　　称	台帳番号	法量（cm）			形　態　の　特　徴	備　考
			長さ	幅	厚さ		
第139図 26	釘	M3	7.3	0.6	0.4	断面長方形。	
27	刀　　子	M4	(6.7)	1.0	0.2	刀身。断面三角形。	

第10号住居跡（第140図）

本跡は，遺跡の最西端G11f$_3$区を中心に確認され，後九郎兵衛遺跡に隣接して位置している。北側4mには第26号住居跡が存在する。

東コーナー部の壁を掘り過ぎ，南コーナー部が撹乱されていて不明な部分もみられるが，平面形は一辺5mの隅丸方形を呈し，主軸方向はN－27°－Wを指している。壁高は15～20cmで，壁はやや緩やかに立ち上がっている。床面は平坦で，わずかに北側に向かって傾斜している。ピットは4か所検出され，いずれも主柱穴で，直径30～46cm，深さ17～31cmを測り，P_2がコーナー部寄りに配列されている。ピットの底面はほぼ平坦である。

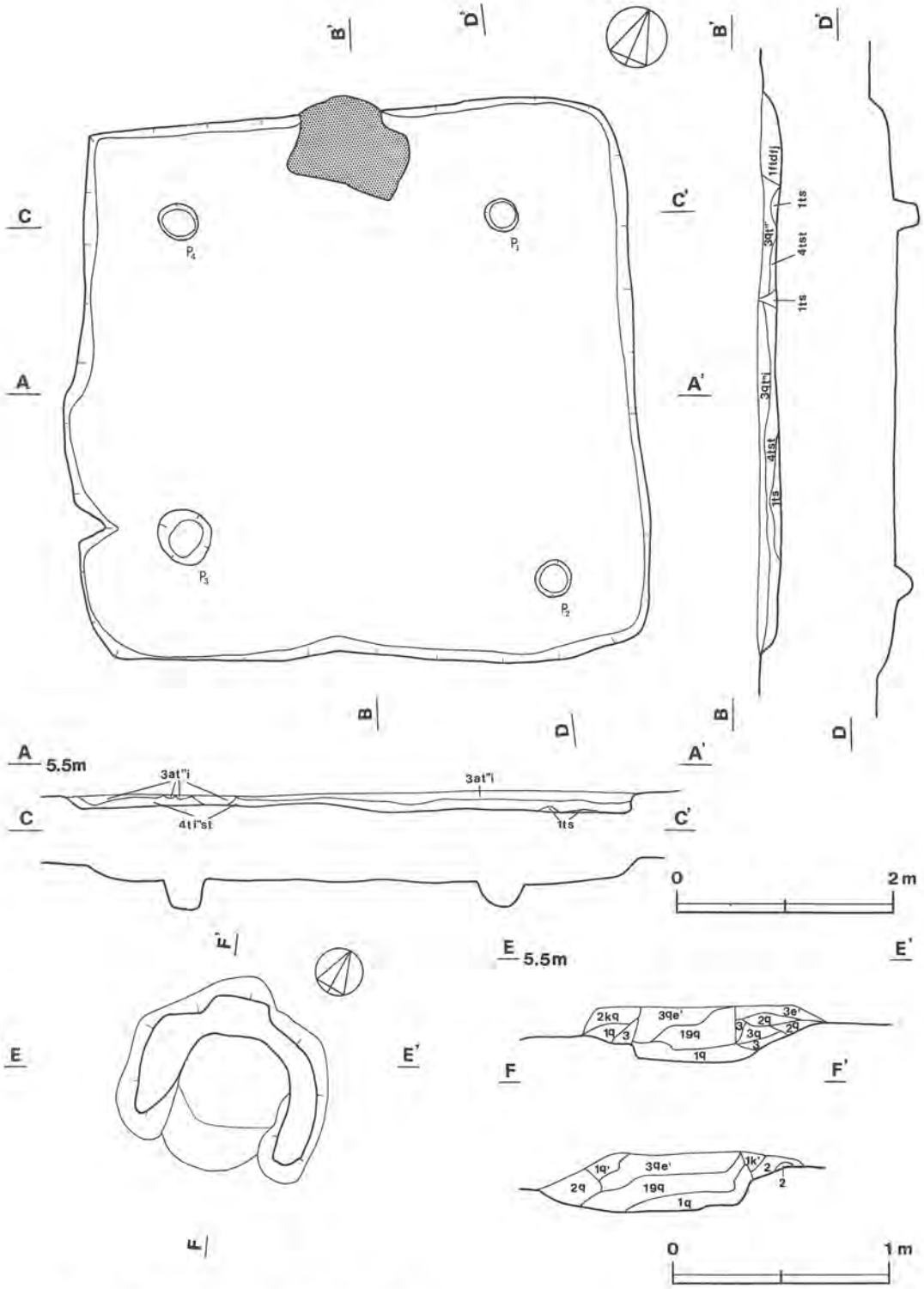
カマドは北西壁中央部に付設され，焚口部と燃焼部は住居内に位置するが，表面の大部分は削平されて遺存が悪い。袖部は褐灰色の粘質砂土で構築されている。両袖部は幅0.95m，燃焼部は直径0.65mの円形状を呈し，内側及び火床は赤変硬化している。

覆土は上層に多量の石英・長石を含む黒褐色砂土，下層に多量の長石と極少量の炭化粒子を含む極暗褐色土が堆積している。

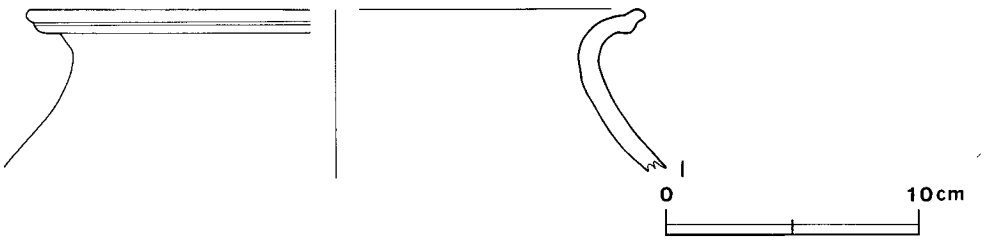
遺物は住居跡全域から土師器片を中心に，須恵器片，縄文式土器片などが出土している。住居跡中央からやや北側の床面より土師器の甕形土器の口縁部（第141図1）が出土している。縄文式土器片は覆土中からの出土で，本跡が埋没する過程で流れ込んだものと思われる。

第10号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　　考
第141図 1	甕形土器 土師器	A (24.6) B (6.3)	口縁部は短く外彎して立ち上がり，端部を外上方につまみ出している。端部直下に沈線を巡らしている。	口縁部内・外面－横ナデ。	砂粒・スコリア・雲母・礫 にぶい赤褐色 普通	10% P52



第140図　第10号住居跡・カマド実測図



第141図　第10号住居跡出土遺物実測図

第11号住居跡（第142図）

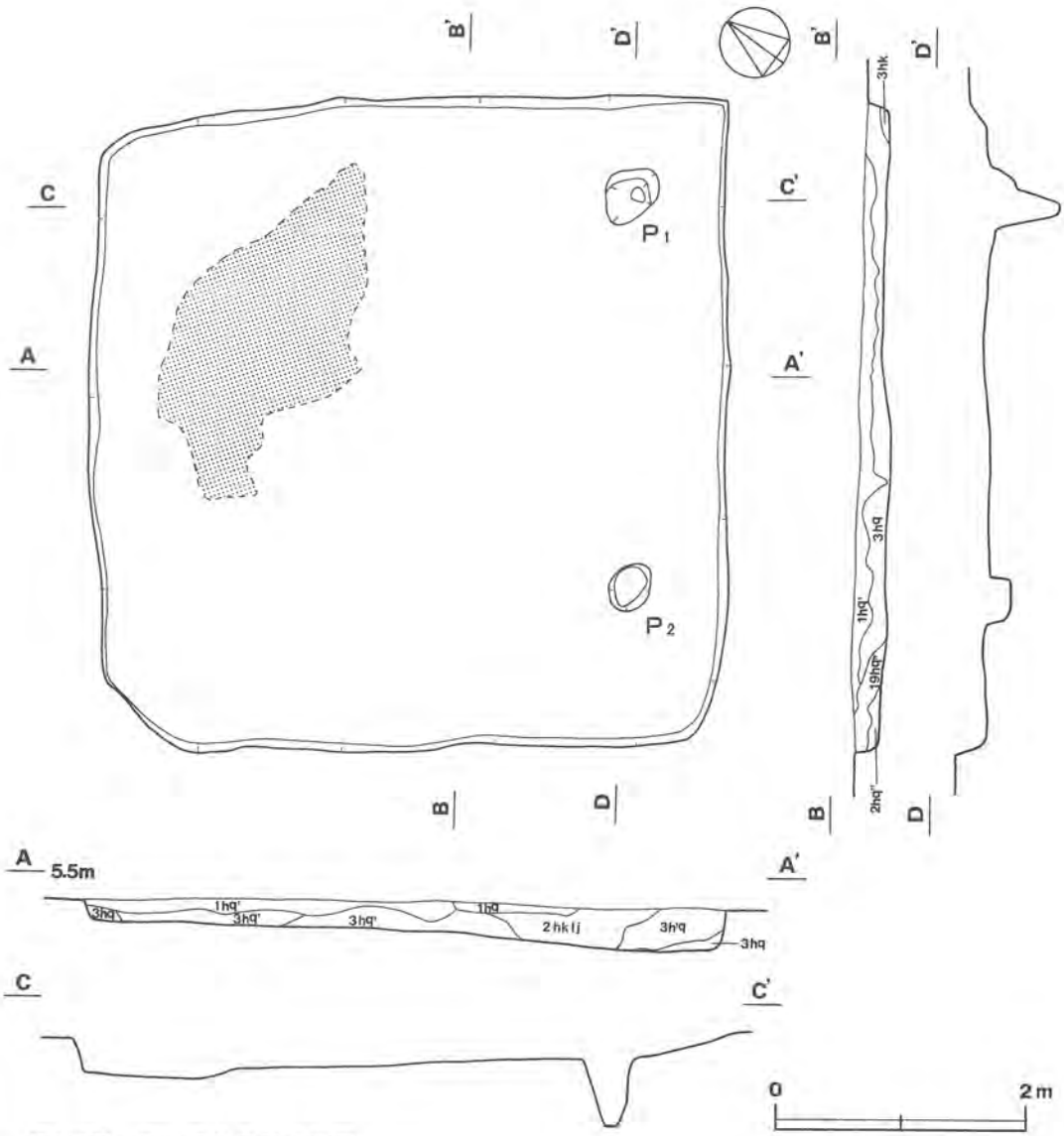
本跡は，遺跡の西側G11e5区を中心に確認され，西側遺構群のほぼ中央部に位置し，東側３ｍに第13号住居跡が存在する。

平面形は東コーナー部が直角で，他の３コーナー部が隅丸状の方形を呈し，一辺5.2ｍを測り，主軸方向はＮ－35°－Ｗを指している。壁高は15～27cmで，壁は東コーナー部付近はなだらかな立ち上がりを示しているが，他はほぼ垂直に立ち上がっている。床面はやや凸凹しており，北コーナー寄りのところは一段（７cmぐらい）低くなっている。ピットは東と南コーナー寄りのところに２か所検出され，どちらも主柱穴と思われる。

カマドは北西壁に付設されていたと考えられるが，焼土が住居跡北側部に大きく流出している。これは，撹乱を受けたものが雨水等により流出したと推測できる。この付近の遺物出土状況は，撹乱を受けて散乱状況を呈している。

覆土は上層に小礫を含む褐色砂土，下層に少量の礫を含む黒褐色砂土，壁際に多量の小・中礫を含む黒褐色砂土が堆積しており，いずれも締まっている。また，南東側に粘土ブロックと極少量の酸化鉄・粘土粒子を含む固く締まった暗褐色砂土の層がみられる。

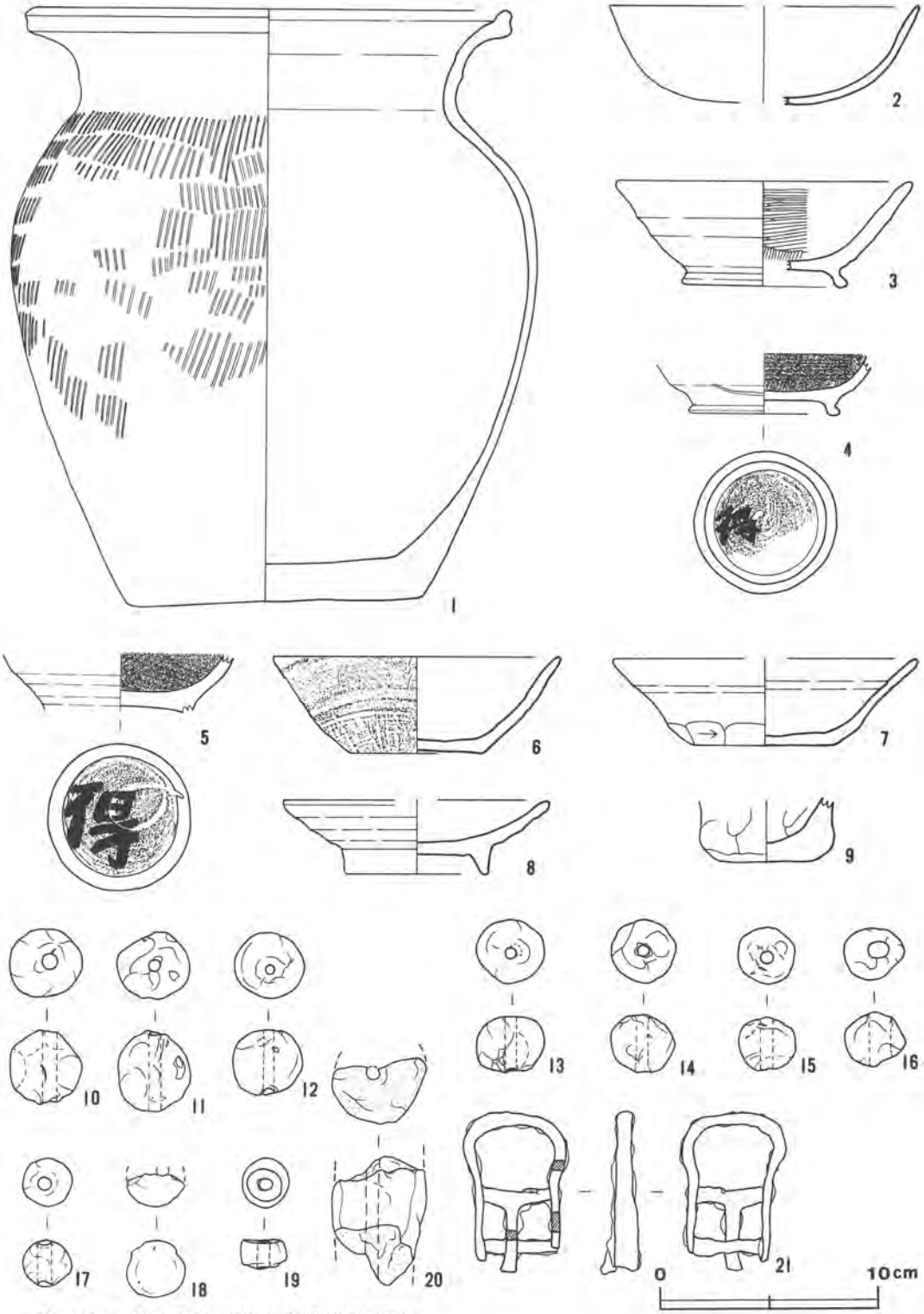
遺物は住居跡全域から多量の土師器片と少量の須恵器片や土製品が出土している。当遺跡の住居跡群の中では出土量が最も多い。土師器は，西コーナー近くの覆土中から半完形の坏形土器(第143図２），P_1付近の床面からほぼ完形の高台付坏形土器（第143図３），P_1とP_2の中間の床面と北西壁寄りのところから墨書された高台付坏形土器（第143図４・５），須恵器は北東壁際の覆土中から半完形の甕（第143図１），南西側の覆土中からほぼ完形の坏（第143図６），北東壁寄りの床面から半完形の坏（第143図７）が出土している。土製品は，球状土錘が９点（第143図10～18），管状土錘が２点（第143図19・20）出土している。



第142図　第11号住居跡実測図

第11号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第143図 1	甕 須恵器	A 22.3 B 27.3 C 13.5	底部は平底で，胴部は上位に張りをもつ。口縁部は「コ」の字状を呈し，端部は直立してつまみ出されている。	口縁部内・外面－横ナデ。胴部外面－縦位の平行叩き目。	砂粒・雲母・スコリア にぶい赤褐色 普通	60% P53
2	坏形土器 土師器	A (14.2) B (4.5) C (－)	底部は丸底で，体部は内彎して外上方に開き，口縁部は外傾する。	口縁部内面－横ナデ，外面－ナデ。体部外面－ナデ	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	30% P55



第143図　第11号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第143図 3	高台付坏形土器 土師器	A 13.6 B 4.8 D 7.3	高台は「ハ」の字状に開き，接地面は丸味を帯びる。体部は内彎気味に開く。	口縁部内・外面－横ナデ。体部外面－ヘラナデ，内面－ヘラ磨き。高台部内・外面－横ナデ。	砂粒・長石 灰褐色 普通	70% P56
4	高台付坏形土器 土師器	B（2.8） D 7.0 E 0.5	高台は「ハ」の字状に開き，接地面は平坦である。体部は下位に稜をもち，外上方に開く。	高台部内・外面－横ナデ。体部内面－ヘラ磨き・黒色処理。底部に文字が刻まれている。	砂粒・スコリア 淡橙色 普通	20% P58
5	高台付坏形土器 土師器	B（2.6）	高台欠損。体部は内彎して立ち上がる。	底部－回転糸切り。「得」の墨書あり。体部外面－ヘラナデ，内面－ヘラ磨き・黒色処理。	砂粒・石英 にぶい橙色 普通	30% P57
6	坏 須恵器	A 13.4 B 4.5 C 6.2	底部は平底で，体部は内彎気味に外上方に開き，口縁部は外傾する。	水挽き成形。底部－切り離し後一定方向へのヘラ削り。外周部ヘラ切り。体部外面－下位ヘラ削り。	砂粒・雲母・スコリア 灰褐色 普通	70% P60
7	坏 須恵器	A（14.0） B 4.0 C 6.5	底部は平底で，体部は外反気味に外上方に立ち上がる。	水挽き成形。底部－切り離し後一定方向へのヘラ削り。体部外面－下位ヘラ削り。	砂粒・スコリア 礫 黄灰色 普通	50% P62
8	高台付盤 須恵器	A（12.2） B 3.4 D 6.6 E 0.9	高台は垂直で，接地面は丸味を帯びる。体部は外上方に内彎して開く。	高台－貼り付け後ナデ調整。	砂粒・雲母・礫 黄灰色 普通	20% P63
9	手捏土器 土師器	B（.28） C（4.3）	底部は平底で，胴部はほぼ垂直に立ち上がる。	胴部内・外面－指ナデ。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	10% P59

第11号住居跡出土土製品一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	大きさ（cm）たて×よこ	孔径（cm）	重量（g）	備　考
第143図 10	球状土錘	DP75	3.4×3.3	0.7	32.4	
11	〃	DP76	3.7×3.4	0.5	33.5	
12	〃	DP77	3.0×3.2	0.4	28.5	
13	〃	DP78	2.6×3.1	0.5	21.3	
14	〃	DP79	2.7×3.0	0.7	22.5	
15	〃	DP80	2.5×2.7	0.6	14.0	
16	〃	DP81	2.5×2.8	0.9	(13.3)	一部欠損
17	〃	DP82	2.2×2.3	0.6	7.7	
18	〃	DP83	(2.6)×(2.7)	—	(7.3)	一部残存
19	管状土錘	DP224	(5.9)×(4.4)	0.6	(57.7)	一部残存
20	〃	DP224	1.3×2.3	0.6	6.3	

第11号住居跡出土鉄製品一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	法量（cm）			形態の特徴	備　考
			長さ	幅	厚さ		
第143図 21	鋏具	M 5	(7.3)	4.9	1.1	完存。	

第12号住居跡（第144図）

本跡は，第11号住居跡の南東５ｍのところに位置し，南側は調査区域外に延びているため未調査である。

北東壁・北西壁・北コーナー・東コーナー・西コーナーの各部位及び南東壁と南西壁の一部を検出した結果，平面形は一辺６ｍの隅丸方形を呈するものと思われ，当遺跡の住居跡群の中では大形に属する。壁高は30～40cmで，壁は東側が緩やかな立ち上がりを示し，他はほぼ垂直に立ち上がっている。本来は垂直に掘り込まれていたと考えられるが，礫を含む砂土のため壁上面が崩壊したものであろう。床面は平坦である。ピットは５か所検出され，P_1～P_3が主柱穴で，直径37～42cm，深さ24～38cmである。P_4とP_5については性格等不明である。

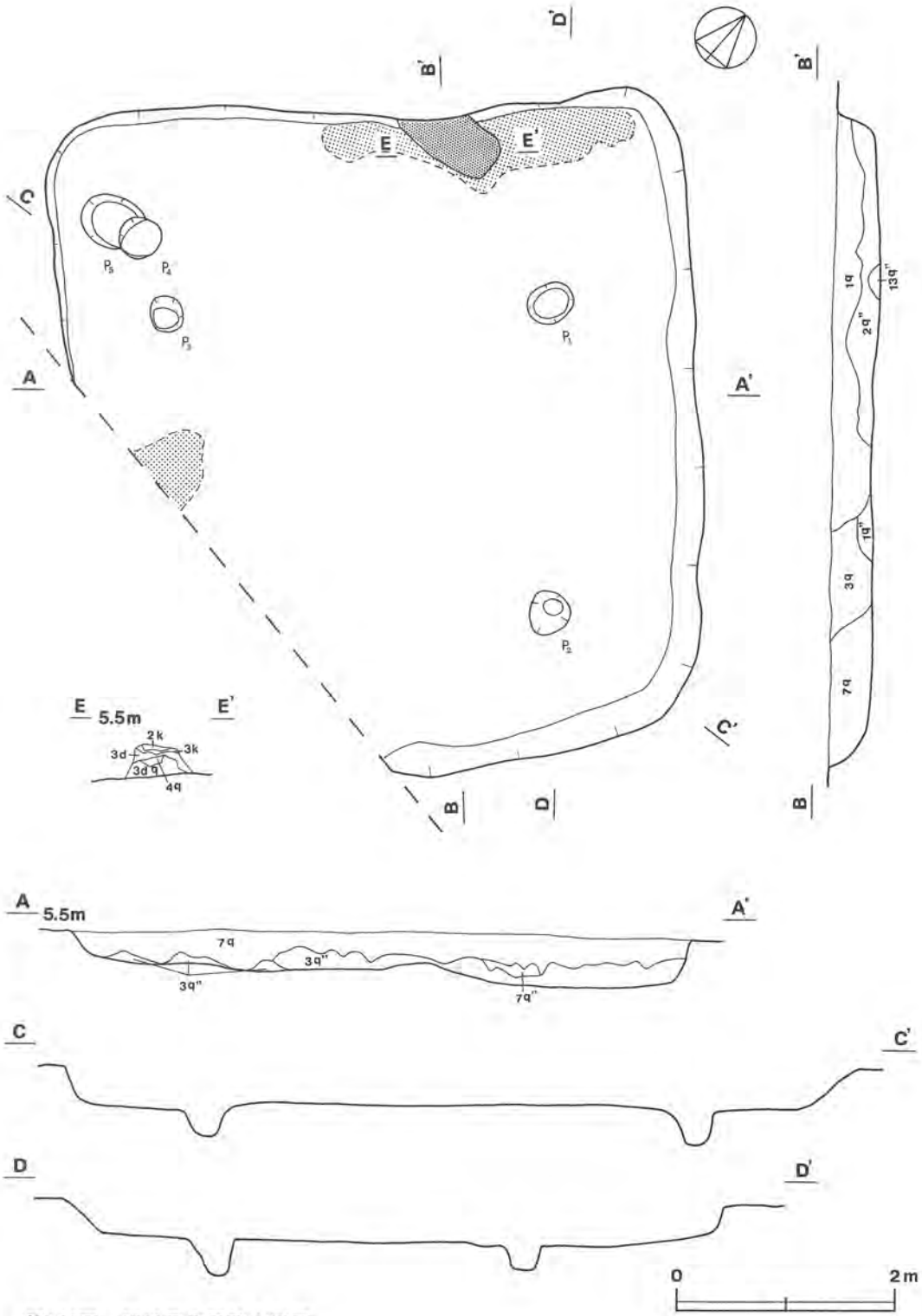
北西壁際にカマド跡と思われる焼土が点在している。カマドと断定できる各部位が検出できなかった。

覆土は主に上層には灰褐色砂土，下層には黒褐色砂土が堆積しており，小礫を多量に含み，締まりがある。

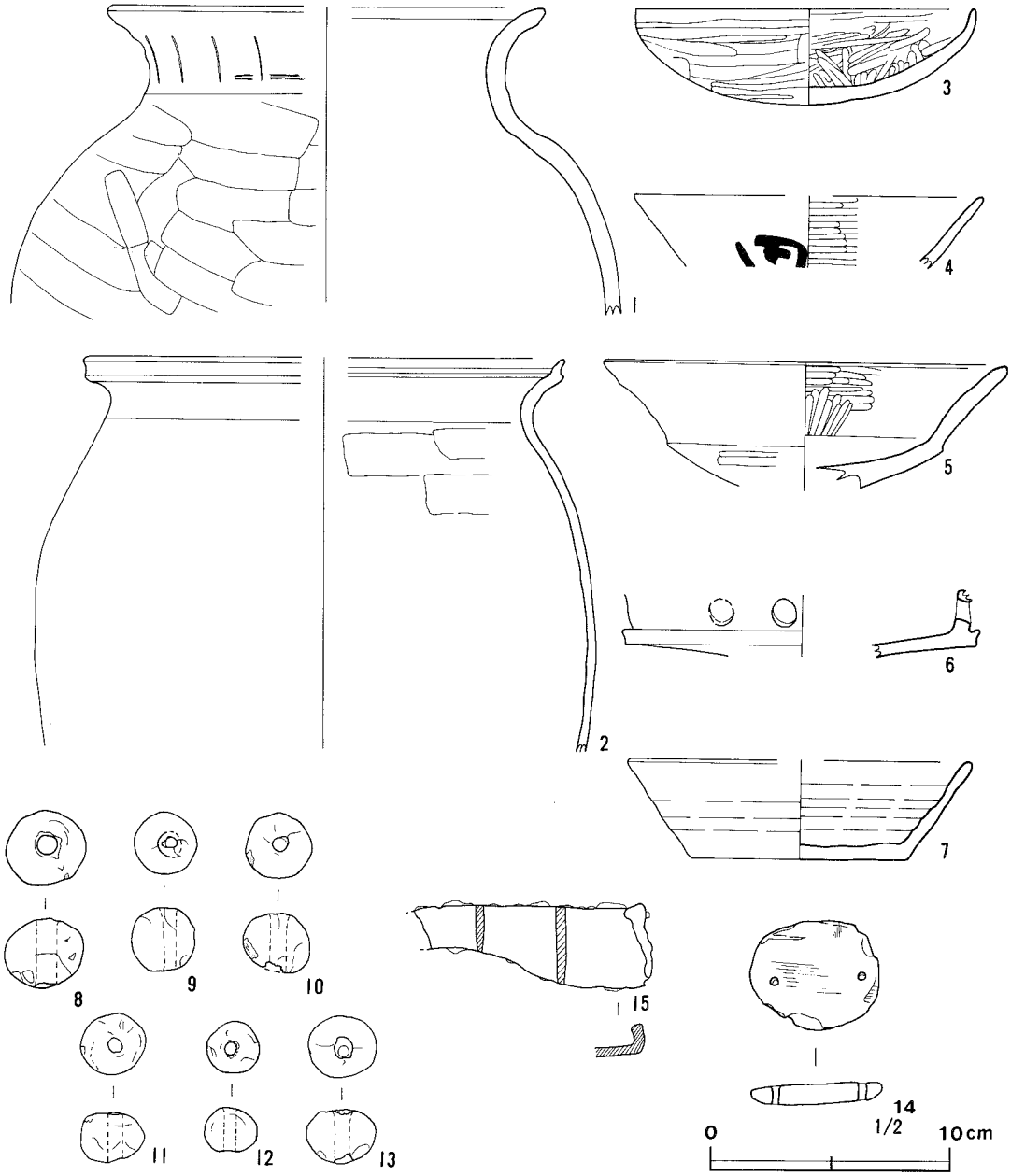
遺物は住居跡全域から多量の土師器片と極少量の須恵器片や土製品・石製品が出土している。大半は覆土中からの出土である。器形を窺えるものとしては，土師器では，P_1の南東30cmの床面から倒立状態で口縁部から胴部にかけての甕形土器（第145図１），北西壁際から半完形の坏形土器（第145図３），西コーナー寄りの覆土中から高坏形土器の坏部（第145図５），須恵器では，北東壁中央部寄りの覆土中から半完形の坏（第145図７）が出土している。その他に，球状土錘が６点（第145図８～13）石製の双孔円板が１点（第145図14）出土している。

第12号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第145図 1	甕形土器 土師器	A（18.2） B（12.6）	丸い胴部から口縁部は外彎して立ち上がる。	口縁部外面－ヘラ削り後横ナデ，内面－横ナデ。胴部外面－横位のヘラ削り，内面－ナデ。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	30% P66
2	甕形土器 土師器	A（20.3） B（16.6）	胴部は長胴を呈し，口縁部は短く外彎して立ち上がり，端部は段をもち，外上方につまみ出されている。	口縁部内・外面－横ナデ。胴部外面－ヘラナデ，内面－ナデ。	砂粒・雲母・礫 にぶい褐色 普通	30% P67
3	坏形土器 土師器	A　14.2 B　4.1 C（－）	底部は丸底で，体部は内彎して開き，口縁部は直立する。	口縁部内・外面－ナデ。体部外面－ヘラ削り後雑なヘラ磨き，内面－ヘラ磨き。	砂粒 暗赤灰色 普通	50% P69
4	坏形土器 土師器	A（14.8） B（3.0）	体部は直線的に外上方に開き，そのまま口縁部に至る。	口縁部内・外面－横ナデ。体部外面－横ナデ。「田」の墨書がある。内面－横ナデ。	砂粒・石英 にぶい橙色 普通	10% P71



第144図　第12号住居跡実測図



第145図　第12号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第145図 5	高坏形土器 土　師　器	A　17.0 B（5.4）	体部は内彎して開き，中位に稜をもつ。口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部外面ー横ナデ，内面ーヘラ磨き。体部内・外面ーヘラ磨き。	砂粒・雲母 橙色 普通	50% P72

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第145図 6	器台形土器 土師器	B（2.9）	体部は外上方に開き，端部を内側に折り返し，口縁部へ続く。口縁部は直立し，孔を穿っている。	口縁部内・外面－横ナデ。体部外面－横ナデ，内面－ヘラ磨き。	砂粒・スコリア 雲母 にぶい赤褐色 普通	10% P74
7	坏 須恵器	A（14.4） B　4.3 C　9.2	底部は平底で，体部は直線的に外上方に立ち上がり，そのまま口縁部に至る。	水挽き成形。底部－一定方向へのヘラ削り。外周部ヘラ切り。切り離しは不明。	砂粒・細砂・礫 灰色 普通	50% P75

第12号住居跡出土土製品一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	大きさ（cm）たて×よこ	孔径（cm）	重量（g）	備　考
第145図 8	球状土錘	DP84	2.9×3.4	0.9	28.5	
9	〃	DP85	2.7×2.7	0.5	17.7	
10	〃	DP86	(2.5)×2.8	0.7	(16.1)	一部欠損
11	〃	DP87	(2.0)×(2.8)	0.6	(13.2)	一部欠損
12	〃	DP88	1.8×2.2	0.5	7.9	
13	〃	DP89	2.2×2.9	0.8	16.7	

第12号住居跡出土石製品一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	大きさ（cm）長さ×幅×厚さ	孔径(cm)	重量(g)	石　質	備　考
第145図 14	有孔円板	Q27	3.1×3.6×0.7	0.2	12.1	滑　石	双孔

第12号住居跡出土鉄製品一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	法量（cm）長さ	幅	厚さ	形態の特徴	備　考
第145図 15	鎌	M6	(10.1)	3.3	0.2	柄装着部欠損。	

第13号住居跡（第146図）

本跡は，遺跡の西側G11d_7区を中心に確認され，北側は調査区域外に延びているため未調査である。西側3mには第11号住居跡が存在する。

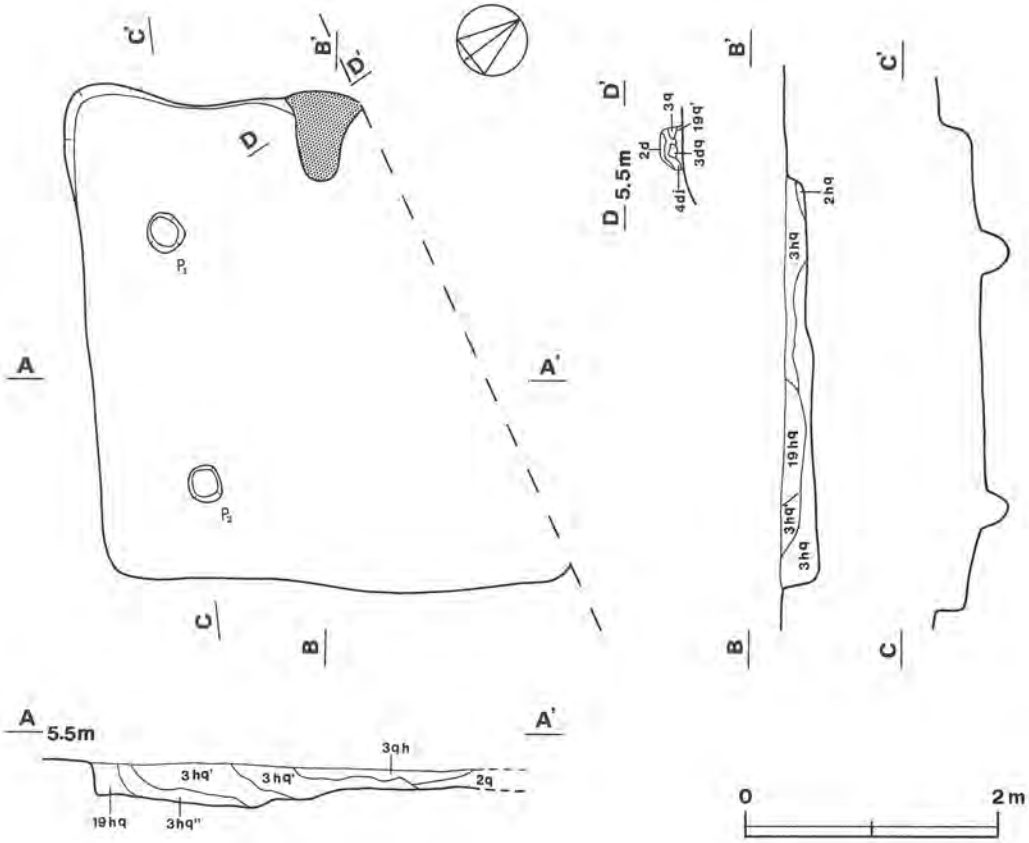
壁を検出できたのは南西壁・南コーナー・西コーナーと南東壁・北西壁の一部で，南西壁の長さは3.9m，南・西コーナーは隅丸を呈している。壁高は26cmで，壁は垂直に立ち上がっている。床面は南側に向かってわずかに傾斜しているがほぼ平坦で，締まりはなく，酸化砂土のブロックが点在している。ピットはコーナー部よりかなり内側に位置し，直径26cm前後，深さ22・25cmと小規模である。P_1・P_2とも位置から主柱穴と考えられる。

カマド跡と思われる焼土が，北西壁の調査区域外との境界に検出された。一部分であるため，

規模や形状等不明であるが，南西側袖部の幅は36cmで，覆土中から土師器の甕形土器片が出土している。

覆土は黒色砂土及び黒褐色砂土が自然堆積しており，いずれも礫を含んでいる。

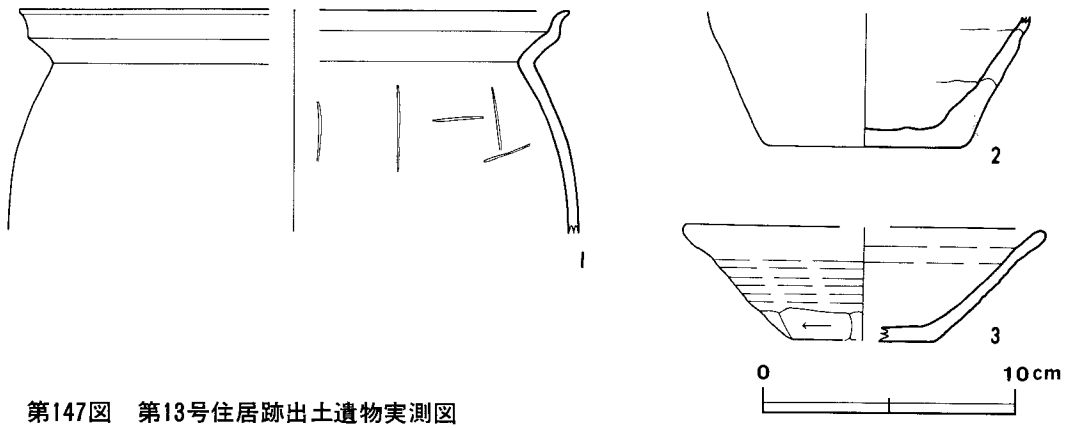
遺物の出土量は少なく，大半が土師器片である。甕形土器や坏形土器の破片が点在して出土している。



第146図　第13号住居跡実測図

第13号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第147図 1	甕形土器 土師器	A (21.8) B (8.8)	口縁部は「く」の字状に外反し，さらに直立し，端部は外上方につまみ出されている。	口縁部内・外面－横ナデ。胴部外面－上位横ナデ，内面－ナデ。	砂粒・雲母・礫 にぶい橙色 普通	10% P76
2	甕形土器 土師器	B (5.2) C 7.7	底部は平底で，胴部は直線的に外上方に立ち上がる。	胴部外面－ナデ，内面－ナデ。輪積痕が残る。	砂粒・石英・礫 スコリア・雲母 にぶい橙色 普通	30% P77



第147図　第13号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第147図 3	坏形土器 土師器	A (14.4) B　4.5 C (5.8)	底部は平底で，体部は直線的に外上方に開き，口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面ーヘラナデ。 体部内・外面〜ヘラナデ。	砂粒・雲母・礫 褐灰色 普通	10% P78

第14号住居跡（第148図）

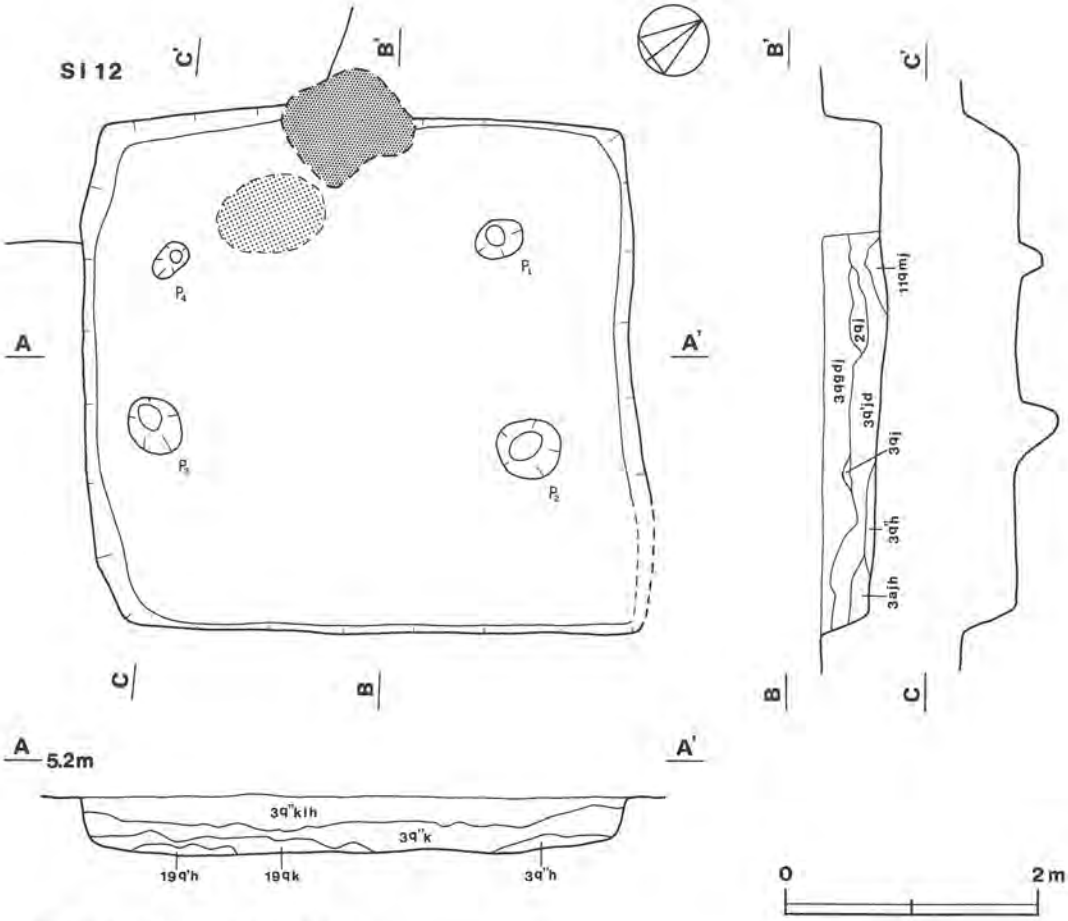
本跡は，G11g8区を中心に多量の遺物の散布が認められ，最初はSX－3として調査を進めたが，遺物を取り上げたところ住居跡のプランに似た方形状の黒褐色砂土の落ち込みが確認されたので，第14号住居跡として調査を実施したものである。西コーナー部は第12号住居跡に切り込まれている。

平面形は一辺4.1mほどの方形を呈し，主軸方向はN－53°－Wを指している。壁高は40〜45cmで，壁はほぼ垂直に立ち上がっている。床面は平坦で，カマドの前は硬く締まっている。 P_1〜P_4は主柱穴で，長方形状に配列されている。規模は直径30〜50cm，深さ20〜55cmで，P_4が最小規模である。

カマドは北西壁中央部に付設され，遺存状態が悪く，カマドを構築していたと思われる粘質砂土が崩落してわずかに堆積しているだけである。

覆土は黒褐色砂土を主体に自然堆積をしており，南側下層に黒色砂土，東側床面近くに暗赤褐色砂土の堆積もみられる。いずれも小礫を含み，上層には粘土粒子や極少量の炭化物が含まれている。

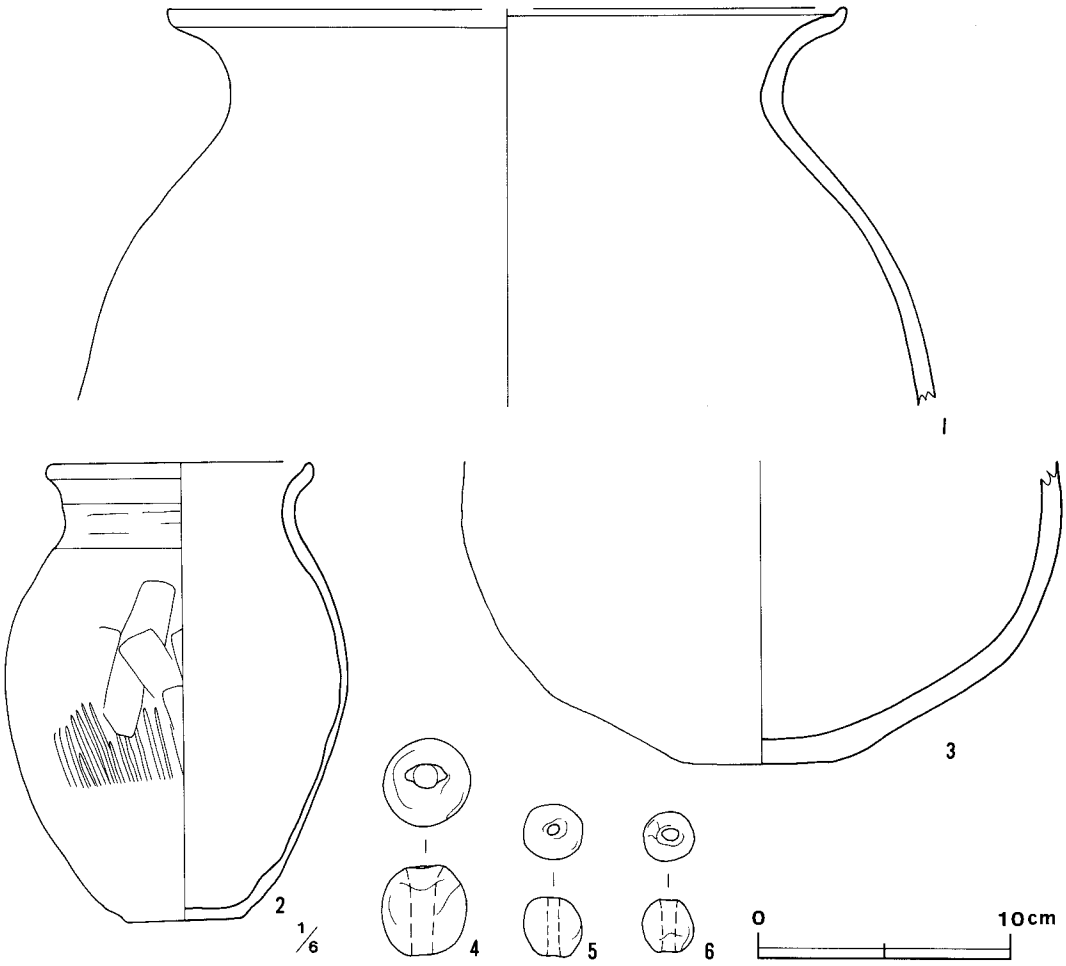
遺物は大半が土師器片で，極少量の土製品・鉄製品も覆土中から出土している。半完形の甕形土器（第149図２）がほぼ中央部から押しつぶれた状態で検出されている。また，土製品では球状土錘３点（第149図４〜６）のほかに，カマドの補強材として使用したと思われる支脚の一部がカマドの前から検出されている。



第148図　第14号住居跡実測図

第14号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第149図 1	甕形土器 土師器	A (26.0) B (15.8)	球形の胴部から口縁部は外彎して立ち上がり，端部を上方につまみ出している。	口縁部内・外面ー横ナデ。	砂粒・雲母・長石 灰褐色 普通	10% P157
2	甕形土器 土師器	A 21.2 B 36.0 C 9.1	底部は平底で，胴部は中位にやや張りをもつ卵形を呈し，口縁部は外彎し，端部を上方につまみ出している。	口縁部内・外面ー横ナデ。胴部外面ー中位ヘラ削り，下位ヘラ磨き，内面ーナデ。	砂粒・雲母・長石 にぶい褐色 普通	60% P156
3	壺形土器 土師器	B (12.0) C 6.8	底部は平底で，胴部は内彎しながら立ち上がる。	胴部外面ーヘラ磨き，内面ーナデ。	砂粒・礫・雲母 長石・スコリア 暗赤灰色 不良	100% P158



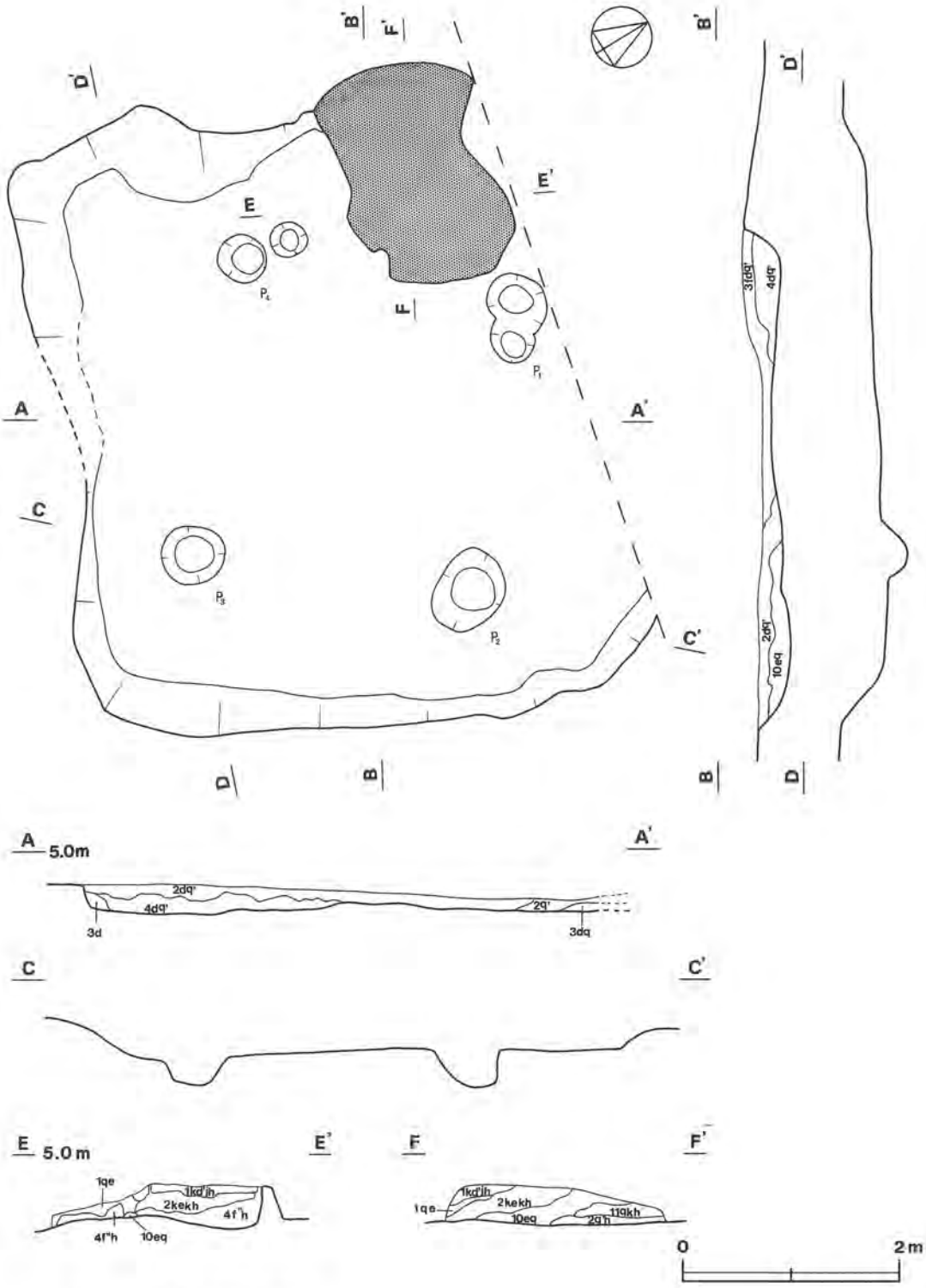
第149図　第14号住居跡出土遺物実測図

第14号住居跡出土土製品一覧表

図版番号	名　　称	台帳番号	大きさ（cm）たて×よこ	孔径（cm）	重量（g）	備　考
第149図 4	球状土錘	DP117	3.6×3.5	1.6	36.7	
5	〃	DP118	2.5×2.4	0.5	10.9	
6	〃	DP119	2.1×2.1	0.7	7.2	

第17号住居跡（第150図）

本跡は，遺跡のほぼ中央部G12f8区を中心に確認され，北側は調査区域外に延びており，北西側は第18号住居跡，南西側は第20号住居跡と重複している。新旧関係は，本跡が第18号住居跡より古く，第20号住居跡との関係は不明である。



第150図　第17号住居跡実測図

壁や床面の崩壊が激しく，しかも重複や未調査の部分があるため，形状や規模等不明な点が多い。壁は上面がほとんど崩落しているのでなだらかな立ち上がりを示し，床は小さな凸凹が激しい。P_1～P_4は主柱穴で，ほぼ等間隔に配列され，直径44～60cm，深さ28～38cmである。

カマドは北西壁からかなり南側に向かって流出しており，遺存状態はきわめて悪く，わずかに焼土が部分的に認められるだけである。カマドが設置されていたと考えられる部分の壁付近は，板状の赤褐色粘土で版築されている。

覆土は礫と極少量の焼土粒子を含む暗褐色砂土・極暗褐色砂土・黒褐色砂土が堆積している。

遺物は土師器片を中心に，須恵器片や土製品などが散在して出土している。器形を窺えるものとしては，土師器では，P_1の南側80cmの覆土中から半完形の甑形土器（第151図１），中央からやや南東側覆土中から半完形の坏形土器（第151図２），P_1の南西側からほぼ完形の手捏土器(第151図４），須恵器では，P_3付近から完形の坏（第151図３）が出土している。土製品では，P_2の南側床面から球状土錘（第151図５），南コーナー部付近とP_2の西側から管状土錘(第151図６・７）が出土している。

第17号住居跡出土土器観察表

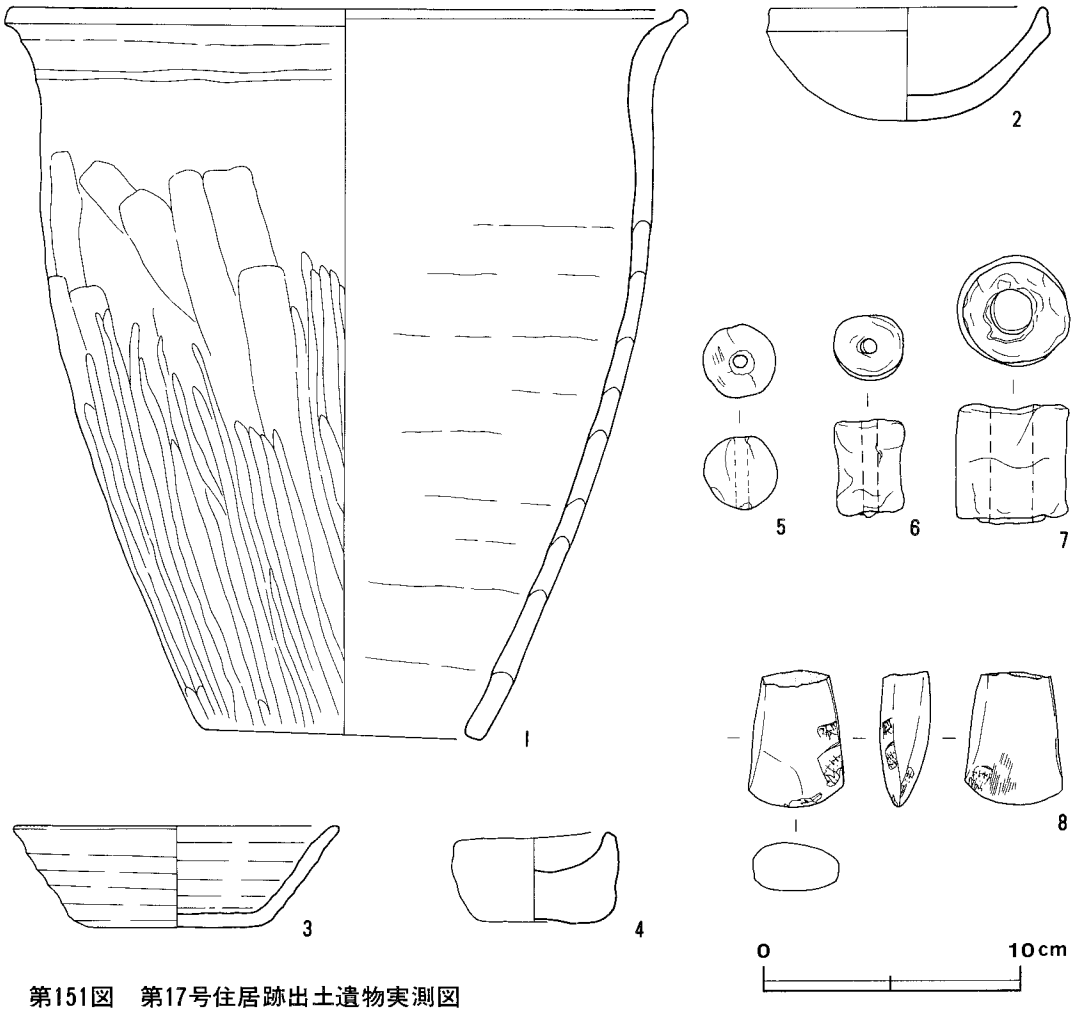
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第151図 1	甑形土器 土師器	A (26.8) B 29.4 C —	底部は正円状に抜ける。胴部は内彎しながら外上方に立ち上がり，口縁部は外反して開き，端部を上方につまみ出している。	口縁部内・外面－横ナデ。胴部外面－上位ヘラ削り，中・下位ヘラ磨き，内面－ナデ。輪積み痕残る。	砂粒・雲母 にぶい黄橙色 普通	40% P81
2	坏形土器 土師器	A (10.8) B 4.5 C (－)	底部は丸底で，体部は内彎して立ち上がり，口縁部との境に稜をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面－横ナデ。体部内・外面－横ナデ。	砂粒・スコリア・礫 にぶい褐色 普通	60% P82
3	坏 須恵器	A 12.9 B 4.0 C 6.8	底部は平底で，体部は直線的に外上方に立ち上がり，そのまま口縁部に至る。	水挽き成形。底部－回転糸切り。ロクロ回転は右。外周部－ヘラ削り。	砂粒・砂礫・長石 石英 灰色 普通	100% P85
4	手捏土器 土師器	A 6.0 B 3.6 C 4.7	底部は平底で，胴部はほぼ垂直に立ち上がる。	胴部外面－凹凸はあるがナデ，内面－横ナデ。	砂粒・礫・雲母 にぶい橙色 普通	90% P84

第17号住居跡出土土製品一覧表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ（cm）たて×よこ	孔径（cm）	重量（g）	備考
第151図 5	球状土錘	DP90	2.9×3.0	0.5	23.1	
6	管状土錘	DP204	3.9×2.8	0.6	34.0	
7	〃	DP205	4.8×4.4	1.7	98.0	

第17号住居跡出土石製品一覧表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ（cm）長さ×幅×厚さ	孔径(cm)	重量(g)	石質	備考
第151図 8	磨製石斧	Q16	(5.4)×(3.8)×(1.9)	—	(63.7)	角閃片岩	一部残存



第151図　第17号住居跡出土遺物実測図

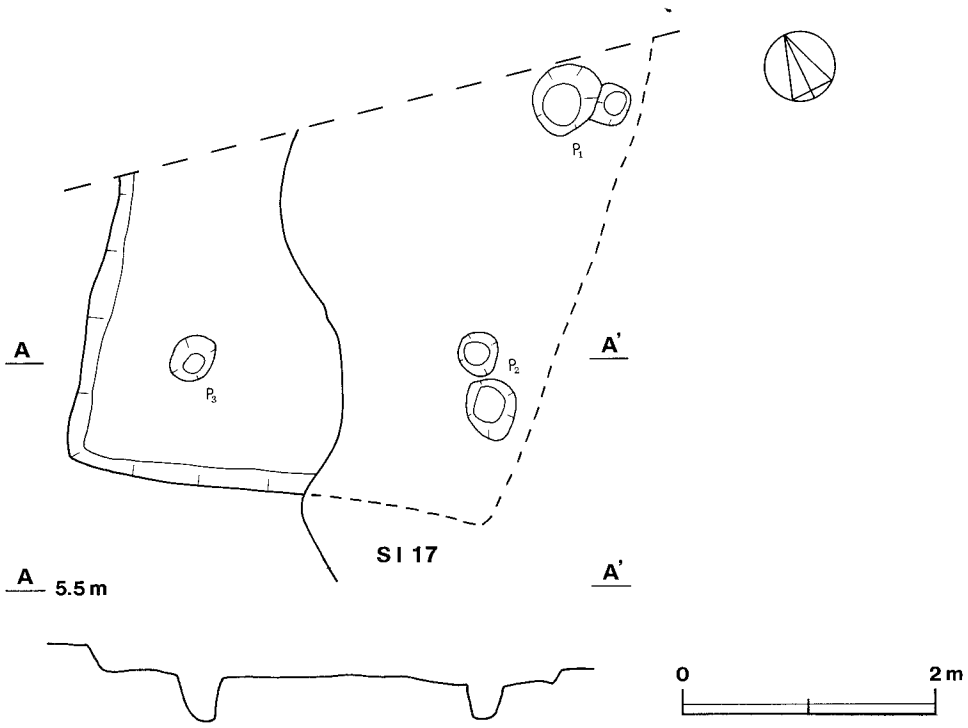
第18号住居跡（第152図）

本跡は，遺跡のほぼ中央部に位置し，南東側は第17号住居跡と重複し，中央から北東側は調査区域外に延びている。

検出された北西壁の一部・南西壁・南東壁・西コーナー・南コーナーから判断すると，平面形は長軸（北東－南西）4.2m，短軸（北西－南東）3.4mの長方形を呈するものと思われる。壁高は22cm程で，壁はほぼ垂直に立ち上がっている。床面には小さな凸凹があり，17号住居跡の床面より10cmぐらい低い。P_1～P_3は主柱穴で，直径34～54cm，深さ31～38cmである。P_1とP_2は南西壁に寄って位置している。

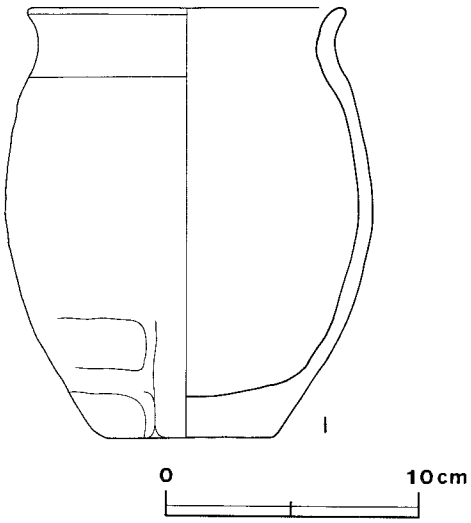
カマドは確認できなかったが，調査区域外に存在しているものと推定される。

覆土は主に礫を含む黒褐色砂土が堆積している。



第152図　第18号住居跡実測図

遺物は重複部のところから出土したものは，第17号住居跡として取り上げているため，出土量はきわめて少ない。土師器片が大半で，しかも覆土中からの出土である。北西側から半完形の甕形土器（第153図１）が出土している。



第153図　第18号住居跡出土遺物実測図

第18号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第153図 1	甕形土器 土師器	A (12.6) B 17.0 C 6.7	底部は平底で，胴部は中位にやや張りをもつ楕円形を呈し，口縁部は外彎して立ち上がる。	口縁部内・外面－横ナデ。胴部外面－上位ナデ，下位は横位のヘラ削り。	砂粒・スコリア 明赤褐色 普通	50% P88

第19号住居跡（第154図）

本跡は，遺跡のほぼ中央部G12h_7区に確認され，南側は調査区域外に延び，北側は第20号住居跡，南東側は第25号住居跡と重複している。新旧関係は不明である。

壁の崩落や重複の切り合いなどが多いため不明な部分が多い。壁も直線的でなく，東コーナー部も弧を描いている。推定では，一辺６ｍ前後の隅丸方形状を呈するプランで，主軸方向はＮ－45°－Ｗを指すものと考えられる。壁高は10～20cmで，礫を含んでいる壁は緩やかに立ち上がっている。床は礫を含む黄褐色砂土で，締まりはない。P_2は東コーナー近くに位置し，直径40cm，深さ40cm，P_4は西コーナー近くに位置し，直径50cm，深さ32cmで，どちらも位置や規模から主柱穴と考えられる。また，第20号住居跡を調査中にP_1を，第25号住居跡を調査中にP_3を検出したが，これも位置や規模から判断すると，本跡に伴う主柱穴と考えられる。

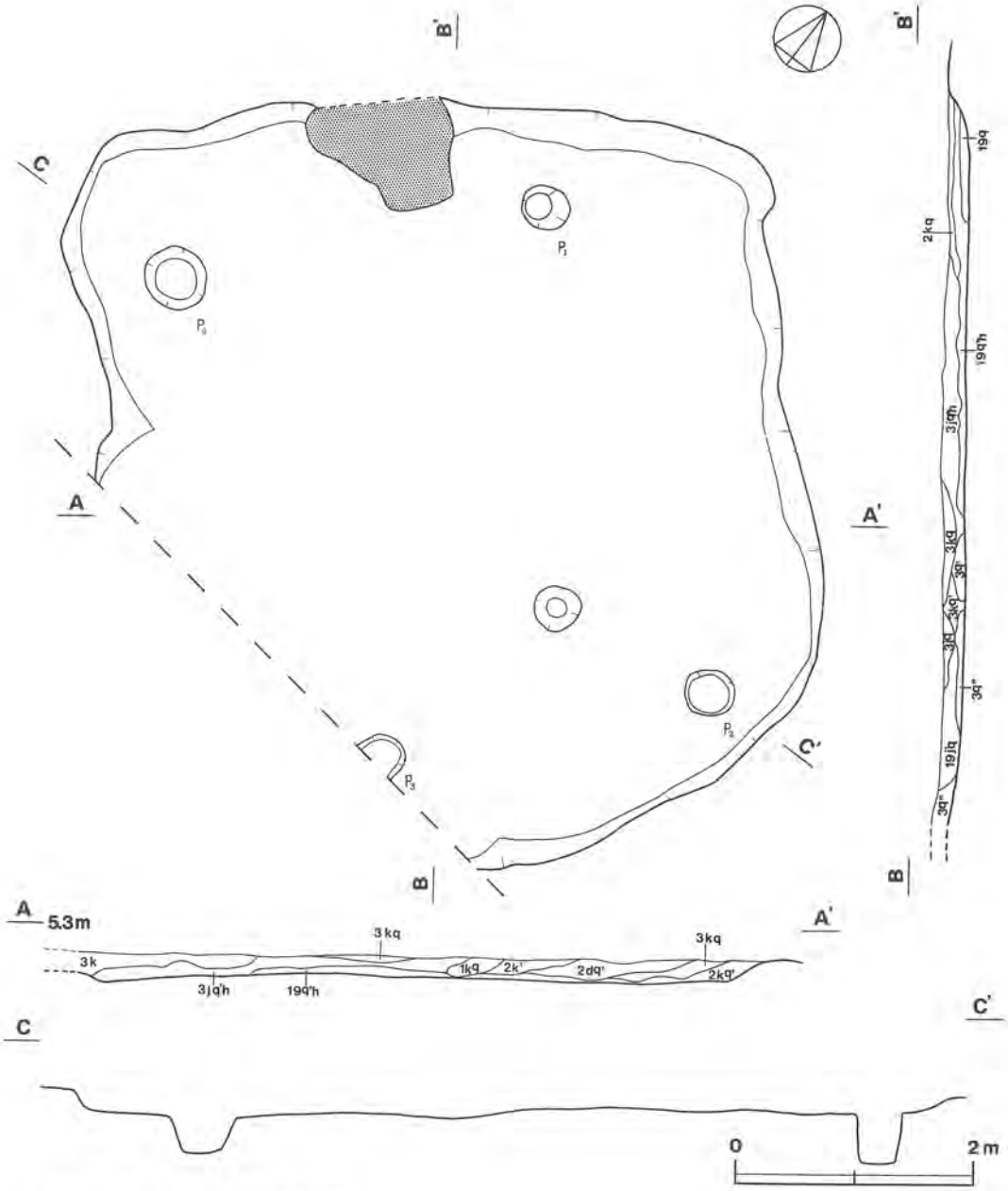
カマドは北西壁中央部に付設され，遺存状態は良好で，粘質砂土で構築されている。規模は両袖部の幅が約１ｍ，煙道の長さが約1.2ｍである。燃焼部は住居内に位置し，長径0.8ｍ，短径0.45ｍの楕円形状を呈し，床面をわずかに掘りくぼめている。内壁・火床は赤変硬化している。

覆土は礫・粘土小ブロックを含む黒褐色砂土や暗褐色砂土が堆積している。

遺物は土師器片がほとんどで，他に石製模造品が１点出土している。器形を窺えるものとしては，北東側から完形の坏形土器（第156図３），P_2の北西側1.2ｍのところからほぼ完形の坏形土器（第156図２），P_1の東側0.8ｍのところと住居跡ほぼ中央部から手捏土器（第156図４）が出土している。また，第20号住居跡との重複部から石製の双孔円板（第156図５）が出土している。いずれも覆土中からの出土である。

第19号住居跡出土土器観察表

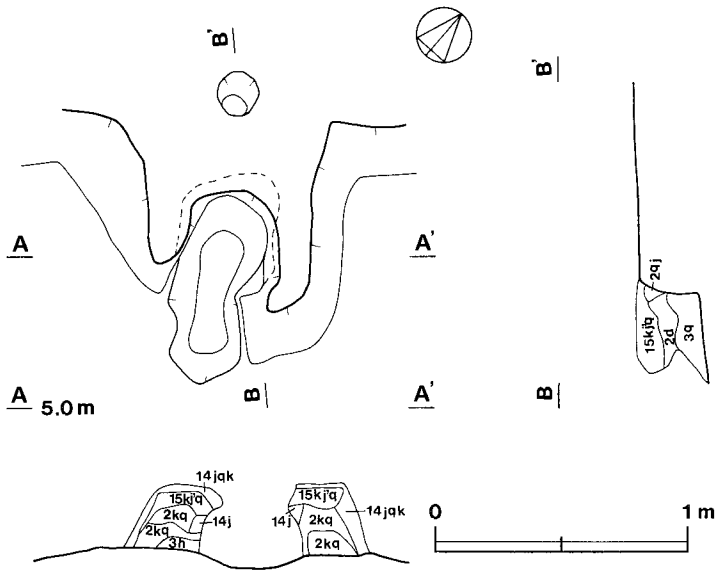
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第156図 1	壺形土器 土師器	A (13.2) B (8.6)	口縁部は短く外彎して立ち上がり，端部を上方につまみ出している。	口縁部内・外面－横ナデ。	砂粒・雲母・長石 にぶい黄橙色 普通	20% P89
2	坏形土器 土師器	A 13.7 B 5.4 C (－)	底部は丸底で，体部は内彎して開き，口縁部との境に稜をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面－横ナデ。体部外面－ヘラ削り，内面－ヘラナデ。	砂粒・スコリア・長石 灰白色 普通	70% P91
3	坏形土器 土師器	A 12.8 B 4.9 C (－)	底部は丸底で，体部は内彎して開き，口縁部との境に段をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面－横ナデ。体部外面－ヘラ削り，内面－横ナデ。	砂粒・スコリア・ 灰褐色 普通	98% P90
4	手捏土器 土師器	A (7.0) B 3.0 C (6.4)	底部は平底で，胴部は外上方に立ち上がり，上位に張りをもつ。口縁部は直立する。	底部－木葉痕。口縁部外面－横ナデ。胴部外面－ナデ，内面－刷毛目。	砂粒 浅橙色 普通	30% P93



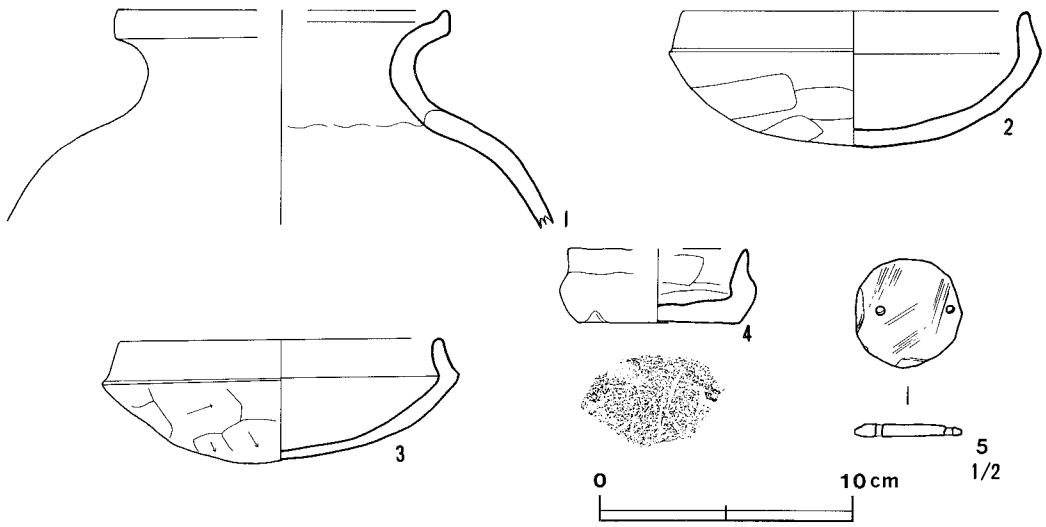
第154図　第19号住居跡実測図

第19号住居跡出土石製品一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	大きさ（cm） 長さ×幅×厚さ	孔径(cm)	重量(g)	石　質	備　考
第156図 5	有孔円板	Q28	2.9×2.8×0.3	0.2	4.9	滑　石	双孔



第155図　第19号住居跡カマド実測図

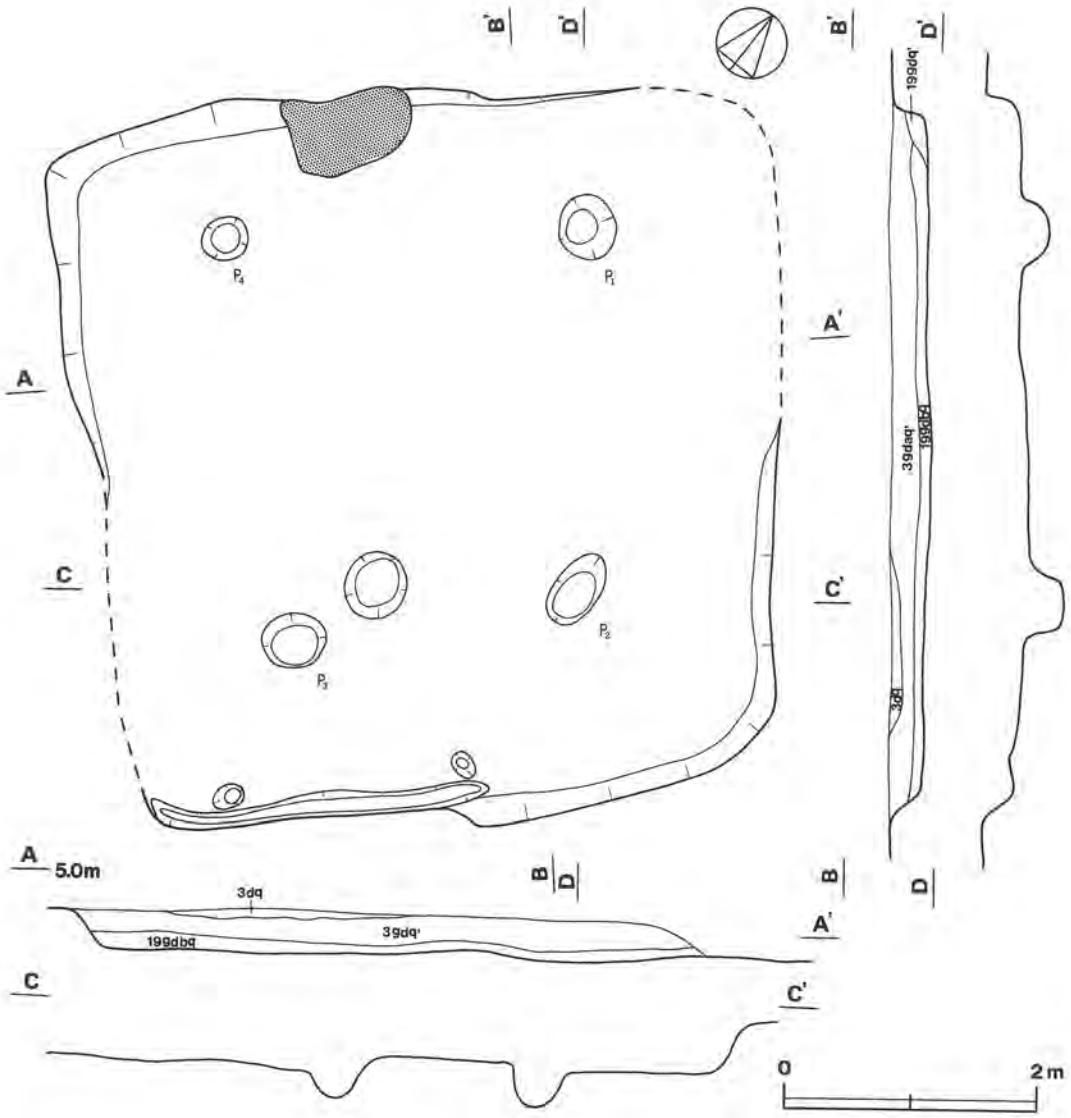


第156図　第19号住居跡出土遺物実測図

第20号住居跡（第157図）

本跡は，遺跡のほぼ中央部G12g_7区を中心に確認され，東遺構群の西端部に位置し，北コーナー部が第17号住居跡，南コーナー部が第19号住居跡と重複している。新旧関係は不明である。

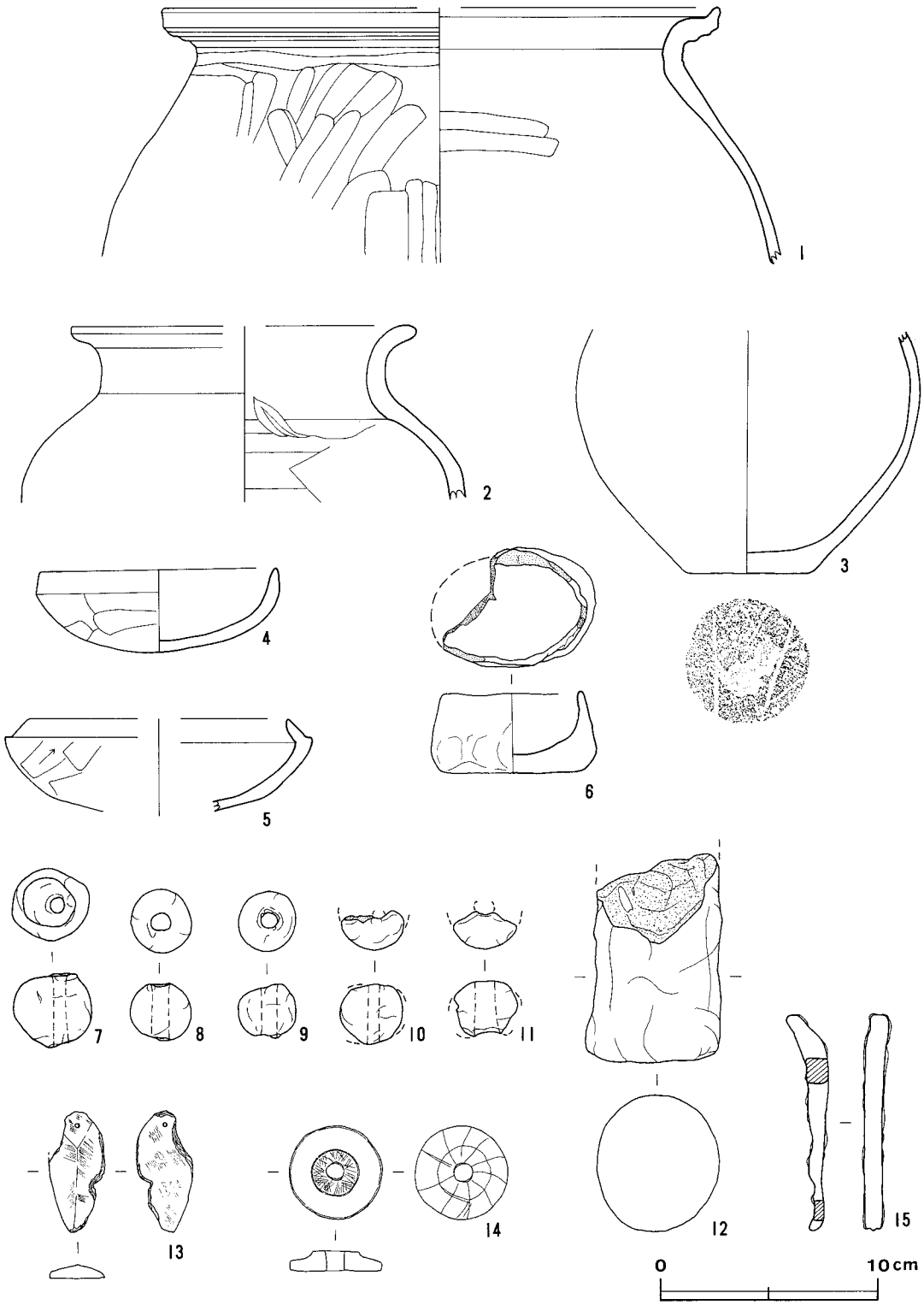
明確に確認された東・西のコーナー部とそれに連なる壁から判断すると，平面形は一辺5.7m前後の隅丸方形を呈し，主軸方向はN－42°－Wを指しているものと思われる。壁高は35cm程で，礫



第157図　第20号住居跡実測図

を含む黒褐色砂土の壁がほぼ垂直に立ち上がっている。床面は礫を多量に含む灰褐色砂土で覆われ，第17号住居跡との床面差はなく，第19号住居跡よりは３ｍぐらい低い。主柱穴はP_1～P_4で，ほぼ等間隔に配列されている。規模は直径36～50ｍ，深さ14～34cmで，P_2の掘り込みは楕円形状を呈し，P_4が最小規模である。

カマドの遺存状態は不良で，北西壁の中央部からやや南西側に寄ったところにカマドを構築していた粘質砂土の塊が押しつぶれたように検出された。その下から土製の支脚が２点出土している。



第158図　第20号住居跡出土遺物実測図

覆土は上層に小礫と極少量の焼土粒子を含む黒褐色砂土，下層に礫と少量の炭化物・焼土粒子を含む黒色砂土が自然堆積している。各土層とも比較的締まりがある。

遺物は特異な散布状況を呈している。土層観察用ベルトに沿って帯状に出土し，他の部分からの出土は希薄である。出土量はそれほど多くないが，土師器片を中心に，極少量の須恵器片土製品・石製品が出土している。器形を窺えるものは土師器だけで，北東側から底部に木葉痕を有する甕形土器の胴部から底部の部分（第158図３），カマド跡から完形の坏形土器（第158図４），P_4付近から半完形の手捏土器（第158図６）がいずれも覆土中から出土している。また，球状土錘が５点（第158図７～11），P_2の東側床面から石製の紡錘車（第158図14），中央部の覆土中から石製の剣形模造品（第158図13）も出土している。

第20号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第158図 1	甕形土器 土師器	A 25.5 B (11.9)	口縁部は短く外彎して立ち上がり，端部を上方につまみ出している。	口縁部内・外面－横ナデ。胴部外面－ヘラ削り。	砂粒・雲母・礫 長石 灰褐色 普通	10% P95
2	甕形土器 土師器	A (15.8) B (8.1)	口縁部は「コ」の字状を呈する。	口縁部内・外面－横ナデ。胴部外面－横ナデ，内面－横ナデ。	砂粒・礫 赤灰色 普通	10% P99
3	甕形土器 土師器	B (11.3) C 5.7	底部は平底で，胴部は内彎しながら外上方に立ち上がる。	底部－木葉痕。胴部外面－ヘラ削り，内面－ナデ。	砂粒・黒雲母・石英 にぶい橙色 普通	20% P97
4	坏形土器 土師器	A 10.9 B 3.8 C (－)	底部は丸底で，体部は内彎しながら開いて立ち上がり，口縁部はやや内傾して立ち上がる。	口縁部内・外面－横ナデ。体部外面－ヘラ削り，内面－横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	100% P100
5	坏形土器 土師器	A (12.0) B (4.3) C (－)	底部は丸底で，体部は内彎して立ち上がり，口縁部との境に段をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面－横ナデ。体部外面－ヘラ削り，内面－横ナデ。	砂粒・雲母 灰褐色 普通	30% P101
6	手捏土器 土師器	A 6.5 B 3.9 C 7.6	底部は平底で，長方形を呈する。胴部は内彎しながら上方に立ち上がる。	胴部内・外面－凹凸であるが指ナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	60% P103

第20号住居跡土製品一覧表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ (cm) たて×よこ	孔径 (cm)	重量 (g)	備考
第158図 7	球状土錘	DP91	3.4×3.6	0.7	37.6	
8	〃	DP92	2.6×2.9	0.9	17.0	
9	〃	DP93	2.5×2.8	0.7	14.6	
10	〃	DP94	(2.9)×(2.9)	0.5	(10.2)	一部残存
11	〃	DP95	(2.6)×(2.9)	1.2	(9.0)	〃

図版番号	名　称	台帳番号	大きさ（cm）たて×よこ	孔径（cm）	重量（g）	備　考
第158図 12	支　脚	DP 227	(9.7)×6.4	—	(350.1)	一部残存

第20号住居跡石製品一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	大きさ（cm）長さ×幅×厚さ	孔径(cm)	重量(g)	石　質	備　考
第158図 13	剣形模造品	Q30	5.6×2.6×0.6	0.2	10.2	滑　石	
14	紡　錘　車	Q21	上径×下径×厚さ 2.1×4.3×0.9	0.9	20.5	〃	

第20号住居跡鉄製品一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	法量（cm）			形　態　の　特　徴	備　考
			長さ	幅	厚さ		
第158図 15	鏨　状	M7	(10.0)	1.1	0.5	平面方形。断面長方形。	

第23号住居跡（第159図）

本跡は，東遺構群の中央部に位置し，北東側を除く住居跡全体の$\frac{3}{4}$は第２号住居跡に切り込まれている。第２号住居跡は本跡が埋没した後構築していて，しかも床面の高さも本跡より16cm程高いために重複部の上部は削平されて消失しているが，下部は存在している。

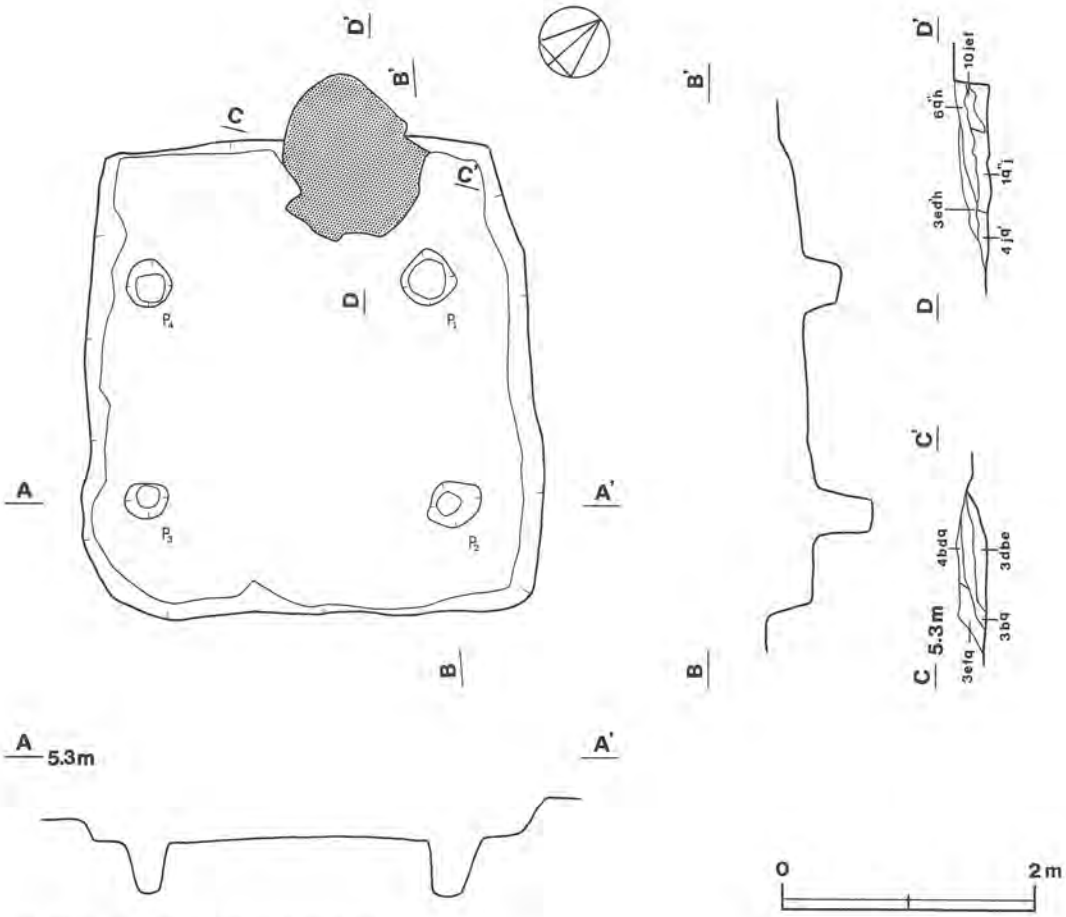
平面形は一辺3.7m前後の北西壁がわずかに短い隅丸方形を呈し，主軸方向はN－47°－Wを指している。当遺跡の住居跡群の中では小規模である。重複していない部分の壁高は30cmで，礫を含む砂土の壁がほぼ垂直に立ち上がっている。床面は北西側から南西側に向かって緩やかに傾斜し，床は礫を多く含む黄褐色砂土で酸化されている。P_1～P_4は主柱穴で，ほぼ等間隔に規則的に配列され，直径34～40cm，深さ23～46cmである。掘り方の断面は円筒形状を呈する。

カマドは北西壁の中央部からやや北コーナー部寄りに付設され，住居跡内部にカマドを構築していた粘質砂土が広く流出したような状態で確認され，部分的に焼土もみられる。北西壁を幅0.9m外側へ0.5m掘り込んで構築している。

遺物は土師器片を中心に，須恵器片１点，土製品３点が出土している。P_3の東側0.5mの床面から土師器の高坏形土器（第160図１），カマドから須恵器の坏（第160図２），球状土錘２点（第160図３・４），支脚（第160図５），石製の砥石（第160図６）などの出土がみられる。

第23号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第160図 1	高坏形土器 土　師　器	B（7.3）	体部は内彎して開き，脚部はラッパ状に開くと考えられる。	体部外面－ヘラ削り。脚部外面－ヘラ削り，内面－ナデ。	砂粒・砂礫・長石 赤色 普通	30% P104
2	坏 須　恵　器	B（2.3） C　8.6	底部は平底で，体部は直線的に外上方に立ち上がる。	水挽き成形。底部は切り離し後一方向へのヘラ削り。ロクロ回転は右。切り離しは不明。	砂粒・礫 黄灰色 普通	30% P105



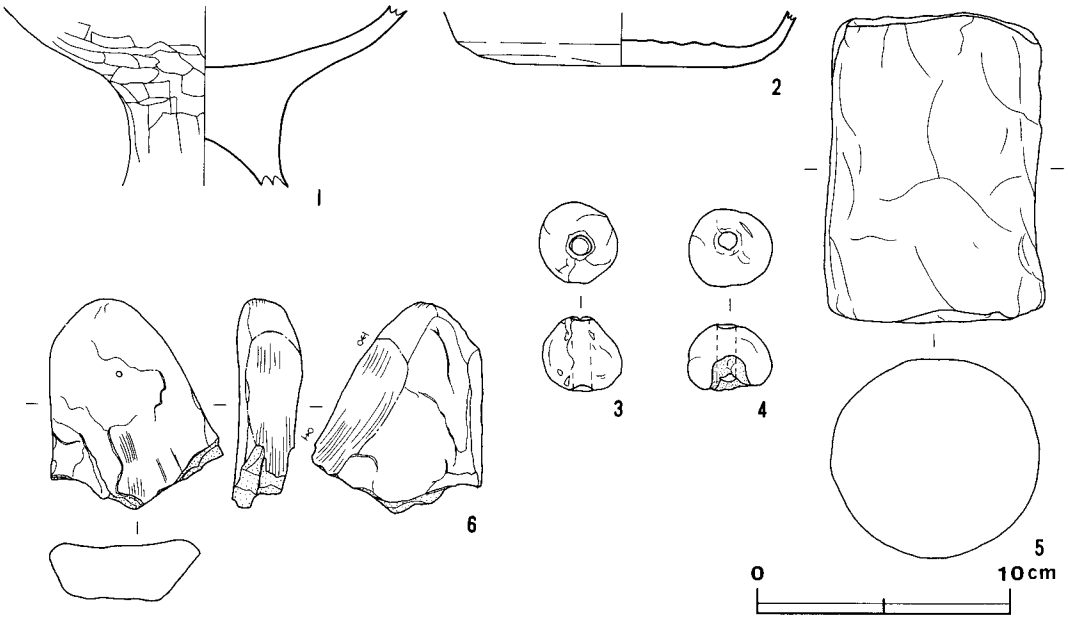
第159図　第23号住居跡実測図

第23号住居跡出土土製品一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	大きさ（cm） たて×よこ	孔径（cm）	重量（g）	備　考
第160図 3	球状土錘	DP　96	2.9×3.2	0.7	26.0	
4	〃	DP　97	(2.7)×3.3	0.8	(26.8)	一部欠損
5	支　脚	DP 228	12.3×8.8	—	845.4	

第23号住居跡出土石製品一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	大きさ（cm） 長さ×幅×厚さ	孔径(cm)	重量(g)	石　質	備　考
第160図 6	砥　石	Q 3	(8.5)×(6.8)×(2.7)	—	(160.3)	頁　岩	一部残存



第160図　第23号住居跡出土遺物実測図

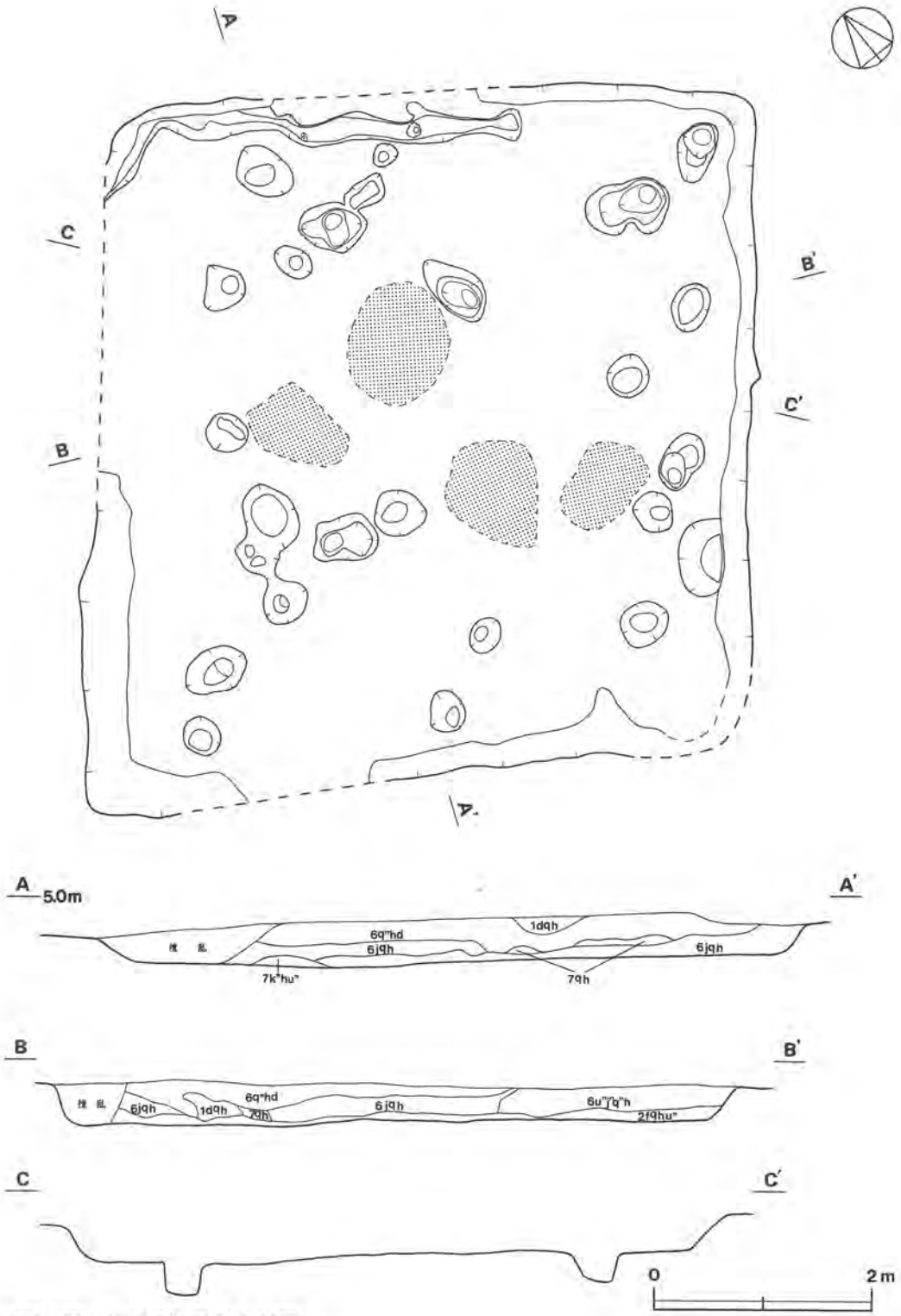
第24号住居跡（第161図）

本跡は，遺跡の東側G13i₆区を中心に確認されたものであるが，形状を明確に捉えることができず，しかも広範囲にわたっての落ち込みなので，当初は住居跡が3軒ぐらい重複しているものと想定して調査を進めた。調査の結果，重複は認められず本跡のみが存在し，周辺部は撹乱を受けていることが判明した。

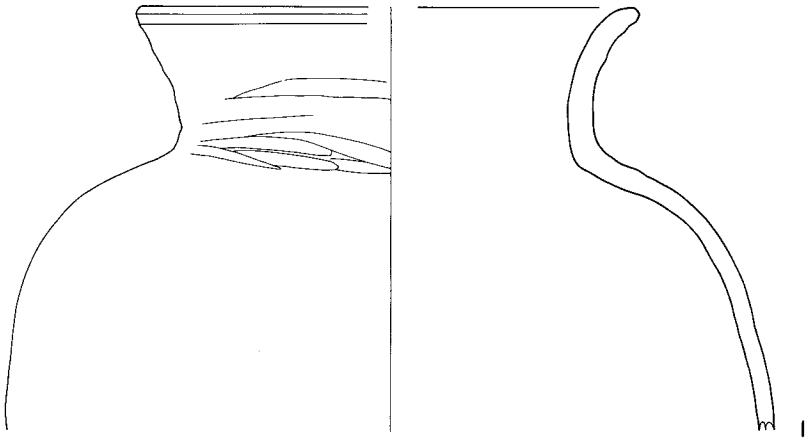
北西壁・北東壁・南西壁の各一部とカマドが撹乱のため消失しているが，残存壁と各コーナーから推定すると，平面形は一辺6.1m前後の隅丸方形を呈するものと思われる。壁高は35～40cmで，壁はやや緩やかに立ち上がっている。壁溝が北コーナー部から北東壁中央部よりやや東コーナー寄りにかけて検出された。床面はほぼ平坦である。床面中央部を中心に楕円形状に4か所の焼土散布地がある。ピットは多数検出されたが位置は不規則で，本跡に伴うピットの選出は困難である。

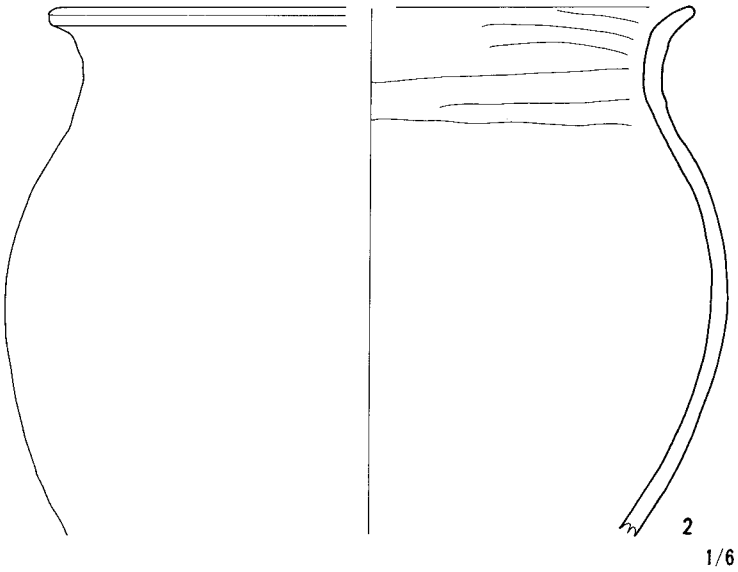
カマドは検出できなかったが，おそらく北西壁の撹乱を受けた場所に付設されていたものと推定される。

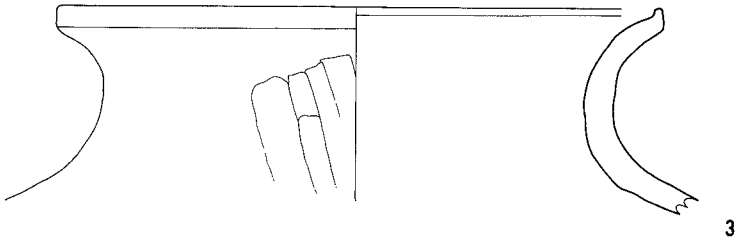
遺物は主に土師器片が中央部からやや北側部にまとまって出土している。器形を窺えるものとしては，北西壁近くから半完形の甕形土器（第162図3）・ほぼ完形の坏形土器（第163図7）・半完形の坏形土器2点（第163図8・9），東コーナー部付近からほぼ完形の把手付甕形土器(第163図4)，半完形の小型壺形土器（第163図6），北側撹乱部からほぼ完形の鉢形土器（第163図5）が出土している。その他に，球状土錘7点（第163図10～16）と住居跡中央部から石製の紡錘車(第

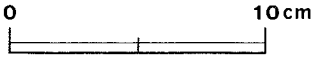


第161図　第24号住居跡実測図

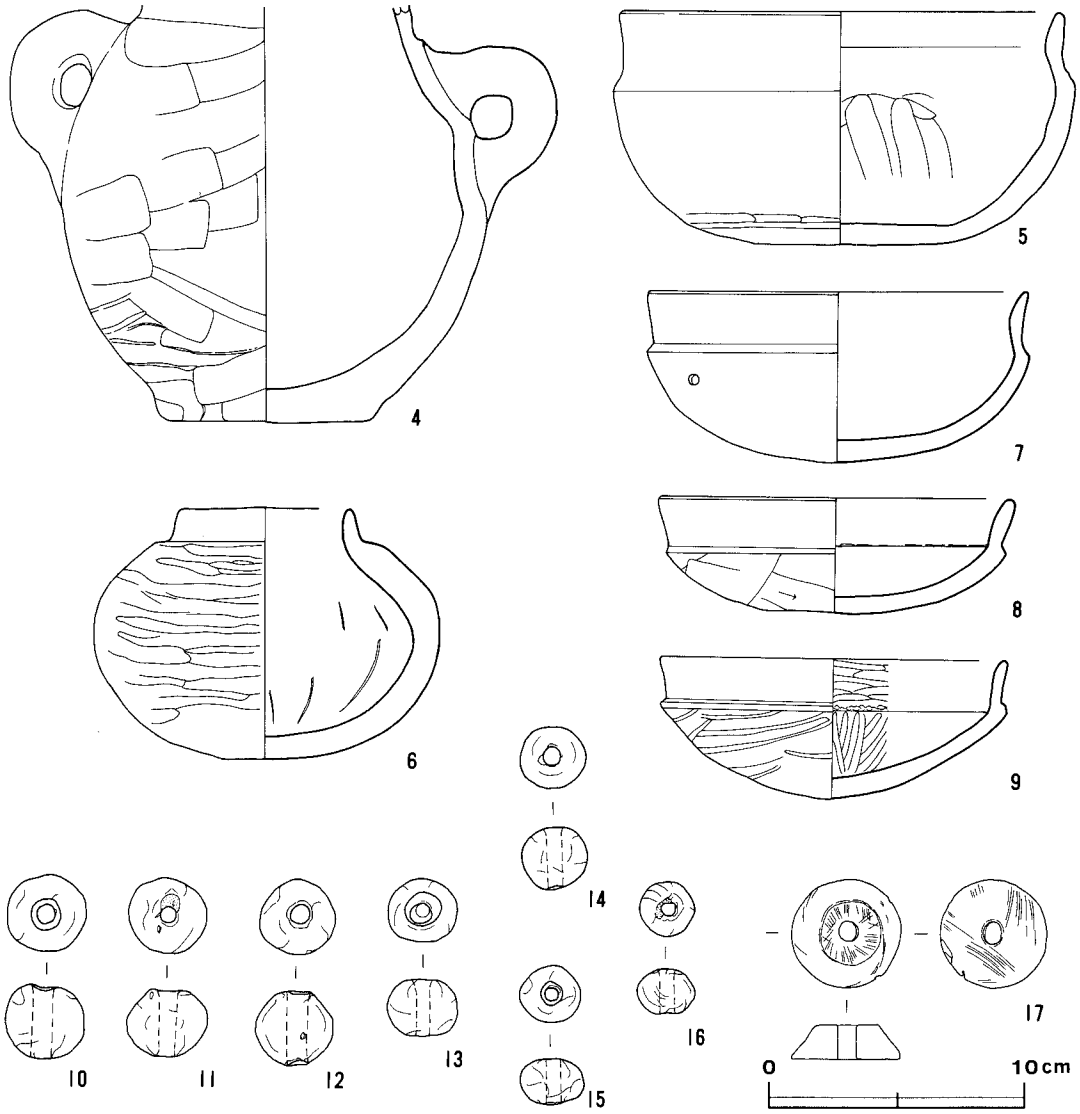








第162図　第24号住居跡出土遺物実測図（１）



第163図　第24号住居跡出土遺物実測図（2）

163図17）が出土している。これらは，いずれも覆土中からの出土である。

第24号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼土	備　考
第162図1	壺形土器 土師器	A（19.8） B（16.8）	丸い胴部から口縁部は外反して立ち上がり，端部を丸くおさめている。	口縁部内・外面ー横ナデ。胴部外面ーヘラ削り。	砂粒・雲母・スコリア・礫・長石 にぶい橙色 普通	20% P106

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第162図 2	甕形土器 土師器	A 23.9 B (8.2)	口縁部は外彎して立ち上がり，端部を上方へつまみ出している。	口縁部内・外面－横ナデ。胴部外面－上位は斜位のヘラ削り。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	10% P107
3	甕形土器 土師器	A 36.1 B (29.8)	胴部は上位に張りをもち，口縁部は外彎して立ち上がる。	口縁部内面－横ナデ。外面－ヘラナデ。胴部外面－ヘラナデ。	砂粒・砂礫・スコリア・雲母・長石 にぶい黄橙色 普通	30% P108
第163図 4	把手付甕形土器 土師器	B (16.8) C 8.4	底部は平底で，胴部は中位に張りをもつ。胴部中位から肩部にかけて把手がついている。	胴部外面－ヘラ削り，内面－ナデ。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	70% P109
5	鉢形土器 土師器	A 17.5 B 9.2 C 7.0	底部は平底で，胴部は内彎しながら外上方に立ち上がり，口縁部との境に段をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面－横ナデ。胴部外面－ナデ，内面－ヘラナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	80% P113
6	小型壺形土器 土師器	A (6.6) B 10.0 C (2.7)	底部は平底で，胴部は中位に張りのある扁平な球形で，口縁部との境に段をもつ。口縁部は内傾して立ち上がる。	口縁部内・外面－横ナデ。胴部外面－ヘラナデ，内面－ナデ。	砂粒・長石・雲母 礫・スコリア にぶい褐色 普通	50% P110
7	坏形土器 土師器	A 15.0 B 6.8 C (－)	底部は丸底で，体部は内彎して開き口縁部との境に段をもつ。上位に1孔を穿つ。口縁部はやや外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面－横ナデ。体部外面－横ナデ，内面－ナデ。	砂粒・スコリア・長石 赤色 普通	80% P114
8	坏形土器 土師器	A 14.0 B 4.7 C 3.3	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開き，口縁部との境に段をもつ。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面－横ナデ。体部外面－ヘラ削り。	砂粒・スコリア・雲母 にぶい褐色 普通	60% P115
9	坏形土器 土師器	A (13.8) B 5.6 C (－)	底部は丸底で，体部は内彎して開き，口縁部との境に段をもつ。口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部外面－横ナデ，内面－ヘラ磨き。体部外面－ヘラ磨き，内面－ヘラ磨き。	砂粒・雲母 黒色 普通	60% P116

第24号住居跡出土土製品一覧表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ (cm) たて×よこ	孔径 (cm)	重量 (g)	備考
第163図 10	球状土錘	DP 98	2.8×3.2	0.8	26.0	
11	〃	DP 99	2.6×3.2	0.6	231	
12	〃	DP 100	2.8×3.0	0.9	24.6	
13	〃	DP 101	2.3×2.8	0.5	16.7	
14	〃	DP 102	2.5×2.8	0.7	14.6	
15	〃	DP 103	1.8×2.5	0.6	9.2	
16	〃	DP 104	1.8×2.3	0.6	7.1	

第24号住居跡出土石製品一覧表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ (cm) 長さ×幅×厚さ	孔径(cm)	重量(g)	石質	備考
第163図 17	紡錘車	Q22	2.4×4.3×1.4	0.7	35.4	滑石	

第25号住居跡（第164図）

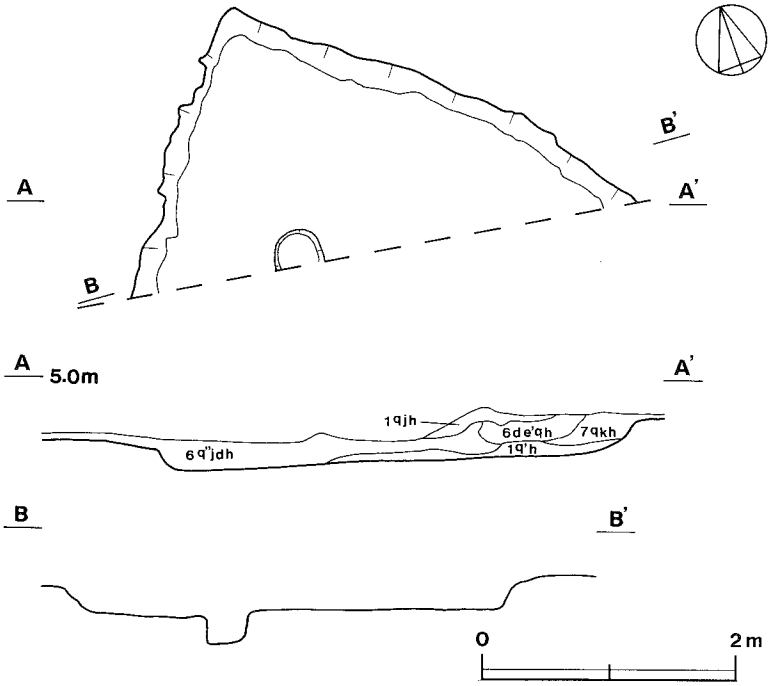
本跡は，遺跡のほぼ中央部に存在する第19号住居跡を調査中に重複している遺構として検出されたもので，土層から判断すると，本跡が埋没した後第19号住居跡が営まれたことが窺える。

第19号住居跡の床面下から検出された部分は，北東壁と北コーナー部及び北西壁の一部，さらに住居跡全体の約３分の１にあたる北側床面部だけである。中央部から南側は調査区域外に延びている。このようなことから不明な点が多いが，調査した部分について述べると，北西壁の長さは3.7ｍで，北コーナーはほぼ直角を呈している。床面のレベルは第19号住居跡の床面より20cm程低く，壁はやや緩やかに立ち上がっている。床面はほぼ平坦で，床は礫を多く含む黄褐色砂土で，締まりはない。ピットは境界のところに１か所検出されたが，位置から考えると本跡のものとは考えられず，重複している第19号住居跡の主柱穴と考えられる。

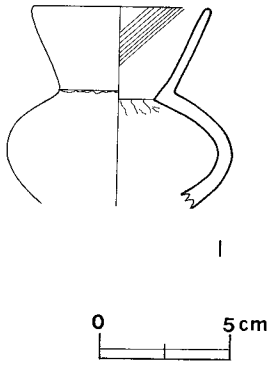
覆土は礫を含むにぶい褐色砂土・灰褐色砂土・褐色砂土が自然堆積している。

遺物は土師器片が覆土中から23点，床面から１点出土しただけである。器形を窺えるものとしては，半完形の坩形土器（第165図１）が出土している。

本跡は部分的な調査のため全容を調査できなかったが，検出された部分から判断すると，本跡に伴うピットはなく，遺物も極端に少なく，床面も締まりがなく，当遺跡の住居跡群とは異なり，住居跡状遺構と考えられる。



第164図　第25号住居跡実測図



第165図
第25号住居跡
出土遺物実測図

第25号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第165図 1	坩形土器 土師器	A 7.0 B (8.0)	胴部は扁平な球形を呈し，口縁部は内彎気味に外上方に開いて立ち上がる。	口縁部内・外面ー横ナデ。胴部外面ーナデ。	砂粒 にぶい褐色 普通	50% P118

第26号住居跡（第166図）

本跡は，G11d4区を中心に確認されたもので遺跡の最西端に位置し，南側2mに第10号住居跡が存在している。北側部は調査区域外に延びている。暗褐色砂土内に暗黒褐色を呈した落ち込みがはっきり捉えられた。

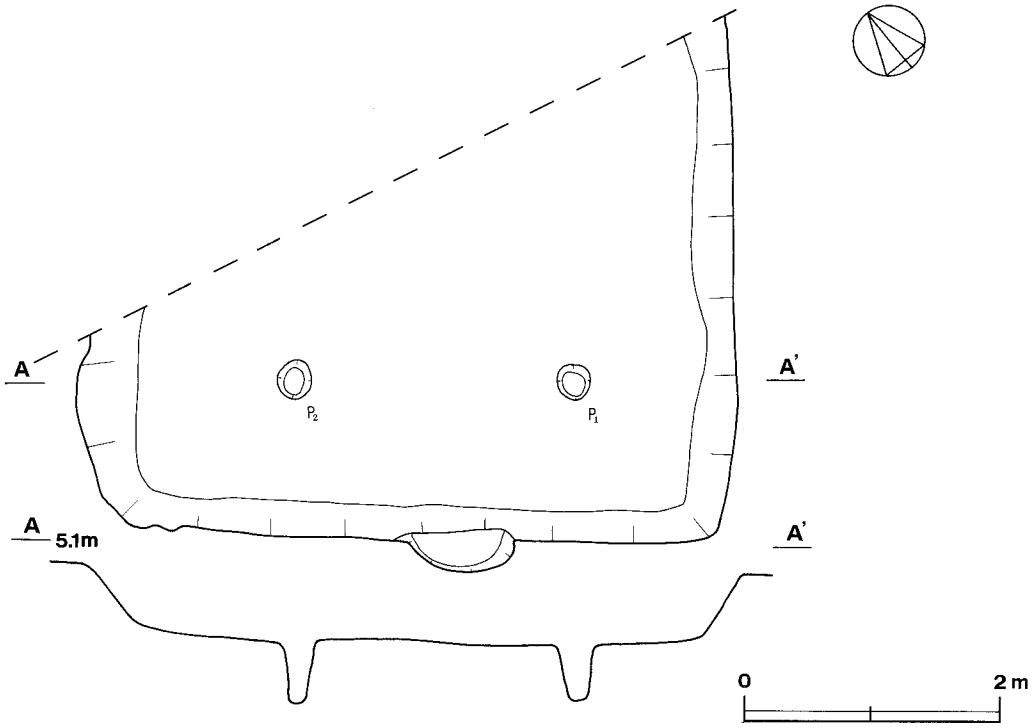
検出された部分は西コーナー・南コーナー・南西壁と，南東壁及び北西壁の一部，その間の床面及び柱穴2か所である。両コーナー部がほぼ直角に曲折し，南西壁の長さが5mであることから，本跡は一辺5m前後の方形を呈するものと思われる。また，検出状況から判断すると，主軸方向は他の住居跡と同様に北西方向を指すものと思われる。壁はほぼ垂直に立ち上がり，南コーナー部付近は酸化砂土で非常に硬い。壁高は50cmである。床面は平坦で，灰褐色砂土に黒褐色砂土が混じり，酸化されている。南コーナー部付近とP_1・P_2の周辺部は硬く締まっている。中央部付近はあまり締まってない。南西壁及び両ピット周辺には焼土が多量に散布している。P_1・P_2は主柱穴で，どちらも直径26cm，深さ45cm前後である。本跡の規模から考えると細いが比較的深く，壁面には酸化砂土がみられる。

カマドは調査した範囲では検出できなかったが，北西壁の区域外の部分に存在するものと思われる。

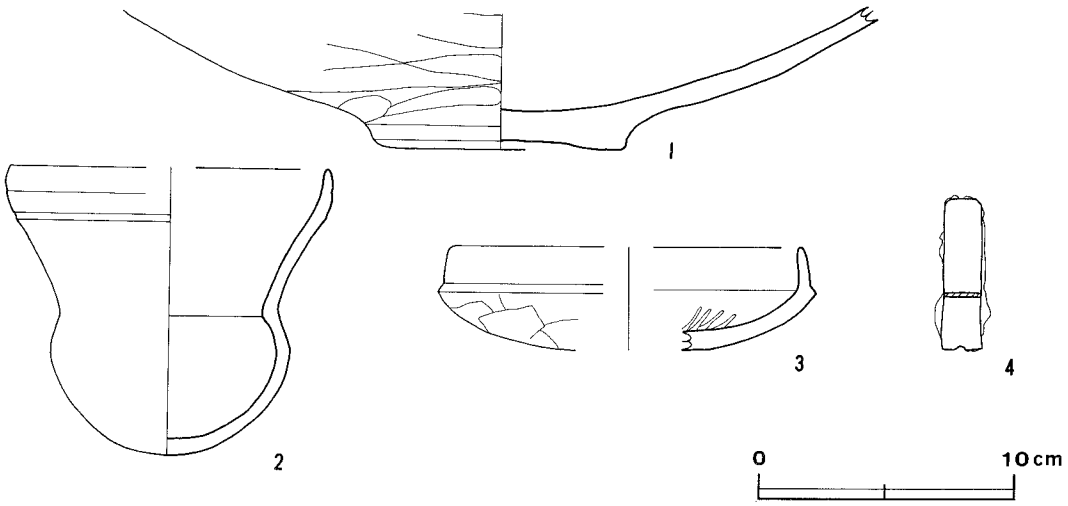
遺物は坏形土器や壺形土器の土器片が極少量覆土中から出土している。

第26号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第167図 1	壺形土器 土師器	B (5.3) C 9.5	底部は平底で，胴部は内彎しながら外上方に開いて立ち上がる。	胴部外面ー雑なヘラ磨き，内面ーナデ。	砂粒・スコリア 赤灰色 普通	20% P119
2	坩形土器 土師器	A (12.6) B (11.4) C (ー)	底部は丸底で，胴部は上位に張りをもつ。口縁部は外反して立ち上がり，端部は内傾する。	口縁部外面ーヘラナデ，内面ー横ナデ。胴部内・外面ーヘラナデ。	砂粒・石英・雲母 灰赤色 普通	40% P120
3	坏形土器 土師器	A (13.8) B (4.1) C (ー)	底部は丸底で，体部は内彎して開き，口縁部との境に段をもつ。口縁部は内傾して立ち上がる。	口縁部内・外面ー横ナデ。体部外面ーヘラ削り，内面ーヘラ磨き。	砂粒・スコリア・雲母 にぶい褐色 普通	30% P121



第166図　第26号住居跡実測図



第167図　第26号住居跡出土遺物実測図

第26号住居跡鉄製品一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	法量（cm）			形態の特徴	備　考
			長さ	幅	厚さ		
第167図 4	刀　子	M 8	(6.2)	1.5	0.2	平延。中央部	

2　掘立柱状建築跡

第1号掘立柱状建築跡（第168図）

本跡は，当遺跡の西側部，F11f8・F11g8区を中心に確認されたもので，11本のピットが検出されている。

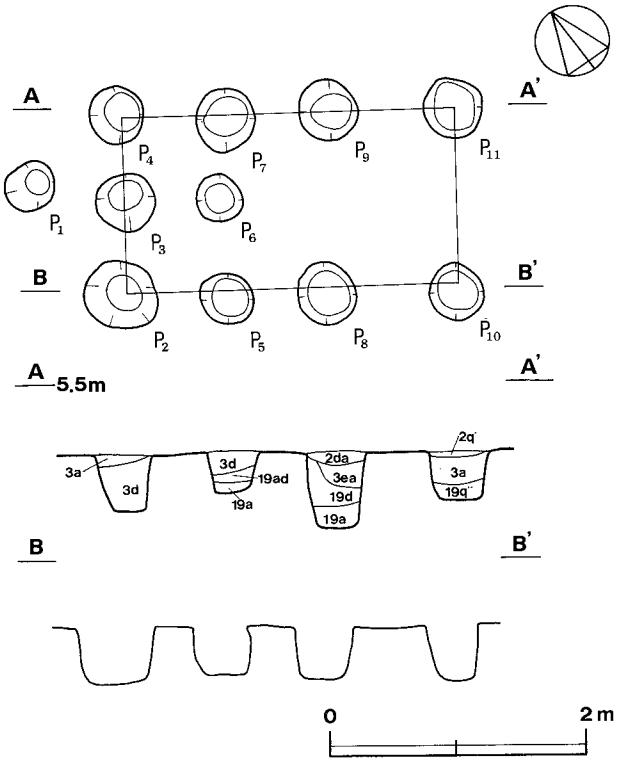
本跡の規模は，桁行2.64m，梁行1.4mと小さく，平面形は長方形を呈している。長軸方向はN－54°－Wである。

柱間は，2間×3間と推定されるが，P8・P9の間とP10・P11の間のピットは検出できなかった。柱間寸法は，桁行0.84～0.96m，梁行0.6～0.8mである。

P1は，P6・P3を結ぶ直線上で，P3の北西約0.7mに検出された。本跡の重要な柱穴痕と考え，相対するピットの調査を進めたが，第14号住居跡によって破壊されたのか検出できなかった。

ピットの形状は，ほぼ円形を呈し，径0.4×0.36～0.56×0.56m，深さ0.37～0.64mを測り，掘り方は「U」状を示している。ピット内覆土はローム粒子・焼土ブロックを含む黒褐色砂層で，固くしまっている。

遺物は，球状土錘(第173図14)が1点ピット2の覆土より出土している。

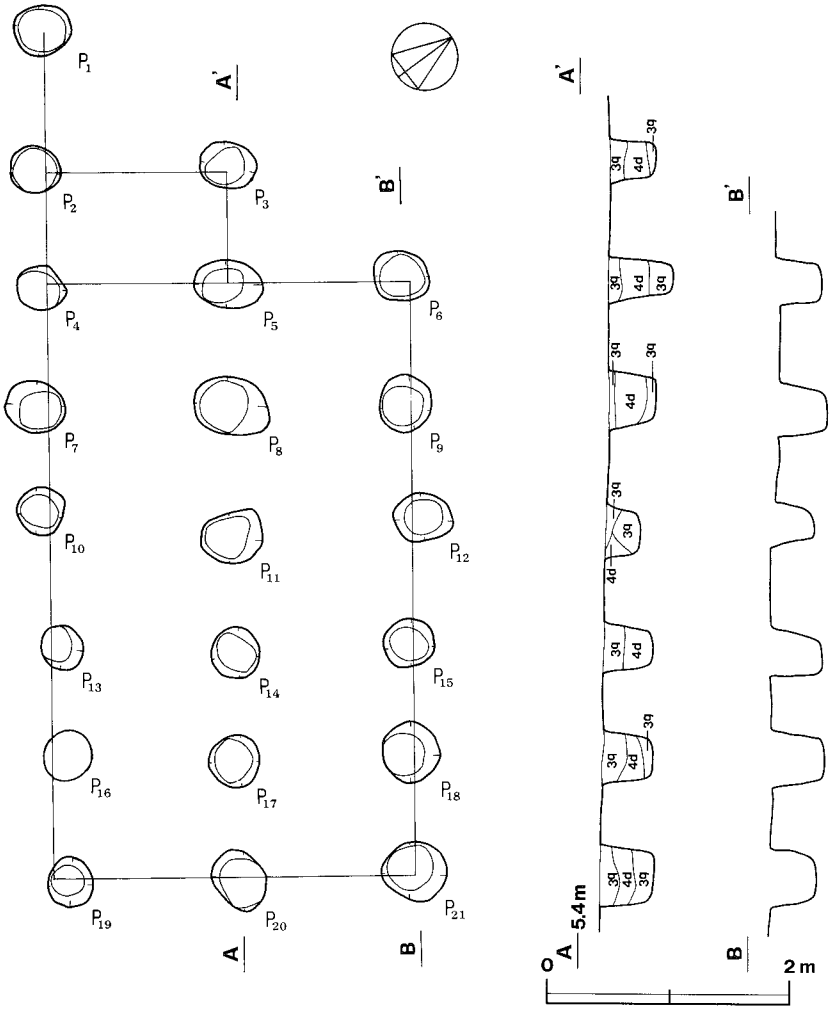


第168図　第1号掘立柱状建築跡実測図

第2号掘立柱状建築跡（第169図）

本跡は，当遺跡の西側部，G12e1・G12f1区を中心に確認されたもので，21本のピットが確認されている。

本跡の規模は，桁行約5m，梁行3mほどで，平面形は長方形を呈している。長軸方向はN－55°－Wである。



第169図　第２号掘立柱状建築跡実測図

柱間は２間×５間で，北西側に付属施設（P_1～P_3）を持っている。柱間寸法は，桁行0.88～1.1m，梁行1.5mで，付設部の柱間寸法は，桁行0.94～1.2m，梁行1.5mである。

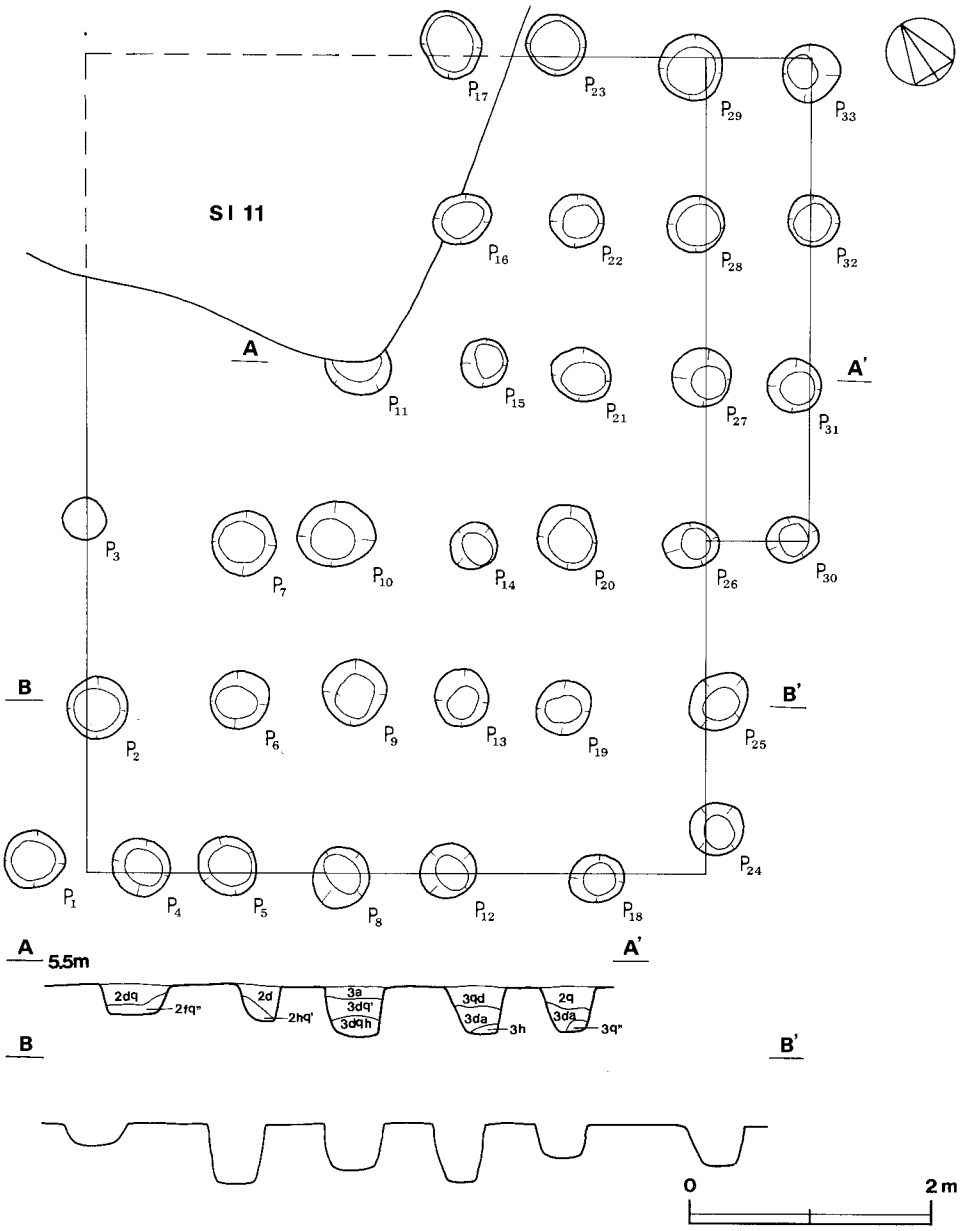
ピットの平面形状は，不整円形で，径0.36×0.36～0.5×0.54m，深さは0.38～0.45を計り，掘り方は「U」形を呈している。ピット内覆土は，ローム粒子・焼土粒子・礫を含む黒褐色砂層で固くしまっている。

遺物は，ピット11の覆土より土師器の甕形土器（第172図４），ピット９の覆土より土師器の坏形土器（第172図６），球状土錘はピット３から２点，（第173図12・13）およびピットから１点，（第173図15）が覆土から出土している。

第３号掘立柱状建築跡（第170図）

本跡は，当遺跡の西側部，$F11f_4$～$F11f_6$区を中心に確認されたもので，33本のピットが検出されている。

本跡の構造は，ピット６本×６本の長方形の平面形を呈し，南東部に付属施設（P_{30}～P_{33}）を



第170図　第３号掘立柱状建築跡実測図

有するが，少くとも８本のピット（P_3・P_7・P_{11}の北東側）が第10号住居跡によって破壊されているものと推定される。長軸方向はN－34°－Wである。

規模は，桁行6.82m，梁行5.1mほどで，付属施設は，桁行４m，梁行0.86mを測る。

柱間は，６間×６間の本体に１間×３間が付設され，その寸法は桁行1.3～1.48m，梁行0.86～1.04mほどである。

ピットの平面形状は，ほぼ円形を呈し，径0.44×0.46m～0.56～0.68m，深さ0.3～0.54mを測り，掘り方は「U」形を示す。ピット内の覆土は，少量のローム粒子・焼土粒子，多量の礫を含む暗褐色・黒褐色の砂土で固くしまっている。

遺物は，土師器の甕形土器（第172図２・５）がピット20から，甑形土器（第172図３）がピット７，坏形土器（第173図８・９）がピット29・27，須恵器の甕（第172図１）がピット20，石製の紡錘車（第173図17）がピット７のそれぞれの覆土の中から出土している。

第４号掘立柱状建築跡（第171図）

本跡は，当遺跡の西側部，G11e$_6$～e$_9$・G11f$_8$～f$_9$区を中心に確認されたもので，41本のピットが検出された。これらのピットは，北西から南東方向を長軸として，北東から南西に向って４列並んでいる。P$_6$～P$_8$の北西側は，第13号住居跡によって破壊され，検出できない。

本跡の規模は，桁行11.4m，梁行3.76mで，平面形は長方形を呈し，長軸方向はN－57°－Wである。

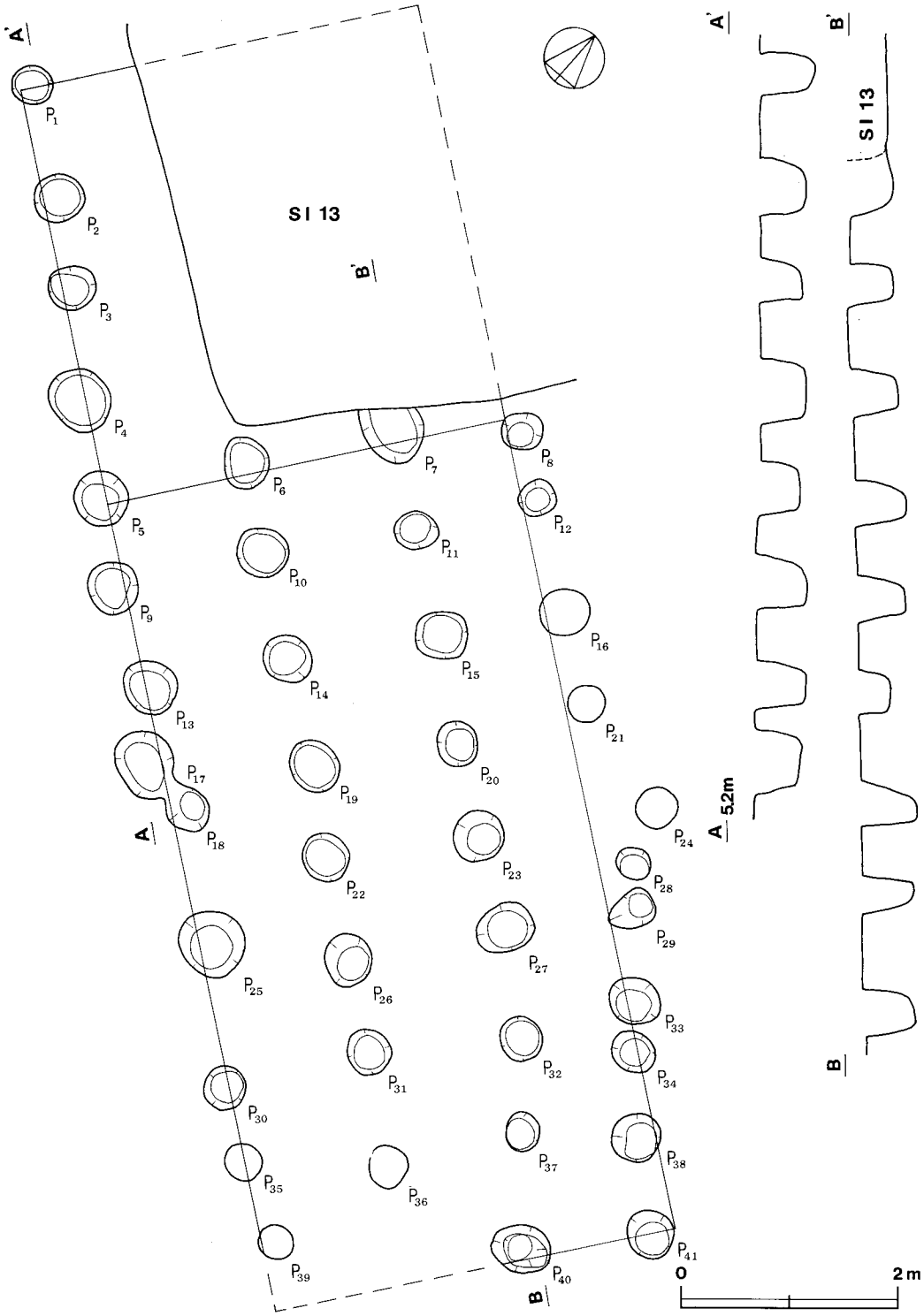
柱間は，３間×11間で，南東側に１間×１間（P$_{40}$～P$_{41}$）の付属施設を有している。柱間寸法は，桁行0.8～1.0m，梁行1.18～1.3mを測る。P$_{17・28・34}$は補助的役割りを果たしていたと考えられる。

ピットの平面形状は，ほぼ円形を呈しており，径0.4×0.5m～0.6×0.6m，深さ0.34～0.54mを計り，掘り方は「U」形である。ピット内覆土は，少量のローム粒子・ロームブロック・炭化粒子・礫を含む暗褐色及び黒褐色の砂で固くしまっている。

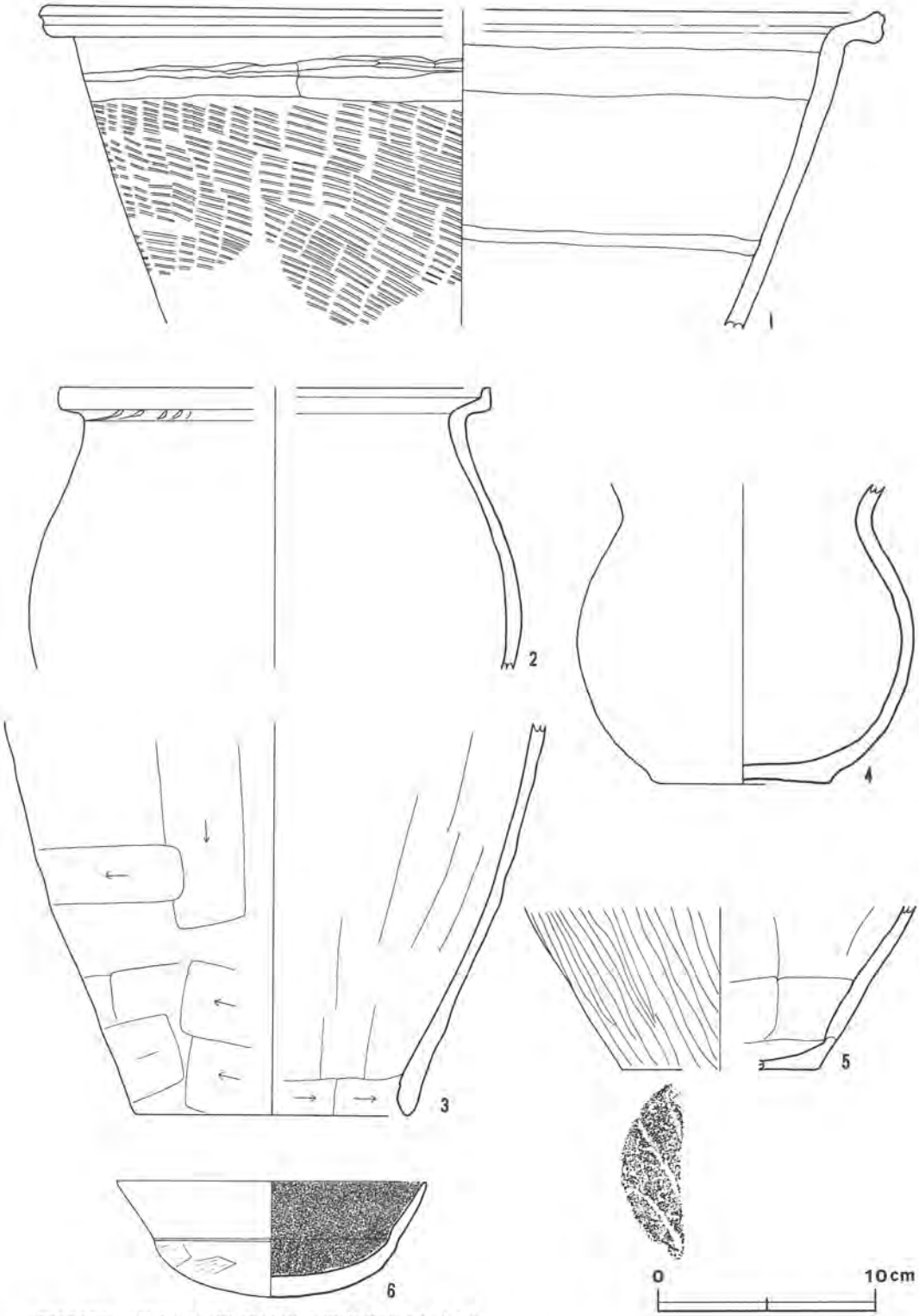
遺物は，土師器の坏形土器（第173図７・10）がピット26・29の，手捏土器（第173図11）がピット26のそれぞれの覆土から出土している。

掘立柱状建築跡出土土器観察表

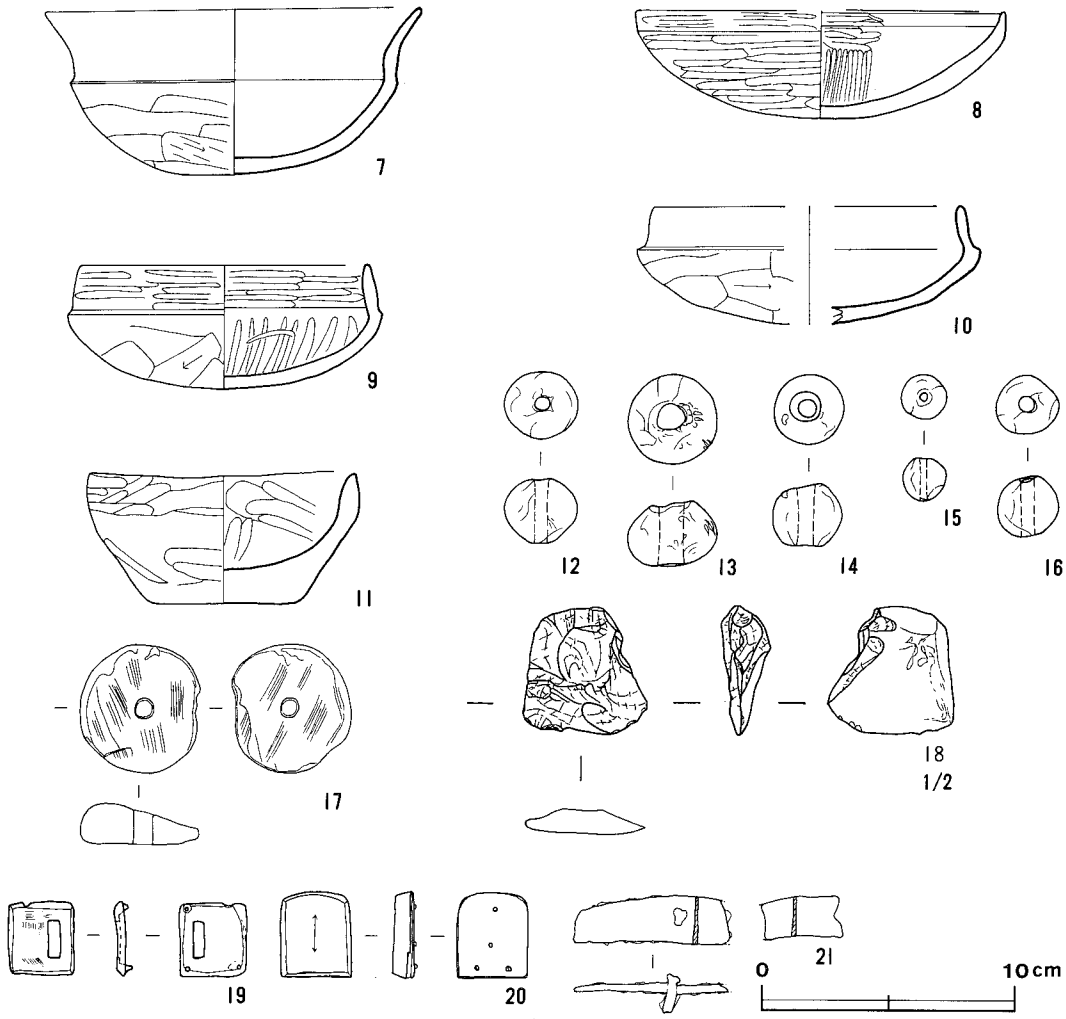
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第172図 1	甕 須恵器	A (38.9) B (14.6)	胴部は外上方に直線的に開き，口縁部は短く外反する。口縁外端面の中央に沈線が巡る。	口縁部内・外面－横ナデ。胴部外面－斜位の平行叩き，内面－ナデ。	砂粒・雲母・礫 灰色 普通	SB－3 30% P154
2	甕形土器 土師器	A (19.8) B (13.0)	胴部は中位に張りをもち，口縁部は短く外反し，端部は上方につまみ出される。	口縁部内・外面－横ナデ。頸部外面－刻み目。胴部外面－ナデ。内面－ナデ。	砂粒・雲母・礫 にぶい橙色 不良	SB－3 10% P150
3	甑形土器 土師器	B (18.1) C (12.6)	底部は円形に抜け，胴部は内彎気味に外上方に立ち上がる。	胴部外面－ヘラ削り，内面－ナデ，下位端部－ヘラ削り。	砂粒・雲母・礫・スコリア 橙色 普通	SB－3 10% P153



第171図　第４号掘立柱状建築跡実測図



第172図　掘立柱状建築跡出土遺物実測図（1）



第173図　掘立柱状建築跡出土遺物実測図（2）

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第172図 4	甕形土器 土師器	B (13.7) C (7 9)	底部は平底で，胴部は内彎しながら外上方に立ち上がり，中位に張りをもつ。口縁部は「く」の字状に外反する。端部欠損。	口縁部内・外面－横ナデ。胴部外面－ヘラナデ，内面－ナデ。	砂粒・石英・スコリア・礫 にぶい橙色 不良	SB－2 40% P143 表面剝離。
5	甕形土器 土師器	B (7.5) C (9.0)	底部は平底で，胴部は直線的に外上方に立ち上がる。	胴部外面－ヘラナデ，内面－下位に横ナデ。底部－木葉痕。	砂粒・雲母・礫 にぶい赤褐色 普通	SB－3 10% P152
6	坏形土器 土師器	A 14.4 B 5.4 C (－)	底部は丸底で，体部は内彎して開き，口縁部との境に稜をもつ。口縁部は外上方に立ち上がり，端部は丸い。	口縁部内・外面－横ナデ。体部外面－ヘラ削り，内面－ヘラ磨き。口縁部内・外面及び体部内面は朱塗り。	砂粒・スコリア 橙色 普通	SB－2 95% P146

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第173図 7	坏形土器 土師器	A (14.6) B 4.3 C (−)	底部は平底で，体部は内彎しながら開き，口縁部との境に段をもつ。口縁部は外反して立ち上がり，端部は丸い。	口縁部内・外面−横ナデ。体部外面−ヘラ削り，内面−横ナデ。底部−ヘラ削り。	砂粒・スコリア 橙色（体部），赤色（口縁部） 普通	SB−4 80% P144
8	坏形土器 土師器	A (14.6) B 4.3 C 3.0	底部は丸底で，体部は内彎して開き，口縁部との境に段をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面−ヘラ磨き。体部外面−ヘラ削り後ヘラ磨き，内内面−ヘラ磨き。	砂粒 褐色 普通	SB−3 30% P149
9	坏形土器 土師器	A 11.4 B 4.9 C (−)	底部は丸底で，体部は内彎して開き，口縁部との境に段をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面−ヘラ磨き。体部外面−ヘラ削り，内面−ヘラ磨き。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	SB−3 50% P148
10	坏形土器 土師器	A (12.2) B (4.7) C (−)	底部は丸底で，体部は内彎して開き，口縁部との境に段をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面−横ナデ。体部外面−ヘラ削り，内面−横ナデ。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	SB−4 30% P147
11	手捏土器 土師器	A 10.3 B 5.3 C 5.5	底部は平底で，胴部は直線的に外上方に立ち上がる。口縁部は直立し，端部は丸い。	口縁部内・外面−横ナデ。胴部内・外面−ヘラナデ。底部−ナデ。	砂粒・スコリア・石英 にぶい橙色 普通	SB−4 100% P145

掘出柱状建築跡出土土製品一覧表

図版番号	名称	出土地点	台帳番号	大きき (cm) 長さ×幅	孔径(cm)	重量(g)	備考
第173図 12	球状土錘	SB2	DP 112	2.6×2.8	0.6	18.2	
13	〃	SB2	DP 113	2.6×3.6	1.1	31.5	
14	〃	SB1	DP 114	2.6×2.8	0.7	17.9	
15	〃	SB2	DP 115	1.6×1.8	0.3	5.7	
16	〃	SB3	DP 116	2.5×2.5	0.6	12.6	

掘立柱状建築跡出土石製品一覧表

図版番号	名称	出土地点	台帳番号	大きき (cm) 長さ×幅×厚さ	孔径(cm)	重量(g)	石質	備考
第173図 17	紡錘車	SB3	Q23	上径×下径×厚さ 4.5×4.7×1.0	0.8	53.4	滑石	
18	剝片	SB4	Q38	2.5×2.4×1.0	−	5.6	チャート	

掘立柱状建築跡出土鉄製品一覧表

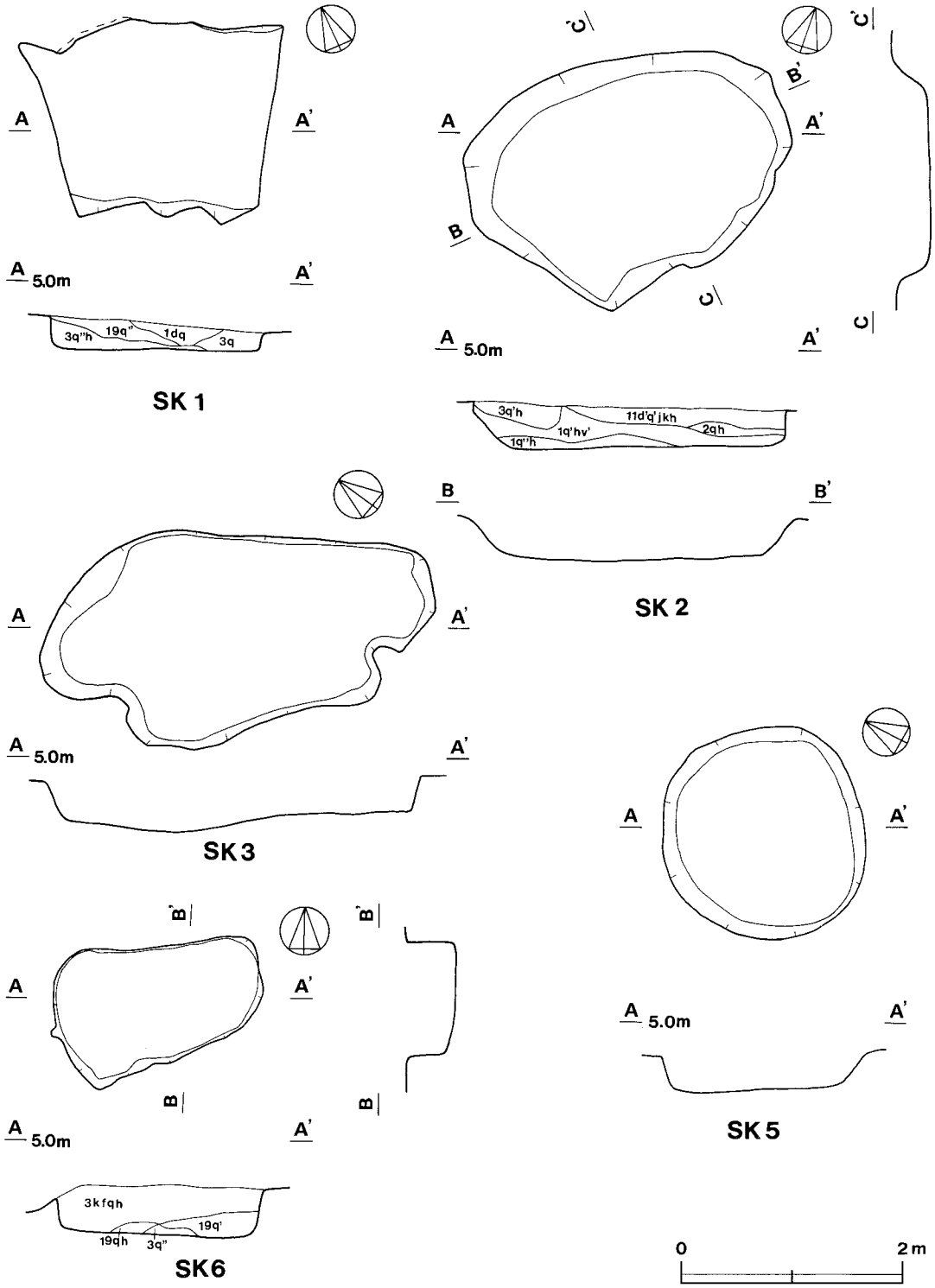
図版番号	名称	出土地点	台帳番号	法量 (cm) 長さ	幅	厚さ	形態の特徴	備考
第173図 19	巡方	SB4	M9	2.9	0.3	0.2	銅製品	
20	鉈尾（だび）	SB3	M10	3.5	2.8	0.7	〃 (端末具)	
21	穂積み具	SB3	M11	(9.5)	2.0	0.2		

3　土坑

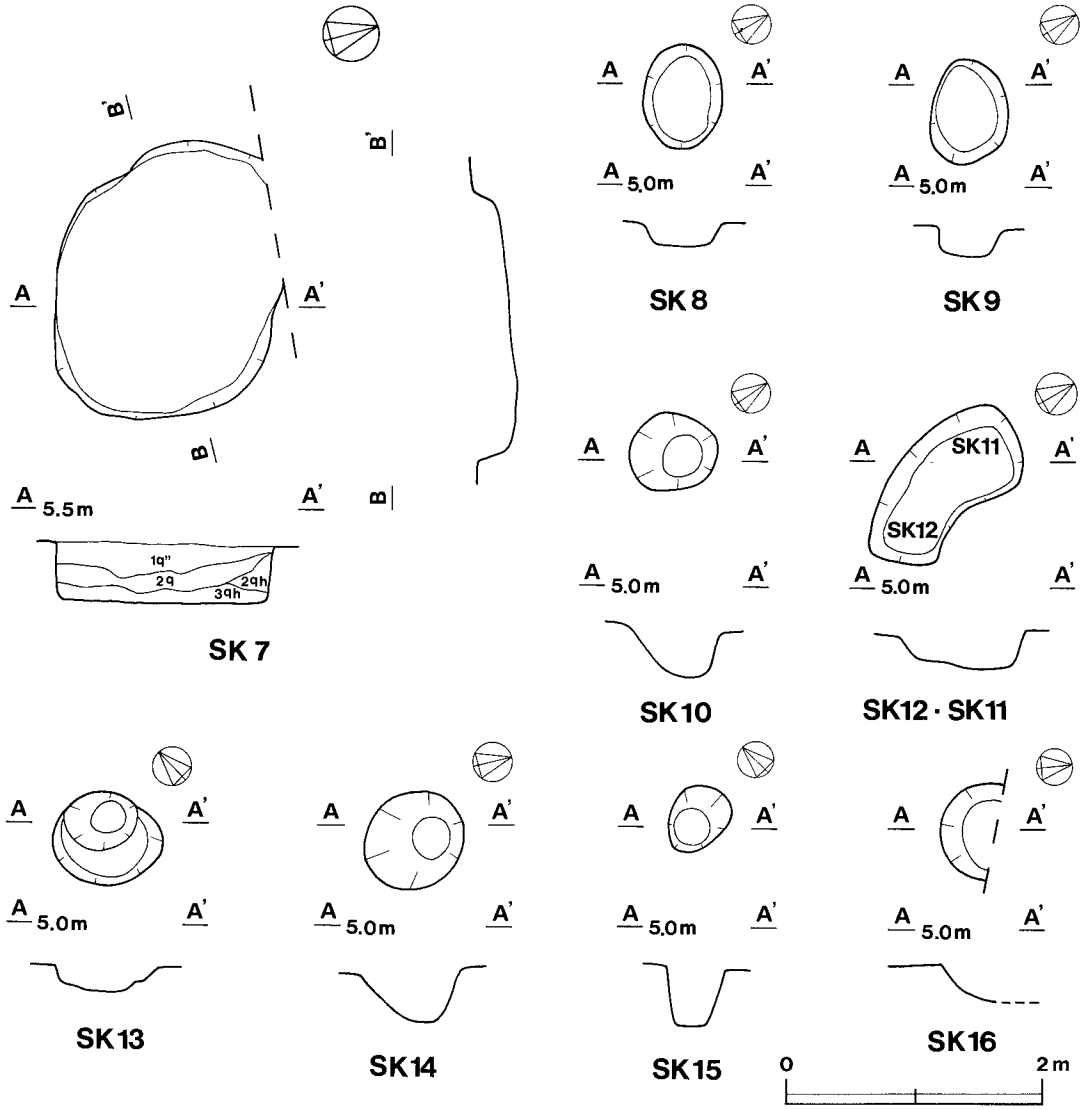
当遺跡で番号を付して調査した土坑は16基である。そのうち，４号土坑は最近掘られたピットであることが判明したため欠番とした。また，８～16号土坑については，G13i9区付近に広範囲にわたって黒褐色砂土が散布していたため掘り下げを実施し，黒褐色砂土を排除した下から新たに確認され調査したもので，いずれも小規模で，出土遺物もない。土坑として番号を付しておいたが，ピット的なものと考えられる。

表３　土坑一覧表

番号	位置	長径(軸)方向	平面形	規模 長径×短径(m)	深さ	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
1	G13i9・j9	N－65°－W	不整方形	1×0.9	30	垂直	平坦	N	坏形土器(P123)，手捏土器(P124)，球状土錘(DP105)，管状土錘(DP206) 土師器片251片，須恵器片1片	
2	G13j7 H13a7	N－63°－E	不整楕円形	3×2	40	緩斜	〃	N	甕形土器(P126)，高坏(P129)，坏(P127・P130)，手捏土器(P133)，瓶(P128)，球状土錘(DP106～108)，土師器片407片	
3	G13j5・j6 H13a5・a6	N－43°－W	不整楕円形	3.6×2	40	垂直	凹凸	－	坩(P134)， 剣形模造品(Q31・32) 土師器片130片	
4	欠番	－	－	－	－	－	－	－	高坏(P137) 管状土錘(DP207)，土師器片39片	
5	G13h7・h8 i7・i8	－	円形	1.85	37	〃	〃	－	坏(P138) 土師器片９片	
6	G12j3・j4	N－71°－E	不整隅丸長方形	1.9×1.1	45	〃	傾斜	A	球状土錘(DP109) 土師器片81片	
7	G11d9・e9	N－45°－W	楕円形	2.4×1.8	50	〃	〃	N	甕形土器(P139)，坏形土器(P140・P141)， 手捏土器(P142)	
8	G13i9	N－50°－W	〃	0.85×0.64	20	〃	平坦	－	なし	
9	〃	N－48°－W	〃	0.86×0.62	26	〃	傾斜	－	〃	
10	G13i0	－	円形	0.7	44	緩斜	皿状	－	〃	
11	G13i9	(N－3°－E)	(楕円形)	(0.9×0.75)	33	〃	凹凸	－	〃	SK12と重複
12	〃	(N－34°－W)	(隅丸長方形)	(0.9×0.65)	28	〃	平坦	－	〃	SK11と重複
13	G13h9	N－45°－W	楕円形	0.9×0.75	24	〃	皿状	－	〃	
14	G13h8	－	円形	0.8	45	〃	平坦	－	〃	
15	G13h9	N－82°－E	楕円形	0.6×0.45	50	〃	〃	－	〃	
16	G13h9・h0	－	円形	0.8	35	緩斜	(平坦)	－	〃	1/2区域外



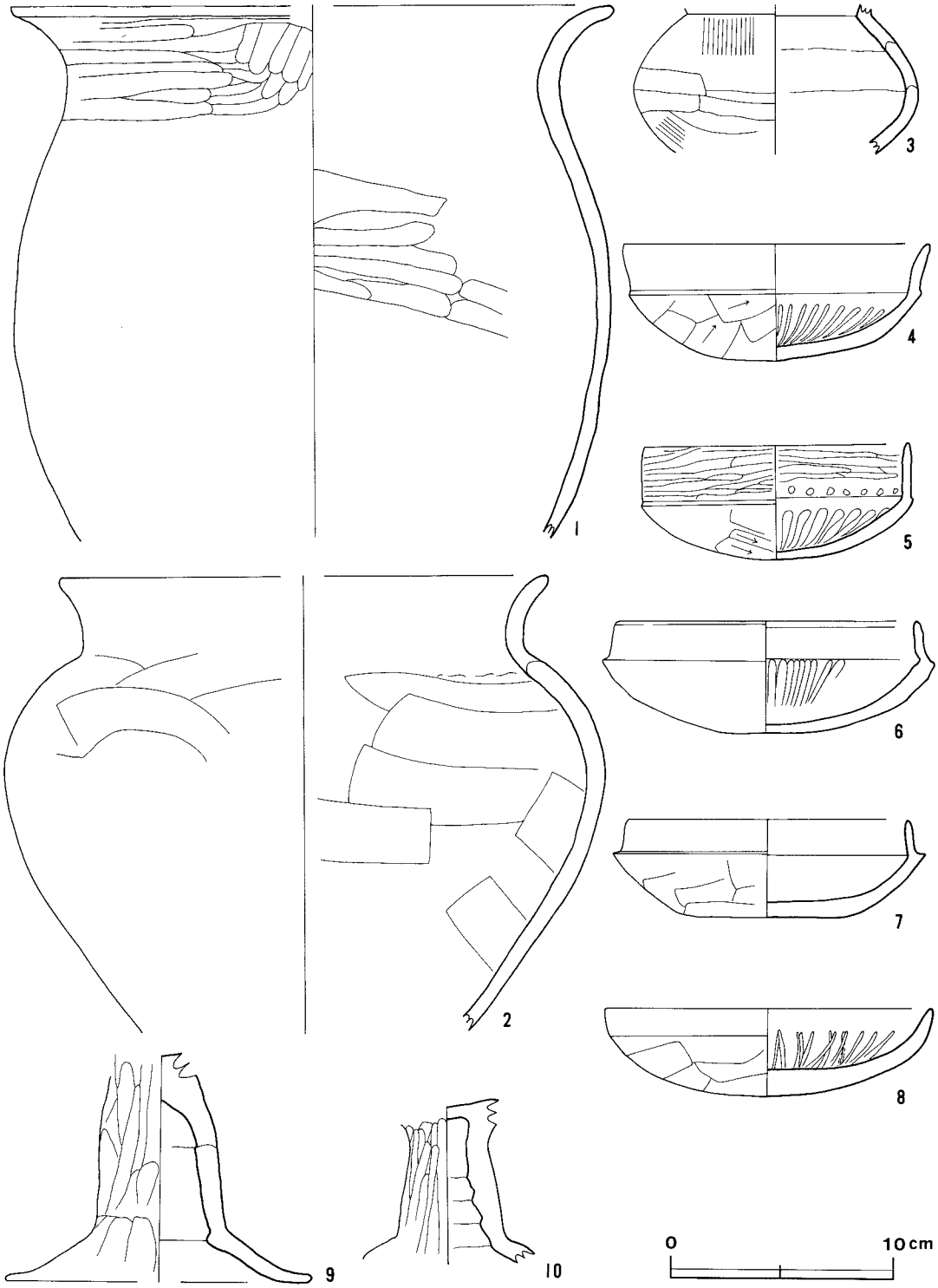
第174図　第1～3・5・6号土坑実測図



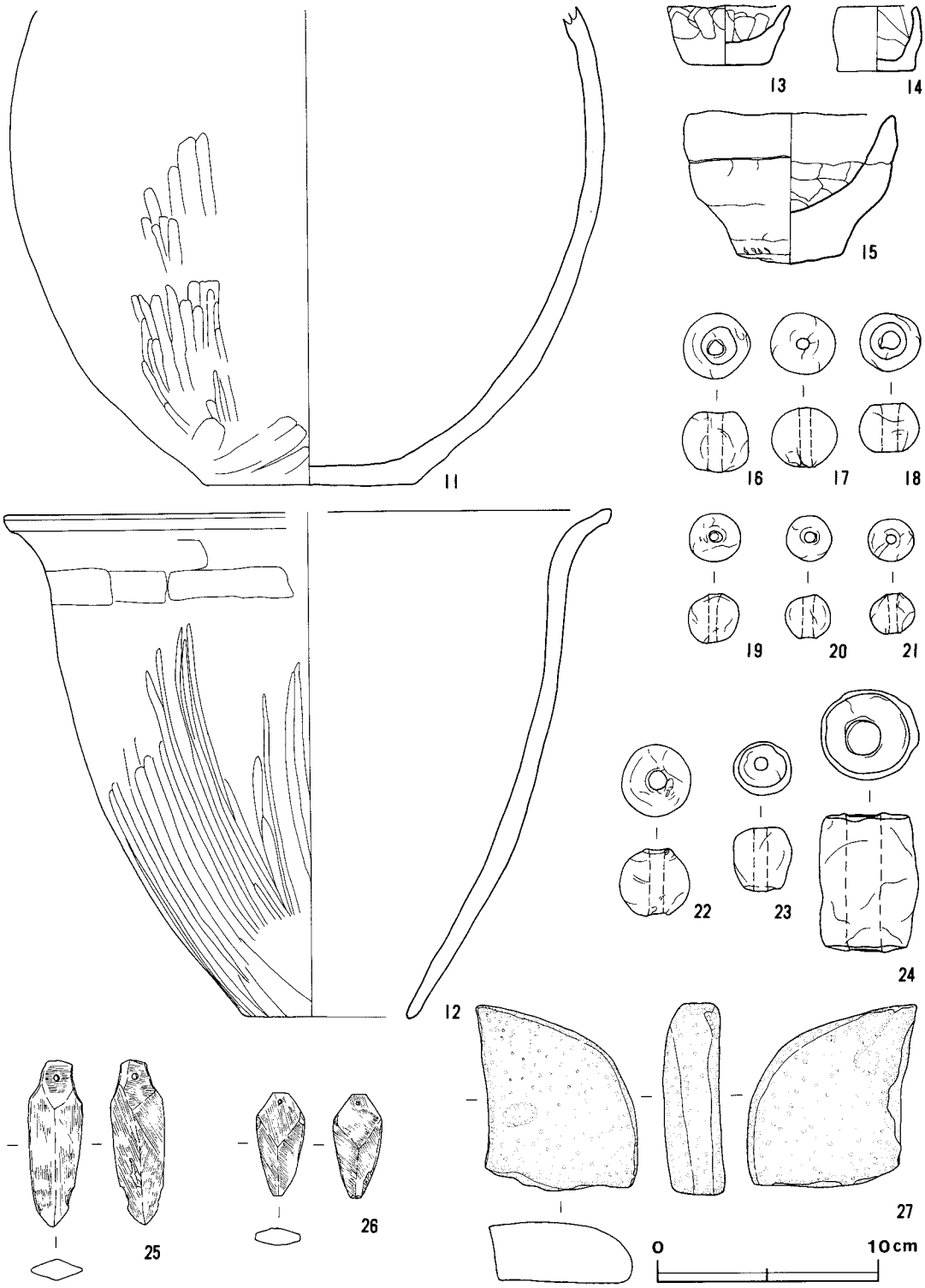
第175図　第７～16号土坑実測図

土坑出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第176図 1	甕形土器 土師器	A (27.3) B (24.5)	胴部は中位に張りをもち，口縁部は外彎して開く。	口縁部外面ーヘラナデ，内面ー横ナデ。胴部内・外面ーヘラナデ。	砂粒・雲母・黒雲母 にぶい橙色 普通	ＳＫ－２ 20% Ｐ126
2	甕形土器 土師器	A (22.4) B (20.9)	胴部は上位に張りをもち，口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面ー横ナデ。胴部外面ーヘラ削り後ナデ，内面ーヘラ削り。	砂粒・雲母 にぶい赤褐色 普通	ＳＫ－７ 30% Ｐ139



第176図　土坑出土遺物実測図（1）



第177図　土坑出土遺物実測図（2）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第176図 3	坩形土器 土師器	B (.7 4)	胴部は中位に張りのある扁平な球形を呈している。	胴部外面－上・下位ナデ，中位は横位のヘラ削り。	砂粒・雲母 にぶい赤褐色 普通	SK－3 20% P134
4	坏形土器 土師器	A 14.0 B 5.5 C (－)	底部は丸底で，体部は内彎して開き，口縁部との境に稜をもつ。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面－横ナデ。体部外面－ヘラ削り，内面－ヘラ磨き。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	SK－7 80% P140
5	坏形土器 土師器	A (12.0) B 5.3 C (－)	底部は丸底で，体部は内彎して開き，口縁部との境に段をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面－ヘラ磨き。体部外面－ヘラ削り，内面－ヘラ磨き。	砂粒・雲母・礫 赤色 普通	SK－7 60% P141
6	坏形土器 土師器	A 13.7 B 5.1 C (－)	底部は丸底で，体部は内彎して開き，口縁部との境に段をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面－横ナデ。体部外面－ヘラ削り，内面－横ナデ後ヘラ磨き。	砂粒・雲母 黒褐色 普通	SK－2 50% P130
7	坏形土器 土師器	A (12.8) B 4.5 C 6.7	底部は平底で，体部は外上方に開き，口縁部との境に段をもつ。口縁部は内傾して立ち上がる。	口縁部内・外面－横ナデ。体部外面－ヘラ削り，内面－横ナデ。	砂粒・雲母・スコリア 橙色 普通	SK－5 70% P138
8	坏形土器 土師器	A 14.8 B 4.1 C (－)	底部は丸底で，体部は内彎して立ち上がり，そのまま口縁部に至る。	口縁部内・外面－横ナデ。体部外面－ヘラ削り，内面－横ナデ後ヘラ磨き。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	SK－1 50% P123
9	高坏形土器 土師器	B 10.5 D (14.0)	脚部は円柱状を呈し，裾部は屈曲して「ハ」の字状を呈する。端部は面をなしている。	脚部外面－ヘラ磨き，内面－ナデ。裾部外面－ヘラナデ，内面－ナデ。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	SK－2 50% P129
10	高坏形土器 土師器	B (7.5)	脚部は円柱状に開き，裾部は屈曲して「ハ」の字状を呈する。	脚部外面－ヘラ磨き，内面－ナデ。	砂粒・石英・スコリア にぶい橙色 普通	SK－4 30% P137
第177図 11	甕形土器 土師器	B (22.1) C 9.6	底部は平底で，胴部は内彎して外上方に立ち上がり，上位に張りをもつ。	胴部外面－ヘラナデ，内面－ナデ。	砂粒・礫・スコリア 褐色 普通	SK－2 20% P127
12	甑形土器 土師器	A (27.9) B 23.7 C 7.5	底部は楕円状に抜け，胴部は内彎気味に外上方に立ち上がる。口縁部は外反して立ち上がり，端部を外側につまみ出している。	口縁部外面－ヘラナデ，内面－横ナデ。胴部外面－ヘラ磨き，内面－ナデ。	砂粒・雲母・砂礫 長石 にぶい黄橙色 普通	SK－2 60% P128
13	手捏土器 土師器	A (5.6) B 2.7 C 3.6	底部は平底で，胴部は外上方に立ち上がり，そのまま口縁部に至る。	胴部内・外面－指ナデ。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	SK－1 80% P124
14	手捏土器 土師器	A 3.6 B 3.0 C 3.5	底部は平底で，胴部は下位で外反し，中位から内彎して立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部内・外面－指ナデ。胴部外面－ナデ，内面－指ナデ。底部－ナデ。	砂粒・礫 赤黒色 普通	SK－7 50% P142
15	手捏土器 土師器	A (9.4) B 6.4 C 4.8	底部は凸状を呈し，胴部は外反して立ち上がり，中位から直立し，そのまま口縁部に至る。	口縁部内・外面－横ナデ。胴部外面－ナデ，下位に刻み目，上位に輪積み痕，内面－横ナデ。	砂粒・スコリア・石英 にぶい橙色 普通	SK－2 80% P133

土坑出土土製品一覧表

図版番号	名　　称	出土地点	台帳番号	大きさ（cm）長さ×幅	孔径(cm)	重量(g)	備　考
第177図 16	球状土錘	ＳＫ１	ＤＰ 105	2.8×3.1	0.7	26.2	
17	〃	ＳＫ２	ＤＰ 106	2.8×3.0	0.5	20.7	
18	〃	ＳＫ２	ＤＰ 107	2.2×2.9	0.9	16.3	
19	〃	ＳＫ２	ＤＰ 108	2.3×2.4	0.5	11.6	
20	〃	ＳＫ６	ＤＰ 109	2.1×2.1	0.5	7.9	
21	〃	ＳＫ７	ＤＰ 111	1.9×2.1	0.5	6.7	
22	〃	ＳＫ７	ＤＰ 110	3.1×3.4	0.8	31.6	
23	管状土錘	ＳＫ１	ＤＰ 206	3.0×2.6	0.6	21.2	
24	〃	ＳＫ４	ＤＰ 207	6.5×4.6	1.6	136.5	

土坑出土石製品一覧表

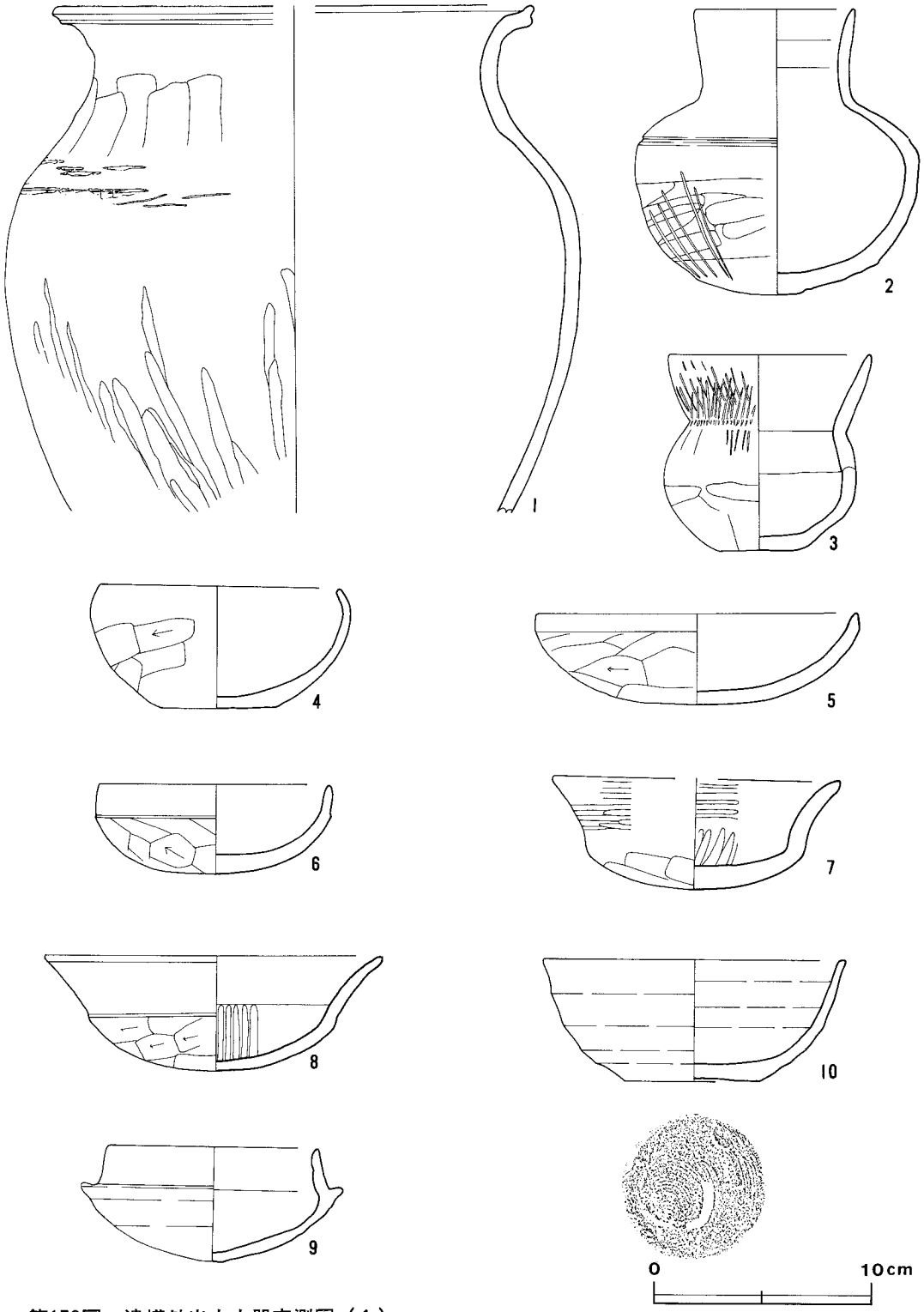
図版番号	名　　称	出土地点	台帳番号	大きさ（cm）長さ×幅×厚さ	孔径(cm)	重量(g)	石　質	備考
第177図 25	剣形模造品	ＳＫ３	Ｑ31	7.7×2.5×0.9	0.2	22.4	滑　石	
26	〃	ＳＫ３	Ｑ32	4.8×2.2×0.8	0.2	10.4	滑　石	
27	石　　皿	ＳＫ３	Ｑ15	(8.6)×(7.9)×(2.8)	－	(215.5)	安山岩	一部残存

4　遺構に伴わない出土遺物

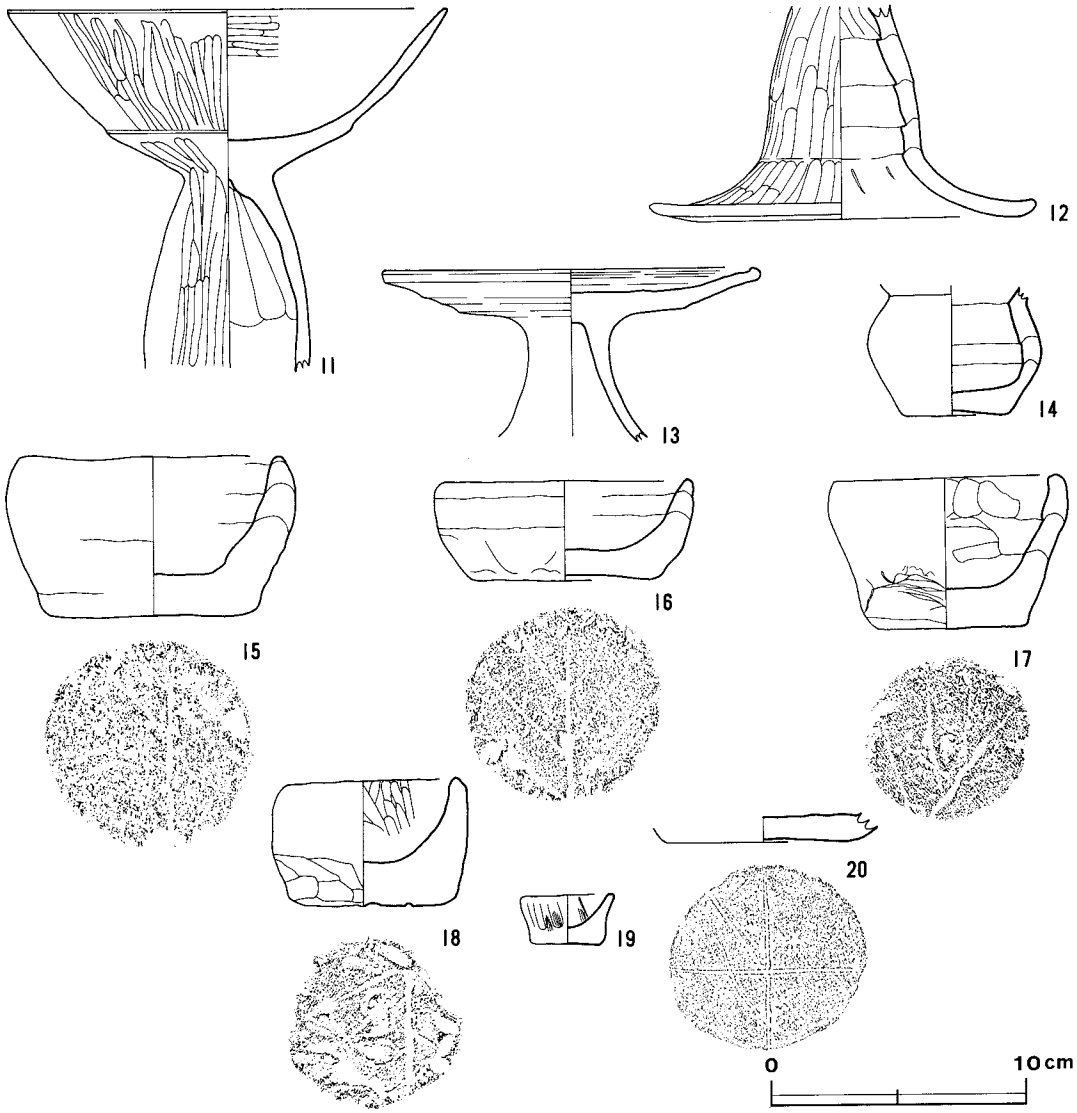
当遺跡からは，土師式土器片，須恵器片，土製品，石製品が出土している。本項では，土器については観察表で説明し，土製品・石製品については個々の出土位置等一覧表にして掲載した。

遺構外出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第178図 1	甕形土器 土師器	A (22.0) B (23.5)	胴部は上位に張りをもち，口縁部は外彎して立ち上がり，端部は外上方につまみ出される。	口縁部内・外面－横ナデ。胴部外面－上位ヘラ削り，中・下位－ヘラ磨き，内面－ナデ。	砂粒・雲母・長石 にぶい橙色 普通	G11e4 30% P173
2	壺 須恵器	A (7.4) B 13.2 C (－)	底部は丸底で，上位に張りをもち，肩部に沈線が巡る。口縁部はやや外傾して立ち上がる。	底部－回転ヘラ削り。ロクロ回転は右。体部外面－回転ヘラ削り。	砂粒・長石 灰色 良好	表採 60% P163
3	坩形土器 土師器	A 9.4 B 9.1 C 3.6	底部は平底で，胴部は中位に張りをもつ。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部外面－縦位にくし目，内面－横ナデ。胴部外面－ヘラ削り後ナデ，内面－輪積み痕。	砂粒・雲母 灰黄褐色 普通	G12h5 95% P167
4	坏形土器 土師器	A 11.1 B 5.8 C 5.4	底部は平底で，体部は内彎して開き，口縁部に至る。口縁部は内彎して立ち上がる。	口縁部内・外面－横ナデ。体部外面－ヘラ削り，内面－ナデ。底部－ナデ。	砂粒・雲母 にぶい赤褐色 普通	G12h4 80% P191



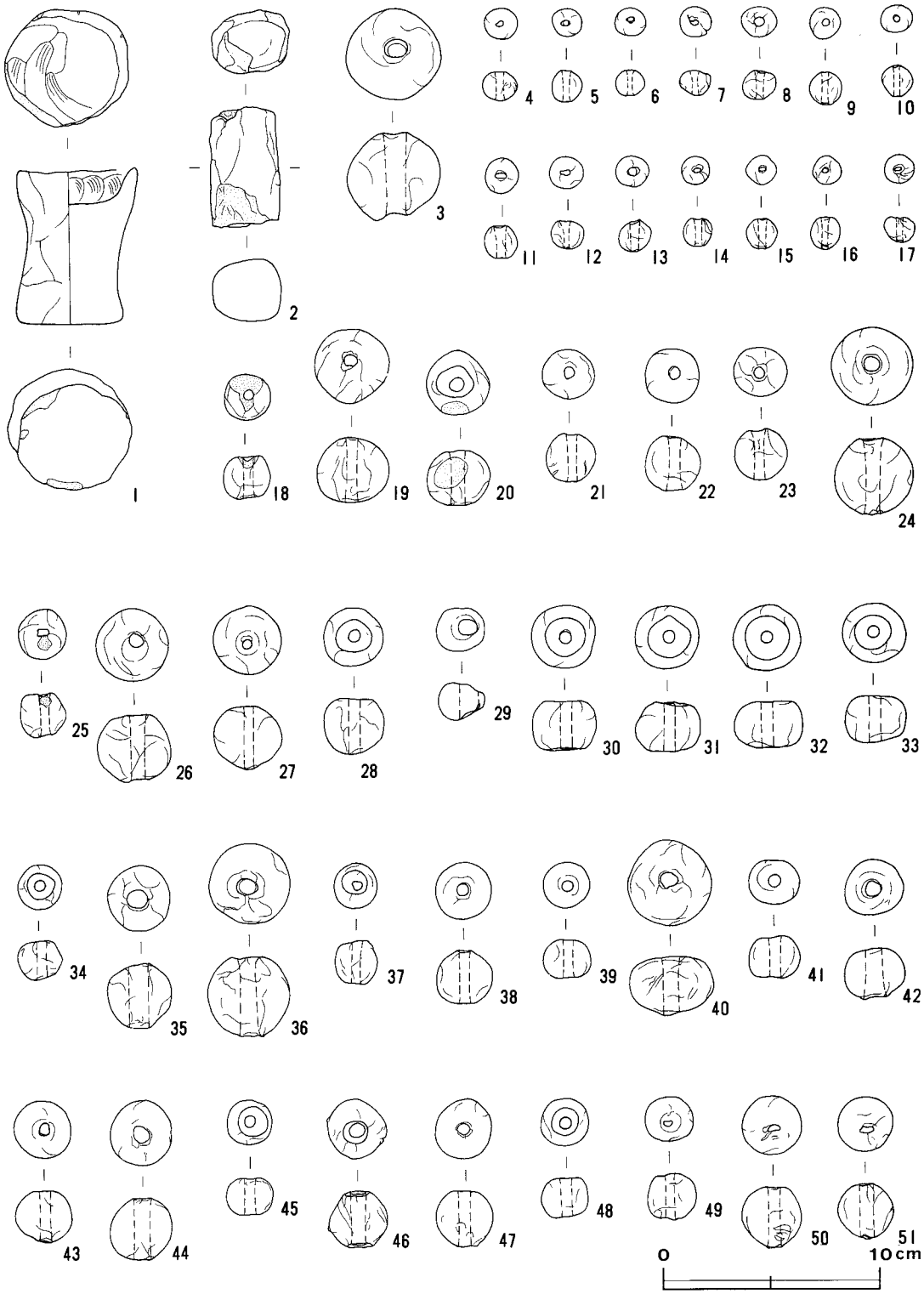
第178図　遺構外出土土器実測図（1）



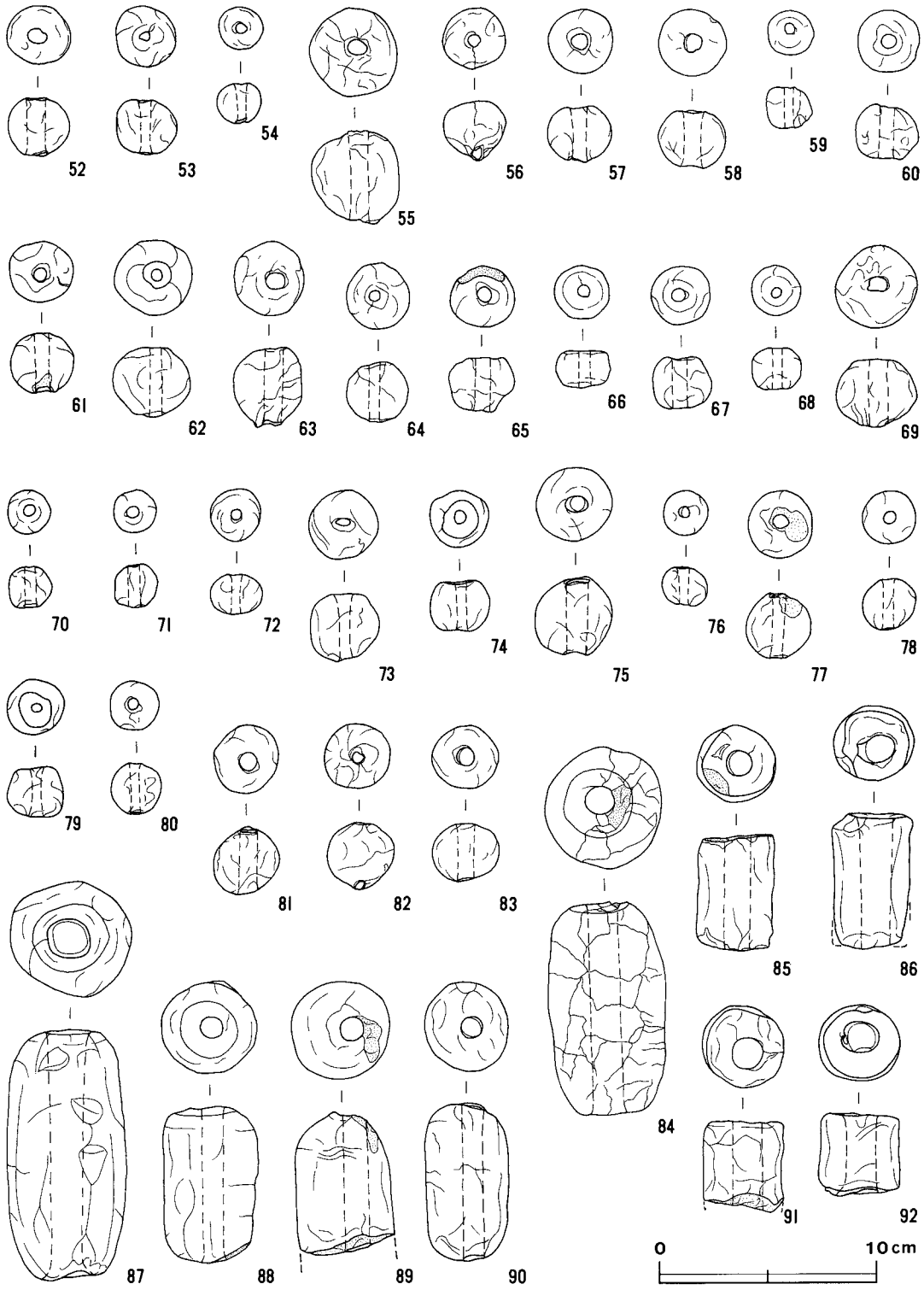
第179図　遺構外出土土器実測図（2）

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第178図 5	坏形土器 土師器	A（14.8） B　4.4 C（－）	底部は丸底で，体部は内彎して開く。口縁部は短く，やや内傾して立ち上がる。	口縁部内・外面－横ナデ。体部外面－ヘラ削り，内面－ナデ。	砂粒 黒色 普通	G13i4 50% P182
6	坏形土器 土師器	A　10.7 B　4.2 C（－）	底部は丸底で，体部は内彎して開き，口縁部との境に稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面－横ナデ。体部外面－ヘラ削り，内面－横ナデ。	砂粒・雲母・石英 橙色 普通	G11e4 80% P200
7	坏形土器 土師器	A（13.4） B　5.1 C（－）	底部は丸底で，体部は内彎して立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面－ヘラ磨き。体部外面－ヘラ削り，内面－ヘラ磨き。	砂粒・雲母・礫 明赤褐色 普通	G11f9 50% P199

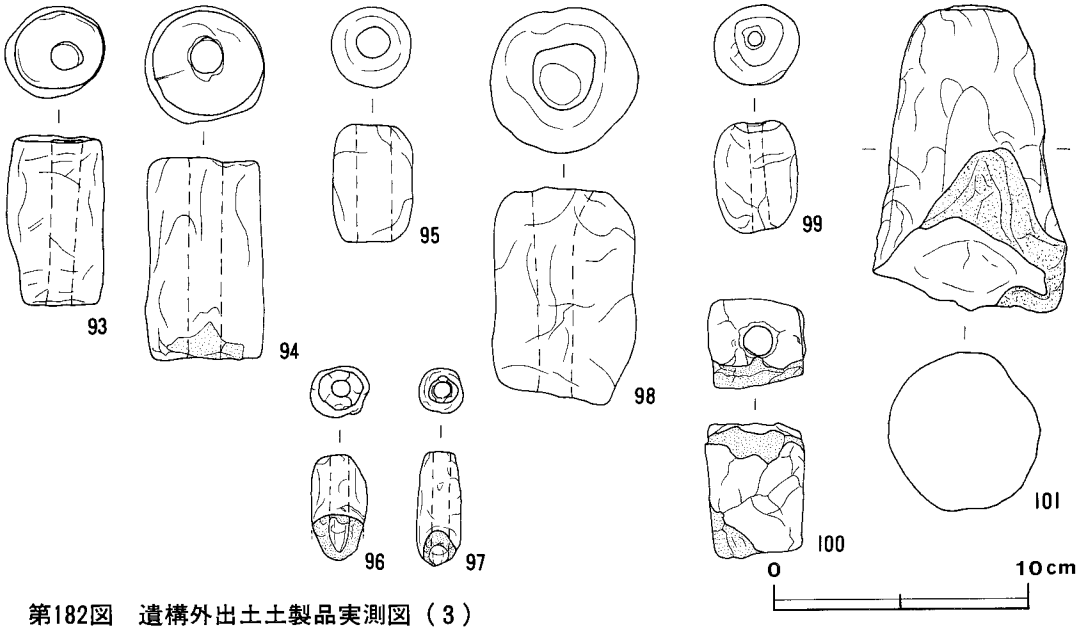
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第178図 8	坏形土器 土師器	A 15.6 B 5.5 C (－)	底部は丸底で，体部は内彎して開き，口縁部との境に稜をもつ。口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面－横ナデ。体部外面－ヘラ削り，内面－磨き。	砂粒・スコリア 赤色 普通	G11g0 60% P171
9	坏 須恵器	A (9.8) B 5.3 C (－)	底部は丸底で，体部は内彎して開き，口縁部との境に段をもつ。口縁部は内傾する。	底部－回転ヘラ削り。ロクロ回転は右。	砂粒 青灰色 良好	G12h5 40% P172
10	坏形土器 土器質土器	A (14.0) B 5.6 C 6.4	底部は平底で，体部は内彎しながら外上方に立ち上がり，そのまま口縁部に至る。	水挽き成形。底部－回転糸切り。外周部ヘラ切り。ロクロ回転は右。口縁部外面－横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	G12g4 50% P197
第179図 11	高坏形土器 土師器	A (17.4) B (14.4)	体部は下位に稜をもち，内彎気味に外上方に開き，口縁部に至る。脚部は内彎して開き，裾部欠損している。	口縁部内・外面－横ナデ。体部内・外面－ヘラ磨き。脚部外面－ヘラ磨き。	砂粒・雲母 橙色 普通	G13j2 40% P169
12	高坏形土器 土師器	B (8.4) D 15.3	体部欠損。脚部は内彎して開き，裾部は屈曲・外反して開き，端部内側は面をなす。	脚部外面－ヘラ削り後ヘラ磨き，内面－ヘラナデ。輪積み痕。裾部外面－ヘラ磨き，内面－横ナデ。	砂粒 外面－黒色，内面－暗赤褐色 普通	G12h4 60% P190
13	高盤 須恵器	A 14.9 B (7.0)	体部は外上方に大きく開いて口縁部に至る。口縁部は僅かにつまみ出し，端部は面をなす。脚部は外反して開く。裾部欠損。	水挽き成形。右ロクロ回転。底部－回転ヘラ削り。口縁部内・外面－横ナデ。	砂粒・細砂 灰色 良好	表採 50% P164
14	ミニチュア土器 土師器	B (5.2) C 4.1	底部は平底で，胴部は直線的に外上方に開き，中位に張りをもち，中位から内傾して立ち上がる。口縁部欠損。	底部－ナデ。胴部外面－ナデ。内面－横ナデ。輪積み痕。	砂粒 橙色 普通	表採 70% P160
15	手捏土器 土師器	A (10.3) B 6.4 C 7.0	底部は平底で，胴部は内彎して外上方に開き，上位に張りをもつ。口縁部は内傾する。	底部－木葉痕。口縁部内・外面－ナデ。胴部外面－ナデ，内面－指ナデ。	砂粒・礫・黒雲母 にぶい橙色 普通	G13i3 40% P192
16	手捏土器 土師器	A 9.7 B 4.0 C 7.0	底部は平底で，胴部は内彎して外上方に立ち上がり，口縁部に至る。	底部－木葉痕。口縁部内・外面－横ナデ。胴部外面－凸凹であるが横ナデ，輪積み痕。内面－ナデ，輪積み痕。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	表採 90% P161
17	手捏土器 土師器	A (8.6) B 6.0 C 5.7	底部は平底で，胴部は直線的に外上方に立ち上がり，口縁部は内傾する。	底部－木葉痕。口縁部内・外面－ナデ。胴部外面－ナデ，輪積み痕，内面－指ナデ，輪積み痕。	砂粒・スコリア・礫 淡橙色 普通	G13i3 50% P176
18	手捏土器 土師器	A 6.7 B 5.2 C 5.4	底部は平底で，胴部は内彎気味に直立する。口縁部は内傾する。	底部－木葉痕。口縁部内・外面－指ナデ。胴部内・外面－ナデ。	砂粒・礫・雲母 にぶい橙色 普通	G13i3 70% P175
19	手捏土器 土師器	A 3.6 B 2.0 C 2.7	底部は平底で，胴部は外反して立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部外面－ヘラナデ，内面－ナデ。胴部外面－ヘラナデ，内面－ナデ，底部－ナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	G11e4 100% P174
20	坏 須恵器	B (1.1) C (8.2)	底部のみ遺存。底部はやや上げ底気味の平底を呈している。	底部－手持ちによる一方向へのヘラ削り。十文字に擬文痕がある。ロクロ回転は右。	砂粒・細砂 黄灰色 普通	G12g5 10% P184



第180図　遺構外出土土製品実測図（1）



第181図　遺構外出土土製品実測図（２）



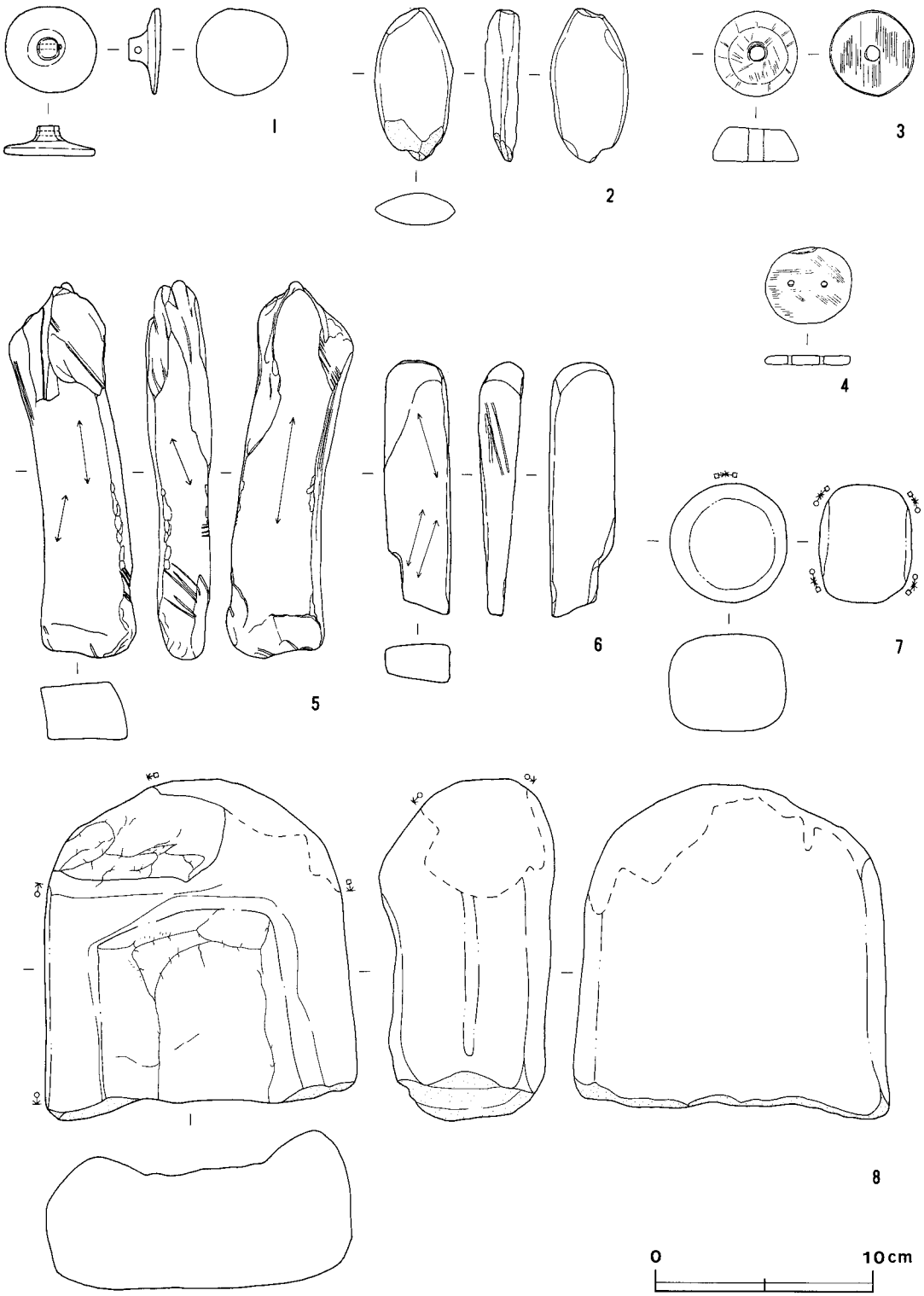
第182図　遺構外出土土製品実測図（3）

遺構外出土土製品一覧表

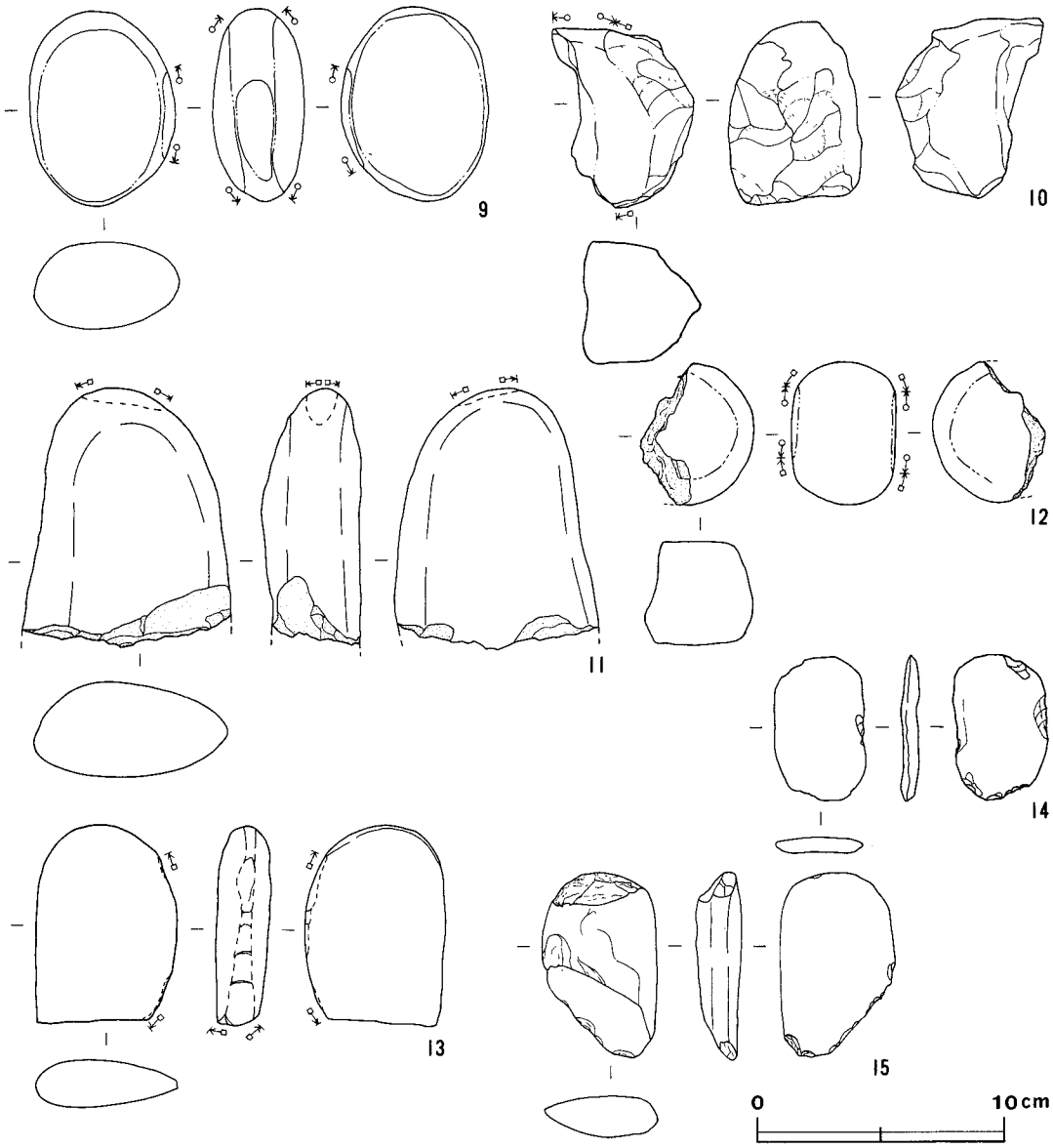
図版番号	名　　称	出土地点	台帳番号	長さ×幅（cm）	孔径(cm)	重量(g)	備　考
第180図 1	臼形土製模造品	G13 i_3	DP 230	7.3×5.7	—	192.4	
2	杵形土製模造品	G11 f_9	DP 231	5.6×3.3	—	61.2	
3	球状土錘	G11 d_0	DP 140	4.1×4.4	1.1	70.4	
4	〃	G11 e_0	DP 120	1.4×1.5	0.4	2.5	
5	〃	G11 e_0	DP 121	1.5×1.4	0.4	2.3	
6	〃	G11 e_0	DP 122	1.2×1.4	0.3	1.8	
7	〃	G11 e_0	DP 123	1.3×1.5	0.3	2.2	
8	〃	G11 e_0	DP 124	1.4×1.6	0.4	2.4	
9	〃	G11 e_0	DP 125	1.6×1.5	0.3	2.8	
10	〃	G11 e_0	DP 126	1.5×1.4	0.3	2.2	
11	〃	G11 e_0	DP 127	1.5×1.7	0.4	3.2	
12	〃	G11 e_0	DP 128	1.4×1.6	0.5	2.7	
13	〃	G11 e_0	DP 129	1.5×1.6	0.3	2.6	
14	〃	G11 e_0	DP 130	1.4×1.4	0.4	2.3	
15	〃	G11 e_0	DP 131	1.4×1.4	0.4	2.5	
16	〃	G11 e_0	DP 132	1.5×1.4	0.4	2.2	
17	〃	G11 e_0	DP 133	1.3×1.3	0.3	1.7	
18	〃	G11 g_0	DP 140	2.0×2.2	0.6	9.5	
19	〃	G11 f_2	DP 134	3.1×3.5	0.8	33.5	
20	〃	G11 g_6	DP 135	2.7×3.1	0.7	(20.9)	一部欠損
21	〃	G12 g_7	DP 136	2.3×2.4	0.4	11.6	

図版番号	名　　称	出土地点	台帳番号	長さ×幅（cm）	孔径(cm)	重量(g)	備　考
第180図 22	球状土錘	G12g7	DP 137	2.6×2.5	0.8	15.7	
23	〃	G12g7	DP 138	2.4×2.5	0.6	12.5	
24	〃	G12h7	DP 139	3.6×3.8	0.8	45.4	
25	〃	G13f1	DP 142	2.1×2.3	0.4	9.3	
26	〃	G13h5	DP 141	3.2×3.5	0.8	36.5	
27	〃	G11f0	DP 144	3.0×3.2	0.4	29.1	
28	〃	G11f0	DP 145	2.6×2.8	0.5	19.3	
29	〃	G11f0	DP 146	1.8×2.2	0.9	4.7	
30	〃	G11f0	DP 147	2.3×3.0	0.5	22.3	
31	〃	G11f0	DP 148	2.3×3.0	0.5	20.8	
32	〃	G11f0	DP 149	2.1×3.2	0.5	22.3	
33	〃	G11f0	DP 150	2.2×2.8	0.5	17.8	
34	〃	G11f0	DP 151	1.8×2.1	0.5	6.9	
35	〃	G13i3	DP 152	3.0×3.1	0.9	23.7	
36	〃	G13i3	DP 153	3.7×3.8	1.0	43.9	
37	〃	G12g5	DP 154	2.0×2.1	0.5	7.4	
38	〃	G12h5	DP 155	2.5×2.6	0.5	15.4	
39	〃	G12f6	DP 156	1.8×2.2	0.5	7.5	
40	〃	G12f6	DP 157	2.7×4.0	0.8	40.3	
41	〃	G12f6	DP 158	2.0×2.4	0.6	8.4	
42	〃	G12g6	DP 159	2.4×2.7	1.0	13.1	
43	〃	G12g6	DP 160	2.4×2.7	0.5	13.3	
44	〃	G12g6	DP 161	2.9×3.1	0.8	24.4	
45	〃	G12g6	DP 162	1.7×2.2	0.5	6.8	
46	〃	G12g6	DP 163	2.6×2.8	0.7	17.0	
47	〃	G12g8	DP 164	2.6×2.8	0.6	17.6	
48	〃	G12g8	DP 165	1.8×2.2	0.5	8.1	
49	〃	G12g8	DP 166	2.2×2.3	0.4	8.7	
50	〃	G12g8	DP 167	2.8×2.8	0.6	18.9	
51	〃	G12g8	DP 168	2.6×2.5	0.7	14.2	
第181図 52	〃	G12g8	DP 169	2.8×2.9	1.0	19.0	
53	〃	G12g8	DP 170	2.6×2.9	0.6	19.0	
54	〃	G12h8	DP 171	1.9×2.0	0.4	7.2	
55	〃	G12h8	DP 172	4.4×4.2	1.0	70.8	
56	〃	G12h8	DP 173	2.7×2.9	0.7	18.4	
57	〃	G12h8	DP 174	2.6×3.0	0.7	20.4	
58	〃	G12h8	DP 175	2.7×3.2	1.1	21.4	
59	〃	G12h9	DP 177	1.9×2.2	0.4	7.9	
60	〃	G12h9	DP 178	2.6×2.9	0.7	21.1	
61	〃	G12h9	DP 185	2.8×2.9	0.6	22.7	

図版番号	名　　称	出土地点	台帳番号	長さ×幅（cm）	孔径(cm)	重量(g)	備　考
第181図 62	球状土錘	G12g4	DP 176	3.2×3.5	0.5	37.4	
63	〃	G12g4	DP 179	3.7×3.5	0.9	38.4	
64	〃	G12g4	DP 180	2.9×3.1	0.5	21.8	
65	〃	G12g4	DP 181	2.5×3.0	0.7	(20.5)	一部欠損
66	〃	G12g4	DP 182	1.7×2.5	0.5	10.6	
67	〃	G12g4	DP 183	2.4×2.7	0.7	18.4	
68	〃	G12g4	DP 184	1.9×2.4	0.4	11.0	
69	〃	G12g4	DP 186	3.2×3.8	0.8	43.9	
70	〃	G12g4	DP 187	1.9×2.1	0.5	7.6	
71	〃	G12g4	DP 188	2.0×2.0	0.5	7.2	
72	〃	G12g4	DP 192	1.9×2.4	0.5	10.4	
73	〃	G11f9	DP 189	3.3×3.3	0.7	28.7	
74	〃	G11f9	DP 190	2.4×2.7	0.6	16.7	
75	〃	G11f9	DP 191	3.7×3.5	0.9	41.0	
76	〃	G11f9	DP 193	1.9×2.1	0.5	6.4	
77	〃	G11e4	DP 194	3.0×3.1	0.6	29.0	
78	〃	G12f4	DP 196	2.4×2.6	0.6	13.7	
79	〃	G12f4	DP 195	2.4×2.7	0.7	16.5	
80	〃	G12f4	DP 197	2.4×2.3	0.6	11.8	
81	〃	G11g0	DP 198	3.2×3.2	1.0	28.3	
82	〃	Aトレンチ	DP 199	3.2×3.1	0.4	27.6	
83	〃	Aトレンチ	DP 200	2.8×3.1	0.9	20.4	
84	管状土錘	表　　採	DP 222	10.0×5.7	1.4	317.9	
85	〃	G12g4	DP 208	5.5×3.6	1.2	76.1	
86	〃	G12h7	DP 209	(6.4) × (3.8)	1.6	(67.6)	一部欠損
87	〃	G12g4	DP 210	11.7×5.5	1.9	314.0	
88	〃	G12g4	DP 211	(7.3) ×4.4	1.0	(157.8)	一部欠損
89	〃	G12f4	DP 214	6.6×4.6	1.1	(143.2)	半分欠損
90	〃	G12f4	DP 215	7.4×4.1	1.0	135.0	
91	〃	G12f5	DP 216	(4.3) × (3.9)	1.4	(59.8)	半分欠損
92	〃	G12h9	DP 213	3.9×3.8	1.4	53.2	
第182図 93	〃	G12h9	DP 212	6.8×3.9	1.2	(99.9)	一部欠損
94	〃	G11f9	DP 217	8.1×4.8	1.3	227.2	
95	〃	G11f9	DP 218	4.7×3.2	1.4	42.1	
96	〃	G11f9	DP 233	(4.2) × (2.3)	0.7	(13.3)	一部欠損
97	〃	G12f9	DP 232	(4.6) × (1.8)	0.6	(9.2)	〃
98	〃	G12f4	DP 219	8.4×5.8	1.8	238.8	
99	〃	G12f4	DP 220	4.4×3.3	1.0	46.9	
100	〃	G11f9	DP 223	5.4×3.9	1.3	(86.4)	一部欠損
101	支　　脚	G12h0	DP 229	(12.2)×(7.6)	—	(451.2)	〃



第183図　遺構外出土石器・石製品実測図（1）

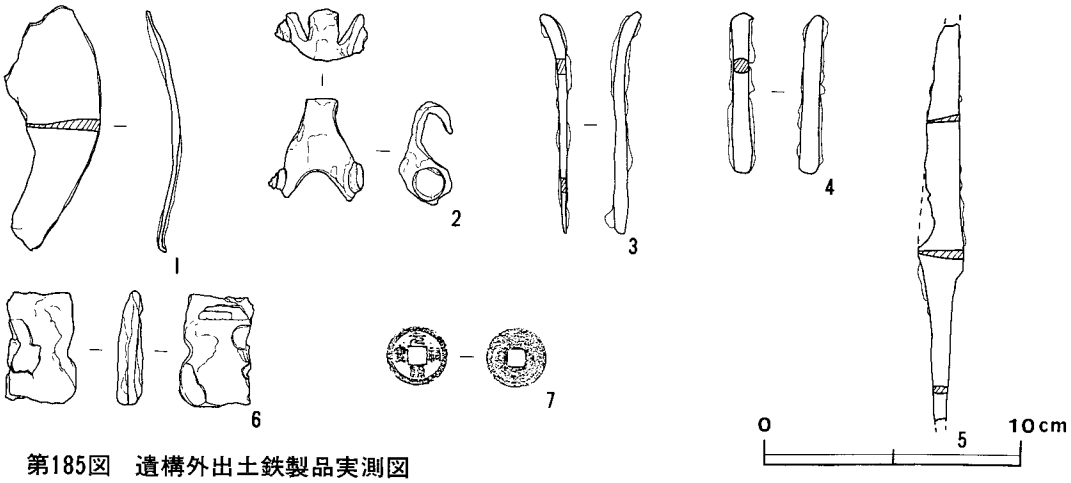


第184図　遺構外出土土器実測図（2）

遺構外出土石器・石製品一覧表

図版番号	名　　称	出土地点	台帳番号	大きさ（cm）長さ×幅×厚さ	孔径(cm)	重量(g)	石　質	備考
第183図 1	鏡形模造品	G12h0	Q25	4.1×4.3×1.4	0.3	19.3	滑　石	
2	剣形模造品	G11f9	Q 8	(7.1)×3.5×1.5	—	(48.9)	角閃片岩	一部欠損
3	紡 錘 車	G12h9	Q24	上径×下径×厚さ 2.6×4.0×1.6	0.8	36.1	滑　石	
4	有孔円板	G12h4	Q29	3.6×4.0×0.5	0.2	11.7	〃	双孔
5	砥　　石	G12g6	Q 4	(17.5)×(6.0)×(3.0)	—	(346.0)	粘板岩	一部欠損

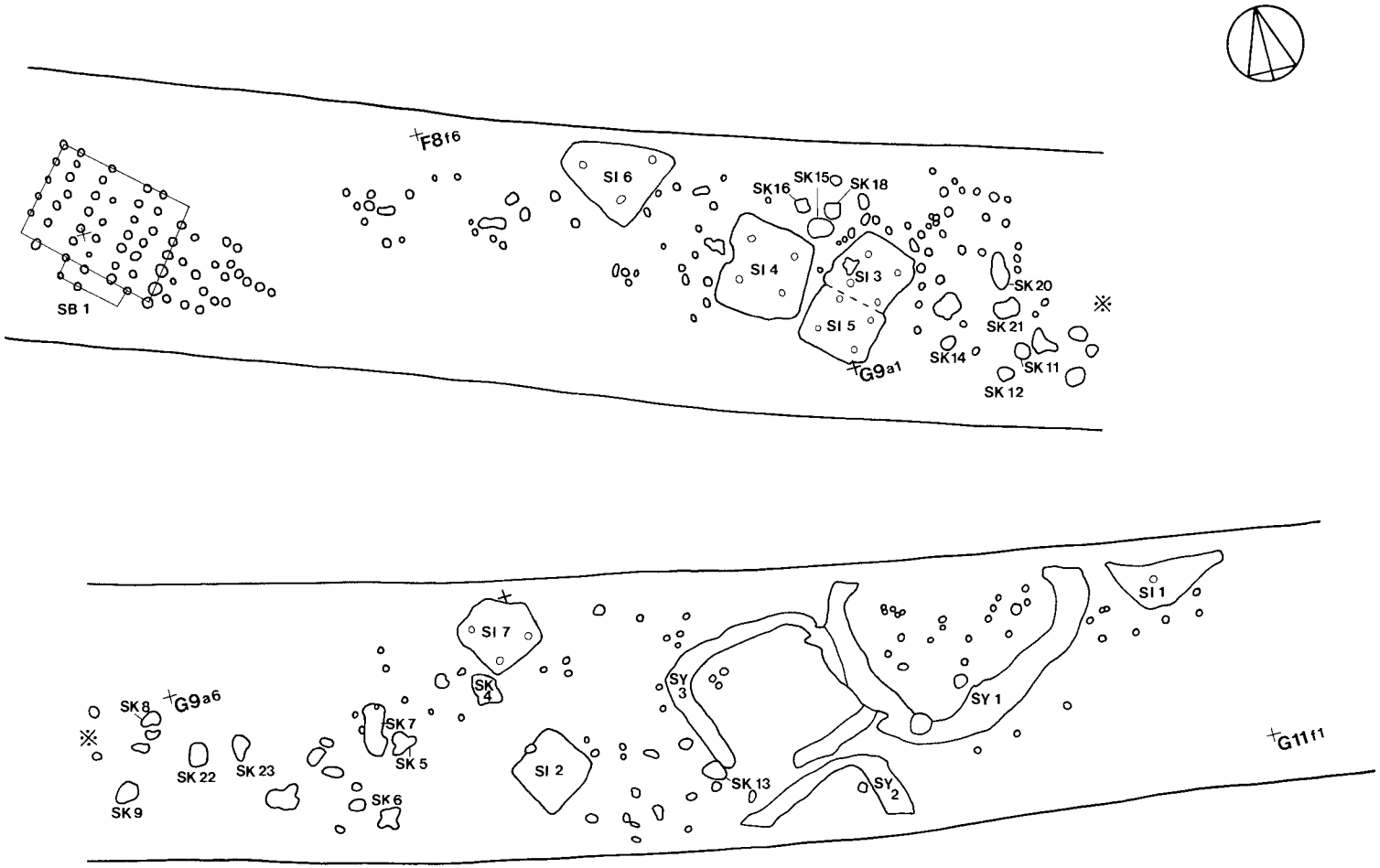
図版番号	名　　称	出土地点	台帳番号	大きさ（cm）長さ×幅×厚さ	孔径(cm)	重量(g)	石　質	備考
第183図 6	砥　　石	G12 i_9	Q13	(11.8)×3.0×2.1	—	(92.1)	頁　岩	一部残存
7	磨　　石	G12 h_0	Q 5	5.6×5.4×4.3	—	199.5	安山岩	
8	〃	G12 g_6	Q 6	(15.8)×14.4×8.3	—	(2055.0)	砂　岩	一部残存
第184図 9	〃	G12 g_6	Q 7	7.9×5.9×3.6	—	229.5	流紋岩	
10	敲　　石	G12 h_0	Q 9	(8.3)×(5.8)×(5.3)	—	(231.7)	安山岩	一部残存
11	〃	G11 e_2	Q12	(10.7)×7.8×3.8	—	(445.2)	粘板岩	〃
12	〃	G12 h_0	Q10	(5.8)×4.6×(4.2)	—	(130.4)	安山岩	〃
13	〃	G12 h_9	Q14	(8.1)×5.5×2.2	—	(147.6)	硬砂岩	〃
14	石　　斧	G12 h_9	Q33	5.9×3.9×0.7	—	24.9	紅柱石ホーンフェルス	一部欠損
15	石　　刃	G12 h_8	Q17	(7.5)×4.6×1.9	—	(79.5)	流紋岩	一部残存



第185図　遺構外出土鉄製品実測図

遺構外出土鉄製品一覧表

図版番号	名　　称	出土地点	台帳番号	法量（cm）長さ	幅	厚さ	形態の特徴	備　考
第185図 1	鎌	G13 i_4	M13	(9.7)	3.0	0.4	基部は鈍角の突き出し。	
2	不　　明	G11 f_9	M14	4.1	3.6	0.4	Y字形,両端に鋲をもつ。	
3	釘	G12 g_4	M15	8.7	0.5	0.3	断面長方形。	
4	不　　明	G11 e_4	M17	(6.3)	0.7	0.6	棒状，断面方形。	
5	刀　　子	G11 e_4	M18	(15.7)	1.8	0.35	ほぼ完形。断面三角形。	
6	不　　明	G11 f_9	M19	4.4	2.8	0.3	断面長方形。	
7	貨　　幣	G11 e_4	M20	2.3	2.3	0.1	元祐通寶。	



第186図　後九郎兵衛遺跡全体図

第７章　後九郎兵衛遺跡

第１節　遺跡の概要

当遺跡は，茨城県稲敷郡桜川村大字浮島字後九良辺5374番地ほかに所在し，霞ヶ浦の南東岸に接する浮島の東端部，標高約６～８ｍほどの砂洲上の台地に立地する。本遺跡に接して東側に，宮の脇遺跡・尾島貝塚が並んで所在し，南側には，標高26.7ｍを測る蛇峰山がある。

今回の調査エリアは，蛇峰山の東麓を通り，当跡と宮の脇遺跡を隔てる農道から西側へ長さ約430ｍ，幅約14ｍ，面積は7,765㎡である。遺構は，当遺跡の東端から西へ120ｍほどまでの間に検出され，その内訳は次のとおりである。

竪穴住居跡	７軒	（古墳時代）
掘立柱状建築跡	１棟	（古墳時代）
方形周溝状遺構	３基	（古墳時代）
土　　坑	23基	

当遺跡からの出土遺物は，縄文時代後期から晩期にかけての縄文式土器片，弥生時代初頭に比定される殿内式と呼称される深鉢形の土器片，古墳時代後期の土師器（甕・壺・坏・高坏）や土師器片，磨製石斧，石製の剣形模造品等である。

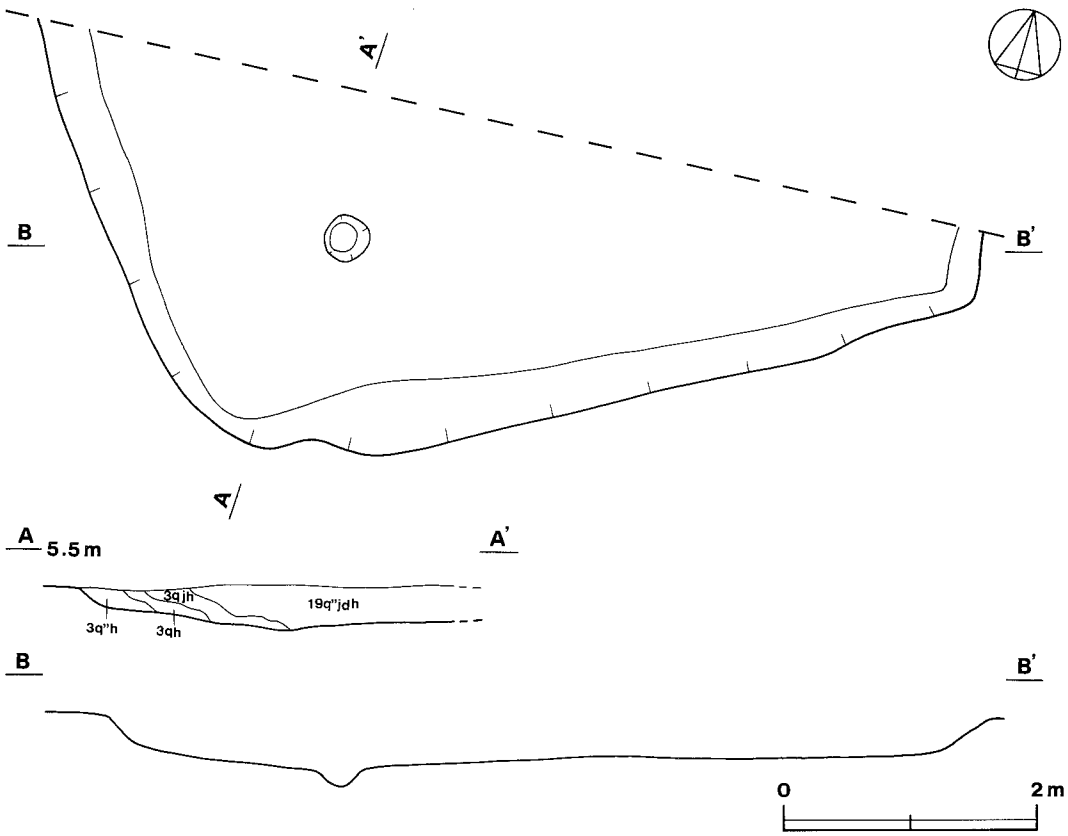
第２節　遺構と遺物

１　竪穴住居跡

第１号住居跡（第187図）

本跡は，宮の脇遺跡に接する当遺跡の最東端部に位置し，本跡の中央部から北側は調査区域外に延びている。調査を実施したのは南東コーナー部，南西コーナー部，南壁，西壁の一部及びその間の床面だけで，住居跡全体の約$\frac{1}{4}$にすぎない。

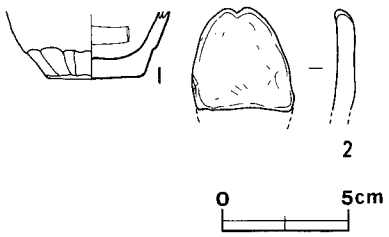
形状や規模等不明であるが，調査した部分について述べると，南西コーナー部は段状を呈し，南壁の長さは6.4ｍである。壁は小礫を含む黒褐色砂土で，緩やかに立ち上がり，壁高は35㎝程である。床は礫を多く含む黄褐色砂土で，床面はほぼ平坦で，締まりはない。ピットは南西コーナー近くに１か所検出され，直径38㎝，深さ17㎝で，位置から判断すると主柱穴と考えられる。その他のピットやカマド等の施設は調査区域外に存在するものと思われる。



第187図　第１号住居跡実測図

覆土は壁際に多量の極小礫を含む暗褐色土，その他は極小～中礫を含む黒色砂土及び黒褐色砂土が自然堆積している。

遺物は覆土中から縄文式土器片と土師器片が混在して出土していて，層位的な差はない。量的には縄文式土器片の方がやや多いが，流れ込みと考えられる。半完形の手捏土器（第188図１）が覆土中から検出されている。



第188図

第１号住居跡出土遺物実測図

第１号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第188図 1	手捏土器 土師器	B（2.6） C　4.0	底部は平底を呈し，胴部は内彎しながら外上方に立ち上がる。	底部－ナデ。胴部外面－ヘラ削り後ナデ，内面－ナデ，一部に朱塗痕。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	40% P 1

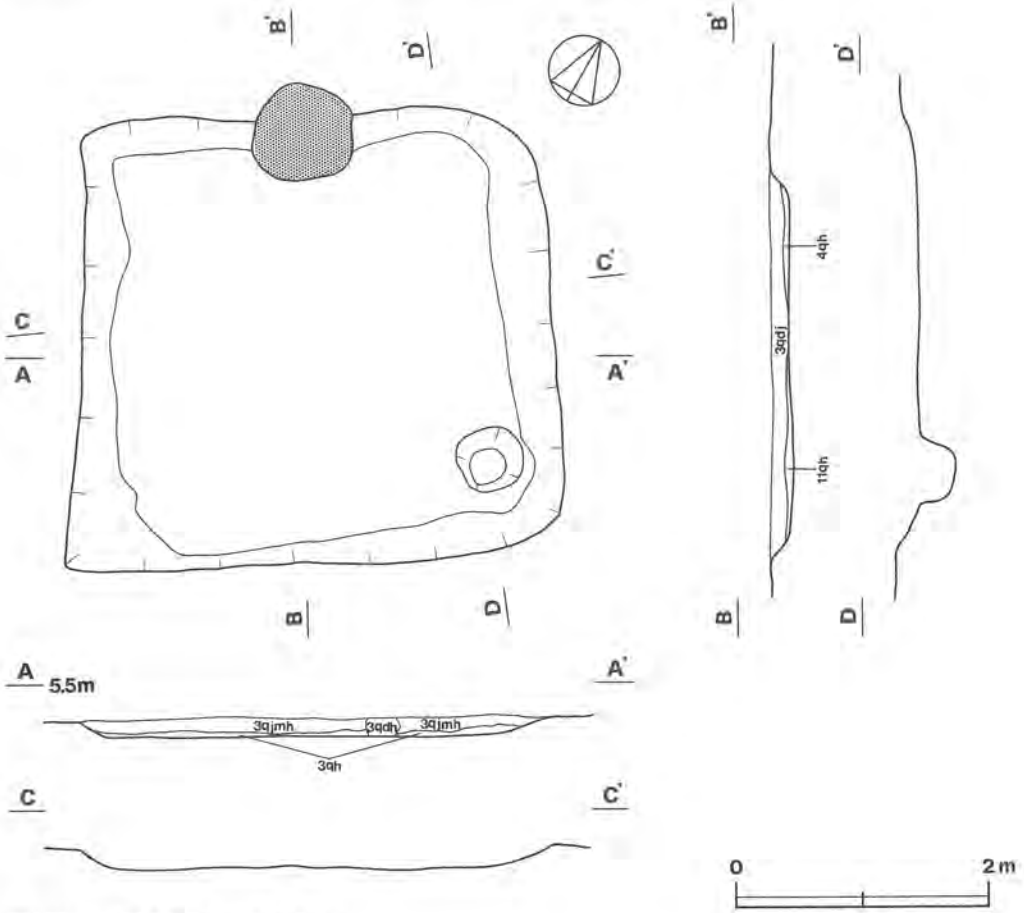
第1号住居跡出土土製品一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	大きさ（cm） たて×よこ×厚さ	孔径（cm）	重量（g）	備　考
第188図 2	土　錘	DP33	(4.2)×4.0×0.8	—	(16.2)	半分欠損

第2号住居跡（第189図）

本跡は，遺跡の東側部G9c₀区を中心に確認されたもので，第7号住居跡の南側5mに位置している。

平面形は一辺3.7m前後の隅丸方形を呈し，主軸方向はN－30°－Wを指している。壁高は10～20cmで北西壁が浅く，壁は礫を多く含む砂土で，緩やかに立ち上がっている。床面はほぼ平坦でやや締まりに欠け，床は黒褐色砂土混じりの灰褐色砂土で酸化鉄を含んでいる。ピットは東コーナー壁下に1か所検出されただけで直径50cm，深さ32cm，断面は円筒状である。規模から柱穴と考えられる。



第189図　第2号住居跡実測図

カマドは北西壁中央部に付設され，焼けた砂土が直径約40cmの円形状に散布していた。壁外へ25cm掘り込んでいる。遺存状態が不良のため，詳細については不明である。

覆土は上層に極小礫と少量の粘土粒子を含む締まりのある黒褐色砂土，下層に少量の極小礫を含む柔かい暗赤褐色砂土が自然堆積している。

遺物は縄文式土器片44点，土師器片25点，須恵器片１点で，ほとんど覆土中から出土している。これらの遺物は層位的な差はなく混在していて，本跡が埋没する際に周囲から流れ込んだものと考えられる。器形を窺える土器の出土はなかった。

第３号住居跡（第190図）

本跡は，当遺跡遺構群のほぼ中央部F9 i_1 区に位置している。南西側は第５号住居跡と重複していて，新旧関係は土層から判断すると，本跡の方が新しい。

平面形は北西壁の南西側を掘り過ぎてしまったが，一辺3.8ｍ前後の隅丸方形を呈し，主軸方向はＮ－35°－Ｗを指している。壁高は15～25cm，壁は床と同じ黄褐色砂土で，緩やかに立ち上がっている。床面はほぼ平坦で，踏み固められてはいない。第５号住居跡の床面より４cmほど低い。ピットはほぼ等間隔にP_1～P_4の４か所検出され，直径36～38cm，深さ13～29cmで，いずれも主柱穴である。P_1・P_2・P_3の底面は平坦でP_4の断面は椀状を呈している。

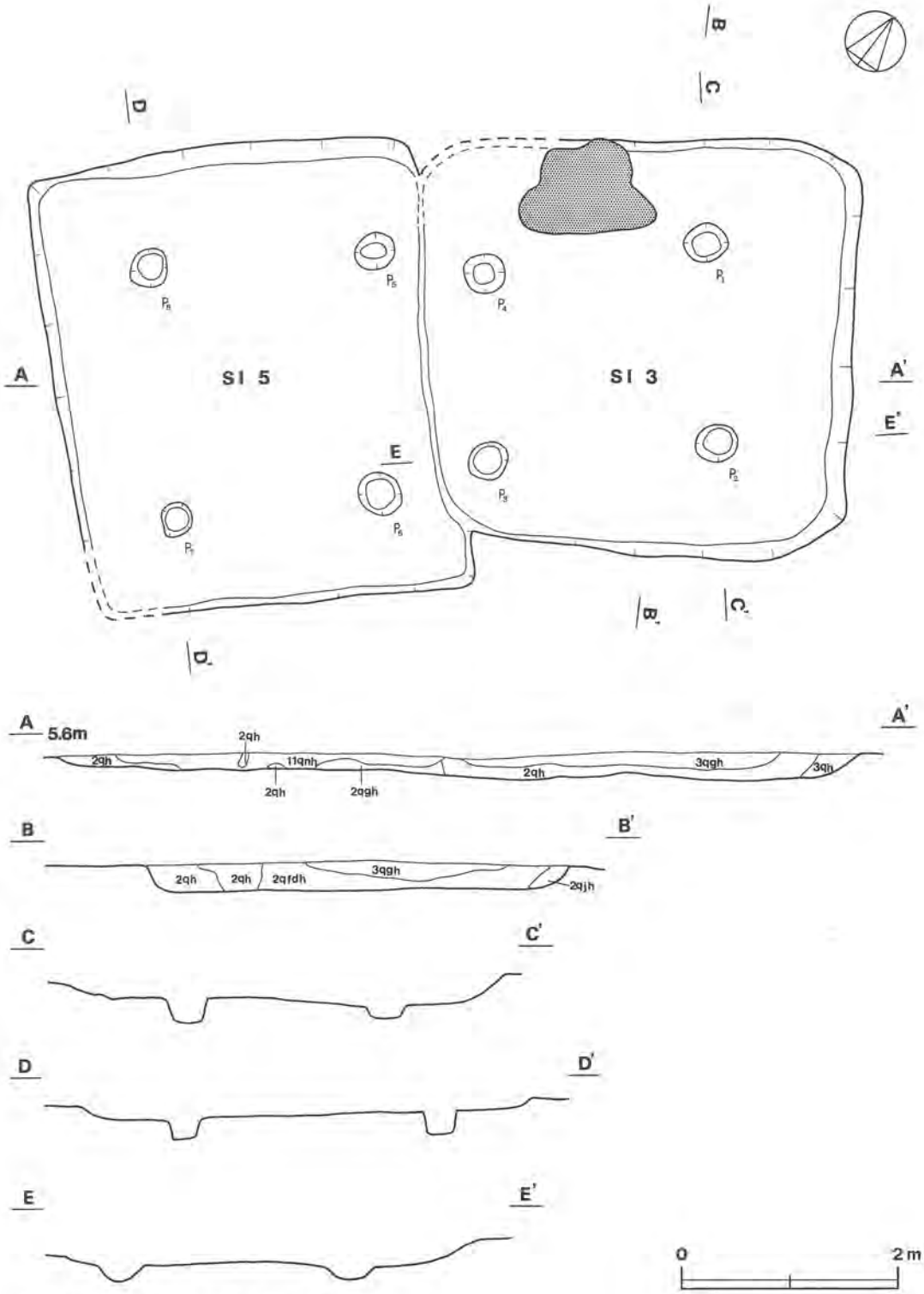
カマドは北西壁のやや南西側に寄ったところに構築されている。遺存状態は悪く，天井部や袖部が崩落し，押しつぶれた様相である。各部位の規模は不明である。

覆土は自然堆積で，上層にやや軟弱な黒褐色砂土，下層に締まりのある暗褐色砂土が堆積し，いずれも少量の極小礫を含んでいる。

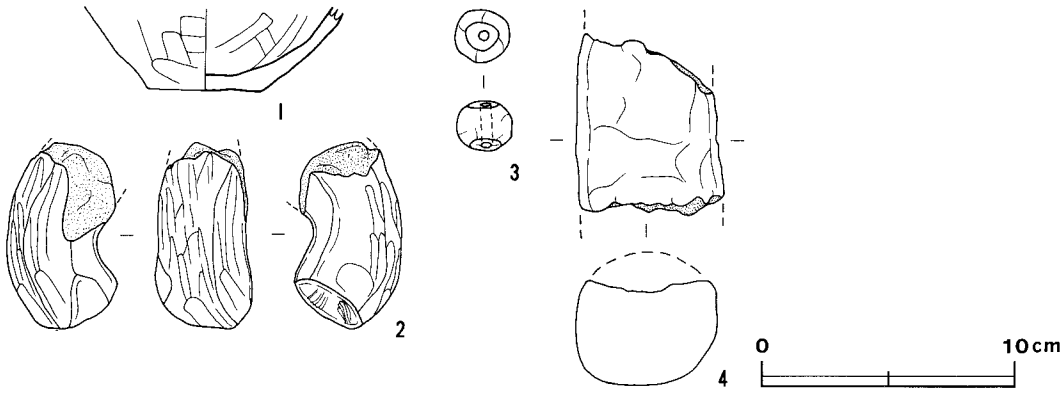
遺物は縄文式土器片，土師器片のほかに須恵器片５点と土製品が出土している。土師器の甕形土器の底部（第191図１）が南東壁寄りの床面近くから，球状土錘(第191図３)が第５号住居跡との重複部付近の床面から，支脚の一部（第191図４）がほぼ中央部の床面近くから，さらに，縄文の土偶の足（第191図２）と思われるものが南東壁寄りの覆土中から検出されている。縄文式土器は流れ込みと思われる。

第３号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第191図1	甕形土器 土師器	B（3.3） C　4.6	底部は平底を呈し，胴部は内彎気味に外上方に立ち上がる。	底部－ナデ。胴部外外面－ヘラ削り後ナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	10% P２



第190図　第３・５号住居跡実測図



第191図　第３号住居跡出土遺物実測図

第３号住居跡出土土製品一覧表

図版番号	名　　称	台帳番号	大きさ（cm） たて×よこ×厚さ	孔径（cm）	重量（g）	備　考
第191図 2	土　　偶	ＤＰ38	(7.4)×(4.3)×(3.9)	—	(115.2)	一部残存
3	球状土錘	ＤＰ１	2.0×2.2	0.4	9.0	
4	支　　脚	ＤＰ34	(7.2)×(5.9)	—	(144.8)	一部残存

第４号住居跡（第192図）

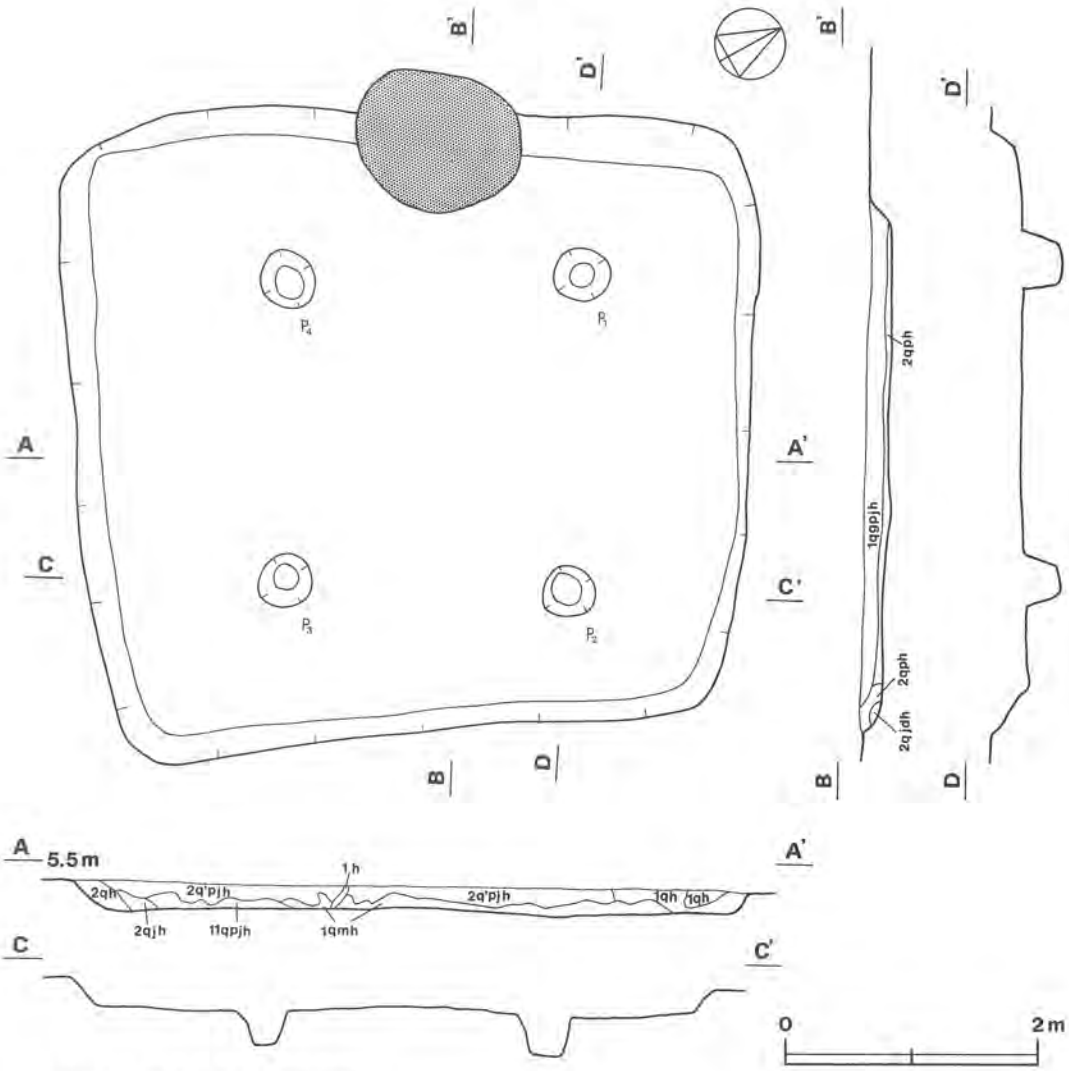
本跡は，Ｆ８i_0区に確認され，東側３ｍに第３号住居跡，北西側12ｍに第６号住居跡が存在している。また，壁外のカマド部分はピット62に切り込まれている。

平面形は一辺4.6～5.4ｍと各壁の長さが少しずつ異なる，やや形の歪んだ隅丸方形状を呈し，主軸方向はＮ－57°－Ｗを指している。壁は酸化砂土を含む黄褐色砂土で，外傾して立ち上がり，壁高は20～30cmである。床は黒褐色砂土混じりの褐色砂土で，床面は平坦である。P_1～P_4は主柱穴で，直径40～45cm，深さ28～36cmを測り，ほぼ等間隔で規則的に配列されている。

カマドは北西壁中央部に付設されている。遺存状態は悪く，天井部や袖部など崩壊し原形を留めない。わずかにカマドを構築していた粘質砂土が火熱を受けて白変硬化し，ブロック状に壁に貼りついて残っているだけである。

覆土は硬く締まっている褐色砂土と暗褐色砂土が堆積しており，いずれも少量の小礫・粘土粒子を含んでいる。また南側の床面近くには暗赤褐色砂土が堆積している。

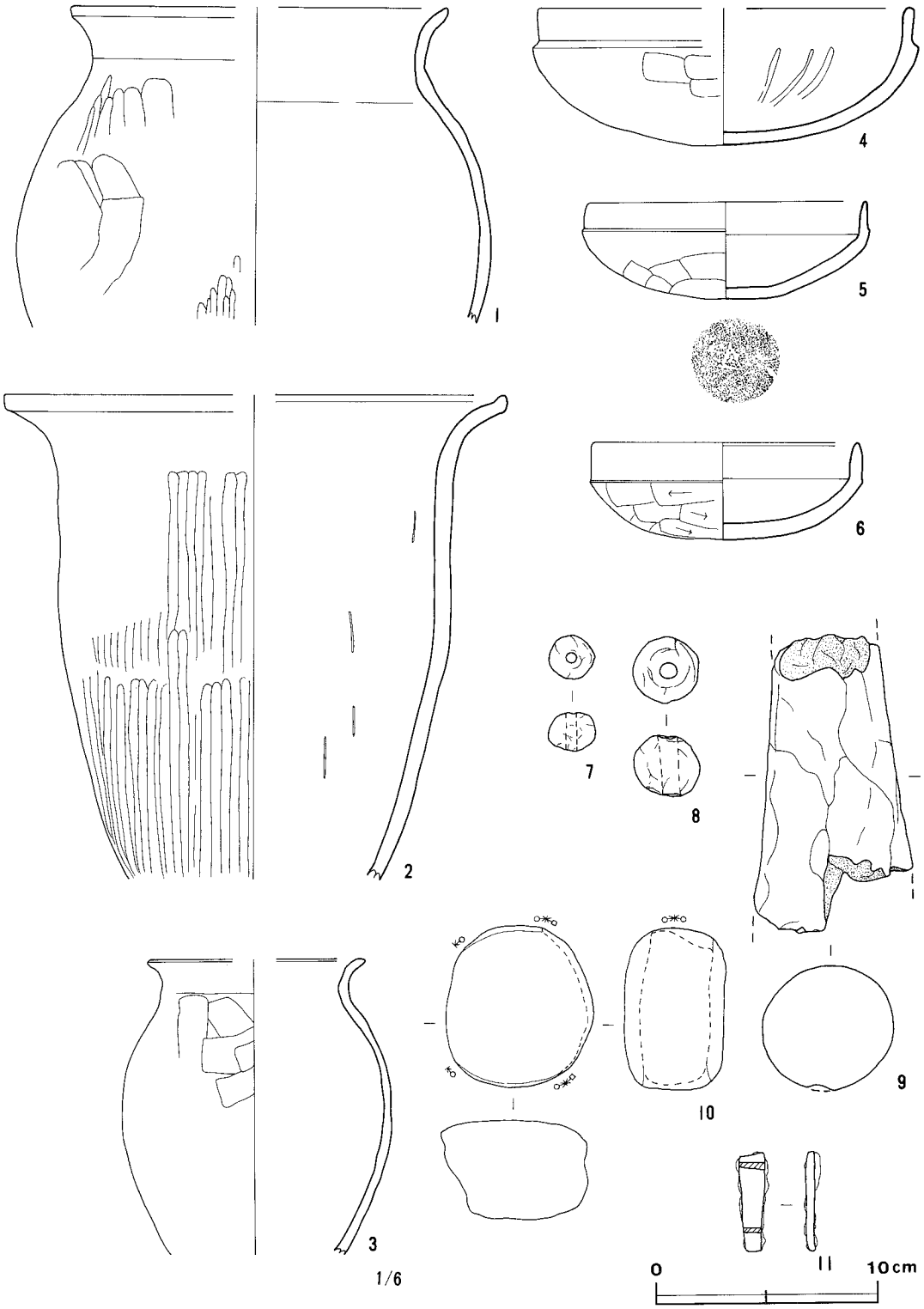
遺物は多量の縄文式土器片と土師器片が主に出土し，その比率は半々である。他に須恵器片５点，土製品３点，鉄製品１点が出土している。器形を窺えるものとしては，土師器では口縁部から胴部にかけての甕形土器（第193図１～３），完形あるいは半完形の坏形土器（第193図４～６）が，土製品では球状土錘（第193図７・８）と支脚（第193図９）が検出されている。



第192図　第４号住居跡実測図

第４号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第193図 1	甕形土器 土師器	A (24.2) B (24.6)	胴部は上位に張りをもち，口縁部は「〔」の形状を呈し，口縁外端部は面をなす。	口縁部内・外面－ナデ。胴部外面－上位ヘラナデ，中位ヘラ磨き，内面－ナデ。	砂粒・雲母・長石 浅黄橙色 普通	25% P 4
2	甕形土器 土師器	A (23.2) B (22.4)	胴部は中位にやや張りをもつ長胴を呈し，口縁部は短く外反し，端部を上方につまみ出している。	口縁部内・外面－横ナデ。胴部外面－ヘラ磨き，内面－ナデ。	砂粒・雲母・長石・スコリア にぶい橙色 普通	20% P 5
3	甕形土器 土師器	A 9.8 B (13.5)	胴部は中位に張りをもち，口縁部は外彎して立ち上がる。	口縁部内・外面－横ナデ。胴部外面－ヘラ削り，内面－ナデ。	砂粒・長石・雲母 灰白色 普通	30% P 3



第193図　第４号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第193図 4	坏形土器 土師器	A (17.2) B 6.3 C (－)	底部は丸底で，体部は内彎して開き，口縁部との境に段をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面－横ナデ。体部外面－ヘラ削り後ナデ，内面－ヘラ磨き。	砂粒・スコリア・雲母・長石 灰白色 普通	30% P 8
5	坏形土器 土師器	A 12.8 B 4.5 C (－)	底部は丸底で，体部は内彎して開き，口縁部との境に段をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面－横ナデ。体部外面－ヘラ削り，内面－ナデ。底部－「　」のひっかき痕。	砂粒・雲母 褐灰色 普通	80% P 7
6	坏形土器 土師器	A 12.1 B 4.4 C 2.0	底部は丸底で，体部は内彎して開き，口縁部との境に稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面－横ナデ。体部外面－ヘラ削り，内面－横ナデ。	砂粒・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	100% P 6

第4号住居跡出土土製品一覧表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ (cm) たて×よこ	孔径 (cm)	重量 (g)	備考
第193図 7	球状土錘	DP 2	1.8×2.2	0.5	6.7	
8	〃	DP 3	2.9×3.1	0.8	24.7	
9	支脚	DP35	(13.8)×(7.3)	－	(374. 6)	一部欠損

第4号住居跡出土石製品一覧表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ (cm) 長さ×幅×厚さ	孔径(cm)	重量(g)	石質	備考
第193図 10	磨石	Q 4	7.4×(6.9)×(4.7)	－	(342.5)	安山岩	一部欠損

第4号住居跡出土鉄製品一覧表

図版番号	名称	台帳番号	法量 (cm) 長さ	幅	厚さ	形態の特徴	備考
第193図 11	刀子基部	M 1	(4.6)	1.2	0.2	断面長方形。	

第5号住居跡（第190図）

本跡は，北東側が第3号住居跡に切り込まれ，北東壁はわずかに東コーナー部が残存しているだけである。

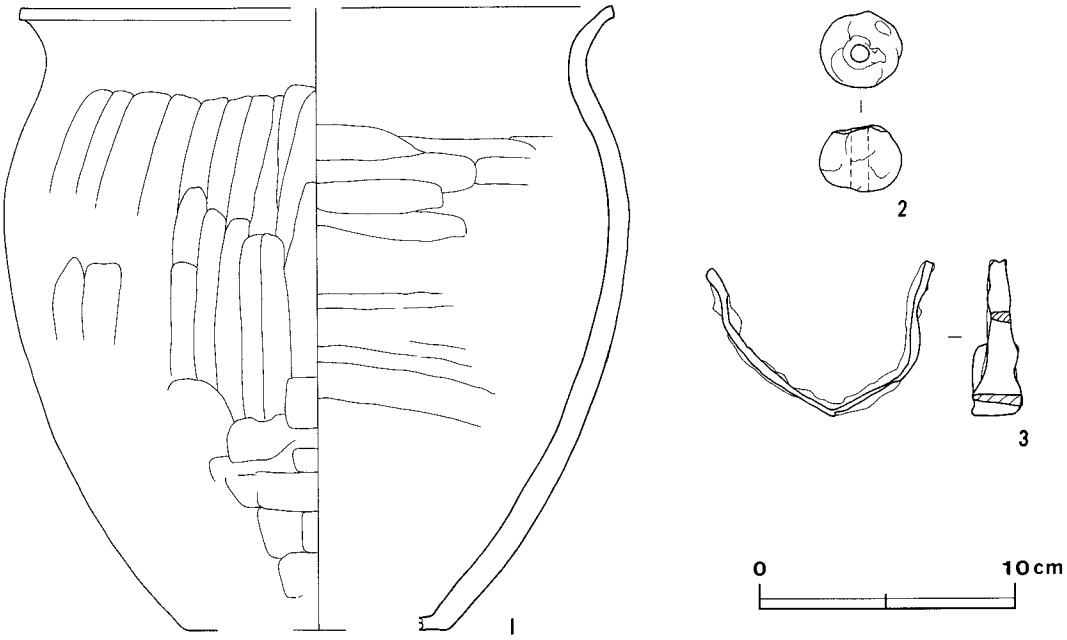
平面形は長軸（北西－南東）4.3m，短軸（北東－南西）3.6mの隅丸方形状を呈し，長軸方向はN－40°－Wを指している。壁高は10cmほどで，壁は緩やかに立ち上がっている。床は黄褐色砂土で，床面は平坦である。ピットはP_5～P_8の4か所検出され，直径30～40cm，深さ20～29cmで，規則的に配列されている。断面は円筒状を呈している。

カマドは検出されなかった。

覆土は中央部に暗赤褐色砂土，壁際に暗褐色砂土が堆積し，締まりを帯びている。

遺物は縄文式土器片と極少量の土師器片・須恵器片，その他鉄製品・土製品が出土している。覆土中からの出土が大半である。土師器の口縁部から胴部にかけての甕形土器（第194図１）が中央部からやや東側の床面から，球状土錘（第194図２）が第３号住居跡との重複部近くの床面から検出されている。

本跡は他の住居跡と異なり，カマドが検出されずしかも床面も硬くないことなどから，通常の住居跡として使用されたものではないと考えられる。また，縄文式土器片は量的に多いが出土状況から流れ込みと判断される。



第194図　第５号住居跡出土遺物実測図

第５号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第194図 1	甕形土器 土師器	A（23.2） B　24.4 C（10.2）	底部は平底を呈し，胴部は内彎しながら外上方に開き，上位に張りをもつ。口縁部は外彎して立ち上がる。	口縁部内・外面ー横ナデ。胴部外面ーヘラ削り，内面ーヘラナデ。	砂粒・雲母 浅黄橙色 普通	35% P９

第５号住居跡出土土製品一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	大きさ（cm） たて×よこ	孔径（cm）	重量（g）	備　考
第194図 2	球状土錘	DP４	2.7×3.3	0.7	22.8	

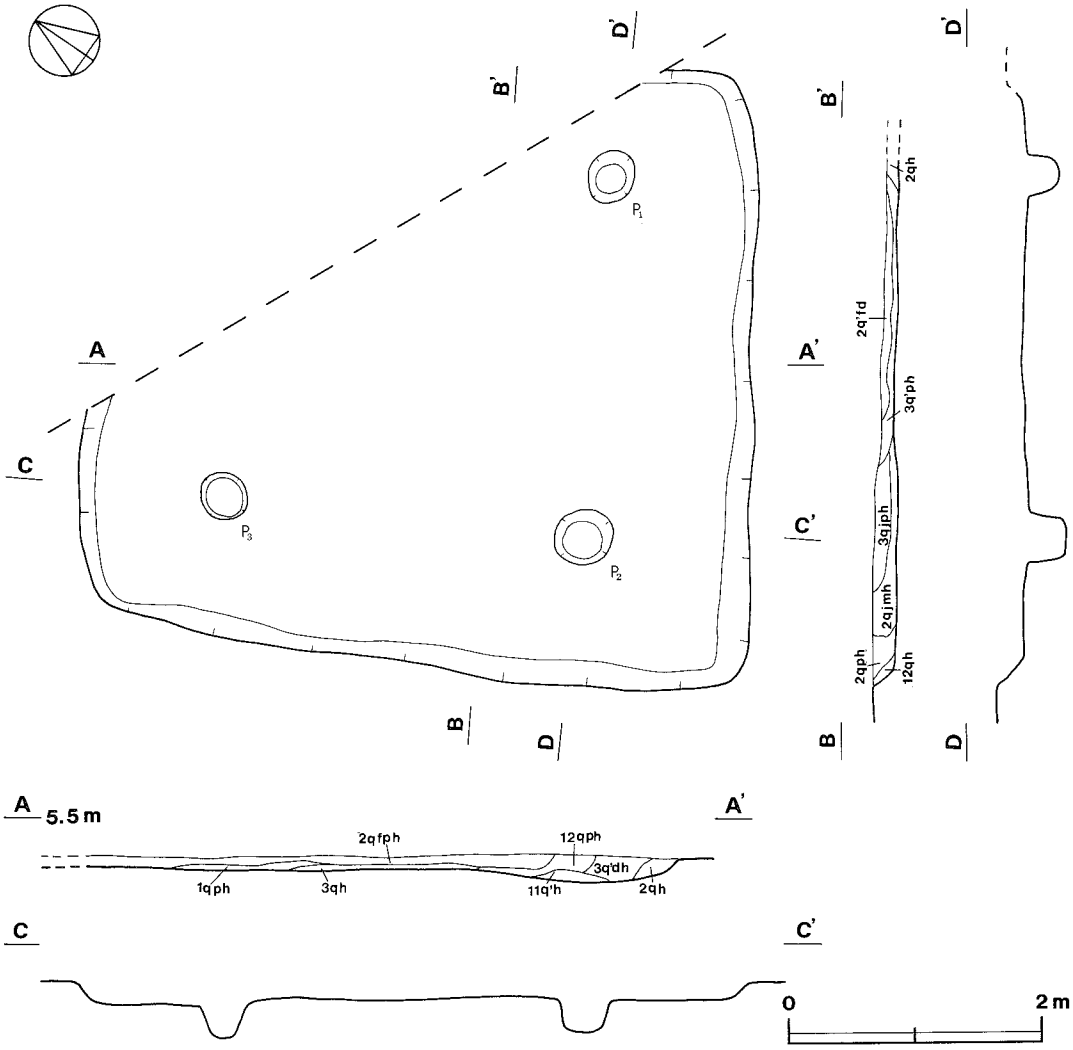
第5号住居跡出土鉄製品一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	法量（cm）			形態の特徴	備考
			長さ	幅	厚さ		
第194図 3	不　明	M 2	(6.1)	1.8	0.4	平延。断面長方形。	

第6号住居跡（第195図）

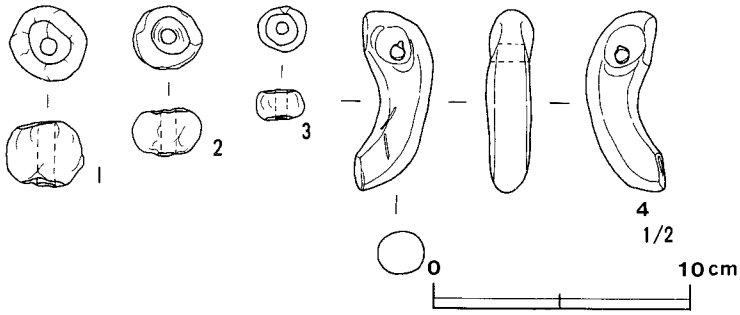
本跡は，住居跡群の最西端に位置し，北東部は調査区域外へ延びているため住居跡の$\frac{1}{4}$は未調査である。南東側12mに第4号住居跡が存在している。

残存する壁は北西壁の一部，南西壁，南東壁の大部分で，西コーナー部と南コーナー部は隅丸を呈し，南西壁の長さは5.1mである。壁高は12～22cmで，壁は礫をほとんど含まない黒褐色砂



第195図　第6号住居跡実測図

土で，緩やかに立ち上がっている。床は灰褐色砂土混じりの黒褐色砂土で締まりは弱く，床面はほぼ平坦である。ピットはP_1 ～ P_3の３か所検出され，直径36～44cm，深さ24～30cmで，いずれも主柱穴である。位置からみると，調査区域外に残りの１か所が存在するものと思われる。



第196図　第６号住居跡出土遺物実測図

カマドは調査した部分には確認できず，その存在は不明である。

覆土は自然堆積で，主に上層は小礫・炭化粒子を含む暗褐色砂土，下層は極小礫を含む黒褐色砂土で，壁際に暗赤褐色砂土の堆積がみられる。

遺物は多量の縄文式土器片と土師器片が主に覆土中から混在して出土していて，その出土比率は半々である。その他に須恵器５点，石製品１点，土製品３点が出土している。器形を復元できる土器の出土はなく，石製の勾玉（第196図４）がP_3の東側40cmの床面近くから，球状土錘３点（第196図１～３）がP_1の南側覆土中から検出されている。

第６号住居跡出土土製品一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	大きさ（cm） たて×よこ	孔径（cm）	重量（g）	備　考
第196図 1	球状土錘	ＤＰ５	2.2×3.0	0.7	22.7	
2	〃	ＤＰ６	2.0×2.7	0.6	12.4	
3	〃	ＤＰ７	1.2×1.9	0.5	4.7	

第６号住居跡出土土製品一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	大きさ（cm） 長さ×幅×厚さ	孔径(cm)	重量(g)	石　質	備　考
第196図 4	勾　玉	Ｑ37	4.8×2.1×1.2	0.4	14.0	滑　石	

第７号住居跡（第197図）

本跡は，当遺跡の東側部G9a_0 区を中心に確認され，南側５ｍに第２号住居跡が存在する。北東コーナー部は調査区域外へと延びている。

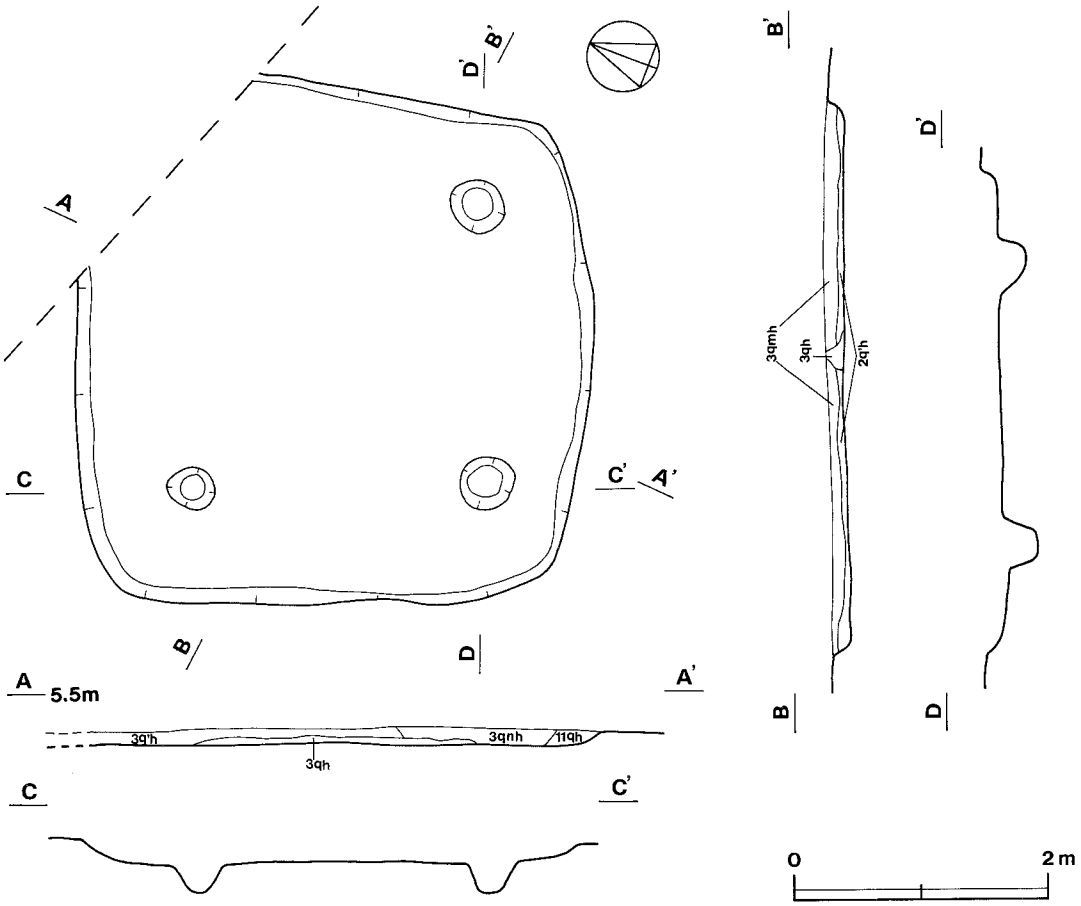
平面形は３つのコーナーと南壁・西壁及び一部の北壁・東壁から判断すると，一辺４ｍほどの

やや胴張りの隅丸方形を呈するものと思われる。住居跡の傾きはN－22°－Wである。壁高は12～18cmと浅く，壁は黄褐色砂土で緩やかに立ち上がっている。床面は平坦で，床は小礫を多く含む黒褐色砂土混じりの黄褐色砂土である。中央部に酸化された砂の範囲が直径40cmの円形状に検出された。ピットはP_1～P_3の3か所検出され，いずれも主柱穴で，直径36～40cm，深さ23～28cmである。断面は「∪」形を呈している。P_1～P_3の位置から考えると，北北東側に1か所存在することを推定できるので精査をしたが検出できなかった。

カマドは調査した部分から確認できなかった。未調査部分は北東部だけであるので，おそらく最初から設けられていなかったものと思われる。

覆土は上層に黒褐色砂土，下層に暗褐色砂土が自然堆積している。また，南壁際に少量の小礫を含む暗赤褐色砂土の堆積がみられる。いずれも砂粒は締まっている。

遺物は中央部からの出土はなく，その周辺部から縄文式土器片と土師器片が極少量出土している。床面からの出土は土師器片がわずかに認められるだけである。



第197図　第7号住居跡実測図

このようにカマドが存在しないこと，柱穴が３本しかないこと，遺物が他の住居跡に比べると極端に少ないこと，床面中央部に酸化砂土の範囲が認められることなどから，本跡は一般の住居跡として使用されたものでなく，何らかの目的をもって構築された竪穴状遺構と思われる。

2　掘立柱状建築跡

第１号掘立柱状建築跡（第198図）

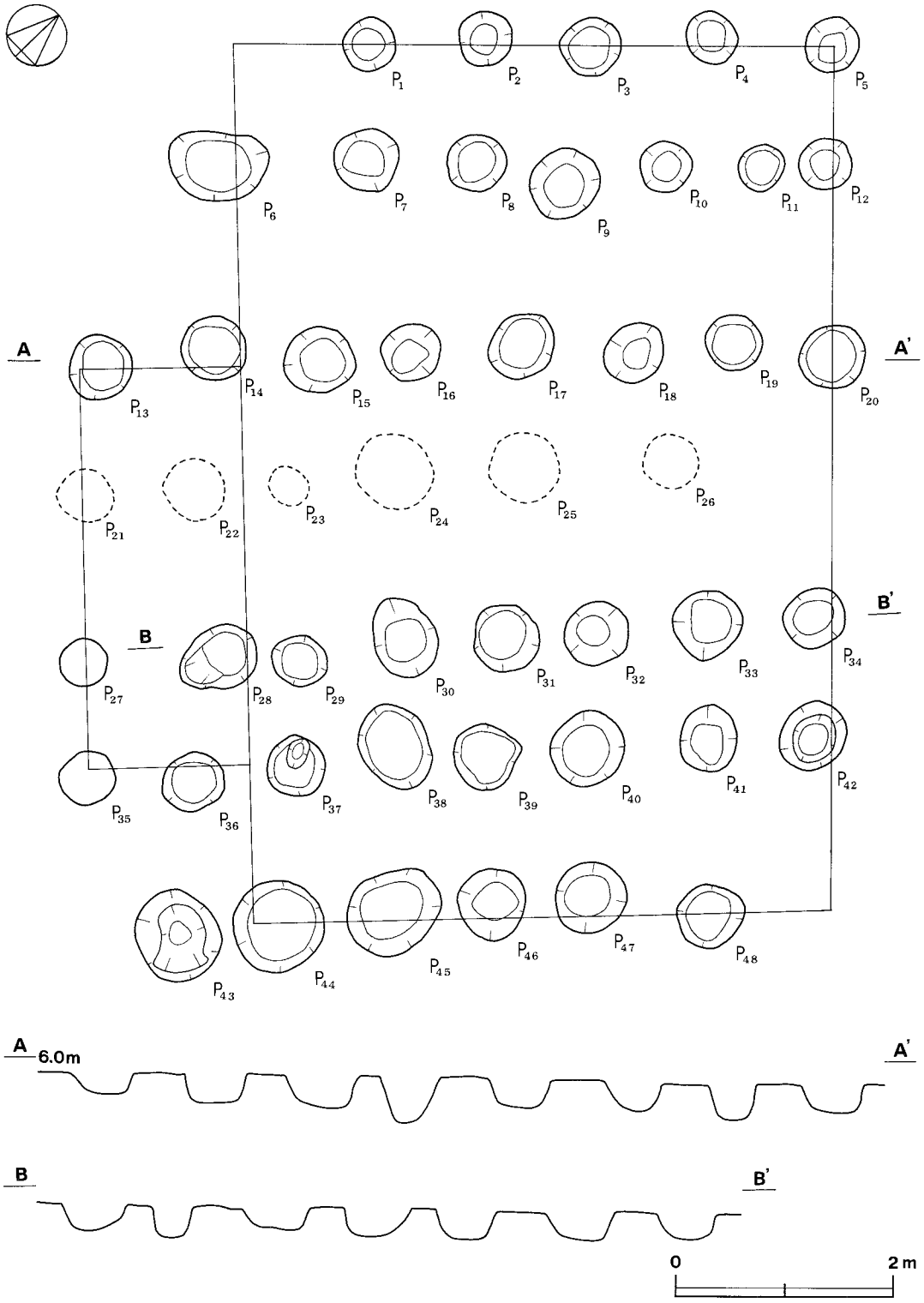
本跡は，蛇峰山の北西山麓，当遺跡中央部からやや東側に寄ったF7d_0・F8d_1・F7e_0～F8e_2・F7f_0～F8f_2・F8g_1に確認されたもので，49本のピットが検出されている。これらのピットは，南西から北東方向に５～８個が整然と並んで列をつくり，その列は北西から南東方向に７列並んでいる。

本跡の規模は，桁行（ピット群の長軸）約8.1m，梁行（ピット群の短軸）約5.3mで，平面形は長方形を呈している。南西側には桁行約3.7m，梁行約1.5mの規模をもつ施設が付設されている。長軸方向はN－58°－Wである。

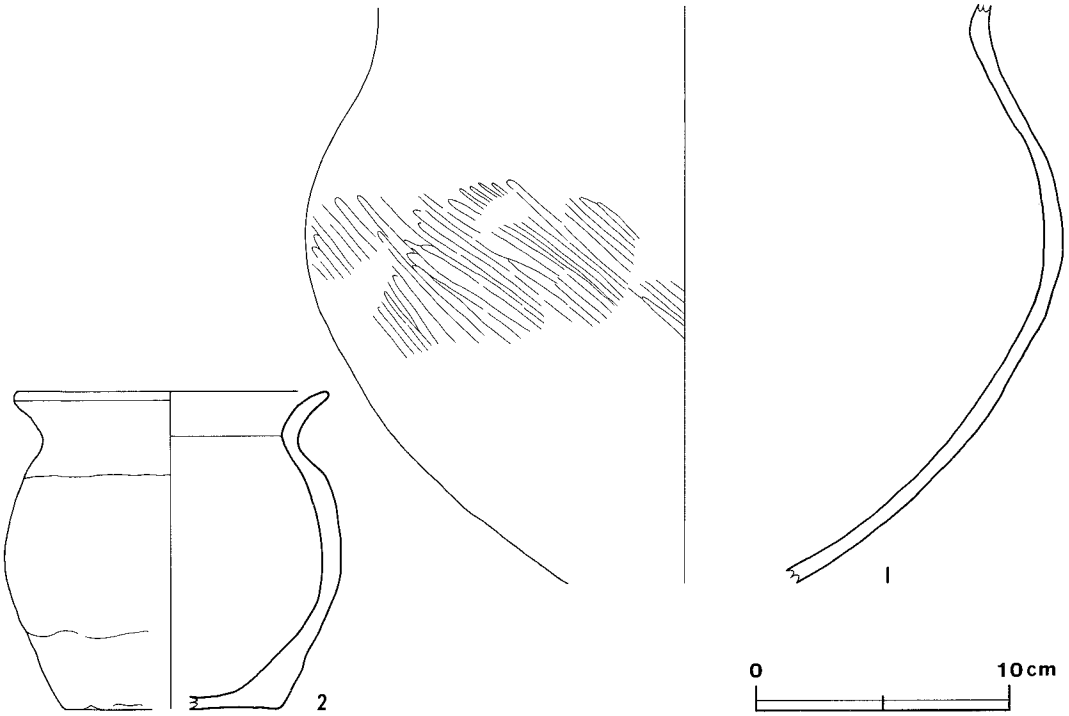
柱間（ま）は，基本的には５間（ま）×６間（ま）であるが，P_1の南西側及びP_{48}の北東側にピットが検出できなかった。柱間の寸法は，桁行が１間1.1～1.8mほどで，北西から数えて第２・４・６間目が他の間より0.4～0.7mほど広く，梁行は１間0.9～1.5mほどで，付設部が他の間より0.5～0.6mほど広い。付設部は１間（1.5m）×３間（1.1～1.5m）で，中央が両側の柱間より0.4mほど広くなっている。

ピットは，形状は円形あるいは楕円形を呈し，径0.4×0.44m～0.8×0.9m，深さ0.14～0.47mで，掘り方は「U」状を呈している。ピット内覆土は礫を含む褐色の砂粒で，固くしまっている。

遺物は，ピット48の覆土から土師器の甕形土器（第199図１），小型甕形土器（第199図２）が出土している。



第198図　第１号掘立柱状建築跡実測図



第199図　第１号掘立柱状建築跡出土遺物実測図

第１号掘立柱状建築跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第199図 1	甕形土器 土師器	B (32.0)	胴部は内彎しながら外上方に立ち上がり，上位に張りをもつ。	胴部外面－ヘラ磨き，内面－ナデ。	砂粒・礫・長石・細砂・雲母 にぶい橙色 不良	SB－1 30% P13
2	小型甕形土器 土師器	A 12.5 B 12.6 C (8.4)	底部は平底を呈し，胴部は内彎しながら外上方に立ち上がり，中位にやや張りをもつ。口縁部は外彎して立ち上がる。	口縁部外面－ナデ，内面－横ナデ。胴部外面－ヘラ削り，内面－ナデ。胴部内・外面－輪積み痕。	砂粒・スコリア・長石 赤色 不良	SB－1 50% P12

3　方形周溝状遺構

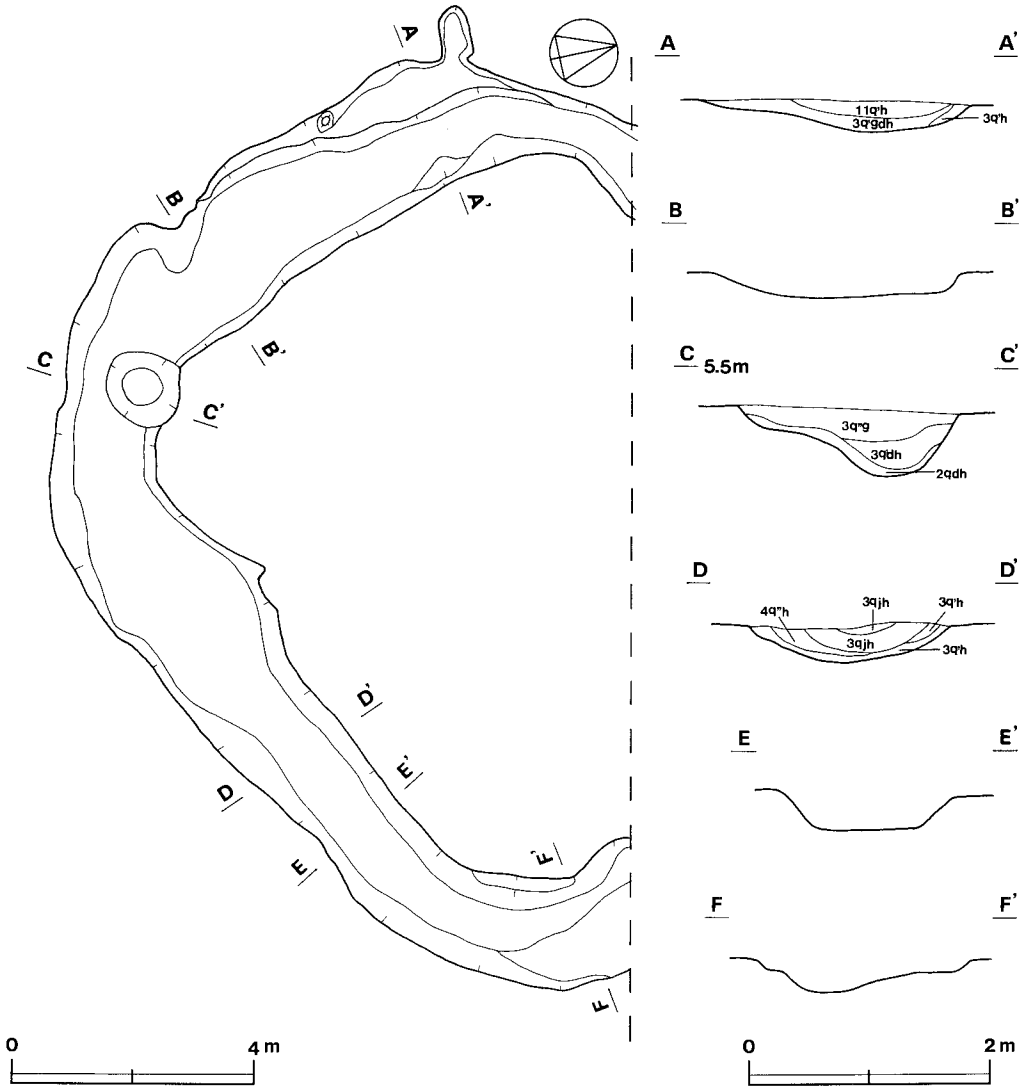
第１号方形周溝状遺構（第200図）

本遺構は，大調査区G10区に確認されたもので，当遺跡の東端部に位置し，西側に第３号方形周溝状遺構が，南西側に第２号方形周溝状遺構がそれぞれ隣接して存在している。

北側から北東側にかけては調査区域外のため，形状・規模等の詳細は不明である。南辺は13m，

西辺は11mで，これらの辺とわずかに北西コーナー部及び南東コーナー部にみられる北辺・東辺の一部から推定すると，平面形状は東西が南北よりやや長い隅丸方形状を呈し，南北方位はN－20°－Wと西側に傾いているものと思われる。検出された各辺は緩やかな弧状を描き，コーナー部は隅丸を呈している。溝は周回しているが，幅は一定していない。上幅は西辺の中央部付近が最も広く2.2m，北西コーナー部が最も狭く1mである。深さは20～33cmで，底面はほぼ平坦である。方台部側と外周部側の壁の立ち上がりに差がみられず，いずれも緩やかに立ち上がっている。

溝内の覆土は，上層に砂粒・小礫を含む黒褐色土や暗赤褐色土，下層に砂粒・極小礫・少量の焼土粒子を含む暗褐色土や極暗褐色土が自然堆積している。全体的に締まりのある土層である。



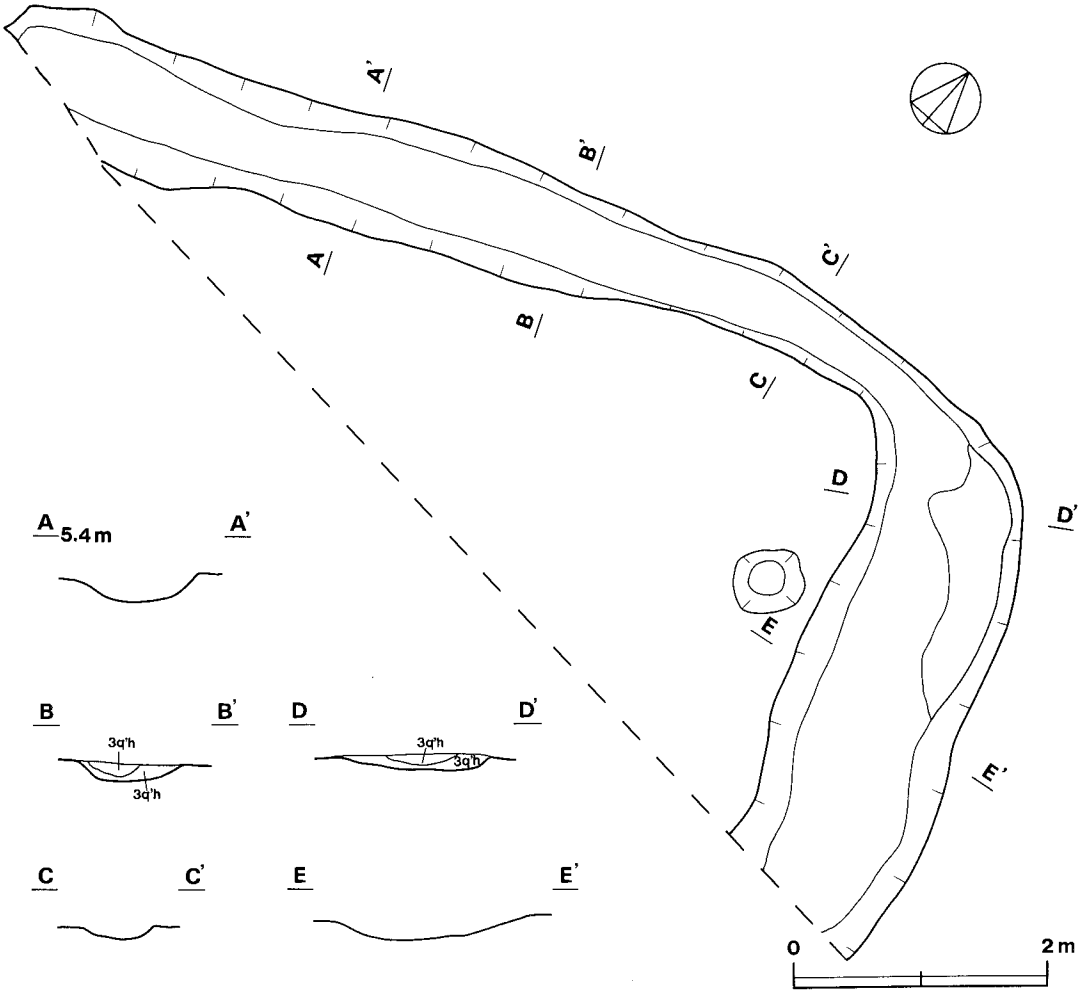
第200図　第1号方形周溝状遺構実測図

方台部にマウンドはなく，方台部の南側に土坑（第１号）が存在しているが出土遺物はなく，主体部と認められない。

遺物は方台部及び溝内から，縄文式土器片・土師器片と極少量の須恵器片が出土している。溝内からは特に南側から南西側にかけての覆土中からの出土が多い。器形を窺えるものとしては，南西コーナー部から半完形の土師器の坏形土器（第203図２），甕形土器（第203図１），縄文式土器の注口土器の一部（第203図４）や土製の有孔円板（第203図５）などが検出されている。

第２号方形周溝状遺構（第201図）

本遺構は，当遺跡の南東端部に位置し，中央部から南側にかけては調査区域外に延びている。北東側に隣接して第１号方形周溝状遺構が存在している。調査した部分は，北東コーナー部とそ



第201図　第２号方形周溝状遺構実測図

れに接続する北辺・東辺の一部だけで，形状・規模等不明である。コーナー部は隅丸形を呈し，検出された溝の外辺・内辺ともほぼ直線上に延びている。溝は上幅0.5～1.5ｍで，深さ15～30cmで，断面は「◡」状を呈している。

溝内の覆土は，砂粒と極小礫を含む黒褐色土が堆積している。

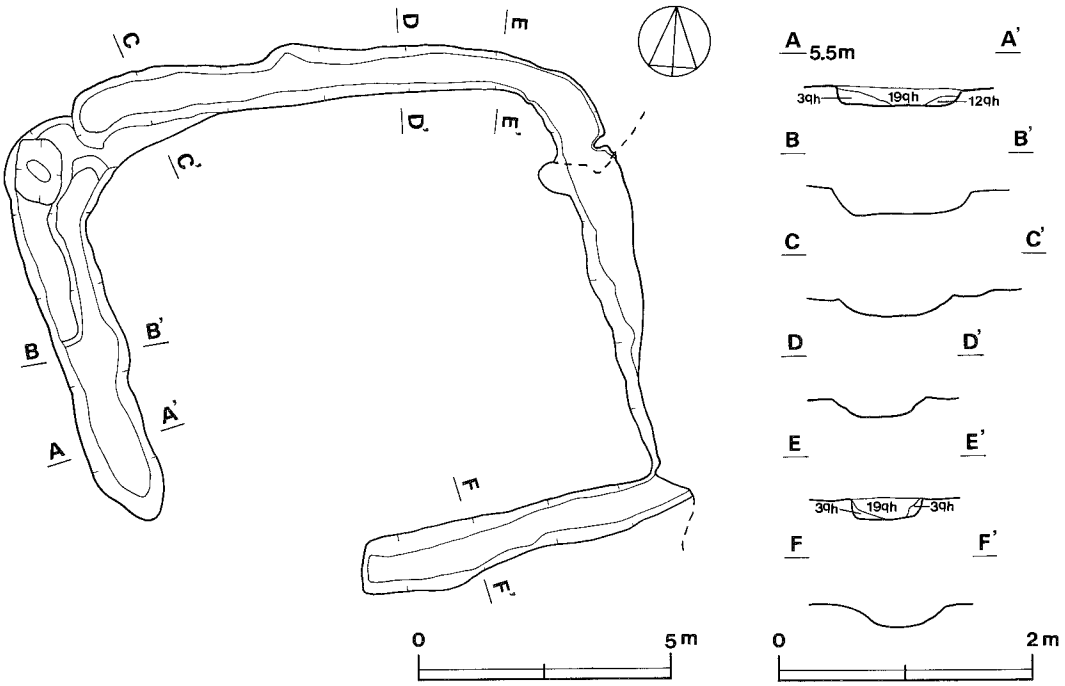
方台部にマウンドはなく，北東側に径60cm，深さ25cmほどのピットを検出したが，小規模で遺物の出土もなく，本遺構に伴うものかどうか定かでない。

遺物の出土は極少量で，縄文式土器と土師器の小破片が出土している。器形を窺えるものとしては，須恵器の高台付坏（第203図３）や土偶の一部（第203図６）が検出されている。

第３号方形周溝状遺構（第202図）

本遺構は，第１号方形周溝状遺構の西側に隣接して確認されたもので，北東側の一部は第１号方形周溝状遺構に掘り込まれている。

南西側の一部に溝部は検出されなかったが，平面形状はやや歪みのある隅丸方形状を呈し，南北方位はＮ－17°－Ｗを指している。検出された各辺は，北辺が8.6ｍ，東辺7.2ｍ，南辺が5.4ｍ，西辺が6.6ｍで，東西が南北よりやや長い。溝は南西コーナー部を除いて周回しており，溝幅は0.7～1.6ｍで，深さは20cm前後と浅い。断面は皿状を呈している。壁は緩やかに立ち上がってお

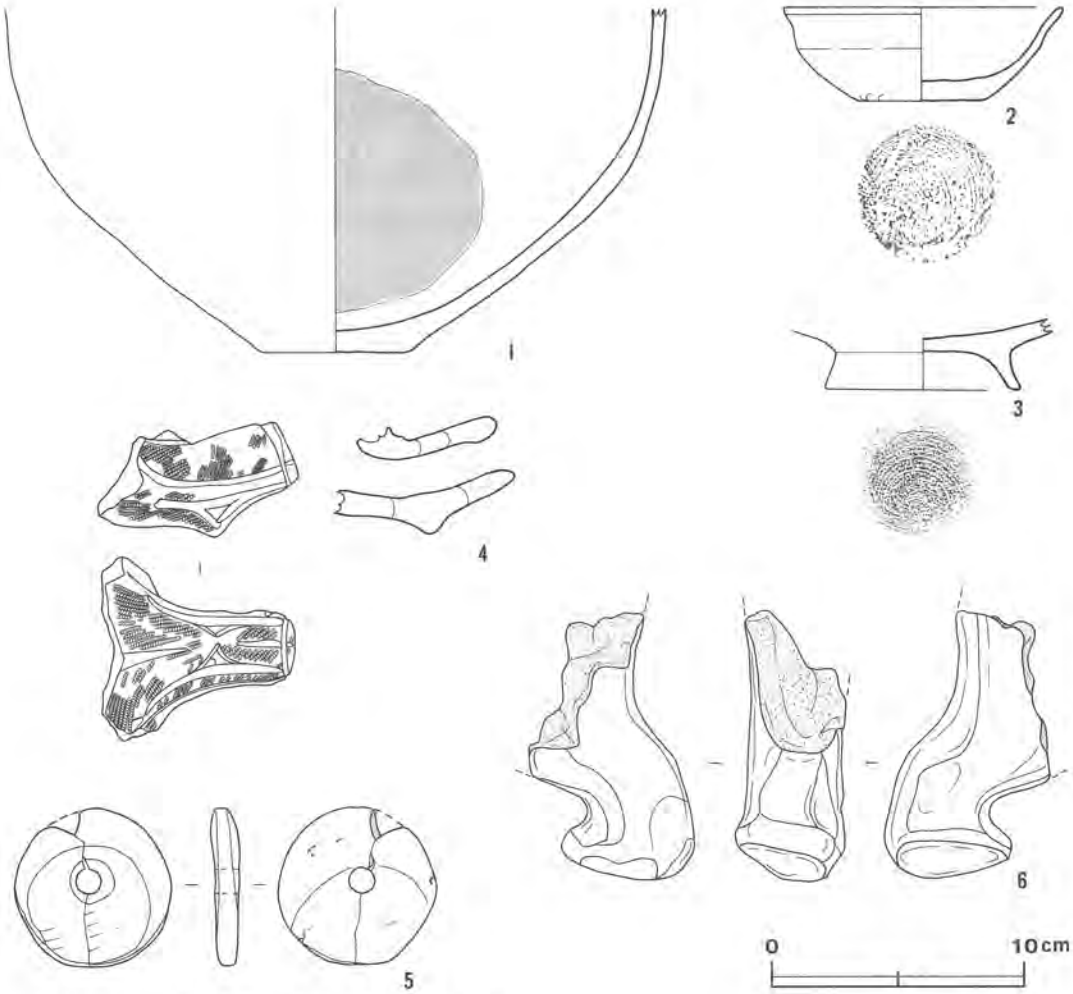


第202図　第３号方形周溝状遺構実測図

り，西溝の外周部側が段状を成している。

溝内の覆土は，砂粒を含む締まりのある黒色土・黒褐色土・極暗赤褐色土が自然堆積している。方台部にマウンドはなく，土坑状の落ち込みも認められなかった。

遺物は縄文式土器片が溝内覆土の上層部から極少量出土しているだけで，本遺構に伴う遺物の出土はなかった。



第203図　方形周溝状遺構出土遺物実測図

方形周溝状遺構出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第203図 1	甕形土器 土師器	B (13.6) C 6.0	底部は平底を呈し，胴部は内彎しながら外上方に立ち上がる。	底部ーナデ。胴部外面ーヘラ削り後ナデ，内面ーナデ，一部に朱塗痕。	砂粒・雲母 にぶい赤褐色 不良	SY－1 30% P17
2	坏形土器 土師質土器	A 11.2 B 3.7 C 5.0	底部は平底を呈し，体部は内彎して外上方に開き，口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面ー横ナデ。体部内・外面ー横ナデ。底部ー回転糸切り，無調整。	砂粒・スコリア・礫 橙色 良好	SY－1 65% P20
3	高台付坏 須恵器	B (2.0) D 7.7 E 1.5	高台部は「ハ」の字状を呈し，端部は丸い。	底部ー回転糸切り。高台部外面ー横ナデ，内面ーナデ。	砂粒・雲母 にぶい赤褐色 普通	SY－2 20% P23
4	注口土器 縄文土器	口径 2.2 B (8.1)	注口部破片。	全面ー縄文。取付部上位ー横位に2条，注口に沿って3条の沈線文。下位ー5条の沈線文。注口外周部ー1条の沈線文。	砂粒・雲母 灰白色 普通	SY－1 15% P16

方形周溝状遺構出土土製品一覧表

図版番号	名称	出土地点	台帳番号	大きさ (cm) 長さ×幅×厚さ	孔径(cm)	重量(g)	備考
第203図 5	有孔円板	SY1	DP36	6.3×6.3×1.2	1.0	(41.5)	単孔 一部欠損
6	土偶	SY2	DP37	(10.6)×(6.5)×(4.5)	—	(193.8)	一部残存

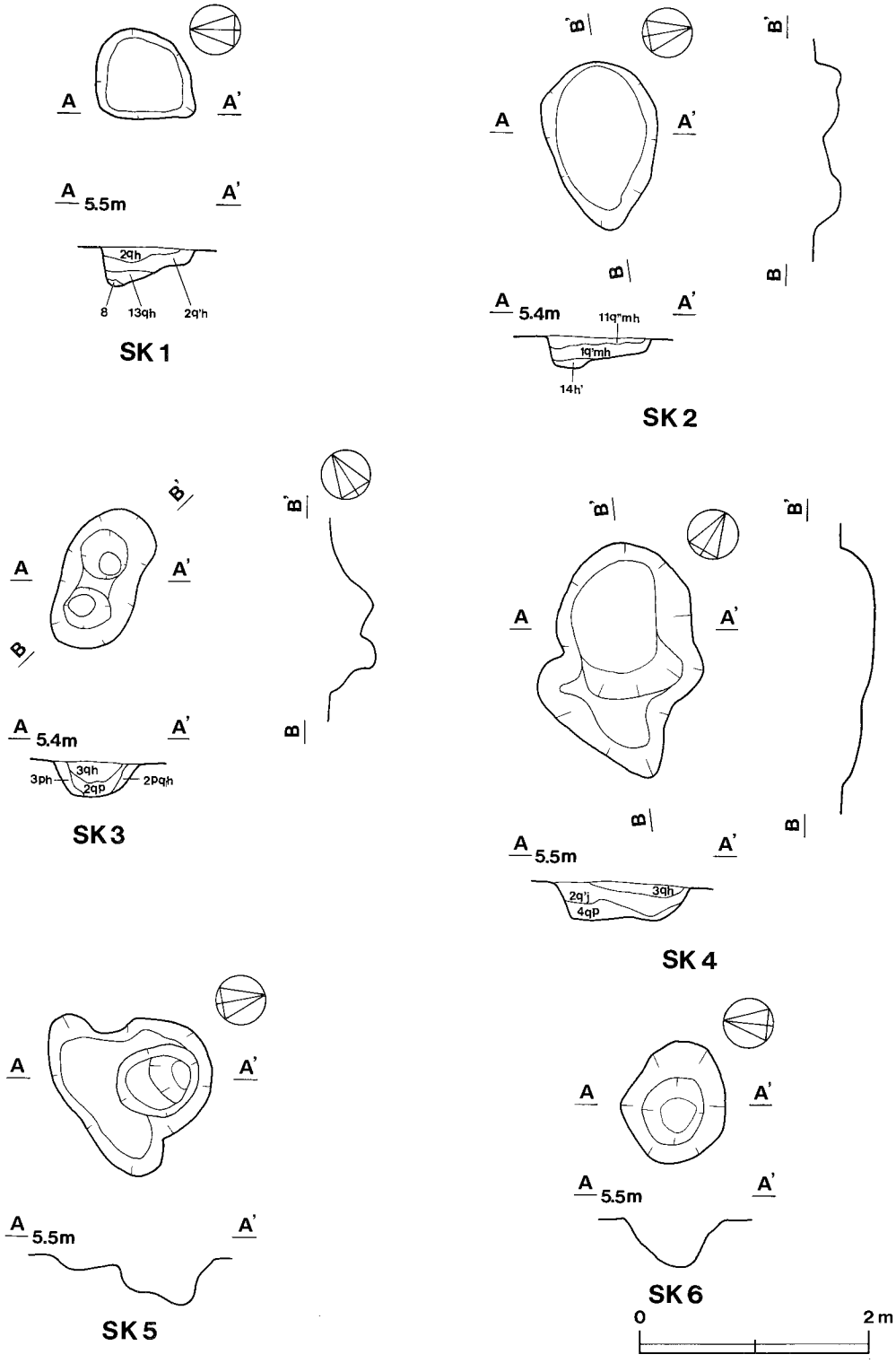
4　土坑

当遺跡から検出された土坑は23基で，遺跡の東側部に位置し，ほとんど単独で検出された。断面が円筒形状を呈するものは少なく，掘り方に統一性は認められない。形状は楕円形を基調とするものが主で，坑底までの深さが50cm以上有するものは３基だけで，全体的に浅い。

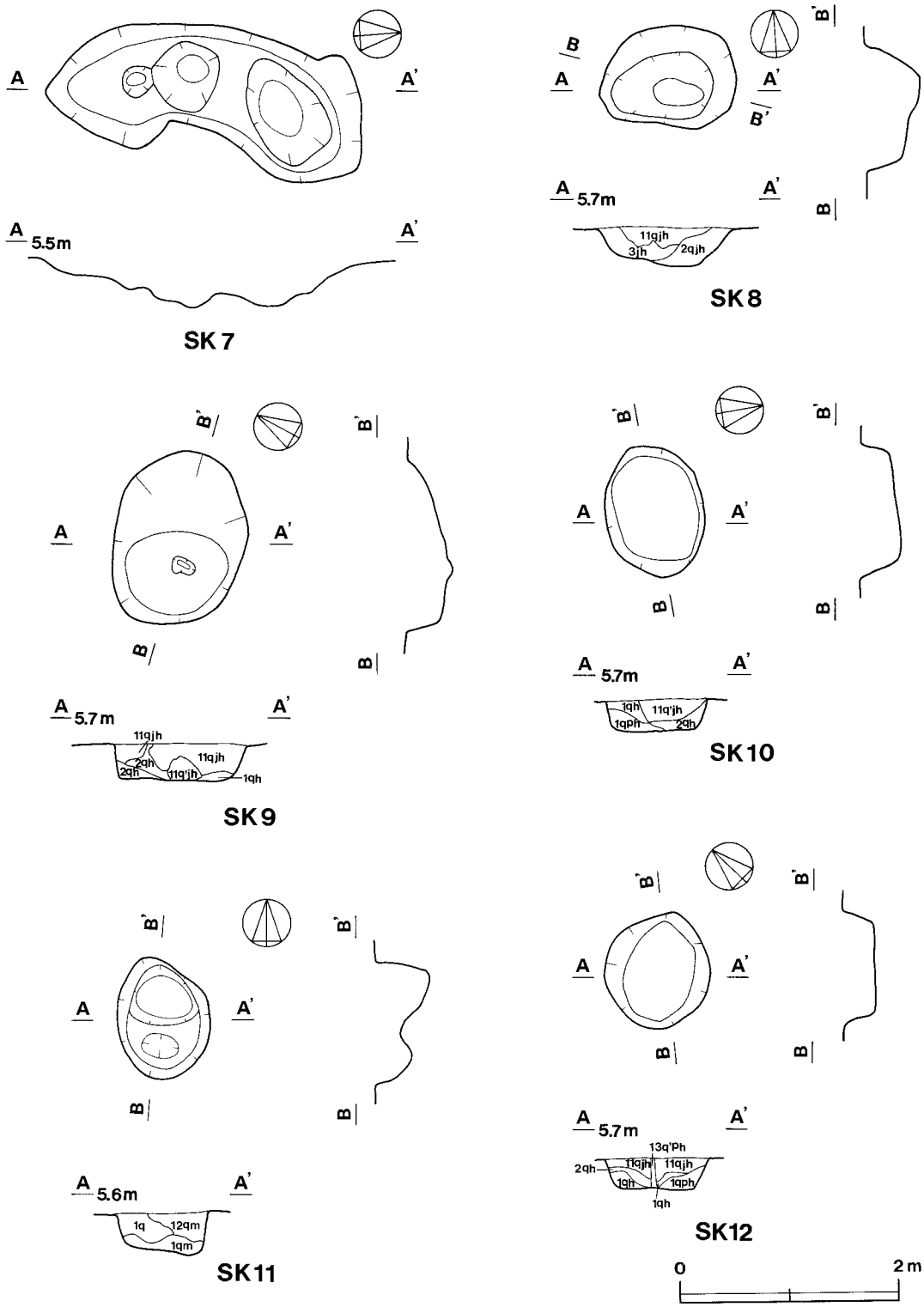
遺物は縄文式土器片が覆土中から出土しているが，住居跡と同様流れ込みと判断されるものが多い。

表４　土坑一覧表

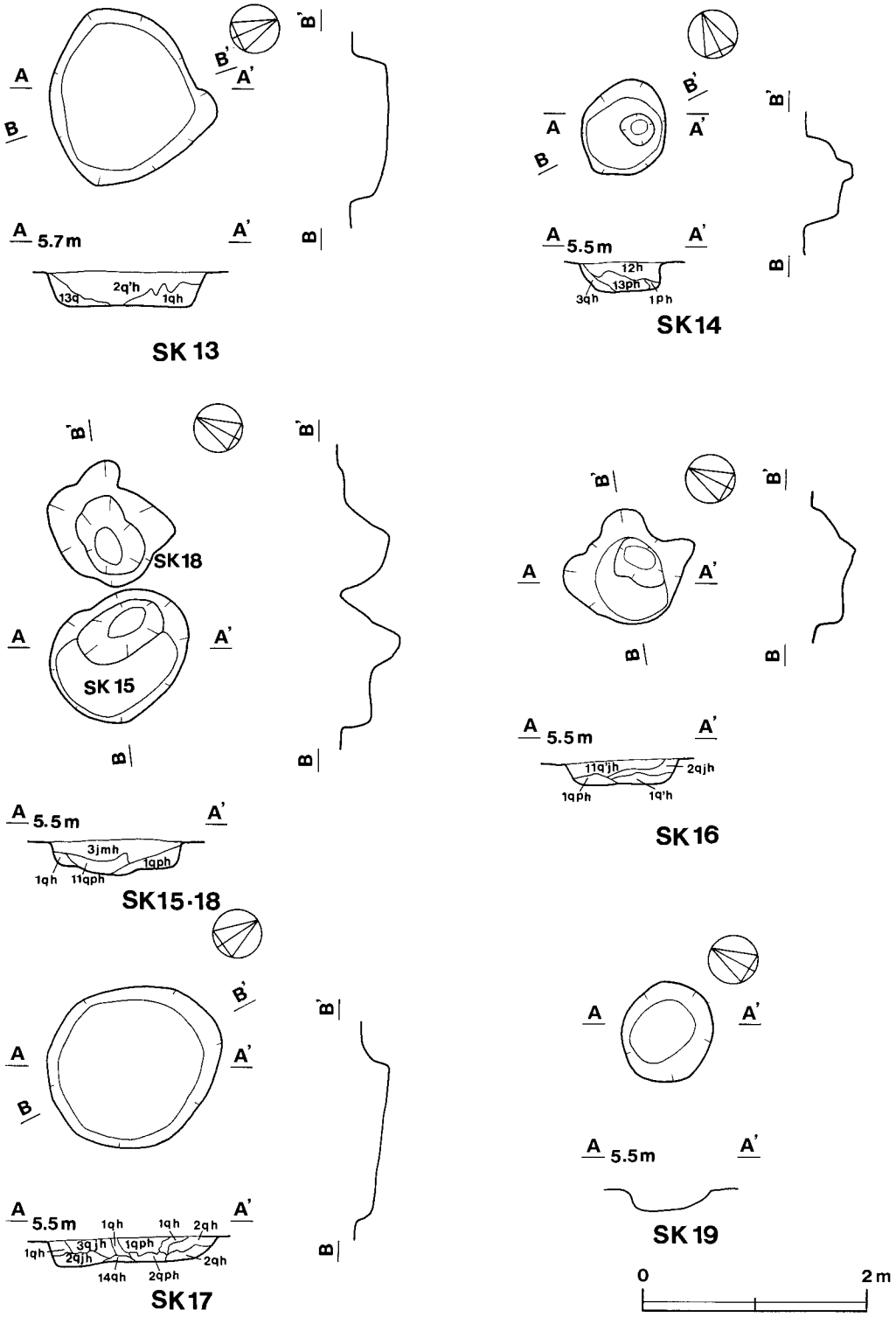
土坑番号	位置	長径(軸)方向	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
1	G10c6d6・d7	－	不整円形	0.8	30	垂直	傾斜	N	なし	ＳＹ１と重複
2	G10a2・a3・b2・b3	N－82°－W	楕円形	1.5×1.0	24	〃	凹凸	N	〃	
3	G10b1	N－53°－E	楕円形	1.3×0.7	40	緩斜	〃	N	〃	
4	G9b0	－	不定形	2.1×1.4	30	〃	〃	N	球状土錘（ＤＰ８） 土師器片４点 縄文式土器片19点	
5	G9b8・b9	－	不定形	1.6×1.3	40	垂直	〃	K	縄文式土器片６点	
6	G9c8	N－87°－W	楕円形	1.1×0.9	44	緩斜	皿状	N	縄文式土器片25点	
7	G9b8	N－11°－E	不整長楕円形	2.9×1.2	42	〃	凹凸	K	球状土錘（ＤＰ９） 縄文式土器片48点	
8	G9a5	N－77°－E	楕円形	1.2×1.0	51	垂直	〃	N	縄文式土器片５点 須恵器片１点	
9	G9b4・b5	N－70°－E	楕円形	1.65×1.17	40	〃	皿状	A	縄文式土器片55点	
10	G9a4・b4	N－88°－E	楕円形	1.25×0.9	40	〃	坂状	N	縄文式土器片21点	
11	G9a3	N－７°－W	楕円形	1.15×0.85	50	〃	凹凸	N	縄文式土器片69点 土師器片２点	
12	G9a3	－	不整円形	1.1×0.97	30	〃	平坦	N	縄文式土器片34点 土師器片３点	
13	G9a3	－	不整円形	1.5	32	〃	〃	N	縄文式土器片117点 土師器片２点 須恵器片１点	
14	G9a2	N－43°－E	楕円形	0.9×0.76	34	〃	〃	N	縄文式土器片11点	
15	F9h1・i1	N－64°－W	楕円形	1.32×1.05	28	〃	〃	N	縄文式土器片11点	
16	F8h0 F9h1	－	不定形	1.25×1.06	28	〃	〃	N	なし	
17	F8i8	－	円形	1.62×1.50	25	〃	傾斜	A	縄文式土器片29点	
18	F9h1	－	不定形	1.0×1.0	45	段状	皿状	－	なし	
19	F8h9	－	円形	0.88	20	緩斜	〃	－	〃	
20	F9j3	N－11°－E	不整長楕円形	2.1×1.1	35	〃	段状	－	縄文式土器片74点 土師器片２点	墓壙(人骨)
21	F9j3	N－88°－E	不整長楕円形	1.64×1.04	54	垂直	〃	N	縄文式土器片39点	
22	G9a6・b6	N－12°－E	隅丸長方形	1.55×1.12	30	〃	傾斜	－	縄文式土器片33点 土師器片16点	
23	G9a6・b6	N－18°－E	不整楕円形	1.6×1.1	15	〃	平坦	N	縄文式土器片10点	



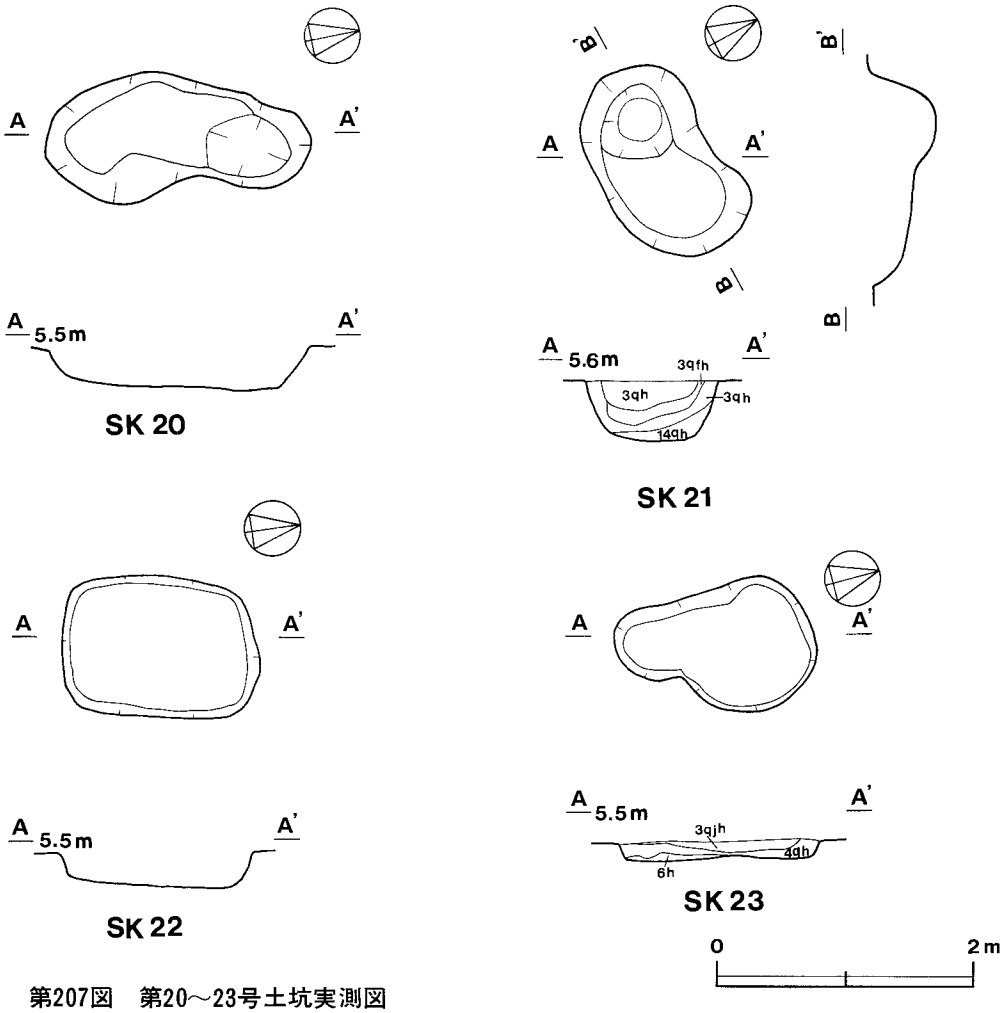
第204図　第１～６号土坑実測図



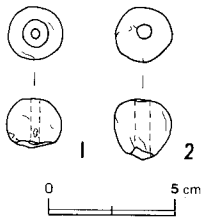
第205図　第７～12号土坑実測図



第206図　第13～19号土坑実測図



第207図　第20～23号土坑実測図



第208図

土坑出土遺物実測図

土坑出土土製品一覧表

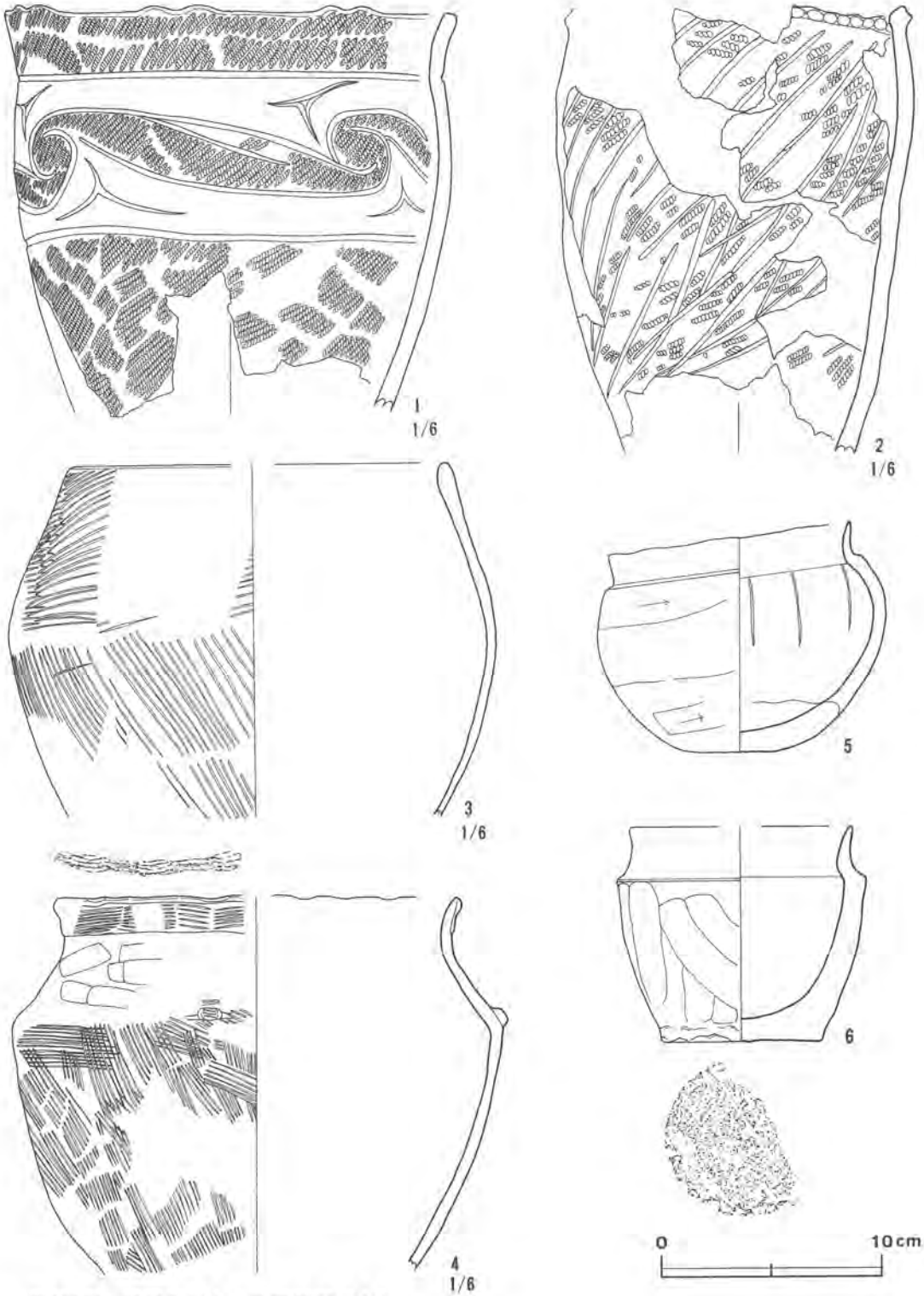
図版番号	名　　称	出土地点	台帳番号	長さ×幅（cm）	孔径(cm)	重量(g)	備　考
第208図 1	球状土錘	ＳＫ４	ＤＰ８	2.0×2.1	0.4	8.3	
2	〃	ＳＫ７	ＤＰ９	2.4×2.3	0.7	9.2	

5　遺構に伴わない出土遺物

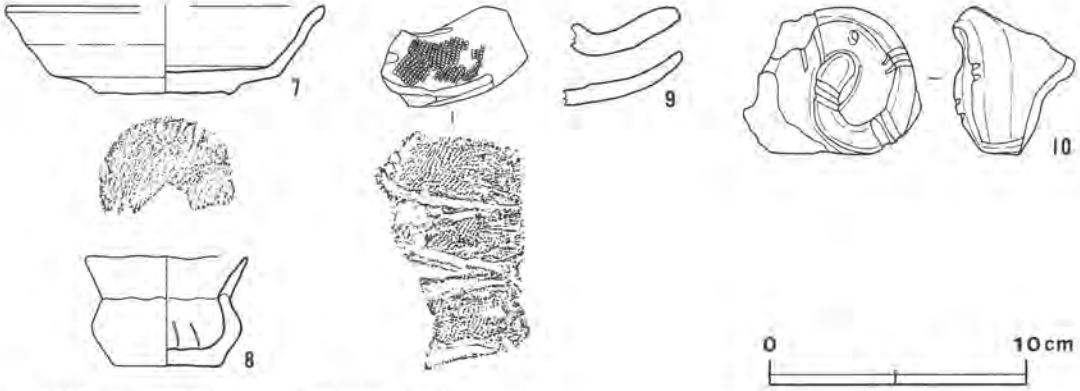
当遺跡からは，縄文式土器片・土師器片・土製品・石製品が出土している。本項では，土器については観察表で説明し，土製品・石製品については個々の出土位置・法量等を一覧表にして掲載した。

遺構外出土土器観察表

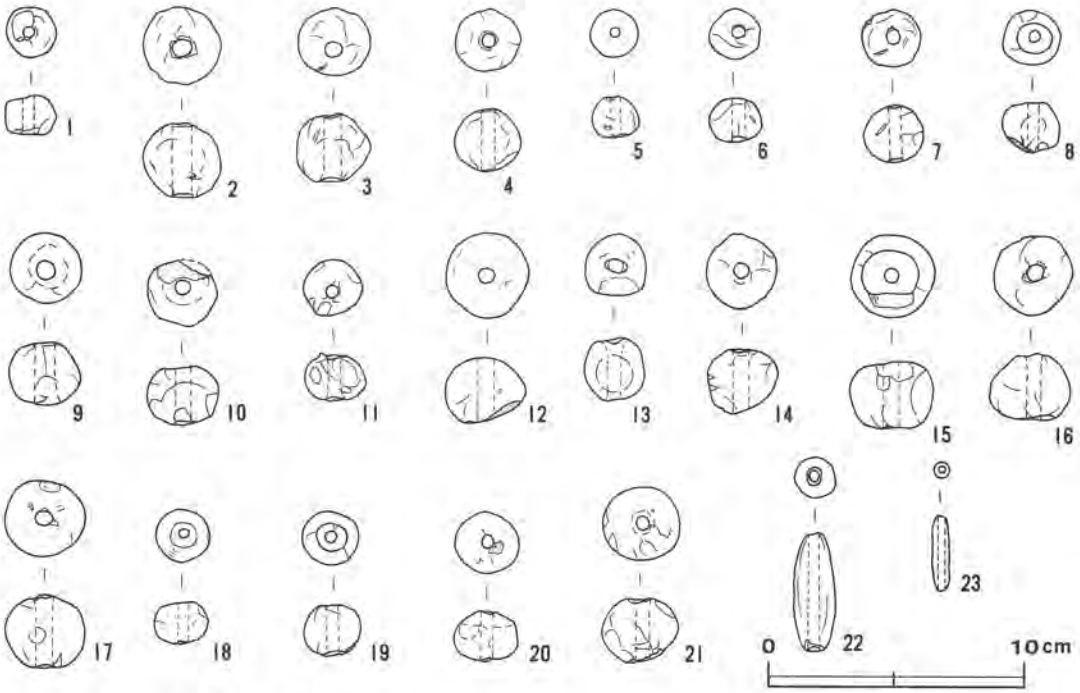
図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第209図 1	深鉢形土器 縄文式土器	A　20.5 B（19.2）	胴部は内彎しながら外上方に立ち上がり，長胴を呈する。口縁部は外反して立ち上がり，端部に６個以上の突起をもつ。	口縁部外面－ＲＬの縄文，内面－横ナデ。口頸部・胴部中位外面－横位の沈線文。胴部外面－上位に三叉文と連続Ｓ字文，Ｓ字文の中にＲＬの縄文，下位はＲＬの縄文。内面－ヘラナデ。	砂粒 灰褐色 普通	Ｆ８ｉ９ 30% Ｐ50
2	深鉢形土器 縄文式土器	A（21.0） B　29.3	胴部は内彎しながら外上方に立ち上がり，長胴を呈する。上位で内傾し，そのまま口縁部に至る。	口縁部外面－押圧文，内面－横ナデ。胴部外面－横・斜位の沈線文と刺突文，内面－ヘラナデ。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	Ｆ８ｉ９ 30% Ｐ45
3	深鉢形土器 縄文式土器	A（24.1） B（22.7）	胴部は内彎気味に外上方に立ち上がり，上位に張りをもつ。そこから内傾して口縁部に至る。	口縁部外面－横・斜位の半截竹管文，内面－横ナデ。胴部外面－縦・斜位の半截竹管文，内面－ヘラナデ。	砂粒・スコリア・雲母 橙色 普通	Ｆ８ｉ９ 20% Ｐ26
4	深鉢形土器 縄文式土器	A（26.0） B（24.3）	胴部は内彎しながら外上方に立ち上がり，上位に張りをもつ。張りは稜をなし，稜線上に楕円形の突起を有する。口縁部は複合口縁で外反し，端部は波状縁を呈する。	口縁部外面－横位の条痕文，内面－横ナデ。胴部外面－上位ヘラ削り，中・下位は横・斜位の条痕文，内面－上位は横位の条痕文。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	Ｇ９ａ６ 20% Ｐ28
5	小型甕形土器 土　師　器	A　11.1 B　10.8 C（3.4）	底部は平底で，胴部は内彎して外上方に立ち上がり，口縁部との境に稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面－ヘラナデ。胴部内・外面－ヘラナデ。底部－不定方向のヘラ削り。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	Ｆ７ｈ８ 70% Ｐ49
6	小型甕形土器 土　師　器	A（10.2） B　10.0 C（7.3）	底部は平底で，胴部は内彎気味に外上方に立ち上がり，口縁部との境に稜をもつ。口縁部は内傾し，次に直立する。	底部－木葉痕。口縁部内・外面－横ナデ。胴部外面－ヘラ削り，内面－横ナデ後縦ナデ。	砂粒・スコリア・礫 橙色 普通	表採 40% Ｐ33
第210図 7	坏形土器 土　師　器	A（12.6） B　3.5 C（5.4）	底部は平底で台状を呈する。体部は直線的に外上方に開き，口縁部に至る。	ロクロ成形。底部－回転糸切り。口縁部内・外面－横ナデ。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	Ｆ９ｊ１ 40% Ｐ27
8	ミニチュア土器（坩） 土　師　器	A（6.4） B　4.3 C　4.2	底部は平底で，胴部は直線的に外上方に立ち上がり，中位に張りをもつ。口縁部は直線的に外上方に開く。	口縁部外面－指ナデ，内面－横ナデ。胴部内・外面－指ナデ。	砂粒 にぶい褐色 普通	表採 60% Ｐ38
9	注口土器 縄文式土器	口径 1.9 B（5.7）	注口部破片。	全面－縄文。取付部－刺突文。上位－１条の沈線文，下位－４条の沈線文。	砂粒・スコリア 灰白色 普通	15%Ｆ８ｈ０ Ｐ32
10	深鉢形土器 縄文式土器		把手部破片。	渦巻文。文様上・下位・左右に２条の半截竹管文。右上位に１孔を穿つ。	砂粒・雲母 橙色 普通	表採 Ｐ44



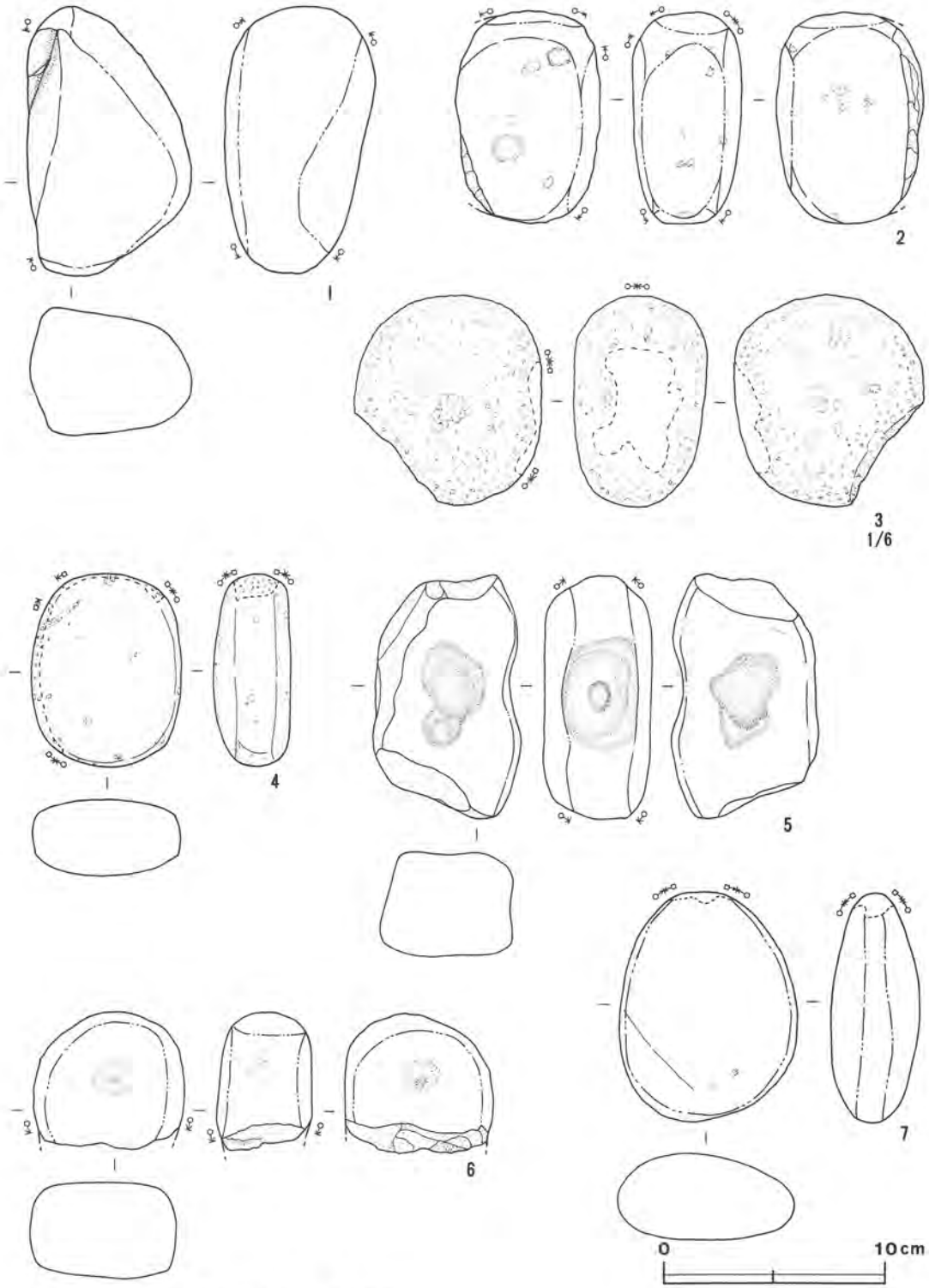
第209図　遺構外出土土器実測図（1）



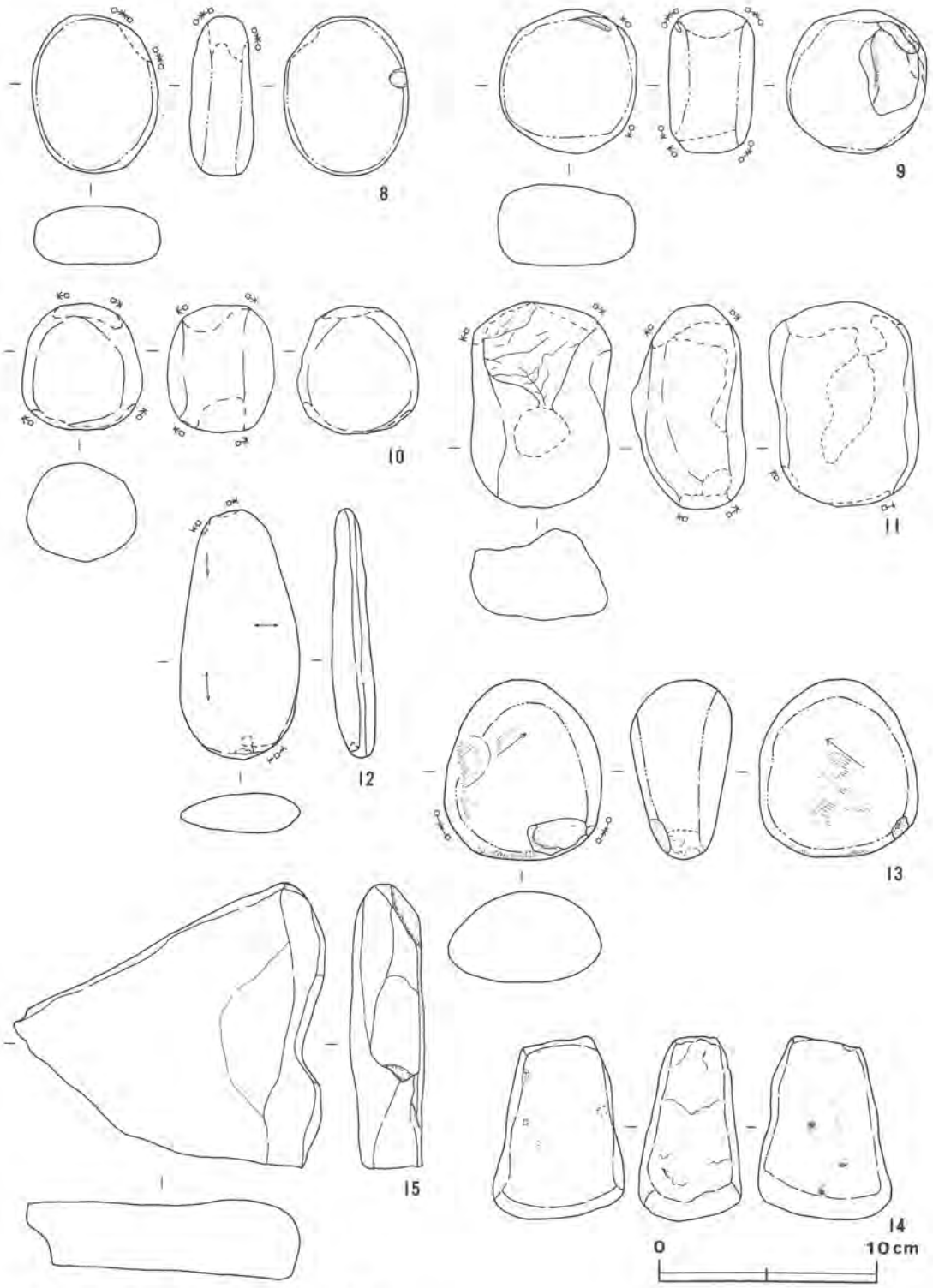
第210図　遺構外出土土器実測図（２）



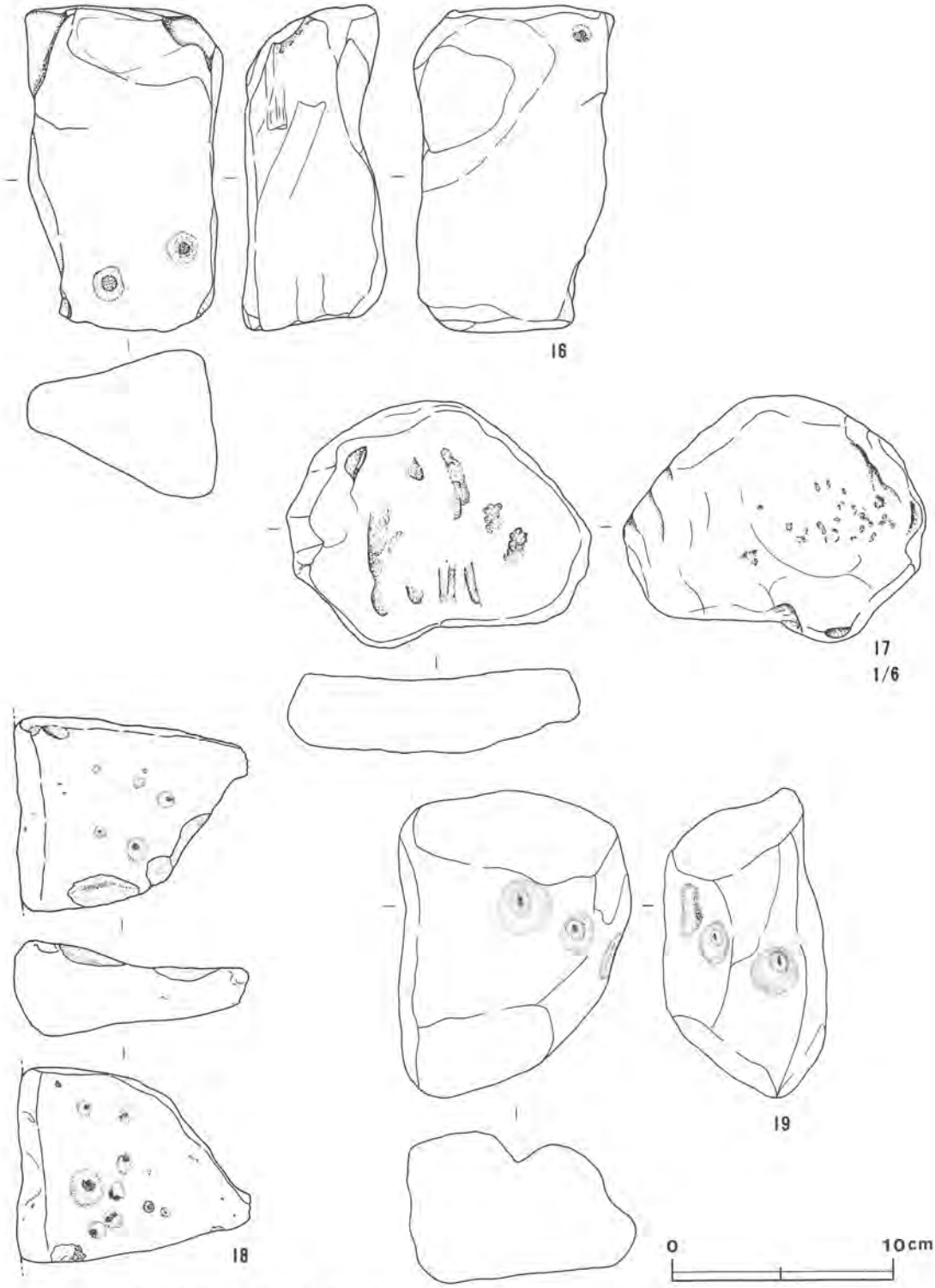
第211図　遺構外出土土製品実測図



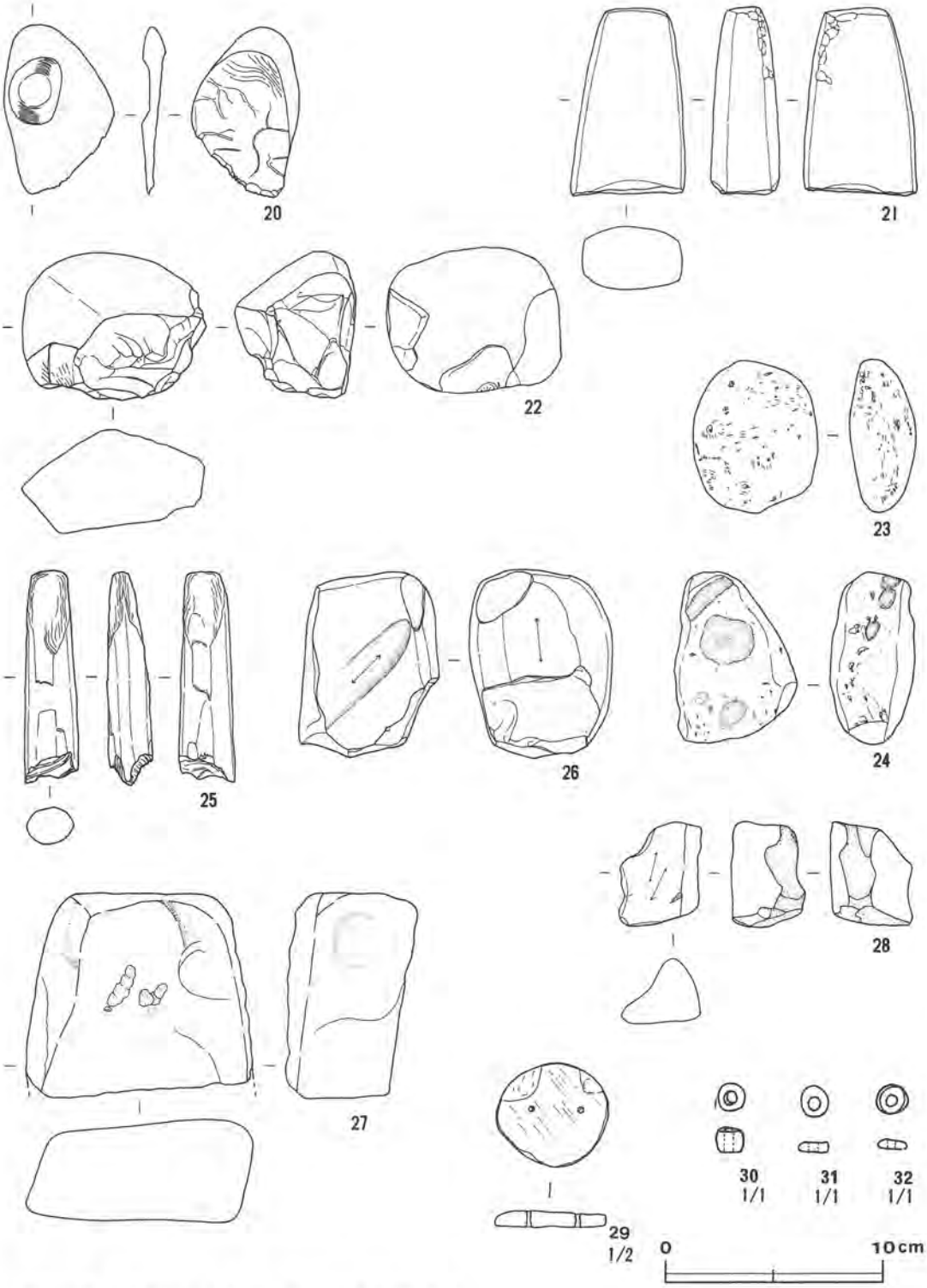
第212図　遺構外出土石器実測図（1）



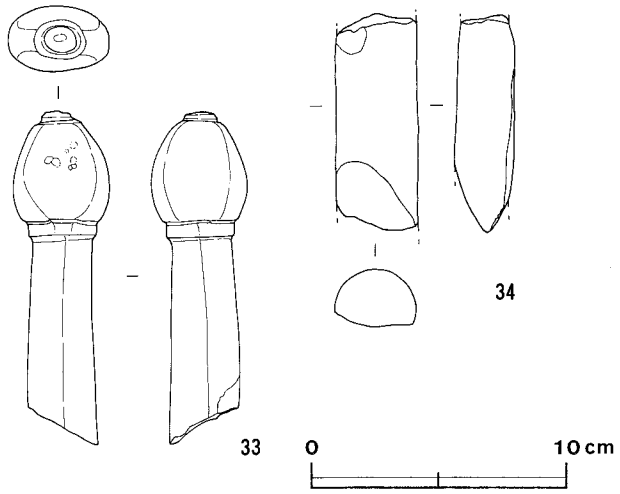
第213図　遺構外出土石器実測図（２）



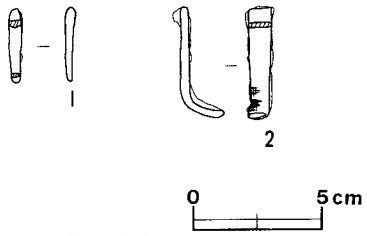
第214図　遺構外出土石器実測図（3）



第215図　遺構外出土石器・石製品実測図（4）



第216図　遺構外出土石製品実測図（５）



第217図

遺構外出土鉄製品実測図

遺構外出土土製品一覧表

図版番号	名　　称	出土地点	台帳番号	長さ×幅（cm）	孔径(cm)	重量(g)	備　考
第211図 1	球状土錘	表　　採	ＤＰ26	1.6×2.0	0.5	6.0	
2	〃	表　　採	ＤＰ28	3.0×3.1	0.7	28.1	
3	〃	表　　採	ＤＰ29	2.7×2.9	0.7	20.9	
4	〃	表　　採	ＤＰ30	2.5×2.6	0.5	14.6	
5	〃	G10d$_9$	ＤＰ20	1.6×2.0	0.4	5.0	
6	〃	G10c$_9$	ＤＰ22	1.8×2.1	0.5	7.1	
7	〃	G10d$_5$	ＤＰ21	2.3×2.4	0.5	11.0	
8	〃	G10c$_1$	ＤＰ27	(2.0)×2.2	0.4	(8.8)	
9	〃	F9j$_5$	ＤＰ23	2.5×2.8	0.7	20.3	
10	〃	F8h$_0$	ＤＰ24	(2.4)×(2.8)	0.6	(15.5)	
11	〃	〃	ＤＰ25	1.9×2.4	0.5	8.7	
12	〃	〃	ＤＰ10	(2.7)×3.3	0.7	(23.2)	
13	〃	F8h$_8$	ＤＰ11	2.6×2.5	0.6	14.2	
14	〃	F8h$_8$	ＤＰ12	2.6×3.0	0.6	17.5	
15	〃	F8h$_8$	ＤＰ13	2.7×3.3	0.7	31.2	
16	〃	F9j$_6$	ＤＰ14	2.7×3.1	0.6	19.2	
17	〃	G4j$_2$	ＤＰ15	3.0×3.2	0.7	29.1	
18	〃	G9a$_6$	ＤＰ18	1.7×2.2	0.4	8.5	
19	〃	G9a$_7$	ＤＰ16	2.1×2.2	0.6	8.8	
20	〃	G9a$_7$	ＤＰ17	2.0×2.5	0.5	10.0	
21	〃	G10c$_5$	ＤＰ19	2.6×3.0	0.6	21.3	
22	管状土錘	G10d$_5$	ＤＰ31	4.7×1.6	0.5	12.0	
23	〃	G9a$_0$	ＤＰ32	3.0×0.7	0.3	0.9	

遺構外出土石製品一覧表

図版番号	名称	出土地点	台帳番号	大きさ（cm）長さ×幅×厚さ	孔径(cm)	重量(g)	石質	備考
第212図 1	磨石	表採	Q 9	(12.4)×(7.6)×(6.6)	—	(792.1)	流紋岩	一部残存
2	〃	G9a4	Q10	9.8×(6.7)×5.0	—	(550.0)	安山岩	一部欠損
3	〃	表採	Q18	(9.9)×(8.6)×(6.2)	—	(629.9)	〃	〃
4	〃	F9j2	Q11	8.9×7.0×3.6	—	360.6	〃	
5	〃	F8j7	Q12	(11.3)×(6.8)×(5.1)	—	(569.6)	〃	敲打面有り一部残存
6	〃	F8h8	Q15	(6.0)×(6.9)×(4.4)	—	(328.2)	〃	凹有り一部残存
7	〃	G9b0	Q 6	10.7×8.1×3.9	—	461.9	〃	
第213図 8	〃	G10d5	Q 7	7.3×5.8×3.0	—	171.0	〃	
9	〃	G9a0	Q 8	6.7×5.6×3.9	—	(234.7)	砂岩	一部欠損
10	敲石	表採	Q17	6.0×5.5×5.0	—	219.3	安山岩	
11	〃	F9j4	Q20	9.5×6.4×5.4	—	(457.1)	流紋岩	一部欠損
12	〃	G9d9	Q16	11.6×5.6×2.1	—	(158.9)	硬砂岩	〃
13	〃	G10d9	Q21	8.2×7.2×4.7	—	356.3	流紋岩	
14	石皿	G9a0	Q22	8.6×6.0×5.2	—	(304.3)	安山岩	一部欠損
15	〃	表採	Q25	(13.2)×(14.2)×(3.5)	—	(711.5)	砂岩	一部残存
第214図 16	〃	G9c0	Q14	(15.2)×(9.2)×(6.6)	—	(1205.9)	片麻岩	裏面凹有り一部残存
17	〃	F8i4	Q23	(21.2)×(26.5)×(6.5)	—	(6200.0)	砂岩	一部残存
18	〃	表採	Q24	(10.7)×(9.0)×(4.5)	—	(348.8)	安山岩	〃
19	凹石	G9c5	Q13	(14.3)×(10.8)×(7.5)	—	(1384.7)	片麻岩	〃
第215図 20	石刃	表採	Q34	(7.9)×(5.1)×(1.2)	—	(33.0)	粘板岩	〃
21	磨製石斧	G9b0	Q 5	(8.8)×(5.1)×(3.2)	—	(234.6)	硬砂岩	半分欠損
22	礫器	F8h7	Q27	(6.9)×(8.4)×(5.6)	—	(385.8)	流紋岩	一部残存
23	軽石	F8g3	Q29	7.1×5.8×3.0	—	(44.0)	軽石	一部欠損
24	〃	F9j5	Q28	(8.0)×(5.8)×(3.9)	—	(40.6)	〃	〃
25	石剣	G10c1	Q32	(9.8)×(12.6)×(2.1)	—	(59.9)	粘板岩	〃
26	砥石	G9a0	Q 1	(8.8)×(6.6)×(6.6)	—	(473.3)	砂岩	〃
27	〃	表採	Q 2	(9.5)×(10.0)×(4.6)	—	(723.4)	〃	〃
28	〃	表採	Q 3	(4.9)×(3.8)×(3.5)	—	(57.9)	〃	〃
29	有孔円板	表採	Q36	3.1×3.4×0.4	0.15	8.1	滑石	双孔
30	臼玉	Aトレンチ	Q38	0.4×0.5×0.3	0.15	0.7	〃	
31	〃	Aトレンチ	Q39	0.5×0.5×0.1	0.18	0.7	〃	
32	〃	Aトレンチ	Q40	0.4×0.5×0.1	0.15	0.7	〃	
第216図 33	石剣	P19	Q33	(13.2)×3.8×2.6	—	(124.7)	粘板岩	半分欠損
34	石棒	P19	Q35	(8.7)×(3.2)×(2.3)	—	(99.0)	角閃片岩	一部残存

遺構外出土鉄製品一覧表

図版番号	名称	出土地点	台帳番号	法量（cm）長さ	幅	厚さ	形態の特徴	備考
第217図 1	不明	F8e2	M 3	2.9	0.4	0.2	断面長方形。	
2	鎹	F9j5	M 4	4.5	0.9	0.2	「L」字状。断面長方形。	

第8章　まとめ

第1節　遺　構

1　竪穴式住居跡

尾島貝塚・宮の脇遺跡・後九郎兵衛遺跡の3遺跡は，霞ヶ浦の南東岸に接する桜川村浮島の東端部，標高5～8mほどの砂洲上の台地に位置し，農道を隔てて東西に並んで所在するため，同一遺跡の観を呈している。

発掘調査は，一般県道新川・江戸崎線改良工事用地のうち，東西760m・南北（幅）12～14mについて実施した。3遺跡とも水田との比高1.5mほどで，多量の礫を含む砂土であるが，後九郎兵衛遺跡の中央部付近はこの砂層上約1.6mほどに，ロームブロック・ローム粒子・粘土粒子・礫等が堆積している。蛇峰山の崩落によって堆積したものと考えられる。

遺跡及びその周辺は畑地として利用されており，開墾・桑の栽培・その他の耕作のための深耕ロータリーの導入によって，遺跡全体が激しい撹乱を受け，加えて，遺構が礫を含む砂層中に構築されていることから，その確認及び検出は困難を極めた。

今回の調査で検出された竪穴住居跡は，尾島貝塚26軒，宮の脇遺跡22軒，後九郎兵衛遺跡7軒の合計55軒であり，東は尾島神社の北東部，西は蛇峰山の北東麓の約330mの間に4グループに分かれている。出土遺物から，古墳時代後期(主に鬼高式期)の住居跡であることが確認できた。

エリア外に延びている住居跡は尾島貝塚3軒（SI－14・16・20），宮の脇遺跡8軒（SI－1・3・4・12・13・18・19・25），後九郎兵衛遺跡2軒（SI－1・6）の計13軒。重複あるいは表土除去による削平のため，カマドのみ遺存していたものが4軒（尾島貝塚SI－17，宮の脇遺跡SI－6・8・17）等があり，不明確な点がある。

形状は，隅丸方形を呈するものが29軒（尾島貝塚SI－1～6・8・10・12・15・19・23・25・27，宮の脇遺跡SI－1・7・9～12・19・20・23・24，後九郎兵衛遺跡SI－2～5・7）と多く，方形を呈するものが7軒（尾島貝塚SI－7・11・13・24，宮の脇遺跡SI－2・14・24），隅丸長方形を呈するものが1軒（宮の脇遺跡SI－5），長方形を呈するものが1軒（尾島貝塚SI－21）である。規模は，一辺が4m未満のもの6軒(尾島貝塚SI－19・22,宮の脇遺跡SI－13・23，後九郎兵衛遺跡SI－2・3），4m以上5m未満のものが20軒（尾島貝塚SI－1～3・5・6・11・12・21・23・25・27，宮の脇遺跡SI－1・4・5・7・14・18，後九郎兵衛遺跡SI－4・5・7），5m以上6m未満のものが10軒（尾島貝塚SI－4・8・24，宮の脇遺跡SI－2・9～11・20・26，後九郎兵衛遺跡SI－6），6m以上のものが7軒（尾島貝塚SI－7・10・13，

宮の脇遺跡ＳＩ－12・19・24，後九郎兵衛遺跡ＳＩ－１）で，尾島貝塚の第10号住居跡が１辺6.5ｍで，検出された住居跡の中で最大規模を有し，尾島貝塚の第19号住居跡が１辺2.9ｍで，最小規模の住居跡である。

壁は，礫混じりの黄・暗・黒褐色砂土で構築され，その立ち上がりは，尾島貝塚・後九郎兵衛遺跡の大部分が緩やかなのに対し，宮の脇遺跡では垂直に立ち上がるのが比較的多い。壁高は，確認面からの掘り込みが18～30cmと浅いものが多く，40cmを越えるものは４軒（尾島貝塚ＳＩ－11・23，宮の脇遺跡ＳＩ－14・26）である。壁下に周溝をもつ住居跡は３軒（尾島貝塚ＳＩ－１・12，宮の脇遺跡ＳＩ－24）と極めて少なく，周回しているものは１軒もない。

床は，礫を多量に含む黄・黒・灰褐色砂土を主に，黒褐色と黄褐色砂土が混じるもの，炭化粒子や粘土ブロックを付着させるもの等があり，固く踏み固められているものは少ない。床面はほぼ平坦で，凹凸のあるもの４軒（尾島貝塚ＳＩ－８・16，宮の脇遺跡ＳＩ－11・17），斜をもつもの４軒（尾島貝塚ＳＩ－12・20・27，宮の脇遺跡ＳＩ－23）である。

柱穴はほとんどの住居跡に検出され，４本の柱穴を持つものが多く，主柱穴と考えられる。尾島貝塚の第３～６・13・15号住居跡，宮の脇遺跡の第17号住居跡では，柱穴の配置に規則性を持っている。柱穴の径は40cm前後が多く，深さは30～40cmが大部分である。

尾島貝塚の第１号住居跡柱穴のP_5，第10号住居跡柱穴のP_4は，共にカマドと相対する位置にあって，各住居跡の主柱穴とは認められない。共に出入口施設に係るピットと推定される。

カマドを有する住居跡は，尾島貝塚14軒（ＳＩ－１～６・８・10・13・17・19・21・25・27），宮の脇遺跡17軒（ＳＩ－２～14・17・19・20・23），後九郎兵衛遺跡３軒（ＳＩ－２～４），計34軒である。カマドの付設位置は，尾島貝塚の第13号住居跡のみが東壁にあり，他はすべて住居跡の北西壁に付設されている。

カマドの規模等については，ほとんどが礫を含む粘質砂土で構築されているため，崩壊したり，おしつぶれており，その遺存度は極めて不良で，わずかに尾島貝塚の第10号，宮の脇遺跡の第９・10号住居跡で解明されたに過ぎない。

尾島貝塚の第22・23号住居跡は，柱穴・カマドが検出されない住居状遺構であり，23号からは，土師器を中心に土製品・石製品が多量に出土している。後九郎兵衛遺跡第５号住居跡もまた，カマドが検出されず，床面もやわらかい。宮の脇遺跡の第24号住居跡は，主柱穴が特定できないほど不規則に多数検出され，床面には中央部を中心にして楕円形状に焼土散布地がある。これらの住居跡は，当遺跡群の中で特異な位置を占め，祭祀とのかかわりが考えられる。

2　掘立柱建築跡

本跡は，南東方に奇数の柱痕を有した27本からなる掘立柱建築跡である。建物構造は，柱の太さと桁行や梁行の部材で柱間が決まり，一般的には柱間を10とすると柱径は１程とされている。本跡の場合，柱痕径は45cm程を測るが柱径そのものとはいい難く，柱痕径，深さ，柱間が同一等の共通性だけを確認できた。重い上屋構造を支える構造柱とすると柱痕数が多過ぎて適さず，伊勢神宮等の古い伝統からくる構造上の類似点から推考すると，同一径の柱痕等から高床式建物であることが想定できる。その上，柱痕の共通性から床束の小穴と考えて束柱構造をも仮定でき，束柱構造の場合構造柱を有さない校倉造りの上屋構造であった可能性が大きい。

仏教遺跡は南を向いて方向性を有するが，古墳や神社は方向性をさほどもたない。あえて方向性を示せば農耕民族として太陽の運行に結びつけるのが妥当であろう。整然と並ぶ柱痕は建物構造の土台を示しているが，27本の柱痕の中で南東方に４本，縦に各々５本ずつの計20本の柱痕は左右対象に築造される本殿にふさわしい構造であり，他の７本で構成される構造は脇室か奥の間と考えられる。以上の観点から方向性をみると，本殿の偶数柱痕側に入口施設として中央２本を利用した額縁柱構造を有し，棟木は奇数柱痕の中央にもたされるため，完全な南東向き構造となる。本殿は，桁行３間，梁間４間となり，付属施設は本殿に連なるため桁行３間，梁間２間と１間の変形脇室となる。大社造りは，神社建築最古の様式である切妻造りであるが，本跡の場合も寄せ棟については梁間が狭すぎるという難点から切妻造りと考えたい。

中国周代の官制を記した「周礼（シュレイ）」によると,「前宮後市－前に天子，後方に市場（住居）－」という条に本跡と住居跡が合致し，本跡に対し同方向のH16区に土器溜り的祭祀跡が確認されているのも関係あるものと思われる。

3　掘立柱状建築跡

宮の脇遺跡の西側部から後九郎兵衛遺跡の中央部やや東よりにかけて，多数のピットが確認された。

ピット群は，整然と並んで確認され，その径はいずれも40cm前後を測ることから，掘立柱建築跡と推定して調査を進め，宮の脇遺跡４棟，後九郎兵衛遺跡１棟，計５棟を検出した。

規模は，宮の脇遺跡の第１号掘立柱状建築跡が1.4×2.64ｍと小規模であり，第２号掘立柱状建築跡が3.0×5.0ｍ，第３号掘立柱状建築跡が5.1×6.82ｍ，第４号掘立柱状建築跡が3.76×11.4ｍ，後九郎兵衛遺跡の第１号掘立柱状建築跡が5.3×8.1ｍとさまざまである。

長軸方向は，宮の脇遺跡の第３号掘立柱状建築跡のみがＮ－34°－Ｅで，外は，Ｎ－54°－ＷからＮ－58°－Ｗの間にあって，統一性が認められる。第３号掘立柱状建築跡は，北西側に第11号住居跡が，東側に第12号住居跡が位置することから，あるいは北西から南東方向に延びていたものが，竪穴住居跡の構築時に破壊されたことも考えられる。その場合，長軸方向は当然かわり，長軸方向はほぼＮ－56°－Ｗとなることが推定され，統一性がうかがえる。

遺構の構造を概観して特徴的なことは，第１に柱数が多く，１棟が21～48本の柱によって構築されていること。第２に柱間が0.6～1.2ｍほど（後九郎兵衛遺跡第１号住掘立柱状建築跡に１間1.8ｍがある）と狭いことであり，これは，当遺跡群で検出された掘立柱状建築跡が一般的な掘立柱建築跡と大きく異なるところである。掘立柱建築跡というよりは，むしろ総柱建築跡と呼称する方が適切なのかもしれない。

これらの遺構の構造は，ピット及びその配列から推察すると，柱は束柱が使用され，高床式の建物であり，壁は，奈良の正倉院にみられるように，木材を組み上げた壁構造の建物であったのではないだろうか。屋根の構造については想像の域を出ないが，規模等から倉庫として使用されたと仮定すれば，切妻構造と推定される。

掘立（総）柱建築跡が営まれていた時期は，これらの遺構が，上記のように竪穴住居跡の比較的少ない遺跡の西側部で確認されていること。宮の脇遺跡の第１号掘立（総）柱建築跡が第14号住居跡に破壊されていること。同遺跡第３号掘立（総）柱建築跡のように，もしかすると竪穴住居跡の構築時に破壊されているかもしれないこと。ピットは宮の脇遺跡の中央部からも検出されていること。住居跡に伴う遺物が，ピットの覆土の中から出土していること等から，それほどの差はない（ほとんど同一時期）であろうが，竪穴住居跡の構築に先立つものと推察される。

4　祭祀跡

はじめに

桜川村浮島における考古学的調査が，遺構，遺物の紹介は，江戸時代安政２年（1855年）にまでさかのぼり，『利根川図誌』赤松義知編著に，「信田の浮島，霞ヶ浦にあり。常州信田郡に属す。浮島弾正此に居り。今船ツカ山，鞍懸の松，蛇峰，人見の塚，馬わたしなどという名所あり。又この島の三郎左衛門，雷のばちという物を所持せりと云へり。石に非ず金に非ず土にあらず，何にもせよめずらしきものなりとぞ」と記されている。これは浮島の採集遺物である頭部の欠損した石剣が世に紹介された最初の例であり，現在この遺物は村存住の小貫正太夫家に保管され続けている。明治27年には，佐藤伝蔵，若林勝邦両氏により浮島貝塚の調査報告が福田貝塚[(1)]の後，「常陸国浮島村貝塚探究報告」で成され，その後，大野雲外氏，清野謙次氏，大場磐雄氏，山内清男氏，亀井正道氏，杉原荘介氏，西村正衛氏等，先学諸士の調査訪島を得られ，浮島は考古学での重要な位置を学術的に築かれて今日に至っている。この間，浮島式土器，前浦式土器，殿内式土器等の土器呼称や土器編年の設定が成された。

一方，昭和33年に亀井正道氏によって紹介された「常陸浮島の祭祀遺跡[(2)]」は，後の前浦遺跡[(3)]と共に浮島における祭祀遺跡の興味と課題を強烈に与えられた。前浦遺跡は稲敷郡桜川村字前浦に所在し，湖底段丘であった標高７～８ｍ程の桜川に面した丘陵端の台地上に，有孔円板，石製剣形模造品，勾玉（模造品約50点），鉄鏃，土師器（壺形土器，小型丸底土器，高坏形土器等20点）を出土した遺跡である。尾島祭祀跡は同村字尾島に所在し，段丘東端尾島神社境内で，石製勾玉，無孔円板，有孔円板，石製剣形模造品，立花品，土製勾玉，土製丸玉，土製管玉，土師器（和泉式），須恵器等が出土している遺跡である。

尾島祭祀跡はその後昭和39年から，神尾明正氏，森谷ひろみ女史，両名により３次に渡ってのトレンチ発掘調査[(4)]が実施されているが，これといった成果は得られていない。これは，斉藤忠氏，坂詰秀一氏や寺門義範氏が指摘[(5)]された様に，遺跡が砂質土で構成される砂州上にあり，調査に困難を極めたことも原因していると思われる。

住居跡と祭祀用遺物

今回の尾島貝塚（貝塚は当地区の南東側に位置する微高地に存在したが，大正末期の尾島地区開墾により湮滅し，当遺跡は尾島祭祀跡としても過言では無い。）調査により，住居跡と祭祀用遺物との関係で捉えることが可能な点があるので下記に述べたい。

第２号住居跡では，カマド袖部より有孔円板（第11図16），カマド及びカマド南側より石製剣形模造品（第11図17・18）が出土している。第３号住居跡は第２号住居跡より新しい住居跡で，

覆土中からではあるが垂れ飾り（第13図15），双孔円板（第13図25），石製剣形模造品（第13図26）が出土し，第４号住居跡の覆土下層からは石製剣形模造品（第16図31・32）が出土している。第５号住居跡のカマド内から双孔円板（第19図20）が出土し，第６号住居跡からは単孔円板（第22図30）と，２区覆土中より完形の手捏土器（第21図10・11）２点，４区覆土中から加工途中の石製剣形模造品（第22図31）が出土している。第８号住居跡に至っては，南側床面より出土した単孔円板（第28図26）と，３区覆土中より出土した３点の双孔円板（第28図27・28・29），赤彩の手捏土器（第28図11）のほか５点の手捏土器（第28図12・13・14外）や覆土上層からではあるが臼玉３点（第28図23・24・25）が出土している。第10号住居跡では，カマド東前方部床面から２点の双孔円板（第31図９・10）が出土したほか，北西壁の西コーナー部寄りの覆土中からも単孔円板（第31図８）が出土している。第17号住居跡からは手捏土器（第43図３），第19号住居跡の南東壁際覆土中からは紡錘車（第47図５），第21号住居跡の南東壁際からは手捏土器（第51図５）がそれぞれ出土している。更に，第23号住居跡の北東側覆土中より小型手捏土器（第57図28），第24号住居跡では中央部覆土中からではあるが石製剣形模造品（第59図13）と双孔円板（第59図11・12）２点，第25号住居跡からは双孔円板（第63図25～33）９点が出土している。

以上の出土状態から検討して，カマド祭祀，或いは屋内祭祀が存在したと仮定してその特徴を記すには必ずしも妥当な考察に成り得ないであろうが論じることにする。出土遺物の編年から当遺跡の集落出現を考えると，小型器台形土器や和泉式期の高坏形土器の粗形が出土していること，茨城町小堤貝塚[6]及び奥の谷遺跡[7]出土の底部穿孔壺形土器に類似する口縁部の出土や，隣接する宮の脇遺跡での第24号住居跡と重複した地床炉を有した住居跡の出土例等から，少なくとも五領Ⅲ式期の集落が近辺に営まれていたことは明確といえる。以降，提示した出土遺物，住居跡の形態から推察して鬼高Ⅰ式期を経て鬼高Ⅱ式期へと集落が営まれている。本稿でいう鬼高式期とは，６世紀初頭から中頃までをⅠ式期，中頃から６世紀末までをⅡ式期と２期に分類しておく。鬼高Ⅰ式期は和泉Ⅱ式期の継続として捉えられ，滑石製模造品の盛行をみるのであるが，H15区の屋外祭祀跡は，特に鬼高Ⅰ式期におけるわずかな時期的な差を内包した上で，石製模造品から土製模造品，手捏土器への後行する時期へと移行していったところの遺跡である。

一般に，滑石製模造品の最盛期は，和泉Ⅱ式期から鬼高式期とされている。茨城県，千葉県，埼玉県など南関東一円で最近報告されている集落跡出土の滑石製模造品の推移は，五領式期の住居跡からの出土が他期に比して希有であるが存在し，五領Ⅲ式期には集落内で有孔円板や石製剣形模造品等の祭祀用具が用いられ，古墳での祭祀遺物である滑石製模造品の出現期とほとんど差は無い。このことから，当遺跡で出土した大型の石製剣形模造品（第94図10・11，第95図20）は，３点が時期的変遷をもつにせよ，古墳に供献されるべき精巧な形態を残したことに疑問を感じ得ない。

当財団が調査した県内の和泉式期の滑石製模造品の出土例を挙げると，乙子遺跡[8]，北今城遺跡[9]，仲原遺跡等[10]が存在し，いずれも集落内に工房跡を有する。祭祀遺跡を推考するのに向坪B遺跡[11]や大生郷遺跡等[12]も興味深い遺跡といえる。千葉県内で和泉式期の滑石模造品を出土した遺跡の約$\frac{1}{3}$は，工房跡を有する可能性のある住居跡を含んでいる。南関東での和泉式期の大集落は希有で，遺跡数も他期と比して少ないことから推定すれば，和泉式期の滑石製模造品の出土率は高いものと思われる。この集落が鬼高式期に継続すれば初頭にも盛行する様を示すが，単に集落が和泉式期から鬼高式期に継続している例に過ぎず，鬼高式期に集落が開始された遺跡においては滑石製模造品の出土例は低くなり，手捏土器が圧倒的に多くなっている。このことからすれば，当遺跡は和泉式期から営まれて鬼高Ⅰ式期と同Ⅱ式期に盛行を極めたといっても過言ではないと思われる。

カマド祭祀，屋内祭祀に結論づければ，当遺跡ではカマドにおける支脚抜去の有無を同一時期内での変容として認められるため，カマドが住居の象徴，火の憑代として住居施設の中で特別視された時期と，住居廃絶と一体化した時期との２つの機能を形態化していると考えられる。当遺跡では，古墳時代中期後半から中心となる石製剣形模造品や有孔円板は，カマド祭祀での鎮魂の手段を成す主な祭祀用具でもあり，手捏土器もまた併行した供献用具として使用されていたことを窺せる。

祭祀跡と祭祀用遺物

手捏土器は，生活遺構から出土する非日常的な祭祀用土器として，『日本書記』神武天皇の条に「平瓮」「厳瓮」と共に「天手抉（アメノタクジリ）」と記され，『延喜式』には指頭で捻文状にえぐり取るように強く押し引きするところから「天手抉」「手捏土器」と呼ばれている。

当遺跡では縄文時代から認められる一般的な手捏土器のほか，出土位置や器形及び手法の特徴から非日常的な土器で祭祀用土器として捉えられる粗成粗雑な成形を共通としている土器群を手捏土器として扱った。

手捏土器を更に器形で類別すると，

1　小型手捏土器

2　鉢形土器

3　椀形土器

4　甕形土器

5　小型広口壺形土器

とに分けられる。小形手捏土器はミニチュア土器と呼ばれる本来の手捏ね手法で作られた手捏土器である。当遺跡の祭祀跡から出土した手捏土器の器形名称は，鉢形土器と甕形土器が多く

を占めるが，胴部や口縁部の形状等の微妙な差異により，鉢形土器を基本とした椀形土器や甕形土器に分別した。

祭祀跡出土の手捏土器は，底部が平底で木葉痕を残しているものが大部分を占めるが，希にヘラ削り整形のものがあった。胴部外形は粘土紐巻きあげ痕を残した粗雑な成形を呈し，口縁部下位に稜を有するものと有さないものとの２種があり，口縁部は外反して直立するものが多くを占めるが種々様々な形状を示している。口縁部内外面と胴部内面は，わずかだがヘラナデ整形やナデ整形が施されて，外面に比べると美麗である。内面に不明な黒色斑点が付着しているが，これは手捏土器のみに限らず他の土師器にも付着しているところから，遺物遺存層が砂質土であるためのものと考えられる。

祭祀跡において，須恵器の聰と共伴している手捏土器は，概ね，６世紀中頃に伴なう手捏土器として認められる。H15e9区の第５ユニット出土の聰Ａ（第73図７），聰Ｂ（第73図１）とH15e8区の第15ユニット出土の聰Ｃ（第74図14）に伴出した手捏土器を検討してみると，次の様に類別できる。聰Ａには外面に粗雑な粘土紐巻き上げ痕が残存し，緩やかな膨らみも少なく，口縁部が極端に外反するために口縁部下位に稜を有した鉢形土器様のもの（第73図２）。聰Ｂには手捏土器と称するには適さぬ程に器形の内外面がヘラ削りやヘラナデ整形がされていて，底部はヘラ削り，胴中央部で最大径を示して隠やかに膨らみ，口縁部下位で鋭い稜を有して口縁部が外反する甕形土器様や壺形土器様のもの(第73図12, 第109図16)。聰Ｃには聰Ａと聰Ｂとに伴出した手捏土器の中間的な作出手法によるもので，粘土紐巻き上げ痕を残存させるが幾分ナデ整形を施している土器である。形態は底部からの立ち上がりを手捏ね手法で引き締めているが胴中央部で最大径を示して膨らみ，口縁部下位に弱い稜を有して口縁部が内傾した椀形土器様のもの(第74図15・16)の３種類に分けられる。６世紀中頃に編年した３種の聰は，形態，文様や作出手法等から新旧関係を判断すると，古手の聰Ｂ（第73図１),中間の聰Ｃ（第74図14),新しい聰Ａ(第73図７)に区別されるものと考える。この編年的関係で手捏土器を精察すると，古手のものは粗雑な鉢形土器の形態を示す手捏土器，中間には外面をナデ整形して若干作出手法を施した椀形土器の形態を示した手捏土器，新しい時期のものとしては底部ヘラ削り，胴部はヘラ削り整形，ヘラナデ整形が施されている丁寧な作りの甕形土器や壺形土器の形態を示す手捏土器とに，形態，作出手法に変遷をがみられる。

一方，土製鏡形模造品を観察すると，作出手法に４種の方法を有している。

第１種は，聰Ａや土製鍬先形模造品と共伴したもの（第73図３）で，形態は悪いが鈕釦部が背面に貼付され，装着部を指頭ナデで整形して両部の区分を無くしている。いわゆる鈕釦部の加工が丁寧なものである。第２種は，掌圧で円板にした背面に鈕釦部を貼付したもので，形態は美しいが装着部が歴然と認められるものである。本跡からはこの種の出土が多い。第３種は，単に掌

圧により円板を作り，背面を２本の指頭により数回捻り上げて鈕釦部を簡略して作り上げたものである。第４種は，水質を多く含んだ粘土を分厚く円板状の鏡に模したものの背面を２本の指頭により鈕釦部を捻り上げた粗雑なもので，形態も作出手法も最も粗雑なものである。

本跡で出土した土製鏡形模造品は，出土の仕方が点在的で共併遺物に絶対的な確信を得ない事もあり，４種の編年を明確に把握することは不可能であったが，今後の資料の増加と分析の機会を得る事に努めて論考を構じたいと思う。

土製鍬先形模造品は，当遺跡のH15f$_9$区の第１ユニットから出土した鉄製鍬先（第105図８）と，刃先，耳，柄装着部の抉り等が酷似し，鍬先としては「凹」の字状の古式のものの模倣である。この形態の出土例は，千葉県我孫子市日秀西遺跡[13]の041Ｂ住居跡ほか２住居跡より出土した計10点の土製鋤先形模造品と類似している。日秀西遺跡では，カマド周辺より出土していることから祭祀又は儀礼用の器具として使用されたものならば屋内祭祀を考えなくてはならないとしているが論考は避けている。当遺跡では屋外からの出土であり，共伴した遺物から推考すると６世紀中頃に編年できる祭祀遺物であるが，本遺物と類似するものの出土例が日秀西遺跡以外存在しないため，農耕祭祀に係る五穀豊穣を祈る土製模造品と推測するに留めたい。なお，後行する時期の土製鋤先形模造品として，兵庫県相生市丸山遺跡[14]の６世紀後半から７世紀中葉にかけての須恵器窯の灰原から出土した「Ｕ」字状[15]のものがあるが，今後の資料の増加をまって祭祀形態や目的等の論考を加えていきたい。

本跡が営まれた時期を概観すれば，上限は住居跡のカマド祭祀で論じた様に和泉式期にさか遡る。石製剣形模造品は，形態の加工が精緻で表裏に鎬を有して刃部が鋭いもの，鎬が簡略化されて片面だけに有するが形態がさほど省略されないもの，鎬が無くなり形態がわずかながら簡略化されるものに，大きく分類すると３種になる。これを時期的に捉えるならば，５世紀初頭から６世紀頃までの継続とみることができる。これに臼玉の形態を加えると，出土した臼玉は編年から６世紀初頭のソロバン状の形態が平になった時期と考えられる。しかし，有孔円板について述べれば，形態から５世紀中頃から６世紀初頭に編年可能なものに集中している。これらから考察すれば，５世紀初頭から祭祀が実施され，特に５世紀中頃に石製模造品による盛行を極め，６世紀初頭の鬼高Ｉ式期に継続したと考えられる。その後，集落と共に変遷があり，土製模造品による祭祀に移行するが，共伴遺物や住居跡のカマド祭祀を考え合わせると６世紀中頃に再び祭祀が盛行した遺跡と考えられる。

注

1　佐藤伝蔵　「常陸国福田村貝塚探求報告」　『東京人類学会雑誌９－100』　1894

2　亀井　正道　「常陸浮島の祭祀遺跡」　『国学院雑誌59－７』　1958

3　坂詰秀一　「前浦祭祀遺跡」　『茨城県史料－考古学資料古墳時代－』　1974

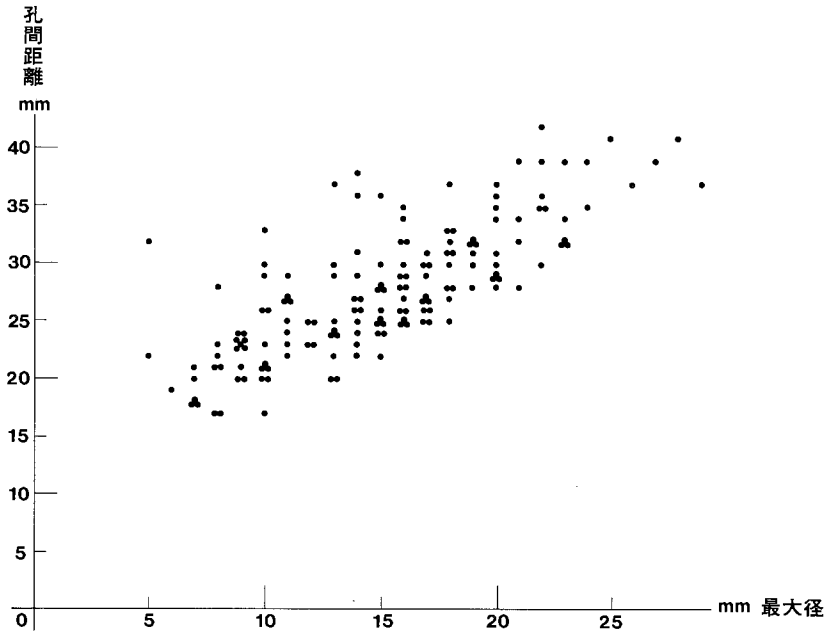
4　神尾明正・森谷ひろみ　「浮島宮ノ脇祭祀遺物包含地1964年トレンチ発掘略報」　『千葉大臨海研報告No.7』　1965
5　斉藤　忠　「日本考古学史上の茨城県」　『茨城県史研究第2号』　1965
6　茨城町史編さん委員会　「茨城町小堤遺跡」　1987
7　茨城県教育財団　「奥谷遺跡」　『茨城県教育財団文化財調査報告』　現在整理・執筆中　1988刊行予定
8　茨城県教育財団　「乙子遺跡」　『茨城県教育財団文化財調査報告第8集』　1981
9　茨城県教育財団　「北今城遺跡」　『茨城県教育財団文化財調査報告第8集』　1981
10　茨城県教育財団　「篠根入・仲原遺跡」　『茨城県教育財団文化財調査報告第8集』　1981
11　茨城県教育財団　「向坪A・B遺跡」　『茨城県教育財団文化財調査報告第38集』　1986
12　茨城県教育財団　「大生郷遺跡」　『茨城県教育財団文化財調査報告第7集』　1981
13　千葉県文化財センター　「千葉県我孫子市日秀西遺跡発掘調査報告書」　1980
14　兵庫県相生市教育委員会　「丸山遺跡」　1973
15　茨城県歴史館　「用具にみる農耕文化のあゆみ」『特別展　農具』　1986
松岡秀樹　「土製U字型鋤先について」　『古代学研究81』　1976

5　工房跡

本跡から出土した石製剣形模造品，有孔円板は，遺構，遺物の項で紹介した。石製剣形模造品は，両面に鎬を有して断面が薄い菱形を呈した刃部の鋭いものから，形態，加工手法が簡略化された平面板状のものまで種々雑多な形状のものが出土した。有孔円板についても，一般的に穿孔間の距離，或いは側縁部の加工手法の丁寧さや形態によって時期的に類別可能とされているため，まず単孔円板以外の有孔円板については，穿孔距離を円周との比率でグラフに表示してみた。出土した土層による分類はおろか，長期に渡る工房跡と仮定しても非常に広範囲な散り方を示し，形態による共通性，穿孔間の距離による普遍性等を見い出すことは不可能であった。（第218図）

遺構の項で遺物に触れて出土状態を報告したが，高坏形土器（第107図６），坩形土器(第107図１・３・７)，坏形土器（第107図８），椀形土器（第107図４）の出土と石製模造品の出土を重ねて述べてまとめとしたい。

高坏形土器（第107図６）は脚部が「ハ」の字形に広がる和泉II式期に認められるもので，坩形土器の胴部（第107図１・３・７）が「ソロバン状」で口縁部が開く時期と共通している。これと供伴する有孔円板は，側縁部が秀美に加工され，表裏面もどちらかというと美麗である。底の浅い平底の坏形土器（第107図８）と丸底の坏形土器を比べると，ほとんど石製模造品の出土の形態に差異を感じないが，丸底の坏形土器に伴う石製模造品の方が粗雑といえる。



第218図　有孔円板・穿孔間比率

第2節　遺物

1　土　器

尾島貝塚・宮の脇遺跡・後九郎兵衛遺跡の3遺跡から出土した土器は，土師器及び土師器片を主に須恵器とその破片，少量の縄文式土器片で，出土量は遺物収納箱に350箱である。

当遺跡群は，耕作等による撹乱が著しく，表土層からの遺物の出土量はかなりのものである。

縄文式土器は，後期から晩期にかけてのもので，器形が明確にわかるものは，後九郎兵衛遺跡のグリッドから出土している深鉢形土器4点である。深鉢形土器は，長胴を呈し，口縁部が外反して立ち上がるもの。胴部は内彎しながら外上方に立ち上がり，上位に張りをもち，内傾して口縁部に至るもの等の器形があり，口縁部外面にＲＬの縄文を施文し，頸部及び胴部外面中位に横位の沈線文，胴部上位に三叉文・連続Ｓ字文，Ｓ字文の中・胴部下位にＲＬの縄文を施文しているものや，口縁部外面に押圧文，胴部外面に横・斜位に半截竹管文を施しているもの等がある。

その他は，注口土器の注口部破片が第1号周溝状遺構から1点，グリッドから1点，計2点が出土している。全面に縄文が施文され，取付部上位・注口の外周部に沈線文が施文されている。

古墳時代前期から後期に比定される土器の出土が圧倒的に多く，後期(鬼高式期)に比定されるものが中心をなしている。

器形は，甕形土器，壺形土器・鉢形土器・甑形土器・坏形土器・椀形土器・高坏形土器・器台形土器・坩形土器・小型甕形土器・小型壺形土器・ミニチュア土器・手捏土器等があり，実測することができた（尾島貝塚の祭祀跡・工房跡出土を除いて）土師器のうち数が多いのは，甕形土器87点，坏形土器89点，高坏形土器39点，手捏土器36点などで，比較的少ないのは，甑形土器9点，坩形土器15点，少ないのは，ミニチュア土器5点，器台形土器4点などである。

甕形土器は，胴部が丸く張り，口縁部が大きく外反するもの。胴部上位に張りをもち，口縁部が大きく外反して立ち上がり，端部を外上方へつまみだしているものがある。

壺形土器は，胴部は丸く，口縁部が「く」の字状を呈し，複合口縁をもつもの，口縁部が短く外彎して立ち上がるもの，口縁部が外反して立ち上がり，端部を丸くおさめているもの等がある。

甑形土器は，底部が正円・不正円状に抜け，胴部は内彎しながら外上方に立ち上がり，そのまま口縁部に至るものと，口縁部が外反するもの等がある。

坏形土器は，底部が丸底のものと平底のもの。体部からそのまま口縁部に至るもの。体部と口縁部の境に稜をもち，口縁部が内傾するもの，直立するもの，外反するもの等がある。

高坏形土器は，体部が直線的に開くものや内彎して開くもの。脚部が「ハ」の字状に開くもの，やや膨らみをもちながら開くもの，やや膨らみをもって開き，裾部で屈曲して「ハ」の字状

に開くもの等がある。

坩形土器は，底部が丸底あるいは平底で，中位が大きく張る扁平な球形で，口縁部は直線的に外傾している。

手捏土器は，底部は平底で，胴部は直線的あるいは内彎して外上方に立ち上がり，そのまま口縁部に至るもの，口縁部が内傾あるいは直立するもの等があり，器肉は厚い。

整形技法は，甕・壺・甑・坏・椀形土器等の口縁部内・外面が横ナデ，胴（体）部外面はヘラ削りが多い。高坏・器台形土器は，体部内面・脚部外面にヘラ磨きがみられる。手捏土器は，胴部内・外面に輪積み痕が残り，外面凸凹であるが指ナデ，口縁部内・外面は横ナデ整形がみられる。

特筆すべき土器は，尾島貝塚第６号住居跡出土の甑形土器（第21図９）である。底部は径３cmで正円状に抜け，胴部は片側は直線的に外上方に立ち上がり，片側は中位に稜をもち，口縁部でさらに稜をもって外上方に立ち上がる。器高は6.8cm，口径13.4cmほどの小型の土器で器肉は厚い。

須恵器は，実測できたもの（祭祀跡・工房跡出土を除いて）が40点あり，器形は，坏・蓋・甕・盤・高坏・高台付盤等である。

坏は，底部は平底で，体部は直線的あるいは内彎気味に外上方へ立ち上がる。整形技法は，水挽き成形，底部は回転ヘラ切りもしくは回転糸切り後，一定あるいは不定方向へのヘラ削り，底部外周部がヘラ切りされている。

蓋は，天井部に皿・円盤・擬宝珠状　は，縄文式土吊 平坦な天頂部からゆるやかにあるいは直線的に下降し，口縁部は屈曲して開き，端部は下につまみ出されている。水挽き成形。

尾島貝塚第23号住居跡出土の高坏（第56図25）は，脚部に長方形透し３個を穿っている。

当遺跡群からの出土土器は，縄文式土器及び土師器及び土師器・須恵器である。しかし，縄文の遺構は全く確認されていない。今回の調査地区周辺に所在する遺跡からの流入としか考えられない。土師器の手捏土器が36点と多く出土していることや甑形土器（第21図９）の出土は，これらが往時の人々の日常生活に使用されたとは考えられず，祭祀との関連において生産され，使用されたものと推定されよう。

終　章　むすび

茨城県稲敷郡桜川村を横断する一般県道新川・江戸崎線の改良工事に先立ち，予定地内に所在する尾島貝塚・宮の脇遺跡・後九郎兵衛遺跡の３遺跡について発掘調査を実施した。調査の結果，古墳時代の遺構・遺物を確認することができた。

遺構は，竪穴住居跡55軒，掘立柱建築跡１棟，掘立（総）柱建築跡５棟，方形周溝状遺構３基，祭祀跡１地区，屋外工房跡１か所，土坑54基が検出された。

遺物は，古墳時代後期(鬼高式期)に比定される土器（甕・壺・坏・高坏形土器）を中心に，古墳時代前期(五領式期)・中期(和泉式期)の土器や石製の剣・鏡形模造品，双孔円板，土製の鍬先・鏡形模造品等が出土している。ことに，球状土錘・双孔円板・手捏土器が多量に出土していることや，特殊器形の甑などが出土していることは，当遺跡の性格を如実に示している。

３遺跡から検出された遺構・遺物を概観すると，霞ヶ浦の南東岸に浮かぶ（現在は陸続き）桜川村浮島の東端の砂洲上に掘立柱建築跡が１棟，　その周辺から祭祀遺物（手捏土器・聰・土製及び石製の剣・鏡形模造品・土製の鍬先形模造品）が投棄されたと推定される場所や屋外工房跡（双孔円板や未成品が多量に出土）と推察される場所が検出されている。これらの遺構・遺物に隣接・重複して竪穴住居跡が検出され，そのまま西へと延びている。中国の古書「周礼」に「前宮後市」即ち，前面に祭祀の場所があって，その後方に市，あるいは人々の住まいがあるという字句が記載されている由であるが，このことばが当遺跡にぴったりと当てはまるように思われる。さらに，これらに接して南側に尾島神社が鎮座していること，「常陸国風土記」の「九つの社あり。言も行も謹み諱めり」を併せて考えるとき，榎の浦水系の河口に位置した孤島を意識した地域の平安であろうか，当遺跡周辺に住む人々の五穀豊饒であろうか，当地において大がかりな祭祀を営んでいたと考えられる。

目を西に転ずると，掘立（総）柱建物跡が林立している。倉庫群であろうか。それとも祭祀と関連をもつ建物群であろうか。今回の調査によって解明することはできなかった。

尾島貝塚外２遺跡は，四面を霞ヶ浦に囲まれ，当時の人々が生活していく上で，湖の幸に恵まれ，極めて良好な環境であったと思われる。

尾島貝塚外２遺跡の調査成果が桜川村の歴史を解明する上でささやかな一助となれば幸である。

最後に，調査及び本報告書作成にあたり，御指導，御協力を賜りました関係各位に対し，心から感謝の意を表するものである。

写　真　図　版

尾　島　貝　塚

宮　の　脇　遺　跡

後九郎兵衛遺跡

上空からみた尾島貝塚外２遺跡周辺と霞ヶ浦

調査全景

第1号住居跡遺物出土状況

第1号住居跡

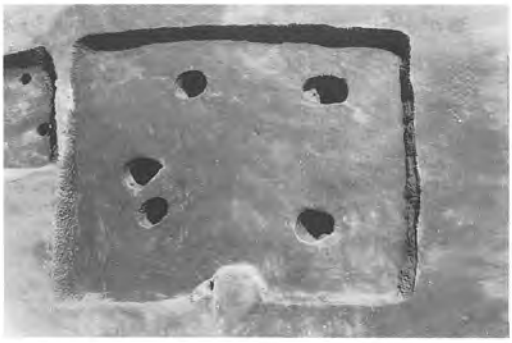
第2号住居跡遺物出土状況

第2号住居跡

第３号住居跡遺物出土状況

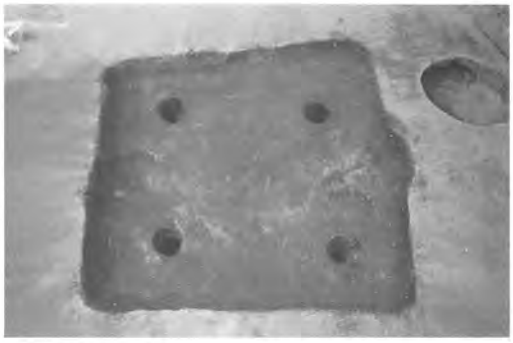
第３号住居跡

第４号住居跡遺物出土状況



第４号住居跡

第５号住居跡



第６号住居跡

第７号住居跡遺物出土状況

第７号住居跡

第8号住居跡遺物出土状況

第8号住居跡

第10号住居跡

第10号住居跡カマド

第11号住居跡

第12号住居跡

第13号住居跡遺物出土状況

第13号住居跡

第14号住居跡

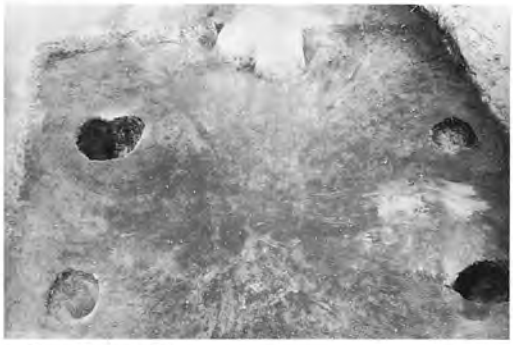
第15号住居跡

第18号住居跡

第19号住居跡

第19号住居跡カマド

第20号住居跡遺物出土状況



第21号住居跡

第22号住居跡

第23号住居跡遺物出土状況

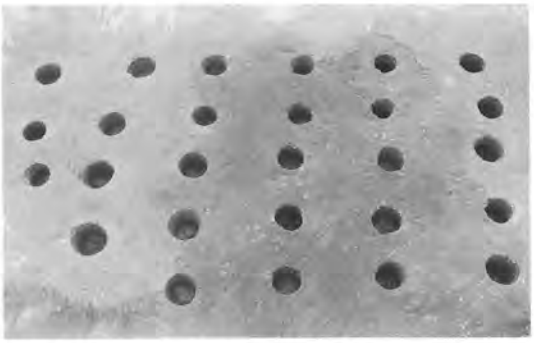
第23号住居跡

第24・26号住居跡

第25号住居跡遺物出土状況

第25号住居跡

第27号住居跡



第１号掘立柱建築跡

第１号土坑

第２号土坑

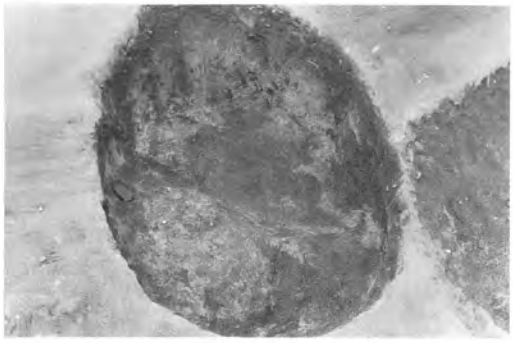
第４号土坑

第５号土坑

第７号土坑

第８号土坑

第９号土坑



第10号土坑

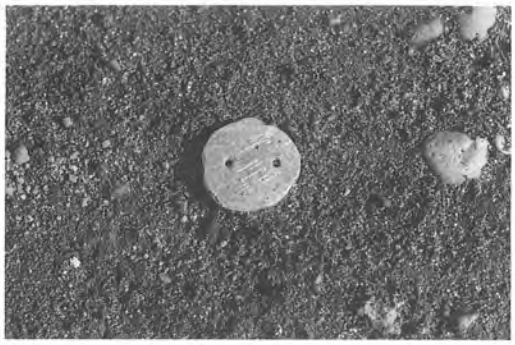
第11号土坑

第12号土坑

第13号土坑

第14号土坑

第15号土坑



H14b$_4$区－5遺物出土状況

H14c$_0$区－11遺物出土状況

H15e$_5$区遺物出土状況

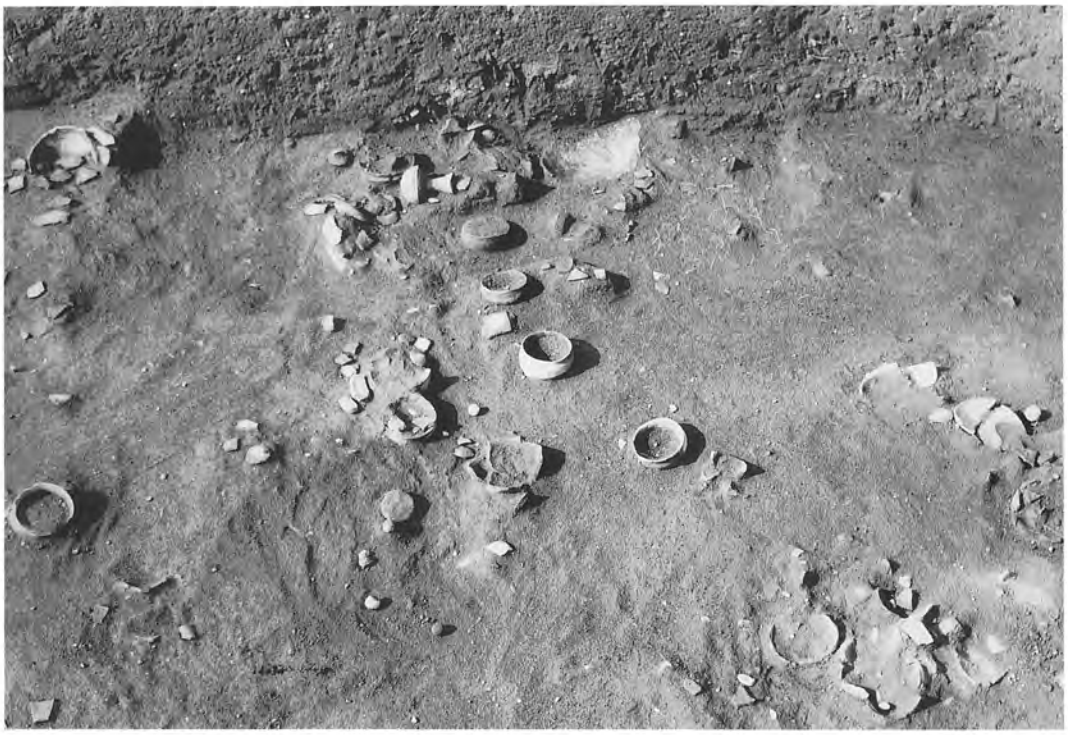
H15e$_5$区遺物出土状況

H15e5 区遺物出土状況

H15e5 区－15遺物出土状況

H15e7 区－12遺物出土状況

H15e7 区－16遺物出土状況



H15e8・9 区遺物出土状況

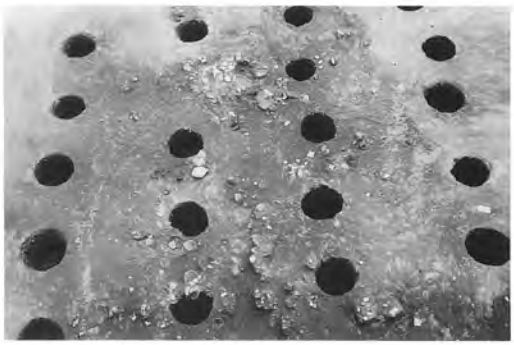
H15e9 区－5 遺物出土状況

H15e9 区－5 遺物出土状況

H15f5 区遺物出土状況

H15f6 区遺物出土状況

H15g9 区－7 遺物出土状況



H16h1 区遺物出土状況

H16h1 遺物出土状況

H16h1 区遺物出土状況

H16h1 区－11遺物出土状況

H16i3 区遺物出土状況

H16i3 区遺物出土状況

H16i3 区遺物出土状況

H16i3 区遺物出土状況

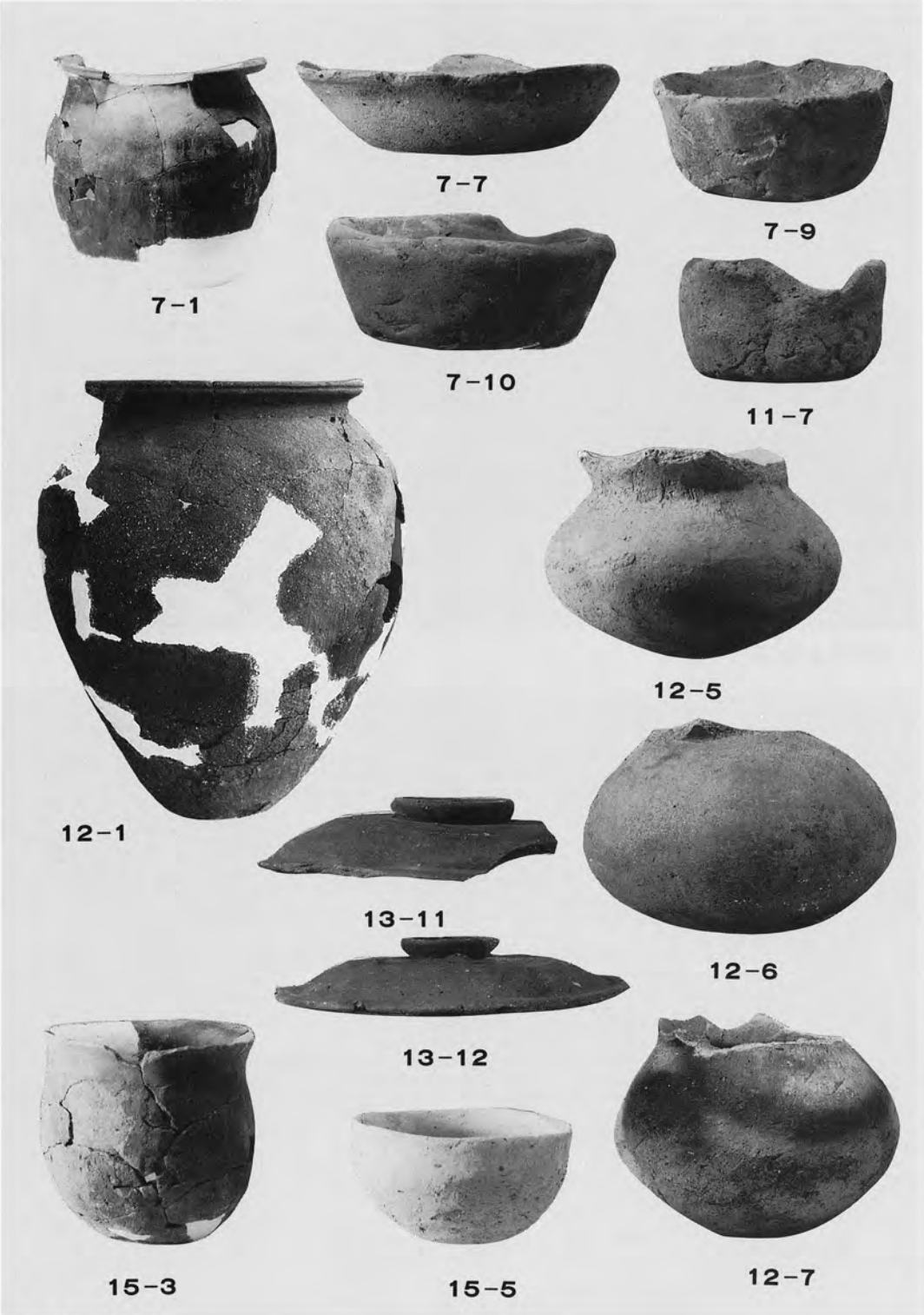
H16j3 区遺物出土状況

工房跡遺物出土状況

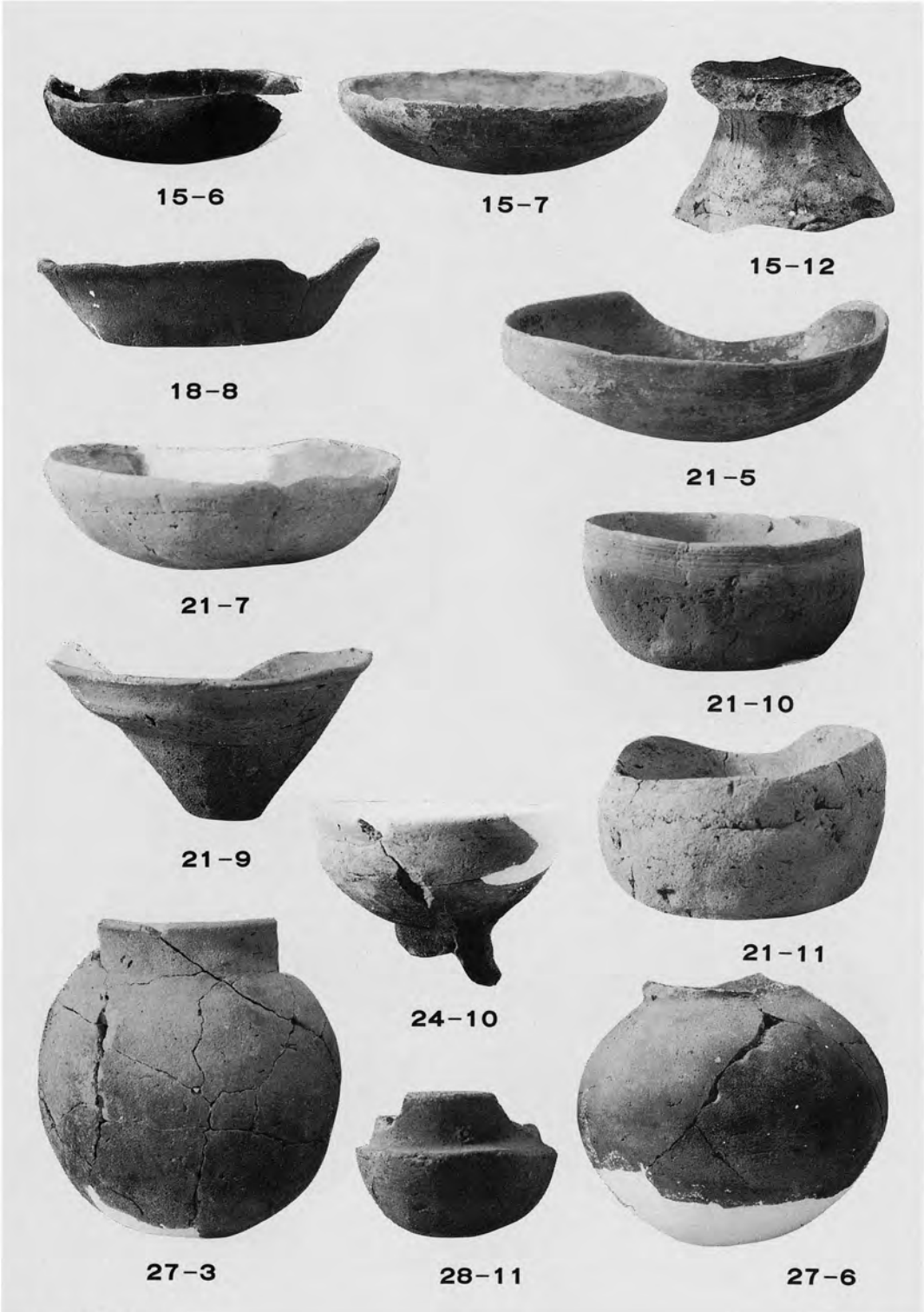
工房跡遺物出土状況

調査後全景(東)

調査後全景(西)



住居跡出土土器



住居跡出土土器

33-7

27-14

27-13

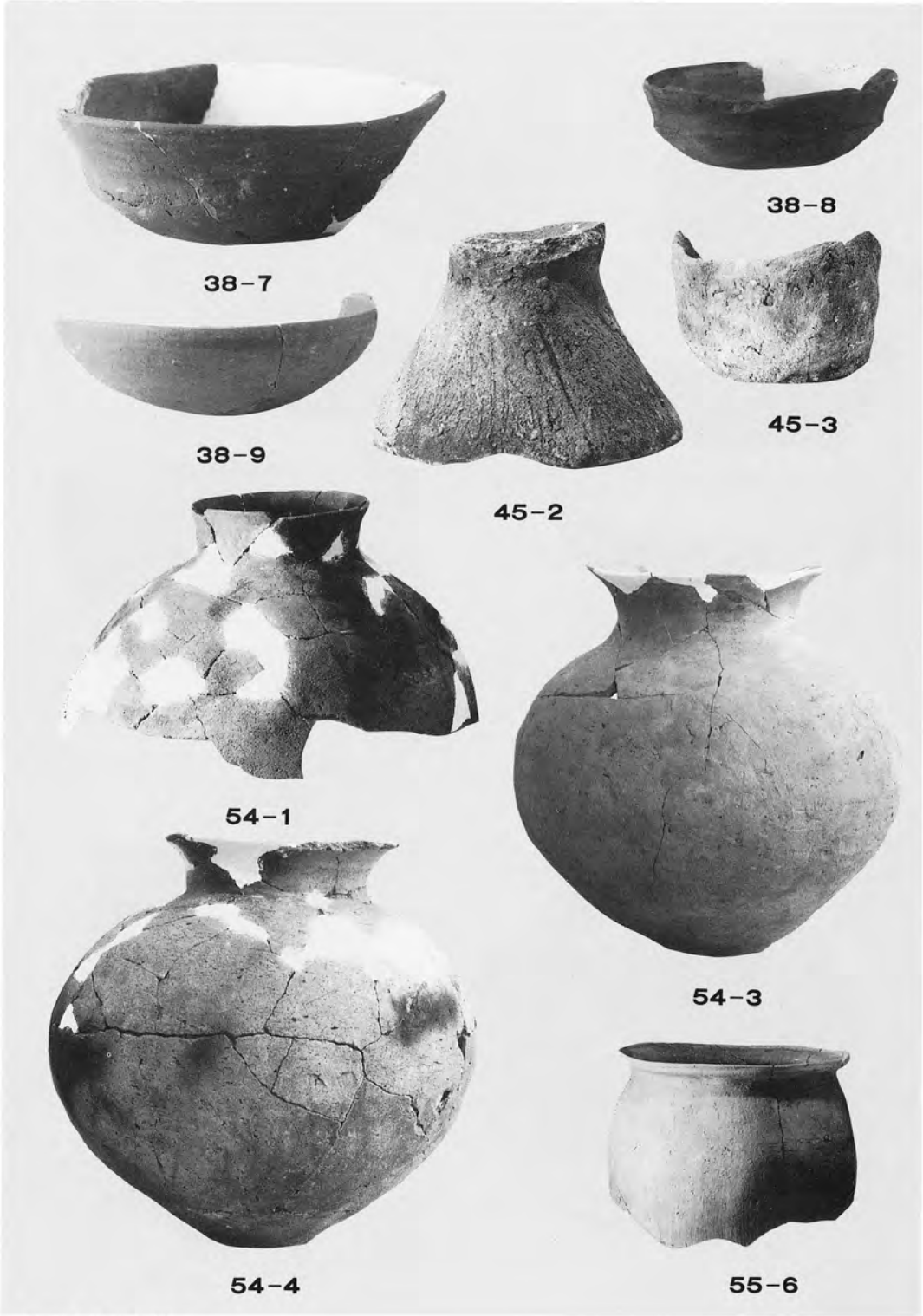
37-2

37-3

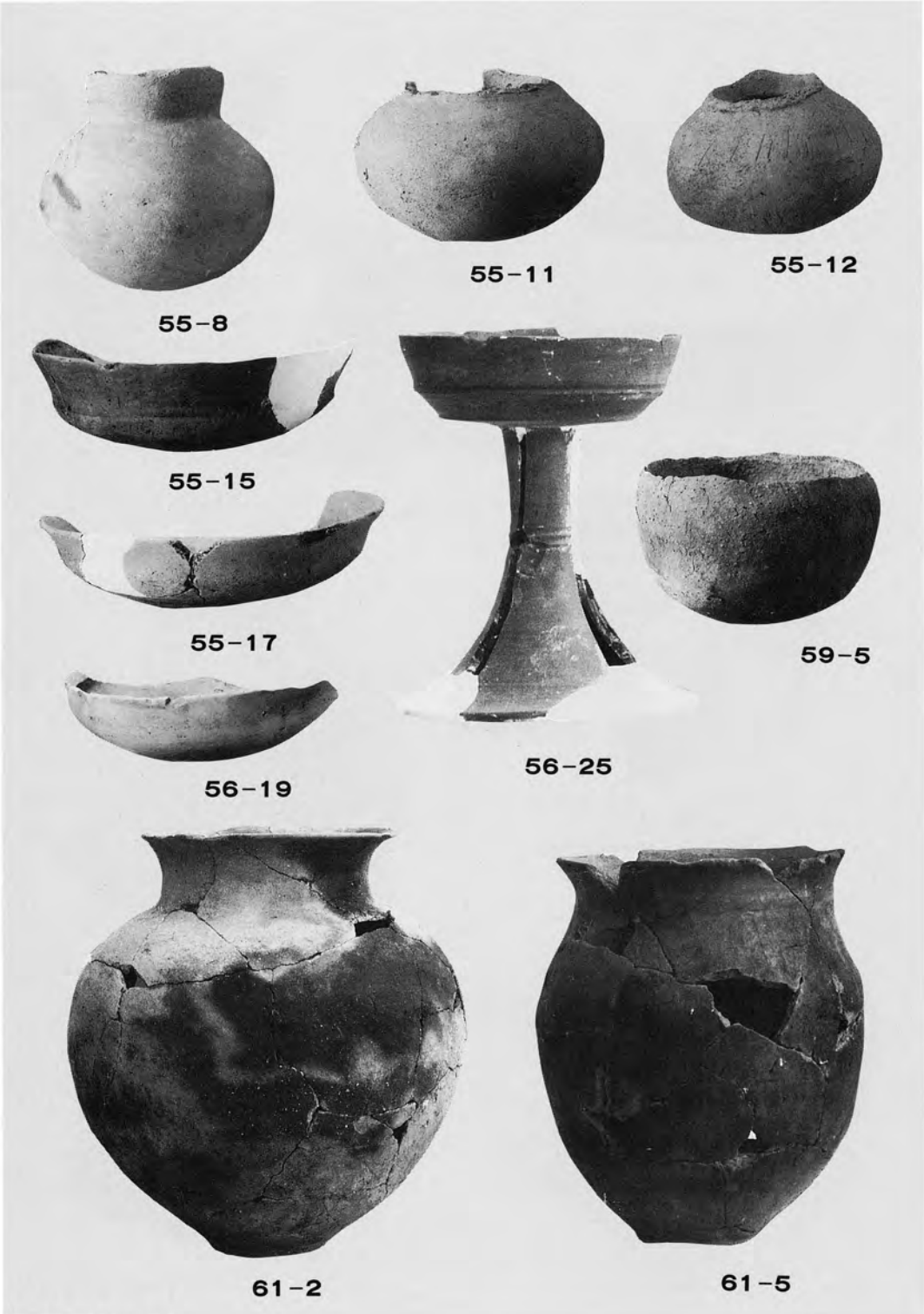
37-4

37-5

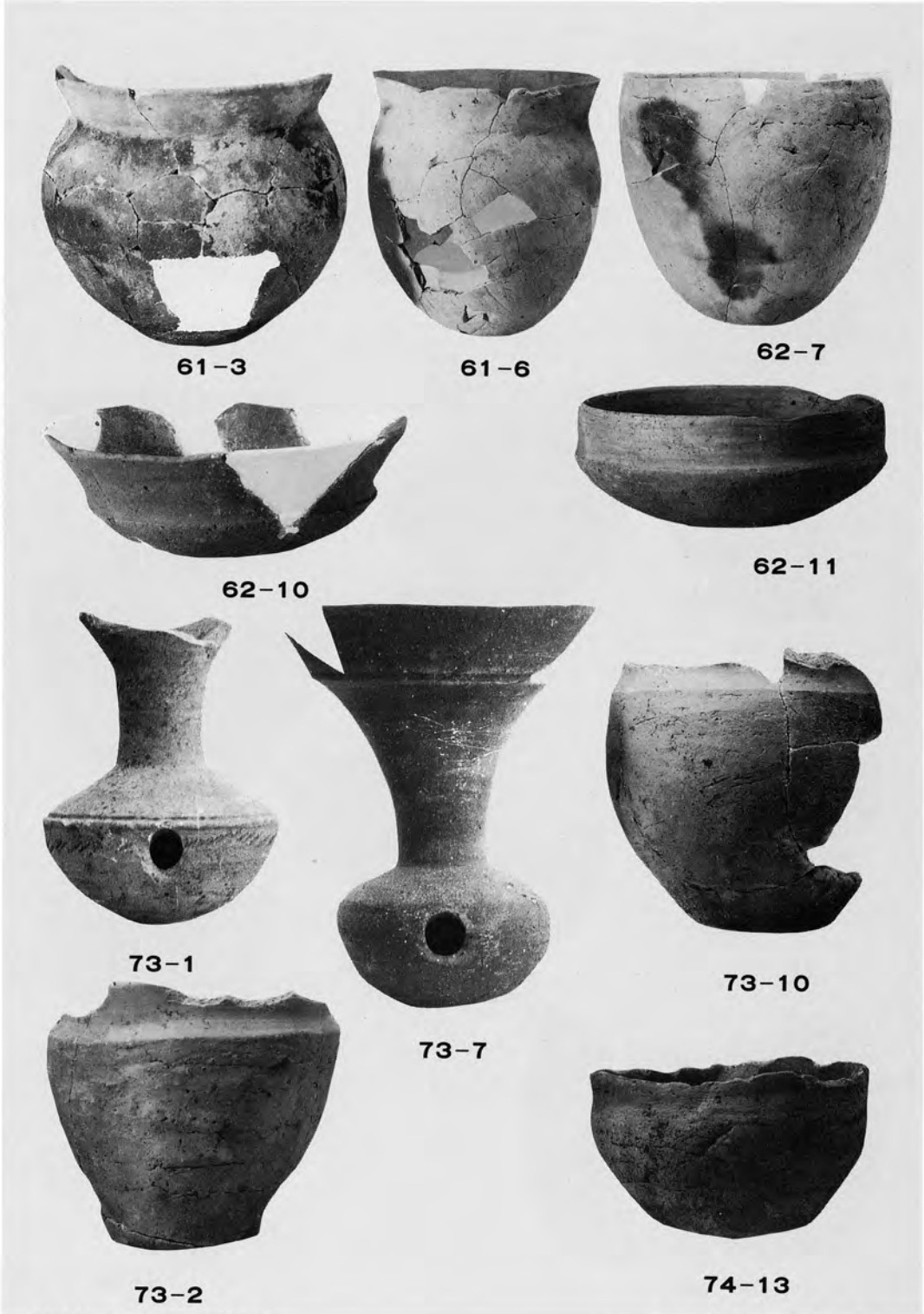
住居跡出土土器



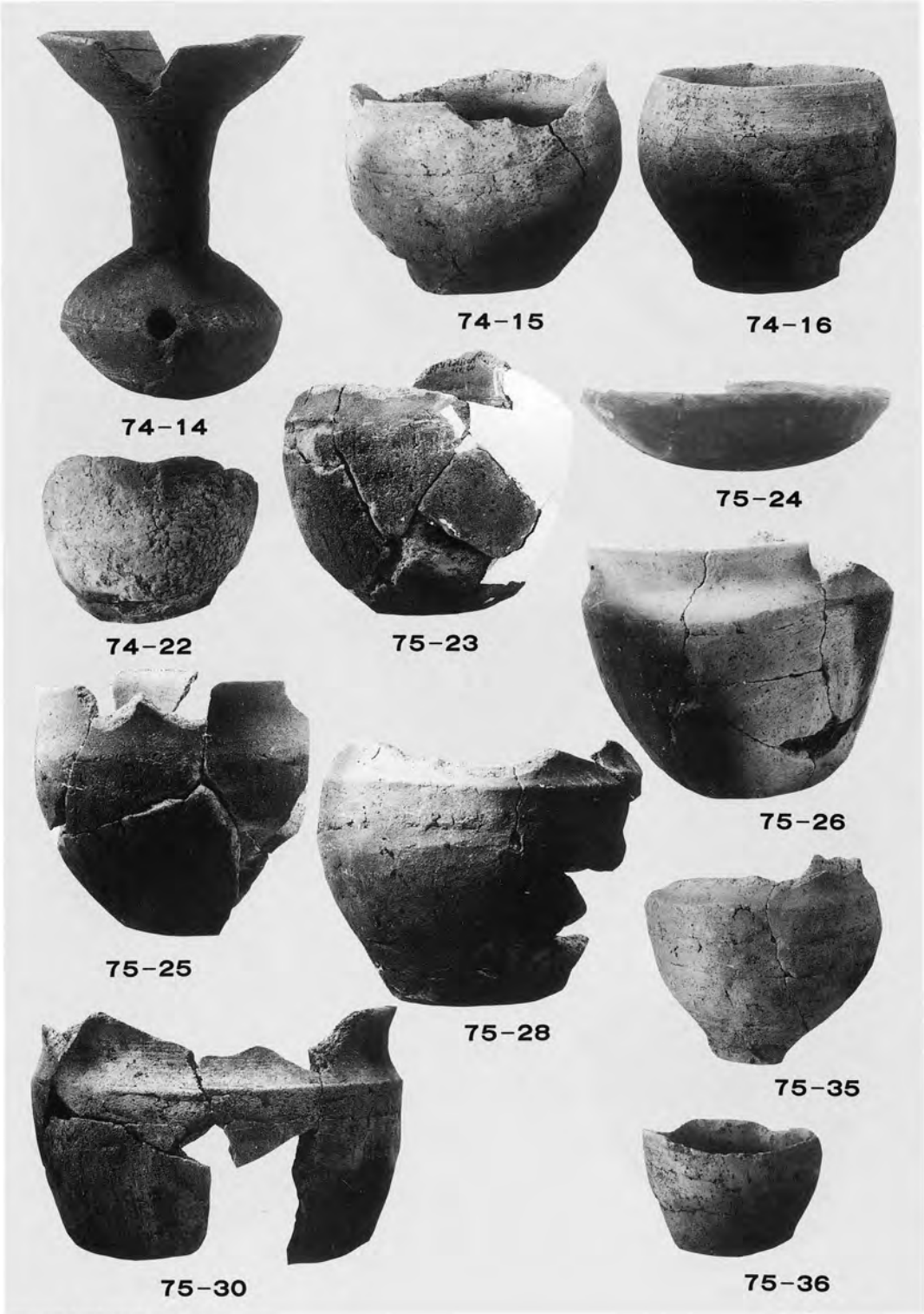
住居跡出土土器



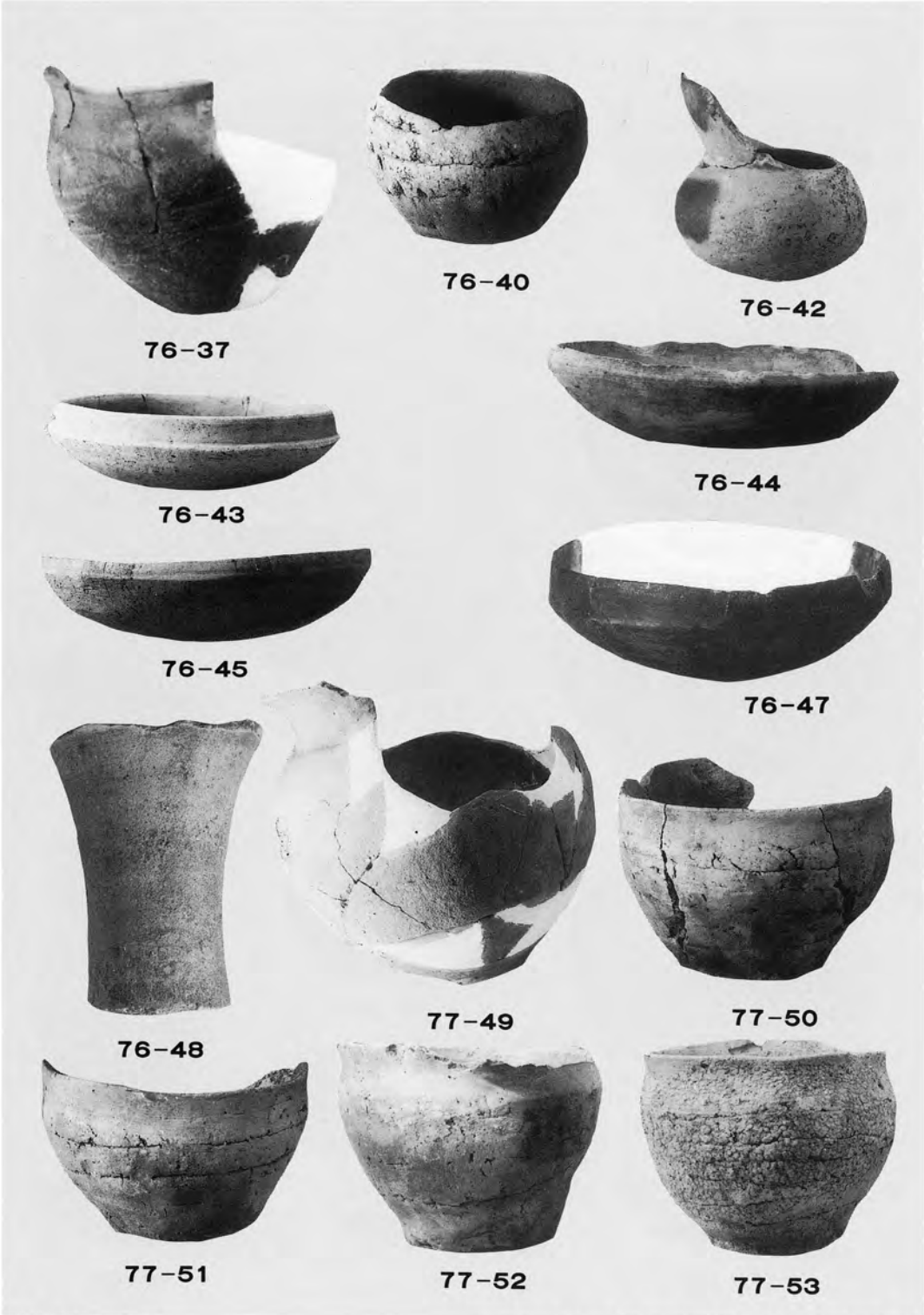
住居跡出土土器



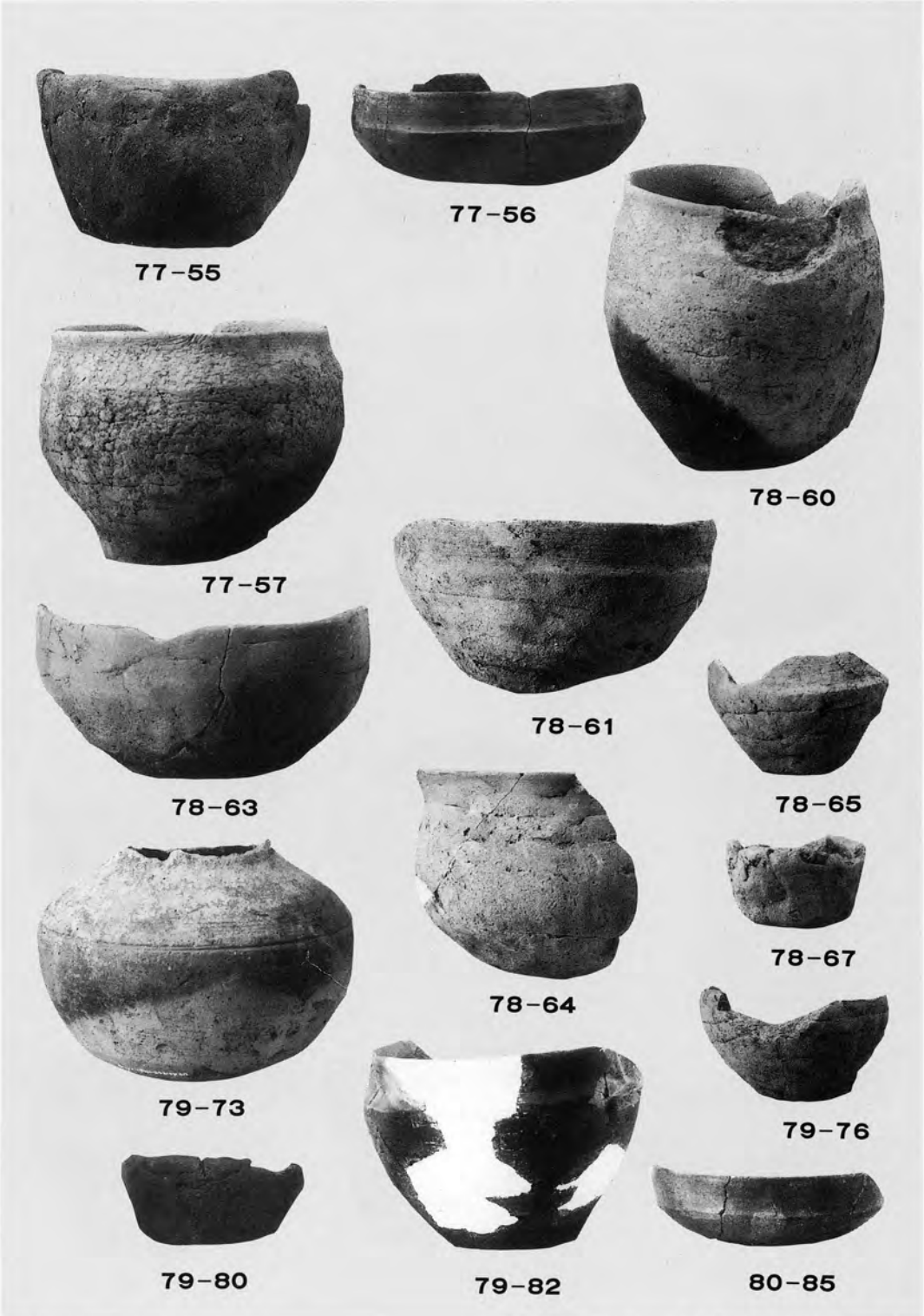
住居跡，祭祀跡出土土器　　S＝1/3　73－1・2・7　74－13



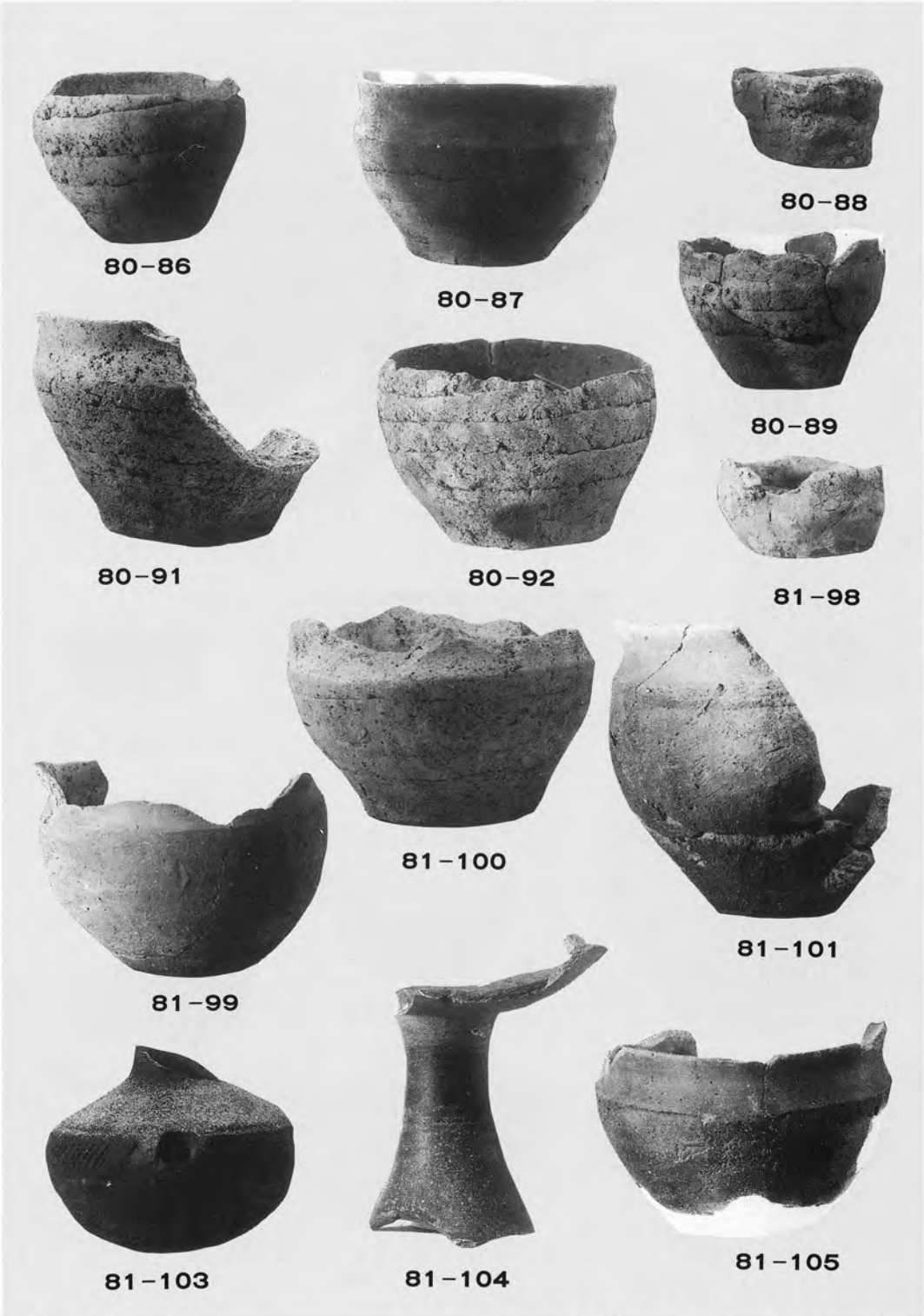
祭祀跡出土土器



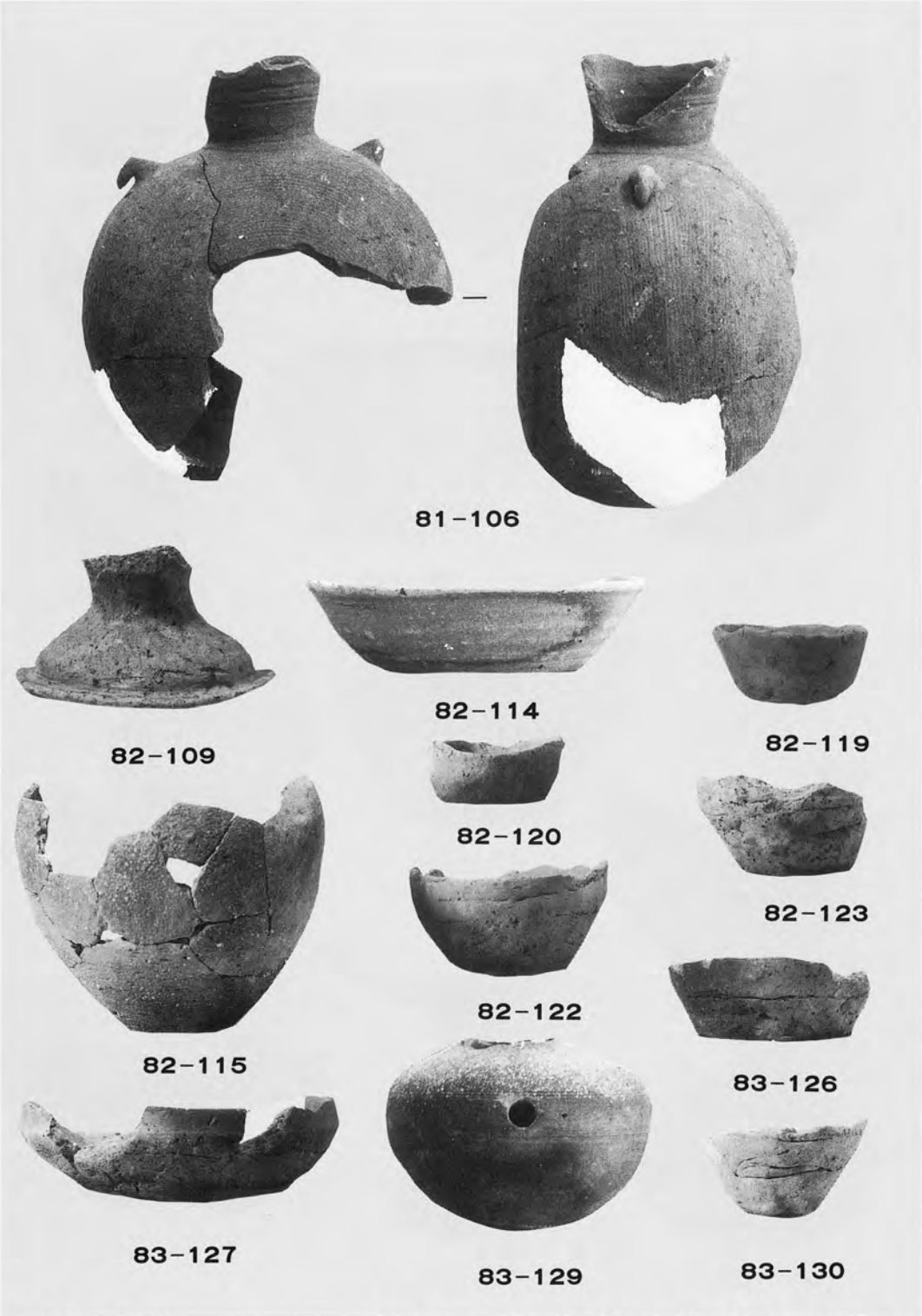
祭祀跡出土土器　S＝1/3　76・40・42・43・44・77－50・51・52・53



祭祀跡出土土器　　S＝1/3　77－56・57・78－60・67・79－73・82

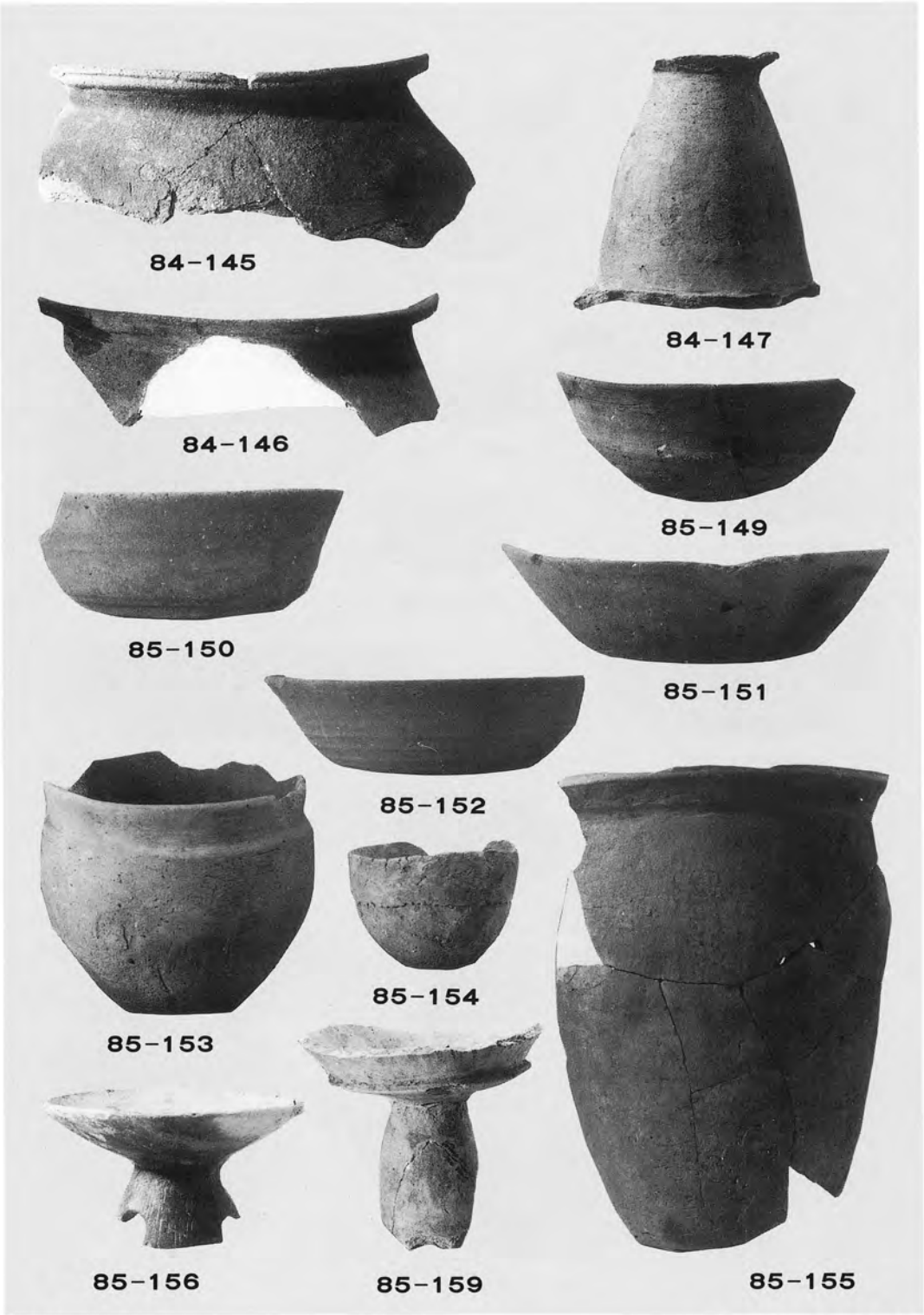


祭祀跡出土土器　S＝1/3　80・86・87・88・89・92　81－98

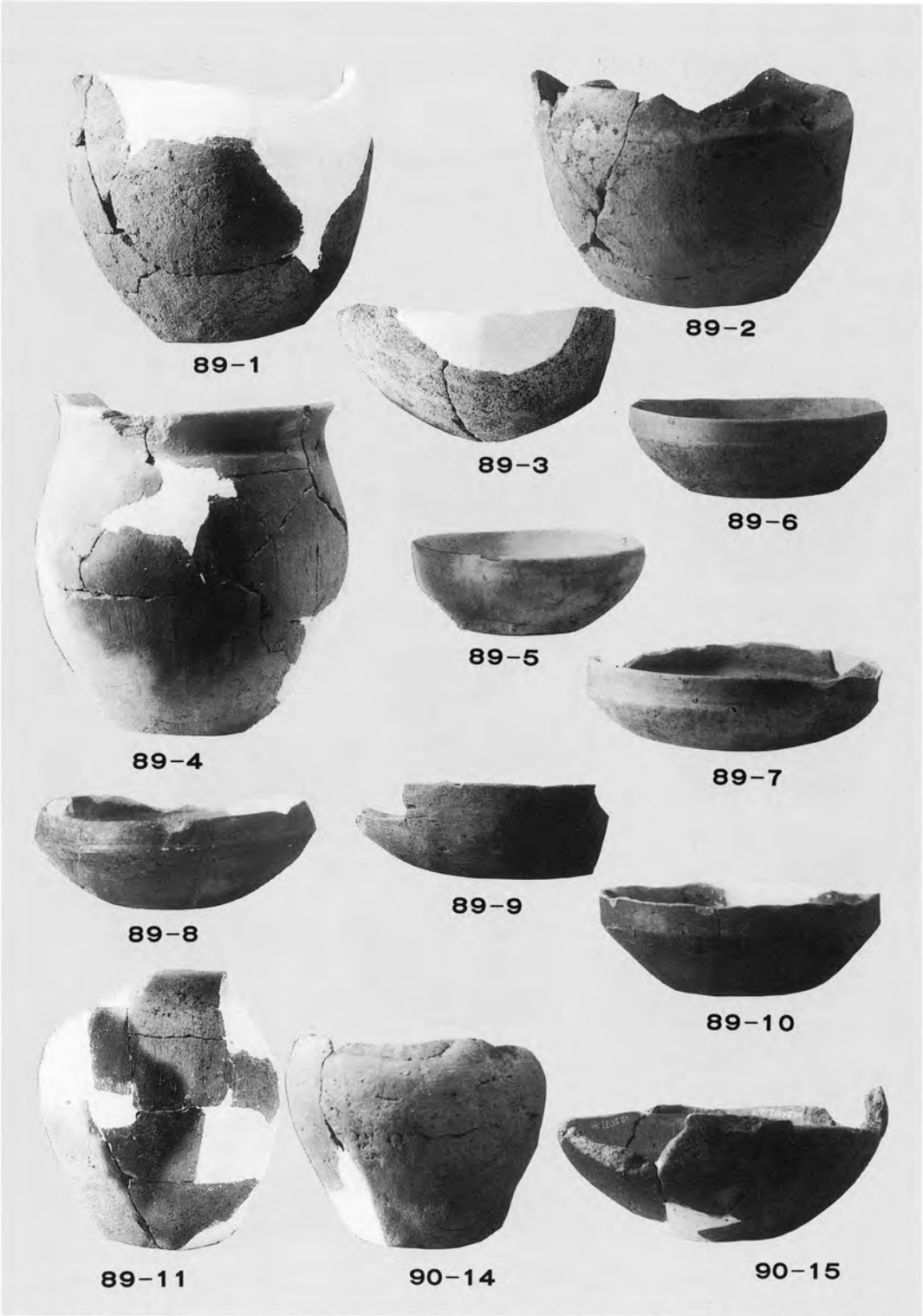


祭祀跡出土土器　S＝1/3　81－106・82－109・114・120・122・120・122・83－129

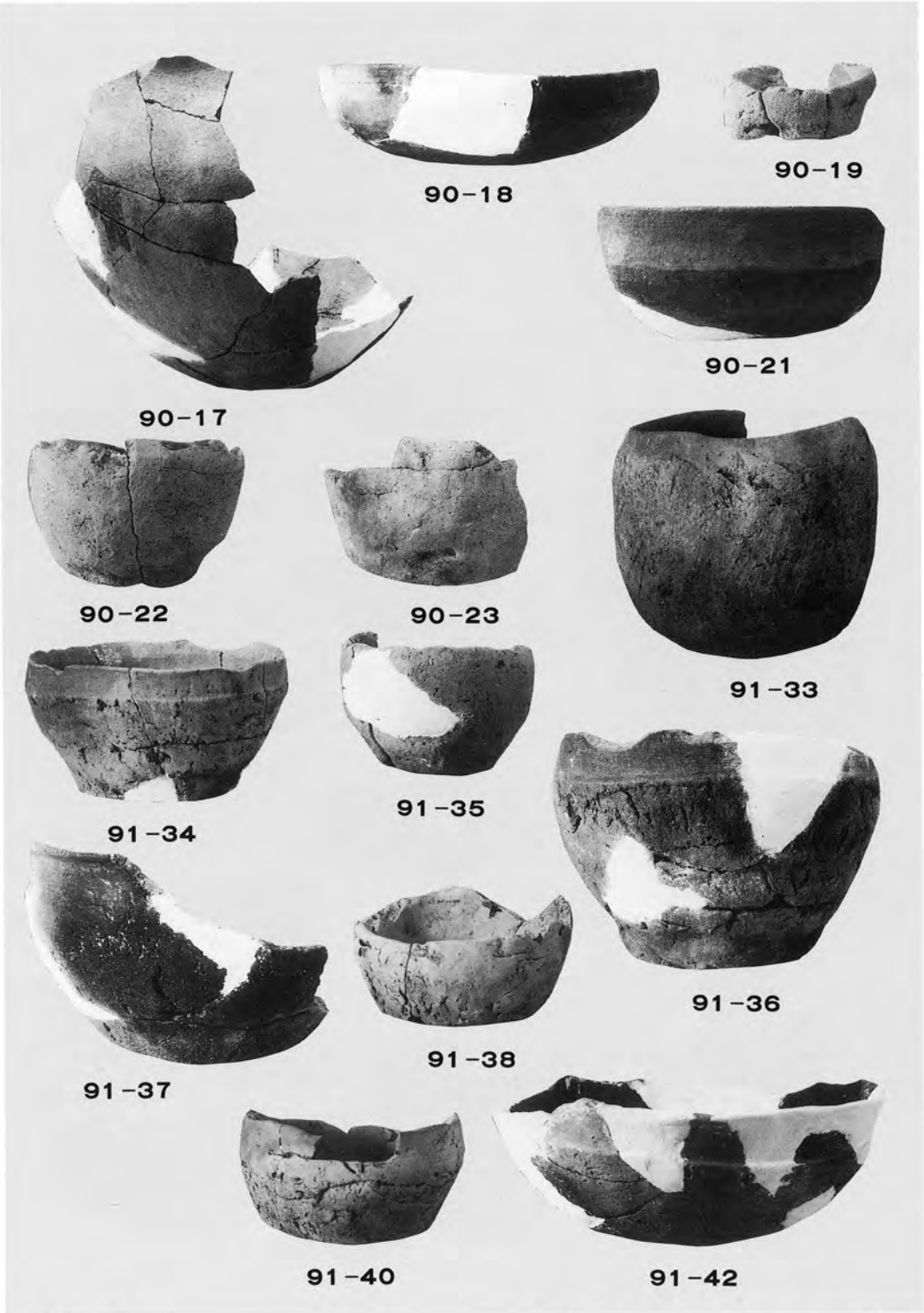
祭祀跡出土土器　S＝1/3　83－131・132・133・135・136・136・84－139・140・143



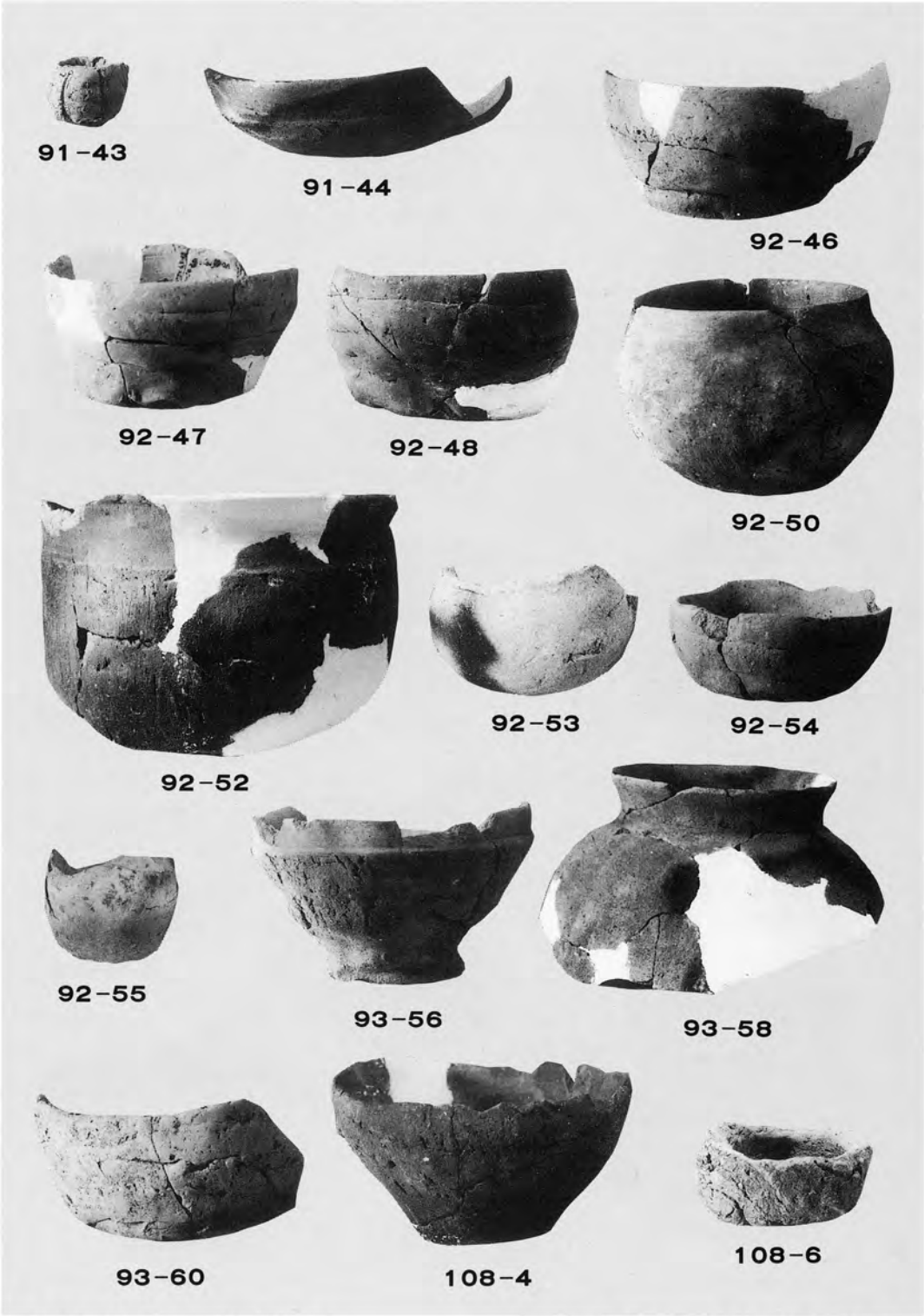
祭祀跡出土土器　　S＝1/3　85－153・154



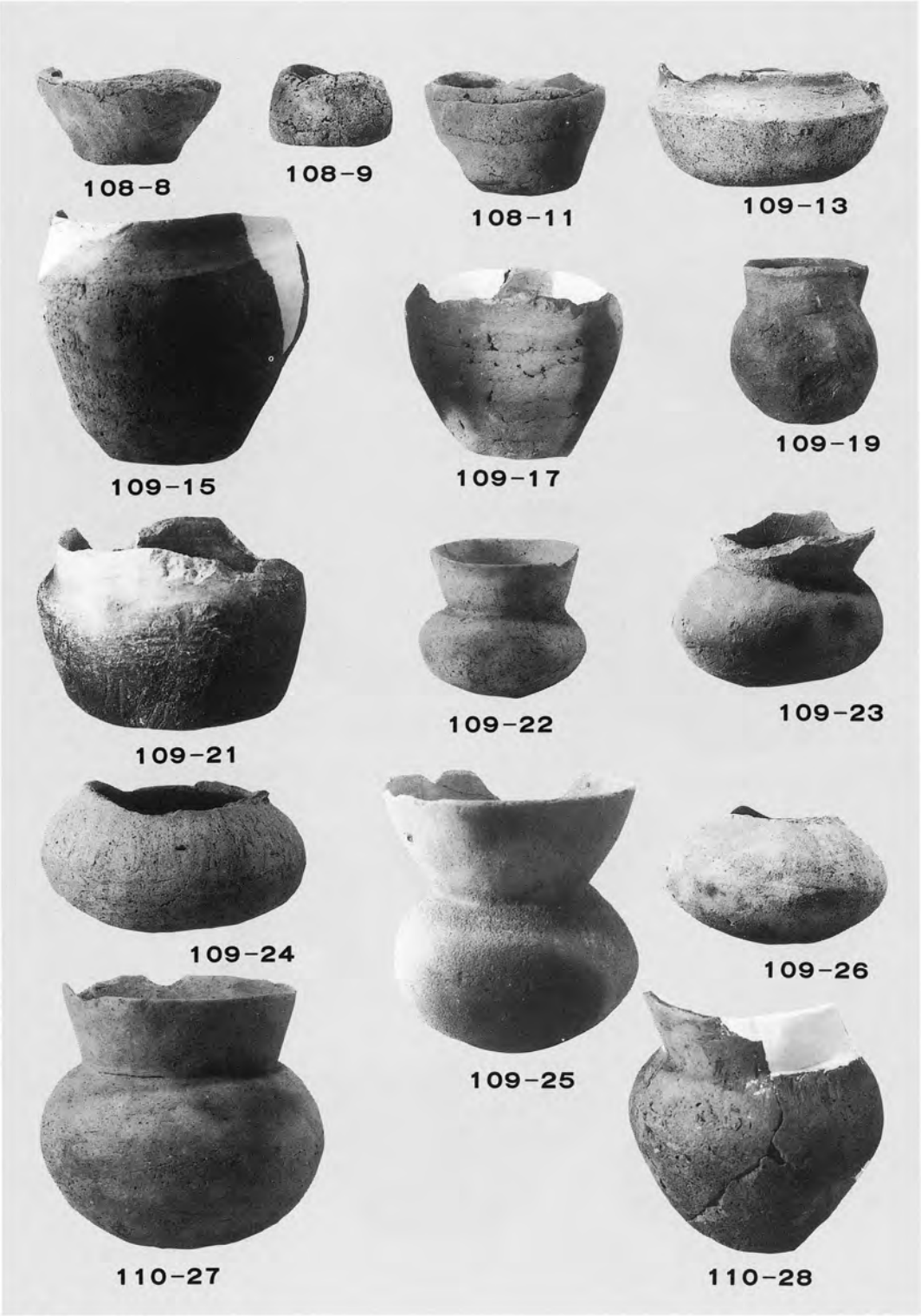
祭祀跡出土土器 S＝1/3 89－2・5・6・7・8・10



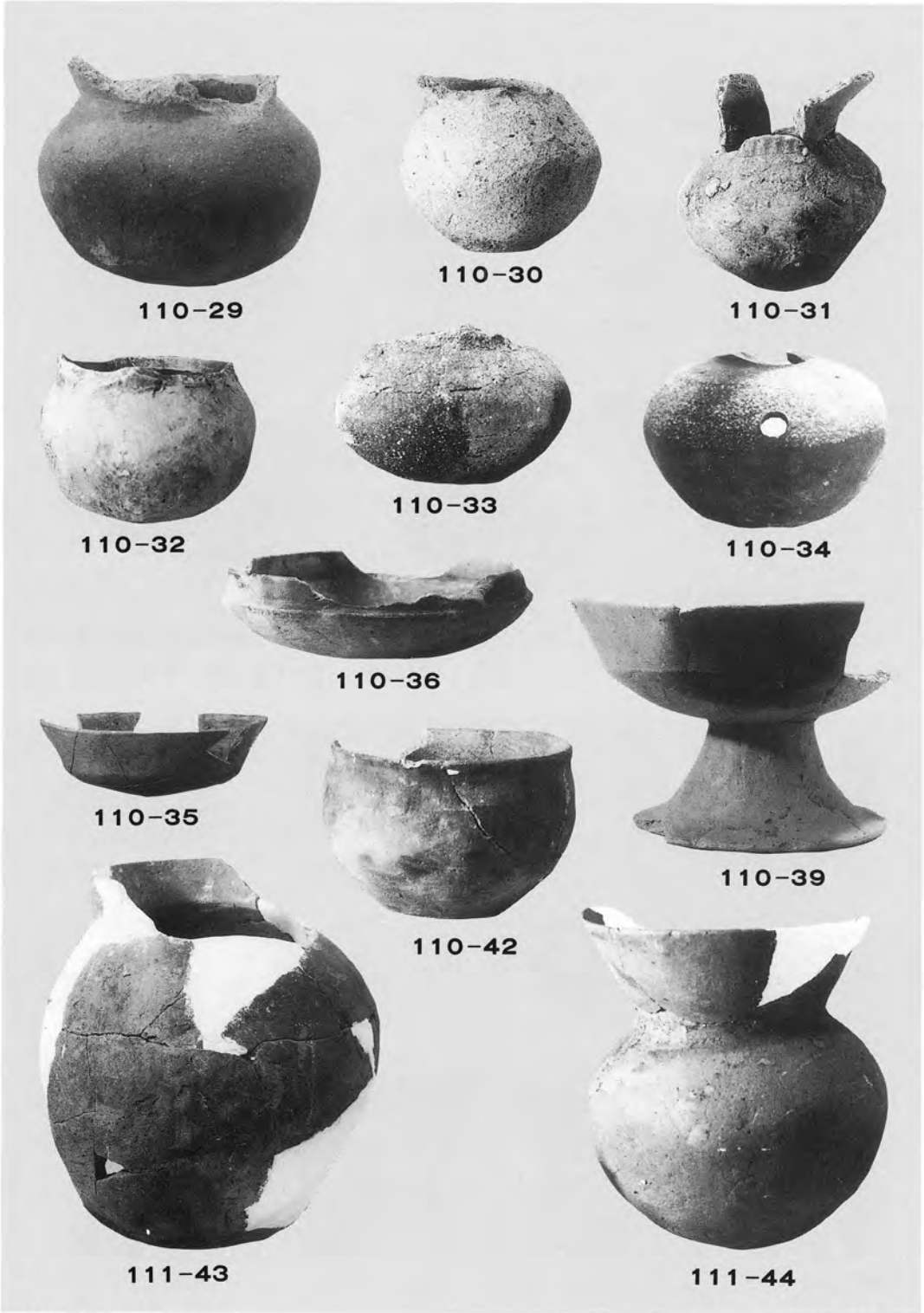
祭祀跡出土土器　　S＝1/3　90－19，91－33・34・35・38・40・42



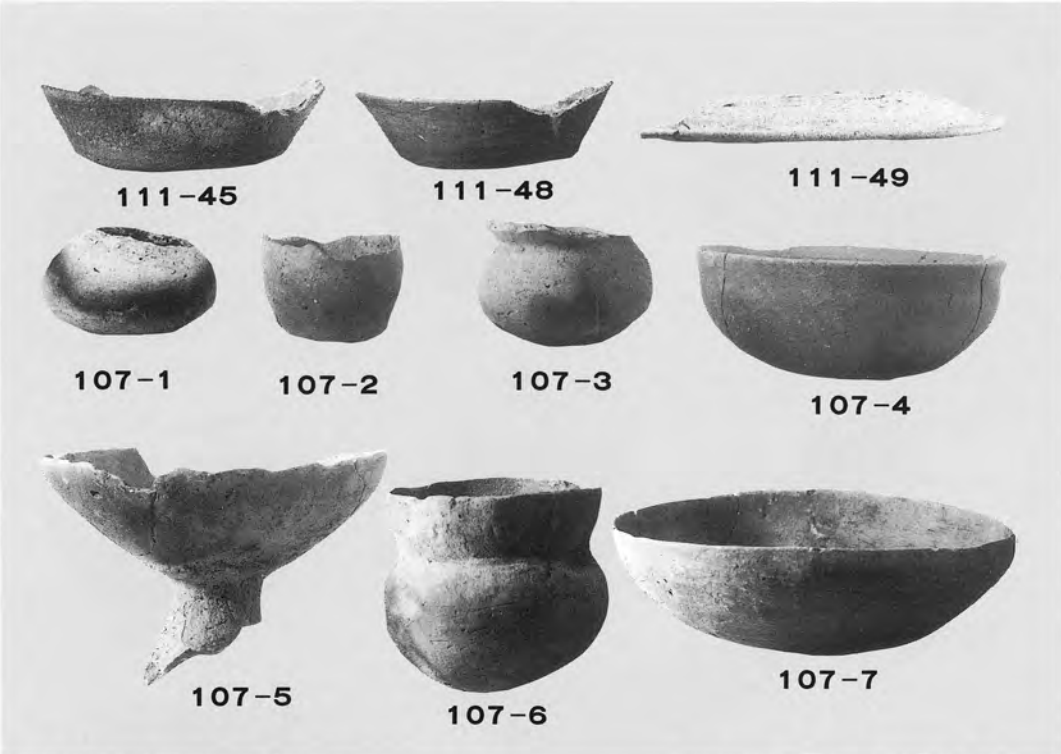
祭祀跡，H14区，H15区出土土器　S＝1/3　91－43・92－46・47・50・54・55・56



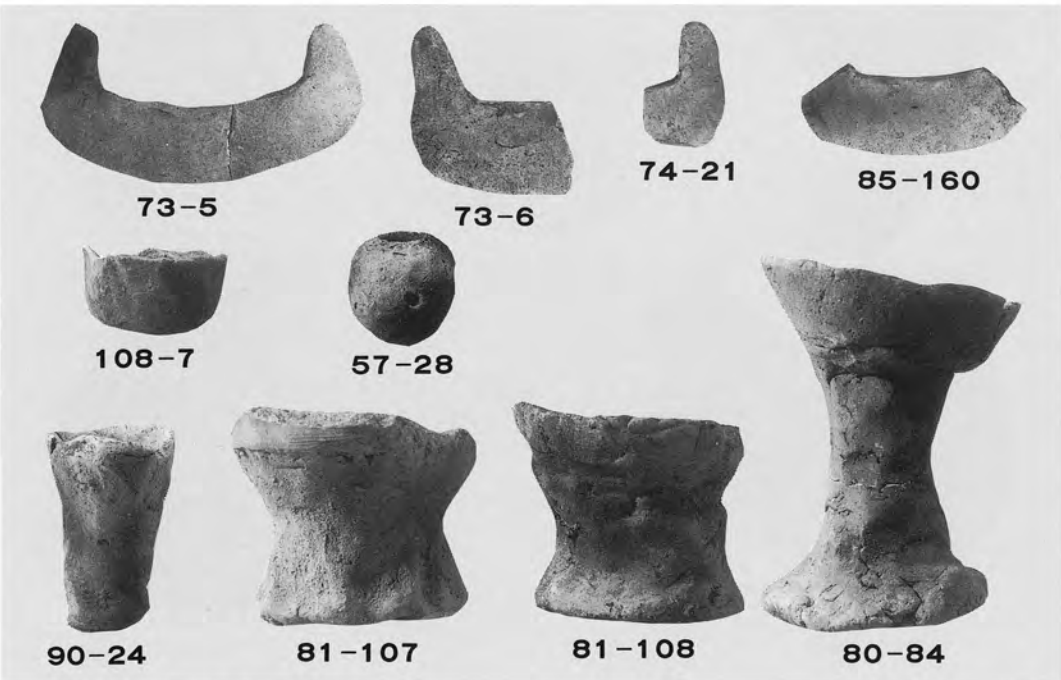
H14区，H15区出土土器　　S＝1/3　109－17



H14区，H15区出土土器　　S＝1/3　110－36



H14，H15区，工房跡出土土器　　S＝1/3　107－1・2・3・4・6・7

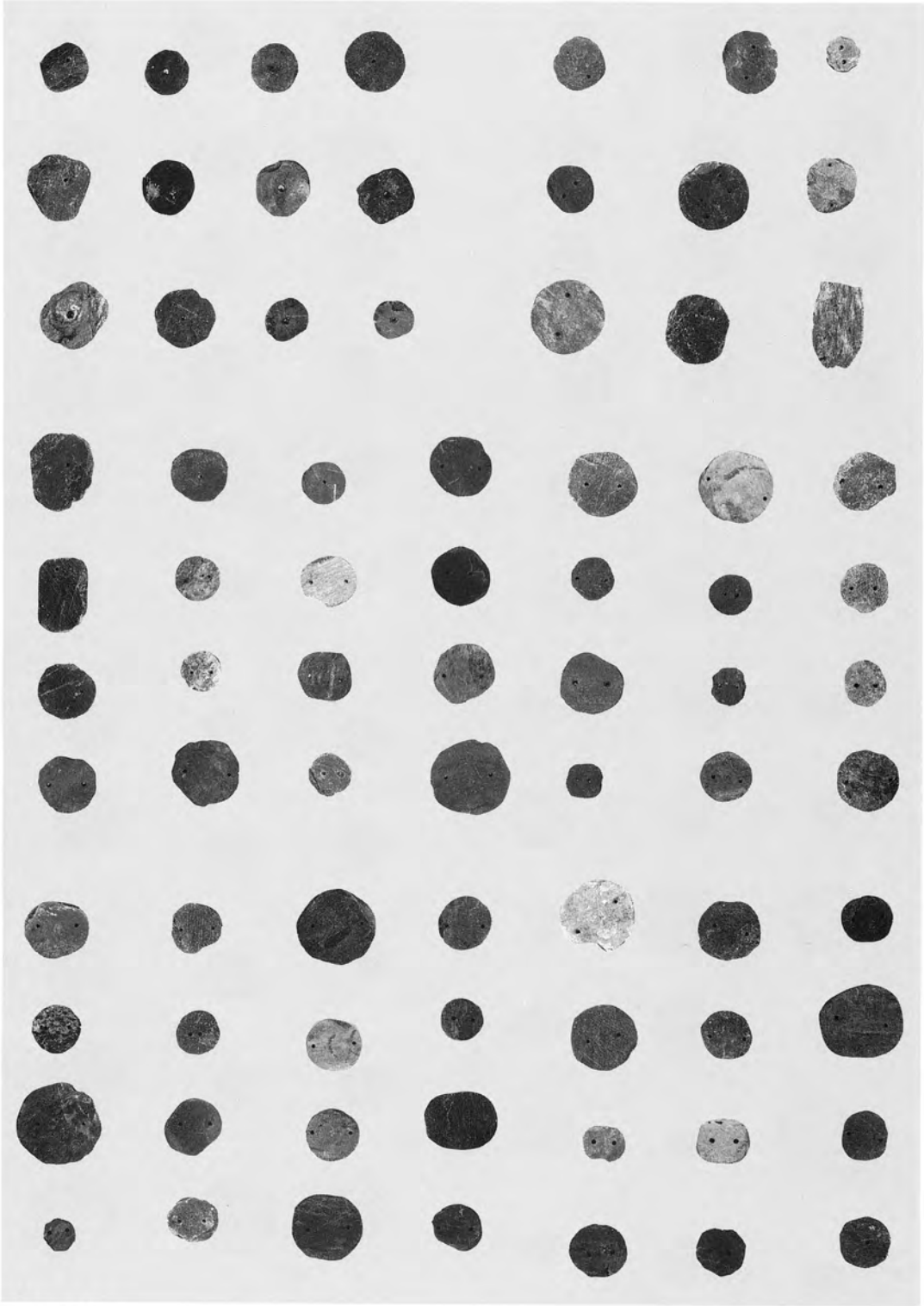


土製鍬先形模造品・外土製品

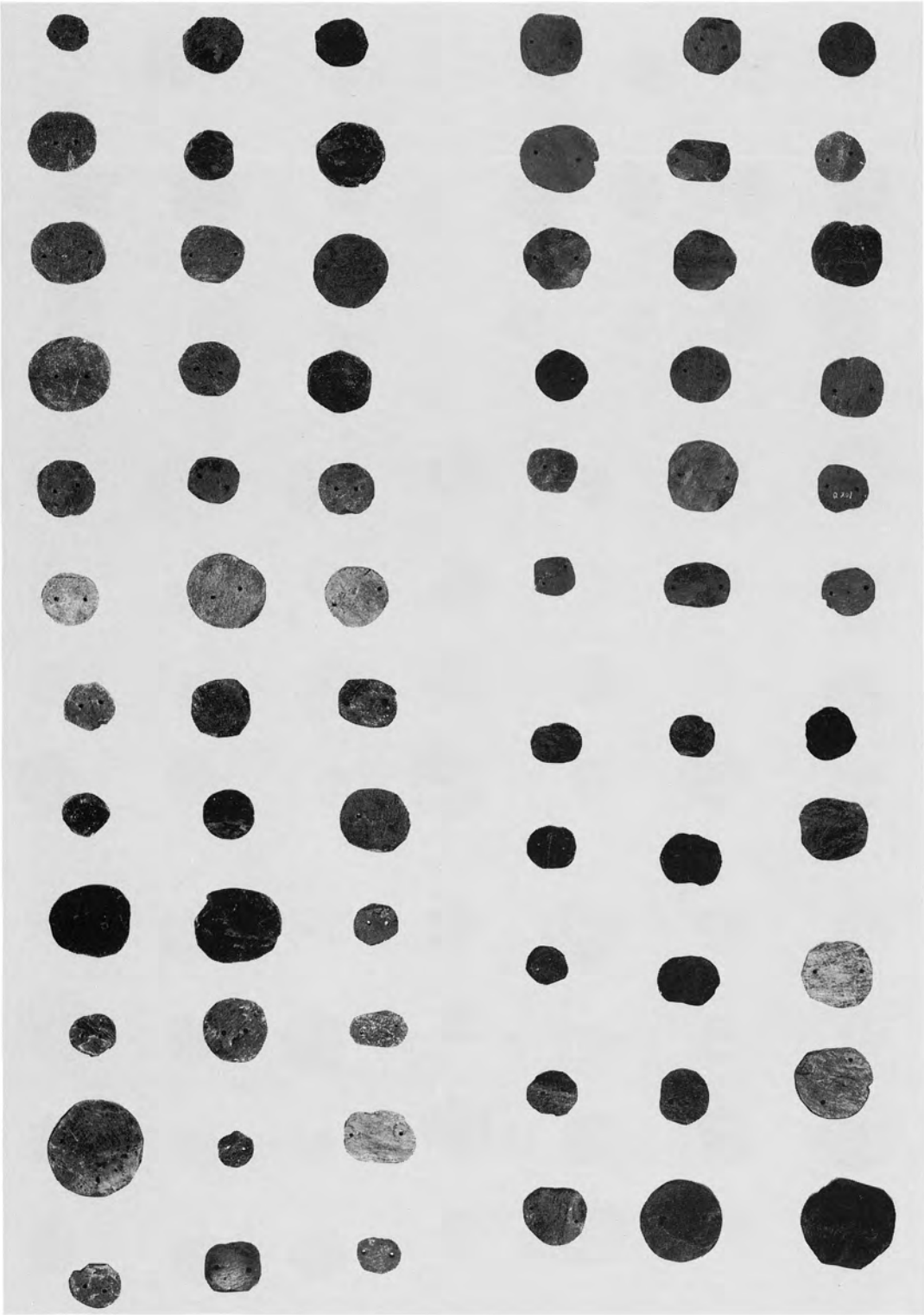
土製勾玉・土製品・土製鏡形模造品

S＝1/3

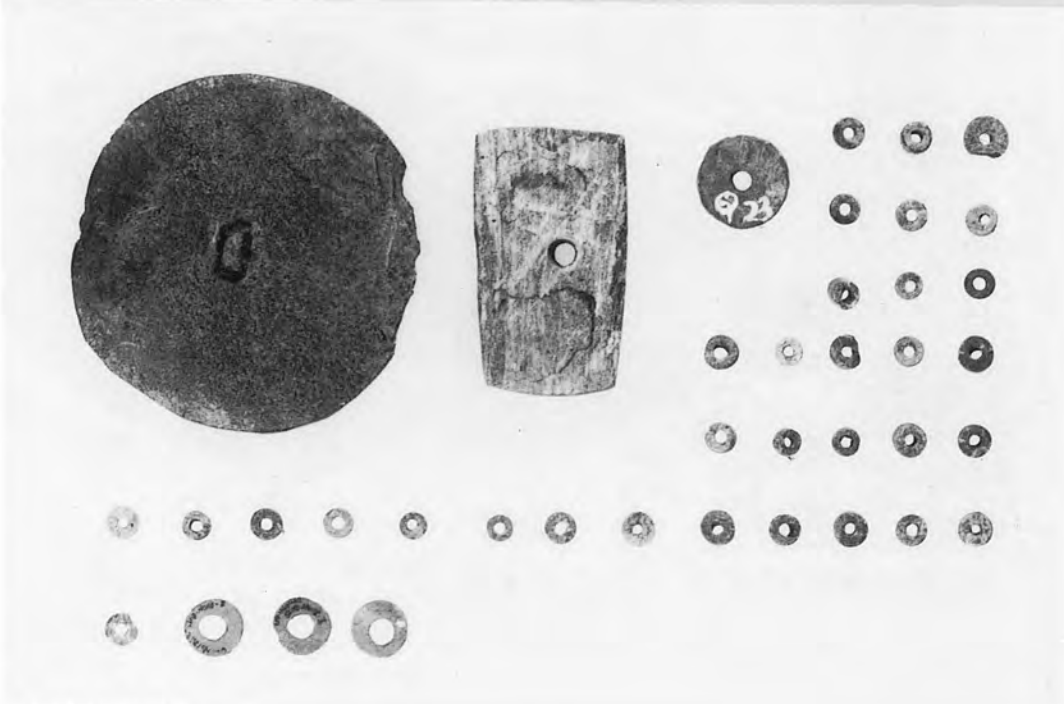
石製剣形模造品　　Ｓ＝1/3



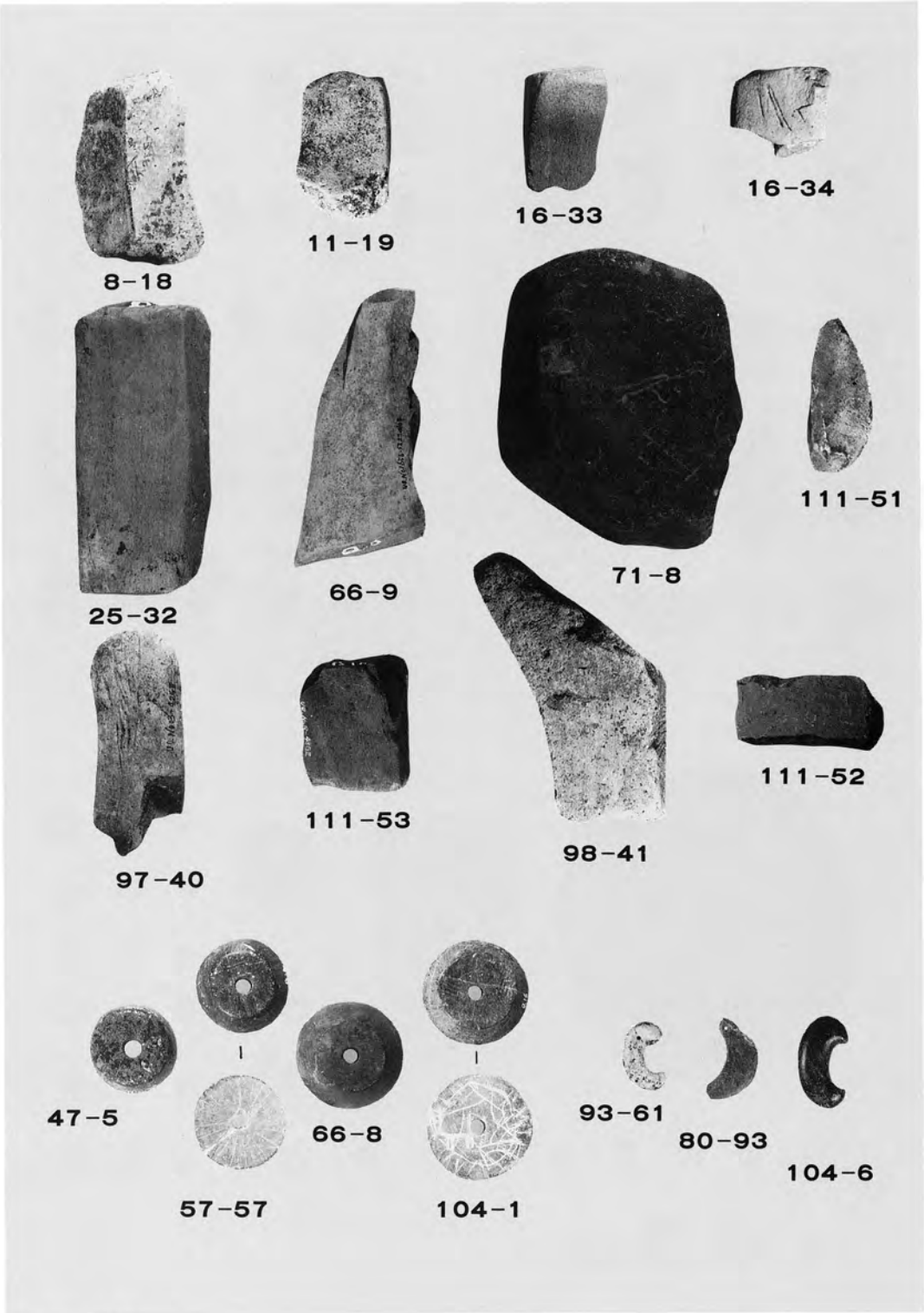
有孔円板



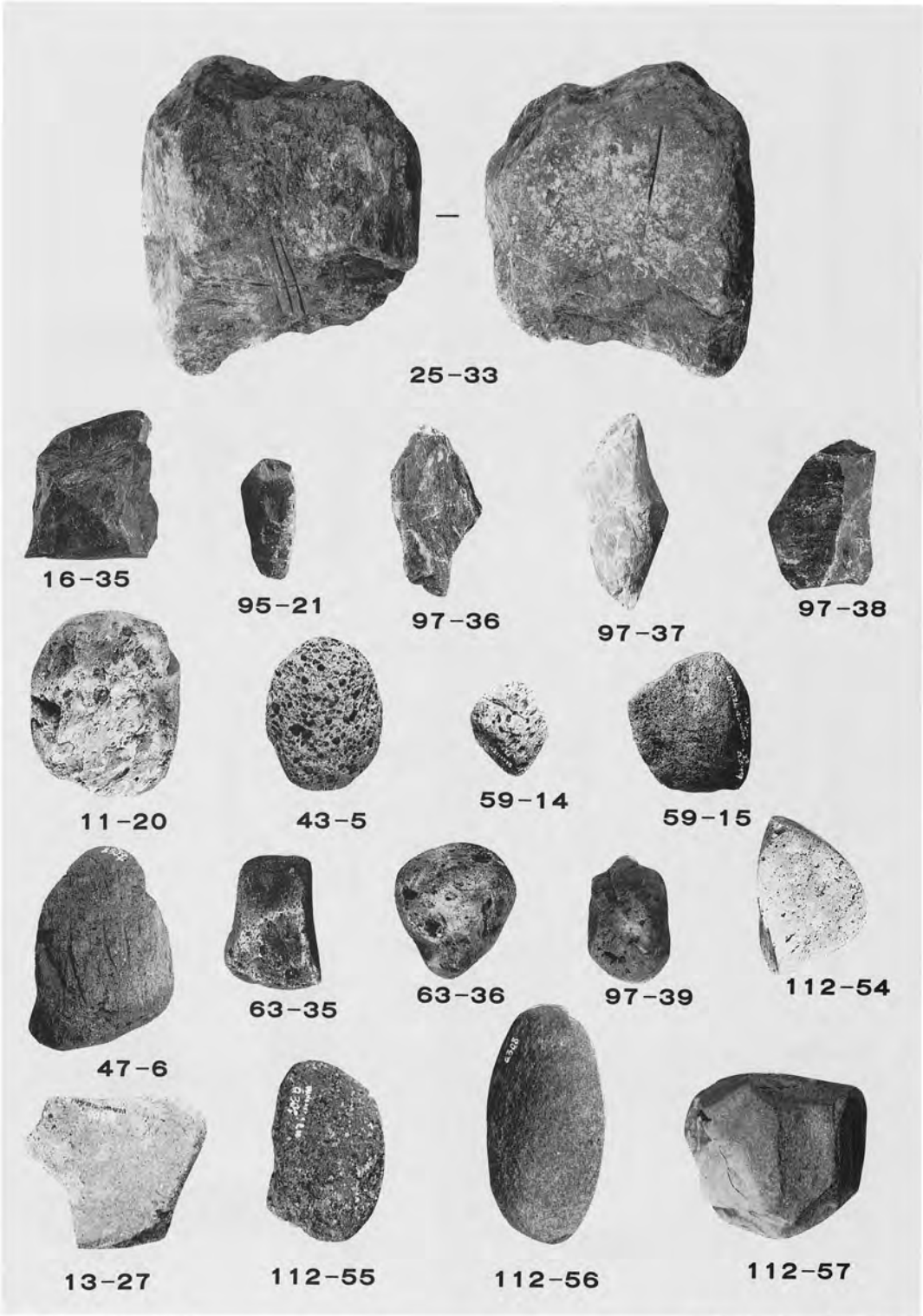
有孔円板



石製品・コア


8-18
11-19
16-33
16-34
25-32
66-9
71-8
111-51
97-40
111-53
98-41
111-52
47-5
57-57
66-8
104-1
93-61
80-93
104-6

砥石・石製品



砥石・コア・石器 S＝1/3 25－33・47－6

鉄製品

調査前全景

第1号住居跡

第2号住居跡遺物出土状況

第2号住居跡遺物出土状況

第2号住居跡

第３号住居跡

第４号住居跡

第５号住居跡遺物出土状況

第５号住居跡

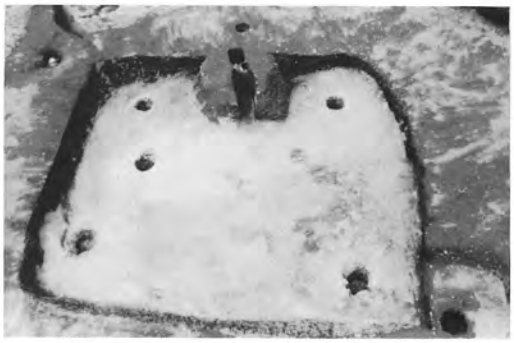
第６号住居跡

第７号住居跡

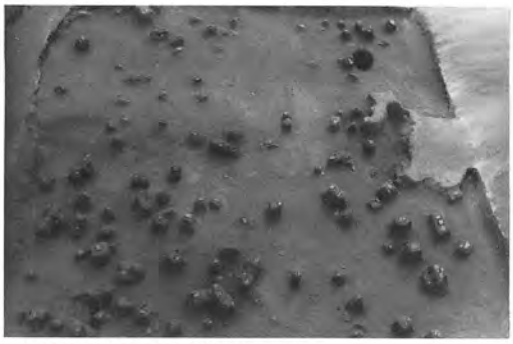
第８号住居跡

第９号住居跡遺物出土状況

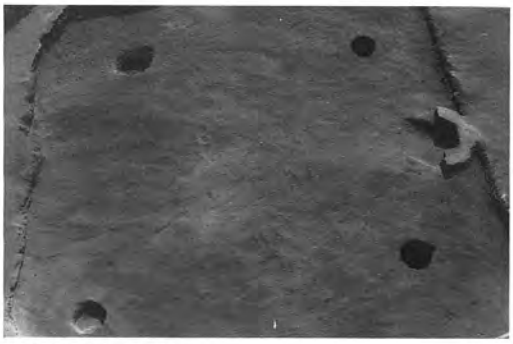
第 9 号住居跡遺物出土状況



第 9 号住居跡

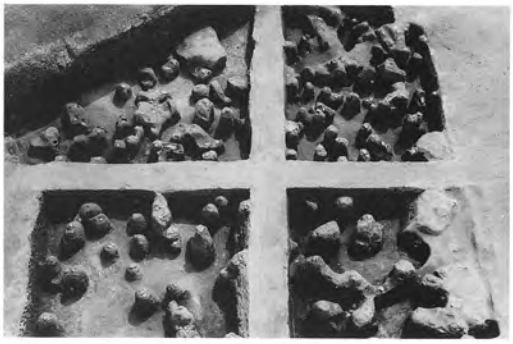


第10号 住居跡遺物出土状況



第10号住居跡

第11号住居跡



第12号住居跡遺物出土状況

第12号住居跡

第13号住居跡

第17号住居跡遺物出土状況

第17号住居跡

第19号住居跡

第19号住居跡カマド

第20号住居跡遺物出土状況

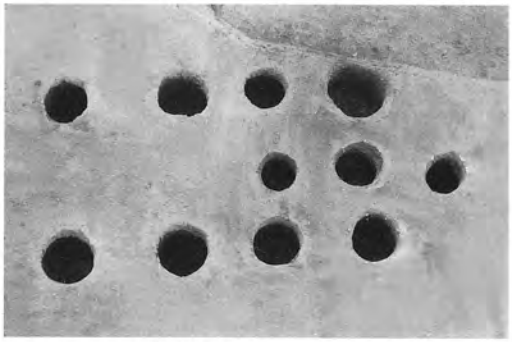
第20号住居跡

第23号住居跡

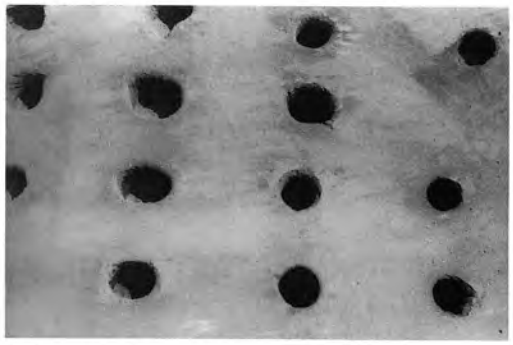
第24号住居跡

第25号住居跡

第26号住居跡

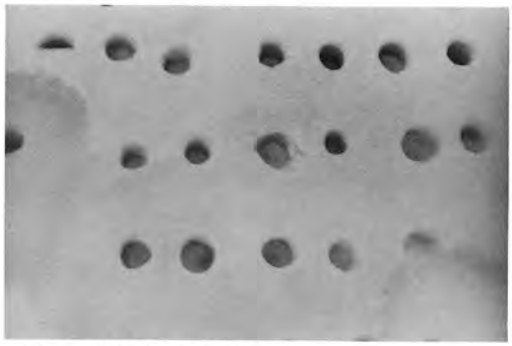


第 1 号掘立柱状建築跡

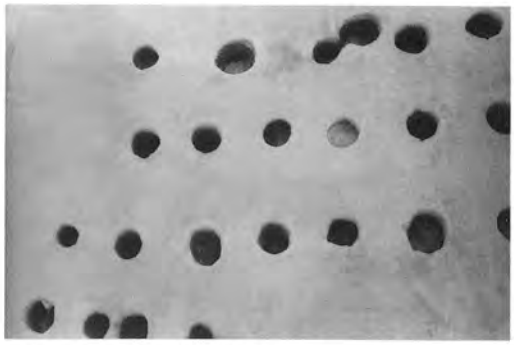


第 2 号掘立柱状建築跡

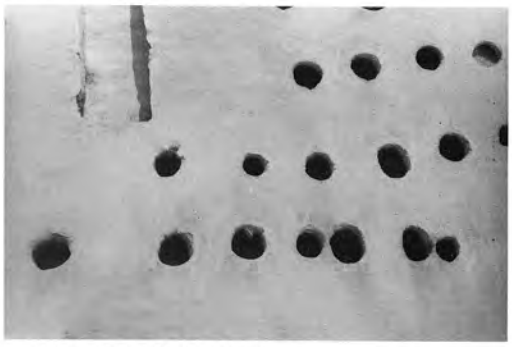
第 3 号掘立柱状建築跡遺物出土状況



第 3 号掘立柱状建築跡



第 4 号掘立柱状建築跡



第 4 号掘立柱状建築跡

第２号土坑

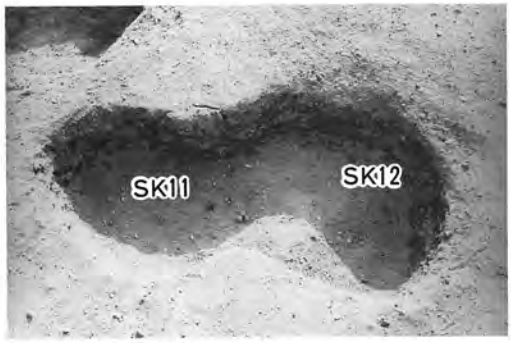
第３号土坑

第５号土坑

第７号土坑

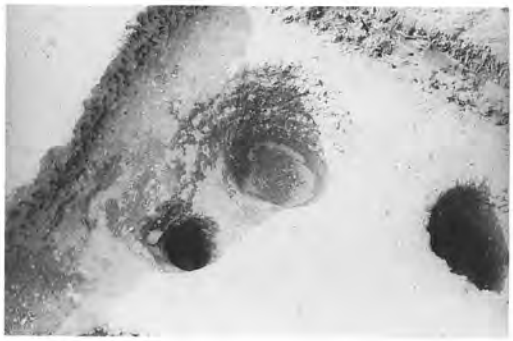
第９号土坑

第10号土坑



第11・12号土坑

第13号土坑



第14号土坑

第15号土坑

第16号土坑遺物出土状況

第16号土坑

調査後全景

122-1

124-2

124-3

124-4

124-5

124-6

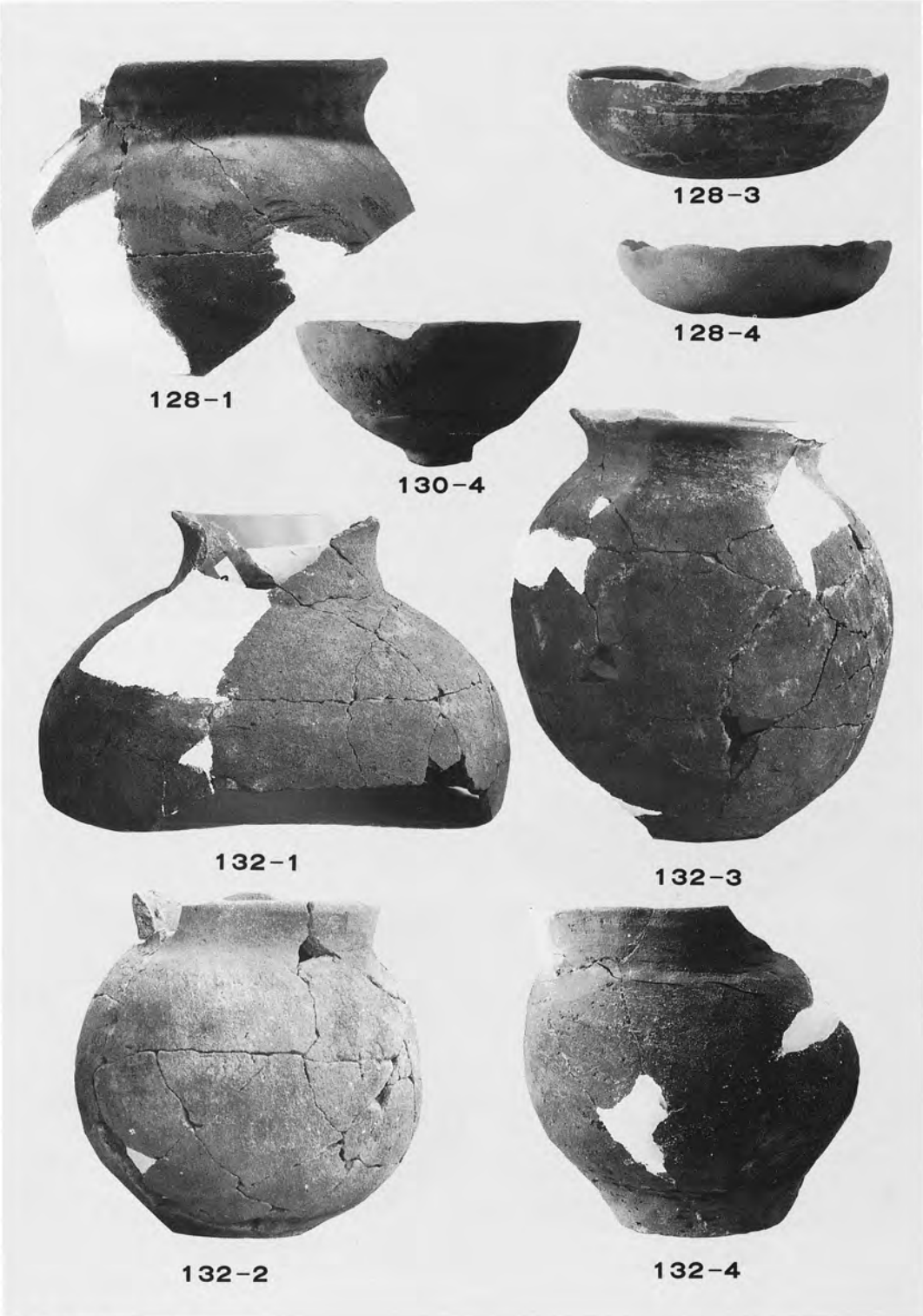
124-1

124-7

125-8

125-9

住居跡出土土器



住居跡出土土器

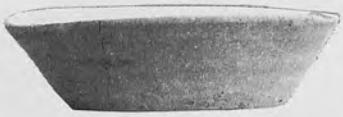
133-6

133-7

133-8

133-9

136-1



136-2

136-3

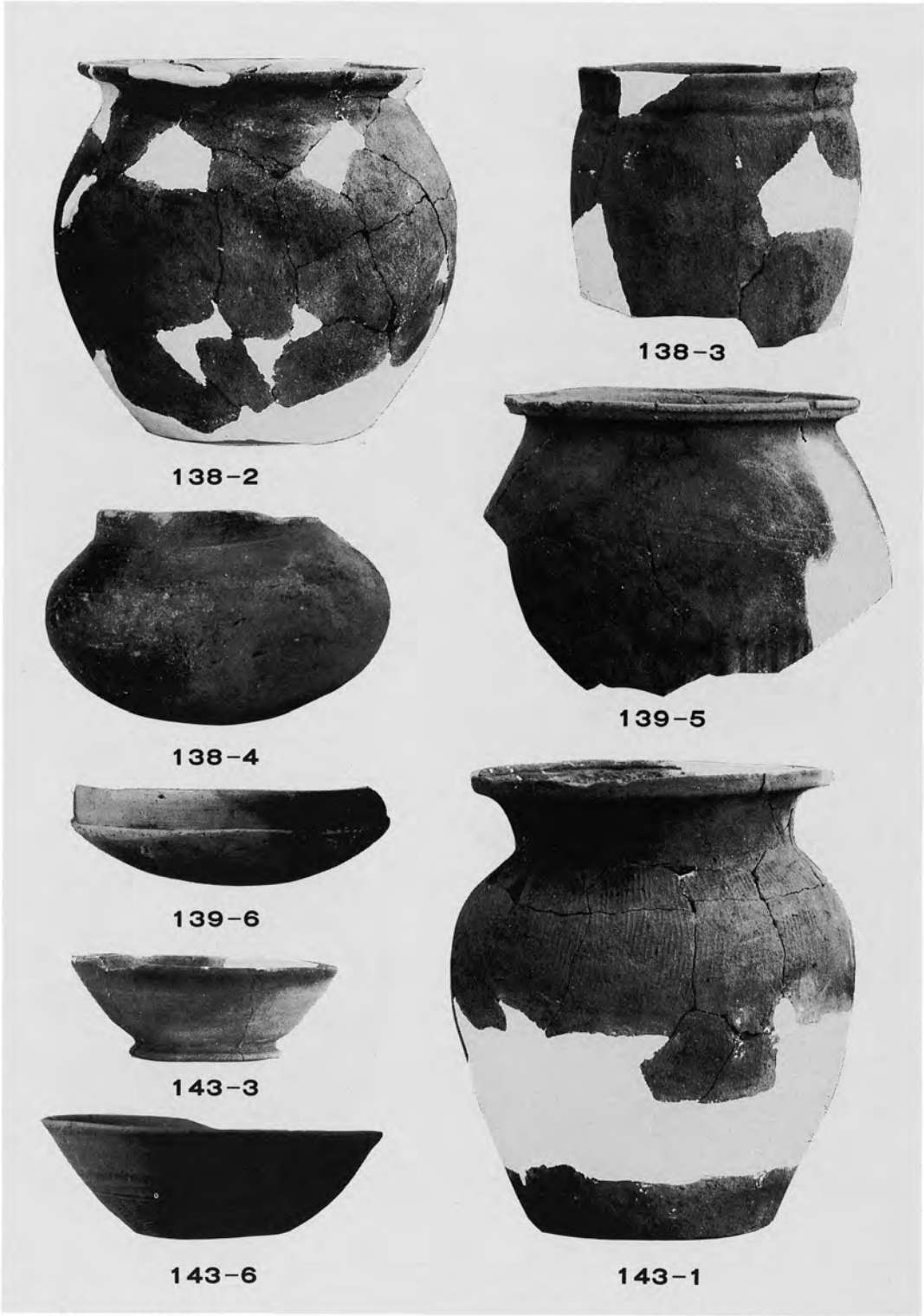
133-11

133-12

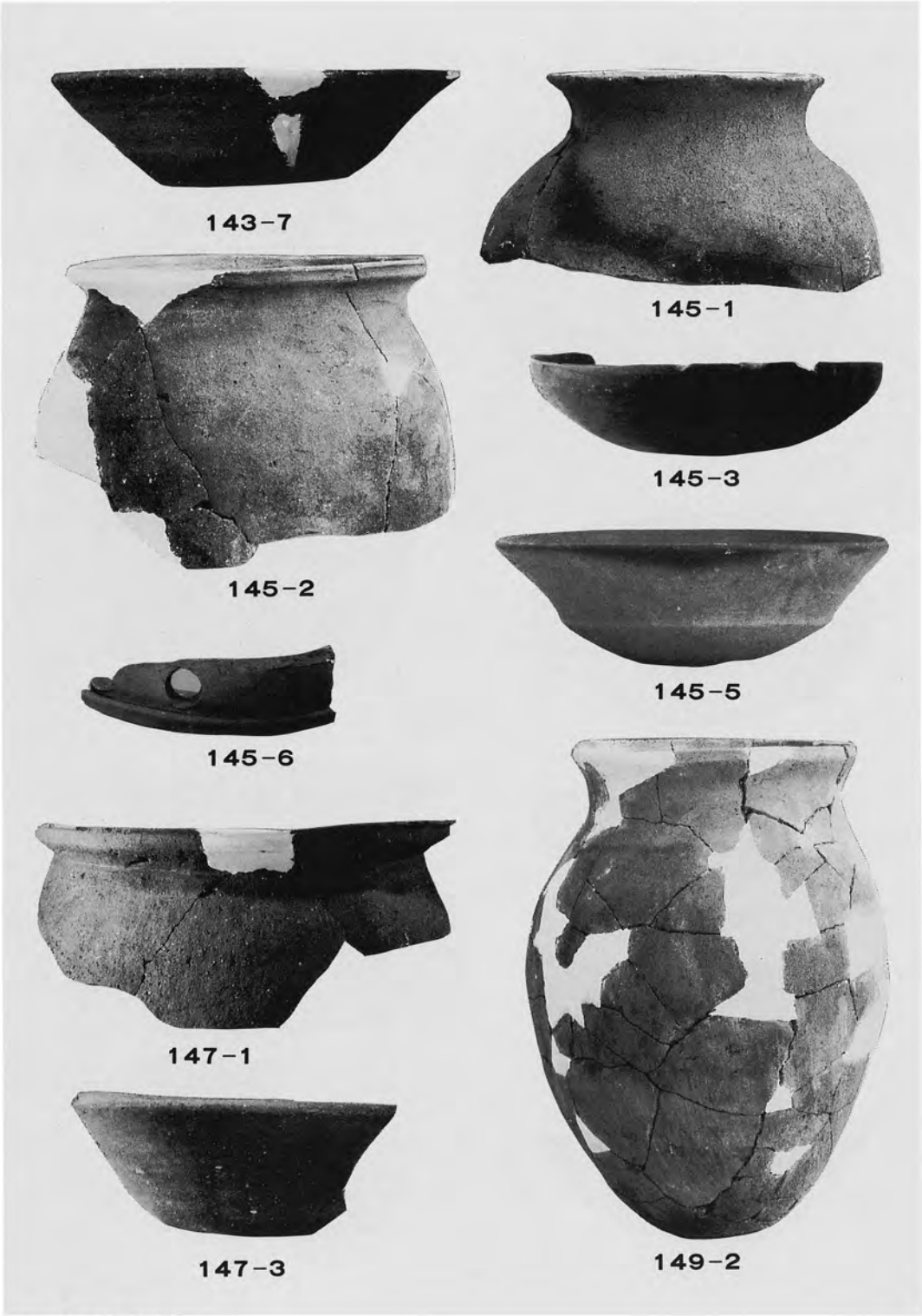
134-2

138-1

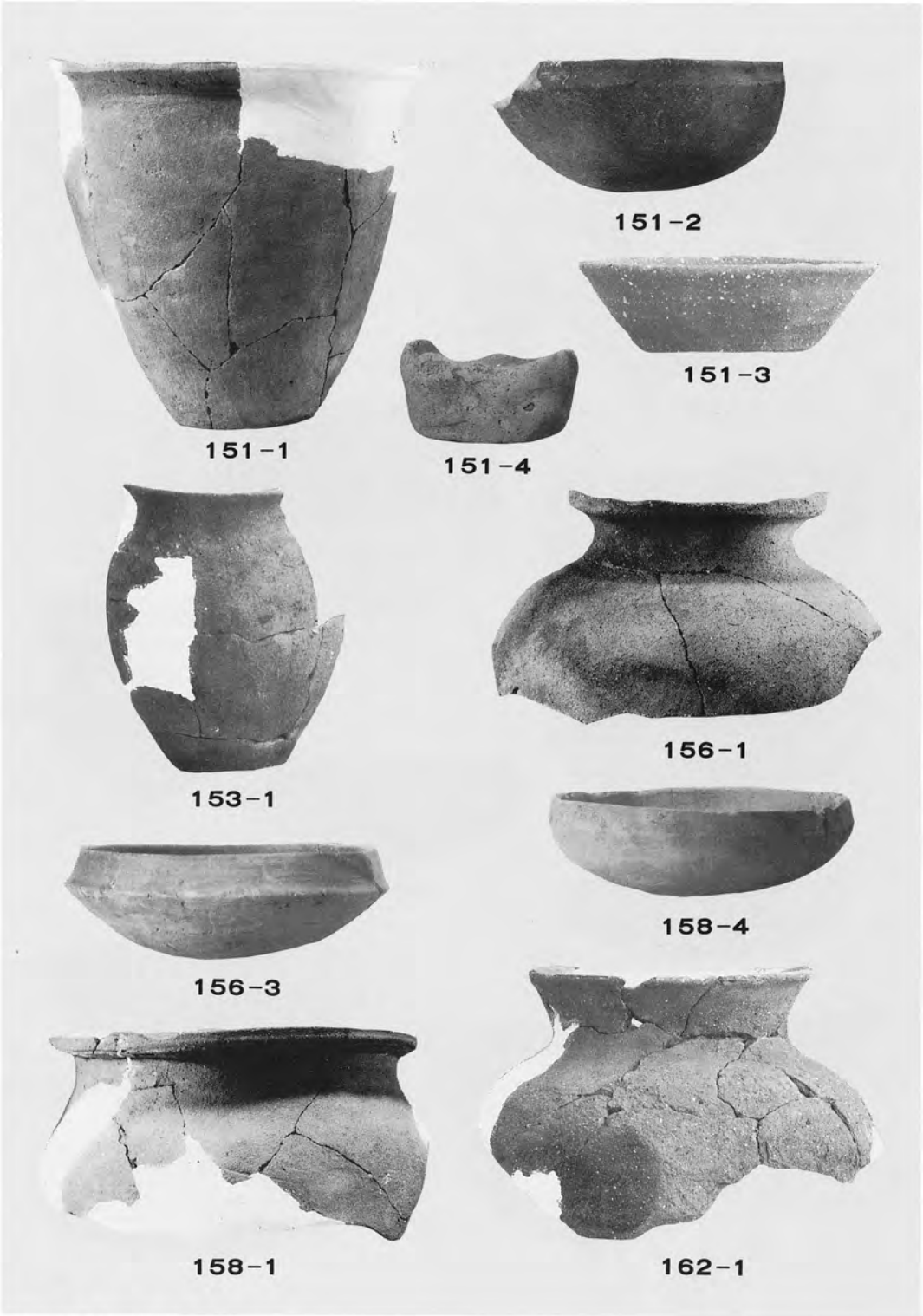
住居跡出土土器



住居跡出土土器

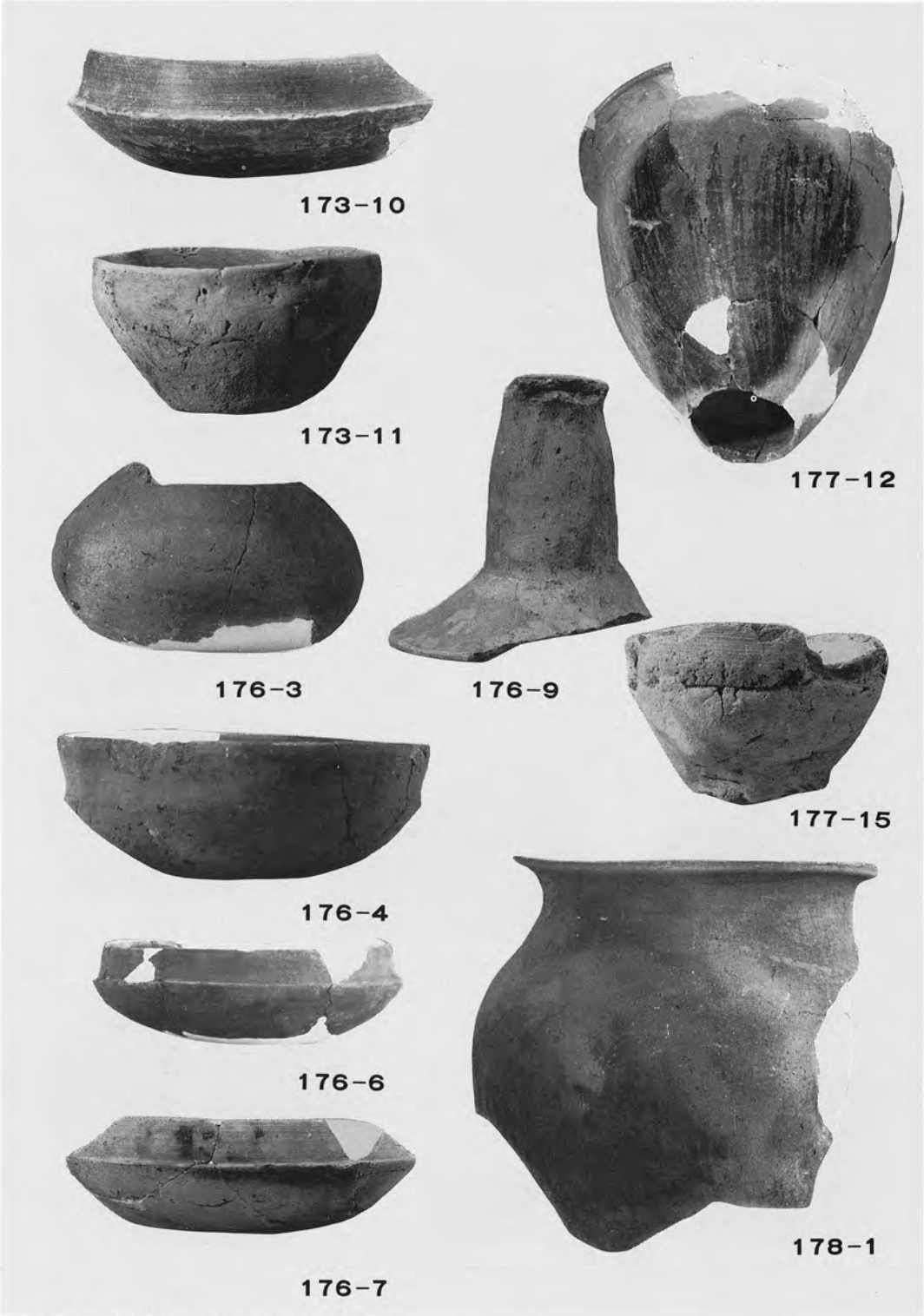


住居跡出土土器

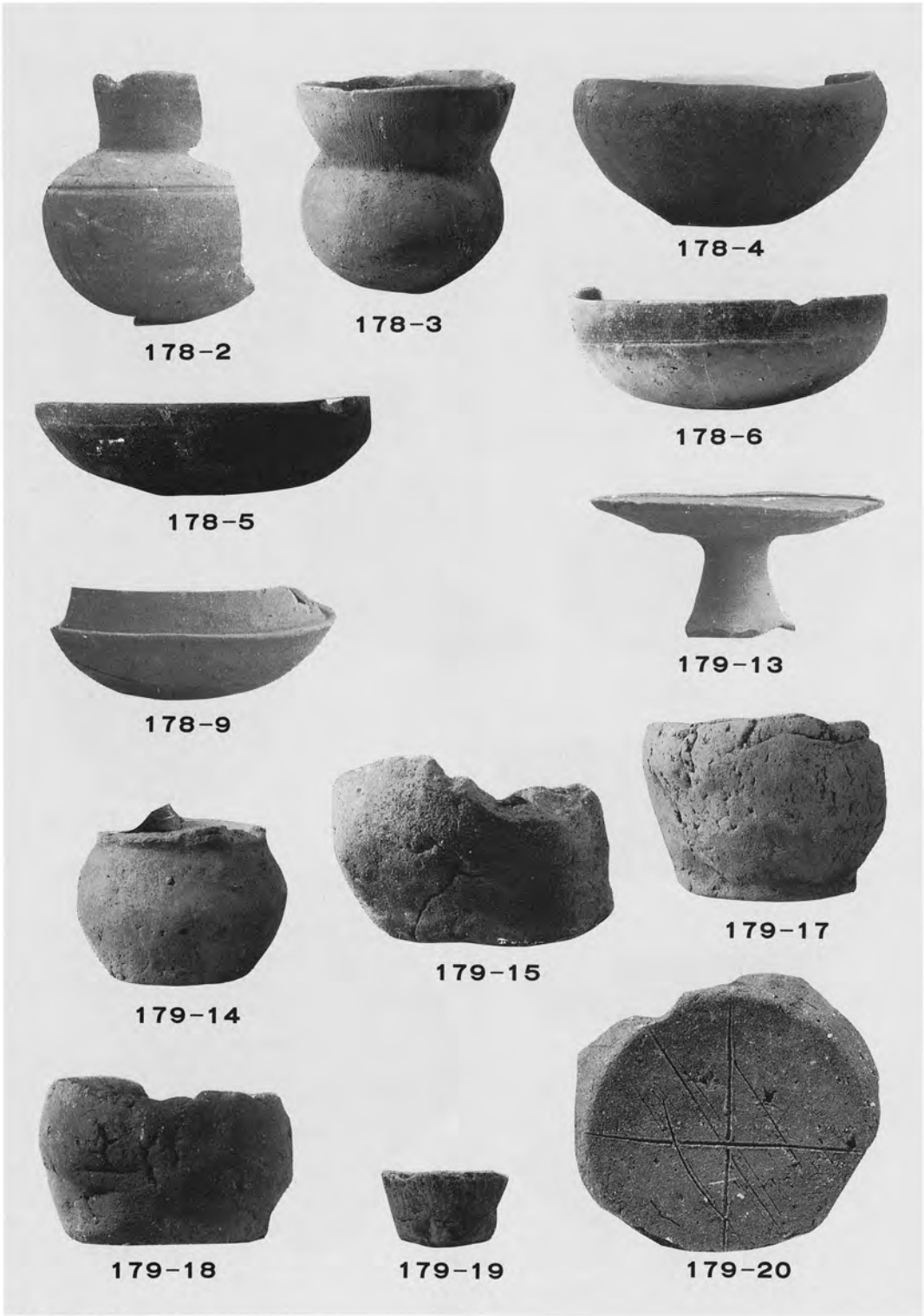


住居跡出土土器

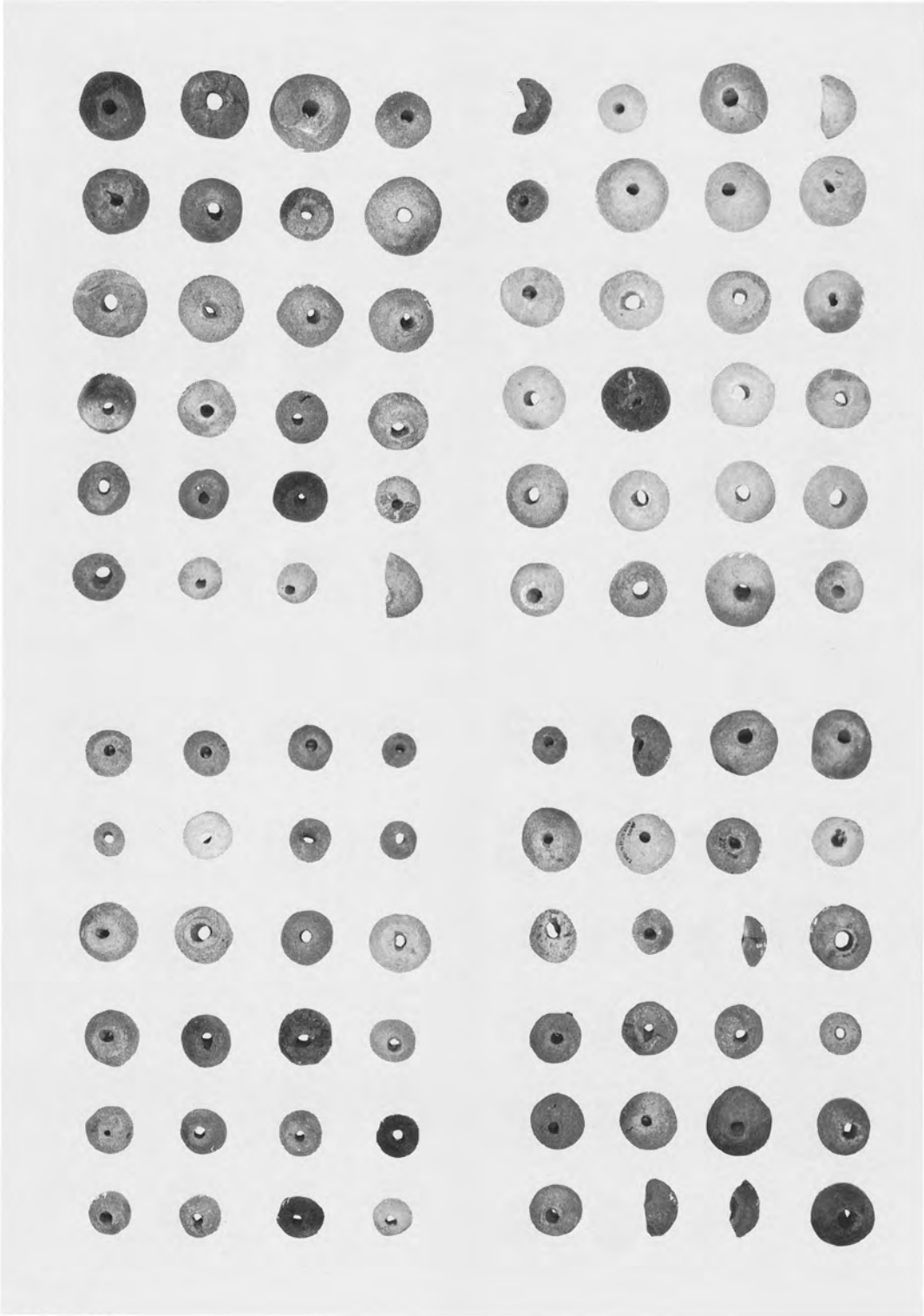
住居跡，掘立柱状建築跡出土土器



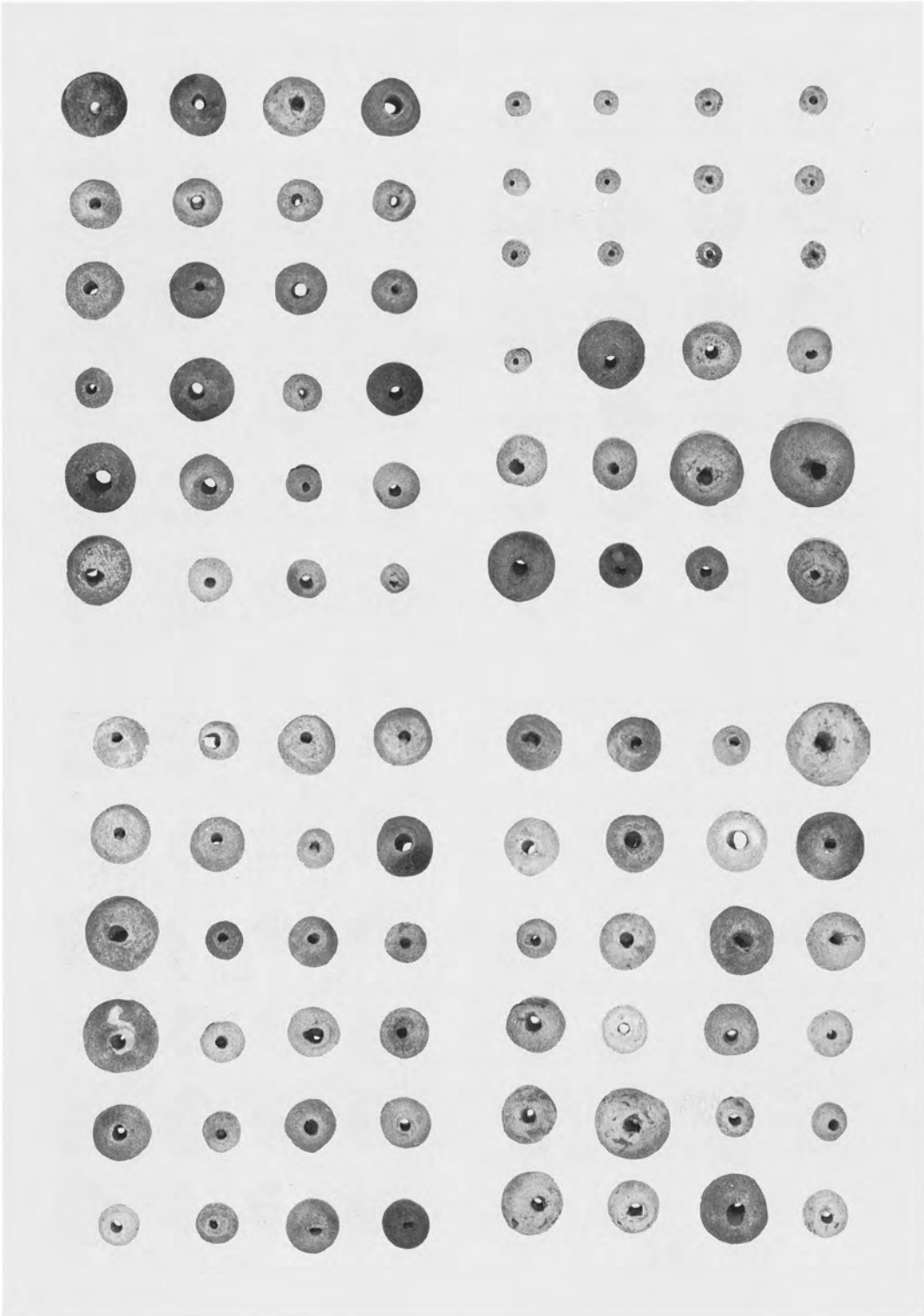
掘立柱状建築跡，土坑，遺構外出土土器


178-2
178-3
178-4
178-6
178-5
179-13
178-9
179-17
179-15
179-14
179-18
179-19
179-20

遺構外出土土器



球状土錘

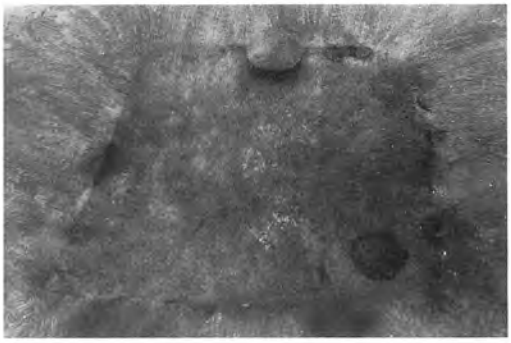


球状土錘

調査前全景

試掘

第１号住居跡



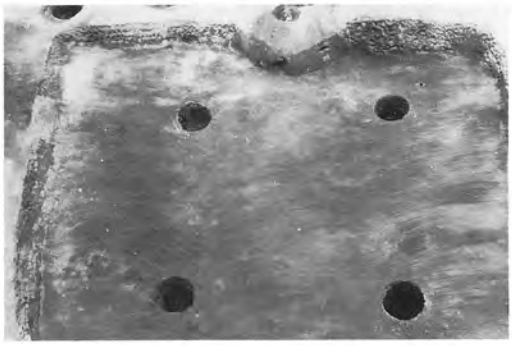
第２号住居跡

第３・５号住居跡遺物出土状況

第３・５号住居跡

第４号住居跡遺物出土状況

第４号住居跡遺物出土状況



第４号住居跡

第６号住居跡

第7号住居跡

第1号掘立柱状建築跡

第1号掘立柱状建築跡

第1号方形周溝状遺構

第1号方形周溝状遺構遺物出土状況

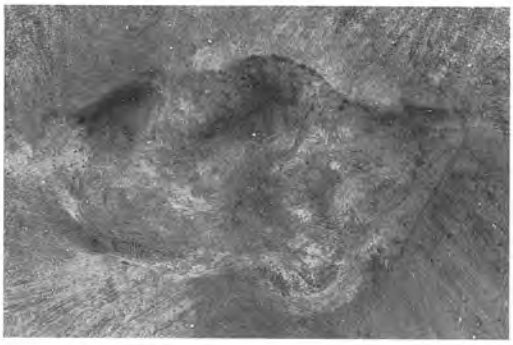
第1号方形周溝状遺構遺物出土状況

第2号方形周溝状遺構

第3号方形周溝状遺構

作業風景

作業風景



第4号土坑

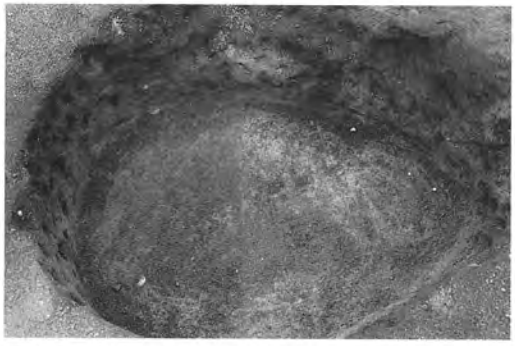
第5号土坑

第6号土坑

第8号土坑

第9号土坑

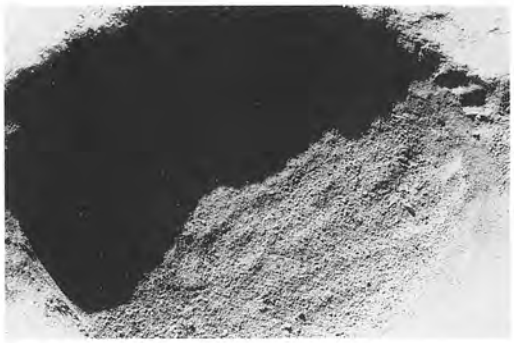
第10号土坑



第12号土坑

第17号土坑

第18号土坑

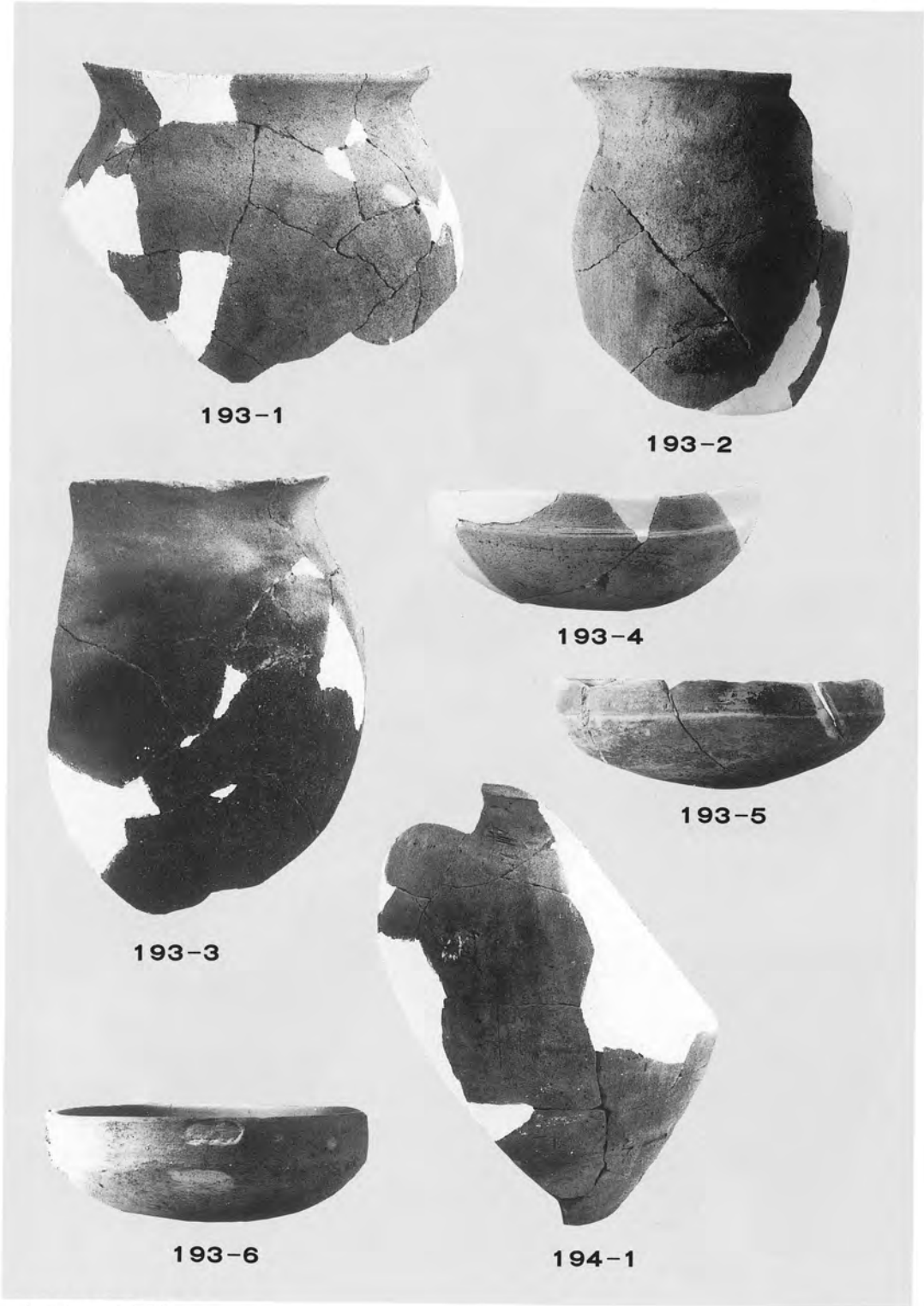


第19号土坑

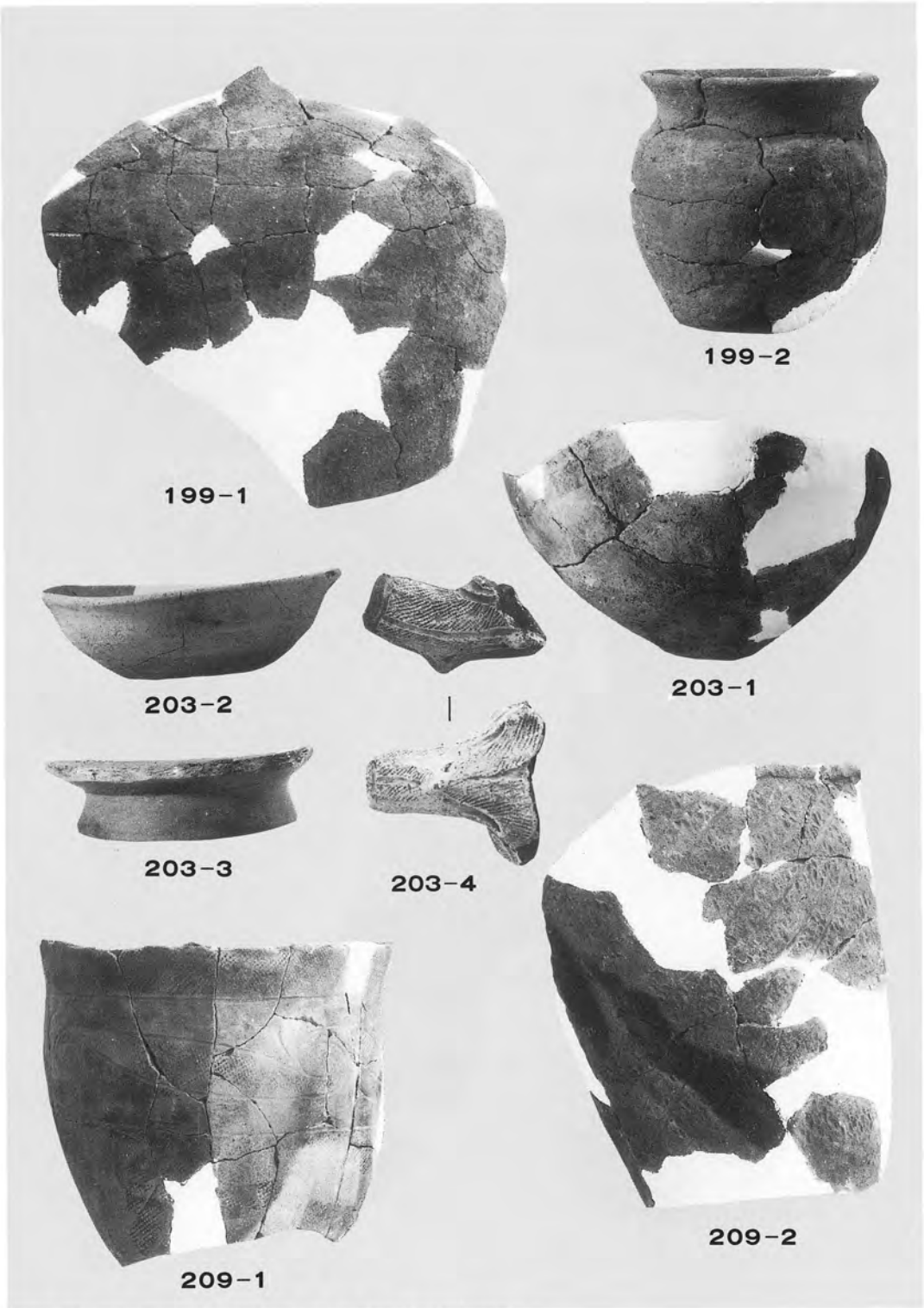
第22号土坑

作業風景

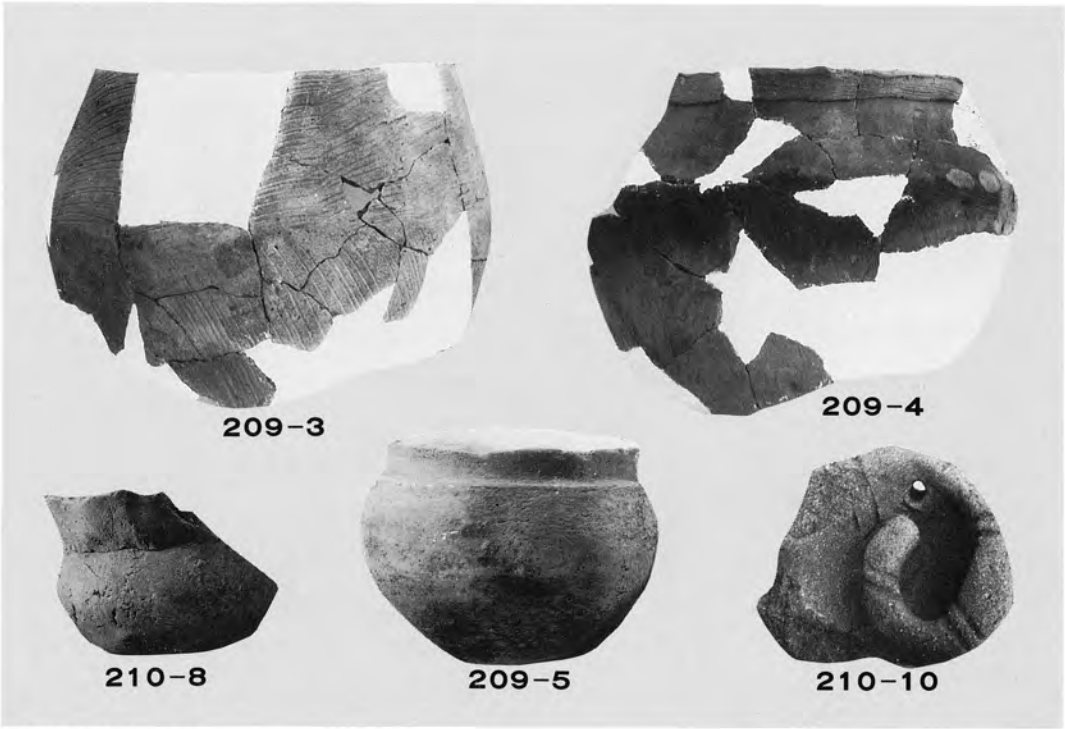
調査後全景



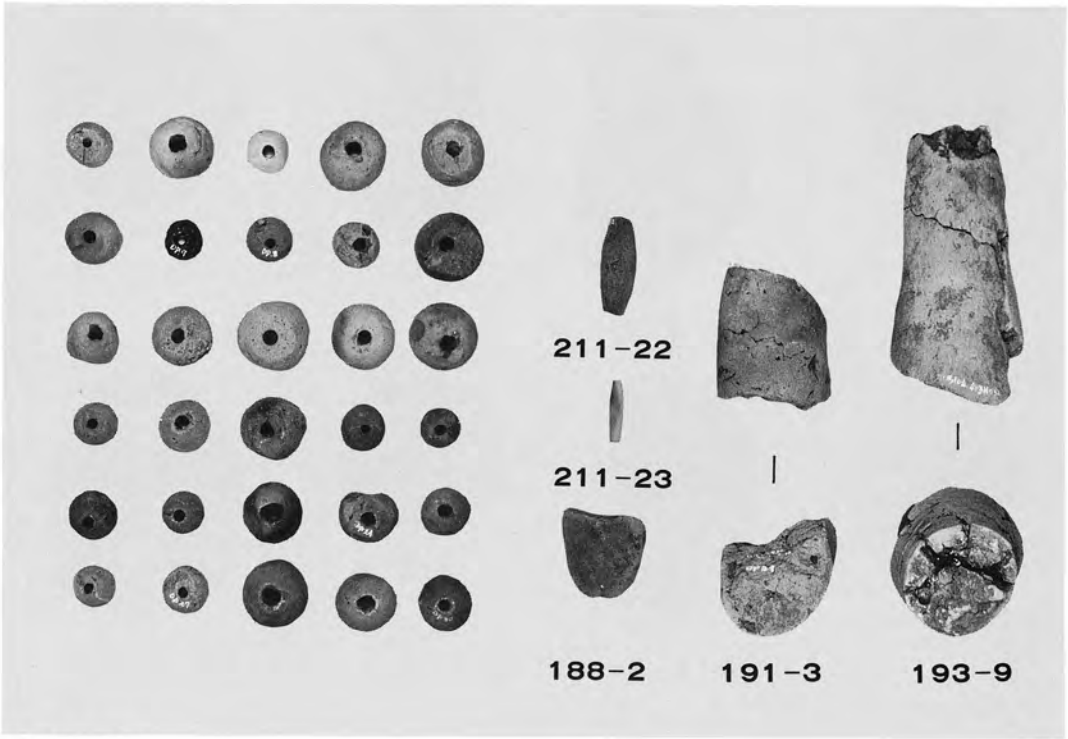
住居跡出土土器



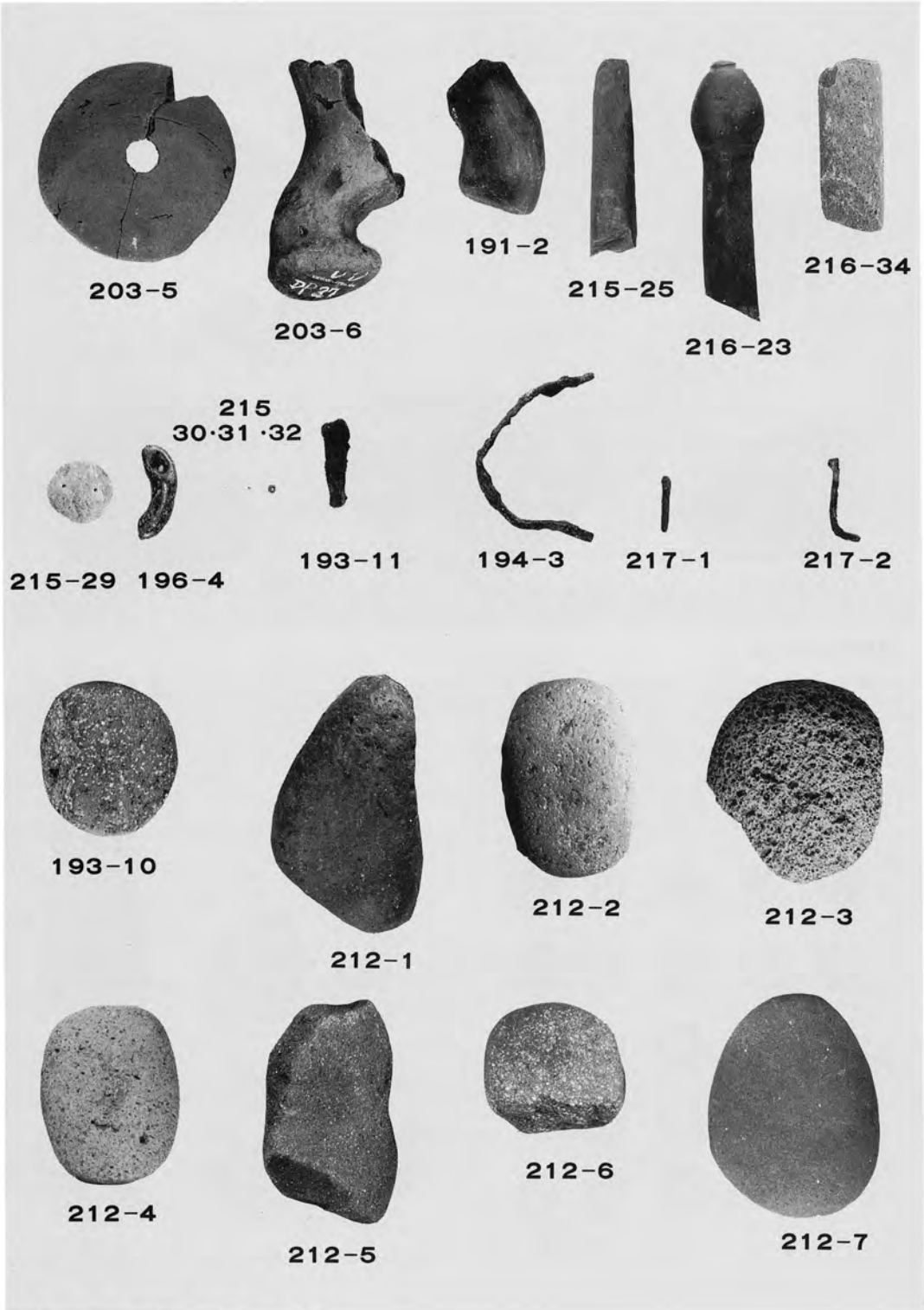
掘立柱状建築跡，方形周溝状遺構，遺構外出土土器



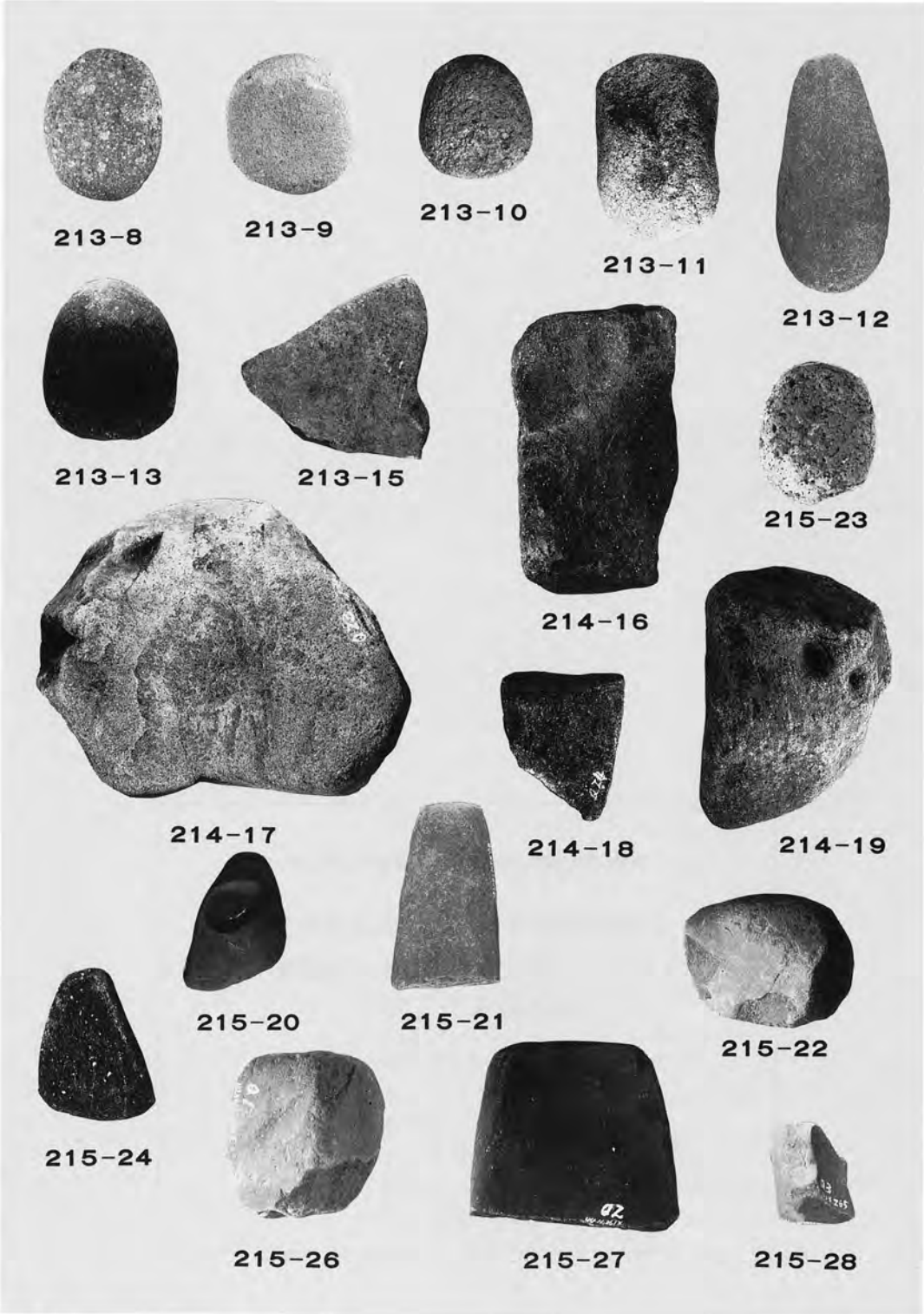
遺構外出土土器



土錘・支脚



土製品・石製品・鉄製品・石器


213-8
213-9
213-10
213-11
213-12
213-13
213-15
214-16
215-23
214-17
214-18
214-19
215-20
215-21
215-22
215-24
215-26
215-27
215-28

石器

茨城県教育財団文化財調査報告第46集

一般県道新川・江戸崎線道路改良
工事地内埋蔵文化財調査報告書
尾島貝塚外2遺跡

昭和63年3月25日印刷
昭和63年3月31日発行
発　行　財団法人　茨城県教育財団
水戸市南町3丁目4番57号
印　刷　㈲三　栄　印　刷
水戸市谷津1－50